



宗典部
第廿二卷

BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.46

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

德集

圖

籍

大

簿

昭和
新纂

國
譯大藏經



BL
1411
T8J3
1929
v. 46

新昭和 國譯大藏經 宗典部 第二十二卷

目次

信心銘義解	一
六祖法寶壇經	三五
傳心法要	一一
宏智頌古	一五一
人天眼目	二四七
臨濟宗	二四八
雲門宗	二九六
曹洞宗	三〇四
馮仰宗	三三三
法眼宗	三四三
博山警語	三六九
天台菩薩戒疏	四四五

中國通志卷之二十一

信心銘義解

宗典部
第二十二卷

計心齋錄

計心齋錄

【銘】警戒の辭を銘といふ。

信心銘義解序

【玄關】古則公案。

【三祖大師】名は僧璨、支那禪宗の第三祖、生處を詳にせず。舒州皖山に隱る。二祖慧可の法を傳ふ。隋の楊帝大業二年十二月十五日(日本の推古天皇十四年)寂す。唐の玄宗、鑑智禪師と諡す。【寛文九年】靈元天皇の御宇。

中峯大師一生の提唱、總じて廣録と號す、中に三祖信心銘義解壹冊あり、嗚呼銘豈解し易からんや。世尊四十餘年の所説、列祖一千七百の公案、皆此心に歸す、智解の禪、豈以て玄要の旨を盡すに足らんや。且數百年の下に生れて、數百年の上を發明せんと欲す、亦已に難し。然るに如來五千餘卷の名教も、亦この心に本づき、祖師一千七百の玄關も、亦此心を離れず。既に其心を明むるときは、則ち教と禪と、固に得て解すべし。是故に拈華微笑、迦葉所傳の妙心、立雪斷臂、慧可所得の玄要、誠に事殊なりと雖も、理は即ち一にして、皆此心を明むる所以なり。是を以て中峯禪師、三祖大師と數百年を代と雖も、明心見性、本不二なり、然れば則ち何の解し難きことか之有らん。惟ふに、師の作る所乃義解は、意旨他無し、但學者をして、此心の妙を窮めしめんと要するのみ。茲に寛文九年歲己酉に次る孟秋の日、廣録中より撮つて以て梓に命じて生る。願くは賢人君子、此義解に従つて、彼銘の蘊奥を發き易からん手。

【中峯】支那杭州錢塘人、姓は孫氏、高峯原の嗣、佛

【中峯】支那杭州錢塘人、姓は孫氏、高峯原の嗣、佛

【中峯】支那杭州錢塘人、姓は孫氏、高峯原の嗣、佛

【中峯】支那杭州錢塘人、姓は孫氏、高峯原の嗣、佛

【中峯】支那杭州錢塘人、姓は孫氏、高峯原の嗣、佛

【中峯】支那杭州錢塘人、姓は孫氏、高峯原の嗣、佛

【中峯】支那杭州錢塘人、姓は孫氏、高峯原の嗣、佛

中峰和尚信心銘義解

參學門人 北庭 慈寂 寂進

聞く、夫れ少林不立文字直指の道、方に二傳して璨大師に至ると。師、信心銘五百八十四字を作る。遽に乃祖の風を襲ひて、文字の流布と爲すに非ざることを得んや。或謂はく、然らず、是れ其直指の道を顯示して、後の學者をして正信を具し疑惑を破せしめんと欲す。正信と謂ふは何ぞや、其廣大の心體、諸佛と平等にして間無きことを信す、必ず其自ら信じて、而して入つて修證を假らざらんことを欲す。一たび信位に入れば、決定して退轉せざるなり。故に此銘と不立文字の説と千古の下に並べ馳せて、而して相替れざる者なり。益大師の言を立つることの至り、法を荷ふことの誠あることを信す。嗟今の學者、義解に膠して、執心を廓悟し、源底を洞見して、以て正信を資くること能はず、返つて是銘を以て、引證談柄の張本と爲す、其金屑眼に入るの喻、吾大師に及すこと無き能はず。余、影を舟に繋ぐに因んで、凡そ兩句の下に、之を申ぶるに、語偈を以てす、敢て見聞を炫耀し、仰いで勝軌を攀ぶとはあらず、誠に義解を闡き、正悟を顯し、同志に曉し、自己を闡さんと欲するなり。其れ傍に肯はざる者あらば、余が罪過、當に何を以てか諸を釋くべけん。故に信心銘闡義解を以て、其名を標す。

【金屑眼に入る】

古人の語なり。菩提涅槃、眞如法性等は貴ぶべきも、若し之に執著せば、法執の舟となる。【余影を舟に繋ぐ】元の武宗至大二年己酉より辛亥に至るまで船居なり。この時の著述なり。【語偶】今は偈を省き、調を除き、義解のみを列す。【勝軌】後學のてほん。【至道】一心の異名の對句が、七十三對句、字數は五百八十四字。【法華の諸子云々】法華に上中下根、各四段一は正説、二は領解、三は述成、四は授記、信解品は中根領解。【趙州の栢樹子】楊岐の金剛圈等。

至道無難、唯嫌揀擇

祖師の道はく、「至道無難、唯嫌揀擇」と。義解者の謂はく、「此兩句は即ち一篇の要綱、一銘の本旨なり。然も信の一言、全く悟證を該ぬ。信行の信にはあらず、法華の諸子の權を會して實に入るの際に於て、信解品を作つて以て其懷を述せしが如し。吾祖は之を以て至道と曰ひ、唯佛は之を證して菩提と曰ひ、衆生は之を味して無明と曰ひ、教中には之を彰して本覺と爲す、皆一心の異名なり。徧く名相を該ね、色空に涉入するが若くなるに至るまで、轡を異にし途を殊にして、千條萬目なり、豈優劣に乖かんや。悟迷を隔てず、斯に由つて著れずといふこと莫し。趙州の栢樹子、楊岐の金剛圈、密庵の破沙盆、東山の鐵酸餈の如し。異端並び起つて、邪法扶け難し。則ち知んぬ至道の話行することを。事理を該通し、古今を融貫せり。箇の無難と説くも、早く剩語と成る。然も聖凡深淨、目を極むれば全く眞なるも、揀擇情生すれば、適に至體に乖く、是を唯揀擇を嫌ふと謂ふなり。下の文、殊なりと雖も、悉く其意を稟けたり。」

但憎愛莫ければ、洞然として明白なり

祖師の道はく、「但憎愛莫ければ、洞然として明白なり。」と。義解者の謂はく、「生死を厭ひ涅槃を慕ふ、是れ憎愛、煩惱を捨てて菩提に趣く、是れ憎愛。爾但一切の聖凡の法中に於て、毫髪も欣厭の情を存することを得ざるときは、則ち此心自然に明白ならん。」

毫釐も差有れば、天地懸に隔たる

【順逆】順境界逆境界。以上の八句は順の韻。

【違順】順逆と同じ。

【念靜云云】以上の四句は通の韻。念靜は耳目を閉じて靜處に坐す。

祖師の道はく、「毫釐も差有れば、天地懸に隔る」と。義解者の謂はく、「我此處人の法門、悟迷間無しと曰ふと雖も、爾若し愛憎掉擲の情、毫釐も蓋さざるときは、則ち霄壤相去ること、其遠きに勝へず。」

現前することを得んと欲せば、順逆を存すること莫れ

祖師の道はく、「現前することを得んと欲せば、順逆を存すること莫れ。」と。一等の義解者の謂はく、「祖師此に到つて、話、兩極と作る。何となれば則ち此事本末現前す、誰をしてか得ることを欲せしめん。教中に謂はく、「正性通ぜずといふこと無し、順逆皆方便」と。此に於て若し存すること莫からしめば、却つて斷滅と成り去らん。然らず、蓋し祖師曲げて初心の爲に方便委示す、美食飽人の餐に中らざるに似たり。」

違順相争ふ、是を心病と爲す

祖師の道はく、「違順相争ふ、是を心病と爲す。」と。義解者の謂はく、「生死無常是れ心病なり、見聞覺知是れ心病なり、參禪學道是れ心病、成佛作祖是れ心病。會須らく南ながら違順を忘じ、聖凡を雙泯して、萬慮俱に捐て、一道空寂にして、萬金の神藥を假らざるべし。謂ゆる心病といふは、自然に地の寄るべき無からん。」

玄旨を識らざれば、徒に念靜を勞す

祖師の道はく、「玄旨を識らざれば、徒に念靜を勞す。」と。義解者の謂はく、「玄旨といふは、至道の異名同體なり。若し識得せずんば、豈特に念靜のみならんや。任ひ仰が恆河沙

劫を歴て、萬種修證すとも、心外に法を求めば、只益自ら勞す。此れ吾祖の許さざるところなり。

圓なることは太虚に同じ、缺くることも無く餘ることも無し。

祖師の道はく、「圓なることは太虚に同じ、缺くることも無く餘ることも無し。」と。叢林商量して道はく、「此心、聖に在つても加増せず、凡に在つても減を加へず、太虚の圓なるが如く、各各に具足せり。」

良に取捨するに由る、所以に如ならず

祖師の道はく、「良に取捨するに由る、所以に如ならず。」と。義解者の謂はく、「此心既に太虚の圓なるが如し、相として具せずといふこと無し、一切皆如なり。爾、深淨の法中に於て、譬に取捨を生ぜば、則ち如ならず。」

有縁を逐ふこと莫れ、空忍に住すること勿れ

祖師の道はく、「有縁を逐ふこと莫れ、空忍に住すること勿れ。」と。義解者の謂はく、「二つ俱に虚幻なり、心に擬して執着すれば、取捨紛然たり。一念生ぜずんば、常に中道に居す、解脫の道人と爲すべし。」

一種平懷なれば、泯然として自ら盡く

祖師の道はく、「一種平懷なれば、泯然として自ら盡く。」と。義解者の謂はく、「取捨の情既に盡きぬれば、聖凡の知見無依なり、自然に一切處に平常なり、一切處に泯然と

【如ならず】以上の四句は魚の韻。如とは不變の處、境に轉ぜられぬを如と云ふ。

【空忍に云云】佛も法もなしと云うて、無法なることを爲すは不可なり

【泯然云云】此四句は軫の韻。平懷とは一切處、平常にして萬事泯絶す

して滅す。」

動を止めて止に歸すれば、止更に彌動す

祖師の道はく、「動を止めて止に歸すれば、止更に彌動す。」と。一種義學の沙門の謂は

く、「真心湛然として常住不動なり、無始より流轉すること皆妄見に由る。且く動既に妄動

止も亦妄止、妄を以て妄を止めば、猶し薪を抱いて焚を救ふがごとし、祇其熾ゆるを益す。

聖法師の「夫不動の作を尋ぬるに、豈動を釋てて以て靜を求めんや、必ず靜を請動に求め、

必ず靜を請動に求むるが故に、動すと雖も常に靜なり、動を釋てずして以て靜を求むるが

故に、靜なりと雖も而も動を離れず」と、謂ふことを引く。審かに是の如きんば、則ち動

に動相無く、靜に靜相無し。教中に謂ふが如し、「動靜の二相了然として生ぜざるものは、

蓋し動靜皆是れ妄縁なることを了知すれば、群妄既に消して、二相亦遺る」と。

惟兩邊に滯らば、寧ろ一種を知らんや

祖師の道はく、「惟兩邊に滯らば、寧ろ一種を知らんや。」と。義解者の謂はく、「兩邊は

是れ動靜の二相なり、一種は是れ觀體差ふこと無し、乃ち上の二句を釋するの辭なり。當

に知るべし、動靜の二邊、妄なるときは則ち俱に妄なり、眞なるときは則ち全く眞なり、

安んぞ二致有らんや。」

一種に通ぜざれば、兩處功を失す。

祖師の道はく、「一種に通ぜざれば、兩處功を失す。」と。一等杜撰の禪和道はく、「遮兩句

【夫不動の作云云】
肇の物不遷論に出づ。

【惟滯兩邊に云云】
以上の四句は董宋の韻。

【杜撰の禪】
杜撰の禪とは師承なく法式なきなり。

【有】 妄想の有。

は是れ結前引後の辭なり。結前と謂ふは則ち一種の眞理を顯示す。引後と謂ふは則ち深く空有の妄縁を責むるなり。』

有を遣れば有に没す、空に從へば空に背く

祖師の道はく、『有を遣れば有に没し、空に從へば空に背く。』と。有等の言に循ひ句を逐ふ者謂はく、『有は乃ち妄有、之を遣るに由るが故に没す。空本自ら空なり、之に從はんと欲するが故に背く。有は是れ空家の有なり、空は是れ有家の空なり、空は有を得て、故に彰れ、有は空を得て乃ち顯る。其彰るるを以ての故に、空、全く是れ有なり。其顯るるを以ての故に。有全く是れ空なり、互融互攝して差はず、相在相入して損すること無し。是に由つて知んぬ、之を遣り之に從ふ、妄に徇ふ者に非ざることを得んや。』

多言多慮、轉相應せず

義解者の謂はく、『言多ければ道を去ること轉遠し。』又云はく、『神心洞照して、聖默を宗と爲す。』と。又達磨の『外諸縁を絶して、内心喘ぐこと無し』と道ふことを引く。『外諸縁を絶するときは、則ち其言を忘ずるなり、内心喘ぐこと無きときは、則ち其慮を絶するなり。』

絶言絶慮、處として通ぜずといふこと無し

道吾笏を舞し、石鞏弓を張り、西河の師子、長沙の大蟲、且當時極めて餘態有り。今朝に到るまで尙遺風を播す。祖師門下に逗到しては、直に跡を窺し蹤を潜さしむ。何を以て

【多言云云】 言句思量の間に至道には相應せぬ。
【外諸縁を云云】 この語も正宗贊に出づ。
【絶言云云】 無言無説の處のみならずなり。
【道吾】 眞。
【石鞏】 洪、馬祖に射ぐ。
【西河】 汾陽昭、首山に嗣ぐ。
【長沙】 峯。

か此の如くなる、豈道ふことを見ずや、簸箕米を量る升渾べて別なり、熨斗に茶を煎す銚同じからずと。所以に云ふ、絶言絶慮、處として通ぜずといふこと無しと。或者、文に依つて義を解して道はく、『絶言は則ち言語道斷なり、絶慮は則ち心行處滅なり。言語道斷は則ち寂にして照なり、心行處滅するときは、則ち照にして寂なり。此に到つて如来禪祖師禪、以て一串に穿過しつべし。又古人伊を教へ、休し去り歇し去り、口邊に醸生じ、舌上に草出づる等の語有り。是理に非ざることを得んや。』

根に歸すれば旨を得、照に隨へば宗を失す

與麼與麼、西を指して東と作す、不與麼不與麼、有を認めて空と爲す。與麼の中の不與麼、繩の風に宛するに似たり。不與麼の中却つて與麼、濕紙將ち來つて大蟲を裏む。何を以てか此の如くなる、豈道ふことを見ずや、根に歸すれば旨を得、照に隨へば宗を失すと。一等の人巧に卜度を生じて道はく、『絶言絶慮は、是れ根に歸するなり、處として通ぜずといふこと無しといふは、是れ旨を得るなり。倘若し根に歸し旨を得る會を作さば、又却つて照に隨つて宗を失す。然して根本歸すること無く、旨亦得るに非ず。此意を了ぜざれば、妄に自ら認執す、是れ照に隨ふと謂ふ。苟し之を照すの跡を存せば、即ち佛祖の心宗、其れ失ふに勝へず。』

須臾も返照すれば、前空に勝却す

祖師の曰はく、『須臾も返照すれば、前空に勝却す。』と。一等強ひて道理を説く者の謂

『根に歸すれば云云』至道の旨を得るをいふ。照は光影邊、宗は要なり。

【前空云云】以上十七句は東の頌。前空は目前の頑空。今は二乗等の空を斥するに非ず。

【明暗】 情と無情

はく、明暗色空消して自己に歸る者を以て、是を返照と名く。當に知るべし、空自ら空ならず、心に因るが故に空なり、有自ら有にあらざる、心に因るが故に有なり。心を離れて空無し、心を離れて有無し。衆生自心に違背して、妄に空有を見て、而して之に従ひ、之を却けんことを欲す、俱に顛倒と名く。』

【轉變】 この二字は正しく二乘等に通ず。

前空の轉變は、皆妄見に由る

祖師の道はく、『前空の轉變は、皆妄見に由る。』と。義解者の謂はく、『有是れ妄、空も亦是れ妄と。空有、縁に従つて、變易して定ること無し。妄を離るることを得んと欲せば、二つ俱に排遣すべし。』

【准須らく云云】 此四句は線の韻。【生鐵の脊梁】 これは坐禪の形相。

眞を求むることを用ひず、惟須らく見を息むべし

【法數】 諸乘法數は明時代、藏乘法數は元時代の編。【妄と言つて】 經第五に出づ。

生鐵の脊梁を堅起し、横に天に倚るの長劍を按ず。閑忙靜閑、門頭總て與に一片に打成す。既に精專に復勇健なり。將に謂へり、成佛作祖、一塵を隔てずと。三祖大師に撞著すれば、輕輕として伊に向つて道ふ、眞を求むることを用ひず、惟須らく見を息むべしと、好方便を看よ。一等義學の者の謂はく、『見に六十二種有り、法數に具に陳ぶ。斷常の二見を主と爲ることを出でずして、眞を求むれば斷見に落つ、妄を逐はば常見に墮す。楞嚴に謂はく、『妄と言つて諸眞を顯す』妄と眞と同じく二つながら妄なり、猶し眞と非眞とに非ざるがごとし、云何が見と所見とあらん。但能く一切の見を離るれば、全體即ち眞なり、求むることを用ひざるなり。』

【二見】 前の眞妄の二見。

【紛然云云】 以上の四句は伎の韻。紛然はみだりがはしく。
【撲落云云】 永明壽禪師が薪の墮つる音を聞いて省あり。

【二は云云】 眞妄の二見が生ず。

【萬法云云】 以上の四句は有の韻。いろいろに心が生ずる。

【心生ずれば云云】 起心命。これは二句とも古祖の偈。
【鐵牛云云】 龐居士偈に出づ。

二見に住せず、慎んで追尋すること勿れ

祖師の道はく、「二見に住せず、慎んで追尋すること勿れ。」と。義解者の謂はく、「既に妄に住せず、又眞に住せず、箇の不住に和して亦住せず。正與靈の時、大用を繁興して、舉必ず全眞なり、更に此を離れて別に尋ぬることを假らず。」

纔に是非有れば、紛然として心を失す

祖師の道はく、「纔に是非有れば、紛然として心を失す。」と。叢林往往に道ふ、「盡十方世界、是れ沙門の自己、十方世界、是れ古佛の法身。」と。所以に云はく、「撲落他物に非ず。縦横是れ塵にあらず。」と。也是なる者無し、也非なる者無し。一一皆是れ妙明の心中より流出す。

二は一に由つて有なり、一も亦守ること莫し

祖師の道はく、「二は一に由つて有なり、一も亦守ること莫し。」と。義解者の謂はく、「纔に二に徇へば即ち一を味ます、纔に即ち一を守れば二を生ず。當に知るべし、二は是れ眞妄、一は是れ自心なることを。眞妄の二つ既に除くときは、自心の一も住すること無し。解脫の大道と謂つべし。」

一心生ぜざれば萬法に咎無し

祖師の道はく、「一心生ぜざれば、萬法に咎無し。」義解者他の經論を引いて道はく、「心生ずれば種種の法生ず、心滅すれば種種の法滅す。諸法自ら生ぜず、諸法自ら滅せず、

【咎無ければ】心
境一如。

【冲然】冲は深。

【境は能を逐う云】以上の四句は
侵の韻。沈は滅。
【永嘉の語】永嘉
集の毘婆舍那頌の
章に出づ。

皆一心より變ずる所なり。一心生ぜざれば、諸法常住なり。所以に古人の謂はく、「鐵牛は師子吼を怕れず、恰も木人の華鳥を見るに似たり」といふの説、政に此に類せり。」

咎無ければ法無し、生ぜざれば心にあらず

祖師の道はく、「咎無ければ法無し、生ぜざれば心にあらず。」と。義解者の謂はく、「此二句は上の二句に返して言ふ。咎無しと謂ふときは、則ち萬法自ら消し、生ぜざれば則ち一心自ら寂なり。法消し心寂す、至道の體、冲然として得ることを待たずして得るなり。」

能は境に隨つて滅し、境は能を逐うて沈む
祖師の道はく、「能は境に隨つて滅す、境は能を逐うて沈む。」義解者遽に永嘉の「境は智に非ざれば了ぜず、智は境に非ざれば生ぜず、智の生ずること境を了じて生ず、境了ずることは智生じて了ず。」と道ふを引く。當に知るべし、能は是れ一心、境は是れ諸法、能は即ち智の異名なり、境は即ち法の別號なりと。境滅するときは則ち能の心も亦滅す、心空するときは則ち所現の境も亦沈む。相即相在、互攝互融、初より間斷無し。其了ぜざる者、之を目けて迷と曰ふ。

境は能に由つて境たり。能は境に由つて能たり

祖師の道はく、「境は能に由つて境たり、能は境に由つて能たり。」と。箇の語に依つて解を生ずる漢有つて道はく、「境自ら境にあらず、能に因るが故に境なり、能自ら能ならず、境に由るが故に能なり。能は境に由つて生じ、境は能に托いて起る。當に知るべし、

【兩段】 前の能と境と。

【元是れ云云】 以上の四句は通の韻能も空も唐の韻に通ず。

【聲も無く云云】 詩の鼻矣に出づ。

【萬象云云】 眞空を了すれば能も境も他物にあらず。

【古に云】 延慶院の眞股禪師。

【精意】 偏黨。

【寧ろ偏黨有らんや】 以上の四句は養湯の韻。寧ろは安なま胡といふが如し。

【息心銘】 僧の亡名息心銘。隋の左拾遺樂官僧と爲り名を亡名と曰ふ。【大道云云】 この語は前の至道無難

生にして不生なり、心外に法無し、起にして起に非ず、法の外に心無しと。祖師此に到つて、一心眞法を將て、丸して箇の密菓子と作す。只伊が笑談に一嚙せんことを要す。」

兩段を知らんと欲せば、元是れ一空。

祖師の道はく、「兩段を知らんと欲せば、元是れ一空。」と。義解者の商量して消はく、「

兩段といふは前心の法を指す、言ふ所の一空、太虚の頑然たるの空に非ず、小乘眞滅の空

に非ず、乃ち靈覺無相の眞空ならくのみ。此空是れ諸佛の源、萬靈の母なり、聲も無く

臭も無し、群象の前に昭昭たり、有にあらず無にあらず、諸塵の表に朗朗たる者是なり。」

一空、兩に同じ、齊しく萬象を含む

祖師の道はく、「一空、兩に同じ、齊しく萬象を含む」と。義解者の卜度して道はく、「心

法に異ならざる、是れ一空兩に同じ、法、心に異ならざる、是れ齊しく萬象を含む。所以

に古に云ふ、「色を見れば便ち心を見る、色無ければ心現せず」と。又教の中に謂はく、

「森羅及び萬象、一法の印する所なり」故に祖師此を發明す。」

精意を見ざれば、寧ろ偏黨有らんや

義解者の謂はく、「心法既に空く、能所俱に泯するときは、則ち生佛體同じ、悟迷一致な

り。故に息心の銘に、「何が貴く何が賤しく、何が辱、何が榮、何が得何が失、何が重何が

輕、一道虚寂にして、萬物齊平なり」と謂ふの語を引いて證と爲す。」

大道儒覺く、易無く難無し

【轉急云云】高麗本にこの四句と後の四句と前後す。【狐疑云云】或は植州の無、洞山の麻三斤など。

【之を執す】悟に執着す。

祖師の道はく、『大道體寛く、易無く難無し。』と。義解者の道はく、『本來箇の事日月を包ね、虚空を含す。佛祖も名を知らず、大地も載せ起さず。天の普く蓋ふが如く、地の普く擎ぐるが如し。各各圓成し、人人具足す、又何の難易の言を容るべけんや。其難易する所は、人に在つて法に在らざるなり。背て自心是れ佛なりと信ずることは即ち易く、自心是れ佛なりと信ぜざることは即ち難し。』

小見は狐疑す、轉急なれば轉遅し。

祖師の道はく、『小見は狐疑す、轉急なれば轉遅し。』と。義解者の道はく、『一切衆生、空劫已前より、三世の諸佛と、同じく正覺を成す、初より少欠無し。此心了ぜざれば、返つて愚迷に墮して知覺せず、是故に諸佛祖、百千の方便、之を導き之を策つて、之をして悟入せしむ。所以に云ふ、一大事因縁の爲に、故に世に出現すと、乃ち此が爲なり。但是れ學人、自心是佛なりと信ぜずして、心外に別に求めんと欲す、故に之を斥けて小見と爲す。當に知るべし、此心本具せり、箇の疾に菩提を成ずることを得んと説く。已に剩語と成る、何の遲速か之有らんや。』

之を執すれば度を失ふ、必ず邪路に入る

祖師の道はく、『之を執すれば度を失ふ、必ず邪路に入る。』と。近代有等の師位に據る者、人の古人の話を看て工夫を做して、孜孜として寸陰を捨てず、已事を克究すと説く者を見れば、便ち遽に此二句を引いて、之を斥けて之を執すれば度を失ふと謂ふ。乃ち云はく、

【一切見成】「一切見成は更に誰をしてか會せしめん」と。

【體に去住無し】以上の四句は遇暮の韻。無拘無絆。動は行雲の若く云云。肇論に出づ

谷神は山ひこなり

【逍遙】自得の義

【岫】山の穴。

【昏沈不好】以上の四句は皓の韻。好は佳。

「佛法那ぞ遮箇の事有らん、一切見成せり、何ぞ領取せざる、特地に死模樣を做して作麼かせん。」と。

これを放てば自然なり、體に去住無し

義解者の謂はく、「執心既に遣るときは、自然に任運に騰騰として、拘無く絆無し。動は行雲の若く、止は谷神の如し。既に彼此に心無し、寧ろ去住を分つこと有らんや。聞覺に謂はく、「一切の時に居して、妄念を起さず、諸の妄心に於ても、亦息滅せされ。妄想の境に住しても、了知を加へず、無了知に於ても、眞實を辨ぜされば、亦差近し」と。「凡聖情盡き、體露眞常なり、適かに妄縁を絶すれば、即ち如如の佛なり。」

性に任せて道に合ひ、逍遙として惱を絶す

祖師の道はく、「性に任せて道に合ひ、逍遙として惱を絶す。」と。義解者の謂はく、「心空及第の士は、性任すことを待たずして任す、道、合ふことを待たずして合ふ。逍遙は岫を出づる雲の如し、惱を絶すといふは空に行く月の若し。大圓鏡中、誰有つてか爾らざらん。」

念を繋ぐれば眞に乖く、昏沈不好なり

祖師の道はく、「念を繋ぐれば眞に乖く、昏沈不好なり。」と。義解者、教中に云ふを引く、「心、道に繋げず、亦業を結ばず、是を得道の人と爲す。」と。或は徳山の「毫釐も念を繋ぐれば、三途の業因なり。」といふの説を引いて證と爲す。又云はく、「體道の士、纔に纖毫の凡聖悟迷の情有つて念慮に繋げば、則ち凡聖悟迷の爲に昏まされん。眞に一物、懷

【何ぞ】 深く責む

【一乘】 乗は運載の義。

【六塵を云云】 以上の四句は眞の韻

【妻相國】 名は休黃葉運下の居士。

【還つて正覺に同】 此の二句は覺の韻。

に干らざる、萬縁俱に蕩盡を須ちて、初めて他の古人の見處に合ふべし。」

不好なれば神を勞す、何ぞ疎親を用ひん

祖師の道はく、「不好なれば神を勞す、何ぞ疎親を用ひん。」と。義解者の謂はく、「念を繫

くるに由つて便ち眞に乖く、既に眞に乖けば即ち神を勞す。神を勞するを以て必ず疎親あ

り。當に知んぬべし、繫念は乃ち疎親の因、疎親は即ち繫念の果なることを。祖師箇の何

を用をか説く、臍を唾むとも何ぞ及ばんや。」

一乘に趣かんと欲せば、六塵を惡むこと勿れ

祖師の道はく、「一乘に趣かんと欲せば、六塵を惡むこと勿れ。」と。義解者の謂はく、「一

乘は即ち自心の異名なり、六塵根識十八界は、乃ち自心の別號、安んぞ一乘に趣いて六塵

を惡むこと有らん。是れ猶手足を愛して肩背を忘るるがごとし。當に知んぬべし、此心を

悟るときは則ち六塵即ち一乘、此心に迷ふときは則ち一乘皆六塵なることを。妻相國の謂

はく、「之に背くときは則ち凡なり、之に順ふときは即ち聖なり」と。又楞嚴に謂はく、「阿

難、汝俱生の無明、汝をして生死に輪轉し、結根せしむることを識知せんと欲するや。唯

汝が六根なり、更に他物無し。汝復無上菩提を知らんと欲するや。汝をして速かに安樂解

脫、寂靜妙常を證せしめん。亦汝が六根なり、更に他物に非ず」と。

六塵を惡まざれば、還つて正覺に同じ
祖師の道はく、「六塵を惡まざれば、還つて正覺に同じ。」と。義解者の謂はく、「也六塵無

【口噤し舌沸いて】
放開していふ。

【無爲】 無事これ
貴人。

【法】 一乗の法。

【青青云云】 忠國
師曰く、是れ文殊
普賢大人の境界。

く、也正覺無し。總て只是れ箇の妙明心地、喚んで六塵と作すも也得たり、喚んで正覺と作すも也得たり。備若し此妙明の心地に於て了ぜざる所有らば、喚んで六塵と作すも也了ぜず、喚んで正覺と作すも也了ぜず、別に甚變の事か有らん。只箇の了と不了と他の佛祖口噤し舌沸いて、許多の優劣を分出することを引き得て、都て是れ自ら丈夫ならずして、之をして然らしむるなり。』

智者は無爲なり、愚人は自縛す

祖師の道はく、『智者は無爲なり、愚人は自縛す。』と。義解者の謂はく、『智は自ら智にあらず、悟に由つて智なり、愚は自ら愚にあらず、迷に由つて愚なり、智者は自心を悟る、心悟れば本無爲なり。愚人は自心に迷ふ、心迷へば還つて自縛す。當に知んぬべし悟者は無爲なり、天地鬼神なりと雖も、能く之をして爲さしむること莫し。迷者の自縛千聖萬賢なりと雖も、能く其縛を釋くこと莫し、惟智と愚と悉く心に由つて變ず、豈外物の之をして然らしむるならんや。』

法に異法無し、妄に自ら愛著す

祖師の道はく、『法に異法無し、妄に自ら愛著す。』と。義解者の謂はく、『青青たる翠竹、盡く是れ神如、鬱鬱たる黄華、般若に非ざるは無し。盡微塵法界、海内所有の聲色、中に於て一の同相を覓むるに不可得なり、一の異相を覓むるにも、亦不可得なり、此同異を離るるも、俱に不可得なり。嗟乎此を了ぜざる者、佛に著せば佛に礙へられ、法に著せば

【迷へば云云】動
亂の處を厭ふぞと

【二邊】妄に斟酌
するに依りて生ず

法に礙へらる。且佛法に著するすら尙其空礙に遭ふ、此より以往、又何の愛著としてか空
斷せざる者あらんや。』

心を將て心を用ふ、豈大錯に非ざらんや

義解者の道はく、『爾が成佛せんと要する。是れ心を將て心を用ふるなり。乃至生死を超
え、涅槃に住し、菩提を證し、煩惱を斷ぜんと要する等、總て箇の心を將て心を用ふるこ
とを出でず。』

迷へば寂亂を生じ、悟れば好惡無し

祖師の道はく、『迷へば寂亂を生じ、悟れば好惡無し。』と。義解者の謂はく、『眞寂體中に
一切留めず。楞嚴に謂ふ、『無漏眞淨、云何が是中に、更に他物を容れん』と。其未だ此理
を悟らざるを以て、面前に寂を見ざれば便ち亂を見、動を見ざれば便ち靜を見、知らず動
も是れ迷、亂も是れ迷、靜も是れ迷、寂も是れ迷、乃至自己立地に成佛すと見る
も亦是れ迷なることを。能く此迷信を了じて、當外に解脱するときは、則ち一に天真な
り。一一に明妙なり。既に亂を見ず、亦寂を知らず、二邊捨離し、中道立せず。安ぞ好惡
の情の復障を爲し、礙を爲す者有らんや。』

一切二邊、良に斟酌に由る

祖師の道はく、『一切二邊、良に斟酌に由る。』と。或は箇の杜撰の還宮有つて、注解して
道はく、『竊に亂有るを見て、便ち寂有りと見る。當に知るべし、亂自ら亂ならず、寂に

【把握】人我を争ふをいふ。

【一時に云云】以上十二句は藥鐸の韻。法界の中に得失是非は無し。

因るが故に亂なり、寂自ら寂ならず、亂に因るが故に寂なりと。是に因つて諸法紛然として、未だ相對して相待つて起らざるば有らず。云ふ所の斟酌の二字は、便ち是れ最切に揀擇と謂ふの説と差近し。其揀擇の識未だ消せざるを以てするときは、則ち寂亂等の二邊に於て、動斟酌の念を成す、其未だ遣らざるを以て、則ち一切二ならざることを得じ、夢幻空華、何ぞ把握を勞せん

祖師の道はく、「夢幻空華、何ぞ把握を勞せん」と義解者教中に道ふを引く、「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀。」と。又永嘉の道ふを引く、「四大を放つて把握すること莫れ、寂滅性の中飲啄に隨ふ。諸行無常にして一切空なり、即ち是れ如來の大圓覺なり。」便ち情を肆にして緣する所、意の作す所に任せて、禁戒を毀犯し、律義を破壊するが若くに至つて、一へに此二語を以て證と爲す。

得失是非、一時に放却す

祖師の道はく、「得失是非、一時に放却す」と。義解者の道はく、「一法界の中也得る者無く、也失ふ者無く、也是なる者無く、也非なる者無し。良に妄情瞥起し、異見横に生ずるに因つて、得失無き中に於て、熾然として得失あり、是非無き處に於て、紛然として是非あり。所以に祖師、伊をして一時に放却せしめ、已に是れ鋒を傷り手を犯す。平地の風波、爾還つて知るや、本來既に無なり、箇の甚麼をか放す。若し放すべきの理有り」と曰はば、即ち得失是非、甚れの處に向つてか安著せん。」

【眼若し云云】得
失是非なくんば放
却もなし。

【萬法一如】以上
の四句は魚の頤。
こちらより心を起
すに依つて異なる
なり。

【此心異なるとき
は云云】宗鏡録の
七十五に出づ。

眼若し睡らざれば、諸夢自ら除く

祖師の道はく、『眼若し睡らざれば、諸夢自ら除く。』と。義解者の謂はく、『此二句は是れ前の喩、後は合、人の大いに兩目を張つて、歴歴として味まさざるが如し。即ち昏住して自ら遣る、既に昏住せずんば、安ぞ夢縁有らん。』

心若し異ならずんば、萬法一如なり

祖師の道はく、『心若し異ならずんば、萬法一如なり。』義解者の謂はく、『萬法本如なり、心に由つて乃ち異なり。譬へば山自ら高からず、心異なるが故に高し、水自ら深からず、心異なるが故に深きが如し。此心異なるときは、則ち千差競ひ起り、萬別横に生ず。頂背俱に身なり、之を視るに楚越に殊ならず。弟兄氣を同じうす、之を目くるに何ぞ常に天淵のみならん。其異なるを以ての故に、至近の情尙爾り、其聖凡に混じ、物我を齊しくし、自他を一にして、憎愛を等しうせんと欲せば、其れ得べけんや。教中に亦云はく、『未だ境惟れ心なりと達せずんば、種種の分別を起さん。群首の象を摸するに類し、猶し廣客の蛇を疑ふがごとし』同異無き中に於て熾然として同異なり、何ぞ當に眼を翳ふの膜を揭開し、意を亂すの絲を剪空すべし。法界を融じて此心に歸す、鏡の鏡を照すが如し、山河を轉じて自己に入れ、空の空に合へるに似たり。此に到つて諸縁寂爾として、萬慮悄然たらん。二見生ぜず、一法印定せば、謂つべし遠く祖令に符ひ、深く佛心に契ふ者なりと。』

【兀爾】 萬法に染はれざるをいふ。

【歸復自然】 以上の四句は先の歸復は本分に與復

【方比すべからず】 説似一物即不中【殿裏底云云】 會元の西、趙州の章に出づ【滿日青山】 天台菴國師の偈に、通玄峯頂、不是人間、心外無法、滿日青山。

一如體玄にして、兀爾として縁を忘る

祖師の道はく、「一如體玄にして、兀爾として縁を忘る」と。義解者の謂はく、「一如の體玄の又玄なり、因縁に非ずして有り、自然に非ずして成ず、四句を離れ百非を絶す、佛眼と雖も窺ふこと莫く、聖心も測ること同し。大千を方外に擲ち、法界を毫端に卷く、一空一切空、宰割を加へず、一有一切有、豈栽培を用ひんや。寧沙も其多きに喩ふことを得ず、毫髪も其少きに方ぶべからず、謂つべし縁を忘じ待を絶する、一如の玄體なり」と。

萬法齊しく觀すれば、歸復自然なり

祖師の道はく、「萬法齊しく觀すれば、歸復自然なり」と。義解者他の教家に謂ふを引く、「一應縁なるが故に眞如是れ萬法、不變なるが故に萬法是れ眞如なり」と。又云はく、「更に心外に法の能く心の與に縁と爲る無し、皆是れ心より生じて、還つて心の與に相と爲る。此、祖師の萬法齊しく觀するの理に似て、相違せず。或は云はく、齊觀と謂はば、亦是れ不揀擇底の影子なり、苟し揀擇を存せば、則ち齊しく觀すること能はず」と。

其所以を泯じて、方比すべからず

殿裏底、牆外底、車を打ち牛を打つ、拳を堅て指を堅つ、雪峰、三箇の木毬を觀ず、玄沙、三張の白紙を封ず、靈山、性と説き心と説く、少室、皮を分ち髓を分つ。曹洞、五位君臣を列ね、瀉仰、一門父子を會して、滿日青山を吟哦し、門前の湖水を指點す。放行するときは光五天を蔽ひ、捏住するときは風萬里に馳す。聲前に停機を許さず、句外豈

【鷲鷲雪に立つ云】同安察禪師の偈。

【動を止むれば云】動止一致なり

【達人】賈誼が鷲鳥の賦に達人大觀分物無不可と。【兩】兩とは是非の二途を去却して沙汰もなしと。【一に何ぞ云云】以上の六句は紙の韻。

猪を挿むことを容れんや。咄。惣に是れ眼を開いて牀を尿し、香を焼いて鬼を引く。何が故ぞ、祖師の道、其所以を混じ、方比すべからざるかと。義解者の謂はく、「般若經には一百の喩を以て、般若に喩へ、他の經中には一百の喩を以て、解脫に喩ふ。或は又一百の喩を以て菩提心に喩ふ、其に典章に在り、安ぞ方比すべからざるの理あらんや。當に知るべし、般若、解脫、菩提は則ち喩へつべしと。一切の名相を去却して、一心と俱に混ぜしめば、正與麼の時、還つて箇の甚麼の喩子をか立て得ん。或者は謂はく、古人の道ふ、【鷲鷲雪に立つ、同色に非ず、明月蘆花、他に似かず】と。此説豈方比すべからざる者に非ずや。」

動を止むれば動無し、止を動するに止無し

祖師の道はく、「動を止むれば動無し、止を動するに止無し。」と。義解者の謂はく、「祖師老婆心切にして、箇の止動の二邊を將て、輒じて一團と作し、伊が輿に説破す。擊法師の「靜に即して動なり、動に即して靜なり」といふの旨と、大率途を同じうす。亦是れ萬法齊しく之を觀る旨趣なり、豈特に動止のみ然らんや。蓋し一切の境縁も、亦皆如なるが故に、止に即して是れ動なり。落花還つて是れ春風に送らる、動に即して是れ止なり、堅氷日有つて全く水に歸す。達人大觀して木差ふこと無し、味者斯に由つて顛倒起る。」

兩既に成ぜず、一何ぞ爾ること有らん

祖師の道はく、「兩既に成ぜず、一何ぞ爾ること有らん。」義解者の道はく、「是は非無けれ

【窮極】 規矩法則に拘はらぬなり。

【開遮持犯】 大乘は慈悲の願行なれば、時に依りて犯戒するも破戒とならず。

【大悟は小節に拘はらず】 證道歌の語。

【所作俱に息む】 無作の妙用。

【水銀云云】 傳心法要にも、この大

圓のこと出づ。

【空華云云】 清涼國師の語。

ば是ならず、非は是無ければ非ならず、纒に是有りと見ることは、先其非を存すればなり、纒に非有りと見ることは、先其是を存すればなり。所以に單是立せず、獨非存せず、非は乃ち是の根なり、是は乃ち非の本なり、眞妄悟迷等の若くに至つても之と同じ。然も且く是非の兩つ既に去らば、中道の一も何ぞ存せん。祖師此に到つて、肝を披き心を割つての老婆、太だ過ぎたりと謂つべし。

究竟窮極、軌則を存せず

祖師の道はく、『究竟窮極、軌則を存せず。』と。義解者の謂はく、『盡十方世界、所有の虚空色象、大小纖洪、皆是れ箇の自己、歩に信せて行く、祖翁の田地を離れず、口に信せて道ふ、總に是れ古佛の眞詮、以至妻を抱いて釋迦を罵り、酒に酔つて彌勒を打つ、俱に一行三昧を成ず、甚麼の開遮持犯等とか説く。故に永嘉亦云はく、『大悟は小節に拘はらず』と。

心の平等なるに契へば、所作俱に息む

祖師の道はく、『心の平等なるに契へば、所作俱に息む。』と。義解者の、教中に道ふことを引く、『是法は平等にして、高下有ること無し。』と。譬へば水銀の地に墮つるが如し、大者大圓、小者小圓なり。盡大地更に一法の自心と相應せざる者有ること無し。如來成道の時、積生多劫、所修の行業を回觀するに、皆夢幻の如し、亦作者無く、亦不作者無し。所以に云ふ、空華の梵行を修習して、水月の道場に宴坐し、鏡裏の魔軍を降伏して、夢中の佛

【平等の中に於て】大般若の文。

【淨盡】或本には無淨に作る。

【正信】信にも正信と邪信とあり。

【調直】三昧の別稱。

【華法師の語】物不遷論に出づ。

事を成就すと。良此心の未だ了ぜざるに由つて、平等の中に於て、不平等を見る、其不平等を以てするときは、則ち一切の所作、是に由つて興る。』

狐疑淨盡すれば、正信調直なり。

祖師の道はく、「狐疑淨盡すれば、正信調直なり。」と。義解者の謂はく、「信に二種有り、一には正信、二には邪信。自心是れ佛なりと信じて、外に求むることを假らざれば、是れ正信、自心是れ佛なりと信ぜずして、心を起して外に馳せば、任ひ宏爲有るとも、皆邪信と名く。當に知るべし、正信も亦疑有り、正信の中に於て、未だ證得するに由らず、所以に疑を致す。疑念益深く、久遠にして退かざれば、忽爾として洞明し、一念開朗す、是を大疑の下に必ず大悟有り」と謂ふ。當に知んぬべし、悟は是れ信の果なり、信は是れ悟の因なりと。華法師の謂はく、「果は因に俱たらざれども、因に因つて果を成す。一密に是の如くんば、則ち信の時即ち是れ悟の時、悟の時、信の時に異ならず。祖師の銘、之を曰けて信心と曰ふ、正に之に類せり。當に知んぬべし。大根器の士、一たび擧起するを聞いて、舊物を獲るが如し、心に了然たり。衣食は忘すべく、性命は捨つべしと。其斯須も其正信を去らんと欲せば、得べからざるなり。故に古の云はく、「假使熱鐵輪、我頂上に旋るとも、終に此苦を以て、菩提心を退失せじ」と。其正信の念、果して此の如きの堅密ならば、安ぞ親證を獲ざる者有らんや。此を捨つるときは則ち自餘の邪信疑を生じて、疑の已まざるときは、則ち倒見横に生じ、妄縁を馳逐して、無間に流入せんこと必

【末那】 意又は執我。
【阿頼耶】 無沒識
又は藏識と譯す。
攝藏の義。

んや」但是れ水中に皆乳有り、惟れ鵝王能く辨す、自餘の水族は、皆之を知ることを莫し。一切の識中、皆眞心を具すれども、惟れ佛祖のみ能く了するに喩ふ。靈知鑑覺する、之を心と謂ふ。思惟憶持、分別取捨する等、之を識と謂ふ。然も識に八種有り、六根に六を具す、第七を末那と名く、第八を阿頼耶と名く、亦如來藏と名く。上の七識は枝葉たり。惟れ第八識を根本と爲す。教中に謂ふ「來るときは先鋒と爲り、去るときは殿後と爲る、悟れば如來藏と爲り、迷へば阿頼耶と爲る」此識の迷に在るときは、則ち能く無始時來、捨身受身、一切の善惡無記等の業を任持す、悟に在るときは、則ち能く無始時來、一切菩提解脫、諸の智慧の種を任持す。此識、迷より悟に入るときは、轉じて大圓鏡智と爲る、名を改めて體を改めざるなり。即今、四大五蘊、諸の聖凡の法中に於て、了として記憶して、作用分別す。見聞覺知、三有紛然として、萬法昇沈し、一念起滅するが若くに至りては、皆之に依つて生ぜざるは莫し。所以に云ふ、萬法惟れ識と。圭峰の云はく、「生法は本無なり、一切惟識なり」と。嗟今の學者、命根の下に向つて、一斬に兩段すること能はず、脚叢林に跨つて、惟れ聰明の資を以て、情識を引き起し、諸の玄解を覽て、記憶して心に在り。鶩爾として觸發すれば、是れ情識依通にして然ることを知らず、剛ひて此は是れ神悟なりと執す。或は妄に目前の昭昭靈靈を認めて、口を擧げ舌を動するを自己と爲す。而して楞嚴に謂ふ、「百千の大海を棄て、一漚を認めて全湖と爲す」と。圓覺に謂ふ、皆是れ六塵妄想の緣氣なり、實の心體に非ず」と。長沙和尚の謂はく、「學道の人、眞を識らざる

【法財を損し云云】
善道歌の句。

ことは、只從來識神を認むるが爲なり」と。永嘉の謂はく、「法財を損し功德を減す、斯心意識等に由らざるは莫し」乃佛乃祖、指陳せざることを靡うして、末法の中に此病益熾盛を加ふ。然も此病に墮することは、亦根本學道の志、眞ならず正ならざるに因つて然り、若し是れ根本の志を決めて、生死岸頭と相應せんことを要せんと欲せば、終に背つて此識情中に向つて墜跟せず。良に最初の一念、只禪を會し道を會し、佛を會し法を會せんと欲するに、況んや此識、千仞の鐵樹の如し。無始時來、伊を把つて圍繞す、又千兵萬騎の晝夜に六根門頭に在つて、其間隙を伺ふが如し、苟も決定して生死を了せんとなすの志を具せずんば、則ち往く所として之に入らずといふこと無けん。且祖師の信心銘を作ること、誠に堂奥を展開して、後の學者をして情識を脱去し、惟自心を信じ、歩を轉じて涉入せしめんと欲す。儻し學者一毫も、情識盡きずんば、祖師の此銘をして、俱に毒藥と爲らしむ、其利害此の如き者あり。見すや、最初の兩句に道はく、「至道無難、唯嫌揀擇」と。只遮兩句、心と識とを將て、判然として分解すれば、煥として黑白の如し。何となれば、則ち謂ゆる至道無難とは、即ち是れ此眞心を指す、唯嫌揀擇とは、即ち是れ此情識を破するなり。情識忘ぜざる者有つて、此説を見て、乃ち我は只揀擇せずと云ふこと莫からんや。殊に知らず、此不揀擇といふに即して、早く是れ情識をもつて解を作すことを。而るを況んや歩歩有に涉り境に觸れて、情を生ぜん者をや。蓋し祖師の此銘の前後の意、重拈再指せり。其本懷を原ぬるに、特に曲げて學者の爲に、其心と識とを揀辨するに過ぎざ

【眞如法界云云】
盡く一心法に歸して。

【相應云云】 維摩の默然も、文殊が不二法門と讚せられたり。
【惟不二と言ふ】 以上の四句は實至の韻。
【分疎】 いひわけなり。
【觀】 見と同じ。
【兩極】 二本のくさび、説の有無是非等の兩頭に涉るをいふ。
【宛然として二と成る】 圓悟云く只だ箇の不二、早く是れ二にし了れりと。

るのみ。所以に云ふ、思量に非ざる處、識情測り難しと。」

眞如法界、他無く自無し。

祖師の道はく、「眞如法界、他無く自無し。」と。義解者の謂はく、「眞如法界は、是れ一心の物名なり、心外に別法無し、安ぞ自他の稱謂有らん。特に自他の立せざるのみにあらず、乃至山河大地、有情無情、俱に得て有と爲すべからず、得て有と爲すべからずと曰ふと雖も、亦妨げず自他物象、熾然として安立することを。何となれば則ち眞如法界は金に喩へ、自他物象は瓶盤釵釧に喩ふ。當に知んぬべし、金は是れ實體、瓶盤釵釧等の器は、是れ權の名なりと。實を以て權に就くときは、則ち自他物象、安住することを妨げず、權を會して實に歸するときは、則ち惟れ一眞法界の至體のみを見る。自餘の瓶盤の假名、遺ることを待たずして、自ら涙す。昧者將に謂へり、祖師は圓融の旨に達せず、宛然として斷滅して、偏空に墮在して、他無く自無きの説を作す、茲れ辨ぜざることを容さずと。」

急に相應せんと要せば、惟不二と言ふ

祖師の道はく、「急に相應せんと要せば、惟不二と言ふ。」と。其義解者の謂はく、「祖師重ねて分疎を費す、首には則ち唯嫌揀擇と言ふ、其中間には、一も亦守ること莫れ、萬法齊しく觀ず、萬法一如といふ等の若き、盡く是れ惟不二の意を言ふ。然も諸佛と衆生と、觀體不二なり、箇の成佛と説くも、早く是れ剩語なり。惟是れ急に相應せんと要せば、話兩極と作るに似たり。果して箇の相應不相應の理有らしめば、即ち宛然として二と成る、

【不二云云】不二なれば他物はなしと。

【朱に循つて墨を填む】物事の異同【法華に云云】本品には無二共三に作る。

【色空明暗】明は現象にて、差別の義、暗は本體にて平等の義。

【皆此宗に入る】以上の四句は東冬に通韻。宗は尊、迷は出、入は悟。【諸の能入云云】淨諸業障の文。

【永明和尚】智覺延壽禪師、天台徳韶國師に嗣ぐ。

特此に於て未だ嘗て疑無くんばあらず。」

不二なれば皆同じ、包容せずといふこと無し

祖師の道はく、「不二なれば皆同じ、包容せずといふこと無し。」と。一等の朱に循つて、

墨を填むる士の謂はく、「法華に云ふ、「惟此一事實なり、餘の二は眞に非ず」と。又云ふ、「一

切の諸佛、唯一佛乘、無二無三」と。云ふ所の一とは、即妙圓明の心體、修證を離れて、

堅に三際を該ね、横に十虚を貫く。色空明暗、之を以て源と爲す。凡聖悟迷、之に即して

本と爲す。乃至塵沙の法界を盡して、一毫も之に依らずして、生ずる者有りと見ば、皆外

道の計する所なり。所以に云ふ、森羅及び萬象、一法の所印なりと。其不二なれば皆同じ。

包容せずといふこと無しといふの說、此に外なること能はざるなり。」

十方の智者、皆此宗に入る

祖師の道はく、「十方の智者、皆此宗に入る。」と。義解者、華嚴を引いて云はく、「如來眞

の境界、其量虚空に等し、一切衆生は入れども、其れ實には所入無し」と。又圓覺に謂は

く、「諸の能入といふは、諸の能入有るも、覺の入るに非ざるが故に」と。當に知んぬ

べし、此宗、一切衆生、本來深く入る。安ぞ復入るの理有らんや。衆生既に爾り、其れ有

智者の、反つて入ると謂ふ所有るに應ぜず。聞く、永明和尚の謂ふ「心眞如門は、初めよ

り離在無し、但迷ふ者の出づるに喩へ、悟る者の入るに喩ふ。」と。特に迷悟相聞つ、豈果

して謂ふ所の出入有らんや。

【促延に非ず】促むるといふこともなく、延びると云ふこともないのが此宗なり。

【在と不在云云】眞佛は無形なり。十方に通貫し。十方目前。

【境界を忘絶す】前の在も不在もなき處に達せずんば境界に拘せらる。【楞嚴に謂はく】同經第二にあり。

宗は促延に非ず、一念萬年。祖師の道はく、「宗は促延に非ず、一念萬年。」と。義解者の謂はく、「祖師一心を指して宗と爲す、一心法界の中、劫を以て日と爲れども、促むることを加へず、日を以て劫と爲れども、延ぶることを加へず。所以に一念を視て萬年と爲す、萬年を轉じて一念と爲す。長ならず短ならず、少に非ず多に非ず。豈神通の然らしむるところならんや。乃ち法是の如くなるが故に。」

在と不在と無く、十方目前

祖師の道はく、「在と不在と無く、十方目前。」と。或者、意識を以て卜度して謂はく、「心は色像に非ず、道は方隅を絶す。色像に即して妨げず、處處に身を分つことを、方隅に倚つて豈塵影を露すことを礙へんや。塵影を露す、當處を離れずして常に湛然、處處に身を分つ。覓めば即ち知んぬ、君が見るべからざることを。是れ謂ゆる在と不在と無く、十方目前といふの旨明けし。」

極小は大に同じく、境界を忘絶す

祖師の道はく、「極小は大に同じて、境界を忘絶す。」と。義解者の道はく、「前に云ふ在と不在と無しと。便ち是れ極小は大に同じく、極大は小に同じの標題なり。故に楞嚴に謂はく、「一毛端に於て、寶王刹を現じ、微塵裏に坐して、大法輪を轉す」と。荷も在と不在と無きの旨に達せずんば、則ち動すれば境界の爲に固せらる、既に境界に固せらるるとき

は、則ち安ぞ忘絶の理有らんや。既に境界を忘絶すること能はずんば、則ち大なる者は大相、小なる者は小相なり、安ぞ能く一體に融攝せんや。

極大は小に同じく、邊表を見ず

【邊表を見ず】以上の四句は皆韻を押し、其怪篠小、互に隔句韻。

祖師の道はく、「極大は小に同じく、邊表を見ず。」と、一等義解の者の謂はく、「昔毘耶大士、不思議解脱の神力を運して、三萬二千の師子の座を以て、之を方方一丈の室中に置く、室寧きことを加へず、座隘きことを加へず。然る後に右手を以て、妙喜世界を斷取して、

【毘耶大士】維摩の略稱。

普く大衆に告ぐ、「彼世搖動せず、此世改變せず」と。大を以て小に入れ、小を以て大に入る、互即互融して、彼に非ず、此に非ず、經中に此不思議解脱の神力を説かんと欲す。劫

【經中に】維摩經の中に。
【妙明の心中云云】楞嚴第一に出づ。

を究むるとも盡きじ、然も此神力、一毫も妙明の心中より、流出せずといふこと無し。或者の謂はく、「我今亦嘗て此妙明の心體を悟る、何に據つてか此神力に於て、而して克く證

せざる」以て或者に對するもの有つて曰はく、「當に知んぬべし、此神力、本自ら具足す、復證することを加へず。其未だ現前することを獲ざる所は、蓋し初心入道、定惠解脱の力

に於て、未だ圓滿せざる故なり、未だ圓滿せずと雖も、本覺の心中に於て、亦會て失せず、但時至つて自ら現するのみ。時至ると曰ふと雖も、亦一念も時を待つ心の存することを

得ず。苟も此時を待つ心の存せば、即ち異見に落つ。譬へば初生の孩子、未だ襁褓を

離れざるが如し。其重きを負うて遠きに致すことを欲す。其れ得べきか。重きを負うて遠きに致すこと能はずと雖も、而も重きを負うて遠きに致すことに於て、亦何ぞ畏れん、何

ぞ疑はんや。其現前することを獲すと雖も、其眞實に悟明する有ゆる者は、此神力を聞いて、自然に驚かず畏れず、惑はず疑はざれ。若し一毫の驚畏、疑惑の心有つて、胸中に存するときは、則ち此心に於て、實に未だ嘗て眞正に悟明せざる者なり。近世行脚の高士、正悟を求めず、惟言通を貴ぶ。況んや師位に居する者は、多くは是れ一時に頓ずることを取る、背て之が與に深く挑み、痛く別らず、彼此妄に徇ふ、俱に丈夫にあらずして至る、般若の叢林をして、地を掃ふこと幾くも無からしむ。嗚呼惜しい哉、其志有らん者、能く刻苦勵行して、大悟を以て是れ期せば、則ち佛の深恩に報ゆること、此より加はること莫けん。蓋し吾佛、亦未だ嘗て備に、今日の弊を言はずんばあらず。謂はく、末世の衆生成道を希望すとも、悟を求めしむること無し。惟多聞を益し、我見を増長すといふ。二千餘載相去ると雖も、其説は諸掌を示すが如し、益聖人の言、我を誣ひざることを見る。有は即ち是れ無、無は即ち是れ有。祖師の道はく、「有は即ち是れ無、無は即ち是れ有。」と。其義解者の謂はく、「有は自ら有にあらず、有は是れ無家の有なり、無は自ら無にあらず、無は是れ有家の無なり。有は單に居せず、無は獨り立せず、且く人の有なりと言ふは、胸中に先所見の無を存して、然る後に乃ち其れ有なりと云ふ。苟も胸中に先其無を存せずんば、安ぞ背て所對無き中に於て、突然として有と言はんや。故に知んぬ、無は無にあらず、即ち是れ有なり、有は有にあらず、即ち是れ無なりと。有無の理、一源に本く、一源の中に於て有と言ふときは、

則ち其有を多くす、無と言ふときは則ち其無を利す。有無混融し、言路亦絶ゆ、是を還源の旨と謂ふ。」

若し此の如くならずんば、必ず守ることを須ひざれ

祖師の道はく、「若し此の如くならずんば、必ず守ることを須ひざれ。」と。其義解者の謂

はく、「此は是れ祖師丁寧に囑累するの辭なり。謂はく、眞實に妙精明心、本覺靈源、一

念相應せんことを要せば、直に須らく上の如きの所説と一念契同すべし。苟も是の如く

ならずんば、其雄談闊辯、皆外道の計する所なり、之を守らば奚ぞ益あらんや。或者の謂

はく、「若し此の如くならずんば、乃ち決定して人の其眞心を契語せんことを要するなり」

と。必ず守るべからずといふは、乃ち其正悟を求めずして、惟此言説に泥んで、得たりと

爲る者を指すの意なり。此説亦通ぜり。」

一即一切、一切即一。

祖師の道はく、「一即一切、一切即一。」と。或者、教中に「一は是れ一切の一、一切は是

れ一切の一なり、一に在つて少からず、一切に在つて多からず」と謂ふを引く。此は是れ

心法互に徧し、一多相容す、神通の然らしむるに非ず、乃ち法理是の如しと。然も此説、

具に典章に在り、廣く引くことを須ひず、只言の繁きことを益して、道に補無し。當に知

んぬべし、吾祖是銘を作る、不二なれば皆同じ、包容せざること無しといふ處に至つて、

恐らくは後の學者、融會の理に達せざらんことを。首は延促を以て相即し、次には大小を

【若し此の如くならずんば】上件の如くならずんば皆外道の見解なるべし。
【必ず守云云】以上の四句は有の觀

【一即一切云云】一にあつて少きことなく、一切にあつても多きことなしと。

【何ぞ畢云云】以上の四句は實の韻了畢せぬと云ふことはあるまじきなり、是れは學者に保任せしめん爲なり。

【信心不二】不二でなくはと、衆生は心に迷つて信と心が二つになる

【瞽者は視云云】涅槃の十一に出づ

以て相即す、又次には有無を以て相即し、今復一多を以て相即す。無邊の世界海を以て、融じて不二法門と爲す。廣く群象の淵を闢き大いに衆靈の府を啓く。後學をして歩を動ぜずして到り、塵を隔てずして入り、功を加へずして成じ、念を克くせずして證せしむ。大慈の願既に固くして、大化の功普し。

但能く是の如くならば、何ぞ畢らざることを慮らん

祖師の道はく、「但能く是の如くならば、何ぞ畢らざることを慮らん。」と。義解者の謂はく、「法華に云ふ、「吾今汝が爲に、此事を保任す、終に慮らす」と。即ち祖師、但能く是の如くならば、何ぞ畢らざることを慮らんといふの意なり。乃ち學者の爲に、保任するの辭なり。其策勵勸進の誠、盡く此に見えたり。」

信心不二、不二信心

或者、義を以て祖師の意を解して謂はく、「衆生、此心に迷ふは、其來ること久し。一法の中に於て、妄に分別を生ず、一一の分別、皆二にあらずといふこと莫し。且く己を見て自と爲れば、必ず人を見て他と爲す、此を自他の二と謂ふ。此より無量無數の分別を引起して、其二に勝へず、豈算數譬喩の而も其涯量を知る者ならんや。故に祖師の老婆太だ過ぎて箇の信心不二、不二信心の正印を單提して、之が奥に當頭に一印に印破す、綱の綱を擧ぐれば、一日として張らずといふこと無きが如く、領の衣を提ぐれば、一縷として順はずといふこと無きが如し。迅雷は幽蟄に起り、杲日は昏衢に麗く。瞽者は視、聾者は聞く、

【夢宅】 幻身夢宅
 空中物色、前際無レ
 窮、後際寧レ尅と、
 瀑山ノ鎗策に出づ
 【去來今に非ず】
 以上の四句は侵の
 韻、去來今とは此
 信心は、三世の牧
 むる所にあらずと
 なり、金剛經の三
 世心不可得世意と
 相伯仲を爲すと。
 畢竟至道は言語に
 展ぶる間のことて
 はないとの意。

窮者は通ず、愚者は智なり。夢宅を離れずして、遠く眞覺の場に登る、幻身を隔てずして、直に金剛の體を證す、謂つべし、死を起して生を回すの神藥、凡を革めて聖に入るの良導なりと。至れるかな、美なるかな。

言語道斷、去來今に非ず

其義解者の謂はく、「已に是れ言語道斷、此一篇の銘、剩に非ずして何ぞや。若し去來今に非ずと曰はば、乃ち知んぬ、祖師の面目見在せることを」

中峰和尚信心銘義解 終

六祖壇經

宗典部
第二十二卷



【古筠】唐に筠州といふ。故に古筠といふ。

【德異】別號は絶牧叟、蒙山德異禪師は鼓山の皖山凝に嗣法す。休休庵の開祖、元朝の人。

五祖法演開福道寧大馬善果大洪老納證一月休師觀秀峯秀皖山蒙山異。

【妙道】第一段は如來常祖師の傳付

【世傳分座】第二段は、本師釋迦如來は三處にて佛心印を傳へ給ふ、兩處を擧げて證據とす。

【拈華】金波羅華を拈す。

【傳四七】第三段西天傳來なり。

【可大師】第二段也。第四段。

【會中偈】第五段は、この序の本意、五祖の會下には七百人の高僧あり。惠能一人、衣鉢を傳ふ、負春は

六祖大師法寶壇經序

古筠比丘 德異 撰

ろくそ だいにし ほんぼう だんぎやうじよ
ろくそ だいにし ほんぼう だんぎやうじよ
妙道虚玄にして不可思議なり、言を忘じ旨を得て、端に悟明すべし。故に世尊、座を多
子塔前に分ち、華を靈山會上に拈す、火と火とに似て、心を以て心を印す。西傳四七、菩
提達磨に至つて、東のかた此土に來り、直に人心を指して、見性成佛せしむ。可大師と
いふひとあり、首肯下に於て悟入し、末上に三拜し、藴を得衣を受く、祖に紹いで正宗を
開闡す。三傳して黄梅に至る、會中の高僧七百、惟負春の居士、一偈をもつて衣を傳へて、
六代の祖と爲る。南のかたに遯ること十餘年、一旦風旛の動するに非ずといふの機を以
て、印宗の正眼を觸開す。居士是に由つて祝髮登壇し、跋陀羅の懸記に應じ、東山の法門
を開く。韋使君、海禪者に命じて、其語を録し、之を日けて『法寶壇經』と曰ふ。大師、五
羊に始り、終曹溪に至るまで、說法三十七年、甘露の味に沾ひ、聖に入り凡を超ゆるも
の、其數を記すること莫し。佛心宗を悟り、行解相應し、大知識と爲るもの、名傳燈に載
せたり。惟南嶽、青原執侍すること最も久し、盡し得て巴鼻なし。故に馬祖、石頭を出す、
機智圓明にして、玄風大いに振ふ。乃ち臨濟、沩仰、曹洞、雲門、法眼の諸公あつて、巍
然として出づ。道德群を超え、門庭峻峻なり。英靈の衲子を辟廋して、志を奮つて關を

腰に負うて米つき
の務に供し此時は
俗務なる故に。

【華使甘】以下第
二段なり。

【惟南嶺青原】第
七段。壇經の功德

兒孫に及ぶ。

【夫れ壇經は】第
八段。此經を讚す。

【惜しいかな】第
九段。此經の開板

の由を述ぶ。

【惟願くは】第十
段。序者の發願を

述ぶ。

【至元二十七年】
龍朔元年、六祖傳

衣より五百七十年

大元の五代世宗の

時。

衝かしむ。一門深く入れば、五派源を同じうす。爐錘を歴遍して、規模廣大なり。其五
家の綱要を原ぬるに、盡く壇經に出でたり。夫れ壇經は、言簡に義豊に、理明かに、事
備れり。諸佛無量の法門を具足し、一一の法門、無量の妙義を具足し、一一の妙義、諸佛
無量の妙理を發揮す。彌勒樓閣の中に即し、普賢毛孔の中に即す。善く入るものは即ち善
財一念の間に於て、功德を圓滿し、普賢と等しく、諸佛と等しきに同じ。惜しいかな、壇
經後人の節略太だ多きが爲に、六祖大全の旨を見ざることを。德異幼年に、嘗て古本を
見る、自後徧く求むること三十餘載、近ごろ通上人を得て、尋いで全文に到る。遂に吳中
の休休禪菴に刊して、諸の勝士と同一に受用す。惟願くは卷を開き目を舉げて、直に大
圓覺海に入つて、佛祖の慧命を續いで窮りなからんことを。斯に余が志願滿ちぬ。至元二
十七年庚寅の歲、中春の日記す。

六祖大師法寶壇經

行由第一

【本書は、六祖慧能一代の說法と行實とを門人法海等が集録せしものなり。所説深淵にして佛經と等しきを以て經の名を附す。】
 【行由第一】大師の行狀由來を述ぶ。時に大師、韶州の義鳳二年二月八日、衆を辭し、廣州の法性寺より、林に歸り、到るなり。時に師の年四十、時に當國韶州の太守韋瓌といふ人、官人共を引き具して、曹溪に入つて、大師を請待し、大梵寺の講堂にて、上堂を請ひ、説法し給ふと。

【大師衆に告げ】此より正宗分なり。【行由得法】大師示現の由來と法を得し因縁とを聞いて、直了成佛の理を解了せよと。【慧能が嚴父】貫瑛はもと范陽の人は、

六祖壇經

時に大師寶林に至る、韶州の韋刺史（名は瓌）、官僚と山に入つて師を請じて、城中の大梵寺の講堂に出して、衆の爲に閑縁説法せしむ。師、升座す、次で刺史官僚三十餘人、儒宗學士三十餘人、僧尼道俗一千餘人、同時に禮を作して法要を聞かんことを願ふ。大師、衆に告げて曰はく、「善知識、菩提の自性本來清淨なり、但此心を用て直に了じて成佛せよ。善知識、且く慧能が行由得法の事意を聽け、慧能が嚴父は木范陽に貫たり、左降して嶺南に流されて新州の百姓と作る。此身不幸にして、父又早く亡す。老母孤り遺りて、南海に移り來つてより、艱辛貧乏にして、市に於て柴を賣る。時に一客有つて柴を買ひ、使令して客店に至らしめて、客收め去らしむ。慧能、錢を得て却つて門外に出でて、一客の經を誦するを見る。慧能一たび經の語を聞いて、心即ち開悟す。遂に客に何の經をか誦すと問ふ。客曰はく、「金剛經」と。復問ふ、「何れの所より來つて、此經典を持す」客云はく、「我神州黃梅縣の東禪寺より來る。其寺は是れ五祖の忍大師、彼に在して化を主る、門人一千有餘、我彼の中に到つて、禮拜して此經を聽受す。大師、常に僧俗を勸めて、但金剛經を持せしむ、即ち自ら見性して直に了じて成佛せしむ」と。慧能、説を聞いて、宿

三

嶺南（廣東省）の新州に、武徳三年に左降百姓となる。范陽の唐の河北道廣州の南海縣に移りて、薪を賣り、母を養ふ。

【母を安置し云云】母の衣食に心遣ひなきやうに調へて暇を乞うて黃梅へ行く。

【祖問うて曰】五祖は直に自性を示し、六祖は性相不二の理を以て答ふ。

【猶獠】猶獠は短喙の犬、獠は西南の夷の名。邊鄙の下人を云ふ。

【作務】一切の人事をなさしむるをいふ。

昔縁ありき、乃し一客の銀十兩を取つて、慧能に與へて、老母の衣糧に充てしめ、便ち黃梅に往いて、五祖を參禮せしめんことを蒙る。慧能、母を安置し畢つて、即便辭し違ふこと、三十餘日を經ずして、便ち黃梅に至りて、五祖を禮拜す。祖、問うて曰はく、「汝は何れの方の人ぞ、何物をか求めんと欲す」慧能、對へて曰はく、「弟子は是れ嶺南新州の百姓なり、遠く來つて師を禮す。惟作佛を求めて、餘物を求めず」と。祖言はく、「汝は是れ嶺南の人、又はれ獠、若んぞ作佛するに堪へん」慧能曰はく、「人に南北ありと雖も、佛性本南北なし、猶獠の身と和尚と同じからず、佛性何の差別かあらん」五祖、更に與に語らんと欲すれども、且く徒衆の總て左右に在るを見て、乃ち業に隨つて作務せしむ。慧能曰はく、「和尚に啓す、弟子自身常に智慧を生じて、自性を離れず、即ち是れ福田なり、未審し、和尚何の作務をか作さしむ」祖云はく、「這獠、根性大利、汝更に言ふこと勿れ、槽廠に著き去れ」慧能、退いて後院に至れば、一りの行者あつて、慧能を差して柴を破り確を踏ましむ。八月餘を經たり。祖一日、忽に慧能を見て曰はく、「吾汝が見の用ふべきことを思ふ、恐くは悪人の汝を害するあらんことを。遂に汝と與に言はず、汝之を知らざるや」慧能曰はく、「弟子も亦師の意を知つて、敢て行いて堂前に至らず、人をして覺らざらしめんとなり」祖一日、諸の門人を喚んで、總に來らしむ。「吾汝に向つて説かん、世人生死事大なり、汝等目を終ふるまで、只福田を求めて、生死の苦海を出離せんことを求めず、自性若し迷はば、福何ぞ救ふべき。汝等各去つて、自ら智慧を看、自らの本心般若

【輪刀上の陣】兵刃を交ふるの軍陣なり。

【處分】物をさばく。

【神秀】開封の尉氏の人、姓は李氏、大通禪師と賜ふ、唐の中宗神龍二年二月二十八日寂す【他得べし】神秀が祖位を得べしと

【奚ぞ別たん】凡心に如同して聖位を奪はば、直に凡夫と異なるなし。【供奉】總じて天子の供の儀なり。【盧珍】畫工。【楞伽の變相】佛楞伽經を説き玉ふ時の段段の體を畫くを云ふ。

の性を取つて、各一偈を作り來つて、吾に呈して看せしめよ。若し大意を悟らば、汝に衣法を付して、第六代の祖と爲ん。火急に速に去れ、遲滯することを得ざれ、思量せば、即ち用に中らじ、見性の人は、言下に須らく見るべし。若し此の如くなる者は、輪刀上の陣にも、亦之を見ることを得ん。利根の者の機を見て作すに喩ふ。衆、處分を得て、退いて遞に相謂つて曰はく、「我等衆人、心を澄ましめ意を用ひて偈を作ることを須ひざれ、將に和尚に呈して、何の所益かあらん。神秀上座、現に教授師たり、必ず是れ他得べし、我輩、謾に偈頌を作らば、枉げて心力を用ふるならん」餘人語を聞いて總に皆心を息む。咸言ふ、「我等、已後秀師に依止せん、何を煩しく偈を作らん」と。神秀、思惟すらく、「諸人偈を呈せざることは、我他の與に教授の師たるが爲なり、我須らく偈を作つて將に和尚に呈すべし。若し偈を呈せずんば、和尚如何ぞ我心中の見解の深淺を知らん。我偈を呈する意、法を求むることは即ち善し、祖を覓むることは即ち惡し、却つて凡心に同じて其聖位の奪はば奚ぞ別たん。若し偈を呈せずんば終に法を得じ。大難大難」と。五祖堂前に歩廊の三間なるあり、供奉盧珍を請じて、楞伽經の變相及び五祖血脈の圖を畫かしめて、流轉供養せんと擬す。神秀偈を作ること成り已つて、數度呈せんと欲して、行いて堂前に至る、心中恍惚として、徧身汗流る、呈せんと擬するに得ず、前後四日を経て、一十三度までに、偈を呈すること得ず。秀、乃し思惟すらく、「如かじ、廊下に向つて書き著けんには。他の和尚の看見するに従つて、忽ち若し好しと道はば、即ち出でて禮拜して

【血脈圖】佛の慧命を續ぎたる血脈相傳の體を圖す。

【身是菩提樹】身は是れ修學の柱礎菩提の生處。

【心如明鏡臺】心は是れ萬象を照す。

【時時勤拂拭】汚染の雲は揩摩を忽にす。

【勿使惹塵埃】一

二の句は基本の身心、此を以て起す、三四の句は修勳を以て結すと、

【祖三更云云】我

が心中の見解の淺深を知らしめんが爲に作つたとなり

【祖曰はく云云】

未だ祖師の關門に入らず、門外にして佛性の理致を論ず。

云はん、是れ秀が作なりと。若し堪へずと道はば、枉げて山中に向つて年を數へん。人の禮拜を受けて、更に何の道をか修せん」是夜三更に、人をして知らしめず、自ら燈を執つて、偈を南廡の壁間に書して、心の所見を呈す。偈に曰はく、

身是菩提樹

心如明鏡臺

時時勤拂拭

勿使惹塵埃

秀偈を讀了つて、便ち却つて房に歸る、人總に知らず。秀復思惟すらく、「五祖、明日偈を見て歡喜せば、即ち我法と縁あり、若し堪へずと言はば、自ら是れ我迷の宿業障重にし、法を得べからず、聖意測り難し」房中に思想して、坐臥安からず、直に五更に至る。祖已に南廡、門に入ること未だ得ず、自性を見ざることを知る。天明に祖、盧供奉を喚び來して、南廡の壁間に向つて、圖相を繪畫せしめんとす。忽ちに其偈を見て歡じて言はく、「供奉却つて畫することを用ひざれ、爾の遠來を勞す。經に云はく、凡そ有ゆる相は、皆是れ虛妄なりと。但此偈を留めて、人に與へて誦持せしめん。此偈に依つて修せば、惡道に墮せんことを免れん、此偈に依つて修せば、大利益あらん」門人をして姓普願敬せしむ。一盡く此偈を誦まば、即ち見性を得ん」といふ。門人偈を誦して、皆善哉と歡す。祖三更に秀を喚んで、堂に入れて、問うて曰はく、「偈は是れ汝が作なりや否や」秀言はく、「實に是れ秀が作なり、敢て妄に祖位を求めず、望むらくは和尚慈悲、弟子が少智慧ありや否やを看たまへ」祖曰はく、「汝此偈を作らば、未だ本性を見ず、只門外に到つて、未だ

【門内】 宗旨の堂奥。

【一切時中】 以下は丁寧の開示なり識心見性は別のことなし。

【如如】 眞性不動常住不變の義。

【汝且く】 丁寧の開示を蒙りて、神秀平生の學解を亡す。

【教授】 偈義の教授。

【大意】 綱宗。
【傳付】 傳受付屬。

【無相の偈】 心地無相の偈。

【別駕】 副國主。
【張日用】 靜海の人。

門内に入らず。此の如き見解をもつて、無上菩提を覓むとも了に得べからず、無上菩提は、須らく言下に白の本心を識り、自の本性を見、不生不滅なることを得べし。一切時中に於て、念念自ら見て萬法滯りなく、一眞一切眞、萬境自ら如如なり。如如の心、即ち是れ眞實、若し是の如く見れば、即ち是れ無上菩提の自性なり。汝且く去つて、一兩日思惟し、更に一偈を作つて將ち來れ。吾汝が偈を見て、若し門に入得せば、汝に衣法を付せん。神秀作禮して出づ。又數日を経て、偈を作るに成らず、心中恍惚として神思安からず、猶夢中の如くにして、行坐樂まず、復兩日あつて、一童子の確坊に於て、過ぎて其偈を唱誦するあり。慧能、一たび聞いて便ち知る、此偈未だ本性を見ざることを。未だ教授を蒙らずと雖も、早く大意を識る。遂に童子に問うて曰はく、「誦するものは何の偈ぞ。童子の曰はく、「爾這獼猴、大師の言ふことを知らずや、世人生死事大なり、衣法を傳付することを得んと欲す、門人をして偈を作り來つて看せしめよ。若し大意を悟らば、即ち衣法を付して、第六祖と爲んと。神秀上座、南廊の壁上に於て、無相の偈を書す、大師、人をして皆誦せしむ、此偈に依つて修せば、惡道に墮することを免る、此偈に依つて修せば、大利益あらん」と。慧能曰はく、「一本に、我も亦此を誦して來生の縁を結ばんと要すといふあり。」上人我此に確を踏むこと八箇餘月、未だ曾て行いて堂前に到らず、望むらくは上人引いて偈の前に至つて禮拜せしめよ。童子引いて偈の前に至つて禮拜せしむ。慧能曰はく、「慧能、字を識らず、請ふ上人爲に讀め。」時に江州の別駕、姓は張、名を日用といふも

【菩提本無樹】這箇菩提色に非ず空に非ず物に非ず事に非ず安ぞ比樹の相あらん、無樹は無根。

【明鏡亦非臺】這箇妙心方に非ず圓に非ず明に非ず暗に非ず安ぞ比鏡の相あらん、非臺は無衣の如し、心に所住なし。

【本來無一物】自性なり。
【何處惹塵埃】惹は或は「有」に作るは非なり。世に此偈を論ずるもの、多くは畢竟空の義とし空ならは一物、若し空ならは、知るものは何物ぞ、言語道斷ならば、音ふものはれ無ぞ。

【入室】方丈の室に入る。見性に喩ふ。

【袈裟】大悲を以て、見性をあらはさざるなり。

【經を説く云云】

のあつて、即ち高聲に讀む、慧能聞き已つて、遂に言ふ、「亦一偈あり、望むらくは別駕爲に書せよ」別駕言はく、「汝も亦偈を作ること其事希有なり」慧能別駕に向つて言はく、「無上菩提を學ばんと欲せば、初學を輕んずることを得ざれ、下下の人に上上智あり、上上の人に汝意智あり、若し人を輕んぜば、即ち無量無邊の罪あらん」別駕言はく、「汝但偈を誦せよ、吾汝が爲に書せん。汝若し法を得ば、先須らく吾を度すべし、此言を忘るるなかれ」と。慧能の偈に曰はく、

菩提本無樹
本來無一物

明鏡亦非臺
何處惹塵埃

此偈を書し已つて、徒衆總に驚いて嗟訝せずといふことなし。各相謂つて言はく、「奇なる哉、鏡を以て人を取ることを得ざれ、何ぞ多時他の肉身の菩薩を使ふことを得たる一祖、衆人の驚怪するを見たまひ、人の損害せんことを恐れ、遂に鞋を將つて偈を標し了つて曰はく、「亦未だ見性せず」と、衆以て然りと爲す。次の日、祖潛かに碓坊に至り、能が石を腰にして米を舂くを見て、語つて曰はく、「求道の人、法の爲に軀を忘ら、當に是の如くなるべきか」乃し問うて曰はく、「米熟すや未だしや」慧能曰はく、「米熟すること久し、猶篩を欠くこと在り」祖杖を以て碓を撃つこと三下して去る。慧能即ち祖の意を會して、三鼓に室に入る。祖、袈裟を以て遮圍して、人をして見しめず、爲に金剛經を説く、「應無所住而生其心」といふに至つて、慧能言下に、一切の萬法、自性を離れざることを大悟

化他。凡そ言句あり、相貌あるは皆是れ所住。若し見性せずんば、眞の無所住に非ず。
 【何ぞ問せん】 識神を認めて思量する所にあると雖も、心行所流すと雖も、能く萬法を生ず、春羅萬象は唯心の所現なり。
 【警教】 單傳直指の教。
 【有情、因地】 凡そ有情は、一たび法會に預れば、下種得果の益なきこと能はず。
 【無情、無性】 情なれば自ら下種なし、自性なれば生果なし、法會何ぞ預らんと、有情とは而生其心の義、即ち發菩提心是れ頓教の所託。若し又本來無一物にして、其心を生ぜざる時は佛種子を闕ず、無性無生の善は回光返照して看よ。

六祖壇經

す。遂に祖に啓して言はく、「何ぞ期せん、自性本自ら清淨なることを、何ぞ期せん。自性本不生滅なることを、何ぞ期せん、自性本自ら具足することを、何ぞ期せん、自性本動搖なきことを、何ぞ期せん、自性能く萬法を生ずることを」と。祖、本性を悟ることを知つて、慧能に謂つて曰はく、「本心を識らずんば、法を學んで益なし、若し自らの本心を識り、自らの本性を見るをば、即ち丈夫、天人師、佛と名く」三更に法を受く、人盡く知らず。便ち頓教及び衣鉢を傳へて云はく、「汝を第六代の祖と爲す、善く自ら護念して、廣く有情を度し、將來に流布して、斷絶せしむることなかるべし。吾儕を聽け」曰はく、

有情來下種 因地果還生
 無情既無種 無性亦無生

祖復曰はく、「昔達磨大師、初めて此土に來る、人未だ之を信せず、故に此衣を傳へて、以て信體と爲して、代代相承す。法は則ち以心傳心、皆自悟自解せしむ。古より佛佛惟本體を傳へ、師師密に本心を付す。衣は争の端たり、汝に止めて傳ふること勿れ、若し此衣を傳へなば、命懸絲の如くならん、汝須らく速かに去るべし、恐くは人、汝を害せんことを」慧能啓して曰はく、「甚れの處に向つてか去らん」祖云はく、「懷に逢はば則ち止れ、會に遇はば則ち藏れよ」慧能、三更に衣鉢を領得して云はく、「能は本是れ南中の人、素より此山路を知らず、如何が江口に出で得ん」五祖言はく、「汝變ふことを須ひされ、

九

【信得】 依託の證なり。

【信心傳心】 眞實の傳心なり。

【自性】 佛性なり。

【止】 止息なり。

【禪】 禪定なり。

【法】 佛法なり。

【問ふ】 問ふなり。

【大庾嶺】 韶州の嶺なり。

【六祖の場】 六祖の坐す所なり。

【慧能】 慧能の意なり。

【參禪】 參禪の意なり。

【衣鉢】 法を傳ふるの表なり。

【不思善不思惡】 當頭に於て何物か自己の面目ぞと一問せり。

吾自ら汝を送らん一祖相送つて直に九江驛に至つて、祖、船に上らしむ。五祖を托つて自ら歸す、慧能言はく、「請ふ、和尚坐したまへ、弟子合に體を搦すべし」祖云はく、「合に是れ吾汝を渡すべし」慧能云はく、「迷ふときも解度す、悟り了れば自ら度す、度の名一なりと雖も、用度向じからず。慧能生れて邊方に在りて、諸君ども正しからず、爾の法を傳ふることを蒙つて、今已に得悟す、只合に自性白度すべし」祖云はく、「如是如是、以後傳法、汝に出つて大いに行はれん、汝去つて三年、吾方に世を遁かん、汝今好し去れ、努め力めて南に向へ、宜しく速に返くべからず、佛法難起らん一慧能、祖を辭し違り已つて、發足して南に行く、兩月の中間に、大庾嶺に至る（五祖歸つて、慧能日土堂せず、衆疑うて詰り問うて曰はく、「和尚少病少惱なりや否や」曰はく、「病は即ちなし、大法已に南す」問ふ、「誰人にか傳授す」曰はく、「能といふもの之を得たり」衆乃ち知る）後を逐うて數百人、來つて衣鉢を奪はんと欲す。一僧、俗姓は陳、名は慧明、是より先、四品の將軍たり、性行剛愎にして、意を極めて參尋す。衆人の先と爲つて、趨うて慧能に及ぶ。慧能衣鉢を石上に擲下して云はく、「此衣は信を表す、力をもつて争ふべけんや」というて、能、草莽の中に隠る。慧明至つて捉搦するに動かず、乃し喚んで云はく、「行者行者、我法の爲に來る、衣の爲に來らず」慧能遂に出でて磐石の上に坐す、慧明作禮して云はく、「望からくは行者、我爲に説法したまへ」慧能云はく、「汝既に法の爲に來らば、諸縁を屏息すべし、一念を生ずること勿れ、吾汝が爲に説かん」明良久す、慧能云はく、「不思善不思惡、正

【上來の密語】慧明已に見性して大悲心を起すが故に「明日はく」此一段を聞くものは、水を飲んで冷暖を覺ゆるが如くにして、始めて一分の相應を得べし。

【明又問ふ】自今以後度生の處を問ふ。
【獵人云云】放生は第一の善根なり法を説くの時、何ぞ肉を食ふやと問へば大悲代受苦の誓願に隨順す。

【印宗云云】仁者心動の一句について、奥義を擧げて詰問するに、言は簡にして理相當するなり。

與麼の時、那箇か是れ明上座本來の面目。慧明、言下に大悟す、復問うて云はく、「上來の密語密意の外、還更に密意ありや否や」慧能云はく、「汝が奥に説くものは即ち密に非ず。汝若し返照せば、密は汝が邊に在らん」明曰はく、「慧明、黄楸に在りと雖も、實に未だ自己の面目を省せず、今指示を蒙つて、人の水を飲んで冷暖自知するが如し、今行者は即ち慧明が師なり」慧能曰はく、「汝若し是の如くならば、吾と汝と同じく黄楸を師とせん、善く自ら護持せよ」明又問ふ、「慧明、今より後、甚れの處に向つてか去らん」慧能曰はく、「表に逢はば則ち止まれ、蒙に遇はば則ち居れ」明、禮して辭す。「明回つて當下に至つて趨衆に謂つて曰はく、「向に崔嵬に昇る、竟に蹤跡なし、當に別道に之を尋ぬべし」趨衆成もつて然りと爲す。慧明、後に道明と改む、師の上の字を避く。慧能、後に曹溪に至る、又悪人に尋逐せられて、乃ち四會に於て難を獵人の隊中に避く。凡て一十五載を經、時に獵人の奥に、宜しきに隨つて説法す。獵人常に網を守らしむ、生命を見るときに、盡くくを放つ。飯時に至るごとに、菜を以て肉鍋に寄せ煮る。或は問へば、則ち對へて曰はく、「但肉邊の菜を喫ふ」と。一日思惟すらく、「時弘法に當れり、終に還るべからず」遂に出でて廣州の法性寺に至り、印宗法師の涅槃經を講ずるに値ふ。時に風吹いて旛動くことあり、一僧曰はく、「風動く」と。一僧曰はく、「旛動く」と。議論已ます。慧能に進んで曰はく、「是れ風動にあらず、旛動にあらず、仁者の心動くなり」と、一衆駭然たり。印宗延いて上席に至らしめて奥義を徴詰す。慧能が言簡にして、理當つて文字に由らざるを見て、宗云

【傳來の衣鉢を云
六】印宗、黄梅の指
授を問ふ、禪定解
脫をやめよと云ふ
には非ず、錯つて
會することなかれ
【不二の法】對待
諸法の事理のもし
づめ
【法師云云】經を
講ずるもの其性不
二。

はく、「行者は定んで常人に非じ、久しく聞く、黄梅の衣鉢南に来ると、是れ行者なること莫しや否や」慧能曰はく、「不敢」宗是に於て作禮して、傳來の衣鉢を告請す、出して大眾に示す。宗復問うて曰はく、「黄梅の付囑、如何が指授す」慧能曰はく、「指授は即ち無し、惟見性を論じて禪定解脫を論ぜず」宗曰はく、「何ぞ禪定解脫を論ぜざる」謂つて曰はく、「是二法は是れ佛法にあらざるが爲なり、佛法は是れ不二の法なり」宗又問ふ、「如何なるか是れ佛法不二の法」慧能曰はく、「法師、涅槃經を講じて佛性を明す、是れ佛法不二の法なり、高貴徳王菩薩の佛に白して言すが如きんば、四重禁を犯し、五逆罪を作り、及び一闍提等、當に善根佛性を斷すべしや否や、佛言はく、善根に二つあり、一つには常、二つには無常と、佛性は常に非ず、無常に非ず、是故に斷ぜず、名けて不二と爲す。一つには善、二つには不善、佛性は善に非ず不善に非ず、是を不二と名く。蘊と界と、凡夫に二を見る、智者は了達して、其性無二なり、無二の性、即ち是れ佛性なり」印宗、説を聞いて歡喜合掌して言はく、「某甲が講經は、猶し瓦礫の如し、仁者の論議は、猶し眞金の如し」是に於て、慧能に剃髮を爲さしめ、願ひ事へて師と爲す。慧能遂に菩提樹下に於て、東山の法門を聞く。慧能東山に於て得法す、辛苦受け盡して、命懸絲に似たり。今日使君官僚僭尼道俗と、此一會を同じくすることを得たることは、累劫の縁に非ずといふこと莫し。亦是れ過去生中に諸佛を供養し、同じく善根を植ゑて、方に始めて如上の頓教得法の因を聞くことを得たり。教は是れ先聖の所傳にして、是れ慧能が自智に非ず、願くは先聖の教

を聞かんもの、各淨心ならしめよ、聞き了つて各自ら疑を除きなば、先代の聖人の如くにして別なることなけん。一衆、法を聞いて歡喜作禮して退く。

般若第二

【般若第二】此章は、宋本には第一章の「悟法傳衣」の中に入る。此章は自性の眞理と自心の般若とを説く。【般若】見性の法なり、其體は即自本性、其用は回光返照の智、其宗は不二の理、此體用宗訓融するを以て般若と稱す。【愚人智人】東西南北一人の爲に何ぞ旋轉せんや、自迷のみ。【世人終日】般若の自性、何ぞ斷ずべけんや、只自ら見ざるなり。【何をか摩訶云云】是より下の三節は別して摩訶の義を釋す。初は相空、心量廣大にして、一切の相を離る、諸佛の刹土も悉く心量の中にあり。

次の日、韋使君請益す、師陞座して大衆に告げて曰はく、「總て淨心にして、摩訶般若波羅密多を念ぜよ。」復云はく、「善知識、菩提般若の智は、世人本自らこれあり、只心迷ふに緣つて自ら悟ること能はず、須らく大善知識の示導を假りて、見性すべし。當に知るべし、愚人智人、佛性本差別なきことを、只迷悟同じからざるに據つて、所以に愚あり智あり。吾今爲に摩訶般若波羅密多の法を説いて、汝等をして各智慧を得しめん、志心に諦聽せよ、吾汝が爲に説かん。善知識、世人終日口に般若を念じて、自性の般若を識らず、猶食を説いて飽かさるが如し。口に但空を説くのみならば、萬劫にも見性することを得ずして、終に益あること無けん。善知識、摩訶般若波羅密多は是れ梵語、此には大智慧到彼岸と言ふ。此れ須らく心に行すべし、口に念するに在らず、口に念じて心に行せざれば、幻の如く化の如く、露の如く電の如し。口に念じて心に行すれば、則ち心口相應す。本性は是れ佛、性を離れて別佛なし。何をか摩訶と名く、摩訶は是れ大なり、心量廣大にして猶虚空の如し、邊畔あることなし、亦方圓大小なし、亦青黃赤白に非ず、亦上下長短なし、亦瞋なく喜なく、是なく非なく、善なく惡なし、頭尾あることなし。諸佛の刹土盡く

【何をか波羅密云】是より下亦三空に約して波羅密を釋す。

【甚深法界】心法界。

を説けども、心中常に愚なり、常に自ら言ふ、我般若を修すと。念念空を説いて、眞空を識らず、般若に形相なし、智慧心即ち是なり。若し是の如くの解を作さば、即ち般若の智と名く。何をか波羅密と名く、此は是れ西國の語、唐には到彼岸と言ふ、解義生滅を離れたるなり。境に著しては生滅起る、水の波浪あるが如し、即ち名けて彼岸と爲す。境を離れては生滅なし、水の常に通流するが如し、即ち名けて彼岸と爲す。故に波羅密と處す。善知識、迷人は口に念する當然の時、妄あり非あり、念念若し行すれば、是を眞住と名く、此法を悟れば、是れ般若の法なり、此行を修すれば、是れ般若の行なり、修せざれば即ち凡、一念修行すれば、自身佛に等し。善知識、凡夫即ち佛、煩惱即ち菩提、前念迷へば即ち凡夫、後念悟れば即ち佛、前念境に著すれば即ち煩惱、後念境を離るれば、即ち菩提なり。善知識、摩訶般若波羅密は、最尊最上是第一なり。作ることなく、往くことなく、亦來ることなし。三世の諸佛中より出でて、當に大智慧を用て、五蘊の煩惱塵勞を打破す。此の如く修行すれば、定んで佛道を成じて、三毒を戒定慧と爲す。善知識、我此法門は、一の般若より、八萬四千の智慧を生ず。何を以ての故に、世人に八萬四千の塵勞あるが爲なり。若し塵勞なければ、智慧常に現じて、自性を離れず、此法を悟るものは、即ち是れ無念無憶無著にして、誑妄を起さず、自の眞如の性を用て、智慧を以て觀照し、一切の法に於て、取らず捨てず、即ち是れ見性成佛の道なり。善知識、若し甚深法界、及び般若三昧に入らんと欲せば、須らく般若の行を修し、『金剛般若經』を誦誦すべし。即ち見性を得

【此法門】金剛經等。

【若くは大乗人】以下は大機比喩の小目なり。

【小根の人】以下は小機比喩の小目なり。
【元より般若の智】上を承けて小根不解の由を云ふ。

【内外住】内心外境等。

ん、當に知るべし、此經の功德、無量無邊なることを。經中に分明に讚歎したまふ、能く具に説くことなし。此法門は、是れ最上乘なり、大智の人の爲に説き、上根の人の爲に説く。小根小智の人は、聞いて心に不信を生ぜん。何を以ての故に。譬へば天龍の雨を閻浮提に下すが如し。城邑聚落、悉く皆漂流して、棗葉を漂はすが如し。若し大海に雨れば、増せず減ぜず。若くは大乗の人、若くは、最上乘の人、金剛經を説くを聞いて、心聞けて悟解せん。故に知んぬ、本性自ら般若の智あつて、自ら智慧を用て常に觀照す。故に文字を假らず、譬へば雨水の如し、天より有ならず、元是れ龍能く興し致して、一切の衆生、一切の草木、有情無情をして、悉く皆潤を蒙つて、百川衆流、卻つて大海に入つて、合して一體と爲さしむ。衆生本性の般若の智も、亦復是の如し。善知識、小根の人、此頓教を聞いては、猶草木の根性小なるもの如し。若し大雨を被れば、悉く皆自ら倒れて、增長すること能はず。小根の人も亦復是の如し、元より般若の智あること、大智の人と更に差別なし。何に因つてか法を聞いて、自ら開悟せざる、邪見の障重く、煩惱の根深きに緣つてなり。猶大雲の目を覆蓋するが如し、風吹くことを得ざれば、日光現ぜず。般若の智も亦大小なけれども、一切衆生、自心の迷悟同じからざるが爲なり。迷心は外に見て修行し、佛を覓めて未だ自性を悟らず、即ち是れ小根、若し頓教を聞悟すれば、外修を執する能はず、但自心に於て常に正見を起せば、煩惱塵勞、常に染むること能はず、即ち是れ見性す。善知識、内外住せざれば、去來自由なり、能く執心を除けば、通達無礙

【一切萬法】若し衆生なくんば萬法有ならず。

【悟らざれば】以下は生佛差別なけれども、ただ迷悟に因りて不同あることを述ぶ。

【淨名經に云云】次に維摩經の弟子品を引いて、識心即ち見性なることを明す。

【我忍和尙の處云】以下は大師自ら頓教得法の因を述べて他人を勸化す。

【正路】見性の義即ち眞正の要路。
【若し一向】一向に執して解脫を他に求むるは錯り甚だし。
【若し正眞般若】

なり、能く此の業を修すれば、一般若經と本差別なし。善知識、一切の修多羅、及び諸の文字、大小二乘、十二部經は、皆人に因つて置く、智慧の性に因つて、方に能く建立す。若し世人なくんば、一切の萬法、本自ら有ならず、故に知んぬ萬法は、本人に自つて興ることを。一切の經書、人に因つて有と説くことは、其人中に愚あり智あるに縁つてなり。愚をば小人と爲し、智をば大人と爲す。愚者は智人に問ひ、智者は愚人の與に説法す、愚人忽然として悟解し、心開けば即ち智人と別なることなし。善知識、悟らざれば即ち佛是れ衆生、一念悟るときは、衆生はれ佛、故に知んぬ萬法は盡く自心に在ることを。何ぞ自心の中より、頓に眞如の本性を見ざる。『菩薩戒經』に云はく、「我本性元自ら清淨なり」と。若し自心を識れば、見性して皆佛道を成す。『淨名經』に云はく、「即時に豁然として、還つて本心を得」と。善知識、我忍和尙の處に於て、一たび聞いて言下に便ち悟つて、頓に眞如の本性を見る。是を以て此教法を將て流行して、學道の者をして、頓に菩提を悟つて、各自に心を觀じて、自ら本性を見しむ。若し自ら悟らざれば、須らく大善知識を覓むべし。最上乘の法を解するものは、直に正路を示す、是れ善知識は大因縁あり。謂ゆる化導して見性を得しむ。一切の善法は、善知識の能く發起するに因るが故に、三世の諸佛、十二部經は、人の性中に在つて本自ら具有す。自ら悟ること能はずんば、須く善知識の指示を求めて、方に見るべし、若し自ら悟るものは外に求むることを假らされ、若し一向に執して他の善知識に須つて、解脫を望み得んと謂ふものには、是處あること

般若の觀照は正眞の善知識なり。

【智慧の觀照】重ねて般若三昧は無念なることを得ず

【何をか無念云々】般若の觀照純一なれば、三空圓照して、念に念相なし。

【用即ち云々】無念の心なり、別偏法界、了了分明、一即一切、一切即一、法來自由。

【百物思はず】錯解を示す、無念と云ふの法名に縛せられたる者。

【無念の法を云々】以下三種の功用を説く、三空の功用を待す。

【頓教】無念の法を説く法族。

【同見同行】見性を説く法族。

【發願受持】發願等の法に於て發願せば、佛に事ふると別なることなし

【默傳分付】見性明心。

【佛種性云々】上に謂ゆる損彼の據

なし。何を以ての故に。自信の内に知識あつて自悟す。若し邪迷を起して妄念顛倒して、善知識を外にせば、教授ありといへども救ふこと得べからず。若し正眞般若の觀照を起さば、一利那の間に妄念俱に滅せん、若し自性を識らば、一悟に即ち佛地に至らん。善知識、智慧の觀照、内外明徹にして、自の本心を識る、若し本心を識らば、即ち本より解脫す、若し解脫を得れば、即ち是れ般若三昧、即ち是れ無念なり。何をか無念と名く、若し一切の法を見て、心染著せざる、是を無念と爲す、用即ち一切處に徧くして、亦一切處に著せず。但本心を淨らすれば、六識をして六門より出さしむれども、六塵の中に於て染なく雜なく、來去自由に於て、通用滯り無し。即ち是れ般若三昧、自在解脫なるを、無念の行と名く。若し百物思はずして、當に念をして絶せしむべしとならば、即ち是れ法縛、即ち邊見と名く。善知識、無念の法を悟るものは、萬法盡く通じ、無念の法を悟るものは、諸佛の境界を見、無念の法を悟るものは、佛の地位に至る、善知識、後代、吾法を得るものは、此頓教の法門を將て、同見同行に於て、發願受持せよ。佛に事ふるが如くなるが故に、身を終るまで不退なるものは、定んで聖位に入らん。然も須らく從上以來、默傳の分付を傳授して、其正法を匿すこと得ざるべし。若し同見同行にあらすして、別法の中に在るものは、彼前人を損し、究竟して益なけん。恐くは愚人、解せずして此法門を誘せば、百劫千生、佛種性を斷ぜん。善知識、吾に一の無相の頌あり、各須らく誦取すべし。在家出家、但此に依つて修せよ、若し自修せずんば、惟吾言を記するも、亦益あることなけん。吾頌を聽け。

證、總の諸語なり

【無相】眞性は一切の相に於て一切の相を離る、即ち是れ無相なり。此

頌は分つて三節と爲す、第一節は總じて見性の大意を説く。

【説通及心通】能く佛説に通じて衆生の爲に説く。

【法即無漸】法はただ是れ一法なれば、頓教漸教とはなきなり。

【覺即離萬教】萬教とは見性の説は自性の一理に歸す

暗宅は衆生の心身慧日は諸の暗を破つて日の天に中するが如し。

【邪來煩惱至】邪念と正念と無餘は不生滅の地に達するなり。

【菩提本自性】菩提とは性淨本有の菩提、修すべき相にも非ず、作すべき相にも非ず、淨

證、總の諸語なり

曰はく、

説通及心通

唯傳不見性法

法即無二頓漸

只此見性門

説即雖千萬般

煩惱暗宅中

邪來煩惱至

邪正俱不用

菩提本自性

淨心在二妄中

世人若修道

常自見己過

色類自有道

離道別覺道

波波度二一生

欲得見二眞道

如三日處二虛空

出世破二邪宗

迷悟有二遲疾

愚人不可悉

合理還歸一

常須生二慧口

正來煩惱除

清淨至二無餘

起心即是妄

但正無二三障

一切盡不妨

與道即相當

各不相妨

終身不見道

到頭還自愧

行正即是道

行正即是道

心とは本淨の明心は別處に非ず、ただ衆妄心の中に在り、ただ正とは正心障惑を離る。

【世人若修道】これより第二節、初學に約して眞修を示す、不妨とは本具の淨心、已過とは自己の過愆を顯みよ、又道とは即ち見性の法、一切とは僧俗男女等。

【色類自有道】色類は一切の生類、各自に大道を具す、各とは本具の大道、妨もなく亦惱もなし、別覺とは外に向つて心求生む、底、又一切衆生の有情非情、自然の道あり、この道とは所作をさす。

【波波變一生】波波は縁にひかれて急がはしきなり、行正とは見性の行

【自若無道心】眞實見性に志すを道心、道心は眼なり、【若見他人非】見

自若無道心

若眞修道入

若見他人非

他非我不非

但自卻非心

憎愛不關心

欲擬化他人

勿令彼有疑

佛法在世間

離世覓菩提

正見名出世

邪正盡打卻

此頌是頓教

迷開經二累劫

開行不見道

不見世間過

自非卻是左

我非自有過

打除煩惱破

長伸兩脚臥

自須有方便

即是自性現

不離世間覺

恰如求兔角

邪見是世間

菩提性宛然

亦名大法船

悟則利那開

師復曰はく、「今大梵寺に於て、此頓教を説く、普く願くは法界の衆生、言下に見性成佛せんことを。」時に韋使君と官僚道俗と、師の所説を聞いて、省悟せずといふことなし。一時に作禮して、皆善哉と歎す。何ぞ期せん嶺南に佛の出世あらんとは。

とは他の非を見る
即ち自非なり、過
は愆たり。

【但自却非心】非
心は自非、長仲と
は無礙の道人。

【欲變化他人】第
二節は化他人に約し
て妙理を示す、欲

擬とは利濟を擬す
方丈とは隨宜接引
有疑とは學人の疑
問を打破せよ。

【佛法在世間】佛
法とは直指の大道
恰如とは世を離れ
て菩提を求むること
と是の處なしと。

又世間の性即ち世
間、佛法の相即ち世
間。

【正見名出世】宛
然とは性自ら顯露す
又出世は世間を出
離するに非ず、

即ち無相にして自
性を見る、此正見
を出世と名く。宛
然は現前なり。

【此頌是頓教】總
説に頓映す、此宗
は頓漸を離れたる
を假に頓教と名く

疑問第三

一日韋刺史、師の爲に大會齋を設く。齋訖つて刺史、師を請じて升座せしむ。宮僚士庶
と同じく肅容再拜して、問うて曰はく、「弟子、和尚の説法を聞く、實に不可思議なり、今
少し疑あり、願くは大慈悲、特に爲に解説したまへ。」師曰はく、「疑あらば即ち問へ、
吾當に爲に説くべし。」韋公曰はく、「和尚の所説は、是れ達磨大師の宗旨にあらざるべけん
や。」師曰はく、「是。」公曰はく、「弟子聞く、達磨初梁の武帝を化す、帝問うて云はく、「朕
一生、寺を造り僧を度し、布施し設齋す、何の功德かある。」達磨言はく、「實に功德なし」
と。弟子未だ此理に達せず、願くは和尚爲に説きたまへ。」師曰はく、「實に功德なし、先聖
の言を疑ふこと勿れ。武帝心邪にして、正法を知らず寺を造り僧を度し、布施し設齋する
を、名けて福を求むと然す。福を將て便ち功德と爲すべからず、功德は法身の中に在り、
修福にあらず。」と。師又曰はく、「見性は是れ功、平等は是れ徳、念念滞りなく、常に本
性眞實の妙用を見る、名けて功德と爲す。内心謙下する是れ功、外禮を行ずる是れ徳、自
性萬法を建立する是れ功、心體念を離る是れ徳、自性を離れざる是れ功、應用染すること
なき是れ徳。若し功德法身を覚めば、但此に依つて作せ、是れ眞の功德なり。若し功德を
修するの人は、心即ち輕んぜず、常に普敬を行ふ。心常に人を輕んじて、吾我斷せざれ
ば、即ち自らの功なし、自性虚妄にして不實なれば、即ち自らの徳なし。吾我自ら大にし

亦是れ生死の苦海を度する大船なり
 【疑問第三】疑と云ふは十煩惱の一
 【大會齋】無造の大會議なり
 【章公曰】次に達磨のことを問はんとてなり

【弟子問】未達は素意に違するが故に、此問は華公が齋を設け、及び大師が寶刹寺を再興し給ふに便りて此疑問をなすか
 【師又曰】是より下、實く功德の義を説く、功は因にして徳は果なり
 【内心懺下】是は未だ見性せざれども見性に志す時の功德なり、懺と恭敬とを説く

【自性萬法を云云】建立とは萬法は性中に在り、心體とは、本覺の心性なり、念は妄念、染は染汚の心
 【若し功德云云】此は上の五品の功

て、常に一切を輕んずるが爲の故に。善知識、念念無間是れ功、心行平直是れ徳、自ら性を修する是れ功、自ら身を修する是れ徳なり、善知識、功德は須らく自性の内に見るべし、是れ布施供養の求むる所にあらず。是を以て、福德と功德と別なり、武帝眞理を識らず、我祖師過あるに非ず。刺史又問うてはく、「弟子常に僧俗、阿闍梨を念じて、西方に生ぜんことを願ふを見る。請ふ和尚説きたまへ、彼に生ずることを得んや否や。願くは爲に疑を破したまへ。」師言はく、「使君善く聽け。慧能與に説かん。世尊、舍衛城中に在して、西方の引化を説きたまふ、經文に分明なり、「此を去ること遠からず」と。若し相説を論ぜば、里數十萬八千あり、即ち身中に十惡八邪あれば、便ち是れ遠しと説きたまふ。遠しと説くは其下風の爲なり、近しと説くは其上風の爲なり。人に兩願されども法に兩般なし。迷悟殊なることあるは見に遍疾あればなり。迷人は佛を念じて、彼に生ぜんことを求む、悟人は自ら其心を淨くす、所以に佛言はく、「其心淨きに隨つて、即ち佛土淨し」と。使君、東方の人、但心淨ければ即ち罪なし、西方の人と雖も、心淨からざれば亦徳あらん。東方の人罪を造り、佛を念じて西方に生れんことを求めば、西方の人罪を造り、佛を念じて何れの國にか生れんことを求めん。凡愚は自性を了せざれば、身中の淨土なることを識らずしに東を願ひ、西を願ふ、悟人は在處一般なり、所以に佛言はく、「所住の處に隨つて恆に安樂なり」と。使君心地に、但不善なければ、西方、此を去ること遙かならず、若し不善の心を懷かば、念佛の往生到ること難し。今善知識に勸む、先十惡を除

徳、功德の義を結す、功德法身を覓むといふは誓願して見性に志す。

【心常に人云云】

吾我の念なり、自
主宰の念なり、自
大は彼我不平の念
纏せざるが故に、
虚妄とは諸神を認
めて見性したる等
と思へるをいふ。

【念念無間】無間
は間斷なし、平直
は平等正直なり。

【功德は云云】自
性、法身の中に
あり、不足とは修
福に在らずとなり。

【無功德ノ語に過ぐ
るなし】
【攝史又問うて曰
見性せずとも念佛
さすれば佛に成
るべきかと疑ふ。

【引化】引接化度
言語遊斷し、心行
所滅して、見性成
佛のみを信じて見
性は信ぜざるもの
は決定小根小智。

性、法身の中にあり、不足とは修福に在らずとなり。

け、即ち十萬を行かん。後に八邪を除け、乃し八千を過ぎん。念念見性して常に平直を行
ぜば、到ること彈指の如くにして、便ち彌陀を觀ん。使君、但十善を行せよ、何ぞ煩らく
更に往生を願ふべけん。十惡の心を斷せずんば、何れの佛が即ち來迎して請せんや。若し
無生の頓法を悟らば、西方を見ること、只刹那に在らん。悟らずして佛を念じ生を求めば
路遙にして如何ぞ遠ることを得ん。慧能諸人の與に、西方を刹那の間に移して、目前に便
ち見しめん。各見んと願ふや否や。衆皆頭禮して云はく、「若し此處に見ば、何ぞ煩らく
更に往生を願ふべき。願くは和尚慈悲、便ち西方を現じて、普く見ることを得しめたまへ。」

師の言はく、「大衆、世人の自らの色身是れ城、眼耳鼻舌は是れ門、外に五門あり、内に意
門あり、心は是れ地、性は是れ王、王、心地の上に居す、性在れば王在り、性去れば王な
し、性在れば身心存し、性去れば身心壞す。佛は性中に向つて作る。外に向つて求むること
と莫れ。自性迷へば即ち是れ衆生、自性覺すれば即ち是れ佛、慈悲は即ち是れ觀音、喜捨
を名けて勢至と爲す。能淨は即ち釋迦、平直は即ち彌陀、人我は是れ須彌、邪心は是れ海
水、煩惱は是れ波浪、毒害は是れ惡龍、虚妄は是れ鬼神、摩勞は是れ魚鱉、貪瞋、是れ地
獄、愚癡は是れ畜生、善知識、常に十善を行せば、天堂便ち至り。人我を除けば須彌倒る、
邪心を去れば海水竭く、煩惱なければ波浪滅す、毒害忘すれば魚龍絶す、自の心地上の覺
性の如來、大光明を放ち、外六門を照し、清淨にして能く六欲の諸天を破す。自性内
に照せば、三毒即ち除く、地獄等の罪一時に消滅す。内外明徹なれば、西方に異らず。此

に照せば、三毒即ち除く、地獄等の罪一時に消滅す。内外明徹なれば、西方に異らず。此

に照せば、三毒即ち除く、地獄等の罪一時に消滅す。内外明徹なれば、西方に異らず。此

【行直何用修禪】禪は本寂智開後の爲なり、行若し正を習ふに勞せん。【思則親善】恩義讓忍、此四物最も在家當務の急たり是れ則ち修行。

【若無鑽木出火】定は自性開養なり此二句は直に見性の要を顯す。

【苦口的良藥】この四句は見性に志しても、未だ現前せざるときは、安心を免れず、故に金言耳に逆ひ、善事は作し難し。

【日用常行禪益】禪益とは博愛を以て念と爲す。

【菩提只向心覓】この二句は諸佛の大道は、自心に向つて如實に知るなり、外に玄を求むべからず。

【聽說依此修行】これは六祖の今の所説を拜讀してなり、この二句にて

師復日はく、「善知識、總て須らく獨に依つて修行して、自性を見取し、直に佛道を成じて、法相待せず、衆人且く散せよ、吾曹溪に歸らん。衆若し疑あらば、卻り來つて相問へ。」時に刺史官僚、在會の善男信女、各開悟することを得て、信受し奉行す。

定慧第四

師、衆に示して云はく、「善知識、我此法門は、定慧を以て本と爲す。大衆迷うて定慧別なりと言ふこと勿れ、定慧一體にして是れ二にあらす。定は是れ慧の體、慧は是れ定の用、慧に即するの時定慧に在り、定に即するの時慧定に在り。若し此義を識らば、即ち是れ定慧等しく學するなり。諸の學道の人、先定あつて慧を發し、先慧あつて定を發す。各別なりと言ふこと莫れ。此見を作すものは、法に二相あり、口に善語を説いて、心中不善なれば、空しく定慧あつて、定慧等しからず。若し心口俱に善に、内外一種なれば、定慧即ち等し。自悟の修行は、諍に在らず、若し先後を諍はば、即ち迷人に同じ。勝負を斷ぜずんば、卻つて我法を増して、四相を離れず。善知識、定慧は猶如何が等しき。猶し燈光の如し、燈あれば即ち光あり、燈なければ即ち暗し。燈は是れ光の體、光は是れ燈の用なり、名二ありと雖も、體本同一なり。此定慧の法も、亦復是の如し。」師、衆に示して云はく、「善知識、一行三昧といふは、一切處に於て、行住坐臥、常に一の直心を行ずる是なり。『淨名經』に云ふが如き、「直心は是れ道場、直心は是れ淨土」と。

總じて結す。

【定慧第四】禪定智慧なり、六度の二を擧げて自餘を攝す。

【師衆に示して云】法門とは眞性の法門なり、此第一節は、定慧一體なることを説く。

【先定あつて云云】此は錯解を徴す、定より慧を生ずと云ひ、慧より定を生ずと云ふ。

【迷人は云ふ】此は錯解を示す、法相は諸法の相貌坐不動とは元坐觀禪。

【道は須らく云云】言述に沈むこと勿れ、轉路を缺くこと勿れ、これ通流。

【師衆に示して曰はく】これより第三節なり、一行三昧の直心、即ち無念なることを説く。

【無相といふは云云】これは如上の三法を釋す、無相と云へばとて、一

心に詭曲を行じて、口に但直きを説き、口に一行三昧を説いて、直心を行せざることを莫れ。但直心を行ぜば、一切の法に於て、執著あること勿し。迷人は法相に著して、一行三昧を執す、直に云ふに坐して動ぜず、妄に心を起さざる、即ち是れ一行三昧なり」と。此解を作す者は、即ち無情に同じ、却つて是れ障道の因縁なり。善知識、道は須らく通流すべし、何を以てか却つて滞る。心、法に住せざれば道即ち通流す。心若し法に住すれば、名けて自縛と爲す。若し坐して動ぜざる是なりと言はば、只舍利弗の林中に宴坐して、却つて維摩詰に訶せらるるが如し。善知識、又人あり、坐を教へ心を見じ、靜を觀じて、動かす起さず、此に従つて功を置かしむ。迷人は會せずして、即ち執して顛を成す、此の如きもの衆し。是の如きは相の教なり、故に知んぬ大いに錯ることを。

師、衆に示して云はく、「善知識、本來正教に頓漸あることなし、人性に自ら利鈍あり。迷人は漸に契ひ、悟人は頓に修す。自ら本心を識り、自ら本性を見ることは、即ち差別なし、所以に頓漸の假名を立す。善知識、我此法門は、從上以來、先づ無念を立てて宗とし、無相を體となし、無住を本と爲す。無相といふは、相に於て相を離る、無念といふは、念に於て念なし、無住といふは、人の本性なり。世間の善惡好醜乃至冤と親と、言語觸刺、欺争の時に於て、並に將て空と爲して、醜害を思はず、念念の中、前境を思はず、若くは前念今念後念、念念相續して不斷なるを、名けて繫縛と爲す。諸法の上に於て、念念住せざる、即ち無縛なり、此は無住を以て本と爲す。善知識、外一切の相を離れたるを、名け

切の相を斷滅し無念と云へばとて草木瓦石にはあらずを謂ふにはあらず【無住といふは云云】前に三の理致を説く、是の如く無住に在るべきと思つても成りがたきは何故ぞ、工夫して看よ。

【外離一切の相】一切の相に於て自性を見る故に、外一切の相を離ると云ふ。これは再び無相を釋す。

【百物云云】死灰土木の如し、これは無念の錯を示す。

【法見】無念等の【不見】無念等の法。

【云何が無云云】無念の眞理を予細に釋せんが爲に、重ねて言を立つ。【只口に見性云云】邪師は自性に迷ひ見性の名ばかりを假つて人に示す。【自性本一法】自性本來無所得なる

て無相と爲す、能く相を離るれば、即ち法體清淨なり、此は是れ無相を以て體と爲す。善知識、諸の境上に於て、心染まざるを無念と曰ふ、自らの念上に於て、常に諸の境を離るれば、境上に於て心を生ぜず。若し只百物思はず、念盡く除却せん。一念の絶する即ち死なり、別處に生を受けん、是を大いなる錯と爲す。學道の者之を思へば、若し法意を識らずして、自ら錯ることは猶可なり、更に他人に自の迷を勸めて見しめざるはまた甚き事なり。所以に無念を立てて宗と爲す。善知識、云何が無念を立てて宗と爲す、只口に見性を説くに縁つて、迷人は境上に於て念あつて、念上に便ち邪見を起せば、一切の塵勞妄想は、此よりして生ず。自性、本一法の得べきなし、若し所得ありて、妄に禍福を説かば、即ち是れ塵勞邪見なり。故に此法門は、無念を立てて宗と爲す。善知識、無とは何事をか無す、念とは何物をか念す、無といふは二相なく、諸の塵勞の心なし。念といふは、眞如の本性を念す、眞如は即ち是れ念の體、念は即ち是れ眞如の用、眞如の自性を起すは、眼耳鼻舌の能念に非ず、眞如性あり、所以に念を起す。眞如若し無ならば、眼耳鼻舌、當時に即ち壞せん。善知識、眞如の自性を起すときは、六根見聞覺知ありと雖も、萬境に染まらずして、而も眞性常に自在なり。故に經に云はく、「能く善く諸法の相を分別すれども、第一義に於て而も動ぜず」と。」

坐禪第五

【此法門】自性頓
 教の法門なれば、
 有所得の心なきを
 假に無念と名く。
 【六根具聞】塵無
 所住而生其心と云
 ふを以て此義を解
 すべし。

【教】經云云の卷の
 一傳品に出づ、
 經を引いて聽て
 一箇の義を結す
 【坐禪第五】結關
 臥坐すを坐禪の
 相とす。

【若し心に著す云
 云】坐禪は自心を
 修せんが爲と云は
 ば、何者か是れ心、
 即ち今自心と思へ
 るは虚妄の物なり
 【若し淨に著す云
 云】坐禪は自性を
 淨めんが爲と云は
 ば、自性本來清淨
 なり、何ぞ坐禪に
 依つて清めんや
 【心を起し淨に著
 す云云】自性清淨
 なりと思へる心を
 實と著すれば、淨

師、衆に示して云はく、「此門の坐禪は、元より心に著せず、亦淨に著せず、亦是れ不動
 にあらず。若し心に著すと云はば、心は元是れ妄なり、心は如幻なりと知るが故に、著す
 る所なし。若し淨に著すと云はば、人の性本淨し、妄念に由るが故に、眞如を蓋覆す。但
 妄想なければ、性自ら清淨なり。心を起し淨に著すれば、却つて淨妄を生ず。妄に處
 所なし、著するものは是れ妄、淨に影相なし、却つて淨相を立てて、是を工夫と言ふ。此見
 を作すものは、自の本性を障へて、却つて淨に縛せらる。善知識、若し不動を修せば、但
 一切の人を見ると、人の是非善惡過患を見ざれ、即ち是れ自性の不動なり。善知識、迷
 人は身動せずといへども、口を聞けば便ち他人の是非長短好惡を説いて、道と違背す。若
 し心に著し淨に著せば、即ち道を障ふるなり。」

師、衆に示して云はく、「善知識、何をか坐禪と名く。此法門の中には、障なく礙なし。
 外一切善惡の境界に於て心念起らざるを名けて坐と爲す、内自性を見て、動せざるを名け
 て禪と爲す。善知識、何をか禪定と名く。外相を離るるを禪と爲し、内亂れざるを定と爲
 す。外若し相に著すれば、内心即ち亂る、外若し相を離るれば、心即ち亂れず、本性自
 ら淨く自ら定まる。只境を見境を思ふが爲に即ち亂る。若し諸境を見て、心亂れざるも
 のは、是れ眞定なり。善知識、外相を離るれば即ち禪、内亂れざる即ち定、外禪にして内
 定ある、是を禪定と爲す。善薩戒經に云はく、「我本性元自清淨なり」と。善知識、念
 念の中に於て、自ら本性清淨を見て、自ら修し自ら行じ、自ら佛道を成せよ。」

懺悔 第六

【淨安を生ずと云ふ】
【迷人は身動云云】

右の三段を結す、坐禪すと云へども一切の相を見ずとも一切の相を見るもきは菩提の自性に背く、若し相を見ずんば何ぞ口を開いて是非を説かん

【外相を離云云】
眞定現前すれば内外主客の相なくして而も歴然たるを禪の宗旨とす。

【戒相に云】
梵網經心地品の文なり無相無我なる自性清淨を禪の宗旨とする證文なり。

【念念の中】
經文を釋して一篇の義を結ぶ。

【懺悔第六】
此篇に五重あり、一には五分法身香、二には無相懺悔、三には四弘誓願、四には歸戒、五には一體三身佛なり、此五重の本意は全く受戒にあり。

【懺悔第六】
此篇に五重あり、一には五分法身香、二には無相懺悔、三には四弘誓願、四には歸戒、五には一體三身佛なり、此五重の本意は全く受戒にあり。

時に大師、廣詔、洎び四方の士庶、山中に駢集し、聽法するを見て、是に於て升座す。衆に告げて曰はく、『來れ諸の善知識、此性は須らく自性の中より起るべし。一切時に於て、念念自ら其心を淨うして、自ら修し自ら行じて、自己の法身を見よ。自心の佛を見て、自ら度し自ら戒め、始めて得てん。此に到ることを假らじ、既に遠きより來つて此に一會す、皆共に緣あり。今各各胡跪すべし、先爲に自性の五分法身香を傳へ、次に無相の懺悔を授けん。』衆胡跪す。師の曰はく、『一には戒香、即ち自心の中に、非なく惡なく、嫉妬なく、貪瞋なく、劫害なきを、戒香と名く。二には定香、即ち諸の善惡の境相を觀て、自心亂れざるを、定香と名く。三には慧香、自心無礙にして、常に智慧を以て、自性を觀照し、諸惡を造らず、衆善を修すと雖も、心執著せず、上を敬ひ下を念ひ、孤貧を矜み恤むを、慧香と名く。四には解脫香、即ち自心纏緣する所なく、善を思はず惡を思はず、自在無礙なるを、解脫香と名く。五には解脫知見香、自心既に善惡に攀緣する所なし、空に沈み、寂を守るべからず、即ち須らく廣學多聞なるべし。自の木心を識り、諸佛の理に達し、光を和げ、物を接して、我無く人無く、直に菩提に至つて、眞性易らざるを、解脫知見香と名く。善知識、此香は各自自ら内に薰ず、外に向つて竟むること莫れ。今汝等が與に、無相の懺悔を授けて、三世の罪を滅し、三業清淨を得しめん。善知識、各我語に隨へ

【時に大羅云云】
山中は雙峯山を指す。駢集は駢雲集、二馬駕を並するを駢といふ。

【自心の佛云云】
到此とは六祖の處になり、自度自戒の故に何ぞ師の力の假らん。

【戒香】
香の戒性は法界平等なるを以て自他の相なし。

【定香】
香の定性は寂然不動にして萬境を感現す。

【持香】
香の慧性は性相下にして觀照無礙なり。

【四前脫香】
香の解脱性は從來羼縁の繋礙なし。

【解脫知見香】
香の解脫知見性は、了了として常に知照昭として味まさす。

【此香は各自】
前を結し後を起す。

【弟子等云云】
第一に未起種子の惡を懺す。

て一時に道へ、弟子等、從前の念、今念及び後念、念念愚迷に染せられずして、從前所有の惡業愚迷等の罪、悉く皆懺悔す、願くは一時に銷滅して、永く復起さざらんことを。弟子等、從前の念、今念及び後念、念念愚迷に染せられずして、從前所有の惡業愚迷等の罪、悉く皆懺悔す、願くは一時に消滅して、永く復起さざらんことを。弟子等、從前の念、今念及び後念、念念愚迷に染せられずして、從前所有の惡業愚迷等の罪、悉く皆懺悔す、願くは一時に消滅して、永く復起さざらんことを。善知識、已上是を無相の懺悔と爲す。云何が懺と名け、云何が悔と名くる。懺といふは其前念を懺す、從前所有の惡業愚迷、憍誑嫉妬等の罪、悉く皆盡く懺して、永く復起さざる、是を名けて懺と爲す。悔といふは其後過を悔す、今より以後、所有の惡業愚迷、憍誑嫉妬等の罪、今已に覺悟して、悉く皆永く斷じて、更に復作らざる、是を悔と爲す、故に懺悔と稱す。凡夫愚迷にして、只其前念を懺することを知つて、其後過を悔ゆることを知らず、悔せざるを以ての故に、前念滅せず、後過又生ず、前念既に滅せずして、後過、復又生せば、何ぞ懺悔と名けん。善知識、既に懺悔し已る、善知識の與に、四弘誓願を發せしめん、各須らく心を用て正に聽くべし。自心の衆生、無邊なれども度せんと誓願す、自心の煩惱、無邊なれども斷せんと誓願す、自性の法門、無盡なれども學せんと誓願す、自性の無上、佛道成ぜんと誓願す。善知識、大家豈道はずや、衆生無邊誓願度と、憍麼に道ふ、且是れ慧能が度にあらず。善知識、心中の衆生とは、謂ゆる邪迷の心、誑妄の心、不善の心、嫉妬の心、惡

二分別相對の現惡を憺す。

【弟子等云云】第三に隨流不返の偏執惡を憺す。

【已上見を無相】前の結語なり。

【何が憺と云云】微して憺悔の義を釋す。

【故に懺悔】前を結して後を起すの辭すなり。

【自性の法門】三世の諸佛、初中後の法門は無盡なり

【自性の無上】佛道は言語道斷し、心行所滅す。

【邪來れば云云】邪正、迷悟、愚痴、善惡の四對を擧げて一切を攝す。

【煩惱無邊云云】般若の智とは智の無智なり、虛妄思想の心とはた今心と思へる物なり

【法門無盡云云】見性すれば、能先佛の正法に隨順す

【無上佛道】常に自心を省みて罪惡

毒の心、是の如き等の心は、盡く是れ衆生なり、各須らく自性自度すべし、是を眞度と名く。何をか自性自度と名く、即ち自心の中の邪見煩惱愚癡の衆生をば、正見を將て度す。既に正見あれば、般若の智をして、愚癡迷妄の衆生を打破せしめて各各自度す。邪來れば正度し、迷來れば悟度し、愚來れば智度し、惡來れば善度す。是の如く度するものを名けて眞度と爲す。又煩惱無邊誓願斷とは、自性般若の智を將て、虛妄思想の心を除却する是なり。又法門無盡誓願學とは、須らく自ら見性して、常に正法を行すべし、是を眞學と名く。又無上佛道誓願成とは、既に常に能く心を下して、眞正を行するるとき、迷を離れ覺を離れて、常に般若を生ず、眞を除き妄を除いて、即ち佛性を具る、即ち言下に佛道成す、常に念じて修行する、是れ願力の法なり。善知識、今四弘の願を發したる、更に善知識の與に、無相の三歸依滅を授けん。善知識、覺兩足尊に歸依し、正離欲尊に歸依し、淨衆中尊に歸依す。今日より去つて、覺を稱して師と爲し、更に邪魔外道に歸依せず、自性の三寶を以て、常に自ら證明せよ。善知識に勸めて、自性の三寶に歸依せしむ。佛とは覺なり、法といふは正なり、僧といふは淨なり。自心覺に歸依して、邪迷生ぜず、少欲知足にして、能く財色を離るるを兩足尊と名く。自心正に歸依して、念念邪見なし、邪見なきを以ての故に、即ち人我貢高、貪愛執著なきを、離欲尊と名く。自心淨に歸依して、一切の塵勞、愛欲の境界に、自性皆染著せざるを、衆中尊と名く。若し此行を修せば、是れ自歸依なり。凡夫は會せずして、日より夜に至るまで、三歸滅を受く。若し佛に歸依すと

のものなることを知る。

【常に念じて云云】總べての類の業を結す。

【今四弘の願云云】これは前を結び後を起すの辭なり。

【今既に自悟す云云】自の本心を識り、自の本心を見る、これを内調といふ。

【既に自の三寶に云云】これは三歸戒を受けたる人に非ざれば、三身佛を會することなし。受戒志心に他事なし。

言はば、佛何れの處にか在る、若し佛を見ずんば、何に憑つてか歸する所やらん、言却つて妄と成る。善知識、各自自ら觀察せよ、錯つて心を用ふることに莫れ。經文分明に、自歸依佛と言うて、他佛に歸依すと言はず、自佛に歸せずんば、所依の處なけん。今既に自悟す、各須らく自心の三寶に歸依すべし、内心性を調へ、外他人を敬する、是れ自歸依なり。善知識、既に自の三寶に歸依し竟る、各各志心せよ。吾與に一體三身の自性佛を説いて、汝等をして三身を見て、了然として自ら自性を悟らしめん。總に我に隨つて道へ、自の色身に於て、清淨法身佛に歸依し、自の色身に於て、圓滿報身佛に歸依し、自の色身に於て、千百億化身佛に歸依す。善知識、色身は是れ舍宅、歸すと云ふべからず、向者の三身佛は、自性の中に在り、世人總べて有すれども、自心迷ふが爲に、内性を見ず。外に三身の如來を覓めて、自身の中に三身佛あることを見ず。汝等説を聽け、汝等をして自身の中に於て、自性に三身佛あることを見せしめん。此三身佛は、自性より生ず、外より得るにあらず。何をか清淨法身佛と名く。世人性本清淨にして、萬法は自性より生ず、一切の惡事を思量すれば、即ち惡行を生ず、一切の善事を思量すれば、即ち善行を生ず。是の如きの諸法、自性の中に在ること、天の常に清うして、日月常に明かなれども、浮雲の爲に蓋費せられて、上明かに下暗く、忽ち風吹き雲散するに遇うて、上下俱に明かにして、萬象皆現するが如し。世人性常に浮游すること、彼天雲の如し。善知識、智は日の如く、慧は月の如し、智慧常に明かなれども、外に於て境に著すれば、妄念の浮雲に、自性

【見性の人云云】
法身佛の義。

【自歸依云云】吾人は自慢心、輕人
は人を輕蔑す、慢
他は人を欺瞞す、
貢高は空腹高心。
【向前にじに云云】
自性の一事に妙功
德を具したる故に
前過後報を思量す
ることなく、暮直
に自性を見るべし
【自性一念云云】
重ねて報身の義を
説き、學者の惑な
らん事を欲す。
【法身より思量云
云】總べて三身の
義を結す。
【自性の功德云云】
自歸依の義を結す
【自性の三身を云
云】一篇の結語な
り。

を蓋覆せられて、明朗なることを得ず。若し善知識に遇うて、眞の正法を聞かば、自ら迷
安を除いて、内外明徹にして、自性の中に於て、萬法皆現す、見性の人も、亦復是の如し、
此を清淨法身佛と名く。善知識、自心自性に歸依す、是れ眞佛に歸依するなり。自歸依
といふは、自性の中の不善の心、嫉妬の心、詭曲の心、吾我の心、誑妄の心、輕人の心、
慢他の心、邪見の心、貢高の心、及び一時中の不善の行を除却して、常に自ら己が過を見、
他人の好惡を説かざれ、是れ自歸依なり。常に須らく心を下して普く恭敬を行すべし、即
ち是れ見性なり、通達して更に滯礙なし、是れ自歸依なり。何をか圓滿報身と名く。譬へ
ば一燈の能く千年の闇を除くが如く、一智能く萬年の愚を滅す。向前にじに過ぎたるを思
ふこと莫れ、常に後を思ふことを得べからず。念念開明にして、自ら本性を見よ、善惡殊
なりと雖も、本性無二なり、無二の本性を名けて實性と爲す。實性の中に於て、善惡に染
せざる、此を圓滿報身佛と名く。自性、一念の惡を起せば、萬劫の善因を滅す。自性、一
念の善を起せば、恆沙の惡盡くることを得、直に無上菩提に至つて、念念自ら見て、本念
を失はざるを、名けて報身と爲す。何をか千百億化身と名く。若し萬法を思はざれば、性
本空の如し、一念思量するを、名けて變化と爲す。惡事を思量すれば、化して地獄と爲り、
善事を思量すれば、化して天堂と爲り、毒害は化して龍蛇と爲り、慈悲は化して菩薩と爲
り、智慧は化して上界と爲り、愚癡は化して下方と爲る。自性の變化甚だ多し。迷人は省
覺すること能はず、念念惡を起して、常に惡道を行す。一念の善に廻すれば、智慧即ち生

【迷人修福】 福は

有漏の世福
【只言修福】 福を

廣して修と做すが
如し。
【布施供養】 心中

三惡元來造。
【擬將修福】 この

四句は痴福は三生
の宛とて、見性に

志ささずして修す
る善根は、人天の

福報となる故に。
【忽悟大乘】 この

四句は大乗とは即
相無相不二の妙、

世間の邪行を除き
佛戒の正行を受く

受けて受くるもの
なき故。
【吾祖惟傳】 この

四句は達磨大師、
五祖大師等代代の

す、此を自性化身佛と名く。善知識、法身は本より具せり。念念自性を自ら見れども即ち
 是れ報身佛なり。法身より思量することは、即ち是れ化身佛なり、自性の功德を自悟し自
 修するは、是れ眞の歸依なり。皮肉は是れ色身、色身は是れ宅舎、歸依すと言はず、但自
 性の三身を悟れば、即ち自性の佛を識らん。吾に一の無相の頌あり、若し能く誦持せば、
 言下に汝が積劫の迷罪をして、一時に消滅せしめん。頌に曰はく、
 迷人修福不修道
 布施供養福無邊
 擬將二修福一欲上滅罪
 但向心中除二罪緣
 忽悟大乘一眞懺悔
 學道常於自性一觀
 吾祖惟傳二此頓法
 若欲三當來覓二法身
 努力自見莫二悠悠
 若悟二大乘一得二見性
 師の言はく、『善知識、總に須らく誦取すべし、此に依つて修行せよ、言下に見性せば、
 吾を去ること千里なりと雖も、常に吾邊に在るが如くならん。此に於て、言下に悟らずん

【一衆法を聞いて云云】これはこの篇の流通分なり、歡喜とは發心なり

【機縁第七】機縁とは臨機應縁なり

【備士劉志略】師を深く禮敬するを云ふ。

【魏武侯】三國時代の魏の曹操の玄孫。
【寶林の古寺】南華寺。
【惡黨】明上座等の類。

ば、即ち面を對すれども千里ならん。何ぞ勤めて遠く來る。珍重、好し去れ。一衆法を聞いて、開悟せずといふこと靡し、歡喜奉行す。

機縁第七

師、黃梅より法を得て、回つて韶州の曹侯村に至る、人知るものなし。(他本に云はく「師去りし時、曹侯村に至つて、住ること九月餘」と。然も師自ら言はく、「三十餘月を経ずして便ち黃梅に至る」と。此道を求むること切なり、豈逗留することあらんや。去時に作るものは是に非ず。)備士劉志略といふものあり、禮遇甚だ厚し。志略姑あり、尼と爲る、無盡藏と名く、常に「大涅槃經」を誦す。師暫く聽いて、即ち妙義を知る、遂に爲に解脱す。尼乃ち卷を執つて字を問ふ、師曰はく、「字は即ち識らず、義は即ち請ひ問へ。」尼曰はく、「字すら尚識らず、焉んぞ能く義を會せん。」師曰はく、「諸佛の妙理は、文字に關るに非ず。」尼之を驚異す。過く里中の耆徳に告げて云はく、「此は是れ有道の士なり、宜しく請じて供養すべし。」魏一に晋の武侯の玄孫、曹叔良といふひとあり、居民と共に競ひ來つて瞻禮す。時に寶林の古寺、隋の末より兵火あつて已に廢す、遂に故基に於て、重ねて梵宇を建て、師を延いて之に居らしむ。俄に寶坊と成る。師住すること九月餘日、又惡黨の爲に尋逐せられて、師乃ち前山に遁る。其火を縱つて草木を焼くことを被り、師身を隠して挨して石中に入つて免るることを得たり。石今師の跣坐の膝痕及び衣布の紋あり、因

【懷會止藏】 藏交

【二萬】 懷集縣と

【僧法海】 壇經の

【一切の相を成云】

【一念當頭に一切の相を成し、一念當頭に一切の相を離るる】

【即心名慧】 この

【四句は即心即佛の義を了達せんと欲せば定慧等を修せよ】

【悟此法門】 人人

【即心元是佛】 屈

【我知定慧】 定慧

【佛法是】 洪州豊

【法華】 平常法華

【法華】 平常法華

【法華】 平常法華

【法華】 平常法華

【法華】 平常法華

【法華】 平常法華

【法華】 平常法華

【法華】 平常法華

【法華】 平常法華

つて遊難石と名く。師五祖の懷會止藏の囑を憶うて、遂に行いて二邑に隱る。

僧法海は韶州曲江の人なり、初め祖師に參じて問うて曰はく、『即心即佛、願くは指諭を垂れたまへ。』師曰はく、『前念生ぜざる即心、後念滅せざる即佛、一切の相を成ずる即心、一切の相を離る即佛。吾若し具に説かば、劫を窮めても盡きじ、吾儕を聽け。』曰はく、

即心名慧

定慧等等

悟此法門

用本無生

即心元是佛

我知定慧

佛法是

法華

法海言下に大悟して、偈を以て頌じて曰はく、

即心元是佛

我知定慧

佛法是

法華

佛法是

法華

法華

法華

法華

師曰はく、『前念生ぜざる即心、後念滅せざる即佛、一切の相を成ずる即心、一切の相を離る即佛。吾若し具に説かば、劫を窮めても盡きじ、吾儕を聽け。』曰はく、

即心名慧

定慧等等

悟此法門

用本無生

即心元是佛

我知定慧

佛法是

法華

法海言下に大悟して、偈を以て頌じて曰はく、

即心元是佛

我知定慧

佛法是

法華

佛法是

法華

法華

法華

法華

法華

句は敬禮は、根本
我慢の轉を折らん
が爲なり。

【有我罪】我心は
諸惡の本なり。

【汝名は何處】直
に自性を問ふなり

【汝今名法達】以
上四句は法達とは

【汝今有緣】以上
四句は宿縁を以て

【汝此經云云】師
に直問せられて情

【師曰はく】法達
の習性に依りて、

【譬・喻品】法華經
の第三。

【一大事】佛の知
見とは見性の義眼

【世人外迷】相に
著し空に著する是

れ何ものぞ。

禮本折二慢幢
有我罪即生

師又曰はく、汝名は何處ぞ、

【汝今名法達】

空誦但循聲

汝今有緣故

但信佛無言

達、偈を聞いて悔謝して曰はく、

を誦すれども、未だ經義を解せず、

中の義理を説きたまへ、師曰はく、

し、汝が心自ら疑ふ。汝此經を念する、

にして、從來但文に依つて誦念す、

頭突不至地
亡功禮無比

勤誦未二休歇

明心號菩薩

吾今爲汝說

蓮華從口發

疑あり、和尙智慧廣大なり、

廣くは略して經

を誦す、汝が心達せず、

法は即ち甚だ達す、

法達即ち高聲に經を念

じて、譬・喻品に至る。師曰はく、

止みね、此經は元來、

因縁出世を以て宗と爲す、

縱ひ多

種の譬・喻を説くとも、

亦此に越ゆることなけん。

何者ぞ因縁なる。經に云はく、

【諸佛世尊

は、唯一大事因縁を以て、

世に出現したまふ」と。

一大事とは、佛の知見なり、

世人外迷

【佛は猶云云】經に所説の開示悟入の四門は覺の一字なり、分つて知見の二字となる。

【汝愼んで云云】前に云ふ世人の内外の著心を踏襲する結語なり。

【佛知見】ただ自心を開く義なりと

【汝須らく念念云云】前の兩條を結す。

【勞勞として云云】法達が誦念を執して功課とするは但だ苦勞したるまでなり。

【但義を解す云云】世人は法に對して云ふ、經の義を解したるものは、誦經はすまじきかと問ふなり。

へば相に著し、内迷へば空に著す。若し能く相に於て相を離れ、空に於て空を離るれば、即ち是れ内外迷はず。若し此法を悟れば、一念に心開く、是を佛知見を開くと爲す。佛は猶覺のごとし、分つて四門と爲す。覺知見を開き、覺知見を示し、覺知見を悟り、覺知見に入ると。若し開示を聞いて、便能く悟入すれば、即ち覺知見は、本來の眞性にして、而も出現することを得。汝愼んで錯つて經の意を解すること勿れ。見よ他の道ふことを、開示悟入は、自ら是れ佛の知見なり、我輩分なしと。若し此解を作さば、乃ち是れ經を謗り佛を毀るなり。彼既に是れ佛なり、已に知見を具す、何ぞ更に開くことを用ひん。汝今當に信すべし、佛知見とは、只汝が自心なり、更に別佛なし。蓋し一切衆生、自ら光明を蔽ひ、塵境に貪愛して外に緣し内に擾れて、甘受して驅馳するが爲に、便ち他の世尊を勞して、三昧より起たしめ、種種苦口に、勸めて寢息せしむ。外に向つて求むること莫れ、佛と無二なり。故に云ふ、佛知見を開くと、吾も亦一切の人に勸む。自の心中に於て常に佛の知見を開け。世人心邪にして、愚迷にして罪を造り、口善に心惡に、貪瞋嫉妬し、詔佞我慢し、人を侵し物を害すれば、自ら衆生の知見を開くなり。若し能く心を正しうして、常に智慧を生じ、自心を觀照して、惡を止め善を行すれば、是れ自ら佛の知見を開くなり。汝須らく念念に佛知見を開くべし、衆生の知見を開くこと勿れ。佛の知見を開く、即ち是れ出世、衆生の知見を開く、即ち是れ世間なり。汝若し但勞勞として念を執して以て功課と爲さば、何ぞ犁牛の尾を愛するに異ならん。達曰はく、若し然らば、但義

を解することを得ば、經を誦するに勞せざらんや。師曰はく、「經に何の過かあらん、豈汝が念ずるを障へんや。只迷悟人に在り、損益已に由るが爲なり。口に誦し心に行ずれば、即ち是れ經を轉ず、口に誦して心に行ぜざれば、即ち是れ經に轉ぜらる。吾偈を聽け。」曰はく、

心迷法華轉

心悟轉二法華

誦經久不明

與義作二讐家

無念念即正

有念念成二邪

有無俱不計

長御二白牛車

【心迷法華轉】明は自己を明めずんばなり、與義とは經義と胡越を隔つなり。
【無念念即】無念にして經を念じ、不計は計較せず。
【達偈を聞いて云】達偈を聞いて云ふは、始めて非をゆるゆゑに、法華に轉ぜらるといふ。
【再び啓して曰はく】法達、大悲心を起して將來の疑謗を救はんが爲に問ふなり。
【經意分明】安心を以て、佛心をうかがへば、佛心もともに輪轉す。
【此理若し】これは凡夫の爲に説く肯信とは信じうけがふなり。

達、偈を聞いて、覺えず悲泣し、言下に大悟して、而も師に告げて曰はく、「法達昔より已來、實に未だ曾て法華を轉ぜず、乃ち法華に轉ぜらる。再び啓して曰はく、「經に云はく、「諸の大聲聞、乃至菩薩、皆思を盡して、共に度量すれども、佛智を測ること能はず」と。今凡夫をして但自心を悟らしむるを、即ち佛の知見と名く。上根に非ざるよりは、未だ疑謗を免れず。又經に三車を説く、羊鹿牛車と白牛の車と、如何が區別せん、願くは和尚、再び開示を垂れたまへ。師曰はく、「經意分明なり、汝自ら迷背せり。諸の三乘の人、佛智を測ること能はざることは、患度量に在り、饒ひ伊思を盡して共に推すとも、轉懸遠を加さん。佛は本凡夫の爲に説く、佛の爲に説かず、此理若し肯信せざるものは、他の席を退くに從す。殊に知らず、白牛車に坐却して、更に門外に於て三車を覓むることを。況

【唯一佛乘】向汝とは衆生并に法達をいふ、下の四義も同じ。
 【汝何ぞ】汝は衆生別して法達を指す。

【經誦三千部】經とは誦經、三千勞して功なし。

【羊鹿牛權】善揚は演說學揚火宅は穢土、即ち一佛乘衆生心中法王坐するを云ふ。

【壽州】淮南なり
 【楞伽】世尊が南海の摩訶耶山の頂の楞伽城中に於て、大惠等の諸菩薩の爲に自覺聖智の境界を説き給ふなり。

【三身】諸佛の三身は本一身なり、教祖の爲の故に、分つて其義を解す。

んや經文に、明かに汝に向つて道ふ、唯一佛乘のみあつて餘乘の若くは二若くは三あることなし。乃至無數の方便、種種の因緣、譬喩言詞の是法は、皆一佛乘の爲の故なり。汝何ぞ三車は是れ假なり、昔時の爲の故に、一乘は是れ實なり。今時の爲の故にといふことを省記ざる。只汝をして假を去つて實に歸せしむ。實に歸しての後は、實も亦名なし。應に知るべし、所有の珍財、盡く汝に屬し、汝が受用に由ることを。更に父の想を作さず、亦子の想を作さず、亦用の想もなき、是を『法華經』を持すと名く。劫より劫に至るまで、手に卷を釋てず、晝より夜に至るまで、念せざる時なし。達、啓發を蒙つて、踴躍歡喜して偈を以て讚して曰はく

經誦三千部
 曹溪一句亡

未明二出世旨
 寧歇累生狂

羊鹿牛權設
 初中後善揚

誰知火宅內
 元是法中王

師曰はく、「汝今より後、方に念經偈と名くべし。達此より玄旨を領して、亦誦經を輕めず。

僧智通は壽州安豐の人なり、初楞伽經を看ること、千餘過約すれども、而も三身四智を會せず、師を禮して其義を解せんことを求む。師曰はく、「三身とは、清淨法身は汝が性なり、圓滿報身は汝が智なり、千百億化身は汝が行なり。若し本性を離れて、別に三身

を説かば、即ち有身無智と名く。若し三身、白性あることなしと悟れば、即ち四智菩提を明む。吾儕を聽け。曰はく、

自性具三身一

發明成四智一

不離見聞緣一

超然登佛地一

吾今爲汝說

諦信永無迷

莫學馳求者

終日說苦提一

通、再び啓して曰はく、「四智の義、得て聞くことを得べしや。師曰はく、「既に三身を會せば、便ち四智を明めん、何ぞ更に問ふや。若し三身を離れて、別に四智を談ぜば、此を

有智無身と名く。即ち此有智、還つて無智と成る。復偈に曰はく、

大圓鏡智性清淨

平等性智心無病

妙觀察智見非功

成所作智同圓鏡

五八六七果因轉

但用二名言無二實性

若於轉處不留情

繁興永處那伽定一

〔如上は識を轉じて智と爲すなり。教中に云はく、「前五識を轉じて、成所作智と爲す、第六識を轉じて、妙觀察智と爲し、第七識を轉じて、平等性智と爲し、第八識を轉じて、大

圓鏡智と爲す。六七は因中に轉じ、五八は果上に轉すといへども、但其名を轉じて、而も

其體を轉ぜず。』と〕

【五八六七】 自心に八識あり、この識、次第に轉現して本性を迷はしむ、生死に浮沈せしむ

【自性具三】 白性とは衆生本有の白性なり。
【吾今爲汝云云】 上の四句を云ふ。
【四智の義】 三身を會すると即ち四智を明めるなり。
【大圓鏡智】 自性本來を喚んで鏡智と爲す。
【平等性智】 本心の私欲なきを喚んで性智と爲す。
【妙觀察智】 見主智と爲す。
【成所作智】 所作にあらざれば方便を成ずることなし

通、頓に性智を悟つて、遂に偈を呈して曰はく、

三身元我體、四智本心明。

身智融無礙、應物任隨形。

起修皆妄動、守住匪眞精。

妙旨因師曉、終亡染汙名。

僞智常は信州貴溪の人なり、髫年にして出家す、志見性を求む。一日參禮す、師問

うて曰はく、「汝何くよりか來る、何事をか求めんと欲する。」曰はく、「學人近々洪州の白峰

山に往いて、大通和尚を禮す、見性成佛の義を示すことを蒙れども、未だ狐疑を決せず。

遠く來つて投禮す、伏して望むらくは和尚慈悲指示したまへ。師曰はく、「彼に何の言句か

ある、汝試に舉せよ看ん。」曰はく、「智常、彼に到つて、凡そ三月を経れども、未だ示誨

を蒙らず、法の爲にすること切なるが故に、一夕獨り丈室に入つて請問す、「何如なるか是

れ某甲が本心本性」と。大通仍ち曰はく、「汝虚空を見るや否や」對へて曰はく、「見る」彼

に曰はく、「汝虚空を見るに、相貌ありや否や」對へて曰はく、「虚空形なし、何の相貌かあ

らん」彼に曰はく、「汝が本性猶し虚空の如し、了に一物の見るべきなし、是を正見と名く、

一物の知るべきなき、是を眞知と名く、青黃長短あることなく、但本源清淨、覺體圓明

なりと見るを即ち見性成佛と名く、亦如來の知見と名く、學人此説を聞くと雖も、猶未

だ決定せず、乞ふ和尚開示したまへ。師曰はく、「彼の師の所説、猶見知を存す、故に汝を

【三身元我體】本

心と自性、身智は

三身四智、應物は

受用障礙なし。

【起修皆妄】起修

とは本有身智、何

ぞ修治に勞せんや

となり。

【髫年】童子重髮

の時分なり。

【彼の師の所説云

云】虚空の如しと

しる者は決定して

虚空に非ず自の非

を知らざる所以な

り。

【不見一法】存す

とは靈龜曳尾なり

【不知法守】守

るとは耳を塞いで

鈴を偷む。

【此之知見聲】錯

認は見知を以て是

と爲す、解方便と

は見性の捷徑を失

せんとなせり。

【汝當一念】自知

非とは見知俱に未

是と知ればなり。

【心意惛然】疑情

頓に亡す。

疑情

して未だ了ぜざらしむ。吾今汝に一偈を示さん。

不見一法一存二無見一
大似三浮雲遮二日面一

不知二一法一守二空知一
還如三太虛生閃電一

此之知見瞥然興
錯認何曾解方便一

汝當二一念佛自知非
自己靈光常顯現一

常、偈を聞き已つて、心意豁然たり。乃ち偈を述して曰はく、

無二端起二知見一
著二相求二菩提一

情存二一念佛一
寧越二昔時迷一

自性覺源體
隨照枉遷流

不入二祖師室一
茫然越二兩頭一

智常一口、師に問うて曰はく、「佛、三乗の法を説き、又最上乘と言ふ、弟子未だ解せず、願くは爲に教授したまへ。」師曰はく、「汝白の本心を觀ぜよ、外の法相に著すること莫れ。法に四乗なし、人の心自ら等差あり、見聞轉誦するは、是れ小乗、法を悟り義を解するは是れ中乘、法に依つて修行するは是れ大乘、萬法盡く通じ、萬法俱に備つて、一切に染まず、諸の法相を離れて、一も所得なきを、最上乘と名く。乘は是れ行の義、口に争ふに在らず、汝須らく自ら修すべし、吾に問ふこと莫れ、一切時中、自性自如なり、常、禮謝し執侍して、師の世を終ふ。」

【無端起知】一物なしと見、物なしと知る。
【情存一念悟】存とは疾を治する藥氣、未だ除かずと【自性覺源體】隨には見知の照に隨ふなり。
【不入祖師室】兩頭とは見と知と。【見聞轉誦】聲聞は佛事を見聞し學問す。
【法を悟り云云】佛法の大意を悟る緣覺乘。
【法に依つて云云】人法無我にして如説に修行する、菩薩乘。
【萬法俱に云云】法に法相なく、得に得相なきは、萬德圓滿なる佛乘。
【乘は是れ行云云】行は修行、自如は常に湛然として當處を離れず。

【請益】 聞きたる上にも。

【諸行は無常】 未だ自性を明めざるを示す。

【色身は無常】 自己の見解。

【何れの身か】 色の二身。

【釋子】 佛子。
【有身の受用】 四大五蘊身上の受用
【汝今當に云ふ】 是れより志道が趣向。

佛志道は廣州南海の人なり、請益して曰はく、「學人出家してより、『涅槃經』を觀ること十載有餘、未だ大意を明めず、願くは和尚誨を垂れたまへ。」師曰はく、「汝何れの處か未だ明めざる。」曰はく、「諸行は無常なり、是れ生滅の法なり、生滅滅し已つて、寂滅を樂と爲すと、此に於て疑惑す。」師曰はく、「汝作麼生か疑ふ。」曰はく、「一切の衆生、皆二身あり、謂ゆる色身法身なり、色身は無常にして、生あり滅あり、法身は有常にして、知なく覺なし。經に云はく、『生滅滅し已つて、寂滅を樂と爲す』といふは、不審し、何れの身か寂滅し、何れの身か樂を受くる、若し色身といはば、色身滅する時、四大分散して、全く然も是れ苦なり、苦は樂と言ふべからず。若し法身の寂滅といふは、即ち草木瓦石に同じ、誰か當に樂を受くべき。又法性は是れ生滅の體にして、五蘊は是れ生滅の用なり、一體五用、生滅是れ常なり。生ずるときは則ち體より用を起し、滅するときは則ち用を攝して體に歸す。若し更生を聽さば、則ち有情の類、不斷不滅なり、若し更生を聽さずんば、則ち永く寂滅に歸して無情の物に同じからん。是の如くならば則ち一切の諸法、涅槃に墜伏せらるることを被つて、尙生ずることを得じ、何の樂といふことか之あらん。師曰はく、『汝は是れ釋子なり、何ぞ外道の斷常の邪見を習うて、而も最上乘の法を議するや。汝が所説に據らば、即ち色身の外に、別に法身あつて、生滅を離れて寂滅を求むるなり。又涅槃の常樂を推して、有身の受用を言ふ、斯れ乃ち生死を執吝し、世樂に耽著す。汝今當に知るべし、佛一切の迷人の五蘊の和合を認めて、自體の相と爲し、一切の法を分別して、外塵

【刹那も云云】涅槃に於て刹那も生を窮むるに生相なく、滅を窮むるに滅相なし。
 【現前の時に當つて云云】受者とは佛を除いての外、不受者とは這箇の眞樂。

【無上人涅槃】無上とは絶言絶慮、圓明とはその體をいふ。
 【凡愚謂之】斷は斷滅。

【請求二乘人】無作は空無相。
 【盡屬情所】所計は物件の各自。

【妄立虛假】本來空寂なるものを妄りに名を付くるなり。
 【惟有過量】通達は眞實に通達す。

【常應諸根】諸根は六根互融なり、六根の用に應ずれども用の想もなく一切の法を分別すれども分別の想なし。

の相を爲して、生を好み死を惡んで、念念遷流し、夢幻虛假なることを知らずして、枉げて輪廻を受け、常樂涅槃を以て、翻つて苦相と爲して、終日馳求するが爲に、佛此を愍みたまふが故に、乃ち涅槃の眞樂を示す。刹那も生相あることなく、刹那も滅相あることなし、更に生滅の滅すべきなし、是れ則ち寂滅現前なり。現前の時に當つて、亦現前の量なき、乃ち謂ゆる常樂なり。此樂受くるものあることなし、亦受けざるものなし、豈一體互用の名あらんや。何に況んや更に涅槃、諸法を禁伏して、永く生ぜざらしむと言はんや。

無上大涅槃

凡愚謂之

請求二乘人

盡屬情所

妄立虛假

惟有過量

以知五蘊

外現二衆

平等如夢

不作涅槃

圓明常寂照

外道執爲斷

日以爲無作

六十一見本

何爲眞實義

通達無二取捨

及以蘊中我

一一音聲相

不起二凡聖見

二邊二際斷

きは自性自受用の
故なり。

【劫火燒海底】三
災壞劫、海水潤竭
須彌崩倒なり。

【眞常寂滅】相如
是とて世界壞すれ
ども伊れ朽ちず。

【吾今強言】如少
分とは此子の相應
ありたり。

【行思禪師】青原
【聖諦】初發心の
時、無威正覺。

【青原山】歸宗寺
【弘濟禪師】唐開
元二十八年十二月
十一日寂す、勅諡。

【懷讓禪師】六祖
に參。
【金州】金州安康
の人。

【嵩山安國師】五
祖弘忍大師の旁出
唐の景龍三年寂す
春秋一百二十八。

【什麼物か恁麼に
來る】本來人人提
掣す。

【説似一物】誰だ
是れ本來の人物の
比倫に堪へたる無
し、似は示の意。

常應諸根用

分三別一切法

劫火燒海底

眞常寂滅樂

吾今強言説

汝勿隨言解

志道、偈を聞いて大悟し、踊躍作禮して退く

行思禪師は、吉州安城の劉氏に生る、曹溪の法席化を盛にすることを聞いて、徑に來つて參禮す。遂に問うて曰はく、「當に何の所務か即ち階級に落ちざるべき。」師曰はく、「汝曾て什麼をか作し來る。」曰はく、「聖諦も亦爲す。」師曰はく、「何の階級にか落ちん。」曰はく、「聖諦すら尙爲さず、何の階級といふことか之あらん。」師深く之を器とす、思をして衆に首たらしむ。一日師謂つて曰はく、「汝當に化を一方に分つて、斷絶せしむることなかるべし。」思既に法を得て、遂に吉州の青原山に回つて、法を弘め化を紹ぐ。(弘濟禪師と謚す。)

懷讓禪師は金州杜氏の子なり、初嵩山の安國師に謁す、安之を曹溪に發して參掣せしむ。讓至つて禮拜す。師曰はく、「甚れの處より來るか來る。」曰はく、「嵩山。」師曰はく、「什麼物か恁麼に來る。」曰はく、「説似一物即不中。」師曰はく、「還つて修證すべきや否や。」曰はく、「修證は即ち無きにはあらず、汚染せば即ち得ず。」師曰はく、「只此不汚染、諸佛の護念する所な

而不起二用想

不起二分別想

風鼓山相擊

涅槃相如是

令汝捨邪見

許汝知少分

許汝知少分

許汝知少分

許汝知少分

許汝知少分

【遷つて修誥すべ
きや云云】自性を
守らざるの義を詰
問す。

【西天の般若多羅】
般若多羅尊者の識
文を以て、懷讓の
門下に馬祖あるべ
きことを諷し給ふ

【馬駒】馬祖道一
禪師の異稱。唐の

【後に南嶽】唐の
玄宗天寶三年八月
十一日に遷化、日
本の聖武天皇天平
十六年に當る。

【永嘉玄覺禪師】
唐の温州龍興寺の
釋玄覺、字は明道、
俗姓は戴氏。

【玄策】策は六祖
に嗣法す、婺州金
華の人なり、

【威音王已前】威
音王佛は經律の法
の初まりをさす、

禪者の常話をなす。
又威音王は如來の
別名、空劫以前、
天地未開以前と同
じ。【仁者我爲に證據
云云】受法者とは

り、汝即ち是の如し、吾も亦是の如し。西天の般若多羅、汝を識す、足下より一馬駒を
出して、天下の人を踏殺せんと。應に汝が心に在るべし、速かに説くことを須ひざれ。』

（一本に西天以下の二十七字なし。）讓、豁然として契會す、遂に左右に執侍すること一十
五載、日に玄奥に臻る。後に南嶽に往いて、大いに禪宗を闡く。（勅して大慧禪師と諡す。）

永嘉の玄覺禪師は、温州戴氏の子なり。少かりしとき經論を習ひ、天台止觀の法門を精
しうす、因つて『維摩經』を看て、心地を發明す。偶師の弟子玄策、相訪うて、其と與に劇

談するに、言を出すこと暗に諸祖に合ふ。策云はく、『仁者得法誰をか師とす。』曰はく、『我
方等の經論を聽いて、各師承あり、後に『維摩經』に於て、佛心宗を悟る、未だ證明するも
のあらず。策云はく、『威音王已前は即ち得てん、威音王已後は無師、自悟は盡く是れ天

然の外道。』曰はく、『願くは仁者、我爲に證據せよ。』策云はく、『我言輕し、曹溪に六祖大師
あり。四方雲のごとくに集る、並に是れ受法の者なり、若し去らば則ち與に偕に行かん。』

覺遂に策と同じく來參す、師を遶ること三匝して、錫を振つて立つ。師曰はく、『夫れ沙門
は、三千の威儀、八萬の細行を具す。大徳何れより來つて、大我慢を生ずるや。覺曰は

く、『生死事大、無常迅速なり。』師曰はく、『何ぞ無生を體取し、無速を了せざるや。』曰はく、
『體即ち無生、了本無速。』師曰はく、『如是如是。玄覺方に威儀を具して禮拜す、須臾に辭

を告ぐ。師曰はく、『返ること太た速かたるや。』曰はく、『本自ら動するに非ず、豈速かなる
ことあらんや。』師曰はく、『誰か動に非ざることを知る。』曰はく、『仁者自ら分別を生ず。』師

法を受くるに堪へたるなり。

【生死事大】大師の挨拶に依りて情素を呈露す、生死無常の義、誠に第一義とも云ふ。

【如是如是】印可【仁者自ら分別を生ず】平等一體。無我の上に自ら分別を生じて二とす本體の二にあるが【無生の意】分別無生の義。

【無生豈意あらんや】却つて師に一拳を加つて。

【分別も亦意に非ず】如上の問答、的的分明、簡後の略なりと。

【善い哉云云】印證事畢る。

【一宿覺】時の人歎美して一宿覺と云ふ、唐の睿宗、無相大師の諡を賜ふ、唐の睿宗先天二年十月十七日寂す、日本の元明天皇和銅六年。

【正愛】神三昧。

曰はく、「汝甚だ無生の意を得たり。」曰はく、「無生豈意あらんや。」師曰はく、「意なくんば誰か當に分別すべき。」曰はく、「分別も亦意に非ず。」師曰はく、「善い哉、少く留つて一宿せよ。」時に一宿覺と謂ふ、後に證道歌を著す、盛に世に行はるる。謚して無相大師と曰ふ、時に稱して眞覺と爲す。

禪者智隍、初五祖に參す、自ら謂へらく、已に正受を得たりと。菴居長坐、積むこと二十年、師の弟子玄策、游方して河朔に至る。隍の名を聞いて、菴に造つて問うて云はく、「汝此に在つて什麼をか作す。」隍曰はく、「定に入る。」策云はく、「汝定に入ると云ふ、有心にして入ると爲るや、無心にして入るとするや。若し無心にして入るとならば、一切の無情、草木瓦石、應合に定を得べし、若し有心にして入るとならば、一切の有情含識の流、亦應に定を得べし。」隍曰はく、「我正に定に入る時に、有無の心あることを見ず。」策云はく、「有無の心あることを見ずんば、即ち是れ常定なり。何ぞ出入あらん、若し出入あらば、即ち大定に非ず。」隍對ふることなし、良久して問うて曰はく、「師誰にか嗣ぐや。」策云はく、「我師は曹溪の六祖。」隍云はく、「六祖何を以てか禪定と爲す。」策云はく、「我師の所説は、妙湛圓寂にして、體用如如なり。五陰本空、六塵有に非ず、不出不入、不定不乱、禪性無住なり。住を離れて禪寂す、禪性無生、生を離れて禪想す、心虚空の如くにして、亦虚空の量なし。」隍是説を聞いて、徑に來つて師に謁す、師問うて云はく、「仁者何くより來る。」隍具に前縁を述ぶ。師云はく、「誠に言ふ所の如し、汝但心虚空の如くにして、空見に著

【游方云云】游方とは河内道、河朔と有るべし。
 【有心にして入る】亦應得とは有無雙べと結す。有心入とは能く要津を把斷する底。
 【我正に定に入る】入るとき有無を見ずんば、出づる時は即ち有無を見るべし。
 【妙湛圓寂】其體湛然、其用圓通、故に妙湛圓寂と云ふ。
 【五法】五蘊。
 【禪性無住】無性は本止住なし。離住は常に住を離れ、離く禪性に住す、離生は常に生を離れて能く禪想生ず。
 【能所】心鏡。
 【如如】湛然不動。
 【一偈問】直指なり、分別して云ふに非ず。
 【我佛法を會せず】我何ぞ佛法を會せん。佛法は無我なるが故に。
 【塑を善くす】土

せずんば、應用無礙、動靜無心、凡聖情忘じ、能所俱に泯して、性相如にして定せざる時なし。一一本に汝但以下の三十五字なし。止云はく、「師其遠く來ることを憫んで遂に開決を垂る。」と。隙是に於て大悟す、二十年の所得の心、都て影響なし。其夜河北の士庶、空中に聲あるを聞くに、云はく、「隱禪師、今日得道せり。」と。隙後に禮辭し、復河北に歸つて、四衆を聞化する。一僧、師に問うて云はく、「黃梅の意旨、甚麼人が得たる。」師云はく、「佛法を會する人得。」僧云はく、「和尚還つて得るや否や。」師云はく、「我佛法を會せず。」師一日所授の衣を濯はんと欲す、而も美泉なし、因つて寺の後五里許に至つて、山林鬱茂し、瑞氣盤旋するを見て、師錫を振つて地に卓つ、泉手に應じて出づ、積んで以て池と爲る。乃ち膝を跪いて衣を石上に洗ふ。忽ち一僧あり、來つて禮拜して云はく、「方辯は是れ西蜀の人、昨に南天竺國に於て達磨大師に見ゆ、方辯に囑したまふ、速かに唐土に往け、吾傳ふる大迦葉の正法眼藏、及び僧伽梨、見に六代に韶州の曹溪に傳ふ、汝去つて瞻禮せよ。」と。方辯遠く來る、願くは我師の傳來の衣鉢を見しめたまへ。師出し示すに及んで、次で問ふ、「上人何の事業をか攻む。」曰はく、「塑を善くす。」師色を正しうして曰はく、「汝試みに塑せよ看ん。」辯措くこと罔し。數日を過ぎて、真相を塑し就す、高さ七寸可り、曲に其妙を盡す。師笑つて曰はく、「汝只塑性を解すれども、佛性を解せず。」師、手を舒べて方辯が頂を摩して曰はく、「永く入天の福田と爲れ。」師仍つて衣を以て之に酬ゆ。辯、衣を取つて分つて三と爲す。一は塑像に披らしめ、一は自ら留む、一は椽を用つて裏

像を造る。
【師笑つて曰】笑
意は朝に妙を得る
【師手を翳べて】
此朝像等有を度せ
んとなり。

【頓漸第八】頓漸
の義は已に前の定
慧第四の中に擧ぐ
るが如し。
【祖師は曹溪】南
宗は頓、北宗は漸
と、世間に取りあ
つかふなり。
【一種】一種子な
り。
【秀之徒】玉泉寺
の徒衆が六祖を護
る。

んで地中に瘞め、誓つて曰はく、「後此衣を得ば、乃ち吾出世住持」と。此に於て重ねて殿
字を建つ、宋の嘉祐八年に、僧惟先といふものあり、殿を修す、地を掘つて衣を得たり、
新なるが如し。像は高泉寺に在り、祈禱すれば便ち應ず。」

僧あり、臥輪禪師の偈を擧して曰はく、

臥輪有二伎倆、能斷二百思想、
對境心不起、菩提日日長

師之を聞いて曰はく、「此偈未だ心地を明めず、若し依つて之を行ぜば、是れ繫縛を加さ

ん。因つて一偈を示して曰はく、

慧能洩二伎倆、不斷二百思想、
對境心數起、菩提作麼長

頓漸第八

時に祖師は曹溪の寶林中居し、神秀大師は荆南の玉泉寺に在り、時に兩宗化を盛んにす、
人皆南能北秀と稱す。故は南北二宗頓漸の分ちあり、而も學者宗趣を知ること莫し。師、
衆に謂つて曰はく、「法は本一宗、人に南北あり、法は即ち一種、見に遲疾あり。何をか頓
漸と名く、法に頓漸なく、人に利鈍あり、故に頓漸と名く。」然るに秀の徒衆、往往に南宗
の祖師を護る。「一字を識らず、何の所長かあらん。」といふ。秀曰はく、「他は無師の智を得

【善師五祖】 秀師も曹溪に到つて親近したく思へども二千里の外に行くことがならぬ。【汝聰明多】 秀師の命なり。【細作】 問者、まはしもの。【何ぞ不是云云】 細作でないといふ言ひわけをしてみよ。【住心】 心を把住して、觀照止靜せしむ。【是れ病にして云云】 禪は住に非ず觀に非ず。【生來坐不臥】 生の時は坐し、死の時は臥す。若し見性することなくんば、五輪一具の臭穢の骨頭をいかやう拘繫したることと功徳を立することあるまじきとなり。課は所課なり、又は自ら坐、死は自ら臥、何ぞ坐臥を以て禪と爲さん坐臥はただ臭骨の

て、深く上乘を悟る、吾如かず。且吾師五祖親しく衣法を傳ふ、豈徒然ならんや。吾恨むらくは遠く去つて親近すること能はずして、虚しく國恩を受くることを。汝等諸人、此に滯ること毋れ、曹溪に往いて參決すべし。一日門人志誠に命じて曰はく、「汝聰明多智なり、吾爲に曹溪に到つて聽法すべし、若し所聞あらば、盡く心に記取して、還つて吾爲に説け。」志誠命を稟けて、曹溪に至つて、衆に隨つて參請して、來處を言はず。時に祖師、衆に告げて曰はく、「今盜法の人ありて、潜に此會に在り。志誠即ち出でて禮拜して、具に其事を陳ぶ。師曰はく、「汝、玉泉より來らば、應に是れ細作なるべし。」對へて曰はく、「不是。」師曰はく、「何ぞ不是なることを得ん。」對へて曰はく、「未説は即ち是、説了は不是。」師曰はく、「汝が師若爲が衆に示す。對へて曰はく、「常に大衆に指誨して、住心觀靜、長坐不臥せしむ。」師曰はく、「住心觀靜は、是れ病にして禪に非ず、長坐して身を拘らしめば、理に於て何の益かあらん、吾偈を聽け。」曰はく、

生來坐不臥 死去臥不坐
一具臭骨頭 何爲立二功課

志誠、再拜して曰はく、「弟子、秀大師の處に在つて、學道九年、契悟することを得ず、今和尚の一たび説きたまふことを聞いて、便ち本心に契ふ。弟子生死事大なり、和尚大慈、更に爲に教示したまへ。」師云はく、「吾聞く、汝が師、學人に戒定慧の法を教示すと、未嘗し、汝が師、戒定慧の行相を説くこと如何、吾與に説け看ん。」誠曰はく、「秀大師説く、諸

上に在つて禪に非ず、何ぞ奥骨の坐臥を以て、修禪の積功律儀を立せん【志誠再拜して曰】志誠言下に非を知る

【戒定慧】 佛法の綱領。 褒美の辭。

【戒定慧云云】 三學は元一種なれども、人に依つて別差あり

【眞の戒定慧】 自性より起る三學。【心地無非】 無とは非ず、本來無なり、非と寂と亂との性、即ち戒定慧なることを顯す

【不増不減】 唯是至剛、至堅、至剛は至剛の、不増不減なり、自性の體なるが如く、無我にして一切の對待を離るるが故に、其用去來自在にして、

惡莫作を名けて戒と爲し、諸善奉行を名けて慧と爲し、自淨其意を名けて定と爲す、彼説此の如し、未審し和尙何の法を以てか人を誨ふ。師曰はく、「吾若し法の人に與ふるありと言はば、即ち汝を誑すと爲す、但且く方に隨つて縛を解す、假に三昧と名く。汝が師の所説の戒定慧の如きんば、實に不可思議なり、吾所見の戒定慧は又別なり。志誠曰はく、「戒定慧は只合に一種なるべし、如何ぞ更に別なる。師曰はく、「汝が師の戒定慧は、大乘の人を接す。吾戒定慧は、最上乘の人を接す。悟解同じからず、見に遲疾あり。汝吾説を聽け、彼と同じきや否や。吾所説の法は、自性を離れず、體を離れて法を説くを、名けて相説と爲す。自性常に迷ふ、須らく知るべし、一切の萬法は、皆自性より起る用なることを。是れ眞の戒定慧の法なり、吾儂を聽け。曰はく、

心地無非 自性戒
心地無亂 自性定
身去身來 本三昧
誠、偈を聞いて悔謝し、乃ち一偈を呈して曰はく、
五蘊幻身 幻何究竟
廻趣眞如 法還淨
師之を然りとす、復誠に語けて曰はく、「汝が師の戒定慧は、小根智の人に勸む、吾戒定慧は、大根智の人に勸む。若し自性を悟れば、亦菩提涅槃を立せず、亦解脫智見を立せず、

本來の三昧を離れざるなり。前の生來死去の句相映じて見るべし。

【五藏幻身】 幻身は究竟の實相に非ず。如幻の法門を究竟と思ひたれば、幻は究竟に非ずとなり、幻を知るものには何ぞ。

【總趣眞如】 佛性に趣向せんと擬せば、之を趣といふ。眞如の法還つて汚染せらる之を法還といふ。又云く、回心して眞如の自性を見れば、諸法の至要も知つて是れ清淨の本體にあらざるなり。

【立】 佛身菩提涅槃、解脱知見等の萬法なり。

【去來】 左轉右轉化身、應用無方。

【念念】 智慧を以て念念觀照す。

【一切の法】 佛身等の萬法、遂に隨侍す。

一法の得べきなし、方に能く萬法を建立す。若し此意を解すれば、亦佛身と名く、亦菩提涅槃と名く、亦解脱智慧と名く。見性の人は、立も亦得たり、不立も亦得たり、去來自由にして、滯なく礙なし、用に應じて隨つて作し、語に應じて隨つて答へ、普く化身を見じて、自性を離れず、即ち自在神通、游戲三昧を得たり、是を見性と名く。志誠再び師に啓して曰はく、「如何なるか是れ不立の義。」師曰はく、「自性非なく礙なく亂なく、念念般若の觀照をもつて、常に法相を離れて、自由自在、縱横盡く得、何の立すべきあらん。自性自悟、頓悟頓修、亦漸次なし。所以に一切の法を立せず、諸法寂滅、何の次第かあらん。」

志誠禮拜す、願うて執侍を爲して、朝夕懈らず。「誠は吉州太和の人なり。」

僧志徹は江西の人なり、本姓は張、名は行昌、少かりしとき、任俠なり。南北化を分ちてより、二宗の主は彼我亡しと雖も、而も徒侶競うて愛憎を起す。時に北宗の門人、自ら秀師を立てて第六祖と爲し、而も祖師の傳衣、天下の爲に聞ゆることを忌む。乃ち行昌に囑して、來つて師を刺さしめんとす。師、心通あつて、預め其事を知る、即ち金十兩を座間に置く。時に夜暮、行昌祖の室に入つて、將に害を加へんとす。師、頭を俯べて之に就く。行昌、刃を揮ふもの三たび、悉く損する所なし。師曰はく、「正劍邪ならず、邪劍正ならず、ただ汝が金を負うて、汝が命を負はず。」行昌驚き仆れて、久しくして方に

蘇る。哀を求め、過を悔いて、即ち出家せんことを願ふ。師遂に金を與へて言はく、「汝且く去れ、恐らくは徒衆翻つて汝を害せんことを。汝他日形を易へて來るべし、吾當に攝

しはらる。汝

且く去れ、恐らくは徒衆翻つて汝を害せんことを。汝他日形を易へて來るべし、吾當に攝

しはらる。汝

【時に夜暮云云】
祖師鎮を舒べ給ふに、行昌三たびきり、れどもきざるなり。

【師遂に余を與へて云云】他日出家して來れどなり、當攝受とは爲に教誨す。

【度生】濟度と同じこと、拔苦與樂【常無常】佛性は常に非ず無常に非ずとなり、この故に斷ぜざれば、應に還つて得べし、若し期ち不斷と名く【尼無盡藏】劉志略の姑。

【佛性若し常】若常とは俗諦、有相の常。【一切の諸法若し】若無常とは、俗諦有相の無常。

【凡夫外道云云】常とは眞諦、無相の眞常、無常を計すとは俗諦、有爲の無常なり。又八

受すべし。行昌旨を稟けて宵遁る、後に僧に投じて出家し、具戒精進す。一日師の言を憶りて、遠く來つて禮觀す。師曰はく、「吾久しく汝を念ふ、汝來ること何ぞ晚きや。曰はく、「昨に和尚の罪を捨すことを蒙る。今出家苦行すと雖も、終に徳に報い難し。其れ誰法を傳へて度生せんか、弟子、常に涅槃經を覺る、未だ常無常の義を曉らず、之を和尚、慈悲をもつて略して爲に解説したまへ。師曰はく、「無常といふは即ち佛性なり、有常といふは即ち一切の善惡の說法、分別の心なり。曰はく、「和尚の所説、大いに經文に違ふ。師曰はく、「吾佛心印を傳ふ、安んぞ敢て佛經に違はんや。曰はく、「經には佛性はれ常と説く、和尚は却つて無常と言ふ、善惡の諸法、乃至菩提心も、皆是れ無常なり、和尚は却つて是れ常と言ふ、此れ即ち相違して、學人をして轉疑惑を加さしむ。師曰はく、「涅槃經は吾昔尼無盡藏が讀誦すること一過せるを聽いて、便ち爲に講説す、一字一義の經文に合せざるなし。乃至、汝が爲にするも終に二説なし。曰はく、「學人識量淺味なり、願くは和尚、委曲に開示したまへ。師曰はく、「汝知るや否や、佛性若し常ならば、更に什麼の善惡の諸法をか説かん、乃至、劫を窮むとも一人として菩提心を發するものあることなけん。故に吾無常と説くは、正に是れ佛の説きたまふ眞常の道なり。又一切の諸法、若し無常ならば、即ち物物皆自性あつて、生死を容受し、而も眞常の性、漏せざる處あらん。故に吾常と説くは、正に是れ佛の説きたまふ眞無常の義なり、佛比へば凡夫外道は、邪常を執し、諸の二乘の人は、常に於て無常と計して、共に八倒を成すが爲の故に、涅槃了義教の中に於

倒は八逆ともいふ
【斷滅】 斷絶滅盡
なり。

【確定】 固確必定
なり。

【因守無常】 無常
心とは凡夫、説有
常性とは本常なく
無常なし。春池拾
磔とは言述を認む
るは猶し石を寶と
するがごとしとな
り。

【我今不施】 佛性
現前すと、現前と
いふは所得にあら
ずとなり、見性の
人にあらずんば、
却つて所得となる
べきとなり。

【汝今徹せり】 印
證し給ふ。

【童子】 もと秀
師の弟子十三歳の
童子。

【取次】 容易の義
【坐禪還つて云々】
坐禪は是れ無住の
本。故に師に難問
なり。

【三下】 殺活手裏
に在りとなり。

【神會問】 神會が

て、彼偏見を破して、而も眞常、眞樂、眞我、眞淨を顯説したまふと。汝今言に依つて義に背き、斷滅の無常、及び確定せる死常を以て、而も錯つて佛の因妙、最後の微言を解す。縦ひ覽ること千徧するも、何の所益かあらん。行昌忽然として大悟す。偈を説いて曰はく、

因守ニ無常 心一
ぼつ べんを しらすもの は

佛説ニ有常性
ぼつ けうしやうのしやうをとん

我今不施功
われいまこうをせんとせんども

佛性而現前
ぼつ しやうしんぜんぞん

非ニ師相授與
しんあひじゆするごらかんけ

我亦無ニ所得
われまたむとく

師曰はく、『汝今徹せり、宜しく志徹と名くべし。徹、禮謝して退く。』

一童子あり、神會と名く、襄陽の高氏の子なり、年十三にして、玉泉より來つて參禮す。

師曰はく、『知識遠く來つて艱辛す、還つて本を將き得來るや否や。若し本あらば、則ち主を識るべし、試みに説け看ん。』會曰はく、『無住を以て本と爲す、見即ち是れ主なり。』師曰はく、『這沙彌、争か取次に語る合き、會乃ち問うて曰はく、『和尚坐禪還つて見るや見ざるや。』師拄杖を以て打つこと三下して云はく、『吾汝を打つ、痛むや痛まざるや。對へて曰はく、『亦は痛み亦は痛まず。』師曰はく、『吾も亦は見亦は見ず。』神會問ふ、『如何なるか是れ亦は見亦は見ざる。』師云はく、『吾見る所は、常に自心の過慝を見て、他人の是非好惡を見ず。是を以て亦は見亦は見ず。汝が言ふ、『亦は痛み亦は痛まず』と。如何。汝若し痛まずんば

六祖壇經

實病に砒す。

【汝自ら迷】 吾見自知とは自身の三昧自心知るなり。

【服勤】 心服し勤行すなり。

【一物】 本来人。

【神會が佛性】 つくりつけの佛性ぞと。

【向去】 向後なり

其木石に同じ、若し痛まば則ち凡夫に同じく、即ち悲悞を起さん。汝向前の見不見は、是れ二邊、痛不痛は是れ生滅、汝が自性すら且見す、敢て爾く人を弄す。神會禮拜して悔謝す。師又曰はく、「汝若し心迷うて見ずんば、善知識に問うて路を覚めよ、汝若し心悟らば、即ち自ら見性して、法に依つて修行すべし。汝自ら迷うて自心を見ず、却り來つて吾に見と不見とを問ふ、吾見は自知す、豈汝が迷に代らんや。汝若し自ら見ば、亦吾迷に代らじ、何ぞ自知自見せずして、乃ち吾に見と不見とを問ふや。」神會、再び禮拜し、百餘拜して、過恩を謝せんことを求め、服勤給侍して、左右を離れず。一日師、衆に告げて曰はく、「吾に一物有り、頭なく尾なく、名なく字なく、背なく面なし、諸人還つて識るや否や。」神會出でて曰はく、「是れ諸佛の本源、神會が佛性。」師曰はく、「汝に向つて道ふ、名なく字なしと、汝便ち喚んで本源佛性と作す、汝向去、把茆の頭を蓋ふことあれども、也只箇の知解の宗徒と成らん。」祖師の滅後に、會、京洛に入つて、大いに曹溪の頓教を弘む。顯宗記を著す、盛んに世に行はる。「是を荷澤禪師と爲す。」

師、諸宗難問して、咸く悪心を起して、多く座下を集るを見て、慙んで謂つて曰はく、「學道の人、一切の善念惡念、應當に盡く除くべし、名の名くべきなきを自性と名く、無二の性、是を實性と名く、實性の上に於て、一切の教門を建立す、言下に便ち須らく自ら見るべし。」諸人説を聞いて、總に皆作禮して、請ひ事へて師と爲す。

【神龍元年云云】
神龍元年は日本
文武天皇慶雲二年

則天は高宗の皇后
中宗は高宗の第七

子、唐の第四子、嵩
山の惠安、秀は神

秀、共に五祖に嗣
法す。

【内侍】官名、日
本の中宮亮。

【禪定解脫】學道
の常軌。

【經云】金剛般若
經。

【無證】本修證な
しとなり。

【是れ如來云云】
如來禪と祖師禪と

は爰にては一つに
見るべし、祖師坐

禪を嫌ふとは僧見
自性を見て坐禪せ
よ。

【兩宮】則天、中
宗。

【以心傳心】無盡
燈の義。

【代謝】生滅の法
なり。明來れば暗
去り、暗來れば明
去る。
【如何なるか】是云

宣 詔 第 九

神龍元年上元の日、則天、中宗、詔して云はく、「朕、安秀二師を請じて、宮中に供養す、萬機の暇、毎に一乘を究む。二師推讓して云はく、「南方に能禪師あり、密に忍大師の衣法を授く、佛心印を傳ふ、彼を請じて問ふべし。」と。今内侍薛簡を遣して、詔を馳せて迎請す。願くは師慈念して速に上京に赴け。師、表を上つて病と辭し、林麓に終らんことを願ふ。薛簡曰はく、「京城の禪德皆云ふ、道を會することを得んと欲せば、必ず須らく坐禪習定すべし、若し禪定に囚らずして解脫を得るものは、未だ之あらじと。未審し、師の所説の法如何。」師曰はく、「道は心に由つて悟る、豈坐に在らんや。經に云はく、「若し如來若くは坐し若くは臥すと云ふは、是れ邪道を行す、何が故ぞや。從來する所なく、亦去る所なし」と。無生無滅は、是れ如來清淨の禪なり、諸法空寂は、是れ如來清淨の坐なり、究竟して證なし、豈況んや坐をや。」簡曰はく、「弟子京に回らば、主上必ず問はん。願くは師慈悲をもつて、心要を指示したまへ。兩宮に傳奏し、京城學道の者に及ぼさん。譬へば一燈をして、百千燈を然すが如く、冥きものは皆明にして、明明盡くることなし。師云はく、道に明暗なし、明暗は是れ代謝の義なり。明明盡くることなくとも、亦是れ盡くることあり、相待して名を立つるが故に、淨名經に云はく、「法に比あることなし、相待なきが故に」と。簡曰はく、「明は智慧に喩へ、暗は煩惱に喩ふ。修道の人、備

【云】凡夫見二とは智慧煩惱に於て煩惱あるが故にとなり。

【性相如如】性相互融、理事冥合を云ふ。

【師不生不滅云云】將滅止生とは摧滅伏遏して生ぜざら

しむるを不生と曰ふ。以生顯滅とは

生長執持して滅せざらしむるを不滅

といふ。滅猶不滅とは努力して滅せざらしむる故に。

【心體】善惡並べ體なり。當體即ち心

【湛然云云】心源開澹妙用とは作用

悉く妙用を云ふ。【闕】内裏。

【其年九月三日云云】重ねて勅使を遣し即ち詔書を賜

ふ。【師老疾云云】老病の由にて、道を

修せらるるは天下の福なり。

し智慧を以て煩惱を照破せずんば、無始の生死、何に憑つてか出離せん。師曰はく、煩惱即ち是れ菩提、無二無別なり、若し智慧を以て煩惱を照破せば、此は是れ二乗の見解、羊鹿等の機なり。上智大根は、悉く是の如くならず。簡曰はく、如何なるか是れ大乘の見解。師曰はく、明と無明と、凡夫は二を見る、智者は了達すれば、其性無二なり、無二の性、即ち是れ實性なり。實性といふは、凡愚に處しても滅ぜず、賢聖に在つても増せず、

煩惱に住しても亂れず、禪定に居しても寂ならず、斷にあらざる常にあらざる、來にあらざるにあらざる、中間及び其内外にあらざる。不生不滅、性相如如にして、常住不遷なる、之を名

けて道といふ。簡曰はく、一師、不生不滅と説く、何ぞ外道に異らん。師曰はく、外道所説の不生不滅といふは、滅を將て生を止め、生を以て滅を顯す、滅猶滅せず、生を不生と説く。我說く不生不滅といふは、本自ら無生、今亦不滅なり。所以に外道に同じからず。

汝若し心要を知らんと欲せば、但一切の善惡、都て思量すること莫れ、自然に清淨の心體に入ることを得て、湛然常寂にして、妙用恒沙ならん。簡、指教を蒙つて、豁然として大悟す。禮辭して闕に歸つて、表をもつて師の語を奏す。其年九月三日に、詔あつて

師を奨諭して曰はく、師、老疾と辭して、朕が爲に道を修す、國の福田なり。師は淨名の疾を毘耶に托して、大乘を闡揚するが若く、諸佛の心を傳へ、不二の法を説す。薛簡、

師の如來の知見を指授するを傳ふ、朕積善の餘慶、宿種の善根あつて、師の出世に值うて、

頓に上乘を悟る、師の恩を感荷して、頂戴して已むことなし。并に麝檀の袈裟、及び水

【韶州の刺史云云】
寶林寺を修理せしめ、額を賜うて法泉寺となす。師の新州の舊邸を寺になされ、國恩寺の號を降し給ふと。

【付囑第十】 付囑とは付法遺囑なり

【空谷】 明の人、名は景隆、白蓮安に嗣ぐ。

【金天】 宋の南遷以後を胡金といふ大元の前。

【教人】 或は新羅の僧金大悲か。

【師一日云云】 是れより已下宗旨を失する勿れと云ふまでは邪言の由なり。

【先須らく云云】 三科三十六對とは下に自釋す。

【出沒】 相。

【兩邊】 二法。

【三科法門云云】 一切の法を攝す。
【自性能く云云】 三科萬法、皆是れ自性の大海の上に浮ぶ瀆なり。

品の鉢を奉ず。韶州の刺史に勅して、寺宇を修飾せしめ、師の舊居を賜うて、國恩寺と爲す。

付屬 第十

〔空谷の云はく〕此より下七百七十九字は是れ金天の教人、邪言を偽り造つて、板に刊つて増入す。師一日、門人法海、志誠、法達、神會、智常、智通、志徹、志道、法珍、法如等を喚んで曰はく、汝等餘人に同じからず、吾滅度の後、各一方の師と爲らん。吾今汝をして說法して本宗を失はざらしめん、先須らく三科の法門、動用の三十六對、出沒即離の兩邊を擧ぐべし。一切の法を説くに、自性を離るること莫れ、忽ち人ありて汝に法を問はば、語を出すこと盡く雙べて、皆對法を取れ。來去相因つて、究竟して二法盡く除かば、更に去處なけん。三科の法門といふは、陰界入なり、陰は是れ五陰、色受想行識是なり、入は、是れ十二入、外の六塵は、色聲香味觸法、内の六門は、眼耳鼻舌身意是なり、界は、是れ十八界、六塵、六門、六識是なり、自性、能く萬法を舍するを舍藏識と名く。若し思量を起せば、即ち是れ轉識、六識を生じて、六門より出でて六塵を見る、是の如きの一十八界は、皆自性より起る用なり。自性若し邪なれば、十八邪を起し、自性若し正なれば、十八正を起す。惡を舍すれば用即ち衆生の用、善なれば用即ち佛の用なり。用は何等にか由る、自性に由つて有なり。對法は外境の無情に五對あり、天と地と對し、日

【若し思量云云】
生起の次第を論ぜば、阿頼耶識に三相あり。この十八界は不覺の一念の上に浮び顯れたるなり。

【自性若し邪云云】
邪あれば十八界が邪、一念回向すれば正。

【惡を含すれば云云】
惡を含藏すれば佛が衆生、善を含藏すれば衆生が佛。

【此三十六對】
一切經の教法をも貫通するなり。

【人と共に語言云云】
外達は相に著し、内達は空に著す。

【執空の人】
今時の學人は執空の人

【若し相に外云云】
若し作業して佛を求めば、佛は是れ生死の大兆と。

【但聽いて云云】
若し心迷うて自ら見ずんば、善知識に問うて道を求め

と月と對し、明と暗と對し、陰と陽と對し、水と火と對す、此は是れ五對なり。法相の語言に十二對あり、語と法と對し、有と無と對し、有色と無色と對し、有相と無相と對し、有漏と無漏と對し、色と空と對し、動と靜と對し、清と濁と對し、凡と聖と對し、俗と對し、老と少と對し、大と小と對す、此は是れ十二對なり。自性の起用に十九對あり、長と短と對し、邪と正と對し、癡と慧と對し、愚と智と對し、亂と定と對し、慈と毒と對し、戒と非と對し、直と曲と對し、實と虚と對し、險と平と對し、煩惱と菩提と對し、常と無常と對し、悲と害と對し、喜と嗔と對し、捨と慳と對し、進と退と對し、生と滅と對し、法身と色身と對し、化身と報身と對す、此は是れ十九對なり。師言はく、「此三十六對の法は、若し用を解すれば即ち道、一切の經法を貫く、出入即離の兩邊は、自性の動用なり。人と共に語言せば、外相に於て相を離れ、内空に於て空を離れよ。若し全く相に著すれば、即ち邪見を長す、若し全く空を執すれば、即ち無明を長す。執空の人は、經を誦することあつて、直に言ふ、文字を用ひずと。既に文字を用ひずと云はば、人亦語言す合からず、只此語言、即ち是れ文字の相なり。」又云はく、「直に道ふ、文字を立せず、即ち此不立の兩字も、亦是れ文字なり。人の所説を見て、便即他を誦じて言ふ、文字に著すと。汝等須らく知るべし、自ら迷ふこと猶可なり、又佛經を誦す、經を誦することを要せざれ、罪障無數ならん。若し相に外に著して、而も法を作して眞を求め、或は廣く道場を立てて有無の過患を説く。是の如きの人は、累劫にも見性すべからず、但聽いて法に依つて修行

よ。
【汝等若し悟云云】
參禪の輩、一大事を悟れば大休歇と云うて何事をもせず、自由自在と思へり。
若し人有つて汝云云道は内外中間にあらざる、何ぞ中を説かんや。

【七月一日】 苦口に説示す。

【神情】 神魂情思
【神會小師】 是説示は哀情を掃うて本源を見しめんが爲なり。

せよ。又百物思はざることを莫れ、而も道性に於て窒礙せん。若し法を聽いて修せずんば、人をして變じて邪念を生ぜしめん。但法に依つて修行するは、無住相の法施なり。汝等若し悟らば、此に依つて説き、此に依つて用ひ、此に依つて行じ、此に依つて作せ、即ち木宗を失せじ。若し人有つて汝に義を問はんに、有を問はば無を將て對へ、無を問はば有を將て對へ、凡を問はば聖を以て對へ、聖を問はば凡を以て對へ、二道相因つて、中道の義を生ぜよ。汝一問一對、餘問も一へに此に依つて作せ、即ち理を失せじ。設し人あつて問はん、何をか名けて暗と爲す。答へて云はく、明は是れ因なり、暗は是れ縁なり、明没すれば即ち暗、明を以て暗を顯し、來去相因つて、中道の義を成ぜよ、餘問も悉く皆此の如し。汝等後に於て、法を傳ふること、此に依つて、轉相教授して、宗旨を失すること勿れ。

師、太極元年壬子延和七月に於て、是年五月、延和と改む、八月玄宗位に即く、方に元を先天と改む、次の年、遂に開元と改む。他本に先天に作るものは非なり。門人に命じて、新州國恩寺に往いて塔を建て、仍に工を促さしむ。次の年夏の末に落成す。七月一日、徒衆を集めて曰はく、「吾八月に至つて、世間を離れんと欲す、汝等疑あらば、早く須らく相問ふべし、汝が爲に疑を破し、汝が迷をして盡さしめん。吾若し去らば後、人の汝に教ふるなけん。』法海等聞いて、悉く皆涕泣す、惟神會のみあつて、神情動せず、亦涕泣することなし。師云はく、「神會小師、却つて得たり、善不善等の毀譽に動せられず、哀

【汝今悲泣云云】大師自ら去處を知り給ふ。

【一切無有眞】一切萬法に於て眞正となす。

【若能自有】自心に於て眞正を了ずればなり、離假とは萬法の假相を離る、已上の八句は自心を明めよと示すなり。

【有情即覺動】有情は動物と爲す、無情は木石。

【若實覺】眞不動とは自心眞の不動上とは動搖上、即じて不動搖、不動とは不動を執して不動を是とせばなり。

【能善分別】能善この二字力あり善く諸相を分別するものなり。以上の十二句は禪定に著することなかれと示す。

樂生ぜざることを。餘は得ず、年を山中に數へて、竟に何の道をか修せん。汝今悲泣す、阿誰をか憂ふることを爲す、若し吾を憂へば去處を知らざるなり。吾自ら去處を知る、若し去處を知らずんば、竟に預め汝に報ぜじ。汝等悲泣することは、蓋し吾去處を知らざるが爲なり、若し吾去處を知らば、即ち悲泣す合からず。法性本生滅去來なし、汝等盡く坐せよ、吾汝が與に一偈を説かん、名けて眞假動靜の偈と曰ふ。汝等此偈を誦取せば、吾意と同じからん、此に依つて修行せば、宗旨を失せじ。衆僧作禮して請す、師偈を説いて曰はく、

一切無有眞
若見於眞者
若能自有眞
自心不離假
有情即覺動
若修ニ不動行
若覺ニ眞不動
不動是不動
能善分ニ別相
但作ニ如此見
不三以見ニ於眞一
是見盡非眞
離假即心眞
無レ眞何處眞
無情即不動
同ニ無情不動
動上有ニ不動
無情無ニ佛種
第一義不レ動
即是眞如用

【報諸學道】努力、必ず速忽なること勿れ。

【若言下相應】言

下相應の人ならば

自己の知解を放下

すべき程に、佛の

第一義を論ずべし

【此宗本無諍】無

諍とは頓教の宗門

無諍三昧なり、執

逆とは他と逆亂闘

諍佛義を商榷せば

なり、自性は生死

海に汨没すとなり

【吾本來茲土】靈山會上の一華を傳へて東山に來り、五葉開きぬれば信根の道果が成熟するとなり。

報諸學道人

莫下於大乘門

若言下相應

若實不二相應

此宗本無諍

執逆諍二法門

努力須用意

却執生死智

即共論佛義

合掌令二歡喜

諍即失二道意

自性入二生死

時に徒衆、偈を説くを聞き已つて、普く皆作禮して、直に師の意を明めて、各各心を攝して、法に依つて修行し、更に敢て諍はず。乃し大師久しく世に住せざらんことを知る、法海上座、再拜して問うて曰はく、「和尚入滅の後、衣法當に何人にか付すべき。」師曰はく、「吾大梵寺に於て説法して、もつて今に至る、抄録し流行して、目けて法寶壇經と曰ふべし。」汝等守護して遞に相傳授して、諸の群生を度せよ。但此に依つて説け、是を正法と名く。今汝等が爲に、法を説いて其衣を付せざることは、蓋し汝等が信根淳熟し、決定して疑なく、大事に堪任するが爲なり。然れども先祖達磨大師、付授の偈の意に據らば、衣は傳ふべからず。」偈に曰はく、

吾本來茲土

一華開五葉

師復曰はく、「諸の善知識、汝等各各心を淨めて、吾説法を聽け、若し種智を成就せん

傳法救迷情

結果自然成

【各各心を淨云云】大法を説かんと欲す、故に先づ淨心せしむ。
 【一相】佛性なり、法界平等にして同根一體なり。
 【說法】一相一行雨三昧をさす。

【心地含諸種】心地とは人人具足す見性の佛種子を以て長養せば疑なく自性覺萌すべし。
 【其法無二】萬法本來一法なり。
 【作禮して】一段の結語なり。
 【七月八日】唐の先天二年曹溪より新州の圓恩寺に行かんとり給ふ。

と欲せば、須らく一相三昧、一行三昧に達すべし。若し一切の處に於て、而も相に住せず、彼相の中に於て、憎愛を生せず、亦取捨なく、利益成壞等の事を念はず、安閒恬靜、虛融澹泊なる、此を一相三昧と名く。若し一切の處に於て、行住坐臥、純一直心にして、道場を動せず、眞に淨土を成ずる、此を一行三昧と名く。若し人二の三昧を具すれば、他の種あつて含藏し、長養して其實を成熟するが如し。一相一行も、亦復是の如し。我今の說法、猶時雨の普く大地を潤すが如し。汝等が佛性をば、諸の種子の茲の露洽に遇うて、悉く發生することを得るに譬ふ。吾旨を承けたるものは、決らず菩提を獲ん、吾行に依るべし、定んで妙果を證せん。吾偈を聽け。曰はく、

心地含諸種

普雨悉皆萌

頓悟三華情已

菩提果自成

師、偈を説き已つて曰はく、「其法無二なれば、其心も亦然り、其道清淨にして、亦諸相なし。汝等愼んで、靜を觀じ及び其心を空すること勿れ。此心本淨し、取捨すべきなし各自に努めよや。緣に隨つて好し去れ。爾時、徒衆作禮して退く。」

大師、七月八日、忽ち門人に謂つて曰はく、「吾新州に歸らんと欲す、汝等速かに舟楫を理めよ。」大衆哀留すること甚だ堅し。師曰はく、「諸佛の出現、猶涅槃を示す、來ることあれば必ず去る、理亦常に然り、吾此形骸、歸するに必ず所あり。」衆曰はく、「師此より去つて早晚か回るべき。」師曰はく、「葉落ちて根に歸す、來時口なし。」又問うて曰はく、「正法眼

【後に難有る云云】
開示十年に新羅の僧金大悲と云ふもの、汝州の僧淨滿をして、六祖の首を取らしむ。
【出家】馬祖道一
【在家】 龐居士ならん。

藏、何人にか傳付す。師曰はく、「有道のものは得、無心のものは通す。」又問ふ、「後に難有ること莫からんや否や。」師曰はく、「吾滅後五六年に、當に一人ありて、來つて吾首を取るべし、吾記を聽け、曰はく、「頭上に瓶を養つて、口裏に餐を須む、滿が難に遇うて楊柳と爲す」と。」又云はく、「吾去つて七十年、二菩薩ありて東方より來らん、一りは出家、一りは在家、同時に化を興して、吾宗を建立し、伽藍を繕緝し、法嗣を昌隆すべし。」問うて曰はく、「未だ知らず、從上の佛祖、應現已來、傳授幾代ぞや、願くは開示を垂れたまへ。」師云はく、「古佛の應世、已に無數量にして計ふべからず、今七佛を以て始と爲す。過去莊嚴劫には、毘婆尸佛、尸棄佛、毘舍浮佛、拘留孫佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦文佛、是を七佛と爲す。

釋迦文佛首の摩訶迦葉尊者に傳ふ。

- | | | | |
|-----|--------------|-----|--------|
| 第十 | 龍樹大士 | 第十 | 迦那提婆尊者 |
| 第十一 | 馬鳴大士 | 第十一 | 富那夜奢尊者 |
| 第十二 | 脇尊者 | 第十二 | 逸毘摩羅尊者 |
| 第十三 | 佛駄難提尊者 | 第十三 | 伏駄蜜多尊者 |
| 第十四 | 彌遮迦尊者 | 第十四 | 婆須蜜多尊者 |
| 第十五 | 優婆塞多尊者 | 第十五 | 提多迦尊者 |
| 第十六 | 阿難尊者 | 第十六 | 商那和修尊者 |
| 第十七 | 釋迦文佛首の摩訶迦葉尊者 | 第十七 | 南那和修尊者 |

【遷代】 代代。

【先天二年】唐の玄宗皇帝即位の年號、日本の元明天皇の和銅六年。
【法海白して言さく】これは衆生濟度の悲願を起して請問するなり。
【自心の衆生を云云】總じて標す。

十六 羅睺羅多尊者
 十八 伽耶舍多尊者
 二十 闍耶多尊者
 二十二 摩訶羅尊者
 二十四 師子尊者
 二十六 不如蜜多尊者
 二十八 菩提達磨尊者
 二十九 慧可大師
 三十一 道信大師
 三十二 弘忍大師

十七 僧伽難提尊者
 十九 鳩摩羅多尊者
 二十一 婆修盤頭尊者
 二十三 鶴勒那尊者
 二十五 婆舍斯多尊者
 二十七 般若多羅尊者
 三十 僧璨大師

せしむること母れ。』
 大師、先天二年癸丑の歲、八月初三日、國恩寺に於て、齋罷んで、諸の徒衆に謂つて曰はく、「汝等各位に依つて坐せよ、吾汝と別れん。法海白して言さく、『和尚何の教法をか留めて、後代の迷人をして佛性を見ることを得しめん。』師言はく、『汝等諦に聽け、後代の迷人、若し衆生を識らば、即ち是れ佛性、若し衆生を識らずんば、萬劫に佛を覓むとも逢ひ難からん。吾今汝をして自心の衆生を識り、自心の佛性を見せしめん。佛を見るこ

慧能は是れ三十三祖たり。從上の諸祖、各稟承あり。汝等向後、遞代流傳して、垂誤

【自性平等】何をか迷悟と云ふや。
 【心若し險曲】一念險曲なれば佛は衆生の中にかくれ平直なれば出世し給ふ。

【我心自佛】自心の佛性を見れば三世十方の諸佛現前し給ふ。

【自心是佛】無一物云ふは心を除いて外一物として而も能く諸法を建立することなし。

【眞如自性】眞如は自心、自性を見ざれば邪見三毒起つて、魔王に攝取せらる。

【邪迷之時】見性の人を以て諸佛諸天も常に擁護し給ふ邪迷は魔の眷屬とす。

【性中邪見】邪迷の時を釋す。

【正見自除】正見の時を釋す。

【法身報身】禪門に去身のみを論じて報化を坐斷すとす。

とを求めんと欲せば、但衆生を識れ、只衆生佛に迷ひ、是れ佛衆生に迷ふに非ざるが爲なり。自性若し悟れば、衆生是れ佛、自性若し迷へば、佛是れ衆生なり。自性平等なれば、衆生是れ佛、自性邪險なれば、佛是れ衆生なり。汝等心若し險曲なれば、即ち佛衆生の中に在り、一念平直なれば、即ち是れ衆生成佛す。我心自佛あり、自佛是れ眞佛、自若し佛心なくんば、何れの處にか眞佛を求めん。汝等自心是れ佛なり、更に狐疑すること莫れ、外に一物として而も能く建立するなし、皆是れ本心より萬種の法を生ず。故に經に云はく、「心生すれば種種の法生じ、心滅すれば種種の法滅す」と。吾今一偈を留めて、汝等と別れん、自性眞佛の偈と名く、後代の人、此偈の意を識らば、自ら本心を見、自ら佛道を成せん。一偈に曰はく、

眞如自性は眞佛
 邪迷之時魔在舍
 性中邪見三毒生
 正見自除三毒心
 法身報身及化身
 若向二性中能自見
 本從二化身一生淨性
 淨性常在二化身中
 當來圓滿眞無窮

邪見三毒是魔王
 正見之時佛在堂
 即是魔王來住舍
 魔變成佛眞無假
 三身本來是一身
 即是成佛菩提因
 淨性常在二化身中
 當來圓滿眞無窮

思へるは、自性に不足なるべし。

【若向性中】自性の中、三身佛を見得したることならば、成道の因なりとなり。

【本從化身】自性清淨の法身より化身を生ずる故に、化身の中に法身を具足するなり。

【性使化身】性は自性の法身なり、故に報身圓滿窮りなしと。

【姪性本是】淨法身を生ずる因地なり。

【性中各自】各自には人人五欲の過を遠離するなり。

【今生若遇】是は自性、世尊は心佛を云ふ。

【若欲修行】修行とは人人各自の心佛、修行して得んと欲する者は、終に此處りなしと。

【若能心中】心中

姪性本是淨性因

性中各自離二五欲

今生若遇二顯教門

若欲修行覓二作佛

若能心中自見眞

不見自性外覓佛

顯教法門今已留

報汝當來學道者

師、偈を誦き已つて告げて曰はく、

除姪即是淨性身

見性剎那即是眞

忽悟二自性一見二世尊

不知何處擬求眞

有眞即是成佛因

起心總是大癡人

救三度世人須二自修

不作此見大悠悠

師、偈を誦き已つて、端坐して三更に至る、忽に門人に謂つて曰はく、

汝等好し住せよ、吾滅度の後、世情悲泣雨涙を作すこと莫れ、人の弔問を受け、身に孝服を著けば、吾弟子に非ず、亦正法に非ず、但自の本心を識り、自の本性を見よ。動なく靜なく、生なく滅なく、去なく來なく、是なく非なく、住なく往なし。恐くは汝等心迷うて、吾意を會せざらんことを。今、再び汝に囑して、汝をして見性せしむ。吾滅度の後、此に依つて修行せば、吾在口の如くならん。若し吾教に違はば、縱は吾世に在りとも、亦益あることなけん。復偈を説いて曰はく、

兀兀不修善

鸞騰不造惡

寂寂斷見聞

蕩蕩心無著

師、偈を説き已つて、端坐して三更に至る、忽に門人に謂つて曰はく、「吾行かん」と。

に返照して眞性を
見んと念願す。自

【不見自性】自性
の外に諸佛ありと
思うて求むるなり

【頓教法門】自性
の法實を頓教とい

【報汝當來】此見
とは自性相看の見

【師偈を説きて云
云】先天二年八月
三日新州國恩寺に
於て遷化し給ふ。

【香泥云云】天竺
の作法なりと、ふ

【韶州より奏問】
韶州の刺史より天
子へ奏して。

【屈胸布】本綿を
細して花心織り成
す、其色、青黒色
なり、此には大細
布といふ。

【中宗の賜へる云
云】磨衲の袈裟、
水晶の鉢、上像の
御影、其外の道具
は寶林寺に於て永
く鎮什とす。

【三寶を興隆云云】
一經の結語、發願
回向なり。

奄然として遷化す、時に異香室に満ち、白虹地に屬る、林木白に變じ、禽獸哀鳴す。十一

月、廣韶新三郡の官僚、泊び門人僧俗、眞身を迎へんことを争ふ、之く所を決すること莫

し。乃し香を焚いて禱つて曰はく、「香煙の指す處、師の歸する所ならん。」時に香煙直に曹

溪を貫く。十一月十三日、神龜併に所傳の衣鉢を遷して回る。次の年七月、龜を出して、

弟子方辯、香泥を以て之に上す、門人取首の記を憶念して、仍つて鐵葉漆布を以て、固く

師の頸を護して塔に入れしむ。忽に塔内に於て、白光出現して、直に上つて天を衝く、

三日にして始めて散す。韶州より奏聞して、勅を奉じて碑を立て、師の道行を紀す。師春

秋七十有六、年二十四にして傳衣、三十九にして祝髮、説法利生三十七載、嗣法四十三人、

悟道超凡のもの、其數を知ること莫し。達磨所傳の信衣（西域の屈胸布なり。）中宗の賜へ

る磨衲寶鉢、及び方辯が塑する師の眞相、并に道具、永く寶林道場に鎮す、留めて壇經を

傳へて、以て宗旨を顯す、三寶を興隆し、普く群生を利する者なり。

六祖大師法寶壇經 終

附錄 六祖大師緣起外紀

【緣起外紀】撰者師の因縁興起、遺事行歴を操り給うて、經の外にして別端に紀するなり。師は範たるを、大蓮の師範たるを、大蓮といふ。緣起とは法界の自性が縁に隨つて起る。應身の次第なり。行由は本經に載せたり。其外を記す。故に紀を外紀と云ふ。紀は編著なり。又記なりと云へり。

【左官】左遷。

【武德二年】日本の推古天皇二十八年。

【先夢】下の六年字に據れば則ち貞觀七年癸巳、日本の舒明天皇の五年【東誠齋戒】夢の轉の奇特なる故に信心を發し、懷妊の間。

【貞觀】唐の二代太宗皇帝の年號。十二年は日本の舒明天皇十年。

【毫光】眉間の白

附 錄

六祖大師緣起外紀

（藏本に門人法海等集の六字あり。）大師名は慧能、父は盧氏、諱は行瑄、唐の武德三年九月、新州に左官せらる。母の李氏、先夢むらく、庭前に白華競ひ發き、白鶴雙び飛び、異香室に滿つと、覺めて娠むことあり。遂に潔誠齋戒、懷妊六年にして、師乃し生る。唐の貞觀十二年戊戌の歲、二月八日子の時なり。時に毫光室に騰り、香氣芬蘭す。黎明、二僧ありて、造り謁して師の父に謂うて曰はく、「夜來の生兒、專つて爲に安名せん、慧を上にして能を下にすべし。父の曰はく、「何をか慧能と名く、二僧の曰はく、「慧とは法慧を以て衆生を濟ふなり、能とは能く佛事を作すなり。言ひ畢つて出づ、之く所を知らず、師、母の乳を飲まず、夜に遇うて神人灌ぐに甘露を以てす。三歳にして父喪す、宅の畔に葬る。母志を守つて鞠養す。既に長じて薪を鬻いで母に供す。年二十有四にして、經を聞いて省あり、黃梅に往いて參禪す。五祖之を器として、衣法を付して祖位を嗣がしむ、時に龍朔元年辛酉の歲なり。南に歸りて隱遯す。儀鳳元年丙子正月八日に至りて、印宗法師に會うて、玄奥を詰論す、印宗悟りて師の旨に契ふ。是月十五日に、普く四衆を會して、師の爲に薙髮す。二月八日、諸の名徳を集めて、具足戒を授く。西京の智光律師は授戒の師

毫の光なり。

【法慧】 自性露顯

【母の乳を飲まず云云】 毎夜不思議なる人來りて、甘露の妙味を與ふ。

【三歲云云】 父の行瑠は左官の後、二十一年にして卒す。

【龍朔】 唐の高宗の年號、元年は日本齊明天皇七年。

【前に歸りて云云】 五祖の指示したまひしにより、山中に隠れて十五年を送り、十六年日に廣州の法性寺に出で、儀鳳元年は唐の高宗の年號、日本の天武天皇白鳳五年。

【三師】 授戒の師十願已滿を用ふ。

【說戒】 梵には布薩といふ。

【西京】 長安なり

【中天西國】 とも印度を稱す。

【其戒壇】 法性寺の戒壇は曾て跋陀

と爲る、蘇州の慧靜律師は羯磨を爲す、荊州の通應律師は教授を爲す、中天の普多羅律師は說戒を爲す、西國の蜜多三藏は證戒を爲す。其戒壇は乃ち宋朝の求那跋陀羅三藏、創建して碑を立てて曰はく、「後に當に肉身の菩薩ありて、此に於て授戒すべし。」と、又梁の天監元年、智藥三藏、西國より海に航して來るとき、彼土の菩提樹一株を將つて、此壇の畔に植う、亦預め誌して曰はく、「後一百七十年にして、肉身の菩薩ありて、此樹下に於て、上乘を開演して無量の衆を度せん。眞の佛心印を傳ふるの法主なり。」と。師是に至つて、祝髮受戒及び四衆の與に、單傳の旨を開示す、一へに昔の讖の如し。「梁の天監元年壬午の歲より唐の儀鳳元年丙子に至りて、一百七十五年を得たり。」次の年の春、師、衆を齎して寶林に歸る、印宗緇白と與に、送るもの千餘人、直に曹溪に至る。時に荊州の通應律師、學者數百人と與に、師に依りて住す、師、曹溪の寶林に至る、堂宇湫隘にして、衆を容るに足らざるを觀て、之を廣めんと欲す。遂に里人陳亞僊に謁して曰はく、「老僧、檀越に就いて坐具の地を求めんと欲す、得てんや不や。」僊曰はく、「和尚の坐具、幾許か闕き。祖坐具を出して之に示す、亞僊唯然す。祖坐具を以て一展して、盡く曹溪の四境を罩む、四天王身を現じて、坐して四方を鎮す、今寺の境に天王嶺あり、茲に因つて名く。僊曰はく、「知んぬ和尚の法力廣大なることを、但吾高祖の墳墓、並に此地に在り、佗日塔を造らば、幸に望むらくは存し留めんことを。餘は願くは、盡く捨てて、永く寶坊と爲さん。然も此地は、乃ち生龍白象の來れる脈なり、只天を平ぐべし、地を平ぐべからず。寺後に營

羅三藏の創建、南朝宋の文帝元嘉六年、印度より渡來す。

【梁天監元年】天監元年は梁武帝の年號、日本の武烈天皇四年。

【次の年の春】儀鳳二年に廣州の法性寺より韶州の寶林寺に移り給ふ。

【師曹溪六云】寶林寺は狭くして、衆僧の居處なき故この語は蓋し地衛家の言ふ所なり。

【其れ寶林の道場】寺の別名なり。

【寺の殿前】寶林寺の佛殿の前に潭あり、其中に生龍が出沒す。

建すること、一へに其言に依る。師境内山水の勝處に遊んで、輒ち憩止し、遂に蘭若一十三所を成す。今華果院と曰ふ、籍を寺門に隸す。其れ寶林の道場は、亦是より先、西國の智藥三藏、南海より曹溪の口を經るに、水を掬して飲む、香美なり、之を異しとす。其徒に謂つて曰はく、此水西天の水と別なることなし、溪の源上に必ず勝地あらん、蘭若と爲るに堪へん。流に隨つて源上に至り、四に顧みれば、山水回り環つて峰巒奇しく秀づ。嘆じて曰はく、宛も西天の寶林山の如し。乃ち曹侯村の民に謂つて曰はく、此山に於て、一梵刹を建つべし、一百七十年の後に、當に無上の法寶ありて、此に於て演化すべし、得道のもの林の如くならん、宜しく寶林と號すべし。時に韶州の牧、侯敬中、其言を以て、表に具へて聞奏す、上、其請を可して、寶林を賜うて額と爲して、遂に梵宮を成す。梁の天監三年に落成す。寺の殿前に、潭一所あり、龍常に其間に出沒して、林木を觸れ撓ます。一日形を現すること甚だ巨なり、波浪淘湧して、雲霧陰翳す、徒衆皆懼る。師、之を叱して曰はく、爾只能く大身を現じて、小身を現すること能はず、若し神龍たらば、當に能く變化して、小を以て大を現じ、大を以て小を現すべし。其龍忽ら沒す、俄頃あつて復小身を現じて、潭面に躍り出づ。師、鉢を展べて之を試みて曰はく、爾且く敢て老僧が鉢盂の裏に入らざらんや。龍乃し游揚して前に至る、師、鉢を以て之を舀む、龍動くこと能はず。師、鉢を堂上に持して、龍の輿に說法す、龍遂に斃骨して去る。其骨七寸ばかり、首尾角足皆具る、留めて寺門に傳へり。師、後に土石を以て、其潭を埋む、今殿前の左の側

に、鐵塔鎮處ある是れなり。

【師の摩腰石】是より以下は大師の傳衣が、咸亨二年なりといふ説あれども、龍朔元年に決定する證據を明す。

【王維】字は摩詰盛唐の人。

【柳宗元】字は子厚、中唐の人。

【張商英】字は天養、無盡居士なり宋の徽宗宣和四年十一月薨す。

【此を以て云云】これは咸亨二年の傳法といふ異説を非なりと決定したるなり。

【唐の憲宗】唐の十一代、諱は純、在位十五年、大師と蓋して大鑿禪師と賜ふ。

【宋の太宗】北宋の二代、諱は晃、在位二十一年、加號あり、塔を修造せらるるの詔を下す。

龍骨は至正己卯に於て、寺兵火に罹つて因つて失す、未だ之く所を知らず。師の摩腰石に、龍朔元年盧居士誌す。といふ八字を鐫る、此石今黃梅の東禪に存す。又唐の王維右丞、神會大師の爲に、祖師の記を作つて云はく、師、勞侶に混じて、積むこと十六載、印宗の經を講するに會うて、因つて爲に削髮す。と。又柳宗元刺史、祖師謚號の碑を作るに、云はく、師、信具を受けて遁れて南海の上に隠ること十六年、度るに其れ行いつべし、乃し曹溪に居して人師と爲る。又張商英丞相、五祖の記を作つて云はく、五祖、化を黃梅縣の東禪院に演ぶ、蓋し其れ母を將ふに便あり。龍朔元年に、衣法を以て六祖に付し已つて、衆を散じて東山に入つて庵を結ぶ。居人馮茂といふものあり。山を以て師に施して道場と爲す。と。此を以て之を考ふれば、則ち師、黃梅に至つて五祖のイ法を傳授すること、實に龍朔元年辛酉の歲より儀鳳丙子に至つて、一十六年を得て、師方に法性に至りて祝髮す。佗本に或は師、咸亨中に、黃梅に至ると作す、恐くは非ならん。

歷朝崇奉の事蹟

唐の憲宗皇帝、大師に諡して大鑿禪師と曰ふ。

宋の太宗皇帝、大鑿眞空禪師と加諡す、詔して師の塔を新にす、太平興國の塔と曰ふ。

宋の仁宗皇帝、天聖十年に、師の眞身及び衣鉢を迎へて、大内に入れて供養す。大鑿眞空普覺禪師と加諡す。

【宋の仁宗】北宋の四代、諱は頤、在位四十年、天聖十年は日本の後一條天皇長元五年、身は舍利なり。
 【宋の神宗】北宋の六代、諱は瓊、在位十八年。
 【師入塔の後云云】師の懸記に遇うたことを載す、上足とは弟子の首領なり。

【上元元年】師遷化後四十八年、肅宗内裏に請じて供養す。
 【永泰元年】師遷化後五十三年。

宋の神宗皇帝、大鑿眞空普覺圓明禪師と加蓋す、具に晏元獻公が碑記に見えたり。
 師入塔の後、開元十年、壬戌の八月三日の夜半に至つて、忽ち塔中に鐵索を拽くが如くなる聲を聞く、衆僧驚起して一りの孝子の塔中より走り出づるを見る、尋いで師の頸を見るに傷くことあり、具に賊事を以て州縣に聞す。縣の令楊侃、刺史柳無忝、牒を得て切しく擒捉を加ふ。五日にして石角村に於て、賊人を捕へ得たり。韶州に送つて鞠め問ふに、云はく、「姓は張、名は淨滿、汝州梁縣の人なり。洪州の開元寺に於て、新羅の僧金大悲に錢二十千を受け、六祖大師の首を取つて、海東に歸つて供養せしめんとす」と。柳守、狀を聞いて、未だ即ち刑を加へず、乃ち射ら曹溪に至つて、師の上足令韜に問うて曰はく、「如何が處斷せん」と韜の曰はく、「若し國法を以て論ぜば、理須らく誅夷すべし、但佛教の慈悲、冤親平等なることを以てせよ、況んや彼求めて供養せんと欲す、罪恕すべし。」柳守加嘆じて曰く、「始めて知る、佛門の廣大なることを。」遂に之を赦す。
 上元元年に肅宗使を遣して、就いて師の衣鉢を請うて、内に歸つて供養す。永泰元年五月五日に至つて、代宗夢むらく、六祖大師衣鉢を請ふと、七日に刺史楊絨に勅して云はく、「朕夢に能禪師、傳法の袈裟を請うて、却つて曹溪に歸せんことを感ず、今鎮國大將軍劉崇景を遣して、頂戴して送らしむ。朕之を國寶と謂ふ、即ち本寺に於て、如法に安置すべし、専ら僧衆の親しく宗旨を承ぐものをして、嚴しく守護を加へて、遺墜せしむること勿らしめよ。」後に或は人の爲偷竊せらるれども、皆遠からずして獲。是の如

附

錄終

くなるもの數四、憲宗、大鑑禪師と謚し、塔を元和靈照といふ。其餘の事蹟は、係けて唐の尙書王維、刺史柳宗元、刺史劉禹錫等が碑に載せたり。守塔の沙門令箱録す。

跋

【大乘圓頓】教意の至極なり、爰にては見性の直指をさすなり。
 【明教の嵩公】宋の人、洞山聰に嗣法す、宋の神宗熙寧四年六月四日寂す。日本の後三條天皇延久三年、雲門五世の法孫。壇經讀あり、鐔津文集に出づ。

【石頭】希遷、書原に嗣ぐ。

【至元辛卯】大元の世宗至元二十八年、日本の伏見天皇正應四年、徳異刊行の序の夏年。

六祖大師、往昔説きたまふ所の法は、皆大乘圓頓の旨なり、故に之を月けて經と曰ふ。其言近うして旨遠く、詞坦かにして義明かなり、誦するもの各獲る所有り。明教の嵩公常に讚じて云はく、天機、利なるものは得ること其れ深く、天機、鈍なるものは得ること其れ淺し。と、誠なる哉言ふことや。余初道に入りしとき、斯に感有りき。續いて三本を見るに同じからず、互に得失有り、其板も亦已に漫滅す、因つて其本を取つて校讎す。詭るものをば之を正し、略せるものをば之を詳かにし、復弟子請益の機縁を増入す、庶幾はくは學者曾溪の旨を盡すことを得んことを。按察使雲公從龍、深く此道に造る、一日山房に過ぎて、余が所編を賸て謂へらく、「壇經の大空を得たり」と。慨然として工に命じて梓に録む、顯ら流通を爲して、曹溪の一派をして斷絶に至らざらしめんとたり。或ひとの曰はく、「達磨は文字を立せず、直に人心を指して、見性成佛せしむ。盧祖は六葉の正傳、又安んぞ是文字を用ふるや。」余が曰はく、「此經は文字に非ず、達磨單傳直指の指まり、南嶽、青原の諸大老、嘗て是指に因つて、以て其心を明め、後に之を以て馬祖、石頭諸子の心を明む。今の禪宗の天下に流布せる、皆是指に本づく。而今よりしてのち、豈是指に因ることなうして、心を明め性を見るものあらんや。」問ふもの唯唯として再拜して謝して曰はく、「予不敏なり、請ふ併せて經の末に書して、以て來者に詔げん。」

至元辛卯の夏

南海の釋の宗寶跋す。

傳
心
法
要

宗
典
部

第
二
十
二
卷



【黄檗山】福州洪州の兩處にあり、茲は洪州を指す。

【傳心法要】單傳佛心印の法式肝要を録す。

【裴休】唐の宣宗皇帝の宰相。

【西堂】知藏禪師鳥祖大寂に嗣ぐ。

百丈と同參。

【會昌二年】壬戌唐の武宗の年號、鐘陵、洪州。使、官名。【山より】龍興寺は唐の玄宗の勅建【大中二年】唐の宣宗の年號、戊辰【宛陵】鄭州。【神に入るの精義】これは黄檗の説法の深義。

黄檗山斷際禪師傳心法要

河東裴休集并序

大禪師有り、法の諱は希運、洪州の高安縣黄檗山鷲峯の下に住す。乃ち曹谿の六祖の嫡孫、西堂百丈の法姪なり。獨り最上乘を佩びて、文字の印を離れ、唯一心を傳へて、更に別法無し。心體も亦空にして、萬緣俱に寂なり、大日輪の虚空の中に昇つて、光明照耀して、淨うして纖埃なきが如し。之を證するものは、新舊なく淺深なし、之を説くものは、義解を立せず、宗主を立せず、戸牖を開かず、直下便ち是なり。念を運ふれば即ち乖く、然して後本佛と爲す。故に其言簡にして、其理直なり、其道峻にして、其行孤なり。四方の學徒、山を望んで趨り、相を觀て悟る。往來の海衆、常に千餘人、予會昌二年、鐘陵に廉たり、山より迎へて州に至らしめ、龍興寺に憩はしめ、旦夕に道を問ふ。大中二年、宛陵に廉たり、復去つて禮し迎へて、所部に至つて開元寺に安居せしめ、旦夕法を受く、退いて之を紀するに、十が一二を得たり。佩びて心印と爲す、敢て發揚せず。今神に入るの精義未來に聞せざらんことを恐れて、遂に之を出して、門下の僧太舟法建といふものに授けて、舊山の廣唐寺に歸つて、長老法業に、往日常に親しく聞く所と、同異何如と問はしむ。時に唐の大中十一年十月八日序す。

黃檗山斷際禪師傳心法要

鐘陵錄

【本書は、黄檗希運禪師の說法を裴休居士が筆録したるものにして、嫡々相承せる心を以て心を傳へ文字を立てざる宗意を提撕せざるものなり。】

【師】黄檗。名は休、字は公美、河東の關喜の人、慧の觀察使たり。

【當體】色身の當體。【動念】迷悟生佛等。【著相に著し】有相即ち三十二相等

【窮劫】窮盡永劫生生身形。【六度萬行】六度は八萬の細の略。【功用】悟道の功德妙用。【別佛】別佛の求むべきなし。

師、休に謂つて曰はく、「諸佛と一切衆生と、唯是れ一心にして更に別法無し。此心無始より已來、曾て生ぜず曾て滅せず、青ならず、黄ならず、形無く相無く、有無に屬せず、新舊を計せず、長にあらず短にあらず、大にあらず小にあらず、一切の限量、名言蹤跡、對待を超過して、當體便ち是なり。念を動すれば便ち乖く、猶虚空の邊際有ること無く、測度すべからざるが如し。唯此一心即ち是れ佛なり、佛と衆生と更に別異無し。但是れ衆生は相に著し外に求む、之を求むれば、轉失す。佛をして佛を覓めしめ、心を將て心を捉へしむ。窮劫形を盡すも、終に得ること能はず、念を息め慮を忘すれば、佛自ら現前することを知らず。」

此心即ち是れ佛、佛即ち是れ衆生なり。衆生と爲る時此心滅ぜず、諸佛と爲る時此心添はず。乃至六度萬行、河沙の功德、本自ら具足して修添を假らず、縁に遇うては即ち施し、緣息めば即ち寂なり。若し決定して此は是れ佛なりと信ぜずして、相に著し修行して、以て功用を求めんと欲せば、皆是れ妄想にして道と相乖く。此心即ち是れ佛更に、別佛無し、亦別心無し。此心明淨なること、猶し虚空の一點の相貌無きが如し。心を擧し

【法體】 眞如の法體。

【大日輪】 一心の明暗變相なり。

【虚空】 人心眞空。

【相凌奪】 明は暗を奪ひ、暗は明を凌ぐ。

【清淨光明云云】 光明は其智、煩惱を解脱す。

【衆生を觀て】 下方の思を生ず。

【垢濁暗昧】 垢濁は其暗昧、暗昧は智此解。二見。

【心上に心を生じ】 即心即佛。

【惡法】 心外に法を求む。

【十方の諸佛云云】 有相に執着するが故に。

【一箇無心】 雜用無心。

【如如】 法身如如心如鏡如。

【能所】 能は動、所は受動。

【所以】 元より知見を管せず。

【知見云云】 知見を求むるもの多く

念を動すれば即ち法體に乖く、即ち著相と爲す。無始より已來、著相の佛無し。六度萬行を修し、成佛を求めんと欲するは即ち是れ次第なり。無始より已來次第の佛無し。但一心を悟つて更に少法の得べき無し、此れ即ち眞の佛なり。佛と衆生と一心にして異なること無し、猶し虚空の雜も無く壞も無きが如し。大日輪の四天下を照し、日昇るの時は明天下に徧くとも、虚空會て明ならず、日没するの時は、暗天下に徧くとも、虚空會て暗ならざるが如し。明暗の境は、自ら相凌奪するも、虚空の性は廓然として變ぜず。佛及び衆生の心も亦此の如し。若し佛を觀て、清淨光明解脱の相と作し、衆生を觀て、垢濁暗昧生死の相と作す、此解を作さば河沙劫を歷るとも、終に菩提を得ず。相に著するが爲の故に、唯此一心。更に微塵許りも法の得べき無し、即心是れ佛なり。如今の學道の人此心體を悟らず、便ち心上に於て心を生じ、外に向つて佛を求め、相に著して修行す。皆是れ惡法にして菩薩道にあらず。十方の諸佛を供養するは、一箇の無心道人を供養するに如かず。何が故ぞ、無心とは一切の心無きなり。如如の體は内木石の如くにして、動ぜず揺かず、外虚空の如くにして、寒がす礙へず、能所も無く方無所無く、相貌も無く得失も無し。遂ゆる者は敢て此法に入らず。空に落ち棲泊の處無からんことを恐る。故に崖を望んで退く、例して皆廣く知見を求む。所以に知見を求むる者は毛の如く、道を悟る者は角の如し。文殊は、理に當り、普賢は行に當る。理とは眞空無礙の理、行とは離相盡くる無きの行なり、觀音は大慈に當り、勢至は大智に當る。維摩とは淨名なり、淨とは性なり、名と

傳心法要

三

道を求むるもの少きをいふ。

【毛の如く】無を以て有となす。

【道なきに悟る者云云】

【理】妙理。

【行】妙行を云ふ。これより諸佛の妙相を證し。

【眞空】假を離るるを云ふ。

【離相】有爲の相を離るるを云ふ。

【性】自性なり。

【相】有相の故に名あり。

【性相云云】内外畢竟一致。

【無心】人人爲心を離れず諸菩薩の如く一切即ち是なり。

【恒河云云】此より無心を説く。

【諸佛】最勝。

【十二天】帝釋梵天等。

【牛羊】下劣。

【究竟】大道。

【三乘】聲聞、緣覺、菩薩。

【功行】勳功修行。

は相なり、鞋相異らざるが故に淨名と號す、諸大菩薩の表する所の者、人皆之れ有り、一心を離れず、之を悟れば即ち是なり。今學道の人、自心の中に向つて悟らば、乃ち心外に於て相に著して境を取ら、皆道と背く。恒河沙とは、佛は沙を説き、一は、諸佛菩薩、釋梵諸天、歩履んで過ぐれども、沙亦喜ばず、牛羊蟲蛇、踐踏して行けども、沙亦怒らず、珍寶寶香をも、沙亦食らず、糞溺臭穢をも、沙亦惡まず。此心は即ち無心の心なり。一切の相を離れば、衆生と諸佛と更に差別無し、但能く無心なる、便ち是れ究竟なり。學道の人、若し直下に無心ならずんば、暴助に修行するも終に道を成せず、三乘の功行に拘繫せられて解脱を得ず。然して此心を證するに遅疾有り、法を聞いて一念に便ち無心を得る者有り、十倍十住、十行十廻行に至つて、乃ち無心を得る者有り、十地に至つて、乃ち無心を得る者有り、長短無心を得れば、乃ち住む、更に修すべく證すべき無し。實に所得無し、眞實にして虚しからず、一念にして得ると、十地にして得る者と、功用恰も齊しうして、更に深淺無し。祇是れ歷劫、枉げて辛勤を受くるのみ。惡を造り、善を造る、皆是れ著相なり。相に著して、惡を造るは、枉げて輪廻を受く、相に著して、善を造るは、枉げて勞苦を受く。總て言下に、便ち自ら本法を認取せんに如かず。此法、即ち心なり、心外に法無し、此心即ち法なり、法外に心無し。心自ら無心なれば、亦無心なるもの無し。心を將て、心を無すれば、心却つて有と成る、默契するのみ。諸の思議を絶す。故に言語道斷、心行處滅と曰ふ。此心、是れ本源清淨佛なり、人皆是れ有り、靈動含靈と諸佛

【拘繫】執縛。
 【此心】無心なり。
 【遍疾】純快利根。
 【十信云云】菩薩より佛に至るまでの順路。
 【實】無心を得と雖も。
 【眞實不虛云云】一切の虚假を離る。
 【一念】疾者。
 【十地】運者。
 【祇是云云】運者著相有相。
 【惡】死の輪廻を受く。
 【輪廻】迷界の衆生が、三界六道に沈淪。
 【總】五戒十善。善相惡相。
 【本法】本源心法。
 【此法】法心の規則。
 【亦無】無心に超越す。
 【心却】心の蹤跡を踏す時は有心。
 【言語道斷】舌頭上に在らず。
 【心行處滅】知解を離る。
 【此心】染汚の心

菩薩と一體にして異ならず、祇妄想分別するが爲に、種種の業果を造る。本佛上には、實に一物無し、虚通寂靜にして、明妙安樂なるのみ。深く自ら悟入すれば、直下に、便ち是れ圓滿具足して、更に欠くる所無し。縱使三祇精進修行して、諸地位を歴るも、一念證する時に及んでは、只元來自佛を證す。向上に更に一物を添得せず、却つて歷劫の功用を觀るに、總て是れ夢中の妄爲なり。故に如來云はく、「我阿耨菩提に於て、實に所得無し、若し所得有らば、然燈佛は、則ち我に授記を與へず」と。又、云はく、「是法は、平等にして高下有ること無し、是を菩提と名く」と。即ち此本源清淨心と衆生諸佛世界山河と、有相にもあれ無相にもあれ、徧十方界と一切平等にして彼我の相無し。此本源清淨の心、常に自ら圓明にして、徧く照すも、世人悟らずして、只見聞覺知を認めて心と爲し、見聞覺知の覆ふ所と爲る。所以に精明の本體を觀ず。但直下に無心なれば、本體自ら現すること大日輪の虚空に昇り、徧く十方を照して更に障礙無きが如し。故に學道の人、唯見聞覺知を認めて施爲動作す、見聞覺知を空却すれば、即ち心路絶して入處無し、但見聞覺知の處に於て本心を認む。然も本心は見聞覺知に屬せず、亦見聞覺知を離れず。但見聞覺知の上に於て見解を起すこと莫れ、見聞覺知の上に於て念を動すること莫れ、亦見聞覺知を離れて心を覺むること莫れ。亦見聞覺知を捨てて法を取ること莫れ。即せず離せず住せず著せざれば、縱横自在にして道場に非ざること無し。世人諸佛は皆心法を傳ふと道ふことを聞きて、將に謂へり、心上に別に一法の證すべく取るべきありと、遂に心を將て法

にあらず。

【本源】一切達悟凡聖等を超越す。

【蠢動含靈】一切の有情。蠢蠢は動提。

【妄想分別】佛を求め悟を求む。

【業果】善惡の業界。

【本佛】本源清淨佛。

【一物無】達悟凡聖等。

【明妙安樂】明妙は始覺、生死を絶すは安樂。

【三祇】三阿僧祇劫の略。

【請地位】五十二位。

【元來自佛】自己佛心。

【如來云】金剛經の文。

【所得無し】無所得の無得。

【所得有ら】奴を認めて郎と爲す。

【然燈佛】定光佛

【是法云云】高は佛、下は衆生、善

を覓む、心卽是法、法卽是心なるを知らず、心を將て更に心を求むべからず、千萬劫を歴とも終に得る日無からん。如かず當下に無心ならんには、便ち是れ本法なり、力士の額内の珠に迷うて、外に向つて求覓して周く十方に行けども、終に得ること能はざるが如し。智者は之を指せば當時に自ら本珠を見ること故の如し。故に學道の人、自の本心に迷うて、認めて佛と爲さず、遂に外に向つて求覓して、功用の行を起して次第に依つて證とす、歷劫勤求すとも永く道を成ぜず。如かず當下に無心ならんには、決定して一切の法本所有も無く亦所得も無く、依も無く住も無く、能も無く所も無しと知りぬれば、妄念を動ぜずして便ち菩提を證す。道を證する時に及んで、只本心の佛を證す。歷劫の功用、並に是れ虚しく修するなり。力士の珠を得る時、只本額の珠を得て、外に向つて求覓するの力に關らざるが如し。故に佛言はく、「我阿耨菩提に於て、實に所得無し」と。人の信ぜざることを恐る、故に五眼の所見、五眼の所言を引く。眞實にして虚ならず、是れ、第一義諦なり。

學道の人、疑ふこと莫れ、四大を身と爲す、四大我無く、我も亦主無し。故に知んぬ、此身我無く亦主無きことを。五陰を心と爲せば、五陰我無く亦主無し。故に知んぬ、此心我無く亦主無きことを、六根六塵六識和合す、生滅も亦復是の如し。十八界既に空すれば、一切皆空す、唯本心のみありて、蕩然として清淨なり。識食有り智食有り、四大の身饑瘠して患と爲る。隨順供養して食著を生ぜざる、之を智食と謂ふ。情を恣にして味を

提は道。【此本源】人人具
 有。【有相、無相】明
 界と幽界と。【一切平等】萬物
 一掃。【精明】本心。
 【無心】一心の本
 體。【德障云云】十界
 成道の面目。【學道の人】修學
 大道の人。【施爲】左之右之
 【空却】見聞覺知
 【心路】頑石の如
 し。【人處】悟人の處
 【當下】言語分別
 【次第に依】五十
 二位の階級。【妄念】生佛迷悟
 【本の佛】本來自
 心。【五眼】肉眼、天眼、
 佛眼。【五語】金剛經の
 如來是眞誥者實誥
 者、如誥者、不誥
 誥者、不誥者、不誥
 誥者。

取り、妄に分別を生じ、唯口に適せんことを求めて、厭離を生ぜざる、之を識食と謂ふ。
 聲聞は聲に因つて得悟す、故に之を聲聞と謂ふ。但自心を了ぜずして、聲教の上に於て解
 を起し、或は神通に因り、或は瑞相言語運動に因つて、菩提涅槃あることを聞いて、三僧
 祇劫修して、佛道を成ずるは皆聲聞道に屬す、之を聲聞佛と謂ふ。唯直下に頓に自心本來
 是れ佛なることを了して、一法の得べき無く、一行の修すべき無し、此は是れ無上の道な
 り、此は是れ眞如佛なり。學道の人、祇怕らくは一念、有なれば即ち道と隔たる。念念無
 相、念念無爲なる、即ち是れ佛なり。學道の人、若し成佛を得んと欲せば、一切の佛法、
 總て學ぶことを用ひざれ。唯無求無著を學べ、求むること無ければ、即ち心生ぜず、著す
 ること無ければ、即ち心滅せず、不生不滅、即ち是れ佛なり。八萬四千の法門は八萬四千
 の煩惱に對す。祇是れ教化接引の門なり。本一切の法無し、離は即ち是れ法なり、離する
 ことを知る者は是れ佛なり。但一切煩惱を離るれば、是れ法の得べき無し。
 學道の人、若し要訣を知ることを得んと欲せば、但心上に於て一物に著すること莫れ、
 佛の眞法身は、猶虚空の如しと言ふ。此は法身即虚空、虚空即法身なるに喩ふ。常人は法
 身は虚空に徧く、虚空の中に處して、法身を含容すと謂ふ。法身即虚空、虚空即法身なる
 ことを知らず。若し定んで虚空有りと言はば、虚空是れ法身にあらず、若し定んで法身有
 りと言はば、法身是れ虚空にあらず。但虚空の解を作すこと莫れ、虚空即法身なり、法身
 の解を作すこと莫れ、法身即虚空なり。虚空と法身と異相無く、佛と衆生と異相なく、生

【眞實云云】 無所得。【第一義諦】 具には第一義門、無所得の大道。【四大】 地、水、火、風。【主無し】 四大中生處なし。【四大身】 此身。【五陰】 色、受、想、行、識。【亦主無し】 五陰中主處なし。【六根】 眼、耳、鼻、舌、身、意。【六義】 五根五塵を五義と爲す。分別を起すは六識。【十八界】 六根と六塵、六識を總稱して十八界といふ。

【當然】 高大廣遠。【美食】 八識は奉心を起す。【肉食】 法有淨覺等。【饑渴】 色身は饑を以て渴となす。【分別】 五塵境。【聲聞】 小乘。【自心を了せず】

死と涅槃と異相無く、煩惱と菩提と異相なし。一切の相を離る、即ち是れ佛なり。凡夫は境を取り、道人は心を取る。心境雙び忘す、乃ち是れ眞法なり。境を忘ずることは猶易く、心を忘ずることは至つて難し。人敢て心を忘せざるは、空に落ちて擣撲無き處を恐る。一空、本空無く、唯一眞法界のみなることを知らざるのみ。此靈覺の性は、無始より已來、虚空と毒を同じうす、未だ曾て生せず、未だ曾て滅せず、未だ曾て有ならず、未だ曾て無ならず、未だ曾て續ならず、未だ曾て淨ならず、未だ曾て暗ならず、未だ曾て寂ならず、未だ曾て少ならず、未だ曾て老いず、方所無く内外無く、數量無く形相無く、色象無く音響無し。覓むべからず求むべからず、智慧を以て識るべからず、言語を以て取るべからず、境物を以て會すべからず、功用を以て對るべからず、諸佛菩薩と一切蠢動含靈と、同じく此れ大涅槃の性なり。性は即ち是れ心、心即ち是れ佛、佛即ち是れ法なり。一念も眞を離るれば皆妄想と爲る、心を以て更に心を求むべからず、佛を以て更に佛を求むべからず、法を以て更に法を求むべからず。故に學道の人、直下に無心にして默契するのみ。心を擬すれば即ち差ふ、心を以て心を離ふ、是を正見と爲す。愼んで外に向つて境を逐ふこと勿れ、境を認めて心と爲すは、是賊を認めて子と爲すなり。貪瞋癡あるが爲に、即ち戒定慧を立つ。本煩惱無くんば、焉ぞ善法あらん。故に祖師云はく、「佛一切の法を説くことは、一切の心を除かんが爲なり、我に一切の心無くんば、何ぞ一切の法を用ひん」と。本源清淨佛の上に、更に一物を著けず。譬へば虚空の無量の珍寶を以て莊嚴すと雖も、終に住む

聲聞の修行。

【言語】 問答等。

【運動】 行住坐臥

【眞如佛】 眞如實

相の田地。

【對】 煩惱對治の爲に。

【教化接引】 衆生を教化し佛道に接引するの。

【德】 これは煩惱等をいふ。

【者】 人に同じ。

【眞法身】 法を體とせるもの義、佛三身の一。

【一切の相】 異相

【道人】 學道の人

【性】 性は眞心。

【業】 性は眞心。

【學道人】 外に向つて求むべからず

【正見】 默證契

【眞の解】 正智見。

【境】 迷悟の境。

【蓋用】 明鑑作用

【歷歷】 歷歷孤明

【寂寂】 寂寂痕跡なし。

【惺惺】 染汚せず

【親證】 卽心是佛

【沒處有】 卽心是佛

【沒處有れば云云】

傳心法要

ること能はざるが如し。佛性は虚空に同じ、無量の功德智慧を以て莊嚴すと雖も、終に住むること能はず。但本性に迷うて轉見ざるのみ。謂ゆる心地の法門とは、萬法皆此心に依つて建立す。境に遇へば卽ち有、境なければ卽ち無なり。淨性の上に於て、轉じて境の解を作すべからず。言ふ所の定慧體用、歴歴寂寂惺惺たり、見聞覺知は並に是れ境上に解を作す。暫く中下根の人の爲に説くことは卽ち得たり。若し親證を欲せば、皆此の如きの見解を作すべからず。盡く是れ境の法なり。沒處有れば有地に沒す、但一切の法に於て有無の見を作さざる、卽ち見法なり。」

九月一日師、休に謂て曰はく、「達磨大師中國に到つてより、唯一心を説き唯一法を傳ふ。佛を以て佛を傳へて餘佛を説かず、法を以て法を傳へて餘法を説かず、法は卽ち不可説の法、佛は卽ち不可取の佛なり。乃ち是れ本源、清淨の心なり。唯此一事實にして、餘の二は卽ち眞に非ず、般若を慧と爲す、此慧は卽ち無相の本心なり。凡夫は道に趣かず、唯六情を恣にして乃ち六道を行す。學道の人、一念も生死を計らば卽ち魔道に落つ。一念も諸見を起さば卽ち外道に落つ、生ありと見て其滅に趣くは卽ち聲聞道に落つ、生ありと見ずして唯滅ありと見ば、卽ち緣覺道に落つ。法本より不生、今も亦滅無し。二見を起さず、厭はず忻はず、一切の諸法、唯是れ一心なり。然る後乃ち佛乘と爲す。凡夫は皆境を逐うて心を生ず、心遂に忻厭す。若し境無からんことを欲せば、當に其心を忘すべし。心忘すれば卽ち境空なり、境空なれば卽ち心滅す。若し心を忘せずして但境

【有地】性見。境有。

【六情】六根識情。有生有死。

【先死】有生有死。有無迷悟。

【諸見】有無迷悟の見。

【聲聞】佛の教誨の聲をききて悟る人といふ意。

【緣覺道】十二因縁の法を緣じて、我執を除き涅槃に悟入す。

【二見】生死なり。真心。妄心。

【境空】所對境。心滅。能對心。

【心を忘せず】能

【境を除く】所對境

【佛言】全剛經の

【性】心性。生死。

【三世】宇宙一切

【法界】宇宙一切

【化城】方便門なり、法華七喻の一

【接引を立てる】中下根機の接取導

を除かば、境除くべからず、祇益紛擾す。故に萬法唯心、心も亦不可得なり、復何をか求めんや。

般若を學する人は、一法の得べきあるを見ず、意を三乘に絶す、唯一眞實にして證得すべからず。我能く證し、能く得ると謂ふは、皆增上慢の人なり。法華會上に衣を拂つて去りし者、皆斯徒なり。故に佛言はく、「我善提に於て、實に所得なし」と、默契するのみ。

凡そ人終らんと欲する時に臨んで、但五蘊皆空にして、四大我無く、眞心無相にして、去らず來らずと觀すべし。生ずる時、性も亦來らず、死する時性も亦去らず、湛然圓寂にして、心境一如なり。但能く是の如く直下に頓に了すれば、三世の拘繫する所と爲らず、便ち是れ出世の人なり。切に分毫の趣向あることを得ざれ。若し善相の諸佛來迎し、及び種種現前するを見ても、亦心の隨ひ去ること無し。若し惡相種種に現前するを見ても、亦心の怖畏すること無し。但自ら心を忘れて、法界に同じければ、便ち自在を得るなり、此れ即ち是れ要節なり。

十月八日、休に謂つて曰はく、「化城と言ふは、二乘及び十地等覺妙覺、皆是れ權に接引を立てるの教、並に化城と爲す。寶所と言ふは、乃ち眞心本佛自性の寶なり。此寶は情量に屬せず、建立すべからず、佛も無く衆生も無く、能も無く所も無く、何處にか城あらん。若し此れ既に是れ化城ならば、何の處をか寶所と爲さんと問はば、寶所指すべからず、指せば即ち方所あり、眞の寶所に非ざるなり。故に在近と云ふのみ。定量して之を言ふ

引。

【情量】 情識度量
【實所】 十方世界

【沙門】 一
【會契】 入と證と

【空】 空見。

【能所】 化我と化
他と。

べからず、但當體之を會契するは即ち是なり。

闍提と言ふは信不具なり、一切六道の衆生、乃至二乘佛果有ることを信ぜざる、皆之を斷善根闍提と謂ふ。菩薩とは深く佛法有ることを信じ、大抵聲教に因つて悟る者、之を聲聞と謂ふ。衆生と同一法性なる、乃ち之を善根闍提と謂ふ。大抵聲教に因つて悟る者、之を聲聞と謂ふ。因縁を觀じて悟る者、之を緣覺と謂ふ。若し自心の中に向つて悟らざれば、成佛に至ると雖も、亦之を聲聞佛と謂ふ。學道の人、多く教法の上に於て悟つて、心法の上に於て悟らざれば、歷劫に修行すと雖も、是れ本佛にあらず。若し心に於て悟らず、乃至教法の上に於て悟らば、即ち心を輕くして教を重んずるなり。遂に塊を逐ふと成す。本心を忘るるが故に、但本心に契うて法を求むることを用ひざれば、心即ち法なり。

凡そ人多く境、心を礙へ、事、理を礙ふると爲うて、常に境を迷れて以て心を安んじ、事を屏て以て理を存せんと欲す。知らず、乃ち是れ心、境を礙へ、理、事を礙ふること。但心をして空ならしむれば、境自ら空なり、但理をして寂ならしむれば、事自ら寂なり、倒に用心すること勿れ。凡そ人多く心を空ずることを肯はざる、空に著ちんことを恐れてなり。自心本空なることを知らず。愚人は事を除いて心を除かず、智者は心を除いて事を除かず。菩薩は心虚空の如くにして、一切俱に捨てて、所作福德、皆食著せず。然して捨に三等有り、内外身心、一切俱に捨てて、猶虚空の如くにして取著する所なし。然る後、方に隨つて、物に應ずれども、能所皆忘す、是を大捨となす。若し一邊、道を行

【傍に在】十方に通ぜず。
【坑窞】迷悟凡聖有無等。

【心を以て心を印し】佛心を以て祖心を印す。

【自性虚通】既に法身と云ふときは自性虚通の法顯れ去る。
【化身】應化現の故に化身又應身と云ふ。
【故曰】金剛經の「轉化」大小乗の差別あり。

【六識を云云】眼色にて分別し、耳聲にて分別す。

じ徳を布き、一途に棄捨てて希望の心無き、是を中捨となす。若し廣く衆善を修して、希望する所有れども、法を聞いて空を知りて、遂に乃ち著せざる、是を小捨と爲す。火捨は火燭の前にあるが如く、更に迷悟無し、中捨は火燭の傍に在るが如く、或は明或は暗、小捨は火燭の後に在るが如く、坑窞を見ず。故に菩薩は心、虚空の如くにして、一切俱に捨つ。過去心不可得なるは是れ過去の捨、現在心不可得なるは是れ現在の捨、未來心不可得なるは是れ未來の捨、謂ゆる三世俱に捨するなり。如來、法を迦葉に付してより已來、心を以て心を印して、心心異らず、印、空に著くれば即ち印、文を成さず、印、物に著くれば即ち印、文を成さず、故に心を以て心を印して、心心異らず。能印所印、俱に契會し難し、故に得る者少し。然して心即ち無心なれば、得るも即ち無得なり。

佛に三身あり、法身は自性虚通の法を説き、報身は一切清淨の法を説き、化身は六度萬行の法を説く。法身の説法は、言語音聲、形相文字を以て求むべからず、所説なく所證なし、自性虚通なるのみ。故に曰はく、「法の説くべき無し、是を説法と名く」と。報身化身は、皆機に隨つて感現す、所説の法も亦事に隨ひ根に應じて、以て攝化を爲す。皆眞法に非ず。故に曰はく、「報化は眞佛に非ず、亦説法者にあらず」と。
言ふ所同じく是れ一精明、分つて六和合と爲る。一精明とは一心なり、六和合とは六根なり。此六根各塵と合す、眼と色と合し、耳と聲と合し、鼻と香と合し、舌と味と合し、身と觸と合し、意と法と合す。中間に六識を生じて十八界と爲る。若し十八界、所有なし

【無所有】 假和合相。

【解】 教相判釋則ち悟解。

【本心】 精明、契は常。

【妙道】 一乘。

【本法非ず】 方便法門の故。

【故云】 法華經の文。

【一乘】 眞法。

【餘二】 大小等。

【一枝の法】 金波羅華を拈す。

【別に行】 教外別傳。

【道は是れ何物】 何ぞ他に向つて修むせんと欲する。

【諸方の宗師】 人々脚下底。

【接引】 祖師慈悲

と了ぜば、六和合を束ねて一精明と爲す。一精明とは即ち心なり。學道の人、皆此を知れども、但一精明、六和合の解を作すことを免るること能はず。遂に法縛を被り、本心に契はず、如來世に現じて、一乘の眞法を説かんと欲すれども、則ち衆生信ぜずして、謗を興し苦海に没す。若し都べて説かずんば、則ち慳貪に墮せん。衆生の爲に薄く妙道を捨てず、遂に方便を設けて三乘ありと説く。乘に大小有り、得に淺深有り、皆本法に非ず、故に云はく、「唯一乘道あり、餘の二は則ち眞に非ず」と。然れども終に未だ一心の法を顯すこと能はず、故に迦葉を召して法座を同じうして、別に一心を付して言説の法を離る。此一枝の法を別に行せしむ、若し能く契悟せば、便ち佛地に至らん。

問ふ、「如何が是れ道、如何が修行せん。」師云はく、「道は是れ何物ぞ、汝修行せんと欲すや。」問ふ、「諸方の宗師、相承して參禪學道するは如何。」師云はく、「鈍根の人を接引するの語なり、未だ依憑すべからず。」云はく、「此れ既に是れ鈍根の人を接引する語なり、未嘗し上根の人を接するに、復何の法をか説く。」師云はく、「若し是れ上根の人ならば、何の處にか更に他に就いて他を覚めん、自己すら尙不可得なり。何に況んや更に別に法有つて情に當らんや。」見すや、教中に云はく、「法法何の狀ぞと。」云はく、「若し此の如きんば、則ち都べて求覓を要せざらんや。」師云はく、「若し與麼ならば則ち心力を省く。」云はく、「是の如くならば渾べて斷絶となる、是れ無なるべからざらんや。」師云はく、「阿誰か他をして無ならしむ、他は是れ阿誰ぞ、爾他を覚めんと擬すや。」云はく、「既に覺むることを許さずんば、

【作麼生】如何なるわけ等の義に用ふ。

何が故ぞ、又他を斷ずること莫れと言ふ。師云はく、若し覺めずんば便ち休せん、即ち誰か備をして斷せしむ。爾目前の虚空を見るに、作麼生か他を斷せん。云はく、此法便ち虚空に同じきことを得べけんや否や。師云はく、虚空早晚備に向つて、同有り異有り。道ふ、我誓く此の如く説く、爾便ち這裏に向つて解を生ず。云はく、應に是れ人の與に解を生ぜざるべしや。師云はく、我曾て汝を障へず、要且つ解は情に屬す、情生すれば智障たる。云はく、這裏に向つて情を生ずること莫くんば是なりや否や。師云はく、若し情を生ぜずんば、阿誰か是と道はん。

問ふ、一纏に和尚の處に向つて言を發すれば、什麼と爲てか便ち語墮すと道ふ。師云はく、汝自らは是れ語を解せず、人に什麼の墮負か有らん。

【抵敵】相敵對。

【物を將て】自己を返照するの義。
【物動】是非を争ふ、狂狗の如しと

【學解】學知了解

こと有らず。師云はく、實法には顛倒なし、汝今問處に自ら顛倒を生ず、什麼の實法をか覺めん。云はく、既に是れ問處に自ら顛倒を生ず、和尚の答處如何。と。師云はく、爾日つ物を將て面を照して看よ、他人を管すること莫れ。又云はく、只箇の痴狗の如くに相似たり、物動する處を見て便ち吠ゆ、風草木を吹くも也別ならず。又云はく、我此禪宗、從上相承してより已來、曾て人をして知を求め解を求めしめず。只學道と云ふも、早く是れ接引の詞なり。然して道も亦學ぶべからず、情に學解を存すれば、却つて迷道と成る。道に方所なきを大乘の心と名く。此心は内外中間に在らず、實に方所なし。第一に知解を

【如今の情】知を
 求め解を求む。
 【情中】知解。
 【出来】出世。
 【此事】一大事。
 【權を守つて】元
 來權方便の故に。
 【故云】莊子にい
 ぶ。
 【果】極果。
 【慮】知慮學解。
 【絶學】身心を忘
 却するなり。
 【絶學無爲】大休
 歌底。
 【今時の人云云】
 東華を擧ぐ。
 【塵塞】大道の障
 礙。
 【酥乳】知解文義
 消滅を消す。
 【三乘】教相家。
 【此藥】横様。
 【毒藥】佛の慧命
 を殺す。
 【取】認取。
 【此事】事は知解
 故云。涅槃經の
 文。
 【如來藏】真心直
 說。
 【有を破る法王】

作すことを得ざれ、只是れ汝が如今の情量の處を説く。情量若し盡きなば、心に方所な
 し、此道は天真にして本名字無し、只世人識らずして、迷うて情中に在るが爲に、所以に
 諸佛出来して此事を説破す。爾諸人の了ぜざることを恐れて、權に道の名を立つ。名を守
 つて解を生ずべからず。故に云はく、魚を得ては筈を忘すと。身心自然に道に達し心を識
 つて本源に達するが故に、號して沙門と爲す。沙門の果とは慮を息むるに従つて成ず、學
 に従つて得るにあらず、汝如今心を將て心を求め、他の家舍に傍ふ、只學取せんと擬す、
 什麼の得る時か有らん。古人は心利にして縦に一言を聞いて便乃ち絶學す、所以に喚んで
 絶學無爲の閑道人と作す。今時の人は只多知多解を得んと欲して、廣く文義を求むるを、
 喚んで修行となす。知らず、多知多解は却つて塞壅と成ることを。唯多く兒に酥乳を與へ
 て喫せしむることを知つて、消と不消と都べて總に知らず、三乘學道の人、皆是れ此様な
 り。盡く食不消者と名く。謂ゆる知解消せずんば皆毒藥と爲る。盡く生滅の中に向つ
 て取る。眞如の中には都べて此事なし。故に云はく、我王庫の内には是の如きの刀なしと。
 從前の所有、一切の解處、盡く須らく屏却して空ならしむべし、更に分別なくんば、即
 ち是れ空如來藏なり。如來藏とは更に纖塵の有るべき無し、即ち是れ有を破る法王、世間
 に出現するなり。亦云はく、我然燈佛の所に於て、少法の得べき無しと。此語、只爾が情
 解知量を空せんが爲なり。但表裏を消融し、情盡くれば都べて依執無し、是れ無事の人な
 り。三乘の教網、只是れ應機の藥、隨宜の所説なり。時に臨んで施設して、各各同じから

法華經華嚴經品の

【表裏】 依報器世間は表、正報身色は裏。

【執情】 執情、所依執着。

【無事の人】 本來無事。

【三乘】 聲聞阿羅漢、緣覺十二因緣、菩薩六度。

【各各】 性相法門。

【惑】 教相の繁雜。

【一機一教】 攝化方便。

【實に定法有りて】 乘別説の交。

【空門】 禪宗。

【息心】 妄心なり。

【從上來】 諸祖の心。

【凡聖の心】 凡聖の心。

【反執】 執は凡聖の心。

【凡情聖境】 聖境ありと思ふ心。

【一切人】 利根鈍者の。

【全體】 心身不二の故に。

す、但能く了知せば、即ち惑を破らす。第一に一機一教の邊に於て、文を守つて解を作すことを得ざれば、何を以てか此の如くなる、實に定法有りて何來の説くべき無しと。我が此宗門には此事を論ぜず、但息心を知れば即ち休す、更に前を思へ、後を慮ることを用ひざれ。

問ふ、「從上來、皆云ふ、即心是佛と、未審し即ち那箇の心か是れ佛なる。」師云はく、「備個の心がある。」云はく、「爲復即ち凡心是れ佛なるか、即ち聖心是れ佛なるか。」師云はく、「備何れの處にか凡聖の心あるぞ。」云はく、「即今三乘の中に凡聖ありと説く、和尙何ぞ無と言ふことを得ん。」師云はく、「三乘の中に分明に備に向つて道ふ、凡聖の心是れ妄なりと。備今解せずして、反つて執して有と爲し、空を將て實と爲す、豈是れ妄有らざらんや。妄なるが故に心に迷ふ、汝但凡情と聖境とを除却せば、心外に更に別佛なからん。祖師西來して、直に一切の人の全體、是れ佛なりと指す。汝今識らずして、凡を執し聖を執して、外に向つて馳騁して、還つて自ら心に迷ふ。所以に汝に向つて道ふ、即心是佛と。一念も情生ずれば、即ち異趣に墮す。無始より已來、今日に異らず。異法あること無きが故に、成等正覺と名く。」云はく、「和尙言ふ所の即とは、是れ何の道理ぞ。」師云はく、「什麼の道理をか覓むる、纔に道理有れば便即ち心異り。」云はく、「前に無始已來、今日に異らずと言ふ、此理如何。」師云はく、「只覓むるが爲の故に、汝自ら他に異り、汝若し覓めずんば、何れの處にか異有らん。」云はく、「既に是れ異らずんば、何ぞ更に即と説くことを用

【凡聖の兩處】 三賢十聖等。

【我捨】 法華經藥王品の語。

【兩臂】 凡聖生佛迷悟眞妄等の二見なり。

【祖師】 二十三祖鶴勒那尊者。

【時】 非口所詮、非心所議、卷舒自在。

【目前】 心法。

ひん。師云はく、「汝若し凡聖を認めずんば、阿誰か汝に向つて即と道はん、即若し即の有らずんば、心も亦心ならず、可の中心と即と俱に忘ぜば、阿彌更に何れの處に向つてか覓め去らんと擬する。」

問ふ、「妄能く白心を障ふと、未審し而今何を以てか妄を遣らん。師云はく、「妄を起し妄を遣るも亦妄と成る、妄本根無し、只分別に因つて有なり、爾但凡聖の兩處に於て、情計念なくんば自然に妄なし、更に若爲が他を遣らんと擬する。都べて纖毫の依執有ることを得ざることを、名けて我捨兩臂、必當得佛と爲す。云はく、「既に依執無くんば、當に何をか相承すべき。師云はく、「心を以て心を傳ふ。云はく、「若し心相傳せば、云何が心も亦無と言ふ。師云はく、「一法を得ざるを名けて傳心と爲す、若し此心を了ぜば、即ち是れ心も無く法も無し。云はく、「若し心も無く法も無くんば、云何が傳と名く。師云はく、「汝心を傳ふと道ふを聞いて、將に謂へり、得べき有りと。所以に祖師云はく、「心性を認得する」時、不思議と説くべし、了了として所得なし、得る時知と説かず」と。此事若し會せしめば何ぞ堪へん。」

問ふ、「只目前の虚空の如くならば、是れ境に有らざるべけんや、豈境を指して心を見ること無からんや。師云はく、「什麼の心か汝をして境上に向つて見しむ。設ひ汝見得すと、祇是れ箇の境を照す底の心なり。人の鏡を以て面を照すが如し、縱然眉自分明なることを見るを得るも、元來只是れ影像なり、何ぞ汝が事に關らん。云はく、「若し照に囚らず

【多知】 多聞和解

【世諦】 有爲相の傳道をいふ。

【菩提】 言句の枝葉に屬す。

【一切の心】 佛を求めぬを求む。

【有爲】 佛智とする道。

【度吉に同じく】 一切染汚なし。

【枯木石頭の如く】 所求を離る。

【空死火の如く】 情識を絶す。

【少分の用處】 分にある。

【老子】 闍盧王に同じ。

【栲】 掠なり。

んば、何れの時か見ることを得ん。師云はく、「若し也因に沙らば、常に須らく物を散るべし、什麼の了する時か有らん。汝見すや、他汝に向つて道ふことを。手を撒して君に似すに一物なし、徒に謾に数千般と説くことを勞す。云はく、「他若し識り了らば、照も亦物無からんぞ。師云はく、「若し是れ物無くんば、更に何ぞ照を用ひん、偈眼を聞いて寐語し去ること莫れ。」

上堂云はく、「百種の多知は、求むる無きの最第一たるに如かず、道人は是れ無事の人なり、實に許多般の心無し、亦道理の説くべきなし、無事にして散じ去れ。」

問ふ、「如何なるか是れ世諦。師云はく、「葛藤を説いて什麼かせん、本來清淨なり、何ぞ言護の問答を假らん。但一切の心無きを、即ち無漏智と名く。汝毎日の行住坐臥、一切の言語、但有爲の法に著すること莫れ。言を出し目を瞬す、盡く同じく無漏なり。如何

今末法向去、多く是れ禪道を學ぶ者、皆一切の聲色に著す、何ぞ我心に負らざる。心虚空に同じくし去り、枯木石頭の如くにし去り、寒灰死火の如くにし去つて、方に少分の相應

有らん。若し是の如くならずんば、他日盡く闍盧老子に備を栲することを被ること有らん。偈但有無の諸法を離却して、心日輪の常に虚空に在つて、光明自在に照さずして、而も

照すが如くならば、是れ省力底の事に有らず。此時に到つて、棧油の處なし。即ち是れ諸佛の路を行す、便ち是れ應無所住而生其心なり。此は是れ偈が清淨法身なり、名けて阿耨菩提と爲す。若し此意を會せずんば、縦ひ爾多知を學得し、勤苦修行して草衣木食すと

佛の路を行す、便ち是れ應無所住而生其心なり。此は是れ偈が清淨法身なり、名けて阿耨菩提と爲す。若し此意を會せずんば、縦ひ爾多知を學得し、勤苦修行して草衣木食すと

【有無】二見の有爲の諸法。
 【日輪】染汚なく障礙なし。
 【照すすして而も照す】光明通照。
 【省力底】自を省し勉力す。
 【此時】無作の作。
 【棲泊】無所著。
 【應無所住】金剛經莊嚴淨土分の文境に居て境に取らへられず、不變の清淨心生ず。
 【阿耨菩提】無上正等正覺をいふ。
 【章衣木食】皆是れ二乘外道。
 【自心】本心。
 【邪行】佛道に非ざるが故に。
 【何の益ぞ】我が事に答せず。
 【慧公】實誌禪師初の天監十三年寂す。年九十七。
 【滿心】果滿覺心。
 【凡聖の内名相】諸行學得底。
 【常行】常住の法に非ず。
 【是れ生滅】法解

傳心法要

も、自心を識らずんば、盡く邪行と名く、定んで天魔の眷屬となす。此の如く修行して、當に復何の益ぞ、誌公云はく、「佛は本是れ自心の作、那ぞ文字の中に向つて求むることを得ん」と。假饒ひ備三賢四果、十地の滿心を學得すとも、也祇是れ凡聖の内に在つて坐す。道ふことを見ずや、諸行は無常にして、是れ生滅の法なり、勢力盡きぬれば、箭還つて墜つ、來生の不如意を招き得たり。爭か無爲實相の門に似かん。一超直入、如來地と備是れ與宴の人にあらざるが爲なり。須らく古人の建化門に向つて、廣く知解を學することを要すべし。誌公云はく、「出世の明師に逢はずんば、枉げて大乘の法藥を服す」と。備如今一切時中、行仕坐臥、但無心を學せよ、久久にして須らく實得すべし。爾が力量小なるが爲に、頓に超ゆること能はず、但三年五年或は十年を得て、須らく箇の入頭の處を得て自然に會し去るべし。汝是の如くなること能はざるが爲に、須らく心を將て禪を學び道を學ぶることを要むべし。佛法に什麼の交渉かあらん。故に云はく、「如來の所説は皆人を化せんが爲に、黄葉を將て金と爲し、小兒の啼を止むるが如し、決定して實ならず」と。若し實に得ることありとせば、我宗門下の客にあらず、且つ爾が本體と何の交渉か有らん。故に經に云はく、「實に少法の得べき無きを、名けて阿耨菩提と爲す」と。若し也此意を會得せば、方に知んぬ佛道と魔道と俱に錯ることを。本來清淨、皎皎地にして、方圓無く、大小無く、長短等の相無し。無漏無爲にして迷も無く悟も無く、了了として見るに一切も無し、亦人も無く佛も無く、大千沙界海中の漚、一切の賢聖は電の拂ふが如しと。一切、心

【建化門】法華を建立し、化門を開業す。

【了了云云】金剛經。

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

【了了云云】諸道

の眞實なるには如かず、法身は古より今に至るまで、佛祖と一轂なり、何れの處にか一毫毛を欠少せん。既に是の如き意を會せば、大いに須らく努力して今生を盡し去つて、出息入息を保たざるべし。

問ふ、「六祖經書を會せず、何ぞ衣を傳へて祖と爲ることを得る。秀上座は是れ五百人の首座、教授師となつて三十二本の經論を講得す、云何ぞ衣を傳へざる。」師云はく、「他は有心なるが爲に、是れ有爲の法なり、所修所證將に是となす、所以に五祖、六祖に付す、六祖當時、只是れ默契す、密に如來甚深の意を授くることを得たり。所以に法を付して他に與ふ。汝道ふことを見ずや、法の本法は無法なり、無法の法も亦法なり、今無法を付する時、法は何ぞ曾て法ならんと。若し此意を會せば、方に出家兒と名けん、方に好し修行するに。若し信ぜずんば、云何ぞ明上座、大庾嶺頭に走り來つて六祖を尋ねん。六祖便ち問ふ、「汝來つて何事をか求む、衣を求むるが爲か、法を求むるが爲か。」明上座云はく、「衣の爲に來らず、但法の爲に來る。」六祖云はく、「汝且つ暫時念を斂めて、善惡都べて思慮すること莫れ。」明乃ち語を稟く。六祖云はく、「不思善不思惡、正當與麼の時、我に明上座、父母未生の時の面目を還し來れ。」明言下に於て忽然として默契す。便ち禮拜して云はく、「人の水を飲んで冷暖自知するが如し、某甲、五祖の會中に在つて、枉げて三十年の功夫を用ふ、今日方に不是を知る。」六祖云はく、「如是」と。此時に到つて方に知る、祖師西來、直指人心、見性成佛は、言説に在らざることを。豈に見ずや、阿難、迦葉に問うて云は

【好し修行】無心無慮の法の故に。

【明上座云云】明上座は袁州蒙山道明禪師六祖に嗣道

【心を斂めて】心意識を想觀す。

【不思善不思惡】身心脱落。

【父母未生の時】

【好し修行】無心無慮の法の故に。

【明上座云云】明上座は袁州蒙山道明禪師六祖に嗣道

【心を斂めて】心意識を想觀す。

【不思善不思惡】身心脱落。

【父母未生の時】

【好し修行】無心無慮の法の故に。

【明上座云云】明上座は袁州蒙山道明禪師六祖に嗣道

【心を斂めて】心意識を想觀す。

【不思善不思惡】身心脱落。

【父母未生の時】

【好し修行】無心無慮の法の故に。

【無明煩惱なり】。【默契】 身心脱落の人の。

【如是】 證明の語

【阿難迦葉】 無門關二十二に出づ

【階級】 修證等の階級。

【但終日】 六塵中六塵に著せず、即ち根塵脱落なり。

【終日行】 四威儀の中、威儀の一を舉行して、四威儀の没蹤跡を示す、即ち四威儀脱落なり。

【無人無我】 四相即ち人相、我相、衆生相變者相無きを言ふ。

【境界】 六境著惑自在、六輪輪轉

【三際】 過去、未來、現在の三世。

【認】 前後際斷、無所從來

【餘殃】 六道輪廻

【奘相公】 相國は金印授授。

く、「世尊、金欄を傳ふる外、別に何の法をか傳ふ」迦葉、阿難と召す、阿難應諾す。迦葉云はく、「門前の刹竿を倒却著せよ」此れ便ち是れ祖師の標榜なり、毘生ぞ阿難三十年侍者を爲せども、只多聞智慧の爲に佛に訶せらる。云はく、「汝千日慧を學ばんより、一日道を學するに如かず」と。若し道も學せずんば、滴水も消し難からん。」

問ふ、「如何ぞ階級に落ちざることを得る。」師云はく、「但終日飯を喫して、未だ曾て一粒の米を咬著せず、終日行いて、未だ曾て一片の地を踏著せず。與塵の時、無人無我等の相、終日一切の事を離れず、諸の境界を被らざるを方に自在の人と名く。更に時時念念、一切の相を見ず、前後三際を認むること莫れ。實際去ること無く、今際住する無く、後際來ること無く、安然として端座して、任運拘はらざるを方に解脱と名く。努力めよや努力めよや。此門中には千人萬人、祇三箇五箇を得たり、若し將て事と爲すんば、殃を受くること日有ることたらん。故に云はく、力を著けて今生に須らく了却すべし、誰か能く累劫に餘殃を受けんと。」

宛 陵 錄

裴相公、師に問うて曰はく、「山中四五百人有り、幾人か和尚の法を得る。」師云はく、「得る者、其數を測ること無し。何が故ぞ、道は心に在りて悟る、豈言説に在らんや。言説は祇是れ童蒙を化するのみ。」

【所以云】 金光明

經の文。

【因緣造作】 行相

は因緣造作、有爲の

造作に屬す。

【無常に歸す】 造

作者の故に不生滅

の法に非ず。

【所以云】 金剛般

若論の文。

【化門】 建化の度

門。

【接物度生】 接取

物機。

【十地四果】 大乘

小乘。

【度門】 化度門中

の假名用。

【一切諸度門の中】

假名相の中に。

問ふ、「如何なるかは佛。」師云はく、「即心是れ佛、無心是れ道なり。但心を生じ念を動じ、有無長短、彼我能所等の心無くんば、心本是れ佛、佛本是れ心なり。心は虚空の如し、所以に云はく、「佛の眞法身は猶虚空の如し」と。別に求むることを用ひざれば、求むること有るは、皆苦なり。設使恆沙劫に數六度萬行を行じて、佛菩提を得るとも、亦究竟に非ず。向を以ての故に、因緣造作に屬するが爲の故なり。因緣若し盡きなば、還つて無常に歸せん。所以に云ふ、「報化は眞佛にあらず、亦説法の者に非ず」と。但自心を識れば我無く人無く、本來是れ佛なり。」

問ふ、「聖人の無心は即ち是れ無なり、凡夫の無心は空寂に沈むこと莫しや否や。」師云はく、「法に凡聖無く、亦沈寂なし、法本有にあらず、無の見を作すこと莫れ、法本無にあらず、有の見を爲すこと莫れ、有と無とは盡く是れ情見なり、猶幻翳の如し。所以に云ふ、「見聞は幻翳の如し」と。知覺は乃ち衆生なり、祖宗門中には只機を息め見を忘ずることを論ず、所以に機を忘ずるときは則ち佛道隆んなり、分別するときは則ち魔軍熾んなり。」

問ふ、「心既に本來是れ佛なり、還つて六度萬行を修するや否や。」師云はく、「悟は心に在り、六度萬行に關るに非ず、六度萬行は盡く是れ化門接物度生邊の事なり。設使菩提眞如、實際解脫、法身直に十地四果の聖位に至るも、盡く是れ度門にして、佛心に關るに非ず。心即ち是れ佛なり、所以に一切諸度門の中には、佛心第一なり。但生死煩惱等の心無くんば、即ち菩提等の法を用ひず。所以に道ふ、「佛一切の法を説いて、我一切の心を度

無くんば、即ち菩提等の法を用ひず。所以に道ふ、「佛一切の法を説いて、我一切の心を度

【別事】心外の自
己の一心。
【一乘】一心の異
行。
【枝葉】六度萬行
等。
【此意】一佛乘大
乘至極の意。
【可大師】二祖慧
可大師。
【大道平等】大道
は本來心身一如平
等。
【合生同一】蠢動
合靈、平等にして
不増不減。
【所以云】鶴勒那
尊者。
【所有の相】一切
諸有の相眞常の法
に非ずと。
【見解】有相の知
見了解。
【歇期】作歇の期
日。
【一等】諸人一切
平等。
【無學】佛も祖も
求めず。
【無漏無爲】一切
の二見を脱す。
【方便】善巧方便
二見を忘る。

す、我に一切の心無くんば、何ぞ一切法を用ひん」と。佛より祖に至るまで並に別事を論ぜず、唯一心を論ず。亦云はく、一乗と。所以に十方諦に求むるに、更に餘乘なし。此衆に枝葉なし、唯諸の眞實のみ有り、所以に此意信じ難し。達磨此土に來つて、梁魏の二國に至る、祇可大師一人のみありて、密に自心を信じて、言下に便ち即心是佛、身心俱に無なることを會す。是を大道と名く。大道は本來平等なり、所以に深く合生同一眞性なることを信ず。心と性と異らざれば、即ち性即ち心なり。心、性に異らざる、之を名けて祖となす。所以に云ふ、「心性を認得する時、不思議と説くべし」と。

問ふ、「佛衆生を度するや否や。」師云はく、「實に衆生として如來の度すべきものなし、我すら尚不可得なり、我に非ず、何ぞ得べけん。佛と衆生と皆不可得なり、云はく、「現に十二相有り、及び衆生を度して何ぞ無と言ふことを得る。」師云はく、「凡そ所有の相皆是れ虚妄なり、若し諸相の相に非ざることを見ば、即ち如來を見ん。佛と衆生と盡く是れ汝妄見を作す、祇本心を識らざるが爲に、謾に見解を作す。纔に佛見を作せば、便ち佛に障へらる。纔に衆生見を作せば、便ち衆生に障へらる。凡を作し聖をなし、淨をたし穢をなす等の見、盡く其障となる。汝の心を障ふるが故に總べて輪轉と成る。猶彌猴の一を放つて一を捉りて、歇期行ること無きが如し。一等に是れ學せば、直に須らく無學なるべし。凡もなく聖もなく、淨なく垢なく、大なく小なく、無漏無爲なり。是の如くの一心の中に、方便して勤めて莊嚴することは汝に聽す、三乘十二分教を學得するも、一切の見解有らば、

【三乘十二分教】
聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の三乘十二分教は又十二部經

【實に少法】 金剛經の文。

【三十二相】 釋尊は三十二の妙相を有せりと。

【八十】 大聖佛陀瑞形の妙好なり。

【凡そ所有相】 金剛經の文。

【若し色云云】 金剛經の偈文なり。

【邪道】 如來は色相に非ざるが故。

【因果】 聲聞緣覺菩薩、四諦十二因緣六度の因果。

【佛乘】 一佛乘。

總べて須らく捨却すべし。所以に所有を除き去つて、唯一時を置いて疾に寢して臥す、祇是れ諸見を起さざれ。一法の得べきなれば、法の障を被らず、三界凡聖の境域を透脱す、始めて名けて出世の佛と爲ることを得たり。所以に云はく、「稽首空の如くにして所依なく、外道を出過するを」と。心既に異らざれば法も亦異らず、心既に無爲なれば法も亦無爲なり。萬法は盡く心に由つて變ず、所以に我心空なるが故に、諸法空なり、千品萬類悉く、皆同じ。盡十方空界、同じく一心の體なり。心本異らざれば、法も亦異らず。祇汝が見解、同じからざるが爲の所以に異有るのみ。譬へば諸天の寶器を同じうして、食するに其福德に隨つて、飯食に異有るが如し。十方の諸佛、實に少法の得べき無し、名けて阿耨菩提となす。祇是れ一心にして實に異相無く、亦光彩無く、亦勝負無し。勝無きが故に、佛相無し、負無きが故に衆生相無し。云はく、「心既に無相ならば、豈全く三十二相八十種好の衆生を化度すること無きを得んや。」師云はく、「三十二相は相に屬す、凡そ所有の相は、皆是れ虚妄なり。八十種好は色に屬す、若し色を以て我を見ば、是人邪道を行ふ、如來を見たてまつること能はず。」

問ふ、「佛性と衆生の性と爲んか別と爲んか。」師云はく、「性に同異無し、若し三乗の教に約せば、即ち佛性有り衆生の性有り」と説く。遂に三乗の因果有り、即ち同異有り。若し佛乘及び祖師相傳に約すれば、即ち是の如きの事を説かず。唯一心を指して、同に非ず異によらず、因に非ず果に非ず。所以に云はく、唯此一乘道のみありて、二も無く亦三も

【無邊身】 無邊際の故に。諸見。

【諸法如の義】 當意即妙。

【無生】 生に生相なし。

【無滅】 滅に滅相なし。

【無見】 見に見相なし。

【無聞】 聞に聞相なし。

【諸數】 數量長短方圓。

【圓同云云】 三祖信心銘の文。

【他の境】 佛身を辨着す。

【勝】 分別意識。流轉生死海に。

【心を用ふる】 論語陽貨篇に出づ。

【鐵圍山】 梵語にて、阿迦羅、拘羯羅といひ、輪山と譯す。

【實智】 文殊は根本智の故に。【權智】 普賢は行願門の故に。

なし、佛の方便説を除く」と。

問ふ、「無邊身菩薩、什麼としてか如來の頂相を見ざる。」師云はく、「實に見るべき無し、何を以ての故に。無邊身菩薩は便ち是れ如來なり。更に見るべからず。祇汝をして佛見を

作さずんば、佛邊に落ちず、衆生見を作さずんば衆生邊に落ちず、有見を作さざれば有邊に落ちず、無見を作さざれば無邊に落ちず、凡見を作さざれば凡邊に落ちず。聖見を作さ

ずんば、聖邊に落ちず。但諸見無ければ即ち是れ無邊身なり。若し見處有れば即ち外道と名けん。外道は諸見を樂しむ、菩薩は諸見に於て動ぜず、如來は即ち諸法如の義なり。所

以に云はく、「彌勒も亦如なり、衆聖賢も亦如なり」と。如は即ち無生なり、如は即ち無滅なり、如は即ち無見なり、如は即ち無聞なり、如來の頂は即ち是れ圓も見なり。亦圓見無

きが故に、圓邊に落ちず。所以に佛身は無爲にして諸數に墮せずと。權に虚空を以て喻と爲す、圓なること太虚に同じく、欠くることも無く餘ることも無し。等閑に無事にして勝

ひて他の境を辨ずること莫れ。辨著すれば便ち識と成る。所以に云はく、「圓成すれば識海に沈む、流轉すること飄蓬の如し」と。祇我知れり、學得せり契悟せり、解脱せる道理有

りと道うて、彊處は即ち喜び、弱處は瞋を生ず。這個の見解に似たらば、什麼の用處あらん。我汝に向つて道ふ、等閑に無事にして漫に心を用ふること莫れ、眞を求むることを

用ひざれ、唯須らく見を思むべしと。所以に内見外見俱に錯り、佛道魔道俱に惡し。所以に文珠暫く二見を起せば、二鐵圍山に貶向せらる。文殊は即ち實智、普賢は即ち權智なり、

【一尊三寶】三寶は佛、法、僧。

【道場】空王の大

【如來藏】即ち實相眞如なり迷ふときは八識となる。

【本來】人人。

【塵埃】佛見法見一切處一切事上に於て。

權と實とは相對治す、究竟して亦權實なし。唯是れ一心なり、心は且つ佛に當らず、衆生にあらす、異見あること無し。鏡に佛見あれば、便ち衆生見と作る。有見無見、常見四見便ち二鏡圓山と成つて見に障へらる。故に祖師、直に一切衆生の本心本體本來是れ佛なりと指して、修成を假らず漸次に屬せず、是れ明暗にあらす。是れ明にあらざるが故に明なし、是れ暗にあらざるが故に暗無し。所以に無明も無く亦無明の盡くることも無しと。我此宗門に入らば、切に須らく意を在くべし。此の如く見得するを之を名けて法と爲す。法を見るが故に、之を名けて佛と爲す。佛法俱に無なるを、之を名けて僧と爲す、喚んで無爲僧と爲す、亦一體三寶と名く。夫れ法を求むる者は、佛に著しても求めず、法に著しても求めず、衆に著しても求めず、應に求むる所無かるべし。佛に著して求めざるが故に佛も無く、法に著して求めざるが故に法も無く、僧に著して求めざるが故に僧も無し。一問、一和尚見今の說法、何ぞ僧も無く亦法も無しと言ふことを得る。師云はく、「汝若し法の説くべき有りと思はば、即ち是れ音聲を以て我を求むるなり。若し我ありと思はば即ち是れ處法なり、法も亦無く、法は即ち是れ心なり。所以に祖師云はく、「此心法を付する時、法法何ぞ曾て法ならん、法も無く本心も無く、始めて心心の法を解す。實に一法の得べき無きを道場に坐すと名く」と。道場とは祇是れ諸見を起さず、法の本空を悟つて、喚んで空如來藏と作す。本來無一物、何れの處にか塵埃有らん。若し此中の意を得ば、逍遙何の論ずるところかあらん。」

【心心】 祖心と衆生心。
【諸位】 五十二位等。

【法體】 體段なり
【盡虚空】 法身即虚空。

【理論】 理解論窮
【一境二境の上】 學人の機に應じて示すに境を以てす
【一門】 一心の法門。

【無爲の法門】 實用の法門。

【離】 情識。
【岐路の心】 種種差別の心。
【念】 生佛の念。
【心生云】 起信論の語。

傳心法要

問ふ、「本來無一物ならば、物無き便ち是なりや否や。師云はく、「無も亦是れ菩薩にあら
ず、是處も無く、亦無知の解も無し。」
問ふ、「何者か是れ佛。師云はく、「汝が心是れ佛、佛即ち是れ心なり、心と佛と異らず。
故に云ふ、「即心即佛」と。若し心を離れば別に更に佛無し。」云はく、「若し自心是れ佛な
らば、祖師西來して如何が傳授せん。師云はく、「祖師西來して唯心佛を傳ふ。直に汝等が
心、本來是れ佛なることを指す、心心異らず、故に名けて祖と爲す。若し直下に此意を見
ば、即ち頓に三乗一切の諸位を越ゆ。本來是れ佛、修を假つて成ぜず。」云はく、「若し此の
如くならば十方の諸佛出世して、何の法をか説く。師云はく、「十方の諸佛出世して、紙共
に一心の法を説く。所以に佛、密に摩訶大迦葉に付與す、此一心の法體は、盡虚空法界に
徧きを名けて諸佛と爲す、這箇の法を理論せば、豈是れ汝が言句上に於て、他を解得せん
や。亦是れ一機一境の上に於て、他を見得せざれ。此意唯是れ默契す。這一門を得るを、
名けて無爲の法門と爲す。若し會得せんと欲せば、但無心を知れ、忽ち悟れば即ち得ん。
若し心を用て學取せんと擬せば、即ち轉遠くし去る。若し岐路の心、一切の收捨の心無く
して、心木石の如くならば、始めて學道の分あらん。」云はく、「如今現に種種の妄念有り、
何を以てか無と言ふ。師云はく、「妄本體なし、即ち是れ汝が心に起る所なり。汝若し心是
れ佛なることを識らば、心本妄無し。那ぞ心を起して更に妄を認むることを得ん。汝若し
心を生じ念を動せずんば、自然に妄なし。所以に云はく、「心生ずれば即ち種種の法生ず、

【語默】 語默動靜の相なし。

【動靜】 動は行、靜は坐臥。

【一切聲色】 六塵の中のを擧ぐ。

【佛事】 來雁遷鶯もみな祇園の佛事

【山は是れ山云云】 現成公案。布袋の語。

【一切聲色】 經に云はく、一切聲は是れ佛聲、一切色は是れ佛色。

【慧目】 智慧眼目法孤り起らず。

八萬の煩惱と爲つて起る。

【終日說】 無舌人語を解する故に。

心滅すれば即ち種種の法滅す」と。云はく、「今正に妄念起る時、佛何れの處にか在る。師云はく、「汝今妄起ると覺する時、覺正に是れ佛なり。可の中に若し妄念無くんば佛も亦無し。何が故ぞ、此の如くなる。汝念を起して佛見を作すが爲に、便ち佛の成すべき有り」と謂ふ、衆生見を作して便ち衆生の度すべきありと謂ふ。起心動念は總べて是れ汝が見處なり、若し一切の見無くんば、佛に何の處所か有らん。文殊纒に佛見を起すが如きんば、便ち二鐵圍山に貶向せらる。云はく、「今正に悟る時、佛何れの處にか在る。師云はく、「問何れよりか來り、覺何れよりか起る。語默動靜、一切聲色、盡く是れ佛事なり、何れの處にか佛を覺めん、更に頭上に頭を安じ、背上に背を加ふべからず。但異見を生ずること莫くんば、山は是れ山、水は是れ水、僧は是れ僧、俗は是れ俗、山河大地、日月星辰總べて汝が心を出でず。三千世界、都來是れ汝が箇の自己なり。何れの處にか許多般あらん。心外無法、滿目青山、虚空世界は破破地にして、絲髮許りも汝が與に見解を作すこと無し。所以に一切聲色は、是れ佛の慧目なり、法孤り起らず、境に仗つて方に生ず、物の爲の故に其多智あり、終日說けども何ぞ會て説かん、終日聞けども何ぞ會て聞かん。所以に釋迦四十九年の說、未だ會て一字を説著せず。云はく、「若し此の如きんば、何れの處か是れ菩提なる。師云はく、「菩提に是處なし、佛も亦菩提を得ず、衆生も亦菩提を失はず、身を以て得べからず、心を以て求むべからず、一切衆生即ち菩提の相なり。云はく、「如何が菩提心を發せん。師云はく、「菩提に所得なし、爾今但無所得の心を發して、決定して一法を

【終日聞】 耳根を以て開かず。

【四十九年】 應機說法、不立文字、教外別傳なり。

【故云】 金剛經引證のこと。

【授記】 記莚を授くること。

【本源眞性の佛】 法身佛は修得佛にあらず。

【四生六道】 胎、卵、濕、化生を四生。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上を六道。

【種種】 人畜等。形貌。長短有足無足。

【種種】 六道四生。種種。畜生界に入る、屋は身。

【取捨】 見解。

【這箇の法】 無説無聞の法。

得ざる、即ち菩提心なり。菩提に住處なし、是故に得る者有ること無し、故に云はく、「我然燈佛の所に於て、少法の得べき有ることなし」と。佛即ち我に授記を與ふるは、明かに知る、一切衆生本是れ菩提なり、應に更に菩提を得べからざることを、爾今菩提心を發すと聞いて、一個は心を將て佛を學取し去らんと謂へり。唯作佛の道を擬するは、任ひ汝三祇劫修すとも、亦祇箇の報化佛を得ん、爾が本源眞性の佛と何の交渉かあらん。故に云はく、「外に有相の佛を求めば、汝と相似ならず」と。

問ふ、「本既に是れ佛ならば、那ぞ更に四生六道、種種の形貌の不同有ることを得ん。」師云はく、「諸佛の體は圓にして、更に増減なし、六道に流入すれども、處處皆圓なり。萬類の中、箇箇是れ佛なり、譬へば一團の水銀の諸處に分散すれども、顆顆皆圓なるが如し、若し分たざる時は、祇是れ一塊なり、此一即ち一切、一切即ち一なり、種種の形貌は喩へば屋舎の如し、驢屋を捨てて人屋に入り、人身を捨てて天身に至る。乃至聲聞、緣覺、菩薩佛、屋は皆是れ汝の取捨の處なり。所以に別有り、本源の性何ぞ別有ることを得ん、問ふ、「諸佛如何ぞ大慈悲を行じて、衆生の爲に說法する。」師云はく、「佛の慈悲は無縁なるが故に、大慈悲と名く。慈とは佛の成すべき有りと見ず、悲とは衆生の度すべき有りと見ず。其所説の法は、説無く示無し、其聽法の者は、聞無く得無し。譬へば幻士の幻人の爲に說法するが如し。這箇の法、若爲が我善知識に従つて、言下に領じ得て、心なり、悟れりと道はん。者箇の慈悲、若爲が汝の心を起し念を動じて學得せん。他の見解は、是れ

【精進】六度の一

【去心】無心なり

【外邊】外縁、この

【即】根本、この

【什裏得與】無心

【一念】得不得等

【心自滅】所得の

【出三界】陰塵死

【思量】分別、

【三分】欲、色、

【摩訶衍】大乘と

【百分俱に云云】

【上堂】粥飯の時

【體】心體。

【一向是れ無】無

にして無にあら

ず

【一向是れ無】無

にして無にあら

ず

自ら本心を悟らず、究竟して益なし。」

問ふ、「何者か是れ精進なる。」師云はく、「身心起らざる、是を第一の牢壁の精進と名く。

縦に心を起して、外に向つて求むる者をば名けて歌利王の遊獵を愛すと爲す、心を去つて

外に遊ばざる、即ち是れ忍辱仙人なり。身心俱に無なる、即ち是れ佛道なり。」

問ふ、「若し無心にして此道を行じ得てんや否や。」師云はく、「無心にして即便ち是れ此道

を行すれば、更に什麼の得と不得とを説かん。且く一念を警起するが如きんば、便ち是れ

境なり、若し一念無くんば、便ち是れ境忘じ、心自ら滅して復追尋すべき無し。」

問ふ、「如何なるか是れ出三界。」師云はく、「善惡都べて思量すること莫くんば、當處に便

ち三界を出づ。如來の出世は三有を破せんが爲なり、若し一切の心無くんば、三界も亦有

にあらす、如し一微塵を破して百分と爲して、九十九分是れ無にして、一分是れ有ならば、

摩訶衍、勝出すること能はず、百分俱に無ならば、摩訶衍、始めて能く勝出せん。」

上堂云はく、「即心是佛、上諸佛に至り、下蠢動含靈に至るまで、皆佛性有つて、同一心

體なり。所以に達磨西天より來つて、唯一心法を傳へて、直に一切衆生、本來是れ佛なる

ことを指す。修行を假らず、但如今、自心を識取し、自の本性を見て、更に空に求むること

と莫し。云何が自心を識る、即ち如今の言語する者、正に是れ汝が心なり。若し言語せず、

又用心を作さざれば、體、虚空の如くに相似て、相貌有ること無く、亦方所なし。亦一向

に是れ無にあらす、有にして見るべからざるが故に、祖師云はく、「眞性心地藏、頭無く亦

【祖師云云】二十
七祖般若多羅傳法
偈。

【心地廣】心萬法
を生ずるが故に。

【緣に應じて】處
處身、處處現する
故に。

【正に應ずる】所
緣に應じて、物機
を化する時。

【擧泊】行履。
【淨名云】維摩經
香積佛品。

【一切】三界一切
【無心を學す】無
心無念を參學す。

【此意】自性本來
清淨、生佛同體の
意。

【淨名云】維摩經
問疾品。

【合殺】佛に逢う
ては佛を殺し祖に
逢うては祖を殺す
といふ。

【志公云】これは
大乘諸教も未だ佛
の本懷にあらざる
を證す。

尾無し、緣に應じて物を化す、方便して呼んで智となす」若し緣に應ぜざる時は、其有無を言ふべからず、正に應ずるの時も亦蹤跡無し、既に此の如くなることを知つて、如今但無中に向つて棲泊する、即ち是れ諸佛の路を行ふなり。經に云はく、「應無所住而生其心」と。一切衆生の輪廻して、生死を息めざる者は、意緣走作して心六道に於て停らず、種種の苦を受けしむることを致す。淨名云はく、「難化の人は心猿猴の如し、故に若干種の法を以て其心を制禦して、然る後調伏す」所以に心生ずれば種種の法生ず、心滅すれば種種の法滅すと。故に知んぬ、一切の諸法は皆心に由つて造り、乃至人天地獄、六道修羅盡く心に由つて造ることを、如今但無心を學して、顧に諸緣を息めて、妄想分別を生ずること莫くんば、人も無く我も無く、貪瞋も無く憎愛も無く、勝負も無からん。但如許多種の妄想を除却して、性自來清淨なる、即ち是れ菩提の法を修行して佛と尊し。若し此意を會せずんば、縦ひ爾廣く學び、勤苦修行して木食草衣すれども、自心を識らずんば、皆邪行と名く。盡く天魔外道、水陸の諸神と作さん。此の如く修行せば、當に復何の益かあらん。志公云はく、「本體是れ自心の作、那ぞ文字の中に求むることを得ん」と。如今但自心を識つて、思惟を息却せば、妄想塵勞、自然に生ぜず。淨名云はく、「唯一牀を置いて疾に寢して臥して、心起らざるなり」と、人の疾に臥すが如し、攀緣都べて息み、妄想歇滅する即ち是れ菩提なり。如今若し心裏紛紛として定まらずんば、任ひ備學して、三乘四果十地の諸位に到つて合殺すとも、祇凡聖の中に向つて坐す。諸行は盡く無常に歸

【分別】思慮分別
 【任運】天地自然
 【騰騰】心作なき
 【覺】心作なき
 【覺】裂なり、
 【覺】非迷悟等。
 【兀然】不動なり
 【人天の業】善業
 【地獄の業】惡業
 【自由の人】天地
 の間一箇の人。
 【經云】楞伽經に
 出づ。
 【有意生身】自由
 自在の境界なり。
 【管束】管轄束縛
 【去住】行住坐臥
 【菩提等の法】著
 相魔業病の對治法

して、勢力皆盡くる期有り、猶箭の空を射るに、力盡くれば還つて墜つるが如し、却つて
 生死に歸して輪廻す。斯の如く修行すとも、佛意を解せずんば、虚しく辛苦を受く、豈大
 なる錯にあらざらんや。誌公云はく、「未だ出世の明師に逢はず、枉げて大乘の法藥を服
 す」と。如今但一切時中、行住坐臥、但無心を學して、亦分別無く、亦依倚無く、亦往著
 無く、終日任運騰騰として癡人の如くに相似たらば、世人盡く爾を識らず、爾も亦人を
 して不識を識らしむることを用ひず、心頑石頭の如くにして、都べて縫罅無し。一切の
 法、汝が心を透り入らず、兀然として無著なり。此の如くにして始めて少分の相應あらん。
 三界の境を透得し過ぐるを名けて佛出、世となす、心相を漏さざるを名けて無漏智と爲す。
 人天の業を作さず、地獄の業を作さず、一切の心を起さず、諸緣盡く生ぜずんば、即ち
 此身心是れ自由の人なり。是れ一向に生ぜざるにあらず、祇是れ意に隨つて生ず。經に云
 はく、「菩薩有意生身」と是なり。忽に若し未だ無心を會せずして、相に著して作さば、
 皆魔業に屬せん。乃至淨土の佛事を作すも並に皆業と成る、乃ち佛障と名く、汝が心を障
 ふるが故に、因果の管束を被つて、去住して自由の分なし、所以に菩提等の法、本是れ有
 なるにあらずや。如來の所説、皆是れ人を化す、猶黃蘗を金錢と爲して、權に小兒の啼を
 止むるが如し。故に實に法の阿耨菩提と名くること有ること無し、如今既に此意を會せば、
 何ぞ驅馳することを用ひん。但緣に隨つて舊業を消し、更に新殃を造ること莫れ。心裏明
 明たり、所以に舊時の見解、總べて須らく捨却すべし。淨名に云はく、「所有を除去す」

【新殃】心外に法
 を求むる等の罪禍
 【淨名云】問疾品

【法華云】信解品
 【又云】信解品
 【戲論の糞】心外
 に佛を求む。
 【鏽除】明なり、
 潔なり。
 【空寂】生佛迷悟
 等の宛物なし、故
 に空なり。
 【緣云】維摩經問
 疾品。
 【揚眉動目】師家
 が家人接化の場合
 に於ける禪機を作
 用をいふ。
 【紙對】敵對の意
 なり、轉じて應答
 の意に用ふ。人に
 紙對して。
 【一人】具眼の那
 一人。
 【道理】少分の理
 路に涉る。
 【折伏】破折除伏
 而壁して、一句
 を示さず。
 【我一心體】天地
 同根、萬物一體。
 【同量】思量目的
 なり、端的度量な
 り。
 【一遣】餘なり、
 清淨の流輩。

傳心法要

と、法華に云はく、「二十年の中、常に糞を除かしむ」と。紙はれ心中に見解を作すの處を除去す。又云はく、「戲論の糞を鏽除す」と、所以に如來藏は本自ら空寂なり、紙是れ並に一法を停留せず。故に經に云はく、「諸佛國土も亦復皆空なり」若し佛道は是れ修學して得ると言はば、此の如きの見解全く交渉無し。或は一機一境揚眉動目を作して、紙對して相當つて便ち道ふ、契會せり、禪理を證悟することを得たりと。忽ち一人に逢はば、便ち道ふことを解せず、都べて所知無し、他に對して若し道理を得れば、心中に便ち歡喜す、若し他に折伏せられて他に如かざれば、便即ち心に惆悵を懷く、此の如きの心意にして禪を學せば、何の交渉かあらん。任ひ汝少し許りの道理を會得するも、紙箇の心所の法を得て、禪道とは總べて沒交渉ならん。所以に達磨面壁して、都べて人をして見處あらしめず、故に云はく、「機を忘する是れ佛道なり、分別は是れ魔境なり」と、此性は縦ひ汝迷ふ時亦失せず、悟る時も亦得ず。天眞の自性にして本より迷悟なし。盡十方虛空界、元來是れ我一心體なり。縦ひ汝動用造作するも豈虚空を離れんや。虚空本來大も無く小も無く、無漏無爲、迷無く悟なく、了了として見るに一物も無し、亦人も無く亦佛も無し、纖毫の的量を絶す。是れ依倚無く粘緩無き一道の清流なり。是れ自性なり、是れ無生法忍なり。何の擬議することかあらん。眞佛に口無し、說法を解せず、眞聽に耳無く、其れ誰か聞かんや珍重。」

師一日上堂、大衆に開示して云はく、「豫め前に若し打不徹ならば、臘月三十夜到來、

【是無生法忍】 人の自性、不生滅の故に。

【生佛迷悟】 生佛迷悟

【珍重】 請ふ自愛を如へよと。

【開示】 理に通ずるを開といふ、示は顯示。

【二月三十】 臨命終の時。

【終時】 平常無事

【多少省力】 死に臨んで減省力。

【過場】 臨命終の時。

【前路黑暗】 死ぬ

の山、三途の河等

【胡鑽亂撞】 地獄

の苦惱

【將沈】 大法ま。

【箇の分曉云云】 人人分曉の處を念取せよ

【一段大事】 人人

脚下底

【佛根子】 佛祖屋

裡の要領をいふ。

【自】 同人。

【死志】 專一に力を用ふ。

倆が氣續を管取せん。有般の外道、纔に人の工夫を做すことを説くを見て、他使ち冷笑して、猶這箇の在る有り。我且つ汝に問ふ、忽然として命終に臨む時、備向を打てか生死に抵敵せん。備曰く思量して百よ、却つて箇の道理有りや、即ち天生の顛勳、自然の釋迦を得ん。一般鬼神野東有り、纔に人の些少の病有るを見て、便ち他人の奥に説く、備只だ放下著せよ。他病まるに至るに及んで又却つて理會を下さず、手忙しく脚亂れ、備が肉利刀の辟藪するが如きを争奈せん。主宰を做すことを得ず、萬般亦須らく是れ罽時に見得下して、忙時に用ふることを得べし。多少省力なり、溝に臨んで井を掘るを待つことを休めよ。手脚辨せざることを做さん。遶場の狼藉、如何が廻遊せん。前路黑暗なり、信に胡鑽亂撞を采らん。苦なる哉苦なる哉、平日只口頭三昧を學んで、禪と説き道と説く、佛を喝し祖を罵る。這裏に到つて都べて用不著。平日只管に人を瞞す、争か知らん、今日自ら瞞了すと道ふことを、阿鼻地獄の中、決定して備を放すことをえず、而今末法特に沈せんとす、全く有力量の兄弟家に仗つて負荷して、佛の壽命を續きて斷絶せしむること莫れ。

今時纔に一箇半箇の行脚有り、只去つて山を觀景を觀て、光陰能く幾何か有るを知らず、一息回らざれば便ち是れ表生なり、未だ甚慶の頭面をか知らず、嗚呼、備兄弟家に觀む、色力康健の時を趁うて箇の分曉の處を討取せよ。人に瞞せられざる底の一段、大事這れ此の關戻子、甚だ是れ容易なり。自らは是れ備背て去下せず、死志に工夫を做す。只管に道ふ、了じ難く又好し難しと。備に教ふ、邪の樹上に自生し得る底の木杓を知れ、備也須らく

【種變】 舊面目を一新す。
【植用豹子話】 無門關。此は後代の公案を提擲するの始めなり。
【晝參夜參】 以下は打成一片の義を【機】要。

【一番寒】 閑寮を寒殺するの時。
【梅花の鼻云云】 佛祖の鼻孔を穿却す。

自ら去つて、個の轉變を做し始めて、若し是れ個の丈夫の漢ならば、個の公案を看と、僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性有りや也無や」州云はく、「無」但去つて二六時中に個の無字を看よ。晝參夜參、行住坐臥、著衣喫飯の處、屙屎放尿の處、心心相顧みて猛に精彩を著けよ。箇の無字を守つて、日久しく月深うして打成一片ならば、忽然として心華頰に發け、佛祖の機を悟る、便ち天下の老和尚の舌頭に瞞ぜられず、便ち大口を開くことを會す。遠塵西來して、風無きに浪を起す、世尊拈華、一場の敗缺なり、這裏に到つて甚麼の閑羅老子とか説かん。千聖も尚爾を奈何ともせず、道ふことを信ぜずや、直に這般の奇特有り、甚としてか此の如くなる。此事有心の人を怕る。』

頌に曰はく、
塵勞過脱す事常にあらず。緊く繩頭を把つて一場を做す
是れ一番寒骨に徹するにあらずんば、争か梅花の鼻を撲つて香しきを得ん

黄檗山斷際禪師傳心法要 終

【傳心法】 此偈は 四言八句

裴相國傳心偈

予（予）宛（宛）凌（凌）、鐘（鐘）陵（陵）に於て、皆（皆）黃（黃）髮（髮）希（希）連（連）禪（禪）師（師）に觀（觀）むことを得て、盡（盡）く心（心）要（要）を傳（傳）ふ。乃（乃）も傳（傳）心（心）偈（偈）を作ること（作ること）爾（爾）。

【無亦無無】 直に
 【佛即無生】 本源
 【勿求勿營】 外に
 【信費功程】 修行
 【御落魔界】 有相
 【無念似空】 虚空
 【無物不容】 萬象

心（心）不（不）可（可）傳（傳） 以（以）契（契）爲（爲）傳（傳）
 心（心）不（不）可（可）見（見） 以（以）無（無）爲（爲）見（見）
 契（契）亦（亦）無（無）契（契） 無（無）亦（亦）無（無）
 化（化）城（城）不（不）住（住） 透（透）額（額）有（有）珠（珠）
 珠（珠）是（是）彌（彌）名（名） 披（披）豈（豈）有（有）耶（耶）
 即（即）心（心）即（即）佛（佛） 佛（佛）即（即）無（無）生（生）
 直（直）下（下）便（便）是（是） 勿（勿）求（求）勿（勿）營（營）
 使（使）二（二）佛（佛）誓（誓）佛（佛） 信（信）費（費）功（功）程（程）
 隨（隨）法（法）生（生）解（解） 即（即）落（落）魔（魔）界（界）
 凡（凡）聖（聖）不（不）分（分） 乃（乃）離（離）見（見）聞（聞）
 無（無）心（心）似（似）鏡（鏡） 與（與）物（物）無（無）礙（礙）
 無（無）念（念）似（似）空（空） 無（無）二（二）物（物）不（不）容（容）

【三乘法】 教外別傳。

【歷劫希逢】 曇華は見易く、知識には逢ひ難しと。

【若能如是】 無心似鏡、無念似空等。

【大士】 在家の菩薩にして妻体を指す。

【高安導師】 斷際禪師。

【借】 愛惜。

【綴】 補綴。

【慶曆】 宋の仁宗の年號。戊子は八年、日本の後冷泉天皇永承三年。

【三乘法】 教外別傳。
【歷劫希逢】 曇華は見易く、知識には逢ひ難しと。
【若能如是】 無心似鏡、無念似空等。
【大士】 在家の菩薩にして妻体を指す。
【高安導師】 斷際禪師。
【借】 愛惜。
【綴】 補綴。
【慶曆】 宋の仁宗の年號。戊子は八年、日本の後冷泉天皇永承三年。

三乗外法 歴劫希逢

若能如是 出世雄

嘗て聞く、河東の大士、親しく高安の導師に見えて、心要を當年に傳へ、偈章を著して、予其遺つる所を惜んで、木録に綴るといふ爾り。

慶曆戊子の歲、南宗字は夫眞といふもの題す。

後叙

【馬祖】世尊をいふ。善哉は驚く。嶋は頭と翻す。故に靈鷲山といふ。
 【少室】嵩山少林の堂。
 【神光】二祖慧可大師。
 【馬祖】即心即佛の語。
 【百丈】耳聾の話。
 【黃蘗】嗜酒糟の語。
 【大機】大機の人。
 【大用】或は棒或は喝。
 【新安】新安は郡の名。今の直隸省徽州府。
 【眞儀】眞相儀容。
 【一語】一轉語。
 【大士】達磨。
 【頓有圓珠】異相を述べ、黃蘗を贊す。達磨已後ただ一人。
 【掛錫】今日まで

鷲峯に微笑して、心法を付囑し、少室に面壁して、直に人心を指す。神光の安心、馬祖の即心、百丈黃蘗の初大老に至るまで、密に心印を傳ふ。大機普く破り、大用藥喫す、一心に本かざることに莫し。譬へば大海の千波を洶湧して、波の海を離れざるが如く、又精金の器を革變して、器の金に異ならざるが如し、故に曰はく、「森羅及び萬象、一法の印する所なり」と、其れ唯心の謂か。昔唐朝の相國裴休、新安に守たりし日、大安寺に入つて、香を行き畫壁を觀て、主事の僧に問うて曰はく、「是れ何の圖相ぞ。」主曰はく、「高僧の眞儀。」裴曰はく、「眞儀觀つべし、高僧何くにか在る。」主對ふることに無し、適黃蘗の運禪師、被に寓す。公之を詢うて曰はく、「偶一問有り、諸德各辭す、代つて一語を翻めべし。」と。裴、諸公の垂問せんことを請ふ、裴、前話を擧す、裴聲を震して曰はく、「裴休」と、公應諾す。裴云はく、「甚密の處にか在る。」裴當下に旨を領す、髮珠を獲るが如し。乃ち延いて府署に入つて弟子の禮を執る。偈を贈つて曰はく、「白三從大士傳、心印、頓有圓珠、七尺身、掛錫十年棲蜀水、浮杯今日渡漳濱、千徒龍象隨高步、萬里香花結勝因、擬欲事師爲弟子、不知將法付何人。」二爾しより、師資の道合ふ。玄論を渴聞して、輯めて編を成す、曰けて「傳心法要」と曰ふ、仍つて自ら語を序す。唐の好事の者、此集を刊行し

十年。
 【蜀杯】一木杯を
 鉢にたとふ。
 【漳濱】南昌縣の
 漳水。
 【萬里】教化の遠
 方に及ぶ。
 【玄論】深玄高論
 【心要】深玄の簡
 要。
 【直指の宗】達磨
 門下の單傳。
 【小】自性本體の
 大光明藏。
 【無盡燈】毘耶は
 毘耶離、此には廣
 嚴といふ。淨名は
 維摩。
 【弘安癸未】日本
 の後宇多天皇弘安
 六年。
 【寺福寺】鎌倉五
 山の一、龜ヶ谷。
 【大休】諱は正念
 宋溫州永嘉郡の人
 石溪月本嗣ぐ、咸
 淳五年本朝の文永
 六年東渡す、平時
 宗之を歸依す。松
 源四世なり。
 【藏六庵】圓覺寺
 塔頭師の塔所。

て、流へて日本に入る、檀那越州の刺史、志を内典に篤うす、公事の暇、喜びて是書を
 閱す。嘗て心要を以て予に問ふ。予、但其心を一處に制するときは、則ち事として辨ぜず
 といふこと無きを勉む。因つて財を施し工に命じて、唐本を以て模刊し、廣く傳へて本國、
 未だ直指の宗を信ぜざるものをして、人人此心中に、本、一段の光大明藏を具して、天
 を輝し地を鑑み、古に耀き今に騰ることあることを知らしめんと欲す。亦猶、毘耶の淨
 名の、謂ゆる無盡燈のごとくなる者なり。越に囑して後序と爲す、然も亦未だ庵を畫いて
 足を添ふるの誚を免れず。時に弘安癸未の仲春、金剛寺福禪寺に住する宋の沙門大休正念、
 藏六庵に書す。

宏
智
頌
古

宗 典 部	第 二 十 二 卷
-------------	-----------------------

天童宏智禪師傳略

【天童】 山號、又
 太白山。
 【宏智】 南宋高宗
 帝よりの勅蓋號。
 【正覺】 師の諱。
 【五臺山】 文殊の
 道場。
 【生るに及んで】
 師の誕生は、宋の
 哲宗元祐六年辛未
 我朝の堀河帝、寛
 治五年。
 【道韻】 道行の崇
 高なる氣韻。
 【具戒】 具足戒、
 比丘の大戒、二百
 五十戒。
 【遊方】 諸禪匠を
 歷訪參究する。
 【成枯木】 香山寺
 の枯木法成禪師。
 【芙蓉道楷の法嗣】
 芙蓉道楷の法嗣。
 【蓮華】 法華經。
 【泥團を弄する漢】
 馬鹿な眞似を爲す
 奴。
 【別に人に見えて

宏智頌古

天童の天童の宏智正覺禪師は温州李氏の子なり。母夢むらく、五臺の一僧、環を解き與へて其右臂に環すと、乃ち孕む、遂に齋戒す。生るるに及んで右臂特起して環の狀の若し。七歳にして日に數千言を誦す。祖の寂、父の宗道、久しく佛陀の逸禪師に參す。嘗て師を指して其父に謂うて曰はく、「此子道韻勝ること甚だし、塵埃中の人に非ず、苟も出家せば必らず法器と爲らん。」十一にして淨明の本宗に得度す。十三にして五經七史に通す、十四にして晋州慈雲寺の智瓊和尚に具戒す、十八にして遊方す。其祖に訣して曰はく、「若し大事を發明せずんば誓つて歸らず。」汝州香山に至るに及んで、成枯木一見して深く器重せらる。一日、僧の蓮經を誦するを聞いて、「父母所生眼、悉見三千界」といふに至り瞥然として省有り、即ち方丈に詣りて所悟を陳す。山、臺上の香合を指して曰はく、「裏面是れ甚麼物ぞ。」師曰はく、「是れ甚麼の心行ぞ。」山曰はく、「汝が悟處又作麼生。」師手を以て一圓相を畫して之を呈し、復後に抛向す。山曰はく、「泥團を弄する漢、甚麼の限りか有らん。」師曰はく、「錯。」山曰はく、「別に人に見えて始めて得ん。」師應諾す。即ち丹霞に造る、霞問ふ、「如何なるか是れ空劫已前の自己。」師曰はく、「井底の蝦蟆月を吞卻す、三更借らず夜明簾。」霞曰はく、「未在更に道へ。」師擬議す、霞打つこと一拂子して曰はく、「又道へ借らず。」

云云 別人の處に
 行き實參究せよ
 【丹霞】 鄧州丹霞
 山の子淳禪師、芙蓉
 道楷の法嗣、洞
 山第九世、宏智は
 此人の法嗣なり。
 今その法系を示せ
 ば左の如し。
 洞山良价 雲居道
 膺 同安道 石道
 安觀志 梁山緣觀
 大陽警玄 投子義
 青 芙蓉道楷 丹
 度子淳 天童宏智
 【空劫以前の自己】
 自己本來の面目と
 云ふが如し、
 【井底の蝦蟇云云】
 自己の光明は蓋天
 蓋地なり。
 【失錢遺罪】 唐朝
 には錢を失へば罪
 に連ふ。引き合は
 ぬとの意。
 【賤】 紙。賤記と
 は今の書記。
 【數人】 金聖の智
 雲、寶の宗、保福の
 悟、鳳山の銅等。
 【眞歇】 眞州長蘆
 山の眞歇、清了禪師
 宏智師兄。

と。師言下に釋然たり、遂に作禮す。霞曰はく、「何ぞ一句を道取せざる。」師曰はく、「某甲
 今日失錢遺罪、霞曰はく、「未だ汝を打得するに暇あらず、且く去れ。」と。霞、大洪を領す、
 師賤記を掌る。後に命じて衆に首たらしむ。得法の者已に數人、四年にして圓通を過り
 し時、眞歇初めて長蘆に住す。僧を遣して還へて至らしむ、衆出でて迎へ、其衣烏穿弊す
 るを見て、且く之を易へんとす。眞歇、侍者をして易ふるに斬履を以てせしむ。師卻けて
 曰はく、「我鞋の爲に來らんや。衆聞いて心服す。說法を懇求して第一座に居す、六年にし
 て出でて泗州の普照に住す。次に太平、圓通、能仁及び長蘆を補す。天童屋廬湫隘なり、
 師至つて創闢して一新す。納子争ひ集る、云云。紹興丁丑九月、郡の僚及び檀越に謁し、
 次に越帥趙公令謁に謁して之と別を言ふ。十月七日山に還る、翌日辰巳の間、沐浴して衣
 を更へ、端坐して衆に告げ、侍者を顧み、筆を索めて書を作り、育王の大慧禪師に遣して
 後事を主らんことを請ふ。仍つて偈を書して曰はく、「夢幻空華、六十七年、白鳥煙に没
 し、秋水天に連る。」と。筆を擲つて逝す。籠留むること七日、顔貌生けるが如し。全體を
 奉じて東谷に塔す。僧臘五十三、其生前遺す所の髮齒設利、之を綴ること珠の如し。宏智
 と謚す、塔を妙光と曰ふ。會元第十四、普燈第九に詳かなり。

萬松行秀禪師傳略

ほんしやうせう ちやうせん せんりかく

【衣鳥穿弊】鳥はくつ、衣は破れ、昔も弊れて、一見非人の如き相。

【大慧禪師】徑山の初め曹洞の禪流に浴し、更に臨濟の諸徳に歴參して、終に圓悟佛果禪師の法嗣となる。

【近す】師の遷化は、我が師の後白河帝保元二年に當る。

【設利】舍利。

【萬松行秀禪師】南宋孝宗乾道二年丙戌に生る。昔が朝の六條帝仁安元年。師と安智禪師の法系に於ける關係左の如し。

芙蓉——丹霞子淳道楷——鹿門自覺——天童安智——普照——一辨——

大明寶——玉山體——雪巖滿——

報恩行秀

宏智頌古

順天府報恩寺萬松行秀禪師は河内の人、族は蔡氏、氣骨凡ならず、幼にして便ち超然として出世の志有り、父母之を難む。然れども終に世を以て相奪ふべからざることを知つて、因つて携へて荊州の淨土寺に送る。誓允を禮して落髮して具を棄る。後、力を決して參究し、囊を擔ひ燕を距り、潭柘を歴て慶壽を過り、勝默老人に參ず。老人曰はく、「此道を學するは金を鍛ふるが如し、滓穢不淨なるときは精金顯れず、君が眉宇の間を觀るに、大いに物の在る有り、此物一番寒骨に徹するに非ずんば放下すること能はず。子後、自ら見よ、老僧が多言に在らず。且長沙自己を轉じて山河大地に歸するの話を看せしむ。半載所入なし。默曰はく、「我只佛が遅く會せんことを願ふ。之を久しうして、一日忽ち省有り、玄沙未徹の語に於て尙未だ透らず。次に雪巖の滿に磁の大明に參ず、言下に忽ち悟つて曰はく、「慙慙に近きことを得たり、從前の伎倆一火にして燼く、始めて勝默爲人の處を知る。雪巖に依ること二年、盡く其底蘊を得、嚴、衣衾を付し、勉むるに大法を流通せんことを以てす。是より兩河三晋皆師の名を欽す。是に於て法門隱然として倚つて以て重きを爲す。尋で淨土に歸り、萬松庵を寺中に構へ、耆宿教く開法を請ふ、師之に應ず。次に中都の萬壽に住す。金の明、昌癸丑、章宗詔して禁庭に入れて隆座せしむ。帝躬に迎禮し、法を聞いて感悟し、錦綺の大僧伽衣を賜ふ。承安丁巳、詔して大都仰山棲隱寺に住せしめ、以て閉山玄冥頭の席を繼がしむ。次に錫を報恩の洪濟に移す。元の大承慶寅、復勅を奉じて中都の萬壽に主たり。晩年に從容庵に退居す。數數鉅刹に遷り、大いに洞上

【世】世俗。

【勝默老人】潭柘

の慶雲山勝默禪師

【一慶六云】諸緣

を放捨し、大死一

番する。

【長沙】長沙の景

岑南泉普願の法嗣

【雪巖】雪巖義存

の法嗣。

【雪巖】雪巖滿禪

師。

【勝默爲人の處】

勝默老人爲人垂手

の親切。

【鉅利】名藍大刹

【洞上の宗】曹洞

宗。

【碧巖錄】二卷し

【碧巖】碧巖録を

指す。萬松老人が

の宗を振ふ。道化極めて盛なりと稱す。嘗て宏智の百頌を拈擧して從容庵録と曰ふ。又請

益録を著す、碧巖の後學を躡ぎ、寶鏡の重垢を開き、甚だ宗門に補有り。師天童鉅利、

自家の學淹通せざることをなし。三たび大藏を閲し、首尾熟貫す、祖燈録六十二卷、釋宗說等

若干卷有り。淨土、仰山、洪濟、萬壽の四刹皆録有り、世に行ふ。元の定宗元年丙午、後

の四月五日を以て疾を示す、七日偈を書して曰はく「八十一年、只此一語、珍重諸人、

切莫錯舉」と、遂に逝く。世壽八十一、宋の乾道二年丙戌に生る、僧臘六十、通玄

門外に茶毘す。舍利無數、諸方の門人分つて塔す、續燈正統第三十五に詳かなり。

萬松老人評唱天童覺和尚頌古從容庵錄序

昔、予京師に在りし時、禪伯甚だ多し、唯り聖安澄公和尚、神氣嚴明にして言辭磊落

たり、予獨り之を重んず。故に嘗て訪ふに、祖道を以てす。屢古昔の尊宿語録の中に得

る所の者を以て之を叩く。澄公間に許可する者有り、予も自ら亦得たりと以爲へり。憂患

に遇ふに及んでより以來、功名の心をば之を束ねて高く閣きて、祖道を求むること愈々

なり。遂に再び前事を以て、諸を聖安に訪ふに、聖安灑案して所見を然りとせず、予甚だ

惑へり。聖安從容として予に謂つて、曰はく「昔、公位要地に居せり、又儒者多く佛書

を誦信せず、惟語緣を搜擧して以て談柄を資く。故に予敢て苦に鉛錘を加へざるのみ。

【元の定宗元年】

南宋理宗淳和六年師年八十一歳、吾が朝後蟻帝希寛元四年。

略して從容録と云ふ。具には萬松老人評唱天童覺和尚頌古從容庵錄と云ふ。

【聖安澄公】 聖安寺の澄公。

【憂患に遇ふに及んで】 世の無常を感じ。

【人跡を云云】 諸縁を放下して實參せしを云ふ。

【屏山】 李子純、字は純甫、自ら屏山と號す。弘州の人、章宗承安年間進士となる。

【閑閑】 趙秉文、字は周臣、自ら閑閑と號す。涪州の人。幼にして賢明顯悟。

【隆公】 傅未詳、蓋し同參にして、萬松の法嗣か。

【從詳】 傅未詳、蓋し同參にして、萬松の法嗣か。

萬松の法嗣か。

今君の心を描るに果して本分の事の爲に以て予に問ふ、予豈猶前愆に襲うて苦口を爲さざることを得んや。予老いたり、素より儒に通ぜず、子に教ふること能はず。萬松老人といふ者有り、儒釋兼ね備り、宗說精通して辯才無礙なり、君之に見ゆべけんや。予既に萬松に謁してより人跡を杜絶し、家務を屏斥して、祁寒大暑と雖も日として參せずといふことに無し。膏を焚いて晷に繼ぎ、寢を廢し餐を忘るること幾と三年、誤つて法恩に被り、謬つて子印に膺る、湛然居士從源を以て之に目く。其參學の際、機鋒測ること固く、變化窮り無し。巍巍として萬仞峯の攀仰すべきこと莫きが若く、滔滔然として萬頃の波の涯際を能くすること莫きが若し。之を睹るに、前かとすれば忽焉として後に在り。平昔の所學を廻視すれば、皆塊礫なるのみ。噫東山に登つて魯を小とし、泰山に登つて天下を小なりといふ者、豈虚語ならんや。其れ未だ闔域に入らざる者、是語を聞かば、必ず予、本を忘れて異を好むと謂はん。唯屏山閑閑と其れ相照さんか。爾後命を奉じて行在に赴き、西征に扈從す、師と相隔つること其幾千里なるを知らず。師の平昔の法語偈頌は皆法兄隆公の收むる所なり、今復其藁を得ず。吾宗に天童といふ者の頌古百篇有り、號して絶唱と爲す。予萬松に此頌を評唱して、後學を開發したまはんことを堅請すること前後九書なり。關を問つること七年、方に寄せらるることを蒙る、予西域に伶仃すること數載、忽ち是書を愛く、酔ひて醒むるが如く、死して甦るが如し。踴躍歡呼して東に望んで稽顙し、再四披繹し、卷を撫して歎じて曰はく、『萬松西域に來るか。』と。其片言隻字も成く指歸有

【天童不合云云】

天童萬松謙然等が種童なる穿索を加へたりと云ふも、要は實參實究にあると結ぶ。

【南宋寧宗嘉定十七年】元の本祖十九年。

【移刺云云】移刺

は神、楚才は字、晉卿は號、始の姓は耶律、後金の臣となり、移刺と改姓す。萬松老人に參じて湛然居士の源と云ふ。理宗の淳祐四年甲辛五十五歳を以て遁す。

【雪竇】

雪竇重顯、禪師、字は隱之、透率府の人、俗姓は李氏、智門、許に嗣ぐ。游夏、孔子の門人の子游、子夏。

【李、杜】李白、杜甫。

り、結款眼を出して高く今古に冠たり、萬世の模楷と爲すに足る。人天の師範となり造化に權衡となる者に非ずんば、孰か能く此に與らんや。予富の數友と、且夕此書を游泳す。大寶山に登り、華藏海に入つて、五珍奇物、廣大悉く備り、左に逢つて右に遇ひ、目富んで心飮くが如し。豈世間の語言を以て其萬一を形容すべけんや。予敢て獨り其美を擅にせず、天下と之を共にせんことを思へり。京城に唯りの法弟從祥といふ者有り、僕と忘年の交を爲す。讀んで書を致して世に刊行して、以て來者に貽さんことを請ふ。廻ち之に序して曰はく、佛祖諸師、根を千丈に埋む、機縁百則見世に苗を生ず、天童不合にして枝を抽んづ、萬松耶之蔓を引くに堪へん。湛然枝蔓上に向つて更に芒索を添へて、香を尋ね氣を逐ふ者の鼻孔を穿過し、玄を行じ妙を體する底の躑跟を絆倒す。向去若し躑跟地に點じ、鼻孔捺天ならんことを要せば、卻つて須らく這葛藤裏に向つて、穿過して始めて得べし。

甲申 南宋寧宗嘉定十七年 中元日

漆水の移刺、楚才晉卿、西坡の呵里馬城に叙す

評唱天童從容庵錄寄湛然居士書

てんどうをひやうしやうするしやうようあんろくをたんねんこじによするしよ
我宗に雪竇、天童有るは猶孔門に游、夏有るがごとし。二師の頌古は猶詩壇の李、杜の

【工部】 杜甫の官名。

【圓通の覺海録】 今は無し。

【壬午】 嘉定十五年。

ごとし。世に雪竇に翰林の才有りと謂ふ。蓋し我華を採つて我實を披はざるなり。又萬里の地を行かず、萬卷の書を読まずんば工部が詩を閲ること母れと謂ふは、其博瞻を言ふなり。諸を天童老師の頌古、片言隻字、皆佛祖の淵源より流出して、學者測ること罔きに擬す。柏山大隱集は其事迹を出す、間疎濶にして類せざる者有り、拈提に至つては、荷簡にして但款に據るのみ。萬松昔評唱す、兵革より以來、其祖業を廢す、邇來、燕京の報恩に退居して、旋蝸舎を築いて榜して從容庵と曰ふ。舊緒を成さんことを圖る、適湛然居士の勸請に値うて之を成す。老眼昏華、多く口占に出づ、門人筆受す。其間繁く機縁の事迹を載す。一には則ち天童の學海の波瀾と附會の巧便とを旌す、二には則ち學人檢討の功を省く、三には則ち萬松述して作らず、臆斷に非ざることを露すなり。竊に佛果の碧巖集に比して、則ち篇篇皆示衆有つて備と爲す。竊に圓通の覺海録に比し、則ち句句未だ嘗て支離せずして完を爲す。著語に眼を出し、筆削するの際に到つては、亦機に臨んで讓らず。壬午の歲の抄、湛然居士の書至つて、堅く拈出せんことを要す。家醜を外に掲げ、吾を累し、汝を累すことを免れざるなり。

癸未年 六年 嘉定十 上巳日

萬松野老風に因つて附寄す 不宣

宏智禪師頌古目次

第三十三則 三聖金鱗
 第三十一則 雲門露柱
 第二十九則 風穴鐵牛
 第二十七則 法眼指犀
 第二十五則 鹽官屎扇
 第二十三則 魯祖面壁
 第二十一則 雲巖掃地
 第十九則 雲門須彌
 第十七則 法眼毫釐
 第十五則 仰山挿鉢
 第十三則 臨濟瞎驢
 第十一則 雲門兩猫
 第九則 藥山斬座
 第七則 青原米價
 第五則 東原請祖
 第三則 世尊陞座

第三十四則 風穴一塵
 第三十二則 仰山心境
 第三十則 大隨劫火
 第二十八則 護國三摩
 第二十六則 仰山看雪
 第二十四則 雲峰拜蛇
 第二十二則 巖頭拜喝
 第二十則 地藏親切
 第十八則 趙州狗子
 第十六則 麻谷振錫
 第十四則 廊侍過茶
 第十二則 地藏種田
 第十則 臺婆野狐
 第八則 百丈白黑
 第六則 馬祖指地
 第四則 世尊磨廓
 第二則 達磨然

第三十五則 洛 浦 伏 膺
 第三十七則 滬 山 業 識
 第三十九則 趙 州 洗 鉢 識
 第四十一則 洛 浦 臨 洗 鉢 識
 第四十三則 羅 山 起 臨 洗 鉢 識
 第四十五則 覺 州 四 起 臨 洗 鉢 識
 第四十七則 趙 州 柏 四 起 臨 洗 鉢 識
 第四十九則 洞 山 供 柏 四 起 臨 洗 鉢 識
 第五十一則 法 眼 缸 眞 樹 節 減 終 鉢 識
 第五十三則 黃 檗 眼 眞 樹 節 減 終 鉢 識
 第五十五則 雪 峰 檗 眼 眞 樹 節 減 終 鉢 識
 第五十七則 嚴 陽 一 飯 囉 缸 眞 樹 節 減 終 鉢 識
 第五十九則 青 林 死 一 物 頭 槽 陸 眞 樹 節 減 終 鉢 識
 第六十一則 乾 峰 一 死 蛇 物 頭 槽 陸 眞 樹 節 減 終 鉢 識
 第六十三則 趙 州 峰 一 死 蛇 物 頭 槽 陸 眞 樹 節 減 終 鉢 識
 第六十五則 首 州 問 一 死 蛇 物 頭 槽 陸 眞 樹 節 減 終 鉢 識
 第六十七則 嚴 智 新 婦 死 畫 蛇 物 頭 槽 陸 眞 樹 節 減 終 鉢 識

第三十六則 馬 師 不 安
 第三十八則 臨 濟 眞 人
 第四十則 雲 門 眞 人
 第四十二則 南 陽 眞 人
 第四十四則 興 陽 眞 人
 第四十六則 德 山 眞 人
 第四十八則 摩 經 眞 人
 第五十則 雪 峰 眞 人
 第五十二則 曹 法 眞 人
 第五十四則 雲 巖 眞 人
 第五十六則 密 師 眞 人
 第五十八則 剛 經 眞 人
 第六十則 鐵 磨 眞 人
 第六十二則 米 磨 眞 人
 第六十四則 子 昭 眞 人
 第六十六則 九 頭 眞 人
 第六十八則 夾 山 眞 人

【本書は、宏智正覺禪師の頌古に萬松老人の著語して從容録と稱するものにして、垂示、本則、頌、着語、評唱の五段あれど、今は垂示、本則、頌のみを譯注す。垂示、着語、評唱は共に萬松老人の作。

【衆に示す】 碧巖集に垂示と云ふと同意。

【曲観木云云】 馬鹿な事。

【也伊を云云】 暗に本則の文殊に掛けて云ふ。

【白槌】 大衆に報告する時に鳴らす道具。

【諦観云云】 説法を終りに唱ふべき證明の文なり。

【化母】 造化主、人人本具の化母を指す。

【下和云云】 韓非子に出づる故事。ここにては達磨の法を知らざる武帝

天童覺和尚頌古 報恩老人著語

第一則 世尊陞座

【衆に示して云はく】 門を閉ちて打睡して上上の機を接し、頤嚙頻呻曲けて中下の爲にす、那ぞ曲親木上に鬼眼睛を弄するに堪へん。箇の傍に背はざる底有らば出で來れ、也伊を怪むことを得ず。

【擧す】 世尊一日陞座。(今日便を嘗ず。) 文殊白槌して云はく、諦観法王法、法王法如是。〔知んぬ、佗は是れ何の心行ぞ。〕 世尊便ち下座。(別日に再び商量せん。)

【頌に云はく】 一段の眞風見るや也塵や。(眼に飄入せしむること莫れ、特地に出づること還つて難し。〕 綿綿として化母機梭を理む。(參差蹉了縵を交ふ。〕 織り成す古錦春象を含む。

〔大巧は拙の若し。〕 東君の漏泄を奈何ともすること無し。(陰陽曲けて狗ふることなし、節氣相饒さず。)

第二則 達磨廓然

【衆に示して云はく】 下和三獻未だ刑に遭ふことを免れず、夜光人に投ず劍を按ぜざる鮮し。 卒客に卒主無し。 假に宜しうして眞に宜しからず。 差珍異寶、用不著、死猫兒頭拈出

に對しての言葉と見よ。

【夜光云云】武帝に對して云云。假は有爲權假、眞は無爲眞實。

【死備兒頭】價の付かぬ貴きもの。

【華鬘第一義】佛法中の第一眞理。

【廓然無聖】凡もなく聖なき意。

【來渡還庭】來機は武帝、還磨と非常の間隔のあること。

【河裏うして】是等皆達磨の冷座少林の胸中を云ふ。

【劫前】父母未生已前、一機未發の時と同意。

【烏龜】盲目の龜非思量の境界。

【雄鷲】石春の引手、意路不到、無分別の端的。

【二十七祖】不如密多の法嗣、達磨の正師。

す看よ。

【擧す】梁の武帝達磨大師に問ふ。(清且に起き來つて曾て市に利あらず。)「如何なるか是れ聖諦第一義。」(且く第二頭に向つて問へ。)磨云はく、「廓然無聖。」(劈腹剗心。)帝云はく、「一朕に對する者は誰ぞ。」(鼻孔裏に牙を認む。)磨云はく、「不識。」(腦後に眼を見る。)帝契はず。(方木間窺に入らず。)遂に江を渡つて少林に至り、面壁九年。(家に滯貨無ければ富まず)【頌に云はく】廓然無聖。(一廻水を飲んで、一廻嘘を著。)來機還庭。(面の赤きは語の直きに如かず。)得は鼻を犯すに非ずして斤を揮ひ、(好手手中好手に誇る。)失は頭を廻さずして額を墮す。(已往を咎めず。)寥寥として少林に冷座し、(老いて心を歇めず。)默默として正令を全提す。(獨り自ら兵機を説く。)秋清うして月、霜輪を轉じ、(高く眼を著けて看よ。)河淡うして斗、夜柄を垂る。(誰か敢て承攬せん。)繩繩として衣鉢兒孫に付す。(莫妄想。)此より人天、藥病と成る。(天行已に過ぐ、使者須らく知るべし。)

第三則 東印講祖

【衆に示して云はく】劫前未兆の機、烏龜火に向ふ。教外別傳の一句、確筈に花を生ず。且く道へ、還つて受持讀誦の分有りや也無しや。

【擧す】東印土の闍王、二十七祖般若多羅を請じて齋す。(往往に口債を償ひ去れり。)玉問うて曰はく、「何ぞ看經せざる。」(功無くして祿を受くれば、寢食安からず。)祖云はく、「貧

【貧道入息】 尊者の自稱。

【陰界云云】 五蘊皆空の意、陰は五蘊、界は十八界。

【如是辯】 法爾常恒不斷展轉。

【木馬】 駿馬の意、これ等は皆般若多羅の境界。

【一塵云云】 萬法歸一、一即萬法の意。

【百草頭上】 全世界の意。

道入息陰界に居せず、出息衆縁に涉らず、常に如是經を轉ずること百千萬億卷。〔上來の講讚、限り無き勝因。〕

【頌に云はく】 雲屣、月を玩んで瓌として輝を含む。〔暗に一線を通ずれば、文彩已に彰る。〕木馬春に游んで駿にして羈されず。〔百花叢裏に過ぐれども、一葉身を沾さず。〕眉底一雙碧眼寒じ、〔曾て蚩蚩の隊を越はず。〕看經那ぞ牛皮を透るに到らん。〔過也。〕明白の心、曠劫を超え、〔威音前の一箭。〕英雄の力、重圍を破る。〔兩重の關を射透す。〕妙圓の樞口靈機を轉ず。〔何ぞ曾て動著せん。〕寒山來時の路を忘卻すれば、〔暫時も在らざれば、死人に如同す。〕拾得相將みて手を携へて歸る。〔須らく是れ當郷の人なるべし。〕

第四則世尊指地

【衆に示して云はく】 一塵纔に擧つて大地全く收る。匹馬單槍、繩を聞き土を展ぶること便ち可なり。處に隨つて主と作り、縁に遇うて宗に即する底、是れ甚麼人ぞ。

【擧す】 世尊、衆と行く次、〔他の關眼に隨つて轉ず。〕手を以て地を指して云はく、〔此處宜しく梵刹を建つべし。〕〔太茂頭上、土を動すべからず。〕帝釋、一莖草を將て地上に挿んで云はく、〔梵刹を建つること已に竟んぬ。〕〔修造易からず。〕世尊微笑す。〔賞罰分明。〕

【頌に云はく】 百草頭上、無邊の春。〔夾山猶在り。〕手に信せ拈じ來つて用ひ得て親し。〔荒田に入りて挿ばず。〕丈六の金身功德聚。〔不審し。〕等閑に手を携へて紅塵に入る。〔場に

【化外云云】意外
の處より帝釋出づ
【觸處云云】梵刹
建立など人に觸み
はきぬとの意。

【關提云云】大報
恩經に出づ。須闍
太子の孝養。

【刺蓮云云】增阿
含經に出づ。提婆
達多の惡心。

【刺棘云云】妄想
分別。

【梅檀云云】菩提
悟處。

【青原】青原行思
禪師。六祖惠能に
嗣ぐ。

【盧陵云云】恐ら
くは僧の盧陵より
來りしものならん

【口を開き云云】
向上の宗旨に就い
て納子本分の行狀
を云ふ。

【他】師家の言句

逢うて戲を作す。空中能く主と作る。(一)觸權手に在り。(二)化外自ら來賓す。(三)令行の時を看取せよ。觸處生涯分に隨つて足る。(入從り得ず)未だ嫌はず伎倆の人に如かざること(一)面に慚づる色なし。

第五則 青原米價

【衆に示して云はく】關提肉を割いて觀に供するも、孝子の樽に入らず、調達山を推して佛を壓するも、草忽雷の鳴るを怕れんや。刺棘林を過得し、梅檀林を斫倒して、直に年窮歲盡を待て、舊に依つて孟春猶寒し、佛の法身甚處の處にか在る。

【擧す】僧、青原に問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」小官は多く律を念ふ。原云はく、「盧陵の米、作麼の價ぞ。」(老將は兵を入論せず。)

【頌に云はく】太平の治業に象無し。(一)旋頭星現するや也未だしや。(二)野老の家風至淳なり。(三)争か如かん、我這裏に田を種る飯を搏めて喫せんには。(四)只管に村歌社飲。(五)窮鬼子、快活不徹也。(六)那ぞ舜德堯仁を知らん。(七)始めて忠孝を成す。)

第六則 馬祖白黑

【衆に示して云はく】口を開き得ざる時、無舌の人語ることを解す、驢を擡げ起さざる處、無足の人行くことを解す。若し也他の殻中に落ち句下に死在せば、豈自由の分有らんや。

【馬大師】馬祖道一禪師、南嶽懷讓の法嗣。

【四句、百非】共に安思を云ふ。

【智藏】西堂智藏禪師、馬祖に嗣ぐ

【海兄】百丈懷海禪師、馬祖に嗣ぐ

【克家の子】家を克く興す孝子にして、智藏懷海を指す。

【毘耶】毘耶離城の維摩。

【老古錘】圭角の取れた老熟圓満の宗師。

四山相逼る時、如何が透脱せん。

【學す】僧、馬大師に問ふ、「四句を離れ百非を絶して、請ふ師某甲に西來意を直指せよ。」

〔若し這僧の問頭を識らば、人の多少の心力を省かん。〕大師云はく、「我今日勞倦す、汝が爲に説くこと能はず、(己に缸中の月有り。〕智藏に問取し去れ。」(更に帆上に風を添へ。〕僧、

藏に問ふ。(卻つて人の處分を受く)藏云はく、「何ぞ和尚に問はざる。」(好木多同。〕僧云はく、「和尚教へ來つて問はしむ。」(可煞靈利。〕藏云はく、「我今日頭痛す、汝が爲に説くこと

能はず、海兄に問取し去れ。」(我馬師の弟子と作り得ずんばあるべからず。〕僧、海に問ふ、

〔苦瓠は根に連りて苦し。〕海云はく、「我這裏に到つて卻つて不會。」(甜瓜は蒂に徹して甜し。〕僧、大師に舉示す。(草鞋錢を素取せよ。〕大師云はく、「藏頭白、海頭黒。」(更に參ぜよ

三十年。)

【頰に云はく】薬の病と作る。(胡人乳を飲んで返つて良醫を怪む。〕前聖に鑒む。(師多ければ脈亂る。〕病の醫と作る。(薬を以て薬を下し、毒を以て毒を去る。〕必ずや其れ誰ぞ。(是れ

天章なること莫しや。〕白頭黒頭兮克家の子。(一密に燒就す。〕有句無句兮截流の機。(更に瀉

山をして笑轉新ならしむ。〕堂堂として坐斷す舌頭の路。(一死再活せず。〕應に笑ふべし毘

耶の老古錘。(只一槩と得たり。)

第七則 藥山陸座

【眉毛云云】眉毛は一能もなくして上位に居る。
【拙者】薬山を指す。

【癡兒】院主、大衆を指す。
【正啼錢】涅槃經

嬰兒行品に出づ。
黄葉實は黄金に非ず、ただ嬰兒の啼哭を止めんとするの方便のみ。

【良馴云云】鈍漢は致方がない。
【雲長空云云】以下の二句は薬山の境界。

【箇の元字云云】文字言句の葛藤を云ふ。

【西天の令】直指の號合。

【黙郎】黙は癡、即ち癡漢。

【衆に示して云はく】眼耳鼻舌各一能有つて、眉毛は上に在り。士農工商各一務に歸して、拙者常に閑なり。自分の宗師如何が施設せん。

【擧す】薬山久しく陞座せず。(動は靜に如かず。)院主白して云はく、「大衆久しく示誨を思ふ、請ふ和尚、衆の爲に說法したまへ。」(重に便して輕に便せず。)山、鐘を打せしむ、衆方に集る。(頭を聚め相を作して、那事ぞ悠悠たる。)山、陞座、良久して、便ち下座して方丈に歸る。(一場の話勸。)主後に隨つて問ふ、「和尚適來、衆の爲に說法せんことを許す、云何ぞ一言を垂れざる。」(大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし。)山云はく、「經に經師有り、論に論師有り、爭か老僧を怪み得ん。」(惜むべし、龍頭蛇尾なることをを。)

【窓に曰はく】癡兒意を刻む止啼錢。(何の用を作すに堪へん。)良馴追風影鞭を顧みる。(踢起して便ち行く。)雲長空を掃ふとき月に巢ふ鶴。(樹下底一場の懺懼。)寒清骨に入つて眠りを成さず。(眼を聞いて夢を作す。)

第八則 百丈野狐

【衆に示して云はく】箇の元字脚を記して心に在かば、地獄に入ること箭を射るが如し。一點の野狐涎、嚙下すれば、三十年吐不出、是れ西天の令嚴なるにあらず、只黙郎の業重きが爲なり。曾て悞犯の者有りや。

【擧す】百丈上堂、常に一老人あつて法を聽く、衆に隨つて散じ去る。(闍中に靜を取

る。一日去らず。〔從來這漢を疑着す〕丈乃ち問ふ、「立つ者は何人ぞ。」〔事交を解せざれども、客來らば須らく待すべし。〕老人云はく、「某甲過去迦葉佛の時に於て、曾て此山に住す。〔元是れ當家の人。〕學人有つて問ふ。大修行底の人、還つて因果に落つるや也無しや。〔但好事を行じて、前程を問ふこと莫れ。〕他に對へて道はく、『不落因果』と。〔一句合頭の語、萬劫の繫驢轡。〕野狐身に墮すること五百生。〔爾因果に落ちずと道ふ。〕今請ふ、和尚一轉語を代れ。〔甚の來山をか著ん。〕丈云はく、『不味因果。』〔一坑に埋卻せん。〕老人言下に於て大悟す。〔狐涎猶在り。〕

【瀟灑落落】 修行の處に到達。
 【哆哆】 修行の相。
 【和和】 多言の意。
 【哩囉】 小兒の語。

【半提云云】 看來れば未だ不成ならず。

【頰に云はく】 一尺の水一丈の波。〔幸に自ら河清海晏。〕五百生前奈何ともせず。〔早く今日の事を知らば、悔らくは當初を愼まざることを。〕不落不味、商量せり。〔頑涎斷ぜず。〕依然として撞入す葛藤窠。〔頭に纏ひ脚に繳ふ。〕阿呵呵。〔笑ふに堪へたり、悲むに堪へたり。〕會すや也麼や。〔牛頭を按じて草を喫せしむ。〕若し是れ爾灑灑落落たらば、〔蟲の木を禦むが如し。〕我哆哆和和を助けず。〔偶爾として文を成す。〕神歌社舞 自ら曲を成す。〔拍拍是れ令。〕手を其間に拍して哩囉を唱ふ。〔細末にし將ち來れ。〕

第九則 南泉斬猫

【衆に示して云はく】 滄海を踏翻すれば、大地塵のごとくに飛び、白雲を喝散すれば、虚空粉のごとくに碎く。嚴に正令を行ずるも、猶是れ半提、大用全く彰る。如何が施設せ

【南泉】南泉普願
馬祖道一に法を嗣
ぐ。

【趙州】趙州從諗
禪師、南泉の法を
嗣ぐ。

【紛拏】紛は紛亂
拏は持搏

【王老師】南泉。
【作家】南泉の作
家。

【知音】趙州を指
す。

【大禹】南泉に喩
ふ。

【女媧】趙州に喩
ふ。

【草鞋云云】十分
てはないと抑下す

ん。

【擧す】南泉一日、東西の兩堂、猫兒を争ふ。(人平かにして語らず、水平かにして流れず)南泉見て遂に提起して云はく、道ひ得ば即ち斬らじ。誰か敢て鋒に當らん。衆對ふる無し。(直に雨の頭に淋ぐを待て)泉、猫兒を斬却して兩段と爲す。(刀を抽いて鞘に入れず)泉、復前話を擧して趙州に問ふ。(再來半文に直らず)便ち草鞋を脱して、頭上に戴いて出づ。(好し一刀兩段を與ふるに)泉云はく、子若し在らば、恰も猫兒を救ひ得ん。(心斜なれば口の喝を覺えず)

【頌に曰はく】兩堂の雲水、悉く紛拏す。(理有ることは高聲に在らず)王老師能く正邪を驗む。(明鏡臺に當つて、物來れば斯に鑑む)利刀斬斷して俱に像を亡す。(龍王多少の風を消ひ得たり)千古人をして作家を愛せしむ。(一人有つて肯はず)此道未だ喪びず。(死猫兒頭何の用を作すにか堪へん)知音嘉すべし。(無と道はず只是れ少し)山を擊つて海に透すことは、唯り大禹を尊とす。(功浪りに施さず)石を鍊つて天を補ふことは、獨り女媧を賢とす。(一を闕いては不可なり)趙州老生洲有り。(手に信せて拈じ來つて不是なし)草鞋頭に戴いて些些に較れり。(且く一半を信ず)異中來や還つて明鑑。(衲子は謾じ難し)只箇の眞金沙に混ぜず。(是れ眞に滅し難し)

第十則 臺山婆子

【收あり、放あり】
把住放行自由自在
【干木】 拄杖子。
【塵勞魔外】 煩惱
妄想。
【戲具と爲る】 何
等障礙せぬとの意

【精】 精魅、即ち
怪物。

【錢に直らず】 何
の役にもならぬ。

【衆に示して云はく】 收有り放有り、干木身に隨ふ、能殺能活、權衡手に在り、塵勞魔外、盡く指呼に付し、大地山河、皆戲具と成る。且く道へ、是れ甚麼の境界ぞ。

【擧す】 臺山路上一、婆子有り。(傍城 庄家、道を夾むの兔。)凡そ僧有りて、臺山の路

什麼の處に向つて去ると問へば、(一生行脚して去る處も亦知らず。)婆云はく、「鶯直去。」未

だ好心に當らず。(僧纒に行く。)賊を著ることだも也知らず。婆云はく、「好箇の阿師、又恁麼にし去れり。(爾早く侯白。)僧、趙州に擧似す。(入平かにして語らず。)州云はく、「待て

與に勘過せん。(水平かにして流れず。)州亦前の如く問ふ。(陷虎の機。)來日に至つて上堂に云はく、「我汝が爲に婆子を勘破し了れり。」(我更に侯黑。)

【頌に云はく】 年老いて精と成る謬つて傳へず。(切に忌む人家の男女を魔魅することぞ) 趙州古佛 南泉に嗣ぐ (鎮州端的大蘿蔔を出す。) 枯龜命を喪ふことは圖象に因る。(靈鬼靈

神、返つて羅網に遭ふ) 良駒追風纏牽に 累さる (驟風驟雨も羈轡を免れず) 勘破了や老婆禪。(幾箇の男兒か是れ丈夫。) 人前に説向すれば錢に直らず。(根、聖ならざることを知る。)

第十一則 雲門兩病

【衆に示して云はく】 無身の人疾を患ひ、無手の人藥を合す、無口の人服食し、無受の人安樂なり。且く道へ膏肓の疾、如何が調理せん。

【雲門】雲門文偃
禪師、雪峰義存禪
師の法嗣

【光透脫云云】光
とは自己、透脫せ
ざるは分別心、兩
教とは空有二境。

【隱隱地】物影暗
く、不分明。

【放過】是れて良
いと腰を下す。

【靜嶽に許す】何
等取捨を用ひざる
の意。

【眼睛を礙ふ】空
を忘せざるが故に

【船は云云】雲門
の境界を歌ふ。前
の二句は向上の境
とすれば、以下の
二句は雲門の爲人
底の境、即ち向下
の境界を云ふ。

【露地】大乘の極
地、煩惱妄想なき
ところ。

【擧す】雲門大師云はく、「光透脫せざれば、兩般の病有り。」(還つて口乾き舌縮むを覺ゆる
 麼。)一切處明ならず、面前物ある是れ一つ、「白日に鬼を見る、是れ眼花なること莫しや。」
 一切の法空を透得するも、隱隱地に箇の物有るに似て相似たり。亦是れ光透脫せざるなり。
 「早く是れ結習、那ぞ歌閉づるに堪へん。」又法身にも亦兩般の病あり。「彌單に行はれ
 ず。」法身に到ることを得るも法執忘ぜず、已見猶存するが爲に、法身邊に墮在す是れ一つ。
 「唯邪崇のみにあらず、更に家親有り。」直饒透得するも放過せば即ち不可なり。「病を養ひ
 て軀を喪す。」子細に點檢し將も來れば、甚麼の氣息か有らんといふ、亦是れ病なり。「(醫
 博未だ門を離れざるに、又早く痼病發す。)」

【頌に云はく】森羅萬象崢嶸に許す。(聽他何ぞ汝を礙へん、識得すれば寃を爲さず。)透
 脫無方なるも眼睛を礙ふ。(閃輝骨梁に著けん。)彼門庭を掃ふ、誰か力有る。(迹を拂へば痕
 を成し、隠さんと欲すれば彌彌露る。)人の智次に隠れて自ら情を成す。(心疑はば暗鬼
 を生ず。)(霧は野渡の秋を滿して碧なるに横へ、(死水浸卻す。)(棹は薰花の雪を照して明なる
 に入る。)(岸に住して卻つて人を迷す。)(串錦の老漁市に就かんことを懷ひて、(本を著けて利
 を圖る。)(飄飄として一葉浪頭に行く。)(流に隨つて妙を得。)

第十二則 地藏種田

【衆に示して云はく】才子は筆耕し、辯士は舌耕す。我納僧家、露地の白牛を見るに慵し、

【無根云云】 靈妙なる師。

【地藏】 地藏桂琛禪師、玄沙師備禪師の法嗣。

【脩山主】 龍齊紹修禪師、地藏の法嗣。

【三界】 欲界、色界、無色界を云ふ。

【宗説云云】 宗通説通の二方面を行ふ。

【支離】 離れ離れ脩山に當る。

【子房云云】 史記に出づ。子房、齊の三萬戸の封侯を貴ばず。

無根の瑞草を顧みず、如何が日を度らん。

【擧す】 地藏、脩山主に問ふ。『甚れの處より來る。』〔來處を知らずと道ひ得てん麼。〕脩云はく、『南方より來る。』〔好し與に下載するに。〕藏云はく、『南方近日佛法如何。』〔行説好話するに。〕脩云はく、『商量浩浩地。』〔低聲。〕藏云はく、『争か如かん我這裏、田を植を飯を搏めて喫せんには。』〔少賣弄。〕脩云はく、『三界を争奈何せん。』〔猶這箇の在る有り。〕藏云はく、『爾甚麼を喚んでか三界と作す。』〔南方は猶可なり、北方は更に瞷だし。〕

【頌に云はく】 宗説般般盡く強ひて爲す。〔今日便を著す。〕耳口に流傳すれば便ち支離。〔衆僧怪む莫れ。〕田を植を飯を搏む家常の事。〔別に有るべからず。〕是れ飽參の人にあらんば知らず。〔知らんことを要して作麼せん。〕參じ飽いて明かに知る所求無きことを。〔更に須らく天童に請益すること一遍すべし。〕子房終に封侯を貴ばず。〔是れ龜尾を曳く。〕機を忘じ歸り去つて魚鳥に同じうす。〔流に隨つて妙を得。〕足を濯ふ滄浪煙水の秋。〔受用不盡。〕

第十三則 臨濟瞎驢

【衆に示して云はく】 一向に人の爲にして己あることを知らず、直に須らく法を盡して民無きことを管せざるべし。須らく是れ木枕を拗折する惡手脚なるべし。行に臨むの際、合に作麼生。

【臨濟】臨濟惠照禪師、俗姓は邢氏、黃髮希運禪師の法嗣。

【三聖】三聖惠然禪師、臨濟の法を嗣ぐ。

【正法眼藏】釋迦直傳の正法の眞髓

【瞎驢邊云云】盲日月上の意

【盧能】六祖惠能指す。姓は盧氏。

【攪攪】交亂の意

【黃梅】五祖弘忍大師の處

【海嶽】迷悟凡聖

【探掌云云】師家の學者を試験する様子

【覺侍者】興化法子

【徳山】徳山宣鑑禪師。龍潭崇信禪師の法嗣。

【擧す】臨濟將に滅を示さんとして、三聖に囑す。「老婆死に臨んで三回別る。」吾遷化の後、吾正法眼藏を滅却することを得ざれ。「甚の死急をか著けたる。」聖云はく、「争か敢て和尚の正法眼藏を滅却せん。」「小心を伴れども故に大膽。」濟云はく、「忽ち人有つて汝に問はば、作麼生か對へん。」「虎口裏に身を横ふ。」聖、便ち喝す。「機に當つて父に譲らず。」濟云はく、「誰か知らん吾正法眼藏、這瞎驢邊に向つて滅却することを。」「重賞の下、必ず勇夫有り。」

【頌に云はく】信衣半夜盧能に付す。「賊兒賊智」攪攪たり黃梅七百の僧。「上梁正しからず。」臨濟一枝の正法眼。「半明半暗、今く今朝に在り。」瞎驢滅却して人の憎みを得たり。「心甜く口苦し。」心心相印し、「販私鹽の漢。」祖祖燈を傳ふ。「壁を撃ちて光を偷む。」海嶽を夷平し、「黃鶴樓を拳倒し、鸚鵡洲を鷓鴣す。」愚鷓を變化す。「手を翻せば是れ雲、手を覆せば是れ雨。」只箇の名言比擬し難し。「猶少きを嫌ふこと有り。」太都手段灑騰を解す。「正法眼藏猶在り。」

第十四則 廓侍 過茶

【衆に示して云はく】探竿手に在り、影草身に隨ふ。有時は鐵に綿團を裏み、有時は錦に特石を包む。剛を以て柔を決することは則ち故是、強に逢うては即ち弱なる事如何。

【擧す】廓侍者、徳山に問ふ。「從上の諸聖什麼の處に向つてか去るや。」「爾が鼻孔裏に在

【作麼作麼】 左様
左様の意。

【龍馬】 名馬の異稱。

【跛驚】 鈍馬の異稱。

【瞥地】 瞥は、ちらりと見ること、地は助字。

【作者】 徳山を指す。

【機に輪く】 無言にして休し去る。

【發すれば】 徳山の手中を云ふ。

【嗣後云云】 悪人の人相。

【渠】 廓侍者。

【瀉山】 瀉山靈祐禪師、百丈に嗣法し、瀉山に住す、瀉仰宗の祖。
【仰山】 惠寂禪師、瀉山に法嗣す。共に瀉仰宗の祖。
【田中】 自己の心

り。山云はく、『作麼作麼。』(迅雷耳を掩ふに及ばず。廓云はく、『飛龍馬を勅點すれば、跛驚出頭し來る。』)家富んで兒騙る。山便ち休し去る。(饒人はれ癡なるにあらす。來日、山、浴より出づ。廓、茶を過じて山に與ふ。山、廓が背を撫すること一下す。(斷送して竿頭に上す。廓云はく、『這老漢方に始めて瞥地。』)覆車轍を同じうす。山、又休し去る。(虎頭虎尾一時に收む。)

【頌に云はく】 觀面に來る時作者知る。(味者は覺らず。可の中石火電光遲し。(已に新羅を過ぐ。機に輪く謀主に深意有り。(兵を埋めて、鬪を掉む。敵を欺く兵家に遠思無し。深く虜庭に入る。發すれば必ず中る。(其便を得るに慣ふ。更に誰をか謾せん。(賊を併せて捉獲す。嗣後に腮を見て人觸犯し難し。(曾て蛇咬を経。眉底に眼を著けて渠便宜を得たり。))伴りて知らざるを打つまねす)

第十五則 仰山挿鉢

【衆に示して云はく】 未だ語らざるに先知る、之を默論と謂ふ。明さされども自ら顯る、之を暗機と謂ふ。三門前に合掌すれば、兩廊下に行道す。箇の意度あり、中庭上に舞を作せば、後門下に頭を搖す、又作麼生。
【擧す】 瀉山、仰山に問ふ、『甚麼の處よりか來る。』(是れ來處を知らざるにはあらず。仰云はく、『田中より來る。』) (備甚としてか草に落つ。山云はく、『田中多少の人ぞ。』) (只父子

【老語云云】 高山を指す。

【麻谷】 麻谷實徴禪師、馬祖遺一書師の法嗣。

【風力云云】 楞嚴經に出づ、此身の妄縁。

兩箇)骨、銀子を挿下して又手して立つ。(放去は較較危し。)山云はく、「南山に大いに人有つて葬を刈る。」(草を打つて蛇を驚す。)仰、銀子を拵じて便ち行く。(收來は太だ速かなり。)

【頌に云はく】 老覺情多うして子孫を念ふ。(婆心太だ切なり。)而今慚愧して家門を起す。(三十年臘醋、少からず。)是れ須らく南山の語を記取すべし。(貴人多く忘る。)骨に鑄め肌に銘じて共に恩を報ぜよ。(恨心捨てず。)

第十六則 麻谷振錫

【衆に示して云はく】 鹿を指して馬と爲し、土を握つて金と成す。舌上に風雷を起し、肩間に血刃を藏す。坐ながらに成敗を觀、立どころに死生を驗む。且く道へ、是れ何の三昧ぞ。

【擧す】 麻谷、錫を持して章敬に到り、禪牀を遶ること三匝、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。(可憐禪有り。)敬云はく、「是是。」(且く一半を信す。)谷、又南泉に到り、禪牀を遶ること三匝、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。(來朝更に楚王に獻じて看よ。)泉云はく、「不是不是。」(也且く一半を信す。)谷云はく、「章敬は是と道ひ、和尚は何處としてか不是と道ふ。」(栢木裏に睡眼す。)泉云はく、「章敬は即ち是、是れ汝は不是。」(雪上に霜を加ふ。)此は是れ風力の所轉、終に敗壞を成す。(人を殺しては須らく血を見るべし。)

【捲積】積又は積に作る。落しあな師家の學者を束縛するの意。

【縱也】放行にして章敏に當る。

【奪也】把住にして南泉に當る。

【金錫】以下龍谷に當りて云ふ。

【孤標】天下我一人と云ふ意。

【鞞釧云云】本來一物の意。

【錮鑄云云】如何なる錮も鐵鑄を挽き切ること能はず。

【法眼】法眼宗の祖、青涼文益禪師の地蔵挂珠の法嗣。

【秤頭云云】秤竿の上に分別を入れる。

【終に歸して云云】何物が來ても口方を知らると云ふ意。

【頰に云はく】是と不是と。(細腰の鼓子兩頭打つ。)好し、捲積を看るに。(頭を刺して裏許に在き了れり。)抑するに似、揚するに似たり。(手擽手捺。)兄たり難く弟たり難し。(頭高頭低。)縱也彼既に時に臨む。(手を翻せば是れ雲。)奪也我何ぞ特地ならん。(手を覆せば是れ雨。)金錫一たび振うて人だ孤標。(掌を脱して俗を離る。)細牀一たび逸つて閑りに遊戯す。(行に囚つて臂を掉ふ。)叢林擾擾として是非生ず。(矮子戯を看る。)想像る鞞釧前に鬼を見ることを。(家に白澤の圍有れば、必ず是の如きの妖怪なし。)

第十七則 法眼 毫釐

【案に示して云はく】一雙の孤鶴、地を搦つて高く飛び、一對の鷺鷥、池邊に獨立す。箭鋒相挂ふることは日く致く、錮解秤錘の時如何。

【擧す】法眼、脩山主に問ふ、毫釐も差あれば天地懸に隔る、汝作麼生か會す。(誰か敢て動著せん。)脩云はく、毫釐も差あれば天地懸に隔る。(百草を圍はしむること甚麼の難きことか有らん。)眼云はく、恁麼ならば父爭か得ん。(鐵山横はつて路に在り。)脩云はく、某甲只此の如し、和尚又如何。(鼻頭を振轉す。)眼云はく、毫釐も差あれば天地懸に隔る。(將に謂へり別に有り)脩、便ち禮拜す。(錯を將て錯に就く。)

【頰に云はく】秤頭蠅坐すれば便ち欬傾す。(他の一星を誤じ過さず。)萬世の權衡不平を照す。(斗満ちて秤錘住す。)片兩錘銖、端的を見るも、錯つて認むること莫れ。(終に歸して我

定盤星に輪く。(鈎頭の意を領取せよ。)

第十八則 趙州 狗子

【水上の蒟蘆云云】
師家の關下を探ることとは不可能。
【日中の寶云云】
師家の無所住の處を云ふ。

【這箇】 狗子を指す。

【直鉤云云】 姜子牙の故事、命を捨てて初めて得べし。
【氣を逐ひ】 有に執し、無に著するを云ふ。
【平かに云云】 趙州の境界。

【衆に示して云はく】 水上の蒟蘆、按著すれば便ち轉ず。日中の寶石、色に定れる形無し。無心を以ても得べからず、有心を以ても知るべからず。没量の大人、語脈裏に轉却せらる。還つて免れ得る底有りや。

【擧す】 僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也無しや。」(街を擲り塊を趣ふ。)州云はく、「有。」(也曾て添へず)僧云はく、「既に有、甚麼と爲てか却つて這箇の皮袋に撞入するや。」(一欸に便ち招く、自領出頭)州云はく、「他の知つて故に犯すが爲なり。」(且く招承すること莫れ、是れ舖を道ふにあらず)又僧有り問ふ、「狗子に還つて佛性有りや也無しや。」(一母の所生)州云はく、「無。」(也曾て滅せず)僧云はく、「一切衆生皆佛性有り」と、狗子什麼としてか却つて無なる。」(懲狗、鷄子を趣ふ。)州云はく、「伊に業識の在る有るが爲なり。」(右具に前の如し、欸に據つて案に結す。)

【頌に云はく】 狗子佛性有、狗子佛性無。(打して一團と做し、鍊つて一塊と做す。)直鉤元命に負く魚を求む。(這僧今日合に死すべし)氣を逐ひ香を尋ひ雲水の客(鼻孔を穿却して也知らず)嚼嚼雜雜として分疎を作す。(斃つて枯骨を齧む、囉囉吠吠)平かに展演し(蹠欺くこと没し、廝來ることを休めよ。)大いに銷舒す。(材高く語壯なり)怪しむこと莫れ儂

【秦王云云】二人の僧も趙州の腹を知らず、有無に執着す

【韶陽】雲門大師甚とてか云云第二義門に下りて説法す

【須彌山】意識不到の處を云ふ。

【假鷄云云】孟嘗君の故事。

【長安の大道】人の自己の本家郷

が家初を慎まざることを。(一言口より出でて、駟馬も追ひ難し。)瑕疵を指點して還つて驢を奪ふ。(白拈巧偷)秦王は識らず蘭相如。(當面に蹉過す。)

第十九則 雲門須彌

【衆に示して云はく】我は愛す韶陽新定の機、一生人の爲に釘楔を抜く。甚としてか有時は也門を開いて膠盆を撥出し、路に當つて陷穽を鑿成す。試みに揀辨して看よ。

【擧す】僧、雲門に問ふ、「不起一念還つて過有りや也無しや。」(言清く行濁る漢)門云はく、「須彌山。」(險)。

【頌に云はく】不起一念、須彌山。(一句に便了了す。)韶陽の法施、意慳むに非ず。(天童も也少からず)背ひ來らば、兩手に相付せん。(只恐くは爾が承當不下ならんことを。)擬し去らば千尋攀づべからず。(徒に研額を勞す)滄海瀾く、(天を滿し日に浴し、涯岸無し。)白雲閑なり。(鶴に伴ひ風に隨つて自由を得たり)毫髮を將て其間に著くること莫れ。(已に太多生)假鷄の聲韻我を謾じ難し。(眞、僞を掩はず)未だ背て横胡して關を放過せず。(西天令嚴なり。)

第二十則 地藏親切

【衆に示して云はく】入理の深談は、三を嘲り四を擯く、長安の大道は、七縦八横。忽然

【高云云】十年二十年實參實究。

【道遠】 縦横に行

【兼云云】 迷悟凡衆、有無、得失を脱す。

【高き云云】 法眼の境界。

【同氣連枝】 雲巖道吾を指す。

として口を開いて説破し、歩を擧げて踏著せば、便ち高く鉢囊を掛け、杖杖を掲着すべし。且く道へ、誰か是れ其人ぞ。

【擧す】 地蔵、法眼に開ふ、「上座何くにか往くや。」(人を羅織して作麼せん) 眼曰はく、「道遠として行脚す。」(草鞋を索め去れ。) 藏云はく、「行脚の事作麼生。」(果然として放不過) 眼云はく、「不知。」(何ぞ早く慈雲に道はざる。) 藏云はく、「不知最も親切。」(就身打劫) 眼、驚然として大悟す、「險んど驚纏を費さんとす。」

【頌に云はく】 而今參し飽いて當時に似たり。(吾猶昔人のごとくにして昔人に非ず) 羅織を脱盡して不知に到る。(猶道箇の在る有り) 短に任せ長に任せて勇緩することを休めよ。(枉げて工夫を費す) 高きに隨ひ下に隨つて自ら平治。(心力を勞せず) 家門の豊儉時に臨んで用ふ。(齋講を闢くことを得ず) 田地優游歩に信せて移す。(行かんと要すれば即ち行く) 三十年前行脚の事。(思量すべき没し) 分明に辜負す一雙の肩。(前に依つて眼上に在り)

第二十一則 雲巖掃地

【衆に示して云はく】 迷悟を脱し衆凡を絶すれば、多事無しと雖も、主賓を立て貴賤を分つことは別に是れ一家、材を量つて職を授くることは即ち無きにあらず。同氣連枝、作麼生か會せん。

【雲巖】雲巖晏成
禪師、藥山惟儼禪
師の法嗣。洞山の
嚴師。

【道吾】道吾圓智
禪師、藥山惟儼禪
師の法嗣、雲巖と
同參。

【太區區生】コセ
コセとして掃除す
る。

【第二月】區區と
區區たらざるもの
と。

【奴は婢】奴は雲
巖、婢は道吾に當
る。

【象骨巖】雪峯の
居處。

【焦尾の大蟲】虎
なり。巖頭に當る

【巖頭】巖頭全藏
禪師、慧山宣鑑禪
師の法嗣、雪峰の
師兄。

【洞山】洞山良价
禪師、雲巖の法嗣
曹洞宗の祖。

宏智頌古

【擧す】雲巖掃地の次、〔沙彌行童、氣力を得ず。〕道吾云はく、『太區區生。』〔兵を埋めて
たのみ。〕巖云はく、『須らく知るべし、區區たらざる者有ることを。』〔惜むべし話兩極
と作る。〕吾云はく、『慙麼ならば即ち第二月ありや。』〔豈止第二のみならんや、百千萬箇。〕
巖、帚掃を提起して云はく、『這箇は是れ第幾月ぞ。』〔水晶宮裏より出頭し來る。〕吾、便ち
休し去る。〔盡く不言の中に在り。〕玄沙云はく、『正に是れ第二月。』〔一人虚を傳ふれば、
萬人實と傳ふ。〕雲門云はく、『奴は婢を見て殷勤。』〔邪に隨つて篋箕を撲つ。〕
【頌に云はく】借り來つて聊爾として門頭を了す。〔當處に發生し。〕用ふることを得て宜し
きに隨つて即便ち休す。〔隨處に滅盡す。〕象骨巖前蛇を弄するの手。〔他人を道はんと欲せ
ば。〕兒の時の做處老いて羞を知るや。〔先づ自己を治めよ。〕

第二十二則 巖頭拜喝

【衆に示して云はく】人は語を將て探り、水は杖を將て探る。撥草瞻風は尋常用ふる底な
り。忽然として箇の焦尾の大蟲を跳出せば、又作麼生。
【擧す】巖頭、徳山に到る。門に跨つて便ち問ふ、『是れ凡か是れ聖か。』〔這賊。〕山、便ち
喝す。〔髑髏を裂破す。〕頭、禮拜す。〔未だ好心に當らず。〕洞山聞いて云はく、『若し是れ豁公
にあらずんば、大いに承當し難からん。』〔幣を厚くし、言を甘にす。〕頭云はく、『洞山老
漢、好悪を識らず。』〔却つて又著忙す。〕我當時一手擽一手捺。〔我豈知らんや。〕

二九

【來機】 德山。
 【權柄】 巖頭。
 【賓】 洞山。
 【君】 巖頭。
 【臣】 巖頭。

【壁觀】 時の人、壁觀婆羅門と云ふ。
 【神光】 二祖惠可大師、名は神光、達磨の少林に黙坐するや、三拜して衣法の付囑を受く。
 【魯祖】 魯祖法雲禪師、馬祖に法を嗣ぐ。
 【佛未だ出世せざる時】 佛法不現前の時。
 【他】 魯祖を云ふ。
 【淡中】 淡中に云ふ魯祖の境界。

【頌に云はく】 來機を挫ぎ、(風行けば草偃す) 權柄を總ぶ、(符到つて奉行す) 事に必行の威あり、(佛手も遮り得ず) 國に不犯の令あり。(誰か敢て當頭せん) 賓、奉を尙んで主驕り、(下は以て上を風刺し) 君、諫を忌んで臣佞す。(上は以て下を風化す) 底の意ぞ巖頭、徳山に問ふ。(然も父子、師を興すと雖も) 一擡一捺、心行を看よ。(未だ干戈相待すること免れず。)

第二十三則 魯祖面壁

【衆に示して云はく】 達磨九年呼んで壁觀と爲す。神光三拜、天機を漏泄す。如何が蹤を掃ひ跡を滅し去ることを得ん。

【擧す】 魯祖凡そ僧の來るを見れば、便ち面壁す。(相見了也) 南泉聞いて云はく、我尋常他に向つて、空劫以前に承當せよ。(考へざるに自ら招く) 佛未だ出世せざる時に會取せよと道ふすら、(和尙會すや、也未だしや) 尙一箇半箇を得ず。(只檢索を漏すが爲なり) 他恁麼ならば驢年にし去らん。(忙者は不會)。

【頌に云はく】 淡中に味有り。(誰か爾をして鹽を添へ醋を著けしめん) 妙に情謂を超ゆ。(別日に再び商量せん) 綿綿として存するが如くにして、象の先なり。(已に第二に落つ) 无兀として愚の如くにして、道貴し。(人の價を著る無し) 玉、文を融つて以て淳を喪し、(和尙手高し) 珠、淵に在つて自ら媚ぶ。(少賣弄) 十分の爽氣、清く暑秋を磨し、(體

露金風。一片の閑雲、遠く天水を分つ。(好事、魔多し。)

第二十四則 雪峯看蛇

【東海の鯉魚】雲門の語、第六十一則にあり。

【善化】盤山寶積の法嗣。

【子湖】子湖利蹤禪師。

【雪峰】雪峰義存禪師。徳山に法を嗣ぎて象骨山に法を布く。

【長慶】長慶慧稜禪師。雪峰門下。

【頭角】雲門に依つて生ず。
【韶陽】雲門。
【我】妄智自身を指す。

【衆に示して云はく】東海の鯉魚、南山の鼈鼻、善化の驢鳴、子湖の犬吠、常塗に墮せず異類に行かず、且く道へ是れ什麼人の行履の處ぞ。

【擧す】雪峯、衆に示して云はく、南山に一條の鼈鼻蛇あり、汝等諸人切に須らく好看すべし。(坐具を提起して云はく、這箇是れ倩ひ來る底にあらず。長慶云はく、今日堂中大いに人有つて、喪身失命す。)(風を聞いて便ち颺る。)(僧、玄沙に擧似す。(曇すること三に過ぎず。)(沙云はく、須らく是れ我稜兄にして始めて得べし。(狐朋狗黨。)(然も是の如くなり

と雖も我は即ち不恁麼。(別)一條の長有らば便ち請ふ拈出せよ。(僧云はく、和尚作麼生。(毒蟲頭上に痒を措く。)(沙云はく、南山を用ひて作麼かせん。(只者鼈鼻猶分外)爲す。)(雲門、拄杖を以て峯の面前に攬向して怕るる勢を作す。(何ぞ自ら己命を傷ふことを得たる。)

【頌に云はく】玄沙は大剛、(機に當つて父に譲らず。)(長慶は勇少し。(義を見て爲す。)(南山の鼈鼻死して用なし。(條き鬮貫素を擔ふ。)(風雲際會、頭角生ず。(時來れば蚯蚓も蛟龍と作る。)(果して見る韶陽手を下して弄することを。(忍俊不禁。)(手を下して弄す。(弄不出ならば即ち兩廻三度。)(激電光中變動を看よ。(眼を眨すれば喪身失命す。)(我に在つてや能く遣り

得たる。)

【彼】玄沙、長慶雲門。

能く呼ぶ。(少賣弄)彼に於てや擔あり縦あり。(七寸手に在り)底事ぞ如今阿誰にか付するや。(萬松老漢)冷口人を傷れども痛を知らず。(阿耶阿耶)

第二十五則 鹽官 屎扇

【衆に示して云はく】利海涯無きも當處を離れず、摩劫前の事盡く而今に在り。試みに伊をして觀面に相呈せしむれば、便ち風に當つて拈出することを解せず。且く道へ過什麼の處にか在る。

【鹽官】杭州鹽官の齊安國師、馬祖の法嗣。
【屎牛の扇子】屎牛の角にて骨を作りし扇子、また一説には屎牛玩月の扇を書きし扇子。
【屎牛兒】扇子の本體本性。

【擧す】鹽官、一日侍者を喚ぶ、「我與に屎牛の扇子を過し來れ。」(要且他を少くことを得ず)者云はく、「扇子破れぬ。」(未だ擧せざる時卻つて完全)官云はく、「扇子既に破れば、我に屎牛兒を還し來れ。」(道ふことを見ずや、破ると、何ぞ語を領せざる)者、對ふる無し。(扇子猶在り、有りと雖も無きが如し)資福、一圓相を畫いて、中に於て一の牛の字を書す。(巧を出し行を新にして、能く做して賣ることを會す)

【資福】資福の如寶、仰山惠寂の法孫、一圓相を用ふ、孫仰山の宗風。
【桂叢】桂は月、叢は車の輻輳、即ち圓相を指す。
【妙に云云】一圓相の境界。

【頌に云はく】扇子破るれば屎牛を索む。(一做さざれば二休せず)捲擧中の字に來由あり。(強ひて道理を説くが如し)誰か知らん桂叢千年の魄。(根を千丈に埋む)妙に通明一點の秋と作らんとは。(現世に苗を生ず)

第二十六則 仰山指雪

【衆に示して云はく】氷霜色を一つにし、雪月光を交ふ。法身を凍煞し、漁父を清損す。還つて賞玩に堪へんや也無しや。

【擧す】仰山、雪師子を指して云はく、「還つて此色を過ぎ得る者有りや。」〔仰山覺えず平地に喫交す。〕雲門云はく、「當時便ち與に推倒せん。」〔舡を奈何ともせず、岸斗を打破す。〕雲竇云はく、「只推倒を解して扶起を解せず。」〔路に不平を見て、劍を抜いて相助く。〕

【犯す云云】 雲門

【爲す云云】 雪竇

【暖春云云】 雲門
【涼颺云云】 雪竇

【恣】 喧しいこと

【頌に云はく】一倒一起雪庭の師子。〔恰も箇の活底に似たり。〕犯すことを慎んで仁を懐き、〔法を識るものは恐る。〕爲すに勇んで義を見る。〔路に不平を見る。〕清光眼を照すも家に迷ふに似たり。〔東西辨ぜず。〕明白身を轉ずるも還つて位に墮す。〔更に一層樓に上る。〕衲僧家了に寄ること無し。〔且く一生を過す。〕同死同生何れをか此とし何れをか彼とせん。〔刀斧研れども閉けず。〕暖信梅を破つて、春、寒枝に到り、〔返魂香を收得す。〕涼颺葉を脱して、秋、潦水を澄ましむ。〔來つて塗毒鼓を搥つ。〕

第二十七則 法眼指簾

【衆に示して云はく】師多ければ脈亂れ、法出でて姦生す。無病に病を醫するは、以て傷慈なりと雖も、條有れば條を攀づ、何ぞ擧話を妨げん。

【擧す】法眼、手を以て簾を指す。〔知らずと道ふこと莫れ、見すと道ふこと莫れ。〕時に二一僧あり、同じく去つて簾を捲く。〔行を同じうして歩を同じうせず。〕眼云はく、「一得一失。」

【松は云云】 本分を擧揚す。

【祖彌】 先祖の御廟、法眼をいふ。【蓬は云云】 以下法眼の境界。

【清凉】 清凉文益禪師。

【寸絲云云】 何等所求せざる人。【粒米云云】 法喜禪悅を以て食となす人。

【極懼】 輪辱なり。【會昌沙汰の時】

會昌五年八月、唐の武宗、僧尼二十六萬人に歸俗せしむ。

【劍下】 身を分つこと。

【頤に云はく】 松は直く棘は曲れり、鶴は長く堯は短し。〔動著することを得ず〕 義皇世の人、俱に治亂を忘る。〔胡蕪提げて肥を壟得ず〕 其安や、涪龍淵に在り、〔佛眼觀はとも見えず〕 其逸や翔鳥絆を脱す。〔斫額して望むとも及ばず〕 何ともすること無し。祖彌内來して、〔上梁正ならず〕 裏許得失相半ばす。〔下柱參差〕 蓬は風に隨つて空に轉じ、〔業識茫茫として本の據るべき無し〕 舡は流を截つて岸に到る。〔順水に帆を張る、快便に逢ひ難し〕 箇の中靈利の衲僧、〔街に罵る醉漢、誰か敢て承當せん〕 清凉の手段を看取せよ。〔我這裡も也有り、是れ其人に遇ふこと罕なり。〕

第二十八則 護國三樓

【案に示して云はく】 寸絲を掛けざる底の人、正に是れ裸形外道、粒米を嚼まざる底の漢、斷つて焦面の鬼王に歸す。直饒聖處に生を受くるも、未だ竿頭の墮墮を免れず。還つて羞を掩ふ處有り麼。

【擧す】 僧、護國に問ふ、〔鶴、枯松に立つ時如何。〕〔步步高きに登ることは易く。〕國云はく、〔一地下底一場の極懼。〕〔心心放下することは難し。〕僧云はく、〔滴水滴凍の時如何。〕〔法身被無くして寒に禁へず。〕國云はく、〔日出でて後一場の極懼。〕〔雪消して死人を露出し來る。〕僧云はく、〔會昌沙汰の時、護法善神甚慶の處に向つてよるや。〕〔點すれば即ち到らず。〕

【稜稜】 威勢よき
貌、

【耳を洗ふ】 許山
の故事。

【風穴】 風穴延沼
禪師、南院惠顯禪
師の法嗣。

國云はく、「三門頭の雨筒、一場の曇曇。」(到れば即ち點ぜず。)

【頰に云はく】 壯士稜稜として暮未だ秋ならず。(天の到らざるを恨む。)男兒慣せずんば侯に封ぜられず。(程を食ること太た速かなり。)翻つて思ふ清白傳家の客。(已に太多生)耳を洗ふ溪頭、牛に飲はず。(末後太だ過ぐ。)

第二十九則 風穴 鐵牛

【衆に示して云はく】 遲基鈍行、斧柯を擲却す。眼轉じ頭迷ひ、杓柄を奪ひ將ふ。若し也鬼窟裏に打在し、死蛇頭を把定せば、還つて鏡豹の分あらんや也無しや。

【擧す】 風穴鄧州の衛内に在つて、上堂に云はく、「祖師の心印狀鐵牛の機に似たり。(針割不入)去れば即ち印住し、鼻孔を拽廻す。)住すれば即ち印破す。(脚跟を截斷す。)只夫らず住せざるが如きは、印するが即ち是か印せざるが即ち是か。」(泥裏に土地を洗ふ。)時に董

破長老あり、出でて問うて云はく、「某甲鐵牛の機あり、請ふ師、印を拈せされ。」(宛も逆水の波有り。)穴云はく、「鯨鯢を釣つて巨浸を澄しむるに慣れて、卻つて嗟す蛙步の泥沙に

穢すること。」(引魂の幡子拈氣袋。)跛佇思す。(已に鬼門關を過ぐ。)穴喝して云はく、

「長老何ぞ進語せざる。」(已に崖岸に臨んで更に一推を與ふ。)跛擬議す。(許多の時節、甚の處にか去來す。)穴打つこと一拂子して云はく、「還つて話頭を記得するや、試みに擧せよ看ん。」(人の爲にするは爲に徹す、人を殺しては血を見る。)跛、口を開かんと擬す。(猶白

【當に斷すべき云】黃石公の語、史記に出づ。

【毘盧云云】向上の境を云ふ。毘盧は即ち法身大日如来。

【化佛云云】向下の爲人底。
【負墮】失敗の義
【棒頭云云】風穴の手段をいふ。

【大隨】大隨法眞長慶大安の法嗣。

【劫火云云】仁王經の護國品第五に出づ。

【這箇】人人本具の心性。
【壞】五蘊皆空。

ら焼埋に伏せず。穴又打つこと一拂子す。(仍三十棒を少く。)牧主云はく、「佛法と王法と一般なり。」(官と做ることを會せずんば、傍州の例を看よ。)穴云はく、「箇の什麼をか見る。」(却つて好し一拂子を與ふるに。)牧云はく、「當に斷すべきに斷せざれば、返つて其亂を招く。」(自ら罵り自ら招く。)穴便ち下座。(意を得ること濃かなる時正に好し休するに。)

【頷に云はく】鐵牛の機、(哮吼すや也未だしや。)印住印破。(鈎錐手に在り。)毘盧頂額を透出して行き、(將上足らず。)化佛舌頭に却來して坐す。(匹下餘有り。)風穴衝に當つて、(世情冷暖を看る。)盧陂負墮す。(入面高低を逐ふ。)棒頭喝下。(豈分説すべけんや。)電光石火。(消停を待たず。)歴歴分明珠盤に在り、(撥せざるに)自ら轉ず。(眉毛を眨起すれば還つて)蹉過す。(聲に和して便ち打つ。)

第三十則 大隨劫火

【衆に示して云はく】諸の對待を絶し、兩頭を坐斷す。疑團を打破するに那ぞ一句を消ひん。長安寸歩を離れず。太山只重さ三斤。且く道へ、甚麼の令に據つてか敢て恁麼に道ふや。

【擧す】僧、大隨に問ふ、「劫火洞然として大千俱に壞す、未審し這箇壞か不壞か。」(愁人、愁人に向つて説くこと莫れ。)隨云はく、「壞。」(早く是れ那ぞ堪へん。)僧云はく、「恁麼ならば則ち他に隨ひ去るや。」(目前に驗むべし。)隨云はく、「他に隨ひ去る。」(下坡に走らず、

【句裏云云】その
言句に付いて廻つ
てはならぬ。

【向上の一機】鶴
とても見るを得ず
【常陽の一路】分
明の義理を指す。
【鶴云云】遅八刻
の意。

【匾擔の如く】荷
へ棒の如く、口を
への字にして。
【古佛】人人自己
の佛。

【露柱】草木園土
一切萬法を指す。
【見縁】能見の人
と所縁の物。

更に一推を與ふ。僧、龍濟に問ふ、一劫火洞然として大千俱に壞す、未審し這箇境か不壞か。【同病相憂ふ。】濟云はく、不壞。【契頭を打破し、鼻孔を振轉す。】僧云はく、甚と爲てか不壞なる。【又恁麼にし來る。】濟云はく、大千に同じきが爲なり。【生鐵鑄成す。】
【頌に云はく】壞と不壞と、佛手も揀不出。他に隨ひ去るや大千界。汝量の大人語脈裏に轉却せらる。句裏了に鈎鎖の機なし。牙に粘し商に帯びること亦少からず。脚頭多く葛藤に礙へらる。誰か備をして枝を生じ蔓を引かしめん。會か不會か、心忙しく手急し。分明底の事丁寧瞭だし。是れ盲者の過なり、日月の咎にあらず。知心は拈出して商量すること勿れ。牙人販子を見る。我當行に相買賣するに輸く。堂屋裏に楊州を販ぐ。

第三十一則 雲門露柱

【衆に示して云はく】向上の一機、鶴霄漢に沖る。常陽の一路、鶴新羅を過ぐ。直饒眼流星に似たるも、未だ口匾擔の如くなることを免れず。且く道へ、是れ何の宗旨ぞ。

【擧す】雲門垂語して云はく、古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。【七に落ち八に落ち了れり。】衆無語。【却つて露柱と同參。】自ら代つて云はく、南山に雲を起し、北山に雨を下す。【張翁酒を喫して李翁醉ふ。】

【頌に云はく】一道の神光、上、天を拄へ、下、地を拄ふ。初より覆藏せず。【淨裸裸、赤灑灑。】見縁を超ゆるや是にして是なし、烈火焰中眨眼することを休めよ。情量を出づる

【當つて云六】類
 類相對して無當の
 【巖華云云】野草
 云云。臭腐より神
 奇を生ずるの意。
 【隨類云云】一丈
 六は佛身、佛羅師
 長者の爲に、三尺
 身を現じて濟度す

【濼】水溜りのこ
 と。

【彼中】本家郷。

【信位】一切萬法

や當つて當ることなし。(劍輪鉢鉢頭を廻すこと莫れ)巖華の粉たるや、蜂房蜜を破し、(通廣大)野草の滋たるや、麝腦香を作す(變化無方)種類三尺一丈六(主山は高く案山は低く、拄杖は長く拂子は短し)明明として濁處靈堂堂。(前門を打破して廻遊する處無し。)

第三十二則 仰山心境

【衆に示して云はく】海は龍の世界たり、隱顯優游。天は是れ鶴の家郷、飛鳴自在。甚と爲てか困魚は濼に止り、鈍鳥は蕘に棲む。還つて利害を計る處ありや。

【擧す】仰山、僧に問ふ、甚れの處の人。(門を閉ぢて刷會す)僧云はく、幽州の人。【公驗明白】山云はく、汝彼中を思ふや。(恰も忘了を待)僧云はく、常に思ふ。(熟慮忘じ難し)山云はく、能思は是れ心、所思は是れ境。(元來更に能所を立つ)彼中には山河大地樓臺殿閣人畜等の物あり、思底の心を反思せよ、還つて許多數ありや。(仁者自ら分別を生ず)僧云はく、某甲清裏に到つて、總に有る事を見ず。(猶這箇有り)山云は

く、信位は即ち是、人位は未だ是ならず。(庭前の殘雪は日輪に消すべし、室内の紅塵をば誰をしてか掃はしめん)僧云はく、和尚前に指示あること莫しや否や。(便ち怎麼に出来る)山云はく、別に有り別に無しといふは即ち中らず。(兩軍の鬪を射透す)汝が見處に據らば只一玄を得たり。(已に船中の月有り)得坐披衣向後自ら看よ。(更に帆上の風を添

【酒常に云云】僧の逢うて居る境界【虚空云云】仰山の自由なる働き。【妙翅】金翅、鳥神。迦樓羅を云ふ。

【一千五百人の善知識】外峯を指す【浪峯云云】雪峰が送つて行くの意【尾を焼いて】土人初めて登第して宴を聞く。之を焼尾の宴と云ふ。【老成の人云云】以下雪峯の老練なる境界。

ふ。

【窓に云はく】外れること無うして容れ、(大として包まざること無し) 齧ふること無うして沖る。(細として入らざること無し) 門牆岸岸、(探頭すること莫くんば好し) 關鎖重重。(彈指するを消ひず) 酒常に酬にして客を臥さしめ、(喚び醒し來れ、打たんと) 飯飽くと雖も農を頷す。(一坑に埋却せん) 虚空に突出して、風妙翅を搏たしめ、(碧落の天を穿聞す) 滄海を踏翻して、雷游龍を送る。(驚蟄二月月の節。)

第三十三則 三 聖 金 鱗

【衆に示して云はく】強に逢うては即ち弱、柔に遇うては即ち剛。兩硬相擊てば必ず一傷あり。且く道へ、如何が回互し去らん。

【擧す】三聖雪峯に問ふ、網を透る金鱗未審し何を以てか食となす。(綸を垂るることを待たずして、自ら鉤に上る) 峯云はく、汝の網を出で來らんを待つて、汝に向つて道はん。(人に逢うては且く三分の話を説く) 聖云はく、一千五百人の善知識、話頭ども也識らず。(靈山の授記も也今日に似ず) 峯云はく、老僧住持事繁し、(爾後に腮を見る) 【頌に云はく】浪級初めて昇るとき雲雷相送る。(天の到らざるを恨む) 驪蹄稜稜として大用を見る。(連禮三拜) 尾を焼いて分明に禹門を度る。(急に眼を著けて看よ) 華鏤未だ背て蓋獲に淹せられず。(更に侯黒有り) 老成の人衆を驚かさず。(安安帖帖穩穩當當) 大敵に臨

【八風】 利衰毀譽
得苦樂の八風。

【家園】 盡十方法
界。

【同死同生】 同死
は喪亡、同生は興
盛。

【幡然云云】 太公
望を云ふ。家園興
盛の意。

【首陽清餓の人】
伯夷叔齊。家園喪
亡の意。

【變態】 興亡の二
途。

【勳業】 伯夷叔齊
太公望。

むに慣れて初より恐ることなし。(辱を受くること榮の如く、死を視ること生の如し。) 泛泛として端に五兩の轉きが如し。(速く觀れば不審し) 堆堆として何ぞ情千鈞の重きのみならんや。(近く觀れば分明。) 高名四海復誰か同じき。(天上に月を掉ぶ) 介り立つて八風吹けども動ぜず。(恰も曾てせざるに似たり。)

第三十四則 風穴 一塵

【衆に示して云はく】 赤手空拳にして千變萬化す、是れ無を將て有と爲すと雖も、奈何せん假を弄して眞に像ることを。且く道へ、還つて基本ありや也無しや。

【學す】 風穴垂語して云はく、若し一塵を立すれば家園興盛す。(之を得れば本有り) 一塵を立てざれば家園喪亡す。(之を失すれば本無し) 雪竇拄杖を拈じて云はく、(是れ立か不立か) 還つて同死同生底の衲僧ありや。(無しとは道はず、只是れ少し) 。

【頌に云はく】 幡然として渭水に垂綸より起つ。(老いて心を歇めず) 首陽清餓の人に何似ぞ。(少うして努力せず) 只一塵に在つて變態を分つ。(拄杖を拈起して云はく、看よと) 高名勳業兩つながら浪じ難し。(拄杖を放下して云はく、雪竇猶在りと) 。

第三十五則 洛浦伏膺

【衆に示して云はく】 迅機捷辯、外道天魔を折衝し、逸格超宗、曲けて上根利智の爲にす。

【忽ち云云】 洛浦を云ふ。
【洛浦元安】 洛浦、夾山の法師。
【夾山】 夾山善會、華亭船子の法嗣。

【雲月云云】 汝の居處と吾の居處との相造。

【夜明云云】 以下夾山の境界。
【無舌人】 以下天童の會下に對して示衆。
【震中】 天子の居處。

忽ち箇の一体に打てども、頭を廻さざる底の漢に遇ふ時如何。

【擧す】 洛浦、夾山に參ず、禮拜せずして面に當つて立つ。(相逢うて馬より下らざるは、各自に前程有ればなり。)山云はく、「鷄鳳巢に棲む、其同類に非ず、出で去れ。」(一手は推し一手は拽く。)浦云はく、「遠きより風に趁る、乞ふ師一接。」(探竿手に在り。)山云はく、「目前に闇黎なく、此間に老僧なし。」(影草身に隨ふ。)浦、便ち喝す。(筋を盡し力を截る。)山云はく、「住みね住みね、且く草草忽忽なること莫れ、(會者は不忙、忙者は不會。)雲月はれ同じく溪山、各異なり。(斜街暗巷、生客頭迷ふ。)天下の人の舌頭を截斷することは即ち無きに非ず。(只錐頭の利を見る。)爭か無舌の人をして解語せしめん。」(鑿頭の方を見ず。)浦、無語。(長蛇陣前弓、稍地を撲つ。)山便ち打つ。(意はざりき夾山却つて臨濟と作らんとは。)浦此より伏膺す。(藝は當行を壓す。)

【頷に云はく】 頭を搖し尾を擺ふ赤梢の鱗。(口香餌を食り、身網羅に掛る。)徹底無依轉身を解す。(今日網底に拽在す。)舌頭を截斷して饒ひ術あるも、(君方に雪を掃ひて松子を尋ねよ。)鼻孔を拽廻して妙に神に通ぜしむ。(我已に榛を開いて茯苓を得。)夜明簾外、風月畫の如し。(三光の勢を借らず。)枯木巖前、花卉常に春なり。(潛かに一色の功を消す。)無舌人の無舌人。(鼻孔裏に應諾せよ。)正令全提一句親し。(暗裏に横骨を抽づ。)寶中に獨歩して明了了。(眞光は耀かず。)任從天下樂んで欣欣たることを。(紘紘は彼よりす、我に於て何をか爲ん。)

【太高生】餘りに向上し過ぎるの意

【不安】病氣。

【日面佛、月面佛】賢劫千佛の中の佛

【星流れ云云】少しも窺ひ知ること能はず

【君見ずや云云】馬祖の手段の自在なることを示す。

【耕夫の云云】悟道を珍重して居るのに、この悟道を奪ひ取るの意。【業識】妄想分別を指す。

第三十六則 馬師不安

【衆に示して云はく】心意識を離れて參するも、這箇の在るあり、凡聖の路を出でて學するも、已に太高生、紅爐迸出す。鐵蒺藜、舌劍唇槍口を下し難し。鋒鋌を犯さず、試に請ふ學す看よ。

【擧す】馬大師不安。(未だ必ずしも維摩に似ず)院主問ふ、(和尚近日尊位如何。)(常住事忙はしうして、問候を少き得たり。)大師曰はく、(日面佛月面佛。)(是れ轉筋霍亂なること莫しや。)

【頌に云はく】日面月面(觀著すれば即ち瞎す)星流れ電巻く。(已に新羅を過ぐ)鏡は像に對して私なし。(一點も謾じ難し)球盤に在りて自ら轉ず。(拏提すれども住らず)君見ずや鉛鎚の前百鍊の金。(瓶盆鉏鋤釜盂盤)刀尺の下一機の絹。(衾被衣冠襟領袖。)

第三十七則 馮山業識

【衆に示して云はく】耕夫の牛を驅つて、鼻孔を拽廻し、饑人の食を奪つて、咽喉を把定す。還つて毒手を下し得る者ありや。

【擧す】馮山、仰山に問ふ、(忽ち人有つて、一切衆生但業識のみ有り、茫茫として本の據るべき無しと問はば、子作麼生か驗ん。)(馬は是れ官馬、印を須たず)仰云はく、(若し

【是れ甚悪ぞ】
に應ずるは是れ何物ぞ。

【蘿月】 蘿に掛かる月。
【鉤】 三日月。

【賊を以て云云】
是と認めるもの、悉く非の意。

【郎主人】
破木杓 木の破片。

【蘆鞍橋】 驢馬の鞍骨。

【土を裂き云云】
眞正の悟道を如何にしてか證明するや。

【橋住】 引き捕へる。

【托開】 突き放す。

【乾屎橛】 除糞の器、即ち糞籠。

僧の來ることあらば、即ち召して云はん、某甲と。腦後の一椎、來處を知らず。僧首を廻さば、一頂門上に三魂を去却す。乃ち云はん、是れ甚悪ぞと。爐竈の熱を越うて、更に一下を與ふ。伊が擬議せんを待つて、脚板底に七魂を鑽了す。向つて道はん、唯業識茫茫たるのみに非ず、亦乃ち木の據るべきなしと。一（生擒活捉）馮云はく、「善いかな。」（苦口は親言を出す）

【頰に云はく】 一たび喚べば頭を廻す我を識るや不や。眞の白拈賊、甚の見難きことか有らん。依儒として蘿月又鉤となる。一（身を藏して影を露す。）千金の子纒に流落して、一（輻風破ると雖も、骨骸猶存す。）漠漠たる窮途に許の愁あり。一（小器は大量ならず。）

第三十八則 臨濟眞人

【衆に示して云はく】 賊を以て子となし、奴を認めて郎と作す。破木杓は豈是れ先祖の髑髏ならんや。驢鞍橋は又阿爺の下頷に非ず。土を裂き芽を分つ時、如何が主を辨せん。

【擧す】 臨濟、衆に示して云はく、「一無位の眞人あり。一（基を安じ脚を定め了れり。）常に汝等が面門に向つて出入す。一（晋後底、聲。）初心未證據の者は看と看よ。一（還つて眼を具するや。）時に僧ありて問ふ、「如何なるか是れ無位の眞人。」一（還つて語を解すや。）濟、禪牀を下つて擔任す。一（爾更に諱む。）這僧擬議す。一（他の眞人を鈍滯す。）濟、托開して云はく、「無位の眞人、是れ甚の乾屎橛ぞ。一（大いに鉢を持し得ざるに似たり。）」

眞人、是れ甚の乾屎橛ぞ。一（大いに鉢を持し得ざるに似たり。）」

【力云云】 臨濟の
大力節。
【泥沙】 智の智解
分門。
【甘泉の眼】 道照、
即ち宗旨眼。

【指示せよ】 佛道
の作法を。

【相符す】 趙州と
僧とが。
【而今云云】 天童
の示衆。

【頌に云はく】 迷悟相返し、(掃毫を掃てず)妙に悟へて簡なり。(己に風塵を起す)存自在
を垢かしめて、一吹し、(散去は較較危し)力九半を廻して、一挽す。(枚來未だ 遠な
り)奈ともすることなし泥沙幾へども聞けざること。(我眼本正し)分明に奉酬す甘泉の
眼(師に因つて 故に弊なり)忽然として突出せば 肆に横流せん(禪牀を撒倒して 怪む
ことを得ず)師復云はく、(論) (拄杖を擲下して云はく、一著を放過すと)。

第三十九則 趙州洗鉢

【衆に示して云はく】 飯來れば口を張り、睡來れば眼を合す。面を洗ふ處に鼻孔を指得し、
鞋を履る時脚眼に摸著す。那時話頭を蹉却せば、火を把つて夜深けて別に覓めよ。如何が
相應し去ることを得ん。

【擧す】 僧、趙州に問ふ、(學人乍入叢林、乞ふ師指示せよ。(叢林備に於て亦惡しからず。)
州云はく、(喫粥了や也未たしや。)(渾金璞玉)僧云はく、(喫了る。)(久慣の相僧も上座
に如かず)州云はく、(鉢盂を洗ひ去れ。)(左猜することを得ず)。

【頌に云はく】 粥罷は教へて鉢盂を洗はしむ。(快便逢へ難し)豁然として心地自ら相符
す。(但今日のみに準ず。)(而今參飽す叢林の客(舊に依つて粥を喫了れば、鉢盂を洗ひ去
れ)且く道へ其間に悟有りや無しや。)(一人慮を傳ふれば、萬人實と傳ふ。)

第四十則 雲門 白黒

【拳を云云】 元是れ空拳。【物に應】 空手なるが故に。

【侯白：侯黒】 侯白は大盜賊、侯白の衣を盗みし者が女の侯黒、上に上のある意。【弦管云云】 師の答語を請ふ境界。

【有時は忠誠云云】 安心の餘地なきこと。

【有時は殃云云】 餘りに慈悲心過ぎるため。【行に臨んで】 臨終に至つて見苦し

【衆に示して云はく】 機輪轉する處智眼猶迷ふ、寶鑑開く時纖塵度らず。拳を開いて地に落ちず、物に應じて善く時を知る。兩刃相逢ふ時如何が回互せん。

【擧す】 雲門、乾峯に問ふ、「師の答語を請ふ。」（空頭、頂額を没す。）峯云はく、「老僧に到るや也未だしや。」（早く簡れ汝に答へ了れり。）門云はく、「恁麼ならば則ち某甲遲きに在り。」（讓るときは則ち餘り有り。）峯云はく、「恁麼那恁麼那。」（一切に忌む、恁麼に會することを。）門云はく、「將に謂へり侯白と、更に侯黒あり。」（好手中、好手無し。）

【頷に云はく】 弦管相啣み、高低普く應ず。網珠相對す。（左右原に逢ふ。）百中を發して箭箭虚しからず。（對揚準有り。）衆景を攝して光光礙ふる無し。（獨り耀いて私無し。）言句の總持を得。（語を出せば章を成す。）游戲の三昧に住す。（舉動合に拍つべし。）其間に妙なるや宛轉偏圓。（珠の盤に走るが如し。）必ず是の如くなるや縱横自在。（令行の時を看取せよ。）

第四十一則 洛浦 臨終

【衆に示して云はく】 有時は忠誠已を扣いて苦屈申べ難く、有時は殃及んで人に向つて承當不下なり。行に臨んで賤しく折倒し、末後最も慙慙。泪は痛腸より出づ、更に臨諱し難し。還つて冷眼の者まりや。

【一事】 一大事因縁

【頭上云云】 餘分のこと

【首座】 會下の首

【未在】 問ふなく答なき處

【某僧云云】 昔句以對に宗旨を擧揚せしむ

【某對する無し】 日夜相對して居る故

【他】 人人自己の心を指す

【鉢裏子を分付】 如来の應量器を相續

【擧す】 洛浦編者、案に示して云はく、「今一事あり、蒲語人に問ふ、「猶自ら兵衛を覓く」「這箇若し是といはば即ち頭上頭を安す」「恁麼も也得す」若し不是ならば、即ち頭を斬つて活と覓む」「不恁麼も也得す」時に首座云はく、「青山常に是を擧げ、白目筋を挑げ」「語り得て分明なれば、出づること特難し」浦云はく、「是れ甚麼の時節ぞ、這箇の語を作す」(尖錢遭刃)彦從上座あり出でて云はく、「此二途を去つて、請ふ師問はされ」「開き易きは終始の口、保ち難きは威塞の心」浦云はく、「未在更に道へ」「詩は重吟に到つて始めて功を見る」從云はく、「某甲道を盡さす」「人をして見せしめざるも慎風流」浦云はく、「我高が道ひ盡すと道ひ盡ささるとに寄せず」「沒底を放り來つて得ざれば休せず」從云はく、「某甲侍者の和尙に祇對する無し」「影草身に點ふ」曉に至つて從上座を擧ふ、師今日祇對甚だ來由あり(只管に頭に粘くに言ふ)合に先師の道を體得すべし、目前に法なく、意目前に在り(月中の桂を研却とは、清光裏に更に多かるべし)他は是れ目前の法にあらざる、耳目の到る所に非ず」と(月落を來れ相見さす)那句か見れ賓、那句か是れ主、「切に己の語無礙と作ることぞ」若し捺得、出せば鉢裏子を分付せん、(棒を擧げて狗を喚ぶ)從云はく、「不會」「正に分付すべし」浦云はく、「汝會すべし」一時に九便の山を風さんとす(從云はく、「實に不會」「一簣の土を進めず)沙喝して云はく、「苦なる哉、苦なる哉」「一缸の人を賺殺す)僧問ふ、「和尙の尊意如何」(夫火の處に磚家を拾ふ)浦云はく、「慈舟清波の上に棹さす、劍缺徒らに木鋸を放つに勞す」「功を弄して拙を成す」

【雲を云云】 無一物の境。

【汨羅云云】 天童が洛浦を評す。

【南陽】 南陽惠忠國師、六祖惠能大師の法嗣。

【擬心一絲】 分別心が寸毫たもあらば。

【頌に云はく】 雲を餌とし月を鈎として清津に釣る。(人を驚かす浪に入らざれば、意に稱ふ魚に逢ふ難し。) 年老い心孤にして未だ鱗を得ず。(氣急にして作塵せん。) 一曲の離騷歸り去つて後。(甚塵の處にか在る。) 汨羅江上獨醒の人。(洛浦猶在り。)

第四十二則 南陽 淨瓶

【衆に示して云はく】 鉢を洗ひ瓶を添ふ、盡く是れ法門佛事、柴を般ひ水を運ぶ、妙用神通に非ざることなし。甚塵と爲てか放光動地を解せざる。

【擧す】 僧、南陽の忠國師に問ふ、「如何なるか是れ本身の盧舍那。」(汝豈に是れ名を替へんや。) 國師云はく、「我與に淨瓶を過し來れ。」(話頭を忘了ること莫れ。) 僧、淨瓶を將て到る。(錯つて認むることを得ざること莫れ。) 國師云はく、「却つて舊處に安ぜよ、著。」(重ねて此義を宣ぶ。) 僧、復問ふ、「如何なるか是れ本身の盧舍那。」(甚の處にか去來す、國師云はく、「古佛過去すること久し。」(此を離るること遠からず。))

【頌に云はく】 鳥の空を行く。(築著 碇著。) 魚の水に在る。(左使右使。) 江湖相忘れ。(這邊那邊。) 雲天に志を得たり。(可不可無し) 擬心一絲。(只此山中に在り) 對面千里。(雲深うして處を知らず) 恩を知り恩を報ず。(茲を念ふこと茲に在り) 人間幾幾そ。(一子親み得たり。)

第四十三則 羅山起滅

【衆に示して云はく】還丹の一粒、鐵に點じて金と成し、至理の一言、凡を轉じて聖となす。若し金鐵二なく、凡聖本同じきことを知らば、果然として一點も用不着。且く道へ、是れ那の一點ぞ。

【擧す】羅山、巖頭に問ふ、「起滅不停の時如何。」(金剛と泥人と背を拵る)頭、嘯して云はく、「星落ち雲散す。」「是れ誰か起滅す。」(講得すれば寃を爲さず)

【頌に云はく】老葛藤を斫斷し、(轉枝蔓を生ず)瓢窠窟を打破す。(更に頭涎を吐く)豹は霧を抜いて文を變じ、(皮毛を脱却す)龍は雷に乗じて骨を換ふ。(別に軀殻を改む)嘯し、「一曜萬機罷み、三朝兩耳聳す。」起滅紛紛是れ何物ぞ。(好客に疎伴無し)。

第四十四則 興陽妙翅

【衆に示して云はく】獅子象を撃ち、妙翅龍を持つ。飛走すら尙君臣を分つ、相僭合に賓主を存すべし。且く天威を同犯す。底の人の如きは、如何が裁斷せん。

【擧す】僧、興陽洞和尚に問ふ、「婆竭、海を出でて乾坤靜なり、觀尚相呈すること若何。」(龍を抜する曲、角を帯ぶる泥、師云はく、「妙翅鳥王宇宙に當る、箇の中誰か是れ出頭の人。」)翅を展て崩騰す六合の雲、風に拂つて鼓薄す四溟の水。僧云はく、「忽ち出頭に

【起滅】起は生、滅は死。

【老葛藤】羅山の生、死に對する二見。

【巖山】巖頭。

【龍】巖頭。

【雷】巖頭。

【天威】天子の威光。

【興陽洞】興陽青洞。

【師兄】大陽善玄の師兄。

【婆竭】沙竭龍王、鹹海と譯す。

【妙翅鳥王】 龍を食ふ鳥。

【鳥龜子】 史記に出づ、家を建つる時、柱礎下に龜を埋めて、家の不傾を計る。要は愚圖恩圖言うて来るな

【絲綸】 金翅鳥に當る。

【號令】 婆竭羅に當る。

【寰中】 割和尚に當る。

【塞外】 僧に當る。雷驚いて修行も間熟せざるに、出づる。

【機底云云】 割和尚の接得振り。

【巍巍堂堂】 當體現前、赤裸裸。【磊磊落落】 大丈夫の意。

遇ふ時又作麼生。」(備に破贖を許す。)陽云はく、「鶻の鳴を捉ふるに似たり、君覺らずんば御樓前に驗して始めて眞を知れ。」(好く勸むれども聽かず)僧云はく、「恁麼ならば則ち又手當胸退身三步せん。」(更に第二錫を待つ。)陽云はく、「須彌座下の鳥龜子、重ねて額を點じて痕せしむることを待つこと莫れ。」(再犯容さず。)

【額に云はく】 絲綸降り、(聖旨を聽く。)號令分る。(違ふこと有るものは斬す。)寰中は天子、(君は萬國に臨み)塞外は將軍(獨り一方を鎮す。)雷驚いて蟄を出すことを待たず。(五更早を侵して起く。)那ぞ知らん風行雲を遏むることを。(已に夜行の人行り)機底聯綿として、自ら金針玉線あり。(具眼を謾じ難し)印前恢廓として、元鳥篆蟲文なし。(字義炳然たり。)

第四十五則 覺 經 四 節

【衆に示して云はく】 現成の公案只現今に據る、自分の家風分外を圖らず、若し也強ひて節目を生かし、枉げて工夫を費さば 盡く是れ混沌の與に肩を畫き、鉢盂に柄を安ずるなり。如何が平穩を得去らん。

【擧す】 圓覺經に云はく、「一切時に居して妄念を起さず。(不。)諸の妄心に於て亦息滅せざれ。(不。)妄想の境に住して了知を加へざれ。(不。)'了知無きに於て眞實を尋ぜず。(不。)'額に云はく」巍巍堂堂、(更に窮めて須らく御搜の字を道ふべし。)'磊磊落落、(撩天の鼻

【脚下の線】 妄想
分別の線。

【合樂】 圓覺經。

【篇後の一絶】 末
後の卒關。

【及盡し去るや】
一切萬法を。

【收】 諸佛諸法盡
く掌中に。
【風磨し云云】 徳
山の境界。

孔。〕闌處に頭を刺し、〔杖管ければ先づ眠す。〕穩處に脚を下す。〔粥稀なれば後に坐す。〕脚下線斷えて我自由、〔歩に信せて滄洲を過ぐ。〕鼻端泥盡く君躑ることを休めよ。〔彼此便を著く。〕動著すること莫れ、〔己に是れ蹠手亂下。〕千年故紙中の合樂〔大いに神効有り。〕

第四十六則 徳山學畢

【衆に示して云はく】 萬里寸草無きも、淨地人を迷はす、八方片雲無きも、晴空汝を賺す。是れ楔を以て楔を去ると雖も、空を拈じて空を挫ふることを妨げず。腦後の一椀別に方便を看よ。

【擧す】 徳山圓明大師、衆に示して云はく、及盡し去るや。〔這箇の在る有り。〕直に得たり三世の諸佛、口壁上に掛くることを。〔留取して飯を喫せよ。〕猶一人有つて呵呵大笑す。〔且く道へ、是れ誰ぞ。〕若し此人を識らば、〔是れ何の面目ぞ。〕參學の事畢らぬ。〔椀茶を與へて喫せしめん。〕

【頌に云はく】 收。〔甚の處に向つてか著ん。〕襟喉を把斷す。〔正に好し、身を轉じ氣を吐くに。〕風磨し雲払ふ。〔纖塵も必ず去る。〕水冷かに天秋なり。〔打成一片。〕錦繡謂ふこと莫れ滋味無しと。〔腥羶少からず。〕釣り盡す滄浪の月一鉤。〔清波を犯さず、意自ら殊なり。〕

第四十七則 趙州柏樹

【問生の古佛】五百年問出の聖人。【祖師西來意】禪宗の第一義。禪宗の安心。

【岸眉云云】趙州は百二十年の長命故。以下皆趙州の爲人、手段。

【龍牙】僧、龍牙に問ふ、「十二時中如何が力を著けん。」師曰く、「無手の人の拳を行ずるが如く云云。」【半路に云云】中道實相の人。【維摩詰云云】維摩經に出づ。

【衆に示して云はく】庭前の柏樹、竿上の風幡、一華無邊の春を説くが如く、一滴大海の水を説くが如し。問生の古佛適に常流を出づ。言思に落ちず若爲が話會せん。【擧す】僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」(多羅閑管)州云はく、「庭前の柏樹子。」(焦磚打着す連底の凍り。)

【頷に曰はく】岸眉雪を横へ、(鹽を喫すること多きこと米を喫するが如し。)河口秋を舍む。(一點も謾じ得ず。)海口浪を鼓し、(有句は宗旨に非ず。)航舌流に駕す。(無言聖凡を絶す。)撥亂の手、(也是れ柏樹。)太平の籌。(也是れ柏樹。)老趙州老趙州。(甚としてか摩せざる。)叢林を攪攪して卒に未だ休せず。(天童は第二。)徒に工夫を費して車を造つて轍に合す。(將ち來り使ひ、用て恰好なり。)本伎倆無うして壑に塞り溝に墮つ。(風流を買ひ盡して錢を着けず。)

第四十八則 摩經不二

【衆に示して云はく】妙用無方なるも、手を下し得ざる處あり、辯才無礙なるも、口を開き得ざる時あり。龍牙は無手の人の拳を行ふが如く、夾山は無舌の人をして解語せしむ。半路に身を抽んづる底は甚麼人ぞ。

【擧す】維摩詰、文殊師利に問ふ、「何等か是れ菩薩人不二の法門。」(問處は第幾ぞ。)文殊師利曰はく、「好し劈口の壺を與ふるに。」(我意の如きんば、醜造し將ち來れ。)一切の法

【菩薩入不二の門】
菩薩初入の法門。

【仁者】 維摩を指す。

【曼殊云云】 維摩經維摩の病氣を、文殊菩薩が見舞に行きしに起る。

【作家】 文殊、維摩を指す。

【眼表云云】 維摩の腹を見抜きしは文殊の外にはあらざるべし。

【區區云云】 八萬の大衆勞して功なし。

【寶珠云云】 文殊は下二の寶珠を見居る。

【前が云云】 先師雲巖の言を以て大衆に示す。

に於て、(更に少きを嫌ふ。)無言無説、(火を把つて照看せよ。)無示無識にして、(有りや也未だしや。)諸の問答を離る。(面皮厚きこと多少ぞ。)是を入不二の法門となす。(如何が是れ二。)是に於て文殊師利、維摩詰に問うて言はく、我等各自に説き已る。(能説快説)仁者當に説くべし、何等か是れ菩薩入不二の法門。(一廻一刮、惡發を賭せず)維摩默然(甚麼の處に去るや。)

【頌に云はく】 曼殊疾を問ふ老毗耶。(仁義道中)不二門開いて作家を見る。(衲僧分上)眼表粹中誰か賞鑒せん。(大辯は訥の如し)忘前失後咨嗟すること莫れ。(大智は愚の如し)區區として璞を投ず楚庭の曠士。(直を獻じて曲を得たり)瓊瑩として珠を報ず隨城の斷髮。(夜光人に投ずれば、劍を按せざること鮮し)點破することを休めよ。(幸に自ら完全)玼瑕を絶す。(指點するに一任す)俗氣渾て無うして却つて些に較れり。(相上に人を觀れば之を失すること多し)

第四十九則 洞山供眞

【衆に示して云はく】 描不成畫不就、普化は便ち斤斗を翻し、龍牙は只半身を露す、畢竟那の人、是れ何の體段ぞ。

【擧す】 洞山、雲巖の眞を供養する次、誰か道ふ是れ假と。遂に前の眞を還するの話を尋す。(一廻拈出すれば、一廻新なり)僧あり問ふ、(雲巖祇這れ是れといふ意旨如何)三且

【父子】父は雲巖子は洞山。

【親師】德山。【法弟】雪峯。

【庵門を托し】方丈の門を開くこと

喜すらくは錯つて認めざることをと。山云はく、「我當時幾ど過つて先師の意を會す。」(己を以て人に方ぶ。僧云はく、「未審し雲巖還つて有ることを知るや也無しや。」「草を折つて天を量る。」「山云はく、「若し有ることを知らずんば、争か恁麼に道ふことを解せん。」「日出でて山に連る。」「若し有ることを知らば、争か背て恁麼に道はん。」「月圓にして戸に當る。」「

頰に云はく)争か恁麼に道ふことを解せん。(暗裏に横骨を抽く。)五更鶏唱ふ家林の曉、(金鳥東に上る。)争か背て恁麼に道はん。(明中に舌頭に坐す。)千年の鶴は雲松と與に老ゆ。(玉兔西に沈む。)寶鑑澄明にして正偏を驗す。(事窮つて的要なり。)玉機轉側して兼到を看よ。(交互す明中の暗。)門風大いに振つて、規步綿綿たり。(西天令嚴なり。)父子變通して、聲光浩浩たり。(見、師に過ぎて、方に傳授するに堪へたり。)

第五十則 雪峯甚麼

【衆に示して云はく】末後の一句始めて牢關に到る。巖頭自負して上親師を背はず、下法弟に譲らず。爲復是れ強ひて節目を生ずるや、爲復別に機關ありや。

【擧す】雪峯住庵の時、兩僧あり、來つて禮拜す。(香を尋ね氣を逐ふ。)峯、來るを見て手を以て庵門を托して、放身して出でて云はく、「是れ甚麼ぞ。」(此れ猶是れ抛身の勢、隱身の勢、作麼生。)僧亦云はく、「是れ甚麼ぞ。」(果然として識らず。)峯低頭して庵に歸る。(語無しと道ふこと莫くんば好し。)僧後に巖頭に到る。(消を薄へ息を寄す。)頭問ふ、「甚麼

の處より來るや。」(錯せされば穴せず)僧云はく、「嶺南。」(這裏は是れ嶺北)頭云はく、「曾て雪峯に到るや。」(熟處忘じ難し)僧云はく、「曾て到る。」(更に諱むことを得ず)頭云はく、「何の言句かありし。」(醋ならざれば休せず)僧、前話を擧す。(一字公門に入れば、八牛拽けども出でず)頭云はく、「他は甚麼とか道ひし。」(卻つて好し低頭して便ち出づるに)僧云はく、「他語無うして低頭して庵に歸る。」(恁麼ならば則ち曾て雪峯に到らず)頭云はく、「噫當時他に向つて末後の句を道はざりき。」(而今道ひ了るや未だしや)若し伊に向つて道はば、天下の人雪老を奈何ともせず。(何ぞ我便ち是れ雪老と道はざる)僧、夏末に到つて再び前話を擧して請益す。(好酒人を醒すこと遅し)頭云はく、「何ぞ早く問はざる。」(瞌睡を食る)僧云はく、「未だ敢て容易にせず。」(可憐叢林に慣る)頭云はく、「雪峯我と同條に生ずと雖も、我と同條に死せず。」(別を索むるものは先づ窮す)末後の句を知らんと要せば只這れ是れ。」(旋蒸熟して賣る。)

【葛坡云云】巖頭末後の句に對して云ふ。
 【陶家云云】雪峯の歸庵に對して云ふ。
 【風舟云云】巖頭と雪峯の好遊戲の境界。

【頌に云はく】切碓し琢磨し、(一事に因らざれば)變態し教説す。(一智を長せず)葛坡化龍の杖、(已に聞く、海を過ぎて雲を穿つことを)陶家居蟹の棧、(癡癡に倚り壁に貼する)とを見る)同條に生ずるは、數あり。(性相近し)同條に死するは、多無し。(習相遠し)末後の一句只這れ是れ(且く一半を信ず)風舟月を載せて秋水に浮ぶ(切に墜跟することを忌む。)

第五十一則 法眼航陸

【衆に示して云はく】世法裏に多少の人を悟卻し、佛法裏に多少の人を迷卻す。忽然として打成一片ならば、還つて迷悟を著得せんや也無しや。

【舡來か陸來か】船て來たか、徒歩て來たか。

【擧す】法眼、覺上座に問ふ、舡來か陸來か。【大いに兩般有るに似たり。】覺云はく、舡來。【深く實相を談じ、善く法要を説く。】眼云はく、舡甚麼の處にか在る。【恐くは不實を怕る。】覺云はく、舡は河裏にあり。【果然として下落有り。】覺退いて後、眼卻つて傍僧に問うて云はく、爾道へ適來の這僧、眼を具するや眼を具せざるや。【可惜許。】

【適來の云云】今來た僧は宗旨の眼ありや。
【毛色云云】毛色にては千里の馬なるや否やは知られず。

【尙に云はく】水、水を洗はず。【絶點澄清。】金、金に博へず。【鍊つて一塊と做す。】毛色を味まして馬を得、相をもつて取ることを得ず。【絲絃靡うして琴を樂む。】聲をもつて求むべきに非ず。【繩を結び卦を畫いて這事あり。】法出でて姦生ず。【喪盡す眞淳盤古の心。】巧を弄して拙と成す。

第五十二則 曹山法身

【衆に示して云はく】諸の有智のものは、譬喩を以て解することを得、若し比することを得ず、類して齊しうし難き處に到らば、如何が他に説向せん。

【擧す】曹山、徳尙座に問ふ、佛の眞法身は猶虛空の若し、官には針を容れず。物に應じ

【曹山】曹山本寂、禪師、洞山良俣、禪師の法嗣。

【八成】十成ならざること。

【時後云云】聰明の意。

【家中云云】文字高藤に拘らざること。

【黄檗】黄檗希運禪師、百丈の法嗣を罵るの語。

て形を現ずることは水中の月の如し。(私に車馬を通ず)作麼生か箇の應ずる底の道理を説かん。(又手近前して云はく、嗜)徳云はく、驢の井を覗るが如し。(落花意有つて流水に随ふ)山云はく、道ふことは即ち太曝道ふ、只八波を道ひ得たり。(千里の目を窮めんと欲せば)徳云はく、和尚又如何。(更に一層樓に上れ)山云はく、井の驢を覗るが如し。(流水意無うして落花を送る)。

【頰に云はく】驢井を覗(五更早を侵して起く)井驢を覗る(更に夜行の人有り)智容れて外るる無く(天下の衲僧跳不出)淨涵して餘あり(萬象能く影質を逃るること莫し)時後誰か印を分たん(天眼龍睛も窺ふべからず)家中書を著へず(眞文は酷ならず)機絲掛けず梭頭の事(花又損ぜず)文彩縦横意自ら殊なり(蜜又成ることを得)。

第五十三則 黄檗 瞳 糟

【衆に示して云はく】機に臨んで佛を見ず、大悟師を存せず。乾坤を定むる劍、人情没し。虎兇を摘ふる機、聖解を忘す。且く道へ、是れ甚麼人の作略ぞ。

【擧す】黄檗、衆に示して云はく、汝等諸人盡く是れ瞳酒糟の漢(黄檗門下)與麼に行脚せば、何の處にか今日有らんや。今既に昔に如かず、後當に今に如かざるべし。還つて大唐國裏に禪師無きことを知るや。(眼四海に高し)時に偈あり出でて云はく、只諸方の徒を匡し、衆を領するが如きは、又作麼生。(黄檗身を兼ねて在り)槩云はく、禪無しと

【岐分れ云云】 智惠分別の甚たしいこと。
【葉綴り云云】 妄想叢論の多きこと
【葉碎云云】 法に於て自在。

は道はじ、只是れ師無し。」（且く一半を救ひ得たり。）

【頌に云はく】 岐分れ絲染んで太だ勞勞。（事を知ること少き時煩惱少し。）葉綴り花聯つて
組曹を取す。（人を識ること多き處是非多し。）妙に司南造化の柄を握つて、一朝の權手に在り。
水雲の器具甄陶に在り。（令行の時を取らせよ。）葉碎を屏割し、大象は兎徑に遊ばず。
鬚毛を剪除す。（大悟は小節に拘はらず。）星衡藻鑑、（纖毫も味まさず。）玉尺金刀、（度量深
明）黃檗老秋毫を察す。（他を謾すること一星も得ず。）春風を坐斷して高きことを放さず。
〔預め不虞に備ふ。〕

第五十四則 雲巖大悲

【衆に示して云はく】 八面櫛櫛、十方通暢、一切處放光動地、一切時妙用神通、且く道へ、如何が發現せん。

【擧す】 雲巖道吾に問ふ、「大悲菩薩許多の手眼を用ひて作麼かせん。」（備慈麼に問ふ、箇の甚麼をか圖る。）吾云はく、「一人の夜間に背手して枕手を摸るが如し。」（一上の神通、小小に同じからず。）巖云はく、「我會せり。」（且く詐明頭なること莫れ。）吾云はく、「汝作麼生か會す。」（果然として放不過。）巖云はく、「徧身是れ手眼。」（空缺の處無し。）吾云はく、「道ふことは太驟道ふ、即ち八成を得たり。」（某甲舌頭短し。）巖云はく、「師兄作麼生。」（理長すれば即ち就く。）吾云はく、「通身是れ手眼。」（隔礙の處無し。）

【一發云云】大悲千眼の法界に自由の働き。

【氷は云云】弟子の見が師に過ぐるこゝと。

【飯頭】炊事役。

【鐘・鼓】雲板。食中の相聞を鳴らす鐘。

【大小】流石と云ふほどの意。

【啓す】徳山の耳へ口を寄せて私語する。

【頌に云はく】一發虚通、豎に三際を究め、八面極樞。横に十方に徧し。象無く私無く春律に入る。時に應じて師を納る。留せず礙せず虚空に行く。任運に前溪に落つ。清淨の寶日功德臂。前を顧み後を盼、東を拈じ西を撥る。徧身は通身の是に何似ぞ。分疎不下。現前の手眼全機を顯す。賊贓已に露る。大用縱横何ぞ忌諱せん。可不可無し。

第五十五則 雪峯飯頭

【衆に示して云はく】氷は水よりも寒く、青は藍より出づ。見、師に過ぎて方に傳授するに堪へたり。子を養うて父に及ばざれば、家門一世に衰ふ。且く道へ、父の機を奪ふ者は是れ甚麼人ぞ。

【擧す】雪峯、徳山に在りて飯頭となる。少うして努力せず。一口飯遅し、徳山鉢を托けて法堂に至る。老いて心を歇めず。峯云はく、這老漢鐘未だ鳴らず鼓未だ響かざるに、鉢を托けて甚麼の處に向つて去るや。孩兒をして娘を罵るを會するを得しむ。山便ち方丈に歸る。盡く不言の中に在り。峯、巖頭に舉似す。家返宅宅亂る。頭云はく、大小の徳山最後の句を會せず。父は子の爲に隱す、直きこと其中に在り。山聞いて、侍者をして巖頭を喚ばしめて問ふ。汝老僧を背はざるか。油を潑いで火を救ふ。巖遂に其意を啓す。人間の私語、天の聞くこと雷の如し。山乃ち休し去る。果然として不會。明日に至つて墮堂、果して尋常と同じからず。風に隨つて柵を倒す。巖掌を撫して笑つて云は

【合胡】 言語の明瞭ならざること。

【江南】 名勝の地。百花咲き、鶇鶇鳴くところ。

【鶇鶇】 末後の句に喩ふ。

【密師】 雲巖曇成禪師の法嗣。潭州の仙僧。

【簪纓】 高位高官の意。

く、「且喜すらくは老漢末後の句を會せり。」家醜外に揚ぐ。他後、天下の人伊を奈何ともせず。」(鼻孔湛と爲てか我手裏に在り。)

【頌に云はく】 末後の句會すや也無しや。(這裏會することを得ず、會せずんば腰を打折せん。)徳山父子太だ含胡す。(外明かにして、裏暗きことを知らず。)座中亦江南の客あり。(謂ふこと勿れ秦に人無しと。)人前に向つて鶇鶇を唱ふること莫れ。(休得せんや。)

第五十六則 密師 白兔

【衆に示して云はく】 寧ろ永劫に沈淪すべくとも、諸聖の解脱を求めず、提婆達多は無間獄中に三禪の樂を受け、鬘頭藍弗は有頂天上に飛狸の身を墮す。且く道へ、利害甚麤の處に在るや。

【擧す】 密師伯、洞山と行く次、白兔子の面前に走過するを見て、密云はく、「俊なる哉。」(爭奈せん荒草裏に走ることを。)山云はく、「作麼生。」(爾が遅きことを怪む。)密云はく、「白衣の相に拜せらるるが如し。」(地より空に昇ることは易し。)山云はく、「老老大大として這箇の語話をなす。」(幾ど放過せんとす。)密云はく、「爾又作麼生。」(人虎を害するの心無ければ、虎人を傷ふの意無し。)山云はく、「積代の簪纓暫時に落魄す。」(空より放下することは難し。)

【頌に云はく】 力を霜雪に抗べ、(貧しきときは則ち獨り一身を善くす。)歩を雲霄に平しう

【下惠云云】柳下惠の直心を云ふ。
 【相如】司馬相如の痴心を云ふ。
 【蕭曹云云】蕭何曹參は漢の高祖の帝業を成す。

【放下著】著心を放下せよ。

【局破れて云云】身心脱落、脱落身心の境界。
 【仙】趙州を指す

す。(達するときは則ち兼ねて天下を濟ふ。)下惠は圃を出で、(苦氣は根に連りて苦し。)相如は橋を過ぐ、(甜瓜は蒂に徹して甜し。)蕭曹が謀略能く漢を成す。(葵花日に向ふ。)菓許が身心堯を避けんと欲す。(柳絮風に隨ふ。)龍驤は若も驚く深く深く自ら信ぜよ。(悟は須らく實悟なるべし、參は須らく實參なるべし。)眞情跡を參へて漁獵に混ず。(未だ蠹龜尾を曳くことを免れず。)

第五十七則 嚴陽一物

【衆に示して云はく】影を弄して形を勞す、識らず、形は影の本たることを。聲を揚げて響を止む、知らず、聲は是れ響の根なることを、若し牛に騎つて牛を賃むるに非ずんば、便ち是れ楔を以て楔を去るならん。如何が此過を免れ得ん。

【擧す】嚴陽尊者、趙州に問ふ、『一物不將來の時如何。』(猶是れ分外。)州云はく、『放下著。』(貼體の衣衫、會す、須らく脱卻すべし。)嚴云はく、『一物不將來、箇の甚麼をか放下せん。』(人は己の過を知らず、牛は力の大なることを知らず。)州云はく、『甚麼ならば則ち擔取し去れ。』(喚へども頭を回さず、爭奈何せん。)

【頰に云はく】細行を防がず先手に輸く。(黑白未だ分れざる前、猶是れ正中の偏。)自ら覺ゆ心鼻にして她らくは撞頭することを。(虎口裏に子を下す。)局破れて腰間の斧柯爛る。(且く道へ、如今甚麼の時節ぞ。)凡骨を洗清して仙と共に遊ぶ。(頭輕く眼明なり。)

【若し人の爲に云云】權什譯の金剛般若波羅蜜多經第十六能淨業障分の一節。

【鏡外云云】演若達多、自己の願を求めて狂奔し、鏡面に對して、大いに喜ぶと云ふ故事。
【杖頭云云】嵩山の高僧にして、慧安國師の弟子なり、時に村邑に古き竈神あり、依つて高僧撃つこと三下、竈を碎く、竈神喜んで業報を免ると。
【渠】無住の心體を云ふ。

第五十八則 剛經輕賤

【衆に示して云はく】經に依つて義を解するは三世佛の寃、經の一字を離るれば返つて魔説に同じ。因に收めず果に入れざる底の人、還つて業報を受くるや也無しや。

【擧す】金剛經に云はく、「若し人の爲に輕賤せられんに、「我を糞中の蟲と作せ。」是人先世の罪業ありて、應に惡道に墮すべきに、「老僧最も先に入らん。」今世の人に輕賤せらるるを以ての故に、「叢林の驢騾、龍象を蹴踏す。」先世の罪業則ち爲に消滅す。」甚麼の處にか去るや。」

【頌に云はく】綴綴たり功と過と。「唯頓覺の人を除く。」膠膠たり囚と果と。「並に法に隨順せず。」鏡外狂奔す演若多。「脚下煙生す。」杖頭擊著す破道墮。「百雜碎。」竈墮破す。「靈何れより生ずるや、聖何れより至るや。」來つて相賀す。「伏して惟れば墮懼。」卻つて道ふ、從前我に辜負すと。「何ぞ早く道はざる。」

第五十九則 青林死蛇

【衆に示して云はく】去れば則ち留住し、住すれば即ち遣去す。不去不住渠に國土なし、何れの處にか渠に逢はん。在在處處、且く道へ、是れ甚麼物か甚麼に奇特なることを得るや。

【青林】洞山良价
禪師の法嗣、青林
師虔禪師。
【死蛇】人を殺す
青蛇。

【三老】航工。

【滄洲】常に花木
多き名勝の地。

【昂藏】自ら尊大
振るの意。
【無巴鼻】迷悟凡
聖の實性無きを云
ふ。

【擧す】僧、青林に問ふ、學人徑に往く時如何。(歩を擧すれば即ち迂廻。)林云はく、「死蛇大路に當る、子に勸む當頭すること莫れ。」(曾て毒を著くるに慣ふ)僧云はく、「當頭する時如何。」(爾に大膽を許す。)林云はく、「子が命根を喪す。」(果然)僧云はく、「當頭せざる時如何。」(怎ぞ只爾に由らん)林云はく、「亦廻避するに處なし。」(築著碯著。)僧云はく、「正恁麼の時如何。」(且く著忙すること莫れ。)林云はく、「卻つて失せり。」(是れ死蛇と雖も、弄ずることを解すれば也活す。)僧云はく、「未審し甚麼の處に向つてか去らや。」(信ぜずんば懐を搜れ。)林云はく、「草深うして覓むるに處無し。」(頭上漫漫脚下漫漫)僧云はく、「和尚も也須らく隄防して始めて得べし。」(廻り來れり。)林、掌を拊して云はく、「一等に是れ箇の毒氣。」(將に謂へり侯白と、更に侯黑有り)』

第六十則 鐵磨牒牛

【衆に示して云はく】鼻孔昂藏、各丈夫の相を具す。脚跟牢實、背て老婆禪を擧げんや。無巴鼻の機關を透得せば、始めて正作家の手段を見ん。且く道へ、誰か是れ其人。

【擧す】劉鐵磨、滬山に到る。(相見已に了る。)山云はく、「老特牛汝來や。」(蜂を捺り蝎を

【百戰云云】 瀛山大無事の妙境界。

【曲覺】 委曲なる方便假説。
【直説】 直示の實説。

【十方云云】 世尊が阿難に示し給ふ偈。薄伽梵は佛の異稱。涅槃は佛境界。
【三十三天】 須彌山の頂。帝釋は三十三天の主。

【一期云云】 大いに發奮せよ。

別く。磨云はく、「來日、臺山に大會あり、和尚還り去るや。」(氣毒烟火然ゆ)山、身を放つて臥す。(半路に身を抽んづ)磨、便ち出で去る。(一撥すれば便ち轉す)。
【頌に云はく】 百戰功成つて太平に老ゆ。(家を安んじ業を樂む) 優柔誰か背て 苦に衝を争はん。(體人は是れ癡なるにあらず) 玉鞭金馬、閑に日を終ふ。(有りとも雖も無きが如し) 明月清風一生富む。(受用不盡)。

第六十一則 乾峯 一畫

【衆に示して云はく】 曲説は會し易し一手に分付す。直説は會し難し十字に打聞す。君に勸む分明に語ることを用ひざれ。語り得て分明なれば、出づること轉難し。信ぜずんば試みに擧す看よ。

【擧す】 僧、乾峯に問ふ、「十方薄伽梵一路涅槃門、未審し路頭甚處の處に在るや。」(快馬鈍阮に如かず)峯、拄杖を以て一畫して云はく、「這裏に在り。」(且く一半を信ず)僧擧して雲門に問ふ、「疑はば即ち別に參ぜよ。」門云はく、「扇子踏跳して三十三天に上り、帝釋の鼻孔に築著す。」(乞ふ漢語せよ)東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨盆の傾くに似たり。會すや會すや。」(恁麼に解説すれども、更に理會し難し)。

【頌に云はく】 手に入つて還つて死馬を將て醫す。(霹靂の手を下し、狼虎の薬を用ふ) 反魂香君が危きを起さんと欲す。(棺を掲げて死を救ふ、別に秘方有り) 一期通身の汗を擲出

せば、業障眩せざれば、颯疾遡えす。】方に信せん濃が家眉を借まざることを、(預顛に和して没卻す。)

第六十二則 米胡 悟 不

【衆に示して云はく】達磨の第一義諦、梁武頭迷ふ。淨名の不二法門、文殊口過る、還つて入作の分有りや也無しや。

【擧す】米胡、僧をして仰山に問はしむ。『今時の人還つて悟を假るや否や。』(還つて會て迷ふや。)山云はく、『悟は即ち無きにはあらず、第二頭に落つることを拏奈何せん。』(如何が免れ得ん。)僧廻つて米胡に擧似す。『是れ第幾ぞ。』胡深く之を肯ふ。『肯ふことは即ち無きにはあらず、爭か第二を免れん。』

【頌に云はく】第二頭、悟を分つて迷を破る。(普州の人賊を送る。)快かに須らく手を撒して筌罟を捨つべし。(放下著。)功兮未だ盡きざれば駢拇となる。(終に是れ分外。)智や知り難し臍臍を覺ゆ。(禹力不到の處、河聲流れて西に向ふ。)兔老いて氷盤秋露泣く。(慧著すれば即ち堪へず。)鳥寒うして玉樹曉風凄たり。(坐著すれば即ち不可なり。)持し來つて大仰眞假を辨す。(一點も謾し難し。)痕玷全く無うして白珪を貴ぶ。(一切に忌む觸破することを。)

【辨拇】足の五指が第二指に連りて無用の肉となる。
【兔老いて云云】以下ノ二句は米胡の境界。
【米盤云云】何れにも物を留めぬ。
【持し來云云】以下ノ二句は仰山の境界。

第六十三則 趙州 問 死

【春蘭秋菊】 其の美を競ふ。

【投子】 舒州投子山大同禪師、翠微學に嗣ぐ。

【卜壁燕金】 共に優劣なし。

【無星云云】 二人相見の様子、輕重なし。

【沒底云云】 兩老問答の妙手段。

【夜行云云】 知音底の者は隠すところなし。

【芥城劫石】 一念不生、或は父母未生以前。

【初を極む】 大死底に到る。

【塚中】 三世十方

【陸州】 雲門大師

【陸州】 陸州の陳尊宿、黃檗希運禪師の法嗣。

【雪峯義存禪師】

【珊瑚云云】 師資の感應道交。

【子昭】 長慶惠稜の法嗣。

【衆に示して云はく】 三聖と雪峯とは春蘭秋菊なり。趙州と投子とは卜壁燕金なり。無星秤上兩頭平なり。沒底缸中一處に渡る。二人相見の時如何。

【擧す】 趙州、投子に問ふ、「大死底の人卻つて活する時如何。」探手手に在り。子曰はく、「夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」(影草身に隨ふ。)

【頷に云はく】 芥城劫石妙に初を極む。(今時を及盡して始めて成立するを得。得。得。)活眼環中廓虚を照す。(絶後に重ねて廻らば、君を欺くことを得ず。夜行を許さず、既に投じて到る。(已に程途に涉る。)家音未だ背て鴻魚に付せず。(已に是れ妄に消息を傳ふ。)

第六十四則 子昭承嗣

【衆に示して云はく】 韶陽親しく陸州に見えて、香を雪老に拈す。投子而り圓鑿に承けて、法を太陽に嗣ぐ。珊瑚杖上に玉花開き、薔薇林中に金果熟す。且く道へ、如何が造化し來らん。

【擧す】 子昭首座、法眼に問ふ、「和尚聞堂何人に承嗣するや。」(早く今日聞管と成ること知らば、悔らくは當時好心を用ひざることを。眼云はく、「地藏。」「恩歸するに地有り。昭云はく、「太だ長慶先師に辜負す。」(肘膊外に向つて曲らず。眼云はく、「某甲長慶の一轉語を會せず。」「作つて知らざるを打す。昭云はく、「何ぞ問はざる。」「狼を引得來つて屋裏に扇せしむ。眼云はく、「萬象之中獨露身、意作塵生。」「觀面に相呈す。昭乃ち拂子を豎起

【念】 念起、即ち無明。

【塵云云】 一塵内にも無量の眞理あり。

【現成云云】 人人分上に佛徳具はる

【吒吒沙】 怒る泣く。

【剝剝落落】 山の石の點々。

【刁刁蹶蹶】 物を扣く。

【漫漫汗汗】 廣々としたる。

【咬嚼云云】 容易に師家の腹を寛ふこと能はず。

【首山】 首山省念禪師、風穴延沼の法嗣。

す。(雨重の公案) 眼云はく、「此は是れ長慶の處に學得する底なり、首座分上作麼生。」(管を劈き篋を奪ふ) 昭無語。(只跳得一跳せよ) 眼云はく、「只萬象之中獨露身といふが如きは、是れ萬象を撥ふか萬象を撥はざるか。(卻つて胡盧に倒に藤を懸はらる) 昭云はく、「撥はず。」(話兩轍と作る) 眼云はく、「兩箇。」(明眼は謾じ難し。) 參隨の左右皆撥ふと云ふ。(轉堪へざるを見る) 眼云はく、「萬象之中獨露身、靈。」(兩影一賽)。

【頌に云はく】 念を離れて佛を見、草枯れて鷹眼疾し。塵を破つて經を出す。(雪盡きて馬蹄輕し。) 現成の家法、(少きにあらず利るにあらず) 誰か門庭を立つ。(盡く這裏より流出す。) 月は舟を逐うて江練の淨きに行き、(一多無礙、去住自由) 春は草に隨つて燒痕の青きに上る。(頭上に夾山を薦取せよ) 撥と不撥と、(轉すれば必ず兩頭に走る) 聽くこと叮嚀にせよ。(事は細を厭はず) 三徑荒に就いて歸ること便ち得たり。(下坡に走らずんば) 舊時の松菊尙芳馨。(快便逢ひ難し。)

第六十五則 首山新婦

【衆に示して云はく】 吒吒沙。剝剝落落。刁刁蹶蹶。漫漫汗汗。咬嚼すべきこと没く、近傍を爲し難し。且く這へ、是れ甚變の話ぞ。
【擧す】 僧、首山に問ふ、「如何なるか是れ佛。」(可嘆新鮮) 山云はく、「新婦、驢に騎れば阿家率く。」(是れ何の道理ぞ。)

【頰に云はく】新婦驢に騎れば阿家牽く。〔草木拈出することを勞せず。〕體段の風流自然を得たり。〔描不成畫不就。〕笑ふに堪へたり。鞞に數ふ隣舍の女。〔巧を弄して拙と成す。〕人に向つて醜を添へて妍を成さず。〔笑を傍觀に取る。〕

第六十六則 九峯頭尾

【衆に示して云はく】神通妙用底も脚を放ち下さず、忘縁絶慮底も脚を捧げ起さず。謂つべし行る時は走殺し、有時は坐殺すと、如何が恰好し去ることを得ん。

【九峰】九峰虔禪師石霜諸の法嗣。頭尾は初め、尾は終り。

【擧す】僧、九峯に問ふ。如何なるか是れ頭。〔高く威音の前に超ゆる。〕峯云はく。眼を閉いて曉を覺えず。〔明戸を越えず。〕僧云はく。如何なるか是れ尾。〔獨り劫空の後に歩す。〕峯云はく。萬年の牀に坐せず。〔穴、巢に棲ます。〕僧云はく。有つて尾無き時如何。〔先行は到らず。〕峯云はく。終に是れ貴からず。〔奴は婢を見て殷勤。〕僧云はく。尾有つて頭無き時如何。〔末後は太だ過ぐ。〕峯云はく。飽くと雖も力なし。〔甚麼の用處か有らん。〕僧云はく。直に頭尾相稱ふことを得る時如何。〔君臣道合し、上下和同す。〕峯云はく。兒孫力を得て室内知らず。〔各其分に安す。〕

【鈍躑】礙へて行かざるなり。【進退云云】周易大肚の卦に出づ。【人家云云】有頭無尾のところ。

【窻に云はく】規は圓に矩は方なり。〔椀兒は團圓、盤兒は四角。〕用ふれば行ひ舍つれば藏る。〔升兒裏に廻し、斗兒裏に轉す。〕鈍躑盧に棲むの鳥。〔豈高く飛び、遠く揚ることを解せんや。〕進退滿に觸るるの羊。〔大方に獨歩すること能はず。〕人家の飯を喫して、〔快に須ら

【自家云云】有尾無頭のところ。
【雲騰云云】頭尾相稱ふところ。

【一塵云云】華嚴經の意、一微塵の中に百千の經卷を含む。

【一念云云】法華經の意、一念の間に三千の諸法を具す。

【自ら云云】自己本性の靈知を味却す。

【天の如く云云】細、無門に入り、大、方所を絶す。

【法界云云】大なるのとき。
【虚空云云】細なるのとき。

く吐却すべし。】自家の牀に臥す。〔切に忌む根を生ずることを。〕雲騰つて雨を致し、〔春生じ夏長ず。〕露結んで霜と爲る。〔秋收り冬藏す。〕玉線相投じて針鼻を透り、〔綿綿無間。〕錦絲絶えず梭腸より吐く。〔翻覆通同。〕石女機停んで、夜色午に向ふ。〔文彩縱横意。自ら殊なり。〕木人路轉じて、月影央を移す。〔行くことを解して今時の路に觸れず。〕

第六十七則 嚴經智慧

【衆に示して云はく】一塵萬象を含み、一念三千を具す。何に況んや天を頂き地に立つ丈夫兒、頭を道へば尾を知る靈利の漢。自ら已靈に辜負し、家寶を埋没すること莫しや。

【擧す】華嚴經に云はく、我今普く一切衆生を見るに、如来の智慧徳相を具存す。〔熊斤斗を翻し、驢柘杖を舞す。〕俱妄想執著を以て證得せず。〔妄想執著も亦惡からず。〕

【頌に云はく】天の如くに蔽ひ、地の如くに載す。〔上に通じ下に徹す。〕剛となし地と作す。〔刀斧斫れども聞けず。〕法界に周うして邊なく、十方に壁落無し。隣虚を斫つて内無し。

し、〔佛眼識れども見えす。〕玄微を及盡す。〔好事も無きには如かず。〕誰か向背を分たん。〔廻避する處無し。〕佛祖來つて口業の債を償ふ。〔言多ければ行を傷る。〕南泉の王老師に問取せよ。〔杉山を忌御す。〕人人只一葦菜を喫す。〔更に餘事の營爲すべき無し。〕

第六十八則 夾山揮劍

【關外】 塞外邊土

【塵を云云】 一切
萬法知解分別。

【石霜】 道悟の法
嗣。石霜慶諸禪師
【渠】 人人自己の
佛性。

【門庭云云】 夾山
ノ爲人垂手。

【入理云云】 石霜
ノ向上の爲人。

【牛云云】 夾山
ノ境界を述ぶ。

【一旦云云】 石霜
ノ境界を述ぶ。

【角を云云】 異類
を指す。

【衆に示して云はく】 寰中は天子の勅、關外は將軍の令。有時は門頭に力を得、有時は室
内に尊と稱す。且く道へ、是れ甚麼人ぞ。

【擧す】 僧、夾山に問ふ、「塵を撥つて佛を見る時如何。」（何ぞ必とせん。）山云はく、「直に
須らく劍を揮ふべし。（果然。）若し劍を揮はずんば、漁父巢に棲まん。」（坐するときは則ち
佛にあらず。僧擧して石霜に問ふ、「塵を撥つて佛を見る時如何。」見るときは即ち撥はず、
撥ふときは即ち見ず。霜云はく、「渠に國土無し、何れの處にか渠に逢はん。」（坐せざると
きは即ち佛。僧廻つて夾山に擧似す。往來易からず。山上堂して云はく、「門庭の施設は老
僧に如かず、入理の深談は猶石霜の百歩に較れり。」各一概を得たり。）

【頷に云はく】 牛を拂ふ劍氣兵を洗ふ威。太平は本是れ將軍の致。亂を定むる歸功更に是
れ誰ぞ。（將軍の太平を見ることを許さず。一旦の氣埃四海に清し。但凡情を盡せ。衣を垂
れて皇化自ら無爲。別に聖解無し。）

第六十九則 南泉 白 牯

【衆に示して云はく】 佛と成り祖と作るをば、汗名を帶ぶと嫌ひ、角を戴き毛を披るをば、
推して上位に居く。所以に眞光は耀かず、大智は愚の若し。更に箇の尊を便宜とし、不采
を伴る底あり。知んぬ是れ阿誰ぞ。

【擧す】 南泉、衆に示して云はく、「三世の諸佛有ることを知らず。（只有ることを知るが爲

【狸奴白牯】 猫と

【跛跛挈挈】 手足

【千拙】 即ち百

【毳毼毼】 毛髮

【毳毼】 任運

【毳毼】 任運

【毳毼】 任運

【鼻孔云云】 人相

【鼻孔云云】 人相

【香象云云】 涅槃

【香象云云】 涅槃

【定前云云】 二見

【進山主】 清溪洪

【進山主】 清溪洪

【筍云云】 筍は未

【筍云云】 筍は未

【這箇は云云】 以

【監院房】 知客寮

なり。狸奴白牯卻つて有ることを知る。一（只有ることを知らざるが爲なり。）

【頰に云はく】 跛跛挈挈。近づかされば忙を休めよ。一（人費ることを喜ばず。）百

取るべからず、一も堪ふる所なし。一（門を開いて又軟、火を種ゑて又濕。）黙黙として自ら知

る田地の穩なることを。一（靴裏に指頭を動す。）騰騰として誰か吐皮慈なりと謂はん。一（果裏

に奸を撒す。）普周法界渾て鉢と成す。一（吐不出、咽不下。）鼻孔纒垂として飽參に信す。一（半を

抛ち半を撒す。）

第七十則 進山問聖

【衆に示して云はく】 香象の河を渡ることを聞く底も、已に流に随つて去る。生は不生の性なることを知る底も、生の爲に留めらる。更に定前定後、筭と作り、蔑と作ること論ぜば、劍去つて久し、爾方に舟を刻むなり。機輪を廻轉して作麼生か別に一路を行せん。試みに擧す看よ。

【擧す】 進山主、脩山主に問うて云はく、一明かに生は不生の性なることを知らば、甚麼と

爲てか生の爲に留めらるるや。一（振鼻木を照顧せよ。）脩云はく、一筍畢、竟竹となり去る、

如今、蔑と作して使ふこと、還つて得てんや。一（鼻孔他人の手裏に在り。）進云はく、一汝向

後自ら悟り去ること、在らん。一（大小良を壓して賤と爲す。）脩云はく、一某甲只此の如し、上

座の意旨如何。一（頰を刺して人の懷裏に向ふ。）進云はく、一這箇は是れ監院房、那箇は是れ

【典座房】 典座寮

【平帖】 安穩。

【大方】 天下、獨立獨歩の境。

【血を云六】 宗師家の爲人を云ふ。
【紙を六六】 鬼神を祭るべき紙もなき意。

【擔干計】 擔ひ求めて法算するところ。
【翠巖】 翠巖令修禪師、雪峯存の法嗣。

【夏末】 夏とは一夏九旬、九十日間結制修行。

【眉毛ありや】 佛法を誤り説けば、「生ぜり」事が起つて来たとのこと
【垂鼻唇を欺く】

典座房。「毬子を打得して別處に去る。」脩、便ち禮拜す。「且く好心相待つことを作す。」

【頰に云はく】 豁落として依を亡じ、「繫驢轂を扳翻す。」高閑にして羈されず。「黄金の鎖を掣斷す。」家邦平帖到る人稀なり。「穩處に脚を下す。」些些の力量階級を分つ。「強ひて節目を生ず。」蕩蕩たる身心是非を絶す。「怪を見て怪とせざれば。」是非絶す。「其忙自ら壞す。」介り大方に立つて軌轍なし。「太平に忌諱無し、何れの處か風流ならざらん。」

第七十一則 翠巖 眉 毛

【衆に示して云はく】 血を含んで人に噴く、自ら其口を汚す。杯を貪つて一世人の債を償ふ。紙を賣ること三年鬼錢を缺く。萬松諸人の爲に請益す、還つて擔干計の處ありや也無しや。

【擧す】 翠巖夏末に衆に示して云はく、「猶少きを嫌ふこと在り。」「一夏以來兄弟の爲に説話す。」「自ら家醜を揚ぐ。」看よ翠巖が眉毛ありや。「口磣ることを害せず。」保福云はく、「賊と作る人心虚なり。」「也是れ火裏の人。」長慶云はく、「生ぜり。」「雪上に霜を加ふ。」雲門云はく、「關。」「衝を攔り巷を蔽る。」

【頰に云はく】 賊と作る心。「贓物已に露る。」人に過ぎたる膽。「傍若無人。」歴歴縦横、機感に對す。「白拈巧偷。」保福、雲門や垂鼻唇を欺き、「探頭太だ過ぐ。」翠巖、長慶や脩眉眼に映す。「伴つて知らざるを打す。」杜禪和何の限かあらん。「天童の杜撰は萬松に何似ぞ。」剛ひて

人相が悪い。
【備前眼に映ず】
【自作が怪しい】
【杜禪和】 邪解の
人。

【先宗云六】 先祖
にまで迷惑を掛け
る。擔板とは一邊
の理のみを見る。

【中邑】 馬祖の法
嗣

【哉推頰】 臘月三
十日

【蘿門】 中邑未だ
眠り留る。

【變態】 氣候の變
化。

【春風】 仰山を譬
ふ。

道ふ意句一齊に剗ると。(隠さんと欲して彌彌露る。)自己を埋没して也氣を飲み替を呑む。
【子を養うて父に及ばざれば、】先宗を帶累して牆に面ひ板を擔ふ。(家門一世に衰ふ。)

第七十二則 中邑 彌猴

【衆に示して云はく】 江を隔てて智を鬪はしめ、甲を遷けて兵を埋む。觀面すれば眞鎗實
劍を相待す、衲僧の全機大用を貴ぶ所以なり。慢より緊に入る、試みに吐露す看よ。

【擧す】 仰山中邑に問ふ、「如何なるか是れ佛性の義。」(這箇の座主卻つて持論するに堪へ
たり。)邑云はく、「我爾が爲に箇の譬喩を説かん。(假に宜しうして眞に宜しからず。)室に六
窓あり、中に一彌猴を安く、(還つて背て寧息するや。)外に人ありて喚んで狴狴といへば、
彌猴即ち應ず。(再來半文に直らず。)是の如く六窓俱に喚べば、俱に應ずるが如し。」(只體
郎が聲を認得せんことを要す。)仰云はく、「只彌猴睡る時の如きは又作麼生。」(寐語するこ
と莫れ。)邑乃ち禪牀を下つて把住して云はく、「覺め來るや也未だしや。」(狴狴我爾と相
見せり。)(何ぞ早く恁麼に道はざる。)

【頰に云はく】 雪屋に凍眠して、歳推頰。(蟄戸開かざれば)窺窺たる蘿門夜開かず。(龍に
龍句無し。)寒窩せる園林變態を看る。(幾ど死殺せんとす。)春風吹き起す律筒の灰。(喜び得
たり重ねて 甦ることを。)

第七十三則 曹山孝滿

【草に依り云云】
佛見法見等の入。

【衆に示して云はく】草に依り木に附き去つて精靈となり、屈を負ひ窻を叩んで來つて鬼男となる。之を呼ぶ則は錢を焼き馬を奏む、之を遣る則は水を呪し符を書す。如何が家門平安なることを得去らん。

【靈衣掛けす】向上一路へ達す。
【孝滿】大解脱を得。

【擧す】俗、曹山に問ふ、「靈衣掛けざる時如何。」〔蟪蛄殻を脱して猶寒枝を抱く。〕山云はく、「曹山今日孝滿。」〔平生に負かず。〕俗云はく、「孝滿の後如何。」〔寛行大步。〕山云はく、「曹山顛酒を愛す。何の不可あらんや。」

【清白云云】迷悟染淨等の戲論なき境界。
【光明云云】正徧自在。

【頌に云はく】清白の門庭四に隣を絶す。〔擱後に腮を見ば、與に往來すること莫れ。〕長年關し掃つて塵を容れず。〔設ひ有るも一點も著くに處無し。〕光明轉ずる處 殘月傾く。〔否極れば泰生ず。〕交象分るる時卻つて寅を建す。〔陰は慘へ陽は舒ぶ。〕新に孝を滿す。〔泪痕猶未だ罷めず。〕便ち春に逢ふ。〔相喚んで秋千を打す。〕醉歩狂歌墮巾に任す。〔熟熟禮を講ぜず。〕散髮夷猶誰か管係せん。〔千白山、百自在。〕太平無事酒顛の人。〔七村裏遺漢快活。〕

第七十四則 法眼質名

【衆に示して云はく】富萬徳を有つて、蕩として纖塵無し。一切の相を離れて、一切の法に即す。百尺竿頭に歩を進めて、十方世界に身を全うす。且く道へ、甚寥の處より得來

【無住】 混沌未分の時。

【如如】 空なり。不變不異不動の鏡。

【瑞巖】 瑞巖師彦。禪師、巖頭齋の法嗣。

るや。

【擧す】 僧、法眼に問ふ、「承る、教に言へることあり、無住の本より一初いちつの法ほふを立たすと、如何なるか是れ無住の本。」(狗口いぬぐちを合あ取とせよ)眼云まなこはく、「形かたちは未質みしつより興おこり、(眼華まなこくわするこ

と莫なれ)名なは未名みみより起おこる。」(畢竟ひつぎやう喚まんで甚麼しんぜんとか作なさんや)。

【頌に云はく】 沒蹤跡もつじゆうせき(羚羊角れいようかくを挂かく)斷消息だんせき(久ひさしく負おいて逢あはず)白雲根無はくうんこんなし、(妙體めうたい

本來處所ほんらいじよなし)清風何の色せいふうなにいろぞ。(通身つうしん駭おそぞ更さらに蹤お由ゆう有あらん)乾蓋けんがいに散ちじて心こころあるに非あらず。(尚なほ

能よく蝸かを出いづ)坤輿こんよを持もちて力ちからあり。(精神せいじんを費つさず)千古せんこの淵源えんげんを洞ほらにし、(盡じんく遺裏いしや

に向むかつて流ながれ出す)萬象まんざうの模則もそくを造つくる。(一法いつぽうの所印しよおん)初塵しよぢんの道會だうかいするや處處じよじよ普賢ふげん(街がを攔さり

甚おを截きる)樓閣ろうかく門開もんひらくるや頭頭づづ彌勒みらく(染着せんじやくは着ちやく)。

第七十五則 瑞巖常理

【衆しゆに示しして云いはく】 喚まんで如如にょにょとなす、早はやく是これ變へんぜり。智不到ちふたうの處ところ、切せつに忌いむ道著だうぢやくすることを。這裏しやう還かへつて參究さんきうの分ぶんありや也また無なしや。

【擧こす】 瑞巖ずいがん、巖頭がんとうに問とふ、「如何いかなるか是これ本常ほんじやうの理り。」(理り有あれば高聲かうせうに在あらず)頭云とういは

く、「動どうぜり。」(理りを知るべし)巖云がんいはく、「動どうの時とき如何いかん。」(再犯さいはん容ゆるさず)頭云とういはく、「本常ほんじやうの

理りを見みずや。」(物ものを相あして價あひを作なす)巖がん付思ちしす。(卻かへつて慙愧ぜんかいを識しるや)頭云とういはく、「昔しやくふ時とき

は即すなはち未いまだ根塵こんぢんを脱だつせず。(箇このの中ちゆう背路はいろなし)昔しやくはさる時ときは永とこく即すなはち生死しんじに沈しづむ。」(堂だうに當あた

【圓珠云云】 道本
圓通の意。
【根塵】 知解分別
を指す。
【活卓卓】 のんび
りとした貌。

【一句に云云】 把
住の意、雲門の如
きは一句中に三句
を具す。
【三句云云】 放行
の意。前と反對の
意。

【月落云云】 佛祖
も窺ひ知ること能
はず。

【宮漏云云】 佛祖
も伺ふこと能はざ
るの意。

つて正坐せず、那ぞ兩頭の機に赴かん。』

【頌に云はく】 圓珠穴あらず。(甚の處に手を下さん。大璞は琢せず。(功夫を借むべし。道
人の貴ぶ所 稜角無し。(就理藏鋒) 背路を拈卻すれば根塵空す。(十二處、閑影響を忘じ。)
脱體無依活卓卓。(三千界に淨光明を放つ。)

第七十六則 首山三句

【衆に示して云はく】 一句に三句を明し、三句に一句を明す。三一相渉らず、分明なり向
上の路。且く道へ、是れ那の一句か先に在る。

【擧す】 首山、衆に示して云はく、『第一句に薦得すれば、佛祖の與に師となる。(猶是れ萬
松が兒孫。』第二句に薦得すれば、人天の與に師となる。(人家の男女を教壞す。』第三句に薦
得すれば、自救不了。』(這不啣麪を説く漢。』僧云はく、『和尚は是れ第幾句に薦得するや。』
〔爾試みに卜度せよ。』山云はく、『月落ちて三更、巾を穿つて過ぐ。』(三句辨すべし、一鐵
空に透る。)

【頌に云はく】 佛祖の鬮一申に穿つ。(伊が躑躅するに一任す。』宮漏沈沈として密に箭を
傳ふ。(外人の知ることを許さず。』人天の機要千鈞を發す。(輕を以て重を勞す。』雲陣輝輝と
して急に電を飛ばす。(眨眼すれば蹉過す。』箇の中の人轉變を看よ。(計時に臨むに在り。)
賤に遇うては則ち貴、貴には則ち賤。(心に本より自ら同じきことを知る、所以に欣怨なし。)

【同象】青日なり
【夏を云云】首山
の月落三更の境界
を頌す。

【人の云云】本分
は無相なる故。

【字を知るや否や】
字は人人自己の境
界。

【記字】正しくは
古華海雲と云ふ。

【圓相云云】記の
形になすを云ふ。

【掃拉と譯
す、賢劫千佛の最
後。】

【遺還云云】一圓
相を書きしところ

【空印云云】分別
の属かざる文字の
意。

【武緯文經】武緯
は十字、文經は圓
相。

珠を圓象に得て至道綿綿たり。(一念不生全體現す。) 双を亡牛に遊ばしめて赤心片片たり。
〔泪は痛賜より出づ。〕

第七十七則 仰山隨分

【衆に示して云はく】人の空に畫くが如し、筆を下さば即ち錯る、那ぞ機を起して様を作すに堪へんや。○萬松已に是れ桎索を露す、條あれば條を攀ぢ、條無ければ例を攀ぢ。

【擧す】僧、仰山に問ふ、『和尚還つて字を知るや否や。』(是れ甚麼の字ぞ。) 山云はく、『分に隨ふ。』(仁に當つて讓らず。) 僧、乃ち右旋一匝して云はく、『是れ甚麼の字ぞ。』(已に偏傍を見る。) 山、地上に於て簡の十の字を書す。(更に畫點を書す。) 僧左旋一匝して云はく、『是れ甚麼の字ぞ。』(半滿俱に分る) 聲と轉注と。山、十の字を改めて記字と作す。(機輪轉する處、智眼蒙迷ふ。) 僧、一圓相を畫いて、兩手を以て托けて、修羅の日月を掌にする。

勢の如くにして云はく、『是れ甚麼の字ぞ。』(細に切脚を看よ。) 山乃ち圓相を畫いて記字を圍卻す。(天下の衲僧跳不出。) 僧乃ち樓至の勢を作す。(門外の金剛汝を笑はん。) 山云はく、『如是如是、汝善く護持せよ。』(空を關し夢を鎖して、牢く掌を收む。)

〔頌に云はく〕道環の虚窟つること嗒し。(雪を擔つて河を填む。) 空印の字未だ形れず。(切に彫刻を忌む。) 妙に天輪地軸を運し。(權衡手に在り。) 密に武緯文經を羅ぬ。(將相の全才。)

放問捏聚。(睦州猶在り。) 獨立周行。(老氏復生す。) 機玄樞を發して、青天に電を激す。

【放開擲聚】放開は放行、擲聚は把住。

【獨立云云】老子第二十五章に出づ。

【戲女云云】僧の境界。

【眼に云云】仰山の境界。

【冤天云云】學者と師家との問答商量。

【擲擲】耻辱。

【金沙云云】却來の消息を明す。
【留鴉云云】百尺竿頭更に自由の取れぬところ。
【會和尚】南泉下庵主、南泉の法嗣。

〔手を措くこと及ばず。〕眼に紫光を含んで、白日に星を見る。(四天下を照破す。)

第七十八則 雲 門 餠 餅

【衆に示して云はく】絶天に價を索むれば、搏地に相酬ゆ、百計經求す一場の撥擲、還つて進退を知り休咎を識る底ありや。

【擧す】僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ超佛越祖の談。」此問太高生。門云はく、「餠餅。」

〔一擧四十九。〕

【頷に云はく】餠餅を超佛越祖の談といふ。(一大藏教も詮注し及さず。)句中に味無し若んが參ぜん。(甚の處にか口を下さん。)衲僧一日如し飽くことを知らば、始めて知る餠餅醒ごどくぞやく。翻毒藥なることを。)方に見ん雲門の面慙ぢざること。(雲門人を見るに眼なし。)

第七十九則 長 沙 進 歩

【衆に示して云はく】金沙灘頭の馬郎婦、別に是れ精神。瑠璃瓶裏に饑饉を擣く。誰か敢て轉動せん。人を驚す浪に入らずんば、意に稱ふ魚に逢ひ難し。寛行大步の一句作麼生。

【擧す】長沙、僧をして會和尚に問はしむ、「未だ南泉に見えざる時如何。」(早晨に粥有り。)

會云はく、「別に有るべからず。」(只屎堆裏に向つて躄倒す。)僧廻つて沙に擧似す。(走口走)

【百尺云云】 會和尚の境界。

【四湖云云】 何等人の造作を假らず

【有信云云】 有信は長沙、田登は會和尚に當る。【無言云云】 會和尚を讚歎するの意

【大音云云】 老子第四十一章の語。【龍牙】 龍牙居遁禪師、法を洞山悟本禪師に嗣ぐ。【翠微】 翠微無學禪師、法を丹霞天然禪師に嗣ぐ。【禪板】 坐禪して疲るる時に倚り懸る板。

舌の漢。』沙云はく、『百尺竿頭に坐する底の人。』(竿下底一場の懽喜。』然も得入すと雖も未だ眞と爲さず。』(孤危立せず、道方に高し。』百尺竿頭須らく歩を進むべし。』(甚底ぞ大いに箇の割捨するが如くなる。』)十方世界是れ全身。』(始めて信す滿當是れ天にあらざることを。』)僧云はく、『百尺竿頭如何が歩を進めん。』(果して這箇の在る有り。』)沙云はく、『朗州の山、澧州の水。』(築著礎著。』)僧云はく、『不會。』(可瞭聰明。』)沙云はく、『四海五湖王化の裏。』(跣跳するに一任す。』)

【頌に云はく】 玉人夢破る一聲の雞。(眼を開いて 曉を覺えず) 轉盼すれば生涯色色所成す。(無盡藏中受用し了らさず。』)有信の風雷出蟄を催し、(節氣相催さず) 無言の桃李自ら蹊を成す。(水堦れば渠成る。』)時節に及んで耕犁を力む。(避くる者は做さず) 誰か怕れん春晴晴を泣する泥。(做す者は避けず。』)

第八十則 龍牙過板

【衆に示して云はく】 大音は聲希に、(大器は曉成す。盛忙百聞の裏に向つて杲を伴り、) 七古千年の後を慢慢す、且く道へ、(是れ如何なる底の人ぞ。』)

【擧す】 龍牙、翠微に問ふ、『如何なるか是れ祖師西來意。』(一廻拈出すれば一廻斬なり) 微云はく、『我更に禪板を過し來れ。』(本を著て利を圖る) 牙禪板を取つて翠微に與ふ。(兀兀矍矍。』) 微接得して使ち打つ。(情に是なることを知る) 牙云はく、『打つことは即ち打

【成襪】 成就の義

【虚空云云】星漢云云。龍牙の境を云ふ。

【江湖云云】天童座下(への)示衆。【軋車】 吳の船の名。

【穩密】 平穩親密

宏智頌占

つに任す、要且祖師西來意無し。』(半は背ひ半は背はず。』又臨濟に問ふ。』如何なるか是れ祖師西來意。』(頑皮癩肉。』濟云はく。』我與に蒲團を將ち來れ。』(好本多同。』牙蒲團を取つて臨濟に與ふ。』(錯を將て錯に就く。』濟、接得して便ち打つ。』(順乎骨際。』牙云はく。』打つことは即ち打つに任す、要且祖師意なし。』(恚く軟頭なることを得。』(牙後に住院す。僧問ふ。』和尙當年攀微と臨濟とに祖意を問ふ、二尊宿明すや也未だしや。』(貧兒舊債を思ふ。』牙云はく。』明すことは即ち明す、要且祖師意無し。』(焦搏打著す速底の凍。』

【頰に云はく】蒲團禪板龍牙に對す。』(計 穩かにして、脊を屠しうするを甘んず。』何事ぞ機に當つて作家ならざる。』(人を咬む狗は齒を露さず。』未だ成襪して目下に明なることを意はず。』(人遠見する無し。』將に流落して天涯に在らんとすることを恐る。』(必ず近き憂有り。』虚空那ぞ劍を挂けん。』(鋒鈍の事を假らず。』星漢卻つて槌を浮ぶ。』(別に向上の一路有り。』不萌の草に香象を藏すことを解し、(佛世業れども見えす。』無底の籃に能く活蛇を著く。』(一般に拈出して君と殊なり。』今日江湖何の障礙かあらん。』(太平に忌諱なし。』通方の津波に軋車あり。』(何の處か風流ならざらん。』

第八十一則 玄沙到縣

【衆に示して云はく】動すれば即ち影現じ、覺すれば即ち塵生す。舉起すれば分明、放下すれば穩密。本色道人の相見、如何が說話せん。

【顛挑沒交涉】否云ふ。さうでない」と云ふ。

【夜壑云云】玄沙の僧人を云ふ。

【龍魚】天下の學者を指す。

【南蓋云云】玄沙と小塘老との出合

【老龜云云】共に小塘老の自由の境

【隨處墮】一切處に自在ならざる意

【觀世音菩薩】人は是れ本具の觀世音菩薩

【錢を云云】錢は六根、餠餅は六塵

【門を云云】第二義門に下りて説く

【十二處云云】六根六塵河物も留めず

【擧す】玄沙、蒲田縣に到る、百戲して之を迎ふ。次日小塘長老に問ふ、「昨日許多の喧鬧、甚饜の處に向つてか去るや。」〔又問也〕小塘、袈裟角を提起す。〔果然として手忙しく脚亂る〕沙云はく、「顛挑沒交涉。」〔證據を謝す。〕

【頰に云はく】夜壑に舟を藏し、〔衲子は謾に難し〕澄源に棹を著く。〔昔て死水に墮せんや。〕龍魚は未だ知らず水を命となすことを、〔局に當る者は迷ふ〕折筋妨けず、柳か一攪することをも、〔草を打つて蛇を驚す。〕玄沙師、小塘老、〔一狀に領過す〕南蓋南蓋、〔聞き易きは終始の口〕探竿影草。〔保ち難きは戒寒の心。〕潛縮や老龜連に巢ひ、〔身を藏す處沒蹤跡〕遊戯や華鱗藻を弄す。〔沒蹤跡の處身を藏すこと莫れ。〕

第八十二則 雲門聲色

【衆に示して云はく】聲色を斷ぜざれば、是れ隨處墮、聲をもつて求め色をもつて見れば、如來を見ず。路に就いて家に還る底あること莫しや。

【擧す】雲門、衆に示して云はく、「聞聲悟道。〔雙丸耳を塞ぐ〕見色明心。〔兩葉睛を遮る。〕觀世音菩薩錢を將ち來つて餠餅を買ふ、手を放下すれば卻つて是れ餓頭。」〔又風に別調の中に吹かる。〕

【頰に云はく】門を出でて馬を躍して撥搶を掃ふ。〔闕外は將軍の令。〕萬國の煙塵自ら肅清。〔風行けば草偃す。〕十二處、閑影響を忘じ。〔併せて一家となす。〕三千界に淨光明を放

つ。(更に兩様無し。)

第八十三則 道吾看病

【摩詰云云】維摩經に衆生の煩惱病を我病となすと。
【文殊云云】文殊善く盡大地を藥となして病を醫す。

【智頭陀】道吾のこと。

【威音云云】無量劫以前。
【成平】十成平等の略。

【衆に示して云はく】通身を病と做す、摩詰痊え難し。是れ草醫するに堪へたり。文殊善く用ふ、争か向上の人に參取し、箇の安樂の處を得るに如かん。

【擧す】瀉山、道吾に問ふ、『甚麼の處より來る。』(來處分明ならんことを要す。)吾云はく、『看病し來る。』(福田の第一は即ち無にあらす。)山云はく、『幾人あつて病む。』(更に兩等を要す。)吾云はく、『病者と不病者とあり。』(卻つて是れ爾第二月有り。)山云はく、『不病者は是れ智頭陀なること莫しや。』(陷虎の機。)吾云はく、『病と不病と總に他の事に干らず、速かに道へ、速かに道へ。』(卻つて葫蘆に倒に藤を纏はらる。)山云はく、『道ひ得るも也沒交渉。』(禍は愼家の門に入らず。)

【頌に曰はく】妙藥何ぞ曾て口を過さん。(吞不入吐不出。)神醫も能く手を捉ふることも莫し。(横索する處無し。)存するが若くにして渠本無に非ず。(唯言ふ天下に徧しと。)至虚にして渠本有に非ず。(纖毫を見ず。)滅せずして生じ、(虚なることは谷神の常に死せざるが如し。)亡びずして壽し。(道は象帝に先つて自ら長生す。)全く威音の前に超え、(舒べて頭に到らず。)獨り劫空の後に歩す。(卷いて尾に到らず。)成平や天蓋ひ地擎ぐ。(乾坤を把定す。)運轉や鳥飛び兎走る。(造化を斡旋す。)

【擧す】瀉山、道吾に問ふ、『甚麼の處より來る。』(來處分明ならんことを要す。)吾云はく、『看病し來る。』(福田の第一は即ち無にあらす。)山云はく、『幾人あつて病む。』(更に兩等を要す。)吾云はく、『病者と不病者とあり。』(卻つて是れ爾第二月有り。)山云はく、『不病者は是れ智頭陀なること莫しや。』(陷虎の機。)吾云はく、『病と不病と總に他の事に干らず、速かに道へ、速かに道へ。』(卻つて葫蘆に倒に藤を纏はらる。)山云はく、『道ひ得るも也沒交渉。』(禍は愼家の門に入らず。)

第八十四則 俱胝一指

【尅的】 明明的確

【俱胝】 蔡州俱胝和尚、天龍和尚より一指頭の禪を相傳す。

【大千云云】 一毛端に於て能く十方の國土を合受す。

【鱗龍】 天下參學の衲僧をいふ。

【任公】 莊子外物篇に載す。俱胝を賞揚するの意。

【一指を云云】 三世の諸佛も退身するの意。

【虚空云云】 空相をも混亡す。

【華嶽云云】 色相を掃蕩す。華嶽は五岳の一。

【縫罽】 迷悟。

【肅宗】 唐の玄宗皇帝の子、深く佛

【衆に示して云はく】 一間千悟一解千從、上士は一決して一切了す、中下は多聞なれども多く信ぜず。尅的簡當の處、試みに拈出す看よ。

【擧す】 俱胝和尚凡そ所問あれば只一指を堅つ。(許多の氣力を費して作麼せん。)

【頌に云はく】 俱胝老子指頭の禪。(驢蹄を縮卻せよ。三十年來用不殘(今に至るまで蹠手亂下)信に道人方外の術あり。(這裏使ふこと苦す)了に俗物の眼前に看る無し。(猶少きを嫌ふこと在り)所得甚だ簡に、(乾坤に逼塞す)施設彌寬し。(一捏と消せず)大千刹海を嫌ふこと飲む。(涓滴を留めず)鱗龍限り無し誰が手に落つるや。(天童猶在り)珍重す任公釣竿を把ることを。(人を驚す手段を妨げず)師復一指を堅起して云ふ、看よ(人を恠惶殺す)。

第八十五則 國師塔樣

【衆に示して云はく】 虚空を打破する底の鈞鑊、華嶽を擊閉する底の手段あつて、始めて元縫罽なき處、瑕無を見ざる處に到る。且く誰か是れ恠麼の人ぞ。

【擧す】 肅宗帝、忠國師に問ふ、「百年の後所須何物ぞ。」(即今也少からず)國師云はく、「老僧が與に箇の無縫塔を作れ。」(甚の處に向つてか手を下さん)帝曰はく、「請ふ師塔樣。」

法に歸依す。

【忠國師】 南陽慧忠國師。

【百年の後云云】 忠國師御遷化後、如何にすべきや。

【無縫塔】 無形の塔。

【耽源】 耽源應眞師、忠國師の法嗣。

【相の云云】 碧巖には相は湘、譚は潭に作る。これ無縫塔を頌す。

【迥迥】 高くて秀てたる。

【陀陀】 圭角なく圓い。

【身先づ云云】 無縫塔の往來を示す

【南陽父子】 忠國師と耽源。

【銅頭云云】 靈利の衲僧、臨濟の境界。

【金剛云云】 黄蘗の境界。

〔描不成、畫不就。〕國師良久して云はく、二會すや。三這裏會すことを得ず、會せざれども別

に求むること莫れ。帝曰はく、不會。〔卻つて些々に較れり。〕國師云はく、吾に付法の弟

子耽源といふ者あり、卻つて此事を諳んず。〔祖禰了ぜざれば、殃兒孫に及ぶ。〕後帝、

耽源に詔して此意如何と問ふ。〔作家の君王、遺囑を忘れず。〕源云はく、相の南、譚の

北。〔天は高く地は厚く、日は左月は右。〕中に黄金ありて一國に充つ。虚空に逼塞す。無影

樹下合同船。〔密密として金刀剪れども聞けず。〕瑠璃殿上に知識無し。〔寂寂として簾垂れ

て顔を露さず。〕

〔頌に云はく〕孤迥迥。〔萬法と偈たらず。〕圓陀陀。〔無欠無餘。〕眼力盡る處高うして峨峨た

り。〔研額して望めども及ばず。〕月落ち潭空しうして夜色重し。〔盡十方界一鉞の墨の如し。〕

雲收り山瘦せて秋容多し。〔體露金風。〕八卦位正しく、天地と其徳を合す。五行氣和す。〔日

月と其明を合す。〕身先づ裏に在り見來るや。〔到るときは即ち點せず。〕南陽父子卻つて行る

ことを知るに似たり。〔且く一半を信す。〕西竺の佛祖如奈何ともする無し。〔千聖從來下風に

立つ。〕

第八十六則 臨濟大悟

〔衆に示して云はく〕銅頭鐵額天眼龍睛、鰐魚熊心豹膽なるも、金剛劍下是れ計を納れず、一籌すること獲ず。甚麼と爲てか此の如くなる。

【的的大意】 第一義諦。【大愚】 高安大愚禪師、歸宗智常に嗣ぐ。

【九包】 颯風、臨濟を云ふ。【千里の駒】 即ち臨濟に當る。【眞風云々】 臨濟の大悟した處。【勢雄云云】 大愚の處に於て發奮。【虎鬚】 黄葉の虎鬚。【見るや云云】 天章示業。【門云云】 學人の執を、氣に掃蕩せよと。【車箱云云】 出身の途なき様子。【箭筈】 向上の一路。

【擧す】 臨濟、黄葉に問ふ、「如何なるか是れ佛法的的大意。」(殺人は恕すべし、情理は容れ難し。) 葉便ち打つ。「棒棒血を見る。」是の如きこと三度、乃ち葉を辭して大愚に見ゆ。「重に便して輕に便せず。」愚問ふ、「甚麼の處より來る。」(隱、照顧せよ、著) 濟云はく、「黄葉より來る。」(杖猪猶在り。) 愚云はく、「黄葉何の言句かありし。」(這裏好し響を報ずるに) 濟云はく、「某甲三たび佛法的的大意を問ひ、三度棒を喫す、知らず過ありや過無しや。」(更に六十棒を少く。) 愚云はく、「黄葉何處に老婆、偏が爲に徹困なることを得たり。更に來つて有過無過を問ふ。」(再犯容さず) 濟、言下に於て大悟す。(始めて痛痒を知る。)

【頌に云はく】 九包の鑊、(羽翼既に成る。) 千里の駒。(神駿亦備ふ。) 眞風奮を度し、(一窠虚通す) 靈機樞を發す。(一撥便ち轉ず) 勇面に來る時飛電急なり。(擬議を容さず) 迷雲破る處太陽孤なり。(舊時の光彩。) 虎鬚を捋づ。(萬松門下誰か敢てせん。) 見るや也無しや。(急に眼を著けよ) 簡は是れ雄雌たる大丈夫。(老婆心切を爭奈せん。)

第八十七則 疎山有無

【衆に示して云はく】 門闔さんと欲すれば一撈して便ち開く、缸沈さんと欲すれば一高して便ち轉ず。車箱谷に入つて歸路なし、箭筈天に通じて一門あり。且く道へ、甚麼の處に向つて去るや。

【擧す】 疎山、滌山に到つて便ち問ふ、「承る、師言へることあり、有句無句は藤の樹に

【疎山】疎山匡仁
禪師、洞山悟本の
法嗣。

【某甲云云】一句
のために自分の復
子を賣つて旅費に
充てて来る。
【獨眼龍】明昭を
いふ。

【藤枯れ樹倒れ】
有無迷悟を投げ捨
て
【豈等閑ならんや】
普通の笑でない。

【日午云云】無用
のこゝし。
【夜半云云】無辨
白のこゝし。

倚るが如しと、(人の唇齒に挂く)忽然として樹倒れ藤枯る、句何の處に歸するや。(一言を承くるものは喪し、句に滞るものは迷ふ)潺山呵呵大笑す。(禹力到らざる處、河聲流れて西に向ふ)疎山云はく、(某甲四千里に布單を賣り來る、和尚何ぞ相弄することを得たる)。(草鞋錢還し來るや未だしや)。(馮、侍者を喚んで、錢を取つて遺上座に還せ)。(不義の財は我に於て浮べる雲の如し)。(遂に囑して云はく)。(向後獨眼龍あつて、子が爲に點破し去ることあらん)。(更に四千里有り)。(後に明昭に到つて前話を擧す)。(客兩主を煩す)。(昭云はく)。(馮山をば頭正しく尾正しと謂つべし、只是れ知音に遇はず)。(自ら是れ蒲纏短し、古井の深きに干むるに非ず)。(疎、復問ふ)。(樹倒るれば藤枯る、句は何の處に歸するや)。(又恁麼にし來るや)。(昭云はく、更に馮山をして笑轉新ならしめん)。(別人の拳頭をもつて地に畫く)。(疎、言下に於て省あり)。(布單の値を還し了れり)。(乃ち云はく)。(馮山元來笑裏に刀あり)。(始めて覺ゆ皮を破つて血を見ることを)。(疎に云はく)。(藤枯れ樹倒れて馮山に問ふ)。(行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時)。(大笑呵呵豈等閑ならんや)。(險ど相弄する會を作さんと)。(笑裏に刀あり窺得破す)。(將に謂へり別に有り)。(言思踏無うして機關を絶す)。(四千里の地我を賺し來る)。

第八十八則 楞嚴不見

【衆に示して云はく】見あり不見あり日午燈を點す。見無く不見無し夜半墨を澆ぐ。若し

【楞嚴經】 第三卷

見聞は幻覺の如くなることを信ぜば、方に聲色空華の若くなることを知らん。且く遣へ、教中還つて納僧の説話ありや。

【擧す】楞嚴經に云はく、「吾不見の時、何ぞ吾不見の處を見ざる。(是れ何の心俸ぞ。)若し不見を見るといふは、自然に彼不見の相に非ず。(自知することば即ち得たり)若し吾不見の地を見ずんば、自然に物に非ず。云何ぞ汝に非ざらん。」(心忙しく手急にして、推出し擁入す。)

【納僧云云】 見不見の相を離れ。
【珠絲云云】 廻り廻り、語。

【身を云云】 生死を脱すること能はず。

【動せざる云云】 萬法の空寂を悟るときは。
【萬里云云】 知解分別に關せず。

【頌に云はく】 滄海を溼乾し、(依然として白浪滔天。)太虚に充滿す。(毫釐絲忽を見ず。)納僧鼻孔長く、(千里の寒梅暗香度る。)古佛舌頭短し。(一字の眞言道ひ滿たず。)珠絲九曲を度し、(枉げて心力を勞す。)玉機纜に一轉す。(文彩縱横意自ら殊なり。)直下に相逢うて誰か渠を識らん。(是れ甚巖の面孔ぞ。)始めて信ず斯人伴ふべからざることを。(貶して孤獨地獄に入らん。)

第八十九則 洞山無草

【衆に示して云はく】 動する則は身を千丈に埋め、動せざる則は當處に苗を生ず。直に須らく兩頭撒開し中間放下するも、更に草鞋を買うて行脚して始めて得べし。

【擧す】 洞山、衆に示して云はく、「秋初夏末、兄弟或は東し或は西す。直に須らく萬里無寸草の處に向つて去るべし。」(猫を咬かして枯井に入る。)又云はく、「只萬里無寸草の

【大陽】大陽山の
善玄禪師。

【看よ云云】天童
の示衆。

【老木云云】洞山
石霜、大陽の三大
老に宗旨を究めよ

【彌醉】眞覺にあ
らざること。

【尊者】彌勒菩薩

【白椎】法語を證
明するときに鳴す

【摩訶衍】大乘の

【四句】一異有無
の四句、これを開
いて百非となす。

【夢中云云】彌勒
の所に往きしを云

處作塵生か去らん。」「一言既に發すれば、駒馬も追ひ難し。」「石霜云はく、「門を出づれば便
ち是れ草。」「自ら脚下を看よ。」「大陽云はく、「直に道はん、門を出でざるも亦是れ草漫漫
地。」「彌が過邊の處波し。」「

【頌に云はく】草漫漫(直下に底無し)傍に邊無し。門裏門外君自ら看よ(顧みて斜倒
を照す)荆棘林中脚を下すこと易く(荒田に草を揀ぶ)夜明簾外身を轉ずること難し(淨
地卻つて人を迷す)看よ看よ(事は細を厭はず)幾何般ぞ(枯木岩前差路多し)且く老木
に隨つて寒瘡を同じうす(但今日の志を存す)將に春風を逐うて燒瘢に入らんとす(必
ず志に稱ふ時有らん)。

第九十則 仰山謹白

【衆に示して云はく】屈原獨り醒む正に是れ彌醉、仰山夢を説く恰も覺時に似たり。且く
道へ、萬松恁麼に説き、諸人恁麼に聽く、且く道へ是れ覺か是れ夢か。

【擧す】仰山夢に彌勒の所に往いて、第二座に居す。(且く道へ、第一座は是れ誰ぞ。)尊者
白して云はく、「今日第二座の護法に當る。」「(低聲來つて是非を説くもの)山乃ち起つて
白椎して云はく、「諦觀法王法、法王法如是。」「摩訶衍の法は、「此義文長。」「四句を離れ百
非を絶す。謹んで白す。」「(言清く行濁る。)」

【頌に云はく】夢中衲を擁して耆舊に參す。(熟境忘じ難し。)列聖森森として其右に坐

【麈尾】 白麈を指す。

【心安き】 仰山の心安き。

【真目云云】 離四句經百非。

す。(犬)教書を銜めば、諸侯路を避く。(仁)に當つて誤らず。麈尾鳴る。(心)人に負かざれば、説法無畏師子吼す。(面)に懸づる色なし。(心)心安きこと海の如く、(百川)を呑納す。(鬚)草斗の如し。(傍)若無人。(鮫)目泪流る。(點)點是れ血。(蚌)賜珠涸る。(赤)心片片。(謔)語誰か知らん。我儀を泄すことを(手)足俱に露る。(龐)眉應に笑ふべし。家醜を揚ぐることを(誰)に因つてか致し得る。(四)句を離れ白非を絶す。(言)猶耳に在り。(馬)師父子病に膏を休む。(疹)を走り痛を走る、神鬼明め難し。

第九十一則 南泉 牡丹

【案に示して云はく】 仰山は夢中を以て實となし、南泉は覺處を指して虚となす。若し覺夢元無なることを知らば、始めて虚實、待を絶することを信ぜん。且く道へ、斯人甚麼の眼を具するや。

【學す】 南泉因に陸亘大夫云はく、「擊法師也甚た奇特なり。(也是)れ遼東の白家。」道ふことを解す、天地別根萬物一體と。(兩)指を緊起す。泉、座前の牡丹を指して云はく、「大夫時の人、此一株の花を見ること夢の如くに相似たり。」(壁)を隔てて狀を過す。

【頌に云はく】 輕微造化の根に照徹し、(行)いては到る水の窮る處。(紛)紛として出沒す。其門を見る。(生)しては看る雲の起る時。(神)を劫外に游ばしめて問ふ何か有らん。(心)外無法。(眼)を身前に著けて知、妙に存す。(滿)目青山。(虎)嘯けば蕭蕭として巖吹作り、(火)を乞ひて煙

【陸亘大夫】 南泉
普請禪師に參じて
大悟せり。
【天竺云云】 佛華
の遺著、律論にあ
る文。
【其用】 譯は麈、
【身業】 父母未生
以前、
【虎云云】 南泉の
爲人。

【南泉云云】 天童の示衆。

【舞絡鎖】 物の用を爲さぬ兼、即ち無用の長物。
【此人】 暗に雲門大師を指す。
【形山】 人人五尺の形山。

【何れの處か云云】 雲門の脚跟下を見抜いたか。
【稠柯云云】 轉身の一路を知らざるごと。
【夜水云云】 形山に秘在するところ。
【寒魚】 參學者を指す。
【興盡き云云】 止むを得ずして説く

に和して得。龍吟すれば冉冉として洞雲昏し。泉を挑げて月を帯びて歸る。南泉、時人の夢を點破して、(籠に好し睡語するに) 堂堂たる補處の尊を識らんと要す。(是處是れ慈氏。)

第九十二則 雲門 一寶

【衆に示して云はく】 游戲神通の大三昧を得、衆生語言の陀羅尼を解し、睦州秦時の轆轤鑽を拽轉し、雪峯南山の鬘鼻蛇を弄出す。還つて此人を識得すや。

【擧す】 雲門大師云はく、乾坤の内、乾坤を包裹する底、聾。宇宙の間、宇宙を立成する底、聾。中に一寶あり。(信ぜずんば懷を搜れ) 形山に秘在す。(形山是れ寶) 燈籠を拈じて佛殿裏に向ふ。(早く是れ驢井を覩る) 三門を將て燈籠上に來す。(那ぞ井の驢を覩るに堪へんや。)

【頌に云はく】 餘懷を收卷して事華を厭ふ。(水深くして波浪靜に、學廣くして語聲低し) 歸り來つて何の處か是れ生涯。(老人大として住處も也知らず) 稠柯の樵子路なきかを疑ひ、(日月不到の處) 柱樹の壺公妙に家あり。(別に是れ一乾坤) 夜水金波柱影を浮べ、(通上徹下) 秋風雪陣蘆花を擁す。(大小明白) 寒魚底に著いて餌を吞まず。(徒に鉤を下すに勞す) 興盡きて清歌卻つて樵を轉ず。(又風に別調の中に吹かる。)

第九十三則 魯祖 不會

【荆珍云云】 人人具足の佛性寶珠を知らず、六塵中に迷ふ。

【衣珠】 衣内の寶珠、即ち佛性。

【如來藏】 一心をいふ。

【往來】 南泉の語に附いて廻る。

【輪王】 四州の王者、

【下、上】 下は學者、上は師家。

【衆に示して云はく】 荆珍鵲を抵ち、老鼠金を啣む。其寶を識らず、其用を得ず、還つて頗に衣珠を省する底有りや。

【擧す】 魯祖、南泉に問ふ、摩尼珠人識らず、如來藏裏に親しく收得する。〔少賣弄〕如何なるか是れ藏。〔法堂前、佛殿後〕泉云はく、王老師と汝と往來する者は是。〔甚の死急か有る〕祖云はく、往來せざる者は。〔頭を道へば尾を知り、往を告ぐれば來を知る〕泉云はく、亦是れ藏。〔一遍生活すれば兩遍作る〕祖云はく、如何なるか是れ珠。〔一を得て二を望む〕泉召して云はく、師祖。〔老僧是れ拈出せざるにあらず〕祖、應諾す。〔閻黎是れ將ち來らざるにあらず〕泉云はく、去れ、汝我語を會せず。〔平生の肝膽人に向つて傾く。〕

【頌に云はく】 是非を別ち得喪を明し、〔眼裏に筋有り〕之を心を應じ諸を掌に指す。見處通透し、用時明白なり。往來不往來。〔總に他の事に干らず〕只這れ俱に是れ藏。〔恁麼不恁麼總に得たり〕輪王之を有功に賞し、〔廉者は取らず、貪者は與へず〕黃帝之を同象に得たり。〔已に心力を勞す〕樞機を轉じ伎倆を能す、〔百汝に如かず〕明眼の都僧肉莽なること無れ。〔事は細を厭はず。〕

第九十四則 洞山不安

【衆に示して云はく】 下、上を論ぜず、卑、尊を動ぜず。能く己を攝して他に從ふと雖も、

【四大不調】 病氣

未だ輕を以て重を勞すべからず。四大不調の時如何が侍養せん。

【擧す】 洞山不安、僧問ふ、「和尚は病む、還つて病まざる者ありや。」二分疏するに一任す。
山云はく、「有り。」強ひて主張す。僧云はく、「病まざる者は還つて和尚を見るや否や。」三世諦流布。山云はく、「老僧他を見るに分あり。」(木分の相見)僧云はく、「和尚他を見る時如何。」(甚變の眼あつて相見するや)山云はく、「則ち病あることを見ず。」(只是れ肯て假に參せず。)

【臭皮袋】 四大五臟偈和合の身體を指す。
【赤肉團】 心識を指す。

【勸絶すべし】 病を。

【顛預する勿れ】 無病でひると大面を爲す勿れ。

【位に就く】 眞源空寂のところに歸る。

【盤】 茶を盛る器

【頷に云はく】 臭皮袋を卸卻し、「草拮れて鷹眼疾し。」赤肉團を拮轉す。「雪盡きて馬蹄輕し。」當頭鼻孔正しく、「也須らく撥轉して始めて得べし。」直下觸礙乾く、「切に忌む鬼を見ることを。」老醫從來の辯を見ず。「手到れば病除く。」少子相看して向近すること難し。「渠に國土無し、何の處にか渠に逢はんや。」野水瘦する時秋潦退き、「龍は舊道を行く。」白雲斷ゆる處舊山寒し。「是れ眞に滅し難し。」須らく勸絶すべし。「君子の一言。」顛預すること莫れ。「燈を點じて飯を喫す。」無功を轉盡して伊位に就く。「葉落ちて根に歸す。」孤標汝と盤を同じうせず。「來時口無し。」

第九十五則 臨濟一畫

【衆に示して云はく】 佛來るも打し魔來るも打す。理あるも三十、理なきも三十。爲復是れ錯つて怨讎を認むるか、爲復是れ良善を分たざるか、試みに道へ看ん。

【院主】 監寺。

【黄米】 玄米。

【全機云云】 格外
超越の機。

【狐兔云云】 臨濟
の爲人境界。

【雲居は云云】 雲
居が、庵主の舍利
を大切にせしこと
【牛頭】 牛頭法
は四祖道信に嗣ぐ

【擧す】 臨濟、院主に問ふ、「甚の處よりか来る。」(掌して云はく、這裏より来る。)主云はく、「州中に黄米を糶り来る。」(卻つて實頭)濟云はく、「糶り得盡すや。」(草に入つて人を求む。)主云はく、「糶り得盡す。」(兩搭り、れども頭を廻さず)濟杖を以て一畫して云はく、「還つて這箇を糶り得んや。」(甚の死急かある)主便ち喝す(蝦蟇叫)濟便ち打つ。(代手骨操)次に典座至る、前話を擧す(小賣弄)座云はく、「院主、和尚の意を會せず。」(口は是れ禍門なり)濟云はく、「備又作麼生。」(身上に上せ来る)座便ち禮拜す(轉堪へざるを見る)濟亦打つ。(手の快を趣ふ)。

【頷に云はく】 臨濟の全機格調高し。(也好し)頷を與ふるに。(棒頭に眼あつて執筆を辨ず。(一點も謾し難し)狐兔を掃除して家風峻なり。(師子の全威)魚龍を變化して電火燒く。(大小の神通)活人劍(猶些子に較れる)殺人刀(這漆桶)天に倚つて雪を照し吹毛を利し、(誰か敢て正しく観ん)一等に令行して滋味別なり。(這醋可醜醜なり)十分の痛處是れ誰か遭はん。(打つて云はく、是れ備、是れ備)。

第九十六則 九峯 不肯

【衆に示して云はく】 雲居は戒珠舍利を憑まず、九峯は坐脱立亡を愛せず。牛頭は百鳥花を啣むことを要せず、黄華は杯を浮べて水を渡ることを羨まず。日く道へ、何の長處かあるや。

【首座】九峰の師
兄、泰首座。

【香煙は云云】出
身は易く、脱體は
難し。

【擧す】九峯、石霜に在つて侍者となる、霜遷化の後、衆、堂中の首座を請じて住持を接續せしめんとす。(便ち好し、能が伎倆なきことを學ぶに、應に秀が塵埃を拂ふが如くなるべからず。)峯肯はず、乃ち云はく、「某甲が問過せんを待て、若し先師の意を會せば先師の如くに侍奉せん。(路に不平を見る。)遂に問ふ、先師道はく、「休し去り、歇し去り、力かを費して作麼にかせん。」一念萬年にし去り、忘前失後の漢。寒灰枯木にし去り、甚の氣息か有らん。」一條白練にし去る」と。(切に點汚を忌む。)且く道へ、甚邊の事を明すや。「只無事を要す。」座云はく、「一色邊の事を明す。」(兩般にし了れり。)峯云はく、「恁麼ならば則ち未だ先師の意を會せざることあり。」(一朝の權手に在り。)座云はく、「爾我を肯はざるや、香を裝ひ來れ。」(果然として不會。)座乃ち香を焚いて云はく、「我若し先師の意を會せずんば、香煙起る處脱し去ることを得じ。」(人を氣急殺す。)言ひ訖つて便ち坐脱す。(這裏甚麼の所在ぞ、恁麼にし去る。)峯乃ち其背を撫して云はく、「坐脱立亡は則ち無きにはあらず。」(出身は猶易かるべし。)先師の意は未だ夢にだも見ざるあり。」(脱體に道ふことは應に難かるべし。)

【頌に云はく】石霜の正宗、(蜂のごとくに糞り、蟻のごとくに聚り、親しく九峯に傳ふ、氷消瓦解。)香煙に脱し去り、(生死自在は即ち無きにはあらず。)正脈通じ難し。(先師の意は未だ夢にも見ざること有り。)月巢の鶴は千年の夢を作し、(樹倒るれども飛ばず。)雪屋の人は一色の功に迷ふ。(日出でて後、一場の懺懺。)十方を坐斷するも猶點額す。(切に忌む

根を生ずることを。)密に一步を移さば飛龍を見ん。(別般の造化。)

第九十七則 光帝 幟頭

【鹽官云云】鹽官齊安と宣宗との話碧巖第十一則に出づ。

【衆に示して云はく】達磨梁武に朝す、本心を傳へんが爲なり。鹽官大中を識る、眼を具することを妨げず、天下太平國王長壽といつて、天威を犯さず、日月景を停め四時和適すといつて、風化を光かにすることあり。人王と法王との相見には、合に何事をか談すべき。

【同光帝】同光は唐の莊宗皇帝。【興化】興化存獎禪師、臨濟の法嗣。【幟頭脚】冠の紐。

【舉す】同光帝、興化に謂つて曰はく、「寡人中原の一寶を收め得たり。(少賣弄。)'只是れ人の價を酬ゆるなし。'三國を傾けても換ふること莫れ。'化云はく、「陛下の寶を借せ看ん。'便に因つて勢に接す。'帝、兩手を以て幟頭脚を引く。'幸に其人に遇ふ。'化云はく、「君王の寶誰か敢て價を酬いん。'一併に交足る、別に少欠無し。)

【燕金】燕の昭王千金を臺上に於て天下の士を引く。【金輪】輪王四種の中最高の王、即ち同光帝を賞揚す。

【頌に云はく】君王の底意知音に語る。(一)たび善言を發すれば、天下誠を傾く葵藿の心。(千里福應す。)撮出す中原無價の寶(兩手に分付す)趙璧と燕金とに同じからず。(別に是れ一家の珍。)中原の寶興化に呈す(分付着頭。)一段の光明價を定め難し。(自ら買ひ自ら賣る。)帝業萬世の師となるに堪へたり。(古今を裂破す。)金輪の景は四天下を耀かす。(猶化の在る有り。)

第九十八則 洞山 常切

【三身】法身、報身、應身。
【諸數云云】維摩經に云はく「佛身無爲、諸數に隨せず」と。
【世に云云】洞山の答處は。
【白蘋云云】佛見法見なきこと。

【碁に云云】人には必ず一つの特長あり。
【口を開き云云】雲門が。
【思はんと擬すれば】塵塵三昧に就いて分別せば。
【韶陽師】雲門大師。
【歸金】二人同心を云ふ。同境界の人を指す。
【匪石の心】堅固、而も自由。

【衆に示して云はく】九峯舌を截つて石霜を追和し、曹山頭を研つて洞嶺に辜かず。古人三寸、恁麼に密なることを得たり。且く爲人の手段甚麼の處に在るや。
【擧す】僧、洞山に問ふ、「三身の中那身か諸數に隨せざるや。」(前三三、後三三)山云はく、「吾常に此に于て切なり。」(人を氣急殺す。)
【頌に云はく】世に入らず、(物外に身を横ふ)未だ縁に循はず、(驚を刮つて家を成す)劫壺空處に家傳あり、(猫兒屋頭に尿す)白蘋風細かなり秋江の暮、(清虛の冷淡)古岸舡歸る一帶の煙、(日天涯に斷ゆ。)

第九十九則 雲門鉢鉢

【衆に示して云はく】碁に別智あり、酒に別腸あり。狡兔三穴、猾豕萬倖。更に箇の諸頭底有り。且く道へ、是れ誰ぞ。
【擧す】僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ塵塵三昧。」(頼有り沙を撒せず)門云はく、「鉢裏の飯、桶裏の水。」(撞頭磕額、擲腮撲面。)
【頌に云はく】鉢裏飯桶裏水、(椀に盛り杓に穿む)口を開き膽を見して知己を求む、(只分明に極るが爲に、翻つて所得をして遅からしむ)思はんと擬すれば便ち二三機に落つ、(天童は第四)對面忽ち千萬里となる、(是れ必ず早く廻程)韶陽師些子に較れり、(未だ敢て相保せず)斷金の義、誰か與に相同じからん、(心人に負かず)匪石の心、獨り能く此の

如し。(面に懸づる色なし。)

第一百則 瑯琊山河

【衆に示して云はく】一言以て邦を興すべく、一言以て邦を喪すべし。此衆亦能く人を殺し、亦能く人を活す。仁者は之を見て之を仁と謂ひ、智者は之を見て之を智と謂ふ、且く道へ、利害甚密の處に在るや。

【覺和尚】 瑯琊惠覺禪師、汾陽善昭の法嗣。

【翟臺】 釋尊の姓

【擧す】 偈、瑯琊の覺和尚に問ふ、「清淨本然、云何ぞ忽ち山河大地を生ず。」(「迷時は三界有り。覺云はく、清淨本然、云何ぞ忽ち山河大地を生ず。」(「悟後十方空なり。」「頌に云はく、)有を見て有とせず。(一般の翻草。))釋手覆手、(人の做造に由る。))瑯琊山裏の人。(交手して云はく、)慧覺と。)翟臺の後に落ちず。(一語人を傷り、千刀腹を擗く。))

天童覺和尚頌古 報恩老人著語終

人
天
眼
目

宗典部
第二十二卷

人天眼目序

【人天眼目】作家の宗師が佛祖の心胸を剖開する機語の要所を云ふ。
【件目】條件條目同じからず。或は三玄或五位等。
【綱要】日明ならず五家の眼目。
【碣】圓なるもの。碑は方なるもの。稱提。舉揚提唱の語言。
【垂頌】宗頌古萬年山寺天台山中の舊名平田寺。
【掃柄】應機接物。掃柄。拂子や竹篋を懸起して師家と稱する人。
【淳熙】南宋孝宗の年號。
【戊申】十五年日本の後鳥羽帝文治四年。
【晦巖】或は曰ふ徑山漸翁琰の法嗣と或は大慧派下と

余初遊方して、至る所誠を盡して、尊宿に五宗の綱要を啓扣す。其間の件目、往往同じからず。亦未だ知らざる所の者あり。因つて憶念す、既に師の位に據つて、而も綱宗の語句、尙其名を知らず。況んや旨訣をや。將向を以て後昆を啓迪し、疑懐を剔抉せんや。是に於て乎、綱要に意あること幾んど二十年矣。或は之を遺偏に見、或は之を斷碣に得、或は尊宿の稱提を聞き、或は老衲の垂頌に獲たり。凡そ五家の綱要は、即ち筆して語を撰む。巨軸を成すと雖も、第未だ之を詳定するに暇あらず。晚に天台の萬年山寺に抵つて、始めて其志を償ふ。編次類列して分つて五宗と爲す。名けて人天眼目と曰ふ。其辭皆一に前輩の所作に依り、敢て之を増損せず。然るに是集は、乃ち從上の諸大老の利物施爲、既に予が胸臆の論に非ず。世に行はるることを得るも、何の哨かあらんや。若し能く拂柄を執つて師の位に據る者、是を捨つるときは則ち以て邪正を辨驗することなけん。有識博聞の者、必ず印可を垂れん。

淳熙戊申季冬越山晦巖智照序す。

【師】本書は、智昭禪師の著にして、禪門五家の祖師の遺蹟、殘傷、稱提、垂示等を悉く蒐集し、五宗の特徴を知らしむ。

人天眼日 卷之上

臨濟宗

【四月】本録には孟津月とあり、正月に作る。

【四料揀】料は量兼は選なり。臨濟凡そ來學の者あればこの四種を以て其情増除く。

【普化克符】普化は盤山積に、克符は臨濟玄に嗣ぐ。【成襪】成就の如し。

師諱は義玄、曹州南華の人なり。俗姓は邢、幼にして穎異なり。長つて孝を以て聞ゆ。落髮受具するに及んで、講肆に居す。精く毘尼を究め、博く經論を顯る。俄にして嘆じて云はく、「此れ濟世の醫方なり。教外別傳の旨に非ず」と。即ち衣を更へて遊方す。首め黄檗に參じ、次に大愚に調す。其機縁語句は行録に載せたり。既に黄檗の印可を受けて、尋いで河北鎮州城の東南の隅に抵つて、滹陀河の側に臨んで、小院に住持す。其れ臨濟は地に因つて名を得たり。唐の咸通八年丁亥四月十日、衣を攜めて坐に據つて、三聖と問答し畢つて、寂然として逝す。門人師の全身を以て、塔を大名府の西北の隅に建つ。勅して慧照禪師と諡す。塔を澄靈と號す。

四料揀

師、初め河北に至つて住院。普化、克符の二上座を見て、乃ち謂うて云はく、「我此に於て黄檗の宗旨を建立せんと欲す。汝且く我を成襪せよ。」二人珍重して下り去る。三日の後、普化御つて上來して問ふ、「和尚三日の前甚麼をか説く。」師便ち打す。三日の後、克符

【珍重】 禮義して敬意を示す。

【小參】 非時の説法。

【僧有り】 克符。

【煦日】 春和の口。

【櫻兒】 兒は、本縁に作る。

【大慧泉】 諱は宗果、圓悟動に嗣ぐ。

【并汾】 二州の名。天下の命に隨はず獨立す。秦の始皇之を破るの故事あり。

【含糊】 俗にいふ「うふふ」といふ笑語。

上來して問ふ、「和尚前日普化を打して甚麼をか作す。」師亦打す。晚に至つて小參云はく、「有時は奪人不奪境、有時は奪境不奪人、有時は人境兩俱奪、有時は人境俱不奪。」

時に僧あり、問ふ、「如何なるか是れ奪人不奪境。」師云はく、「煦日發、生して地に錦を鋪く。櫻兒髮を垂れて白うして絲の如し。」

大慧泉云はく、「此兩句、一句は境を存し、一句は人を奪ふ。」

「如何なるか是れ奪境不奪人。」師云はく、「王令已に行はれて天下に徧し。將軍塞外に煙塵を絶す。」

大慧云はく、「上の句は奪境、下の句は人を存す。」

「如何なるか是れ人境兩俱奪。」師云はく、「并汾絶信獨處一方。」

大慧云はく、「便ち人境俱奪の面目あり。」

「如何なるか是れ人境俱不奪。」師云はく、「王寶殿に登れば野老謳歌す。」

大慧云はく、「此は是れ人境俱不奪なり。」

大慧云はく、「吾初め諸家の禪録を讀むに、并汾絶信の語を見て、深く以て疑を爲す。諸老に詰ると雖も、皆含糊不辨。既に臨濟の語を聞して、則ち絶信の一字なること知る。

蓋し并汾は二州の名なり。僧、人境俱奪を問ふ。答へて云はく、「并汾絶信獨處一方」と。其旨曉然たり。方に諸師の集皆烏焉の誤あることを悟る。」

克符 頌

【龍珠】 龍龍領下の珠。此二句、下句境。

【蟾桂】 蟾は蟾蜍、桂は月中の桂樹、是れ隣近釋なり。

【婆娑】 婆娑なり、柳木の盛なる貌。

【聖凡の情】 人境俱奪の當體。

【音異ならず】 人境俱不奪なり。

【穿開】 自己の妙用活手段をいふ。

【無縁】 一生沈淪して毒海に在るなり。

奪人不奪境、自ら誦説を帯ぶるに縁る。玄旨を求めんと擬欲せば、思量反責せん麼。驪珠光燦爛、蟾桂影婆娑、觀面無二差五、還應滯二網羅。

大慧云はく、「此頌の大槩、驪珠光燦爛、蟾桂影婆娑の上に在り。此兩句、是境なり。學者不奪境を問うて、玄旨を求めんと擬欲せば、思量反責せん麼。大意只是れ思量擬議すべからず、擬議する者は人なり。觀面相呈する一著子を蹉卻して、即ち語言に網羅せらる。」

奪境不奪人、言を尋ねば何れの處か眞ならん。禪を問はば禪是れ妄、理を究めば理觀に非ず。日照三寒光一澹、山遙翠色新、直饒玄會得、也是眼中塵。

大慧云はく、「日照三寒光一澹、山遙翠色新、直饒玄會得、也是眼中塵。此兩句は是れ境、直饒玄會得、也是眼中塵と、便ち奪ひ了れり。」

人境兩俱奪、從來正令行す。佛と祖とを論ぜず。那ぞ聖凡の情を説かん。吹毛の劍を犯さんと擬せば、還つて目前に値ふが如し。進前妙會を求めば、特地に精靈を斬る。

大慧云はく、「正令既に行じて、佛祖を留めず。者裡に到つて、進も退も、性命都て師家の手裡に在り。吹毛劍の如きは、其鋒を犯すべからず。」

人境俱不奪、思量意偏ならず、主賓言異ならず、問答理俱に全し。踏破澄潭月、穿開碧落天、不レ能レ明ニ妙用、淪溺在ニ無餘。

大慧云はく、「若し分明に臨濟の意を理會し得んと要せば、但他の當時垂示の處に向つて

奪人不奪境、自ら誦説を帯ぶるに縁る。玄旨を求めんと擬欲せば、思量反責せん麼。驪珠光燦爛、蟾桂影婆娑、觀面無二差五、還應滯二網羅。

【者裡】 全体作用處。

【定動】 符思の狀に動く。

【南院願】 興化非に動く。

【風穴沼】 南院願に動く。

【楔】 妄想をいふ金帶子。一椀一喝也。

【關】 衝なり。

【關】 梵語、此には軌範、正行とも云。

【首山念】 風穴沼に動く。

【石門聽】 首山念に動く。

【慈明圓】 汾陽昭に動く。

【神會】 荷澤六祖能の嗣。

【普】 嵩山に住す。北宗神秀の嗣。

【法華舉】 汾陽昭に動く。

【百年】 生涯なり。石門聽に動く。

【回日】 本分上自に立ち回ると云ふ。

人天眼 目卷之上

看よ。」

師、案に示して云はく、「諸方の學人來るが如きんば、山僧が此間に三種の根器を作して斷る。中下根器來るが如きんば、我便ち其境を奪うて、其法を除かず。或は中上根器來れば我便ち境法俱に奪ふ。上上根器來るが如きんば、我便ち境法人俱に奪はず。出格見解の人あつて來るが如きんば、山僧が此間には便ち全體作用す。根器を廢す、大徳者裡に到つて、學人著力の處風を通ぜず、石火電光も即ち蹉過了也。學人若し眼目定動せば、即ち沒交涉。」

南院願和尚、風穴沼和尚に問うて云はく、「汝道へ、四種料簡の語何の法を料簡す。穴云はく、「凡そ語凡情に滯らざれば、即ち聖解に墮す。學者の大病なり。先聖之を哀んで爲に方便を施す。楔の楔を出づるが如し。院、問ふ、「如何なるか是れ奪人不奪境。穴云はく、「新出紅爐一金彈子、笠被關梨鐵面門。」

首山念云はく、「人前把出、遠送二千峰。」石門聽云はく、「山河大地。」慈明云はく、「神會曾磨普寂碑。」法華舉云はく、「白菊乍開重日暖、百年公子不逢春。」蓮觀願云はく、「家裏已無三日信、路邊空有二三鄉。」道吾真云はく、「庵中閑打坐、白雲起二峯頂。」圓悟勤云はく、「山僧有眼不三曾見。」

「如何なるか是れ奪境不奪人。」穴云はく、「芻艸忽分頭腦裂、亂雲初綻影猶存。」首山云はく、「打了不三會曠、冤家難三解免。」石門云はく、「番人失二巖帳。」慈明云はく、「

【有眼】人を存せしめて境自る存す

【打】云云 上の句、前境を空す、奪境、下の句は人を存す、不奪人なり

【番人】邊夷人

【別】大盡三十日 小盡二十九

【大】云云 上句は奪境、下句は奪人、信は無算

【青】云云 着海青山は地なり

【上】云云 上の句は奪境、下の句は奪人

【信】信と漢正と信に、信を立てて齊王と爲す云

【張】張良、陳平、足を躡み王に語る云云、進取の義なり

【進】進んで左右

「須信、室中別有、天、法華云はく、「大地絶消息、條然、獨任眞、」邊觀云はく、「滄海、盡教、二枯、到底、青山、直得、碾、爲、塵、」道吾云はく、「閃爍、紅霞、散、天童、指、路、觀、」圓悟云はく、「闍梨、問得、自然、觀、」

「如何なるか是れ人境、兩俱奪、」次云はく、「躡、足、進、前、須、急、急、促、鞭、當、鞅、莫、進、」

首山云はく、「萬人作一塚、時、人、盡、帶、悲、」石門云はく、「有何、佛、祖、」慈明云はく、「實、中、天子、雲、外、將軍、」法華云はく、「輝、荒、人、變、色、凡、聖、兩、齊、空、」達觀云はく、「天地、尙、空、秦、日月、山河、不、見、漢、君、臣、」道吾云はく、「剛、骨、盡、隨、紅、影、波、」茗菴總逸ニ白雲、滑、「圓悟云はく、「收、」

「如何なるか是れ人境、兩俱不奪、」次云はく、「常、憶、江南、三、月、裡、鸚、鵡、啼、處、百、花、香、」

首山云はく、「問、處、分、明、答、處、觀、」石門云はく、「問、答、甚、分、明、慈、明、云、は、く、「明、月、清、風、任、往、來、」法華云はく、「清、風、與、明、月、野、老、笑、相、親、」達觀云はく、「鶯、啼、千、林、花、落、地、客、邊、三、月、神、侵、天、」道吾云はく、「久、旱、逢、初、雨、他、鄉、遇、舊、知、」圓悟云はく、「放、

奪人、不奪境、日月、自、流、遷、山、河、及、大、地、片、雨、過、巖、天、

奪境、不奪人、問、禪、何、處、觀、相、逢、不、紙、掛、曉、夜、渡、關、津、

人境、兩、俱、奪、聲、聲、擊、紅、樓、縱、橫、施、百、圍、誰、敢、立、當、頭、

翠巖、貢、和、尙、頌

奪人、不奪境、日月、自、流、遷、山、河、及、大、地、片、雨、過、巖、天、

奪境、不奪人、問、禪、何、處、觀、相、逢、不、紙、掛、曉、夜、渡、關、津、

人境、兩、俱、奪、聲、聲、擊、紅、樓、縱、橫、施、百、圍、誰、敢、立、當、頭、

翠巖、貢、和、尙、頌

奪人、不奪境、日月、自、流、遷、山、河、及、大、地、片、雨、過、巖、天、

奪境、不奪人、問、禪、何、處、觀、相、逢、不、紙、掛、曉、夜、渡、關、津、

人境、兩、俱、奪、聲、聲、擊、紅、樓、縱、橫、施、百、圍、誰、敢、立、當、頭、

翠巖、貢、和、尙、頌

奪人、不奪境、日月、自、流、遷、山、河、及、大、地、片、雨、過、巖、天、

奪境、不奪人、問、禪、何、處、觀、相、逢、不、紙、掛、曉、夜、渡、關、津、

人境、兩、俱、奪、聲、聲、擊、紅、樓、縱、橫、施、百、圍、誰、敢、立、當、頭、

翠巖、貢、和、尙、頌

奪人、不奪境、日月、自、流、遷、山、河、及、大、地、片、雨、過、巖、天、

奪境、不奪人、問、禪、何、處、觀、相、逢、不、紙、掛、曉、夜、渡、關、津、

に顧みざるなり。

【秦日月】世の趨勢これ兩俱奪なり

【苦苗】佛經祖錄

【常憶云云】常憶は人、百花は境、江南も境。

【問處】問處は客なり、境なり、答處は主なり、境なり、分明と親と。

【久旱云云】上句は境、下句は人。

【翠巖眞】慈明圓に副ぐ。

【片雨】村雨なり

【問禪云云】二の句奪境、三四の句は不奪人。

【聲鼓】介士の攻を謂ふ。門に到るなり。

【紅樓】富家の樓

【巨闢】闢の名。

【佛鑿鑿】五祖演に副ぐ。

【齊頭云云】この類は奪人不奪境。

【齊頭云云】奪境

【齊頭云云】奪境

【齊頭云云】奪境

【齊頭云云】奪境

【齊頭云云】奪境

【齊頭云云】奪境

【齊頭云云】奪境

【齊頭云云】奪境

【齊頭云云】奪境

人境俱不奪、閻浮轉幾遭、而南看北斗、爭得合伊曹。

佛鑿鑿題頌

明車

驚逢春暖一歌聲、人遇二時平一笑、險開、幾片落花隨水去、一聲長笛出雲

來。

堂、意氣走雷霆、霹靂威風掃二雷雲、將軍令下斬荆蠻、神劍一揮千里血

聖朝天子坐明堂、四海生靈盡安枕、風流年少倒金罍、滿院落花紅似錦。

千溪萬壑歸滄海、四海八蠻朝帝都、凡聖從來無二路、莫下將狂兒一逐多途。

三三句

師、因に僧問ふ、二何なるか是れ眞佛眞法眞道、乞ふ師開示。師云はく、佛は心清淨是なり、法は心光明是なり、道は處處無礙淨光是なり。三即ち一、皆是れ空名にして實有なし。眞正の作道人の如きんば、念念心間斷ぜず。達磨大師、西土従り來つて、祇是れ、個の人心を受けざる底の人を覓む。後に二祖に遇ふ。一言にして便ち了じて、始て從前虚く工夫を用ふることを知る。山僧が今日の見處、祖佛も別ならず。若し第一句の中に薦得すれば、祖佛の與に師と爲るに堪へたり。若し第二句の中に薦得すれば、人天の與に

【聖朝云云】 人境俱不奪。

【手溪云云】 總頌三句。一切の語言、悉く是れ三句なり。

【三要】 三大要。【印開】 明白の義。【朱】 南方の色にて火。

【空】 聖明に分ち易く、佛も同じし印文、分ち易きをいふ。

【印信】 那耶覺に關ぐ。【聖吒】 毘沙門の太子。會難近に喩ふ。

【雲峰庵】 大愚芝に關ぐ。【滄陽三世】 重手。三十二相の隨一。第一句の處、妙解は己心の所著。不思議の法。

【無和】 譯して方便。【流】 孤負の義。【崖州】 遠くして

師と爲るに堪へたり。若し第三句の中に薦得すれば、自救不了。【當便ち問ふ】 如何なるか。是れ第一句。師云はく、【三要印開して】 朱點窄し、未だ擬議を容れざるに主賓分る。

風穴云はく、【隨ノ聲 便 喝】 道吾云はく、【直下衝ニ雲際、東西絶ニ往來】 海印信云は

く、【那吒忿怒】 雲峰悅云はく、【垂手過膝】。

如何なるか。是れ第二句。師云はく、【妙解豈無著の間を容れんや、漚和争か】 洪流の波を負

はん。

風穴云はく、【未ノ問 已 前錯】 道吾云はく、【面前裏不見 背後稱ニ冤苦】 海印信云はく、

【衲僧 罔ノ措】 雲峯云はく、【萬里崖州】。

如何なるか。是れ第三句。師云はく、【擲頭に傀 儡を弄することを看よ、抽牽全く裏頭の人

に籍る。】

風穴云はく、【明眼 卽 不堪】 道吾云はく、【頭上一堆塵、脚下三尺土】 海印信云はく、

【西天此土】 雲峯云はく、【婆娑箕掃帚】。

慈明、衆に示して云はく、【先賓應和尙道はく】 第一句に薦得すれば、佛祖の奥に師と爲る

に堪へたり。第二句に薦得すれば、人天の奥に師と爲るに堪へたり。第三句に薦得すれば

自救不了。若し是れ道吾ならば、即ち然らず。第一句に薦得すれば和泥合水、第二句に薦

得すれば無繩自縛、第三句に薦得すれば四稜著地。所以に道ふ一起つときは海晏河清、行

人路を避く。坐するときは乾坤暗黒、日月光なし。汝等諸人、何れの處に氣を出さん。如

遠きに貶せし故事
【傀儡】 爲人體裁
【合籍】 本録に
都々來

【西天云云】 封疆
の確立

【養箕】 曲禮に出
づ。穢にして手が
付ぬ

【寶應】 南院願。

【和泥云云】 抑揚

【無體云云】 掃蕩

【四稜云云】 足實
地を踐むの漢
路を避く 禮儀
をする

【權云云】 權は須
彌を芥子に納れ、
大千を方外に抛つ
實は、上は天、下
は地。照は、沙界
に周く、用は棒喝
自由

【飲光】 迦葉の譯
語

【釋尊光云云】 楞
嚴の一に出づる故

【孤輪云云】 輪は
月輪、象は星象

【枯桑】 父母の郷

【漣漣】 涙流るる

今還つて氣を出す者あり麼。有らば即ち出で來つて衆に對して氣を出せ看ん。若し無くんば、道吾、今日汝と氣を出し去らん。乃ち嘘一聲、卓拄杖下坐。

石門聰云はく、『第一句に道ひ得ば、石裡に迸出す。第二句に道ひ得ば、挨拶し將ち來る。第三句に道ひ得ば、自救不了。』

三 玄 三要

師云はく、『大凡そ宗乘を演唱せんには、一句中に須らく三玄門を具すべし。一玄門に須らく三要を具すべし。權あり、實あり、照あり、用あり。汝等諸人作麼生か會す。』

汾陽照和尚、因に前話を擧して、乃ち云はく、『箇は是れ三玄三要底の句。時に俗あり問ふ、如何なるか是れ第一玄。汾陽曰はく、『親屬飲光。前。道吾眞云はく、釋尊光射阿難肩。』

如何なるか是れ第一玄。汾陽云はく、『絶相離三言。道吾云はく、『孤輪衆象擯。』

如何なるか是れ第三玄。汾陽云はく、『明鏡照無偏。道吾云はく、『泣向枯桑。淚漣漣。』

如何なるか是れ第一要。汾陽云はく、『言中無二巧。道吾云はく、『竅妙精輝照。』

如何なるか是れ第二要。汾陽云はく、『千聖入二玄。奥。道吾云はく、『閃電乾坤光。晃耀。』

如何なるか是れ第三要。汾陽云はく、『四句百非外。盡踏寒山道。道吾云はく、『路。』

【玄奧】室の西南主人の安息所。又深也。

【四句】有無一異等。

【白非】有非有等。

【寒山】その詩に可笑寒山道云云。又十年不得歸云云と。

【夾】左右に持する。

【映兆】機微事動を映。龜を灼くを兆。

【楚歌】楚の襄王と宋玉との問答、故事。

【第一句】赤羅萬象。

【第二句】釋す。

【落花】現成一段の景。この三四の句は、第二句を説く。

【第一要】第三節。

【第二句】第二句を承く。

【起倒】爲人の手

夾 青松老。

汾陽 頤并 總頤

第一玄、照用一時全、七星光燦爛、萬里絕二座煙。

第二玄、鉤錐利更尖、擬試穿肥過、裂面倚雙肩。

第三玄、妙用具方圓、隨機明二事理、萬法體中全。

第一要、根境俱亡絕二朕兆、山崩海竭酒醒、蕩盡寒灰始爲妙。

第二要、鉤錐察辨呈二巧妙、縱去奪來掣電機、透匣七星光晃耀。

第三要、不用二垂鉤并下鉤、臨機一曲楚歌聲、聞者盡教來返照。

三玄三要事盡分、得意忘言道易親、一句明明該萬象、重陽九日菊花新。

慈明頤并總頤

第一玄、三世諸佛擬二何宜、垂慈夢裏生二輕薄、端坐還成落二斷邊。

第二玄、靈利情僧眼未明、石火電光瞥是鈍、揚眉瞬目涉二關山。

第三玄、萬象森羅宇宙寬、雲散洞空山嶽靜、落花流水滿二長川。

第一要、豈話二聖賢妙、擬議涉二長途、擡頭七顛倒。

第二要、峯頂敲磬召、神通自在來、多開門外叫。

第三要、起倒令人笑、掌內握二乾坤、千邪都一照。

報二汝通女士、棒喝要臨時、若明二親的旨、半夜太陽輝。

段。

【空劫】成住壞空の中なり。

【竹菴珪】佛眼遠に嗣ぐ。

【天王】須彌山の四方なる四大天王

【卓】特立。

【大海】皆印文あり如來の見到比す【生跡】聲聞に比す。

竹菴珪頌

句中難透是三五、一句該通空劫前、臨濟命根元不斷、一條紅線手中牽。

四 喝

師、僧に謂うて云はく、「有時の一喝は、金剛王寶劍の如く、有時の一喝は、踞地獅子の如く、有時の一喝は、探竿影艸の如く、有時の一喝は、一喝の用を作さず。汝作麼生か會す。」僧擬議す。師便ち喝す。

首山峯に示して云はく、「老僧尋常汝に向つて道ふ、者裡の一喝は、一喝の用を作さず。有時は喝を以て問と作して行じ、有時は探竿影艸と作し、有時は踞地獅子と作し、有時は金剛王寶劍と作す。若し問と作して行じ來る時、須く急に眼を著けて見て始て得べし。若し探竿影艸と作す時、汝諸人合に作麼生。若し踞地獅子と作す時、野干須らく屎尿出でて始て得べし。若し金剛王寶劍と作して用ふる時、天王も也須らく腦裂すべし。只與麼に横喝堅喝、據に喚んで好道理の商量と作す。」

汾陽照頌

金剛寶劍、京威雄、一喝能摧萬仞峯、遍界乾坤皆失色、須彌倒卓半空中。
金毛踞地衆威存、一喝能令三喪膽魂、獄頂峯高人不到、猿啼白日又黃昏。
詞鋒探艸辨當人、一喝須知偽與眞、大海澄澄含萬象、休將牛跡比清深。

【善軌平】大菩薩
に嗣ぐ。慈明二世。

【檀林】檀檀林。
【襲襲】周匝なり

【碧眼黃頭】碧眼
は達磨。黃頭は釋
迦をいふ。

【波普】洪覺範、
眞淨文に嗣ぐ。

【滲漏】煩惱。

【或菴體】此菴元
に嗣ぐ。元圓悟に
嗣ぐ。

【探頭】名相言句
に束縛せらるるを
いふ。

一喝當陽勢自彰、諸方儘有二好商量、
智海普融平頌、
古往今來不變常。

一喝金剛劍用時、寒光燦燦射三坤、
維、語言擬議傷鋒、
雙、遍界觸體知不知。

一喝金毛輕躍地、檀林襲襲香風起、
雖三然瓜距不三會施、
萬里妖狐皆遠避。

一喝將爲三探竿、
南北東西無不到、
短長輕重定三錘、
平地茫茫須三業、
倒一喝不作三喝用、
三世古今無三別、
共落花三月睡初醒、
碧眼黃頭皆作夢。

寂音尊者頌

金剛寶劍、
觀露堂堂、
才涉三唇、
吻、
即犯三鋒、
鏗。

踏地獅子、
木無三葉、
白、
顧佇之間、
即成三滲、
漏。

探竿影艸、
莫不入三陰、
界、
一點不來、
賊身自敗。

有時一喝、
不作三喝用、
佛法大有、
只是牙痛。

或菴體和尙、
因に僧四喝を問ふ、
語下各下一喝。

賓主句

師、
一日上堂、
僧あり出でて禮拜す、
師便ち喝す、
僧云はく、「
老和尚探頭すること莫く
ば好し、
師云はく、「
備道へ甚麼の處にか落在す、
僧便ち喝す、
師便ち打つ、
又僧あつて問
ふ、「
如何なるか是れ佛法の大意、
師便ち喝す、
僧禮拜す、
師云はく、「
汝道へ好喝なりや也

【草賊大敗】 小盜が人罪をはやし立つ。
【賓主】 柳緑花紅

【首座】 上座。

【啐啄】 師家と學人。

【普化】 盤山積に嗣ぐ。街市に於て鈴を搖して、明頭來云云。

【參學の人云云】 この語の象王に乗るまで、總じて賓主相見を説く。下は別して四賓主相見を説く。
【膠盆】 不潔底の物。言語機境に比す。一喝じや、何のかのと。

無や。前云はく、「師賊大敗」師云はく、「過什麼の處にか在る。」僧云はく、「再犯容さす。」師便ち喝す。是日兩堂首座相見同時に喝と下す。僧、師に問ふ、「還つて賓主ありや也無や。」師云はく、「賓主歴然。」乃ち云はく、「大衆、臨濟が賓主の句を會せんと要せば、堂中の二首座に問取せよ。」

慈明頌、兩堂首座齊しく喝と下す。

啐啄之機箭拄鋒、瞥然賓主當時分、宗師慈利物明ニ緇素、北地黃河徹底渾。

竹菴頌

作家相見終不レ錯、兩兩同時看二啐啄、喝下雖ニ然賓主分、爭如普化搖二鈴鐸。

四賓主

師、一日衆に示して云はく、「參學の人、大に須らく子細にすべし。賓主相見の如きんば、便ち言論往來あり。或は物に應じて形を現じ、或は全體作用し、或は機權を把つて喜怒し或は半身を現じ、或は獅子に乗り、或は象王に乗る。眞正の學人あるが如きんば、便ち喝して、先づ一箇の膠盆子を拈出す。善知識、是れ境なることを辨ぜず。便ち他の境の上に上つて、機を作し様を作す。學人又便ち喝す。前人肯て放下せず。此は是れ膏肓の病、醫治するに堪へず。喚んで賓主を看ると作す。或は是れ善知識、物を拈出せず。學人の問處に隨つて即ち奪ふ。學人奪はれて死に抵るまで放下せず。此は是れ主賓を看る。或は學人

あつて、一箇清淨の境に應じて、善知識の前に出づ。善知識、是れ境なることを辨得して、把得して坑裡に抛向す。學人言はく、「大好善知識」と。即ち云はく、「唯哉好惡を識らず」學人便ち禮拜す。此を喚んで主主を看ると作す。或は學人あつて、衣を披し領を帯びて、善知識の前に出づ。善知識、是に與に一重の鉢鎖を安ず。學人懷喜して、衣非辨せず、喚んで賓賓を看ると作す。大徳、山僧が擧す所、皆是れ魔を辨じ具を挿んで、其邪正を知らしむ。」

賓主問答

僧問ふ、「如何なるか是れ賓中の賓。」

克符云はく、「倚門倚戸猶如醉、出言吐氣不慚惶。」風穴云はく、「攢眉坐白雲。」汾陽云はく、「終日走紅塵、不知自家珍。」又云はく、「合掌卷前問世尊。」石門云はく、「禮拜甚分明。」慈明云はく、「禮拜更慇懃。」瑯琊覺云はく、「手攜書劍謁明君。」寶鑑云はく、「滿面是埃塵。」又云はく、「噫。」

「如何なるか是れ賓中の主。」

克符云はく、「口念彌陀一雙拄杖、目瞽瞍人不ニ出頭。」風穴云はく、「入市雙瞳替。」汾陽云はく、「識ニ得衣中寶、端坐解ニ區分。」又云はく、「對面無ニ傍侶。」石門云はく、「對面無ニ回。」慈明云はく、「拄杖常在手。」瑯琊云はく、「捲起珠簾無可觀。」雪竇云はく、「兆分。」其五、「又云はく、「引。」

- 【攢眉】思慮分別して大事を悟らぬ
- 【賓顯】智門書に附ぐ。雲心派。
- 【噫】恨聲心不平
- 【入市】人の爲に赴く。
- 【衣中寶】法華に長者窮子の故事出づ。
- 【區分】價直形色主なり。
- 【引】木火土金水方語に自利

何他。

【帶悲】本分から見る。

【祖印】師家の印可。

【廻鑿】廻は廻旋鑿は軌に在るをいふ。鈴なり。

【雨曝】日月。

【玉燭】四時の和龍門 主中賓の用。

【重輪】月暈。

【收】把定の機用高提云云 徳光人を照す。

【三頭云云】阿脩羅の相、大千世界一つにして、主の機用をいふ。

【搦】方語に王令鎮ニ宇宙と。高擧なり。

【控聚】一ひねりに嗣ぐ。

【浮山遠】葉縣省に嗣ぐ。

【無筋】貧賤の相。

【廣大】八萬人天中。

『如何なるか是れ主中の賓。』

克符云はく、『高提ニ祖印ニ當レ機用、利物須レ知語帶レ悲。』風穴云はく、『廻鑿兩曜ニ新。』汾陽云はく、『金鉤ニ抛ニ四海、玉燭續ニ燈明。』又云はく、『陳雲横ニ海上、拔レ劍攬ニ龍門。』石門云はく、『往復問ニ前程。』慈明云はく、『拄杖撥ニ乾坤。』瑯琊云はく、『三更過ニ孟津。』雪竇云はく、『月帶ニ重輪。』又云はく、『收。』

『如何なるか是れ主中の主。』

克符云はく、『横按ニ鏡鉦ニ至ニ正令、太平寰宇斬ニ癡頑。』僧云はく、『既に是れ太平の寰宇什麼としてか、却つて癡頑を斬る。』克符云はく、『不許夜行剛把レ火、却須ニ當レ道與レ人看。』

風穴云はく、『磨ニ礪ニ三尺劍、待レ斬ニ不平人。』汾陽云はく、『高提ニ日月ニ光ニ寰宇、大闢ニ洪音ニ楚歌。』又云はく、『三頭六臂擊ニ天地、忿怒那吒撲ニ帝鐘。』石門云はく、『萬里絶ニ同侶。』慈明云はく、『劍握ニ飯人手。』瑯琊云はく、『獨坐鎮ニ寰宇。』雪竇云はく、『大千控聚。』又云はく、『搦。』

浮山遠頌

賓中賓、雙目不展眼無筋、他方役投ニ知已、失ニ却衣中無價珍。

賓中主、盡力追尋無所處、昔年猶自見ニ此、誰知今日雙瞳瞽。

主中賓、我家廣大實難論、所求不悞無ニ高下、貴賤同途一路平。

【七寶】 金輪王其
他有靈の十善を修
せし王の所持する
所。

【千子】 金輪王、
千子あり。

【飛輪擧】 東西南
北、自由自在に往
く。

【騎牛云云】 第三
句の意。

【西秦】 賓主相去
る。

【寒山云云】 二人
俱に、主を辭して
賓に在り。

【乙卯寅】 あかぬ
らちもないといふ
こと。

【當眞】 默坐無事
底。

【玄沙】 僧云はく
和尚の虎。師云は
く、汝が虎。

【温故云云】 故は
舊、新は今。

【滿預云云】 甚の
長處ぞ、分と不分
と俱に建化門中の
事なり。

【華嚴教】 浮山遠
に嗣ぐ。

主中主、七寶無虧金殿宇、千子常圍繞聖顏、諸天不順飛輪擧。

翠巖眞頌

賓中賓、出語不三相因、未諦審思難、騎牛過五津。

賓中主、相牽日卓午、展拓自無能、且歷他門戶。

主中賓、南越望西秦、寒山逢二拾得、擬議乙卯寅。

主中主、當頭坐須情、萬里涉流沙、誰云佛與祖。

雪竇頌 并總頌

賓中之賓、少喜多瞋、丈夫壯志、當付何人。

賓中之主、玄沙猛虎、半合半開、唯自相許。

主中之賓、温故知新、互換相照、獅子嘯呻。

主中之主、正令齊舉、長劍倚天、誰敢當禦。

賓主分不分、瞞預絕二異聞、解布二勞生手、寄言來白雲。

華嚴教賓主問答

僧問ふ、如何なるか是れ賓中賓。云はく、客路如天遠。如何なるか是れ賓中主。

云はく、侯門似海深。如何なるか是れ主中主。云はく、賓中天子勅。如何なる

か是れ主中賓。云はく、塞外將軍令。

乃ち云はく、賓中に主を問ふことは互換の機鋒。主中に賓を問ふことは同生同死。主中

【撰眉】賓主互換の外に立つほどにと、遠法師と淵明が精。

【四照用】本録には載せず。會元には載す。

【捺】排弄物を取る。【些子に較れり】十分にではないと抑す。

に主を辨ず、氣を飲み聲を呑み、賓中に賓を覓むることは白雲萬里。故に句中に意無し、意句中に在り。斯に於て明らめ得ば、一雙孤雁撲地高飛。斯に於て明らめずんば、一對鴛鴦池邊獨立。知音の禪客は相共に證明せん、影嚮の異流は切に須らく子細にすべし。良久して云はく、「若是陶淵明撰眉便歸去」

四 照 用

師、一日衆に示して云はく、「我有時は先照後用、有時は先用後照、有時は照用同時、有時は照用不同時。先照後用は、人の在る有り。先用後照は、法の在る有り。照用同時は、耕夫の牛を馱り、飢人の食を奪ひ、骨を敲き髓を取り痛く針錐を下す。照用不同時は、問有り答有り主を立し賓を立す。合水和泥、塵機接物。若し是れ過量の人ならば、未だ擧せざる已前に向つて、捺起して便ち行かん。猶些子に較れり。時に僧有りて出でて佛法の大意を問ふ。師云はく、「汝試に道へ看ん。僧便ち喝す。師亦喝す。僧又喝す。師便ち打つ。此は是れ先照後用なり。僧又問ふ、「如何なるか。師云はく、「佛法の大意。師便ち喝す。復云はく、「汝道へ好喝なり麼。僧便ち喝す。師又喝す。僧又喝す。師便ち打つ。此は是れ先用後照なり。僧門に入る。師便ち喝す。僧又喝す。師便ち打つて云はく、「好打。只先鋒のみありて且つ殿後なし。此は是れ照用同時なり。僧ありて來り參す。師便ち喝す。僧又喝す。師又喝す。僧又喝す。師便ち打つて云はく、「好打。伊が主と作つて到頭ならざるが爲に、轉た用處な

【臆描】 見解をいふ。
【失利】 敗鬪に同じ。商人が利をななくす。

【投針】 迦那提婆の龍樹に説する故事。
【佛陀遷】 黄龍南に嗣ぐ。
【黄龍斬】 晦堂心に嗣ぐ。
【五祖演】 白雲端に嗣ぐ。
【王言】 禮記縮衣に云ふ、絲と綸と。

きを見る。主家復奪ふ。此は是れ照用不同時なり。千人萬人此に到つて皆手を出すこと得ず。直に須らく急に眼を著けて始めて得べし。小事に同じきに非ず。

古徳云はく、「主一喝して賓を驗み、賓一喝して主を驗み、主再喝して賓を驗み、賓再喝して主を驗む。四喝の後賓主なし。者裡に到つて、主家便ち奪却して更に他を容さず。」

慈明案に示して云はく、「有時は先照後用。有時は先用後照。有時は照用同時、有時は照用不同時。所以に道ふ、明あり暗あり起あり倒あり。一喝一喝して云はく、「且く道へ是れ照か是れ用か。還つて人の縮素し得出する底あり處。若し有らば試に請ふ出で來つて臆描を呈せよ看ん。若し無くんば、道吾今日失利。」

照用問答

問ふ、「如何なるか是れ先照後用。」

首山云はく、「南嶽巖頭云、太行山下賊、道吾震云はく、「語路分明説、投針不回避。」佛陀遙云はく、「紅旗耀日催征騎、駭馬嘶風捲陣雲。」黄龍斬云はく、「清風拂明月。」

五祖演云はく、「王言如絲。」先照如何なるか是れ先用後照。」

首山云はく、「太行山下賊、南嶽巖頭云、道吾云はく、「金剛親面親分付。」用語道分明好。陳照佛陀云はく、「斬得匈奴首、還歸細柳營。」黄龍云はく、「明月掃清風。」

五祖云はく、「其出如綸。」先用

【太公】呂望。
【子夏】孔子の徒。
【軒轅云云】黄帝
と蚩尤との故事。
史記に出づ。

【瑯琊覺】汾陽昭
に嗣ぐ。
【紀信云云】楚が
漢王を急に圍むの
故事。
【項羽云云】項羽
が四面楚に驚くと
きの故事。

「如何なるか是れ照用同時。」

首山云はく、「收_二下南嶽嶺頭_一雲、捉_二得太行山下賊_一」道吾云はく、「祖佛道中行_二異路_一、森
羅影裏不_レ留身。」佛陀云はく、「太公招_レ手、子夏揚_レ眉。」黃龍云はく、「明月掃_二清風_一。」五
祖云はく、「舉_二起軒轅鏡_一、蚩尤頓失_レ威。」

「如何なるか是れ照用不同時。」

首山云はく、「昨日有_レ雨今日晴。」道吾云はく、「清涼金色光先照、峨眉銀界一時鋪。」佛
陀云はく、「午後打_二齋鐘_一。」黃龍云はく、「非_二清風_一而無_二明月_一。」五祖云はく、「金以_レ火
試_二。」

汾陽云はく、「凡そ一句語に、須らく三玄門を具すべし。一玄門毎に、須らく三要を具すべ
し。玄あり要あり、照あり用あり。或は先照後用、或は先用後照、或は照用同時、或は照
用不同時。先照後用は且つ汝と共に商量せんことを要す。先用後照は汝也。須らく是れ
箇の人に於て始めて得べし。照用同時汝作麼生か當抵せん。照用不同時汝作麼生か湊泊せ
ん。」

瑯琊覺云はく、「先照後用、獅子の爪牙を露す。先用後照、象王の威猛を縦にす。照用同
時、龍の水を得て雨を致し雲を騰るが如し。照用不同時、嬌兒を提獎し愛子を撫憐す。此
れ古徳建立の法門なり。是の如くなるべしとや爲ん、是の如くなるべからずとや爲ん。紀
信が九龍の輩に乗るに似たり。是の如くなるべからずんば、項羽が千里の驢を失するが若

し。還つて人の瑯琊が爲に氣を出すありや也無や。如し無くんば山僧自ら道ひ去らん。草
拄杖下座。』

石門頌 井總頌

【蘇秦】蘇秦が寧ろ雞口と爲るとも牛後と爲ること無れ云云。

【陣】風后が八陣と、孔明が八陣とあり。

照時把ニ斷乾 坤路、驗ニ破賢愚ニ喪ニ膽魂、饒君解レ帶ニ蘇秦 印一也須ニ歸欵 候ニ天
恩一、
用便生擒、到ニ命終一、卻令ニ蘇息盡ニ殘軀一歸欵已彰 天下報、放ニ汝殘身一解
也無。

照用同時棒下玄、不容ニ擬議一聘ニ愚賢、輪レ劍直衝ニ龍虎陣、馬喪人亡血滿レ田
照用不同時、人人會者稀、秋空 黃葉墜、春盡落花飛。
一喝分ニ賓主、照用一時行、會ニ得個中意、日午打ニ三更一頌總

興化驗人 唾、四

莫ニ熱椀 鳴聲一 機語

椀脱曲 無總

當面唾 鬼

背後唾 語

不似 記得語一 不作語一

椀脱丘 無底

椀 向上明

望空唾 結魂

直下唾 連滅

恰似 不レ見ニ前 後一語

瞎漢 定在前
人分上

不_レ見_二話_一
之來處

【佛眼遠】 五祖演
に嗣ぐ。

汾陽十智同真 佛眼遠
著語

汾陽業に示して云はく、『夫説法者滿口嚼_二須_レ具_一二十智同真_二若_レ不_レ具_一二十智同真_二邪_一正不_レ辨、縑素不_レ分、焦磚打著_二連底凍_一、不_レ能_レ爲_二三人天眼目_一、而皮決_レ斷、是_二非_一萬人傳_レ實如_二鳥飛_一空而折_レ翼前底、如_二弓箭射_一的、斷_レ弦消_二一窟_一、弦斷故射_レ不_レ中_二的_一、我_レ要_二那射_一、翼折故空、不_レ能_レ飛通妙用、弦_二壯_一、翼_二牢_一、救_二近火_一、空_二的_一俱徹_レ水消、作_レ麼生_二是_一十智同真_二頭起_一、諸上座が與に點出せん。一には同一質、二には同大事、三には總同參、四には同眞智、五

【作磨生云云】 是
まては先づ總題を
擧ぐ。

【點出】 下は別日

【同得入】 一拶し
て、翻つて十より
一に翻る。又云は
くと。

には同徧普、六には同具足、七には同得失、八には同生殺、九には同音吼、十には同得入。』又云はく、『甚麼人と與にか同得入、阿誰と與にか同音吼、作麼生か是れ同生殺、甚麼物か同得失、阿那箇か同具足、是れ什麼ぞ同徧普、何人か同眞智、孰か能く總同參、那個か同大事、何物か同一質。點得出する底あること莫し麼、點得出する底ならば慈悲を悟ます。點不出底ならば未だ參學の眼あらざること莫し麼。切に須らく辨取すべし。是非を識らんと要せば、面目現在せり。』

寂音云はく、『今此法門、叢林怕怖して、其名を聞かんことを欲せず。何を以てか之を言ふ。諸方但平實の見解を愛して、之を執して移らず。唯傳授せんと欲して、悟あることを信ぜず。假使汾陽復生して、親しく爲に剖拆すとも亦以て非と爲ん。昔し阿難、夜經行して、

【阿難】 この語は
正宗記阿難の傳と
毘奈耶雜事に出づ

人天 眼 目 卷之上

童子どうじの佛ぶつ偈ぎを誦かするを聞く。曰いはく、「若も人生じんじやう百ひやく歳さい、不ず善ぜん水すい潦らう鶴かく、未な若じやく生せい一いつ日にち、而しか得え決けつニ了りやう之の」阿あ難なん就じゆて之のに教をへて曰いはく、「諸しよ佛ぶつの機きを善よくくせざるなり、水すい潦らう鶴かくには非あず」童子どうじ歸かへつて其その師しに自ます、師し咲わらつて曰いはく、「阿あ難なん老らう昏こんせり、當まに我われ語ごを以もつて是こゝと爲なすべし」と、今いまの學がく者しやの前まへに於おて、三さん玄げん十じゆ智ちの旨しよ趣しゆを語かたらば、何なにを以もつてか此こゝに異ことならん。」

十智同真問答

『如何なるか是れ十智同真。』

松源岳云はく、『提水放火。』

『如何なるか是れ一同一質。』

古德云はく、『綿州附子漢州蕤。』鬼窟裡頭出頭沒、總不出窠。『賊不打貧兒家、』

山向二嶽邊一止、水流二海上消。』

松源云はく、『裂破。』

『如何なるか是れ一同大事。』

古德云はく、『火官頭上風車子。』兩肩擔不起、不直半文錢。『燈籠入二露柱、小賣弄。』

松源云はく、『一毛頭上定乾坤。』

『如何なるか是れ三、總同參。』

古德云はく、『萬象森羅齊稽首。』莫怪不二相識、呼神喚鬼。『倚欄惆悵。』

【火官】 火神を安ずる。
【風車】 烟突なり

【如何なるか是れ】 總題を問ひ、松源答語の一を載す。
【松源岳】 密菴傑に屬く。
【一同一質】 別目

江南一 胡人持一咒口喃喃。」

松源云はく、「蝦蟇蚯蚓。」

「如何なるか是れ四、同眞智。」

古徳云はく、「鬼家活計。」彼此不著便、認著依然還不是。」毛吞巨海一芥納須彌、波斯鼻孔長。」

松源云はく、「一不成二不是。」

「如何なるか是れ五、同漏卮。」

古徳云はく、「石頭土塊。」是什麼境界、魚行水濁。」狸奴白牯放毫光一笑他禾山解打鼓。」

【禾山云云】碧巖第四十四則に出づ

松源云はく、「大地撮來無一寸土。」

「如何なるか是れ六、同具足。」

古徳云はく、「乞兒羅易滿。」等閑吹入胡笳曲。」寒時終不熱、上坐更欠二個什麼。」

「獅子嘯呻象王踞踏。」

【胡笳】笳は笛の類。胡人之を吹く。李陵が蘇武に答ふる書にあり。

松源云はく、「欠二一 一首。」

「如何なるか是れ七、同得失。」

古徳云はく、「披毛戴角啣鐵負鞍。」囊裡不走走鼈、牛頭沒馬頭回。」不落二明暗一作

寔生道、賣扇老婆手遮口。」

松源云はく、『入泥入水。』

『如何なるかはれ八、同生殺。』

古徳云はく、『放汝命通汝氣。』『迅雷不及掩耳、禍不單行。』『眉間寶劍、袖裏

金鐘、灌漑稻水車鳴、憂憂。』

松源云はく、『自救不了。』

『如何なるかはれ九、同音吼。』

古徳云はく、『驢鳴犬吠、昏圓通。』『徒勞側耳、好語不出門。』『風吹石白、念

摩訶。』

松源云はく、『八角磨盤空裏走。』

『如何なるかはれ十、同得入。』

古徳云はく、『山門騎佛殿。』『耐重打金剛、弓折箭盡也。未。』『含光殿裏問長安、胡

餅呻汁。』

松源云はく、『且居二門外。』

『什麼人と與にか同得入する。』

古徳云はく、『鬼争ニ漆桶。』松源云はく、『胡張ニ黑李四。』

『阿誰と與にか同音吼する。』

古徳云はく、『木人雖不語、石女引回頭。』松源云はく、『狸奴白牯。』

【八角云云】磨盤は石白、情議の分別を絶し、宛轉自在の妙用。
【耐重】須彌座下の烏龜子の類、鬼形。
【金剛】樓至徳なり。
【什麼人と與にか】示衆の又云以下を擧げて、問うて十より一に至る。

「作麼生か同生殺。」

古徳云はく、「此間無ニ老僧。松源云はく、「徳山棒臨濟喝。」

「什麼物か同得失。」

古徳云はく、「目前無ニ閻梨。松源云はく、「艸裏輶。」

「阿那個か同具足。」

古徳云はく、「矮子看戲。松源云はく、「信手拈來著著親。」

「是れ什麼ぞ同徧普。」

古徳云はく、「且緩緩卜度。松源云はく、「針鋒影裏騎大驪。」

「何人か同眞智。」

古徳云はく、「相識滿天下、知心能幾人。松源云はく、「黑山鬼窟裡。」

「誰か能く總同參。」

古徳云はく、「識得木上座也末。松源云はく、「燈籠露柱。」

「那個か同大事。」

古徳云はく、「穿ニ過個骸。松源云はく、「嘉州大像陝府鐵牛。」

「何物か同一質。」

古徳云はく、「桑樹猪措背、長江鴨洗頭。松源云はく、「當ニ甚椀脫丘。」

古徳十頌并總頌

【嘉州大像】唐の海通、三十六丈の舞勒の石像を造る【鐵牛】頭尾は河南河北に跨る。【桑樹云云】桑樹の猪背と、長江の鴨と同色で邪解に喩ふる。同一質の【椀脫丘】無用の長物。

【昆嶽】大風の名。

【海門】善財第二參。

【今日】十世古今

【李八伯】伯、或百に作る。八百歳の仙人。

【竹菴珠】佛眼遠に嗣ぐ。

是何物兮同一貫、鸞象之中無ニ等匹、休將ニ心識ニ設參尋、昆嶽狂風吹、海立。

那箇與、吾同大事、者裡敢言他與、自、一身堅密現、諸塵、寂滅光中無ニ漸次。

孰能、與我總同參、知源徒勞五十三、樓閣門前意何限、故鄉猶在、海門南。

何人同、此一、眞智、見得分明還不是、山自高兮海自深、一理齊平不ニ容易。

是什麼物同徧普、廣大劫來今日視、一波纔動萬波隨、何似嬰兒得、慈母。

阿那箇是同具足、細柳、合煙、滿山、綠、他鄉看似、故鄉看、添得籬、恨華、繞屋。

甚靈物兮同得失、圓明、如鏡、皎、如日、三箇胡孫夜、鏡、天明走、盡空。

作塵生兮同生殺、桃、花、紅兮李、花、白、今年吞却大、還丹、到處相逢李、八伯。

與誰說法同音吼、飲、食、語、言、皆、用、口、燕語鶯啼、迥不同、芳、樹、彫、彫、乘、却、知、有。

與甚靈人一同得入、田、夫、耕、鋤、女、織、織、冷、眼、看、他、家、事、忙、問、渠、且、道、承、誰、力。

山來十智本同眞、語、直、心、精、妙、入、神、長、憶、江、南、三、月、裡、春、風、微、動、水、生、鱗、頰。

十智同眞面、日、全、於、中、一、智、是、根、源、如、今、要、見、見、汾、陽、老、驛、破、三、玄、二、作、兩、邊。

兔角龜毛、眼裡栽、鐵、山、當、面、勢、崔、嵬、東、西、南、北、無、一、門、入、曠、劫、無、明、當、下、灰。

大 慧

竹 菴

【或菴】此菴元に
【藻鑑】圓悟三世。
【和風】菱華鏡。
【和風】收不得なり。

【東林總】黃龍南
に嗣ぐ。
【東山空】草堂清
に嗣ぐ。

【糲糲】眞黒くの
意。
【正令】喫茶喫飯
【來去】頻頻の意
【北俱盧云云】北
鬱單越には、自然
の粳米あり、天味
を具ふと。
【白馬寺】後漢孝
明帝永平七年、騰
蘭の二師支那に至
り、白馬寺に館せ
しむ。
【赤烏年】赤烏四
年、康僧會至る。

十年海上覓ヒ冤讎、不レ得レ冤讎、不ニ肯休、芍藥花開菩薩面、櫻欄葉散夜叉頭

陽春白雪人難レ和、藻鑑冰壺豈易レ觀、一把柳絲收不得、和風搭在玉欄干。

汾明四句

僧問ふ、如何なるか是れ初機を接する句。師云はく、汝ハ是行脚僧。

慈明云はく、『一刀兩段』東林總云はく、『無底鉢盂光炬燵。』東山空云はく、『金剛杵打ニ鐵山一摧。』

如何なるか是れ衲僧を驗むる句。師云はく、『西方日出レ卯。』

慈明云はく、『寒山拾得』東林云はく、『天台柳一標レ黒糲。』東山云はく、『嶽陽船子洞底波。』

如何なるか是れ正令行する時の句。師云はく、『千里持レ來呈レ舊面。』

慈明云はく、『來ニ去一萬。』東林云はく、『戴レ盆一履三千里。』東山云はく、『夜叉屈膝眼晴黒。』

如何なるか是れ乾坤を定むるの句。師云はく、『北俱盧洲長粳米、食者無レ貪亦無レ瞋。』

慈明云はく、『天一高一海一濶。』東林云はく、『人間天一上一般一春。』東山云はく、『經一來一白馬寺、僧一到一赤烏年。』

師復云はく、『此四句の語を將て、天下の衲僧を驗む。』大愚芝云はく、『子細に思量すれば

【大愚芝】 汾陽昭
に綱ぐ。
【父の道】 論語學
前篇に出づ。

【鹵莽】 無分曉の
義。

【濟水】 百濟。
は邠州に出づと。

此四句を將て、天下の衲僧に勘破せらる。大慧云はく、「諸人大愚を識らんと要すや、三年父の道を改むることなきを、謂つべし孝なりと。」

三種獅子

浮山圓鑑、衆に示して云はく、「汾陽に獅子の句あり。其れ獅子に三種あり、一には超宗異目、二に齊眉共躡、三には影響音聞。若し超宗異目は、見師に過ぎて、方に種種と爲る。若し齊眉共躡は、師の半徳を減ず。傳受するに堪へず。若し影響音聞は、狐狼猥執異類何ぞ分たん。所以に先聖付囑して云はく、若し相見に當らば、切に須らく子細に窮勘すべし、鹵莽なることを得され、恐らくは後人を誤つて、方に印可せん。」

汾陽三訣

汾陽、衆に示して云はく、「汾陽に三訣あり。衲僧辨別し難し。更に如何と問はんと擬せば、拄杖蕙頭に楔たん。時に僧あり問ふ、「如何なるか是れ三訣。」師便ち打つ、僧禮拜す。

師云はく、「汝が爲に一時に窺出せん。」

第一訣、接引無時節、巧語不能詮、雲綻青大月。

第二訣、舒光辨賢哲、問答利生心、拔卻眼中楔。

第三訣、西國胡人説、濟水過新羅、北地用銀鐵。

【法昌遇】北禪賢
に嗣ぐ。雲門五世。

【兩人】不立文字

【東山簡】不詳。

【安住京】不詳。

慈じ明みやう頌じゆ

第一訣、大地山河泄、維摩才點頭、文珠便饒舌。

第二訣、展拓見二時節、語默豈相于、夜半秋天月。

第三訣、遠路難二登涉、陸地弄二舟船、眼中藏二日月。

法昌遇頌

第一訣、袖裡三斤鐵、忽遇二病維摩、拈起二驀頭楔。

第二訣、六月漫天雪、無處二避二炎蒸、渾身冷二於鐵。

第三訣、八字無二兩人、胡僧笑點頭、眼中重著二眉。

東山簡頌

第一訣、眞卓絕、手把二黃金鏈、敲二落天邊月。

第二訣、難二辨別、琉璃枕上凹、瑪瑙盤中凸。

第三訣、最超絕、花木四時春、庭臺千古月。

安住京頌

第一訣、針頭削鐵、穿耳胡人、當門齒缺。

第二訣、殺レ人見血、嗔子忍痛、無レ處二分。

第三訣、陽春白雪、水底桃花、山頭明月。

古德問答

『如何なるか是れ第一訣。』古徳云はく、『珊瑚枝枝挿ニ著月。』

『如何なるか是れ第二訣。』古徳云はく、『萬里一條鐵。』

『如何なるか是れ第三訣。』古徳云はく、『百州頭邊 俱漏泄。』

汾陽三句

師上堂、僧問ふ、『如何なるか是れ學人著力の處。』師云はく、『嘉州打ニ大像。』

『如何なるか是れ學人轉身の處。』師云はく、『陝府灌ニ鐵牛。』

『如何なるか是れ親切の處。』師云はく、『西河弄ニ獅子。』

師云はく、『若し人此三句を會得せば、已に三玄を辨ぜん。更に三要の語の在るあり。切に

須らく薦取すべし。』

翠巖眞答三句

僧問ふ、『如何なるか是れ著力の句。』師云はく、『千日斫柴一日燒。』

『如何なるか是れ學人轉身の句。』師云はく、『一堵牆百堵講。』

『如何なるか是れ學人親切の句。』師云はく、『渾家送上渡頭船。』

汾陽十八問

師云はく、『大意は實問默問の辨じ難きを除いて、來意を識らんことを要す。餘は總に時

【著力】 因地一下
【嘉州】 直示。
【轉身】 正中來に
【陝府】 直示。
【親切】 潛行密用
【西河云云】 方語
【汾陽】 方語
【一堵云云】 千里
【人行は一步よりす

【請益】一事了つて又問ふ。

【龍牙遁】洞山价に嗣ぐ。

【投機】學者の證悟と師家の證得と

【編僻】當に編辟に作るべし。僻は迫。

節あり、言説の淺深、相度つて祇對せよ。妄に穿鑿を生ずることを得ざれ。彼此利益なし、是れ善因なりと雖も、恐らくは惡果を招かん。切に須らく子細にすべし。凡そ參學偏僻の言問あり、或は蓋覆し將ち來つて、主家の眼目を辨じ、或は知見を呈す。頭を擧げ角を戴く、一一之を識つて、盡く皆打得す。只當面に識破するが爲に、或は貶或は剝、鑿の臺に臨むに似たり。是れ何の精魅か現すべき。何が故ぞ。狐狸本形を隠し難き者なり。』

請益 問

僧、馬祖に問ふ、如何なるか是れ佛。祖云はく、『即心即佛。趙州曰はく、『殿裏底。』

呈解 問

僧、龍牙に問ふ、天も蓋ふこと能はず、地も載すること能はざる時如何。牙云はく、『是の如くなる合し。』

察辨 問

僧、臨濟に問ふ、學人一間あり。卻つて和尚の處に在る時如何。濟云はく、『速に道へ速に道へ。』僧擬議す。濟便ち打つ。

投機 問

僧、天皇に問ふ、疑情未だ息まざる時如何。皇云はく、『一を守るも眞に非ず。』

偏僻 問

僧、芭蕉に問ふ、盡大地是れ個の眼睛。乞ふ師指示せよ。蕉云はく、『貧人餓飯に遇ふ。』

心行問

僧、興化に問ふ、「學人自未だ分たず、乞ふ師方便。」化轉に隨つて便ち打つ。

探拏問

僧、風穴に問ふ、「不會底の人、什麼としてか疑はざる。」穴云はく、「靈龜陸地に行く、争か泥蹤を曳くことを免れん。」

置問

僧、雲門に問ふ、「昨日邊際を見ざる時如何。」門云はく、「鑿。」

故問

僧、首山に問ふ、「一切衆生皆佛性あり、甚麼としてか識とざる。」山云はく、「識。」

不會問

僧、玄沙に問ふ、「學人乍ち叢林に入る。乞ふ師、個の入路を指示せよ。」沙云はく、「還つて偈海の水聲を聞くを否や。」僧云はく、「聞。」沙云はく、「這裡從り入れ。」

拏問

僧、老宿に問ふ、「世智殊聰拈出することを要せず、我に話頭を還し來れ。」僧、棒を拈して便ち打つ。

借事問

僧、風穴に問ふ、「大海に珠あり。如何が取り得ん。」穴云はく、「回象到る時光燦爛、離婁行

【雲門眞】 雪峰存に嗣ぐ。
【鑿】 どこもかもみたの意。

【玄沙眞】 雪峰存に嗣ぐ。

【拏】 頭を拏け角を擧ぐ勢に懸けて。

【借】 故事を借るなり。

く處演滔天」

實問問

僧、三聖に問ふ、「學人只和尚は是れ僧なることを見る。如何が是れ法。聖云はく、是れ佛是れ法、汝之を知る乎。」

假問問

僧、徑山に問ふ、「者個は是れ殿裡底、那箇か是れ佛。山云はく、者裡は是れ殿裡底。」

默問問

外道、佛の處に到つて、無言にして立つ。佛云はく、「甚だ多し。」

明問問

【外道云云】この明問は碧巖第六十五則に出づ。

外道、佛に問ふ、「有言を問はず、無言を問はず。世尊良久。外道讚歎して云はく、世尊大慈大悲、我迷雲を聞いて我をして得人せしむ。」

密問問

僧、老宿に問ふ、「一切諸法、本來是れ有、如何が是れ無。師云はく、汝が問甚だ分明、何ぞ更に吾に問ふことを勞せん。」

徵問問

僧、睦州に問ふ、「祖師西來、當に何事をか爲すべき。州云はく、佛道へ何事をか爲す。僧無語。州使ち打つ。」

【睦州陳】黃檗選に謝く。

【九帶集】 百卷ありと云ふ。此篇は唯總綱總序別日別序末後説話を撮す。

【佛】 兼帶なり。

【佛正法眼藏帶】 班固が九流の作に擬すと相似たる也。

【洪範云云】 佛祖自利の因果、下は化他の教法。

【五部宗】 一代教を分ちて、灌頂、金剛、寶生、蓮華、兜磨の五とす。

【萬派云云】 教の流傳。

【一燈云云】 禪の流傳。

【昔日】 問佛決疑の文。此二節は略す。十二部は之を略す。

【戒律】 五部分宗を證す。

【難足云云】 禪門の付法傳來に結歸す。

浮山九帶

浮山、毎に衆に示すの際に於て、徧く宗門の語句を擧す。而して學者編集して、師に之を名けんことを乞ふ。師、因つて類聚して、目けて佛禪宗教九帶集と云ふ。蓋し班固が九流の作に擬す。

佛正法眼藏帶

夫れ眞實の理は、法身を證成し、照用の功は、報土を作爲す。諸佛の本因既に是なり。祖師の洪範も亦然り。五部宗を分つ。萬派の精蘊甚のごとくに布く。一燈焰を傳へて、十方の法席のごとくに差す。又華嚴經に云はく、「如來出世せず、亦涅槃あることなし」。昔日靈山會上、世尊一枝の華を拈起して、青蓮口を以て、普く圓衆を視る。人の能く密旨を領解するなし。破綻、微笑、佛旨を領解す。經に云はく、「佛、大迦葉に告げて言はく、吾に正法眼藏涅槃妙心あり、汝に付囑す、汝當に流布して斷絶せしむること勿るべし」。又數涅槃に臨んで、阿難に告げて言はく、「十二部經汝當に流通すべし」。優婆離に告げて言はく、「一切の戒律は、汝當に受持すべし」。大迦葉に付する偈に云はく、「法本法、無法、無法、法亦法、今付二無法一時、法法何會法」。是に於て大迦葉、佛の袈裟を持して、難足山中に於て、寂滅定に入る。

古德着語に云はく、「鳥棲無影樹、華發不萌枝、四海波濤闊、一輪明月天。」

【大圓智】 道林一
世に關ぐ。黃鶴南四

【潘閣云云】 閣の
詩に出づ。終に家
を移す。

【十聖】 住行向を
賢。十地を聖とい
ふ。
【捨】 捨施。
【遺さず】 軀命惜
まざるなり。

【名數】 三藏五乘

大圓智 頌

佛正法眼、迦葉親聞、祖禰不了、殃及二兒孫。

大悲 頌

迢迢空劫不能拘、佛眼何曾識二得、
虛寥廓塵埃淨、智鑒圓明物象殊、
從是華山千萬朵、任他潘閣倒騎驢。

佛法 載帶

夫れ三乗教の外、諸聖に作る別に傳ふ。萬象の中、迥然獨露、纖毫も未だ諦ならず。
關山を阻隔す。擬議差殊なれば、千生萬劫、三賢未だ曉さず。十聖那ぞ知らん。衆流を截
斷して、如何が湊泊せん。聖人曲げて方便を垂れて、萬物を捨てて己を遺さず。衆形を彫
刻して功なし。而も況んや如來藏をや。謂ゆる藏といふは、三世過現未來諸佛の法藏と該
括す。其間大小の二乘あり。小乗教は、謂く聲聞緣覺。大乘教は、謂く菩薩なり。中に於
て又分けて八つと爲す。謂く三藏五乘なり。三藏といふは、經律論なり。五乘といふは、
聲聞緣覺菩薩、而して兼ねて人天を攝す。然るときは、則ち、教名數を分つて、根に依つ
て立する所なり。而して一乘を離れず。法華經に云はく、「一乘の道に於て、分別して三を
説く」又云はく、「尙二乘なし、何ぞ況んや三あらんや」又云はく、「唯此一事實なり、餘の
二は則ち眞に非ず」明に知んぬ是れ根に依つて權を立つることを。華嚴の説の如き、如

【無去】無量劫即
【十力】發心堅固
【圓頓】法華、華
【半滿】法華。

來藏は、法界を以て體と爲す。如來藏は、前後際なく、成壞の法なく、修證の位なく、對待の義相を絶す。所以に文理の偈に云はく、「一念普觀無量劫、無去無來亦無住、如已是了知三世事、超諸方便一成十力」に聖人了義不了義を説く。並に是れ根に依つて安立す。諸佛隨宜の所説、意趣辨じ難し。三藏五乘、各宗旨あり。一乘の道に於て圓頓半滿を論ず、並に乃ち權に立す。唯華嚴の一經、法界を以て體量と爲す。佛と衆生と同共一體、本修證なく、本得失なく、煩惱の斷ずべきなく、菩提の求むべきなし。人と非人と性相平等なり。

古德著語に云はく、「掬水月在手、弄花香滿衣、古澗寒泉涌、青松翠竹後凋。」

吾佛法藏、撈ニ攬衆生、百千三昧、彈指圓成。

十方徧攝了無遺、三際全收在此時、聖號凡名同一舌、劣形殊相沒二多岐、
家家門外長安道、處處窟中獅子兒、打破淨瓶無二事、杜鵑啼在百花枝。

夫れ聲色到らず、語路詮し難し。今古歷然として、從來無間。言を以て道を顯して、曲げて今時の爲にす。拂を豎て眉を揚げ、周遮示誨す。天然の上土、豈提擲を受けんや。中下の機、鉤頭に則ち取る。投機妙ならず、過何人にか在る。更に若し躊躇せば、轉た鈍置

【動容云云】 香嚴の頌。
【悄然機】 坐禪工夫。

【燈火云云】 火は理、煙は事、泉は理、月は事、石は事、無根は理、山は事、不動は理。

を加ふ。理貫帯といふは、即ち正位なり。其れ正位の中而も一法なし。空にして實際に同じ。其實際理地一塵を受けず。

古徳著語に云はく、「衆角雖多一麟足矣。動容揚三古路、不墮悄然機。」

大 圓 頌
理貫全收、萬派同流、毘盧華藏、物物頭頭。

大 慧 頌
眞理何曾立一塵、呼爲正位早疎親、鳥雞半夜啼何處、枯木華開劫外春。
信手垂慈常利物、擬心執著已乖眞、君看鶴樹泥洹日、曾舉雙趺示衆人。

夫れ日月も照臨し到らず、天地も蓋覆し著す。劫火壞する時、彼常に安し。萬法泯する時、全體在り。流に隨つて變ぜず、閑處常に寂なり。一道の恩光、阿誰か分なからん。經に云はく、「初利衆生説、三世一時説。」

古徳著語に云はく、「覓火和烟得、擔泉帶月歸、石長無根樹、山含不

大 圓 頌
事實ニ萬有、纖塵不漏、萬象森羅、全機無所。

大 慧 頌

轉處 孔明萬事休、隨緣得旨復何求、羣生造化乘斯力、一道冷光觸處周。

即事 卽眞無二刹法、空心全佛有二來山、填溝塞壑無二人會、可笑騎牛更覓牛。

理事縱橫帶

夫れ觸目是れ道、佛事門中、跡を絶して私なし。實際を通貫し、事理を圓融し、運用變べ行す。器量堪任して、機に隨ひ赴に應ず。門風の露布、各當人に在り。宗乘を建立して、強ひて技節を生ず。門を出でて路を問ふ、東を指し西を劃す、歷劫頑羈、如何が扣發せん。

古德著語に云はく、「針鋒頭上翻三筋斗、紅爐焰裏碧波生。」猿抱子歸青嶂後、

烏銜花落碧巖前。

理事縱橫、照用齊行、者邊那邊、日午三更。

摩癩實際本和融、舉體全該理事同、應物行權無二定法、隨緣立理絕二羅籠。

竿頭有路通三車馬、棒下無生濁二祖翁、出沒縱橫全體用、夕陽西去水流東。

屈曲垂帶

【針鋒云云】この二句、理事縱橫無礙自在。

【猿抱子云云】猿抱子は事。青嶂は理。鳥は事。碧巖は理。

【跡を絶】無心底相應。

【露布】林才の三女等なり。

【東を指】師家と學者。

【同安寮】 九峯庵に嗣ぐ。

【石門徹】 青林虔に嗣ぐ。洞山价四世。

【雲光云云】 梁の武帝の僧十人を詩じて説法せしむるの故事。

【非道】 馬郎婿など。

【細路】 林才の棒喝。

【屈盤】 とぼくの意。

【妙叶】 玄妙に叶つて事理を明す。

夫れ垂といふは、聖人機を垂れて物を接するなり。屈曲といふは、珍御服を脱して弊垢衣を著くるなり。同安云はく、「權に垢衣を掛く、是を佛と云ふ、卻つて珍御を裝ふ、復誰とか名づけん。珍御服を不出世と名づけ、弊垢衣を出世と名づく。簡、石門徹利尙に問うて曰はく、「雲光法師、甚喫としてか卻つて牛と爲る。徹云はく、「嗚甚には騎らず金色の馬、廻途卻つて破爛袷を著く。聖人成佛の後、卻つて菩薩と爲つて、衆生を導利す。是を無爲に任せず、有爲を盡さずと名く。文殊師利、維摩詰に問うて曰はく、「菩薩云何が佛道に通達す」維摩詰云はく、「菩薩非道を行す、是を佛道に通達すと名づく」と。」

古徳著語に云はく、「慈雲普覆無二邊際、枯木無二華爭奈何。」宛二轉是非一成二曲直、個時消息解通風。」

大圓 頌

屈曲垂ソ慈、捧喝齊施、覆ニ藏密旨、少室靈枝。

不ニ裝ニ珍御ニ示ニ初機、出世權技ニ弊垢衣、細路屈盤ニ連夜過、故郷迢遞幾時歸。

垂絲千尺釣還曲、利物多方語帶悲、休レ戀長安風物好、得ニ便宜一是落便宜。

妙叶 兼帶

汝州風穴和尚、衆に示して云はく、「夫れ參學の眼目は、機に臨んで直に須らく大用現前す

入天眼日卷之上

三九

(285)

【他に依りて】 如
吐筆帶の意

【韻著】 伺ひ視る

【千古】 妙叶筆帶

【雙放】 賓主互換

【方議】 道下是な
ることを知らず。

【難足】 迦葉。
【少林】 達磨。

べし。自ら小節に拘はること莫れ。設使言前に薦得するも、猶是れ故に滯り封に迷ふ。縦饒句下に精通するも、未だ免れず途に觸れて狂見することを。備諸人に勸む、應に是れ從來他に依つて解を作すべし。明味兩岐、凡聖の疑情、備が與に一時に掃卻して、直に個個をして獅子兒の哮吼一掃するが如くならしむ。壁立萬仞、誰か敢て正眼に觀著せん。覷著せば則ち備が眼を睛卻せん。

古德著語に云はく、一句曲合千古韻、萬里雲散月來初。垂絲千尺意在深潭。

大 圓 頌

妙叶眞機、境物如如、是凡是學、無缺無餘。

大 慧 頌

捧搦由來作者知、個中一字兩頭垂、同生同死何曾曉、雙放雙收舉世疑。
照膽蛟光沈碧漢、拍天滄海浸須彌、開韶志味有餘業、方論時人句外馳。

金針 雙鎖帶

夫れ難足に燈を分つてより後、少林に芳を使へて以來、各女風を鬧いて、互に佛事を興す。若し言詮に憑つて據と爲ば、法門を斷滅し、更に或は造作修功せば、先聖を平沈せん。頭頭顯露、物物眞を明す。躊躇することを用ひず。直に須らく便ち道ふべし。

古德著語に云はく、一風吹南岸柳、雨打北池蓮。白鷺下田千點雪、黃鶯上樹一枝花。

大圓頌

金針雙鎖、全心印可、有句無句、千花萬葉。

大悲頌

突ニ出全機一理事玄、東村王老夜燒錢、等閑得路明如日、舉步回頭直似慈。

玄要並行無別路、機緣纔兆不墜傳、從來大道無拘束、信手拈來百事全。

平懷常實帶

【洛浦安】 夾山會
に嗣ぐ。
【樂んで】 合點し
たとて。

【南泉願】 馬祖一
に嗣ぐ。此話は無
門關の第十九則に
出づ。

洛浦和尚、樂に示して云はく、「最後の一句、始て牢關に到る。要津を把斷して凡聖を通ぜず。尋常に諸人に向つて道ふ、任從れ天下樂んで欣欣たることを。我獨り背はず。上流の士を知らんと欲せば、佛祖の言教を將て、額頭上に貼在せず、龜の圖を負うて、自ら喪身の兆を取るが如し。風金網に縈つて、宵漢に趁くこと何を以てか期せん。直に須らく旨外に宗を明らかにむべし。言中に向つて則を取ることを莫れ。是を以て、石人の機備に似たらば也巴歌を唱ふることを解せん。汝若し石人に似たらば、雪曲も也應に和すべし。僧、南泉に問ふ、「如何なるか是れ道。」泉云はく、「平常心是れ道。其れ如し平常心是れ道に達せば、山を見れば即ち是れ山、水を見れば即ち是れ水、手に信せて拈て來れば、可もなく不可もなし。設使風來れば樹動き、浪起れば船高く、春生じ夏長じ秋收じ冬藏るるも、何の差異かあらん。但風調ひ雨順ひ國泰に民安く、邊方寧靜にして、君臣道合することを得ば、豈

麒麟出現し、鳳凰來儀して、方に祥瑞を顯すに在らん哉。但理眞道に歸し、事乃ち常實なることを得れば、聖の求むべきなく、凡の捨つべきなし。内外平懷にして、泯然として自ら合す。所以に諸聖の語句、世諦を離れず、世間に隨順す。會するときは則ち途中受用、會せざるときは則ち世諦流布。

古德著語に云はく、『長因送客處、憶得別家時。』

大 同 頌

平懷常實、事圓理畢、露柱燈籠、無得無失。

大 悲 頌

更無二回五本圓成、體面無私一體平、水上東山行不住、火中木馬夜嘶鳴。

人間但見浮雲白、天外常看列岫橫、莫謂平常心是道、擬心已在

鐵圍城。

浮山云はく、『若く圓極の法門に據らば、本十數を具す。今此九帶已に諸人の爲に説きたる。更に一帶あり、還つて見得す麼。若し也見得して、親切分明ならば、卻つて請ふ出で來つて、衆に對して説け看ん。説き得て分明ならば、汝に許す前の九帶に通じて、道眼を圓明にすることを。若し也見て親切ならず、説いて相應せずんば、唯吾語に依つて、以て已が解と爲ば、謗法と名く。諸人此に到つて如何。衆無語。師之を叱して去らしむ。』

【黃龍三關】無門關の終に出づ。
【隆慶閑】黃龍南に嗣ぐ。

【延之】潘興嗣黃龍の居士なり。

【景福順】黃龍南に嗣ぐ。

黃龍三關

師、隆慶閑禪師に問うて云はく、「如何なるか是れ汝が生縁の處。」對へて曰はく、「早晨白粥を喫し今に至つて又儀を覺ゆ。」又問ふ、「我手何ぞ佛手に似たる。」對へて曰はく、「月下琵琶を弄す。」又問ふ、「我脚何ぞ驢脚に似たる。」對へて曰はく、「鶻鷲雪に立つ、同色に非ず。」師毎に此三轉語を以て學者に問ふ。能く其旨に契ふ莫し。天下の叢林、日けて三關と爲す。脱し酬いるものあるも、師可否することなく、目を斂めて危坐す。其意を混ること莫し。延之、又其故を問ふ。師云はく、「已に關を過ぐる者は臂を掉つて徑に去る。安んぞ關吏あることを知らん。吏に従つて可否を問はば、此れ未だ關を透らざる者なり。」復自ら頷して云はく、

我手佛手兼舉、禪人直下薦取、不動于戈一道出、當處超佛越祖。

我脚驢脚並行、步步踏著無生、會得雲收月皎、方知此道縱橫。

生縁有語人皆識、水母何曾離二得蝦、但見日頭東畔上、誰能更喫二趙州茶。

景福順頌

長江雲散水滔滔、忽爾狂風浪更高、不識漁家玄妙意、偏於三浪裡、一颺三風濤、佛手

南海波斯入大唐、有入別寶便商量、或時遇賤或時貴、日到西峯影漸

長脚驢脚

黃龍老和尚、有二個生縁語、山僧承二嗣伊、今日爲君舉、爲君舉、猫兒偏解捉、老

三三 生
最 緣

眞淨文 頌

我手何似佛手、翻覆誰稱二好驢、若非獅子之兒、野干謾爲開口。
 我脚何似驢脚、隱顯千差萬錯、豁開金剛眼睛、看取目前善惡。
 人人盡有三生緣、認著依然還失、路、長空雲散、月華開、東西南北從一
 君去。

【湛堂準】 眞淨文 一闕

湛堂準 頌

【清平遵】 翠微學 一闕

我手佛手、十八十九、雲散月圓、癡人夜走。
 我脚驢脚、放過一著、癡老策蹠、清平木杓。
 人人生緣、北律南囉、道吾舞筭、華亭撥船。

【南堂靜】 五祖演 一闕

南堂靜 頌

我手何似佛手、爐鑪始鑿鐵筵、一作、曾烹紫磨金糲、光射七星斗牛。
 我脚何似驢脚、白刃紅旗閃爍、坐斷百戰場中、妙闕二六、三略。
 人人有二個生緣、親聽俯仰折旋、頭戴寶中日月、懷藏閻外威權。

南堂靜 頌

我手何似佛手、隨分拈華折脚、忽然撞著蛇頭、未免遭他一口。
 我脚何似驢脚、趙州石橋徬徬、忽若築起皮袍、崩倒三山五岳。

八には須らく邪を置き止を顯はすべし。
九には須らく大機大用なるべし。

十には須らく異類中に向つて行すべし。

師云はく、此十門、諸人還つて一に穩當なることを得るや也未だしや。若し只是れ門を閉ぢて活計を作し、獨り自ら身を了ぜんと要せば、却つて此限に在らず。若し正宗を荷負し、聖種を紹隆せんと欲せば、須らく此綱要の十門を明めて、方に曲兼木上に坐得し、天下の人の禮拜を受け得て、敢て佛祖の與に師と爲るべし。若し慈愍の田地に到らず。只一向に虚頭ならば、他時異日闍羅老子、未だ備を放さざることを在らん。有り處。出で來つて大家證據せよ。若無くんば、久立するこゝを用ひざれ。』

臨濟門庭

【門庭】此集五家各門庭のことと要訣のこと二篇は山堂の述する所なりと。山堂淳は大漢に嗣ぐ。五祖演四世。湖潭に住す。

臨濟宗は、大機大用、羅籠を脱し策杖を出で、虎のごとくに驟き龍のごとくに奔り、星のごとくに馳せ、電のごとくに激し、天關を轉し地軸を轉し、冲天の意を負ひ、格外の提持を用ふ。卷舒擒縱、殺活自由。是故に、三玄三要、四賓主、四料揀、金剛王寶劍、踏地獅子、探竿影射、一喝一喝の用を作さず。一喝賓主を分ち、照用一時に行ずることを示す。四料揀といふは、中下根の人來れば、境を奪ひ法を奪うて人を奪はず。上下根の人來れば、人境兩つながら俱に奪ふ。出格の人來れば、人境俱に奪はず。四賓主といふは、師

家に鼻孔あるを、主中主と名け、學人に鼻孔あるを、賓中主と名け、師家に鼻孔なきを、主中賓と名け、學人に鼻孔なきを、賓中賓と名く。曹洞の賓主と同じからず。三玄といふは、玄中玄、體中玄。句中玄、三要といふは、一玄の中に三要を具す。白ら是れ一喝の中に、三玄三要を體攝す也。金剛王寶劍といふは、一刀に一切の情解を揮斷す。踏地獅子といふは、言を發し氣を吐き、威勢振立して、百獸恐悚し衆魔腦裂す。探竿といふは、爾に師承あるか、師承なきか、鼻孔あるか、鼻孔なきかを探る。影帥といふは、欺謾して賊と做つて、爾が見不見を看る。一喝賓主を分つといふは、一喝の中に自ら主あり賓ある也。照用一時に行ずといふは、一喝の中を自ら照あり用あり。一喝一喝の用を作さずといふは、一喝の中に、是の如くの三玄三要、四賓主、四料揀の類あり。大約臨濟の宗風、是の如くなるに過ぎず。臨濟を見んと要す麼。青天に霹靂を轟し、陸地に波浪を起す。

辨ニ門庭篇一

臨濟云はく、「一句語に、須らく三玄門を具すべし。一玄門に、須らく三要路を具すべし。大機大用、其れ句義名數を以て、之を劈折することを容さんや。諸方玄要を問答するに、亦い言ふ、「如何なるか是れ第一第二第三」と。汾陽の云はく、「三玄三要事難分、得レ意忘レ言道易レ觀、一句明明該三萬象、重陽九日菊花新。」古塔主に至つて、始て裂して體中玄、句中玄、玄中玄と爲す。而も三要は則ち之を説いて行はず。諸の顛頂に付するの

【古塔主】 蕪幅古
禪師。

みし 此篇に、臨濟の門頭戸底を説くことは、則ち且く從く。三玄三要に至つては、則ち古塔主の覆轍に墮す、辨ぜずんばあるべからず。

要訣

【大座】百丈大智
【高藤】住持所。
【三頓】杖。三度六十
棒を喫すと。

大雄の正續、臨濟の綱宗、黄檗に西來意を問ふに因つて、痛く鳥藤三頓を與ふ。遂に大愚に往いて打發して、視く助下の三拳を揮ふ、言下に便ち老婆心切なるを見て、懸に佛法に多子なきことを知る。奔雷の喝を奮ひ、猛虎鬚を捋づ。赤肉團邊を遊開して、到る處に白拈の手段を用ふ。飛星爆竹、裂石崩岸、氷凌上に行き、劍刃上に走る。奎機電卷き、大用天旋る。赤手にして人を殺し、單刀直入す。人境俱に奪ひ、照用並へ行す。明頭來、暗頭來、佛も也殺し、祖も也殺す。古今を三玄三要に辨じ、龍蛇を二主二賓に驗む。羅籠を透脱し、意解を存せず。金剛王寶劍を操つて、竹木の精靈を掃除す。獅子の至威を奮つて、群狐の心膽を振裂す。木梢に正法眼藏、這瞎驢邊に滅却す。骨に徹し髓に徹して、血脈貫通し、頂に透り底に透つて、乾坤獨露す。綿綿として濕さず、器器相傳ふ。蓋し其宗祖、高明にして、子孫光大いなり。此れ臨濟の宗風なり。

古德綱宗頌

横按二鏡、錮一烜燄光、八方全敵、設茫茫、龍蛇竝隱、肌鱗脫、雷雨同施、計略

【荒】 寬廣。

【堀】 郊野のこと
【波斯】 據るなし

荒おほいな

佛祖ぶつそ點てん爲な滑くわ滴てき響きやう、江山かうざん結むす抹すま並なら芬ふん芳かう、廻めぐ途と索さく寞ぼく郊かう珂か遠えん、尖せんノの船せん波は斯し洛らく二に楚そ

郷きやう

人天にんてん眼がん日卷にっまき之上のじやう 終

人天眼目卷之中

雲門宗

【靈樹敏】長慶安
に嗣ぐ百丈三世。
【廣主】劉襲。

【德山密】雲門眞
に嗣ぐ。

師諱は文偃、姑蘇嘉興の人なり。俗姓は張氏。初め睦州陳尊者に參じて、大事を發明す。後に雪峯に居して益す玄要を資く。因つて器を藏して、衆に韶州靈樹敏禪師の法席に混じて、第一座に居す。敏、將に滅度せんとす。書を遺して廣主に與ふ。踵を接いで住持せんことを請ふ。師、本を忘れず、遂に法を雪峯存禪師に嗣ぐ。後に雲門光泰寺に遷つて、其道大いに振ふ。學者風を望んで至る。雲門宗と號す。

三三句

師、衆に示して云はく、『兩蓋乾坤、日機疎兩。世縁に涉らず、作麼生か承當せん。衆皆無語。自ら代つて云はく、『一鏃三關を破る。』後來德山圓明密禪師、遂に其語を離して三句と爲す。曰はく、『函蓋乾坤の句。截斷衆流の句。隨波逐浪の句。』

圓悟云はく、『本眞本空、一色一味。妙體なきに非ず、躊躇するに在らず。洞然明白なるは、則ち函蓋乾坤なり。本解會するに非ず、排疊し將ち來つて、一字を消せず。萬機頓に息むは、則ち截斷衆流なり。若し他の相見を許さば、苗に従つて地を辨じ、語に因つ

て人を識るは、則ち隨波逐浪なり。

三句問答

『如何なるか是れ函蓋乾坤の句。』

歸宗云はく、『日出ニ東方。夜落西。』三祖會云はく、『海晏河清。』雲居慶云はく、『合。』首

山念云はく、『大地黑漫漫。』又云はく、『普天匝地。』又云はく、『海底紅塵起。』天柱靜云は

く、『只聞ニ風擊響。知是幾千竿。』

『如何なるか是れ截斷衆流の句。』

歸宗云はく、『鐵蛇横在路。』三祖云はく、『水池不通。』雲居云はく、『窄。』首山云は

く、『不通ニ凡聖。』又云はく、『洎合ニ放過。』又云はく、『横ニ身三界外。』天柱云はく、

『昨夜寒風起、今朝括地霜。』

『如何なるか是れ隨波逐浪の句。』

歸宗云はく、『船子下ニ楊州。』三祖云はく、『波斯吒落水。』雲居云はく、『闍。』首山云はく、

『要道便道。』又云はく、『有問有答。』又云はく、『此去西天十萬八千。』天柱云はく、

『春煦陽和花錦地、滿林初轉野鶯聲。』

函蓋乾坤

乾坤並萬象、地獄及天堂、物物皆眞源、頭頭總不傷。

截斷衆流

堆山積嶽、一一盡塵埃、更擬論玄妙、冰消瓦解摧。

隨波逐浪

辨口利舌間、高低總不虧、還如二應病、藥診候在臨時。

翠巖眞頌

函蓋乾坤事、皎然何須特地起、狼烟道人舞鐸東君至、不令花枝在處妍。

截斷衆流爲二更論、河沙諸佛敢形言、星移斗轉乾坤黑、稍有絲毫實不存。

隨波逐浪任二高低、放去收來理事齊、一等垂慈患二末學、奈何老倒作滌帶二塵泥。

抽頌

師毎に偈を見る。之を願て即ち曰ふ、『鑑』と。僧擬議す。師即ち曰ふ、『唵』と。而して

之を録する者、願鑑唵と曰ふ。徳山密禪師、願の字を彫り去つて、但鑑唵と曰ふ。叢林日

けて以て抽願と爲す。因つて偈を作つて之を通す。之を擡薦商量と謂ふ。偈に曰はく、

相見不揚眉、吾東我亦西、紅霞穿碧海、白日遶須彌。

北塔祚頌

雲門願鑑笑嗜嗜、擬議遭渠願鑑唵、任是張良多智巧、到頭於是也難施。

眞淨文頌

雲門抽顧、自有來由、一點不到、休休休休。

又關樞子頌

雲門關樞子、消息少、人知、有時一撥動、大地眼瞠瞠。

一字關

- 【祖】意有故事と
- 【章】窮なり。
- 【格】獸禽の骨。
- 【衆】肉あるをい
- 【普】徧界不曾識
- 【要】不レ可有無一
- 【響】相叩知叩擊
- 【露】曾不レ藏と。
- 【割】常漏漉了と
- 【恰】適當の辭。
- 【確】打レ破到處
- 【俱】其なり、倍

僧、師に問ふ、「如何なるか是れ雲門の劍。」師云はく、「祖。」問ふ、「如何なるか是れ玄中の。」師云はく、「響。」問ふ、「如何なるか是れ吹毛劍。」師云はく、「幣。」又云はく、「背。」問ふ、「如何なるか是れ正法眼。」師云はく、「普。」問ふ、「三身の中那身か說法す。」師云はく、「要。」問ふ、「如何なるか是れ啐啄の機。」師云はく、「響。」問ふ、「父を殺し母を殺し、佛前に懺悔す。佛を殺し祖を殺して、什麼の處に向つて懺悔せん。」師曰はく、「露。僧、靈樹に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。」樹默默。遷化の後、門人行狀の碑を立つ。此語を入れんと欲す。師に問うて云はく、「先師默然の處如何が碑に上さん。」師對へて云はく、「師。」問ふ、「久雨晴れざる時如何。」師云はく、「割。」問ふ、「壁を鑿つて光を偷む時如何。」師云はく、「恰。」問ふ、「承る、古へ言あり。了ずれば即ち業障本來空。未だ了ぜざれば還須らく宿債を償ふべし。未審し、一祖是れ了ずるか、是れ未だ了ぜざるか。師云はく、「確。」師一口衆に示して云はく、「佛法を學ぶ底の人、恆河沙の如し。百艸頭に一句を道ひ將ち來れ。」代つて云はく、「俱。」師凡そ機に對して、往往に多く此酬應を用ふ。故に叢林之を日けて、一字關と

曰ふ。

祖、しゆく、髻、し、普、ふ、要、えう、響、きやう、露、ろ、師、し、割、わり、恰、ちや、確、かく、俱。

綱 宗 傷

康氏かうし圓形えんけい滯ち不ふ明めい、魔深まふか虛喪こそう擊げき寒かん水すい、鳳羽ほうう展時てんじ起おこ碧漢せきかん、晉鋒しんそう八博はつぱく擬ぎ何なに憑たもた。

世に重おもんぜらる。是こゝは機はな是對機たいき迷ま、開ひら機はな摩ま遠とほ遠とほ塵ちん棧けん、夕日せきじつ日じつ中ちゆう誰たれ有あ掛か、因よ底てい底てい事じ隣りん塵ちん泥でい。

喪さう二時にじ光くわう、藤林とうりん荒あらう。徒人とじん意い。滯ちゆう二机にき庭てい。

咄ぶつ唱しやう。力りき因いん希き、禪ぜん子し訝ぎや、中ちゆう眉めい垂た。

上かみ不ふ見み天てん、下した不ふ見み地ち、塞さい却せき咽えん喉こう、何なに處ところ出い氣き、笑わら我われ者もの多おほ、晒わら我われ者もの少すく。

【康氏】 梁の康會法師、形儀偉麗、世に重んぜらる。【晉鋒】 王羲之の筆鋒八法。【庭】 俗字、かよはし。【咄】 沒巴鼻。【希】 無聲。

機 緣

僧問そうもん、十二時中じふにじちゆうちゆう、如何いかんが即すなはち空くうしく過すごさござることを得えん。師し云いはく、甚い麼んの處ところに向むかつてかこゝ此こゝ一問いつもんを著つく。云いはく、學人がくじん不ふ會あい、請こゝろふ師し舉あげせよ。師し云いはく、筆硯ひつげんを將もち來きれ。僧そう乃すなはち筆硯ひつげんを取り來きる。師し、一頌いちじゆを作つくつて曰いはく、舉あげ不ふ願ねがふ即すなはち差さ互あひ、擬ぎニ思し量りやう、何なに劫じやく悟ご。

僧そう、雪峯せつぽうに問とふ、如何いかんなるか學人がくじんが自己じこ。峯ほう云いはく、鼻孔びくうを築ちく普ふす。僧そう、師しに舉あげ似にす。師し云いはく、備作びやく塵生ちんじやうか會あいす。其その僧そう再また三思さんし惟ただして、師し亦また前頌ぜんじゆを以もつて之これに示しす。福朗ふくろう上座じやうざ、因よに

【福朗】 永福朗か雲門に嗣ぐ。

僧、師に問ふ、「如何なるか是れ透法身の句。」師云はく、「北斗裏に身を藏す。」朗、其旨を測ること固し。遂に遣る。師一見して把住して云はく、「道へ道へ。」朗擬議す。師托問して偈あり、云はく、「雲門聳峻白雲低、水急遊魚不取棲、入戸已知來三見解、何勞更舉標中泥。」朗大悟す。

【巴陵鑑】 雲門に嗣ぐ。又鑿多口と云ふ。

巴陵三句

【提婆宗】 提婆宗の則は碧巖第十三則に出づ。

【吹毛】 吹毛の則は碧巖第一百則に出づ。

【新開】 巴陵の住

【九十】 外道の宗。此頌は碧巖十三則の頌。

【吹毛】 此頌も碧巖一百則の頌。

【要】 平、不、平、大、巧、若、拙、或、指、或、掌、倚、天、照、雪。

大冷兮磨鏡不_レ下、良工兮拂拭未_レ歇、別別、珊瑚枝枝撐_ニ著月。

湛堂頌、祖意教意

鷄寒上樹鴨寒下水、時節不相饒、古今自然理、寒松十里吼、清風、流水一溪聲未已

雲門門庭

雲門宗といふは、截斷衆流、擬議を容れず、凡聖路なく、情解通ぜず、僧問ふ、「如何なるか是れ雪嶺泥牛吼、師云はく、「山河走、如何なるか是れ雲門木馬嘶、云はく、「天地黑、如何なるか是れ雲人白、云はく、「遊山觀水、問ふ、「萬機喪盡時如何、云はく、「爲我拈一瓣、殿一來、與、備、商、量、如何なるか是れ透法身句、云はく、「北斗裏藏身、如何なるか是れ教外別傳、云はく、「對衆問將來、天約雲門の宗風は、孤危、聳、峻、人、溘、泊し難し、上上根に非ずんば、孰か能く其彷彿を窺はんや、其語句を詳にするに、德流の機ありと雖も、且、隨波の意なし、法門殊と雖も、理一致に歸す、雲門を見んと要す應、拄杖子、脚踏、上、天、蓋子、裏、諸佛說法、

要訣 山堂

韶陽の一派、德嶠の源に出づ、初め睦州に見え、秦の時の鑽を推出し、象骨に昇るに泊んで、項上の枷を脱却す、南山の鼈鼻をして、面前に擲向せしめ、東海の鯉魚を打して雨

【韶陽】 雲門の居地
【德嶠】 德山、雪峯、雲門と傳法す
【鑽】 秦時機軸鑽
【象骨】 雪峯の山

盆下に傾く。三句の鬪鏖を稱提し、一字の機鋒を拈掇す。身を北斗星中に藏し、歩を東山水上に移す。端的頓鏖、毫芒を犯さず。格外に縱擒し、言前に定奪す。直に是れ箭鋒路あり、鐵壁門なし。露布の葛藤を掀翻し、常情の見解を剪却す。烈焰寧ろ湊泊を容れんや。迅雷思量に及ばず。蓋し其見諦寬通にして、自然に受用廣大なり。花は靈樹に開き、子は香林に結ぶ。佛祖の權衡を振り、人天の眼目を開く。夫れ何ぞ源清うして流濁り、根茂り枝枯る。妄に道眼の因縁を立して、謬つて聲色の差別を爲し、互に相容鑿して、語言に滯著し、辱を先宗に取ること、過後學に在るは、此れ雲門宗なり。師、僧に逢うては、必ず特に之を顧みて曰はく、「鑿」と。僧擬議すれば、則ち云ふ、「喫」と。門人録して顧鑿喫と爲す。後に圓明密、顧の字を刪り去る。之を抽顧と謂ふ。兒孫其旨を失して、接人の際にあつて、怒目直視を以て、名けて提攝と爲し、名けて聲色を謬らさず。名けて擧する處便ち薦むと爲す。相傳へて以て道眼と爲す。北塔祚、嘗て之を笑ふ、故に偈を作る。任是張良、多智巧、到頭於此也難施。の語あり。此篇中に謂ゆる妄に道眼の因縁を立し、謬つて聲色差別を爲すといふは、此を指すなり。

古德綱宗頌

柳粟橫擔、宇宙寬、得盤桓一處、且盤桓、水流、東澗朝、西澗、雲起、南嶺、下北嶺、生鐵、剛針挑、蜀錦、古松、瓊葉、落珠盤、折旋末、擬經、殘雨、一作、浚、二足、泥塗、過、

【此篇云云】或はこの一段は山堂の作にあらずといふ。
 【字衍】傍若無人
 【盤桓】遊戯
 【南嶺】これも遊
 【剛針】本録に郢州
 【蜀錦】二句共對
 機。

單。

曹洞宗

【曹洞】 曹原、石頭、藥山、雲巖、洞山、雲居、同安、玉同、安志、梁山、大陽、投子、芙蓉、丹霞等。

【本寂】 曹山の禪師號なり。名は元證。

洞山和尚、諱は良价、會稽の人なり。俗姓は俞氏。法を洪州雲巖臺禪師に得て、筠州の洞山に住す。權に五位を聞き、善く三根を接し、大いに一音を闡いて廣く萬品を弘む。權に寶劍を抽んで、諸見の稠林を剪る。妙叶該通して、萬機の穿鑿を截る。晚に本寂禪師を得たり。深く旨を明め、妙に嘉猷を唱へ、道君臣に合うて、偏正回互。是に由つて、洞上の玄風、天下に播す。故に諸方の宗匠、共に推して之を尊んで、曹洞宗と曰ふ耳。

五位 君臣

曹洞問ふ、「五位君臣の旨訣。」山云はく、「正位は即ち空界に屬す、本來物なし。偏位は即ち色界に屬す、萬の形象あり。偏中至は事を捨てて理に入る。正中來は理に背いて事に就く。兼帶は冥に衆縁に應じて、諸有に墮せず。染に非ず淨に非ず。正に非ず偏に非ず。故に虚玄の大道。無著の眞宗と曰ふ。從上の先德、此一位を推して、兼最妙最玄とす。要は當に審詳に辯明すべし。君を正位と爲し、臣は是れ偏位。臣君に向ふ是れ偏中正。君臣を視る是れ正中偏。君臣道合ふ是れ兼帶の語。併問ふ、「如何なるか是れ君。」曰はく、「妙德

【靈機】棒を行じ
喝を下す。

【燒不著】火も燒
かず水も濕さず。
四十九年一字不説

【大仙】釋尊。
【宏智覺】丹霞淳
に嗣ぐ。
【華嚴覺】圓悟勤
に嗣ぐ。
【夜明籬】玉の籬

寰宇に尊くと、高明大虚に朗なり。問ふ「如何なるか是れ臣。」曰はく、「靈機聖道を宏め、眞智羣生を利す。」問ふ「如何なるか是れ臣君に向ふ。」曰はく、「諸の異趣に墮せず、情を凝して聖容を望む。」問ふ「如何なるか是れ君臣を視る。」曰はく、「妙容動せずと雖も、光燭偏なきにあらす。」問ふ「如何なるか是れ君臣道合ふ。」曰はく、「混然として内外なし、和融して上下平なり。」又曰はく、「君臣偏正を以て、言ふことは中を犯さんことを欲せず。故に臣君を稱して、敢て斥けて言ふにあらずと是れなり。此れ吾法の宗要なり。偈を作つて曰はく、「學者先須識自宗、莫將實際雜頑空、妙明體盡知、盡知二傷觸、乃在逢緣不借中、出語直教二燒不著、潜行須與古一人同、無身有事超二岐路、無事無身落二始終。」

五位問答

「如何なるか是れ正中偏。」

汾陽云はく、「玉兔就明初夜後、金鷄須報五更前。」道吾真云はく、「諸子投來見大仙。」宏智覺云はく、「雲散長空後、虛堂夜月圓。」華嚴覺云はく、「更深垂却夜明籬。」翠嚴宗曰はく、「菱花未照時。」

「如何なるか是れ偏中正。」

汾陽云はく、「毫末成大樹、滴水作江河。」道吾云はく、「萬水千山明似鏡。」宏智云はく、「白髮老婆著二照鏡。」翠嚴云はく、「團圓無二少剩。」華嚴云はく、「天曉賊人投二古井。」

「如何なるか是れ止中來。」

汾陽云はく、「早地蓮華衆衆聞。學云はく、「聞いて後如何。」汾陽云はく、「金華經に承云玉露、高僧不坐鳳凰臺。」

道吾云はく、「破潔乾坤震二地雷。宏智云はく、「霜眉雪鬚火申出。堂堂終不落今時。」翠巖云はく、「偏界絶二織埃。華嚴云はく、「百卉乘春在處開。」

「如何なるか是れ兼中至。」

汾陽云はく、「意氣不從天地一得。英雄豈藉四時推。道吾云はく、「拋却女羅橫無所畏。」宏智云はく、「大用現前、不存二軌則。」翠巖云はく、「嚙鐵功前驗。」華嚴云はく、「雨雪交加無所避。」

「如何なるか是れ兼中到。」

汾陽云はく、「玉女拋梭機札軋。石人打鼓韻辭辭。道吾云はく、「黑白未分已前過。」宏智云はく、「夜明雁外排班早。空王殿上絶知音。」翠巖云はく、「十道不通耗。」華嚴云はく、「兩頭截斷無二依倚。心法雙忘始得支。」

寂音正五位之説一

寂音云はく、「其道愈よ凌遲。列位の名件に至つて、亦訛亂して次あらず。正中偏、偏中正、又正中來、偏中至、然して後に、兼中到を以て、摠じて五と成すが如き、今乃ち偏中至を易へて、兼中至と爲すは、其何の義といふことを曉らず耶。而も老師大納も、怡然として

【乘】 一本に承。在在處處

【彌】 彌云云。隋末の誓君謨と王靈智の故事。

【靜】 鼓の聲。

【空王】 古佛の名法華に出づ。

【陵遲】 丘陵の次第にひくくなること。衰へるをいふ。

【老師】 汾陽道吾。【怡】 一本に恬。

怪むことを知らず、笑ふべしと爲す。』

五位 序 丹書

夫れ黑白未だ分れず、彼此を爲し難し。玄黄の後、自他を方位す。是に於て、黒を借つて

正を權り、白を假つて偏を示す、正正に坐せず、夜半虚明。偏偏に坐せず、天曉陰晦

偏中全體即用、枯木花開く。正中全用即眞、芳叢不艶。偏中兼帯を推殘し、玄微に及ぶす。

兼中玉鳳金鸞、明眼分疎不下。是故に、威音那畔如何と話すことを休めよ。上曲げて今

到の爲に、人に由つて施設す。略管見を陳べて、以て方隅を示す。冀くば諸の同心、

幸に掌を拊つこと毋れ。

悟本五位類

正申偏、三更初夜月明前、莫怪相逢不相識、隱隱猶懷二昔日嫌。

偏中正、失曉老婆逢二古鏡、分明覲面更無化、休更迷頭猶認世景。

正中來、無中有路出塵埃、但能不觸二當今諱、也勝二前朝斷舌才。

偏中至、兩交鋒要二廻避、好手還同二火裡蓮、宛然自有二衝天氣。

兼中到、不落有無誰敢和、人人盡欲出二常流、折合終歸二炭裡一坐。

克符道者類

正中偏、半夜澄潭月正圓、文殊匣裡青蛇吼、鶻得毘盧出二故關。

偏中正、演若玉容迷二古鏡、可笑騎牛更覓牛、寂然不動毘盧印。

眞體と同じ。

話することを休めよ。四十九年一字不説。

掌を拊つ 宋の劉伯龍と一鬼の故事。

昔 或は舊に作る。

嫌 又妍に作る。或は他、或は眞に作る。

休 或は争、奈に作る。

斷舌 結舌の故事。

廻避 或は不須避に作る。

背合 刺殺なり畢充の義。

青蛇 劍の名。

【張鷟】博望侯なり。鷟と嚴君平の故事。

正中來、鳳子龍孫坐二釣臺、高僧觸二著當今諱、藏二却花冠一笑一回。
兼中至、怒龍奔九江、張翥二得孟津源、推二倒崑崙無二依倚。
兼中到、龍旗排二出御街、早略開二仙仗、鳳樓前、尋常諱二觸二當今號。

汾陽照頌

正中來、金剛寶劍拂二天開、一片神光橫二世界、品評朗響絕二塵埃。
正中偏、霹靂機鋒著二眼、看石火電光猶是鈍、思量擬議隔二千山。
偏中正、看二取輪王行二正、令七金千子總隨身、途中猶自覓二寶鏡。
兼中至、三戟金毛牙爪備、千邪百怪出二頭來、嗷吼一聲皆伏二地。
兼中到、大顯二無功二休二作造、木牛步步火中行、眞箇法王妙中妙。

總頌

五位參尋切要知、纖毫纜動卽差違、金剛透二匣誰能曉、唯有二那吒第一。
機一擧、日便令二三界靜、振二鈴還使二九天歸、正中妙叶通二回互、擬議鋒
鈍失二却威。

慈明總頌

偏中歸、正極二幽玄、正去偏來理事全、須知正位非二言說、巽兆依稀屬二有緣。
兼至去來與二妙用、到兼何更逐二言詮、出沒豈能該二世界、蕩蕩無依鳥道玄。

艸堂清頌

【影】 一本に冷。

【歸人の】 或は婦人。

【秦臺】 秦鏡なり始皇の方鏡は、邪心ある者、膽脹り心動く。

【鳥道】 虚空なり難該釋迦達磨も及ばずと。

【自得暉】 宏智覺に嗣ぐ。【轉側】 臥不レ安ノ席。

【消耗】 一本に音耗。

正中偏、丫角崑崙空裡眠、石女樓梭聲軋軋、木人舞袖出二庭前。
偏中正、澄潭印出蟾光影、人人盡向二影中一閃、影滅潭虛誰辨影。
正中來、火裡蓮華朵朵開、根苗豈是尋常物、妙用非同二應世才。
兼中至、交戰機鋒絶二忌諱、丈夫彼彼逞二英雄、點著不來成二粉碎。
兼中到、鐵牛喫盡欄邊草、却問二牧童、何處居、鞭指二東西、無二寶。

宏智覺頌

正中偏、霽碧星河冷浸天、半夜木童敲二月戶、暗中驚破玉人眠。
偏中正、海雲依約神山頂、歸人髮髮白如絲、羞對秦臺一寒照影。
正中來、月夜長鯨蛻甲開、大背摩天振二雲羽、翔二遊鳥道、類難該。
兼中至、觀而不須相忌諱、風化無傷的意玄、光中有路天然異。
兼中到、斗柄橫斜天未曉、鶴夢初醒霧氣寒、舊巢飛出雲松倒。

自得暉頌

正中偏、混沌初分半夜天、轉側木人驚夢破、雪嶺滿眼不レ成眠。
偏中正、寶月團圓金殿冷、當明不レ犯暗抽身、回眸影轉西山頂。
正中來、帝命旁分展二化才、杲日初昇世界靜、靈然曾不帶二鐵埃。
兼中至、長安大道閑遊戲、處處無私空合空、法法同歸水投水。
兼中到、白雲斷處家山妙、撲二碎驪龍明月珠、崑崙人海無消耗。

【明安】大湯女の
住院なり、又は梁
山觀に嗣ぐ。

【安曰はく云云】
此語は後人の偽作
なりと。明安別錄
中に載せず。

明安五位賓主

安曰はく、「正中偏は、乃ち慈を垂れて人を接す、即ち主中賓、第一句尊人なり。偏中正は、照あり用あり、即ち賓中主、第二句奪境なり。正中來は、乃ち奇特の受用、即ち主中主、第三句人境俱奪なり。偏中至は、乃ち有に非ず無に非ず、即ち賓中賓、第四句人境俱不奪なり。兼中到は、出格自在、四句を離れ百非を絶し、妙盡きて本無の妙なり。」

洞山功勳五位

向、奉、功、共功、功功

僧問ふ、「如何なるか是れ向。」師云はく、「喫飯の時作麼生。」

大慧云はく、「向の時作麼生とは、謂はく此事に趣向す。」答へて云はく、「喫飯の時作麼生」とは、謂く此事、喫飯の時の功勳無うして而も間斷あるべからざるなり。」

僧問ふ、「如何なるか是れ奉。」師云はく、「昔の時作麼生。」

大慧云はく、「奉は乃ち承奉なり。人の尊長に奉する、先づ敬を致して後に承奉するが如し。向は乃ち功勳の立つる所、纔に向へば即ち承奉の義あり。」答へて云はく、「昔の時作麼生とは、謂はく此事、間斷無し。奉の時既に兩り。而して昔の時も亦然り。言ふは昔即ち奉の義なり。蓋し奉背は皆功勳なり。」

僧問ふ、「如何なるか是れ功。」師云はく、「鉗頭を放下する時作麼生。」

大慧云はく、「鉗頭を放下する時作麼生」とは、謂はく此事、間斷無し。奉の時既に兩り。而して昔の時も亦然り。言ふは昔即ち奉の義なり。蓋し奉背は皆功勳なり。」

大慧云はく、「功は即ち用なり。」答へて云はく、「鉏頭を放下する時作麼生とは、鉏頭を把れば是れ用、鉏頭を放下するは是れ無用。澗山の意、謂く用と無用と皆功動なり。」

僧問ふ、「如何なるか是れ共功。」師云はく、「色を得ず。」
大慧云はく、「共功の時作麼生とは、謂はく法と境と徹す。」答へて云はく、「色を得ずとは正用の時、是れ箇の無用底を顯す。無用即用なり。若し一色と作さば、是れ十成死語なり。澗山の宗旨、語十成を忌む。故に色を得すと云ふ。乃ち活語なり。」

僧問ふ、「如何なるか是れ功功。」師云はく、「不共。」
大慧云はく、「功功の時作麼生とは、謂はく法と境と皆空なり。之を無功用大解脱と謂ふ、故に不共と云ふ。乃ち法の共にすべき無きは、不共の義なり。全く功動邊に歸す、法界事事無礙の如き是れなり。爾が面前に我無く、我面前に爾無し。所以に夾山道はく、「此間に老僧無く、目前に闍梨無し。」と。是れなり。是の如き、此説、皆趣向承奉す。日用四威儀の内に於て、世出世間を成就して、周旋せずといふこと無し。之を功動五位と謂ふ。」大慧、既に功動五位を説いて、乃ち云ふ、「爾道へ他の古人の意、果して是の如くならん乎。」若し只此の如くならば、甚の奇特か有らん。只是れ口傳心授底の葛藤なり。既に是の如くならずんば、且く道へ古人の意、畢竟作麼生。」

【翠巖宗】

宏智覺

翠巖宗功動問答

僧、翠巖宗に問ふ、「如何なるか是れ功を轉じて位に就く。」巖云はく、「撒手無依全體現、

扁舟漁父宿蘆花へんしゅうりよふるくわにゆく

『如何なるか是れ位を轉じて功に就く。』嚴云はく、『半夜嶺頭風月靜、一聲高巖老猿啼。』
『如何なるか是れ功位齊しく乾る。』嚴云はく、『出レ門不踏來時跡、滿日飛塵絕二點埃。』
『如何なるか是れ功位俱に隱る。』嚴云はく、『泥牛散盡澄潭月、石馬加鞭不轉頭。』

洞山功勳五位詞

向 聖主山來法帝堯、御人^レ以^レ禮曲^ニ詭腰、有時^ニ闌市頭邊過、到處文明賀^ニ聖朝^一。

奉 淨洗濃粧爲^ニ阿誰、子規聲裡勸^レ人歸、百花^ニ落盡啼無^レ盡、更向^ニ亂峯深處^一啼。

功 枯木花開劫外春、倒騎^ニ玉象^一趁^ニ麒麟^一、而今高隱千峯外、月皎風清好^ニ日辰^一。

共功 衆生^ニ諸佛^一不相侵、山自^ニ高兮^一水自^ニ深、萬別千差明^ニ三底^一事、鷓鴣啼處百^ニ花^一新。

功功 頭角纜生已^レ不堪、擬^レ心求^レ佛好^ニ羞慚^一、迢迢空劫無^ニ三人^一識、肯向^ニ南詢^一。

曹山五位君臣圖并序

夫れ正は、黑白未分朕兆未生、諸聖の位に落ちず。偏は朕兆興し來る、故に森羅萬象隱顯

【枯木云云】 枯木は正位、華開は偏位、倒は回互、騎は正位、高隱は餘中、到無功の田地、月皎は有用か、作用は有用か、人はいふ。

【圖並序】 洞山の正偏五位に同じ。

【落魄】前漢の酈食其の故事。

【明正】臣向ノ君。

【免率】欲天ノ偏位。

【烏鴉】偏中正。

【欲裡云云】饑は偏、寒米は正、楊花は偏、九月は正、泥牛木馬は皆正、水面風嘶は皆偏、是れ正が偏に来るなり。

【未得云云】無功は正、未得は偏位なり。

【功勳】王夫の階級。

【干】或は觸に作る。

【女頰】是れ君臣五位の頰なり。此に付するは非なりといふ。

【史】中なり。

【史】或は氣に作る。

【九錫】車馬衣服等。

の妙門あるなり。

白[○]衣[○]須[○]拜[○]机[○]、此事不^レ爲^レ奇[○]、積代簪纓者、休言落魄時。

子時當[○]正位[○]、明[○]正[○]在[○]君[○]臣[○]、未[○]離[○]三[○]免[○]、率[○]累[○]、烏鴉[○]上[○]行[○]。

饑裡寒水[○]結[○]、楊花九月飛[○]、泥牛吼[○]水面[○]、木馬逐[○]風[○]嘶[○]。

王宮初降日、玉兔不能離[○]、未[○]得[○]無[○]功[○]旨[○]、人天何太遲[○]。

混然滅[○]理事[○]、朕兆卒難明[○]、威音王未曉[○]、彌勒豈惶惶[○]。

五位功勳圖

正中偏[○]、君位[○]、向[○]、黑白未分時[○]。

偏中正[○]、臣位[○]、奉[○]、露[○]。

正中來[○]、君視[○]臣[○]、功[○]、無[○]句[○]有[○]句[○]。

兼中至[○]、臣[○]、向[○]君[○]、共[○]功[○]、各[○]不[○]相[○]干[○]。

兼中到[○]、君[○]、臣[○]合[○]、功[○]、不[○]當[○]頭[○]。

大陽女頰

君[○]、立[○]功[○]勳[○]、坐[○]廟[○]堂[○]、群[○]臣[○]何[○]敢[○]望[○]天[○]光[○]、深深[○]禁[○]殿[○]尊[○]嚴[○]甚[○]、寂[○]寂[○]無[○]人[○]夜[○]未[○]央[○]。

臣[○]、文[○]經[○]武[○]緯[○]定[○]中[○]華[○]、編[○]歷[○]二[○]楷[○]梯[○]、資[○]二[○]國[○]家[○]、功[○]業[○]已[○]隆[○]、加[○]二[○]九[○]錫[○]、與[○]君[○]神[○]切[○]石[○]此[○]。

此[○]。

【來蘇】書經仲虺之高、仁者民之救

【輅】一本に鐘。萬年云云。古殿の寒き。

【石霜語】道吾智に嗣ぐ。

【五位王子】内紹外紹を明す。

【足】或は上。【大慧云】此一段は、大慧の正法眼藏卷第三の下に在り。大慧が諸方の胡亂を訶して、五位君臣を商量するの示案なり。後來永覺賢の輩、之を貶刺するも大なる謬なりと、古注にあり。

君視レ臣位尊ニ九五一不ニ曾居、常與ニ群臣ニ共ニ一途、深隱ニ後宮ニ天下治、免教ニ夷狄

臣向レ君念念輸忠不ニ敢欺、頭頭拳重丈夫兒、君看千里長安道、玉輅皆懸ニ闕下

君臣道合 臣主相忘 古殿寒、萬年槐樹雪漫漫、千門坐掩靜如水、只有垂楊舞

翠煙

總頌 無中有路透長安、劫外靈枝孰敢攀、寶殿苔生尊貴盛、三更泉日黑漫漫

石霜語答ニ五位王子

「如何なるか是れ誕生王子。」答へて云はく、「貴裔非ニ常種、天生位ニ至尊。」

「如何なるか是れ朝生王子。」答へて云はく、「白衣爲レ足輔、直指ニ殊庭中。」

「如何なるか是れ末生王子。」答へて云はく、「脩途方覺貴、漸進不ニ知レ尊。」

「如何なるか是れ化生王子。」答へて云はく、「正威無ニ比況、神用莫ニ能レ儔。」

「如何なるか是れ内生王子。」答へて云はく、「重瞬休ニ勝負、金殿臥ニ清風。」

大慧云はく、「二分黒、一分白の圈兒を以て、正中偏と爲す。却つて白處に來つて黒底を説く。又黒の字を犯著することを得ず。黒の字を犯著すれば、即ち諱に觸る。更に洞山の頌

【途】棒喝を行ずる。
【妙體】妙は兼中、體は兼中判なり。

を引いて云はく、「正中偏、三更初夜月明前。謂はく能く回互して只三更と言ふ。三更は是れ黒、初夜も黒、月明前も是れ黒。黒と言はずして、三更初夜月明前と言ふ。是れ能く回互して諱に觸れず。兩分白、一分黒の圈兒を以て、偏中正と爲す。却つて黒處に來つて白底を説く。而も白底の消息を犯すことを得ず。云はく、偏中正、失曉老婆逢古鏡。明と白と言はずして、而も失曉と古鏡と言ふ。是れ能く明と白との字を回互して諱に觸れず。蓋し失曉は是れ暗中の明、古鏡も亦是れ暗中の明。老婆頭白し、白を説かずして老婆と言ふ、白其中に在り。能く白の字を回互する故なり。正中來の頌に云はく、「正中來、無中有路隔三塵埃。」或は云ふ、「出三塵埃。」と。謂はく、凡之言句あり皆無の中より唱へ出す。便ち自ら妙を拈み了れり。正位の中従り來らざるは無し。或は明、或は暗、或は至、或は到、皆妙挾宗に通ず。凡そ一位に皆此五事を具すること、掌の五指の如し。欠くること無く剩ること無し。兼中至は、謂はく、黒を兼ね、白を兼ね、偏を兼ね、正を兼ねて至る。何をか至と謂ふ。人の家に歸つて未だ到らずして、別業に至つて乃ち途に在つて、人邊の事を爲すが如し。亦能く回互す。妙體前に在り。兼中到。謂はく、前の四位を兼ねて、皆妙を拈んで正位に歸す。之を折合歸來炭裏坐と謂ふ。亦是れ黒處を説くに而も黒の字を回互して、黒と道はずして炭と言ふ。大慧、曹山を擧し了つて即ち曰はく、「理を説き事を説く、教に明文あり。教外單傳直指の道、果して是の如くならんや否や。若し果して是の如くならば、甚の好曹山をか討ねん耶。」

【五位王子頌】この頌の註本、文字の不同あり。洞山の頌なり。

【明】或は育に作る。或は期に作る。【朝】或は期に作る。【天然云云】其本來尊貴中より来る【始末云云】其外紹に雜はざるを言ふ。【六宅】宋には之に因る。或は十六宅六根の用殊なり

五位王子頌
天然誕生貴胤本非功、徳合ニ乾坤、明勢隆、始末一朝無ニ雜種、分ニ宮六宅、不二他宗一。
上和下陸陰陽順、共氣連枝器量同、欲識ニ誕生王子父、鶴騰ニ霄漢出ニ銀籠。

朝生

苦學論情世莫群、出ニ來凡事ニ已超倫、詩成五字三冬雪、筆落分毫四海雲、萬卷積功彰ニ聖代、一心忠孝輔ニ明君、鹽梅不ニ足生知得、金榜何勞顯ニ至勳。

久棲ニ巖穴、用ニ功夫、艸榻柴扉、守志孤、十載見聞心自委、一身冬夏衣纏無、澄澗含笑三秋思、清苦高名上折圖、業就高科酬ニ志極、比來臣相不當途。

化生

傍分ニ帝命、爲ニ薄持、萬里山河布ニ政威、紅影日輪凝ニ下界、碧油風冷暑炎時、高低草屨尊卑奉、五榜蘇途遠近知、妙印手持煙塞靜、當陽那敢露ニ纖機。

化生

九重密處復何宣、掛弊由來顯ニ妙傳、祇奉ニ一人天地貴、從他諸道自分

化生

【密處】或は深密に作る。

【密處】或は深密に作る。

【由來】 或は興來に作る。

【善權智】 宏智覺に對し。

【巖】 或は跡に作る。

【轉側】 或は照處に作る。

【寅昏】 朝夕。

【侍】 或は到に作る。

【郭中令】 郭子儀

【李西平】 李晟

【勤】 或は勤に作る。

【秦王】 高祖の二子。

【肅宗】 高祖の三子。

權、つことを

紫羅帳合君臣隔、黃閣簾垂禁制全、爲汝方愚宮屬戀、遂將黃葉止啼

金銀

善權智頌

誕生 貴胤生時 輪擬空、玳瑁玉佩處東宮、月堂轉側朝君父、直扣堯塔却

借功

朝生 學問詩書 德行全、金門投策紫微班、台星不離三自離、那得寅昏

奉二聖 顔

末生 貧來今日 極清虛、悲喜寥寥一物無、便欲三升爲二九、包鳳依稀雲

樹月巢孤

化生 帝命傳來 下九天、禁城中外化觀賓、回途復妙持金印、正令會無無一字

傳

内生 鳳鷲龍驤 大丈夫、天然尊貴六宮殊、苔封寶殿無二人、侍造次凡流識得無

寂音說二王種內紹外紹

寂音曰はく、此れ唐の郭中令、李西平が、皆王と稱するが如き、然も種あるに非ず。勤勞

を以て致す。高祖の秦王、明益の肅宗は、則ち帝王の家に生るを以て皆種あり、勤勞を

以て致すに非ざる者なり。之を内紹と謂ふ者は、無功の功なり。先聖之を貴ぶ。之を外紹

【雲居云云】 雲居は外紹を引證す。道着云覺は洞山偈に嗣ぐ。

【獨布納】 嗣承不

【披毛】 自の用。之を得れば降伏。王大實善の釋なり。

【類墮】 有ること。心に同じ一念無私を知る。必ず聲色を透過する底。

【乃し食を云云】 先づ經を引いて二墮を釋す。

【正命食】 結前後生。

【墮と爲す】 尊貴

【是れ同じ云云】 不受の故。

【白はく是れ云云】 大陽類墮を釋す。

と謂ふ者は、功業を借つて然り。故に又名けて借句と曰ふ。曹山章禪師の偈の略に云はく、
「妙明體盡 知ニ傷 觸ニ力在 緣不借中。云居覺禪師云はく、「頭頭上了、物物上通、
只喚作ニ事人、終喚不作ニ尊貴、將知尊貴一路自別。」

曹山章三種墮

曹山云はく、「凡情聖見、是れ金鎖玄路。直に須らく回互すべし。夫れ正命食を取る者は、須らく三種の墮を具すべし。一には披毛戴角。二には不斷聲色。三には不受食。一獨布納といふ者あり、問うて云はく、「披毛戴角、是れ什麼の墮ぞ。」草云はく、「是れ類墮、問ふ、「不斷聲色、是れ什麼の墮ぞ。」云はく、「是れ隨墮、問ふ、「不受食、是れ什麼の墮ぞ。」云はく、「是れ尊貴墮、夫れ初心に冥合して有ることを知る、是れ類墮、有ることを知つて六塵を離へず、是れ隨墮、維摩に云はく、「外道六師、是れ汝が師なり」と。彼師の墮する所、汝も亦隨つて墮す。乃し食を取るべし、食といふは正命食なり。食は、亦是れ六根門頭に就て、見聞覺知す。只他に染汚せられざるを、將に墮と爲す。且是れ同じきにあらず。」
明安云はく、「此三種の語は、須らく轉位を明め得て始めて得べし。一には水牯牛と作る、是れ類墮。曰はく、是れ沙門轉身の語。是れ異類中の事。若し此意を曉らすんば、即ち滯る所あり。直に是れ伊一念無私にして、即ち出身の路あらんことを要す。二には不受食。是れ尊貴墮。曰はく、須らく那邊を知り了つて、却つて者邊に來つて行履すべし。若し此

【大珠】諱は慧海馬祖に嗣ぐ。

【瑜伽】譯して相應といふ。權大乘の論なり。一切の乘境行果等、所有諸法、皆相應するを曰ふ。
【感に隨】過去の五戒等の功德に相應して、人界の生を受く。故に云ふ。

位を虚うせずんば、即ち尊貴に在在す。三には不斷聲色。是れ隨墮。曰はく、聲色を明めず、故に隨處に墮す。須らく聲色裡に向つて、出身の路あるべし。作麼生か是れ聲色外的一句。乃ち云はく、聲自聲にあらす、色自色にあらす、故に不斷と云ふ。掌を指すに當に何の掌をか指すべき。」

大珠和尚、因に維摩の座主問ふ、「經に曰はく、「彼外道の六師等是れ汝が師なり。其れ因つて出家して、彼師の墮する所、汝も亦隨つて墮すべし。其れ汝に施す者は、福田と名けず。汝を供養する者は、三惡道に墮す。佛を謗り、法を毀る、衆數に入らず、終に滅度を得ず。汝若し是の如くならば乃ち食を取るべし」と。今請ふ禪師明に爲に解説したまへ。「珠曰はく、「迷うて六根に徇ふ者、之を號して六師と爲す。心外に佛を求むるを名けて外道と爲す。物の施すべきあるを福田と名けず。心を生じて供を受く、三惡道に墮す。汝若し能く佛を謗らば、是れ佛に著して求めず。法を毀る者、是れ法に著して求めず。衆數に入らずんば、是れ僧に著して求めず。終に滅度を得ずんば、智用現前す。若し是の如くの解あらば、便ち法喜禪悅の食を得ん。」

正 命 食

寂音曰はく、「瑜伽師地論に云はく、「死に三種あり。謂はく、壽盡くるが故に、福盡くるが故に、不平等を避けざるが故に。當に知るべし亦是れ時非時の死なり。或は善心に由り、或は不善心、或は無記心、云何が壽盡くるが故に死す。猶一の感に隨つて壽量滿ち盡くる

【資具】 衣食等。

【生滅邊】 知解あり。

【攝】 一に擗に作る、五陰和合を擗するを名けて涅槃とす。この心を以て擗食を取るべしと。

が故に死するあるが如き、此を時死と名く。云何が福盡くるが故に死す。一の資具缺くるが故に死するあるが如し。云何が不平等を避けざるが故に死す。世尊の九因九緣未だ壽を盡くさずして死すと説きたまふが如し。何等を九と爲す。謂はく、食無度量一。食所不宣二。不消復食三。生而不吐四。熱而持之五。不近醫藥六。不知於已七。若損若益非時非量八。行非梵行九。此を非時死と名く」と。即ち是を以て之を觀るに、乃し時を知つて食して、即ち枉死せざるを、正命食と名く。黃粟云はく、「今時才かに衆を出で来る者、只多知多解を欲して、廣く文義を求むるを、喚んで修行と作す」知らず、多知多解、翻つて壅塞と成ることを。唯多く兒に酪乳を與へて、消と不消と。都て總に知らず。三乘學道の人、皆此様なり。盡く食不消と名く。食不消といふは、謂ゆる知解消せずして、皆毒藥と爲る。盡く去けて生滅邊に收む。眞如の中、此事なし。故に此を以て知る、曹山、正命食を貴んで、三障を立つることを。」

不斷聲色障、類障、尊貴障。

寂音曰はく、「維摩經に曰はく、「和合相を壞る爲の故に應に攝食を取るべし。不受の爲の故に應に彼食を受くべし。以て聚想を空じて聚落に入る。見る所の色と盲等と、聞く所の聲と、嗅ぐ所の香と風等と、食する所の味分別せず。諸觸を受くること智の如く、證して、諸法の幻の如き相、自性なく、他性となく本より自ら然らず。今則ち滅なしと知る」此れ不斷聲色障の由つて立つる所なり。又云はく、「須菩提、佛を見ず、法を聞かず。

【六祖云云】曹山
曹溪の塔を禮す。
志六祖を慕うて、
山を曹と名く。

【籠】一に籠に作
る。
【重門】十八去つ
て九は還らず。

彼外道の六師は、是れ汝が師なり。其に因つて出家して、彼師の墮する所、汝も亦隨つて墮す、乃ち食を取るべし。此れ隨墮の由つて立つる所なり。又曰はく、「佛を誘り法を毀り衆數に入らず、終に滅度を得ず。汝若し是の如くならば、乃ち食を取るべし。此れ尊貴墮の由つて立つる所なり。予嘗て曹山を觀るに、其自ら六祖に比するも愧づる所なし。其聖凡の情を蕩して、大方便あるを以てなり。南泉曰はく、「三世諸佛不知有、狸奴白牯却知有」と。乃し云はく、曹山の只一の墮の字を立つるに如かざる耳。

寂音三種墮頌

類墮 紛然作息同、銀椀裡盛雪、若欲異牯牛、與牯牛一何別。

隨墮 有聞皆無聞、有見元無物、若斷一聲色、求木偶當成佛。

尊貴墮 生在帝王家、那復有尊貴、自應著珍御、類見何驚異。

百丈端三種墮頌并總頌

類墮 著起破欄衫、脫下娘生袴、信步入荒艸、忘却長安路。

隨墮 秦樓歌夜月、魏園舞春風、家國傾亡後、鄉關信不通。

尊貴墮 獨坐孤峯頂、輪蹄絕二往還、可憐一雙足、曾不到人間。

總 雲不戀青山、鏡不籠妍媸、未透東門關、隨處成三策白。

古德三種墮頌

一披毛戴角隨類自在

【沁園】後漢の竇憲、沁水公主の園田を請ひ奪ふの故事。

【三種】心意識。
【滲漏】縫縛の義。漏泄なり。

【乾慧】定慧二莊嚴を缺く。俗に云ふ狼智慧。
【一見云云】見は能縁の心、八識田中一刀を下して後なほ機は見機、相常住、毒海は識浪の中一色邊。

頭角混ニ泥塵、分明露ニ此身、綠楊芳艸岸、何處不稱尊。

猿啼霜夜月、華笑沁園春、浩浩紅塵裡、頭頭是故人。

畫堂無鎖鑰、誰敢跨其門、莫怪無賓客、從來不見人。

昨夜荒村宿、今朝上苑遊、本來無位次、何處覓蹤由。

三種滲漏

洞山、曹山に謂うて曰はく、「吾、平嚴老師の處に在つて、親く寶鏡三昧を印せらる。事的要を究む。今汝に付授す。汝善く護持して斷絶せしむること無れ。眞の法器に遇はば、方に傳授すべし。直に須らく秘密にすべし。顯露することを得ざれ。恐らくは流布に屬せば、吾宗を喪滅せん。夫れ末法の時代、人多く乾慧なり。若し向上の人の眞偽を辨驗せんと要せば、三種の滲漏あり。機に當つて直に須らく眼を具すべし。」

一見滲漏、謂機不離位、墮ニ在毒海。

明安云はく、「見、所知に滞在するが爲なり。若し位を轉せざれば、一色に坐在す。言ふ所の滲漏といふは、只是れ可の中未だ善を盡さず。須らく來蹤を辨じて、始めて本機妙用を

相續することを得べし。」

二情滲漏、謂智常向背見處偏枯

明安云はく、「情境圓ならざるが爲に、取捨に滯在す。前後偏枯、鑑覺全からず。是れ滲漏に滯らざるべし。」

浪流轉して、途中邊岸の事なり。直に須らく句句二邊を離れて、情境に滯らざるべし。

三語滲漏、謂體妙失、機味ニ終始、學者濁智流轉、不出此三種。

明安云はく、「體妙失、宗とは、語路に滯在して、句宗旨を失す。機味ニ終始とは、謂はく、機に當つて暗昧にして、只語中に在つて、宗旨圓ならず。句句須らく是れ有語中の無語、無語中の有語にして、始めて妙旨密圓なることを得べし。」

淵潭照三滲漏

去休見 天下溪山絶勝處、誰能把、手共同遊、回頭忽聽杜鵑語、笑指白雲一歸

昔年曾作參玄客、徧扣玄關第一要脈、更闌墨汁染皂衫、說向他人

口門窄、情 木人嶺上輕開口、石女溪邊暗點頭、堪笑昔年李太白、夜來還宿釣魚舟、語

洞山三路接人

僧、夾山に到る。山問ふ、甚麼の處より來る。云はく、洞山、夾山云はく、洞山何の

【夾山會】 前に出

【李太白】 晩節黃老を好み、牛渚磯を渡り酒に乗ず云

【機】 當機暗昧の故に、語脈相續し難し。

【味】 見處不貫通に嗣ぐ。

【語】 謙、第八謙所依。或は究に作る。體は三十二入十種百味具足、語に滯れば宗妙を失す。

【報】この語二種を原本に出す。

【金針云云】賓主問答。

【挾】正、偏を挾み、偏必ず正を挾む。

【寶印】正中妙挾なり。

【空】風なり。

【重重云云】五位の法門重重に現す。

【明中暗】明は大功に、暗は正位に喩ふ。

【功】功位齊しく彰るに至つて貴し。

【力窮】事理の跡消せず、聖凡の情盡きず、之を金鎖玄路と。

【理事不涉】凡聖に墮せず。前二偈は正偏互用、此偈は正偏雙混。

【巧拙】聖凡を指す。

【追】有形は追ふ無形は追ふべからず。

【妙籠】回轉回施。

【紗籠】遮絆なきを。

言句をか徒に示す。云はく、尋常異人をして三路に學ばしむ。爽山云はく、何者か三路。云はく、玄路、鳥道、展手。山云はく、實に此語ありや否や。云はく、實に有り。山云はく、報持、千里鉢、林下の道人悲む。浮山圓鏡云はく、不因黃葉落、爭知是一秋。

曹山三種綱要頌

敵侶俱行

金鎖雙鎖備、扶路隱全該、寶印當空妙、重重錦縫開。

金鎖玄路

交互明中暗、功齊轉覺難、力窮忘進退、金鎖綱轉軌。

理事不涉

理事俱不涉、回照絕二幽、微背風無二巧拙、電火燦難追。

明安三句

師、一日衆に示して云はく、吾に三句あり。平常無生の句、妙玄無私の句、體明無盡の句。時に偈あり問ふ、如何なるか是れ平常無生の句。師云はく、白雲覆青山、青山頂不露。如何なるか是れ妙玄無私の句。師曰はく、寶殿無人不侍立、不種梧桐一免風來。如何なるか是れ體明無盡の句。師曰はく、手指空時天地轉、回途石馬出紗籠。

瑯琊答三句

瑯琊云はく、『山僧昨日因に禪人、郢州の大陽和尚が三句の語を請益す。山僧昔曾て巾瓶に奉侍し來る。今日他の大陽和尚、和尚に報答し去らずんばあらず。』山僧亦二句の語あり。『如何なるか是れ平常無生の句。』瑯琊はく、『言前無二的旨、句下絶。』追尋。『如何なるか是れ妙玄無私の句。』瑯琊はく、『金鳳不棲無影樹、玉兔何曾下碧霄。』『如何なるか是れ體明無盡の句。』瑯琊はく、『三冬枯木秀、九夏雪花飛。』瑯琊はく、『此三轉語を將て、大陽和尚に供養す。然も是の如くなりと雖も、又我に辜負すべからず。』

海印信

『如何なるか是れ平常無生の句。』海印云はく、『三脚蝦蟆吞二巨鼈。』『如何なるか是れ妙玄無私の句。』海印云はく、『白雲覆ニ青山。』『如何なるか是れ體明無盡の句。』海印云はく、『須彌頂上浪滔天。』

曹山四禁語

莫行ニ心處路、不掛ニ本來衣、何須正恁麼、切忌未生時。

門風偈 芙蓉楷

妙唱不于舌

【彈指云云】 彌勒の彈指を待たず、善財門に入つて參す。

【三臺】 石季龍遊宴の所。樂工此曲を造り酒を促す。

【廣長】 法華神力品に世尊現大神力。出ニ廣長舌、至ニ梵天と。
【望州亭】 雪峯云々、望州亭與レ汝相見了と。

【撥鎗】 彗星なり
【玉繩】 北斗の四星を璇璣、玉衡の北の兩星を玉繩といふ。夜深に低る。

刹刹塵塵處處談、不勞彈指善財參、空生也解通消息、花雨前鳥不銜。

死蛇驚出解

日炙風吹艸裡埋、觸他毒氣又還乖、暗地若教聞死口、長安依舊絕人來。

解針骨吟

死中活得是非常、密用他家別有長、半夜觸骸吟一曲、氷河紅餓却清涼。

鐵鋸舞三臺

不落三宮商調、誰人和一場、伯牙何所措、此曲舊來長。

古今無間

一法元無萬法空、箇中那許悟圓通、將謂少林消息斷、桃花依舊笑春風。

自得禪頌

妙唱不語、寂滅自無情、一句從來本見成、舌運廣長元不聞、雪峯相見上州亭。

干舌

金鞭遙指玉堂寒、驚起將軍夜出關、三尺鐵鐮清四海、撥鎗一掃絕癡頭。

死蛇驚

出艸骨吟、宮漏沈沈夜色深、燈殘火盡絕知音、木人位轉玉繩曉、石女夢回霜滿襟。

解針骨

鐵牛無角臥山坡、鞭起如飛見也麼、鬧市橫騎人不會、擗頭鶴子過新羅。

鐵樹排
三臺

自得暉五轉位頌

匣裡青蛇吼

寶劍橫斜天欲曉、洗三清魔佛遍人寒、匣中隱隱光生處、衲子徒將正
眼一看。」

金針去復來

清虛大道長安路、往復何曾有間然、暗去明來鋒不露、渠儂初出墮中邊、

秦宮照膽寒

巖房闌寂冷如冰、妙得冥符一處處、靈轉側依亡功就位、回頭失却楚

王城。」

午天銀燭輝

午天皎皎玉輪孤、一天光分鑑五湖、闌步却來遊紅海、十方沙界大毘盧、

深岳藏白額

白額藏烟霧昏、異中來也自驚群、艸深直下無尋處、觸著輕輕鞦韆到

汾陽頌二曹洞機」

【依亡】或は無依
に作る。

樓閣千家月、江湖萬里秋、蘆花無異色、白鳥下汀洲。

古德宗旨頌

洞家門庭事理全、白雲嶺下莫安眠、縱饒枯木生花去、返照荒郊不直錢。

宏智四借頌

借功明位

蘋末風休夜止火、水天虛碧共秋光、月船不犯東西岸、須信篙人用意

良。

借位明功

六戸靈通路不迷、太陽景裡不當機、縱橫妙展無私化、恰恰行從鳥道歸。

借借

識盡甘辛百草頭、鼻無三牽纏得優遊、不知有却成知有、始信南泉喚作

牛。

全超不借借

霜重風嚴景寂寥、玉關金鎖手慵敲、寒松晝夜無虛籟、老鶴移棲空二月巢。

曹洞門庭

【蘋末風休】宋玉風賦：夫風生於地，起於青蘋之末。

【篙人】船夫。

【靈】一に虚に作る。

【不借借】或は借借不借借に作る。

【識】或は試、又は吃に作る。

【荷玉】曹山の舊名、後に曹山と改む。

曹洞宗は、家風細密にして、言行相應、機に隨ひ物に應じ、語に就て人を接す。他の來處を看るに、忽ち偏中に正を認むる者あり、忽ち正中に偏を認むる者あり。忽ち相兼帶し、忽ちに同、忽ちに異なり。示すに偏正五位、四賓主、功勳五位、君臣五位、王子五位内紹外紹等の事を以てす。偏正五位といふは、正中偏體より用を起す。偏中正は用體に歸す。兼中至は體用並び至る。兼中至は體用俱に混す。四賓主は臨濟に同じからず。主中賓は體中の用なり。賓中主は用中の體なり。賓中賓は用中の用、頭上に頭を安ずるなり。主中主は物我雙べ忘じ、入法俱に混じて正偏の位に涉らず。功勳五位は、參學の功位より、非功位に至ることを明すなり。君臣五位は、有爲無爲を明すなり。王子五位は、内紹は本自ら圓成、外紹は修あり證あることを明すなり。大約曹洞の宗風、不過體用、偏正賓主、以て向上の一路を明すに、曹洞を見んと要すや麼や。佛祖未生空劫外、正偏不落ニ有無機こ

要 訣 山堂

新豐の一派、荷玉流を分つ。始め水を過ぐるに因つて渠に逢ふ。妙に無情の説法を見る。當今觸れず、展手玄に通ず。五位の正偏を列ね、三種の滲漏を分つ。夜明簾外、臣位を退いて以て君に朝し、古鏡臺前、子身を轉じて父に就く。雪萬年の松徑を覆ふ。夜半正明、雲一帶の峯巒を遮る。天曉不露、道樞綿密、智域圓深、空劫已前に默照す。湛湛たり一壺の風月、威音那畔に坐徹す。澄澄たり満日の煙波、不萌枝上に花開き、無影樹頭に風舞ふ。

【該】一本間に作る。
【翻】一本蕃に作る。

【紫石】浮山遠禪師の號なり。

【寶鏡三昧】今臨

濟宗の慣習調を用

ひて譯す。曹洞宗

の慣習調は、多

少の相違あり。此

語の解義の書は曹

洞派下に多し。今

も略す。銀盃の盃

も、椀と或は作る

亦この作者は通じ

て洞山良价の作と

いふも、或は藥山

惟儼或は雲岩曇晟

なりとなす。洞山

の過水悟道の偈を

主として、偏正面

互の妙旨を説きた

るものなり。臨濟

派にも多く誦し室

内の詮索に用ふる

こと。白隱和尚以

來と聞く。

機無掛けず。箇の中雙鎖金針、文彩縱橫。裡許暗に玉線を穿つ。雙唱へ起す、鋒を交ゆる處天然あることを知る。兼帶忽に來る、枯木上に誰か能く主と作らん。正位を存せず。那ぞ大切を守らん。今時を及盡して、寧ろ尊貴に留らんや。情摩兒網を截斷し、金鎖玄關を製開す。妙抉全く該ぬ、歷歷として類中に迷はず。平懷常實、明明として宏雅に身を製開す。寒筍功勳に落ちず、來去了に變易なし。異苗をして翻茂せしめんと欲せば、貴ぶらくは深く靈根を固うするに在り。若し紫石野人に非ずんば、爭か新豐の曲子を見ん。

古徳綱宗頌

荆棘叢林三二五、煙雲單徑孰能尋、白鷄目雨衛二陽焰、赤棘穿樓和二聽音、廣澤薰花藏雪密、垂綸釣艇弄澗深、當軒點點無二秦鏡、散髮斜眉下翠岑。

寶鏡三昧

如之之法、佛祖密付、汝今得之、宜善保護、銀盃盛雪、明月藏鷺、類之弗齊、混則知處、意不在言、來機亦赴、動成二策、一白、背觸俱非、如大火聚、但形文彩、卽屬染汚。

夜半正明
雖非有爲
汝不來
不去不來
終不得物
疊而爲三
正中妙挾
錯然則吉
因緣時節
毫忽之差
宗趣分矣
外寂內搖
隨其顛倒
要合古轍
如虎之缺
以有驚異
箭鋒相直

天曉不露
不正是無語
渠正是不汝
不起不汝
語未正故
變盡成五
敲唱雙舉
不可犯忤
寂然照著
不應律呂
不應規矩
即是規矩
係响伏鼠
以繩爲素
請觀前古
如馬之轡
如白馬
鰲奴白粘
巧力何預

爲物作則
如臨寶鏡
如世嬰兒
如婆婆和兒
重離六交
如莖艸味
通宗通途
天真而妙
細入無間
今有頓漸
宗通趣極
先聖悲之
顛倒想滅
佛道垂成
以有下劣
邪以巧力
木人方歌

用拔諸苦
形影相觀
五相完具
有句無句
偏正回互
如金剛杵
挾帶挾路
不屬迷悟
大絕二方所
緣立宗趣
眞常流注
眞法檀度
肯心自許
十劫觀樹
寶几珍御
射中百步
石兒起舞

非_レ情識_一 到_一 寧_レ容_二 思_一 慮_一 臣_レ奉_二 於_一 君_一 子_レ順_二 於_一 父_一
 不_レ順_レ 非_レ孝 不_レ奉_レ 非_レ輔 潛_レ行_レ 密_レ用_レ 如_レ愚_レ 如_レ魯
 但_レ能_レ相_レ續 名_二主_一 中_二主_一

瀦_二 仰_一 宗

師_レ諱_ハ靈祐_ハ、福州長溪の人なり。俗姓は趙氏。年十五にして、親を辭して出家し、大小乗の經律を究む。二十三にして江西に遊んで、百丈大智禪師に參じて、大事を發明す。出世して瀟山に住す。後に仰山惠寂禪師を得たり。父子事として舉せずといふことなく、事として知らずといふことなし。後、仰山の道價大いに振ふ。諸方尊宿衆、推す所の瀦仰宗のみ。

三_二 種_一 生

師_レ、一日、仰山に謂うて曰はく、「吾鏡智を以て宗要と爲す。三種の生を出す。所謂、想生、相生、流注生。楞嚴經に曰はく、「想相を塵と爲す、識情を垢と爲す、二俱に遠離せば、即ち汝が法眼時に應じて明_レ清ならん、云何ぞ無上正覺を成ぜざる」。想生は、即ち能思の心雜亂す。相生は、即ち所思の境塵然たり。微細の流注、俱に塵垢と爲す。若し能く淨盡

【所思】 能思の心より生起す。

【石佛忠】 達觀類
に副く。
【兎子望月】 想生
の念より一切諸法
を生ずることに喩
ふ。

【明教嵩】 洞山聰
に副く。

せば、方に自在を得ん。

後に偈あり、石佛忠禪師に問ふ、「如何なるか是れ想生。」忠云はく、「兎子望月。」如何なるか是れ相生。」忠曰はく、「山河大地。」如何なるか是れ流注。」忠曰はく、「無二間斷。」仍つて宛に云はく、

想 生

密密潜行世莫知、箇中已是涉多岐、如二燈 焔焔空紛擾、急急歸來早是遲。

相 生

法不孤生、仗境生、毫釐未盡、遂崢嶸、回光一擊、便歸去、幽夢一開、雙眼明。

流 注 生

摩摩聲色了無窮、不離二如今日用中、金鎖玄關能掣斷、故鄉歸去疾如風。

因 起

圓相の作は、南陽忠國師に始る。以て侍者耽源に授く。源、讖記を承けて仰山に傳ふ。遂に日けて湧仰の宗風と爲す。明州五峯良和尚、嘗て五十則を製す。明教嵩禪師、之が序を爲つて其美を稱道す。良云はく、「總て六名あり。曰はく圓相。曰はく暗機。曰はく義海。曰はく字海。曰はく意語。曰はく默論。耽源、仰山に謂うて曰はく、「國師當時、六代の

【一の沙彌】 仰山
【此教】 圓相。

祖師の圓相と共に九十七箇を傳へ得て、老僧に授與す。乃ち曰はく、「吾滅後三十年、南方に一の沙彌あり、到來して大いに此教を興さん。次第に傳授して、斷絶せしむること無れ」と。我今汝に付す、汝當に奉持すべし。」と。遂に其本を將て山に過與す。山接得し一覽して、便ち火を將て燒却す。耽源一日問ふ、「前來の諸相甚だ宜しく秘惜すべし。」山曰はく、「當時看了つて、便ち燒却す。」源曰はく、「吾此法門、人の能く會するなし。唯先師及び諸祖師、諸大聖人、方に委悉しつべし。子何ぞ之を焚くことを得る。」山曰はく、「慧寂一覽して、已に其意を知つて、但用ひ得たり。本を執すべからず。」源云はく、「然も是の如くなり」と雖も、子に於ては即ち得たり。後人之を信じ及ぼさず。山曰はく、「和尚若し要せば重ねて錄すること難からず。即ち重ねて一本に集めて呈上す。更に遺失なし。」源曰はく、「然り。」耽源上堂し山衆を出でて此の相を作り、手を以て拓呈し了つて、却つて又手して立つ。源、兩手を以て、交へて拳を作して之に示す。山進前し三步して、女人拜を作す。源點頭す。山便ち禮拜す。此れ乃ち圓相の自つて起る所なり。

暗機

【授】 一に愛に作る。

仰山、親しく耽源の處に於て、九十七箇の圓相を授く。後に瀉山の處に於て、此の相を示すに因つて頓悟す。後に語あり曰はく、「諸佛の密印豈言に形はさんや。」又曰はく、「我耽源の處に於て體を得、瀉山の處に用を得たり。謂はく、「父子の機を授す」と。故に此圓相あ

り、端的を勘辨す。或は⊕此相を畫く、乃ち縦意なり。或は⊙此相を畫く、乃ち意なり。或は⊗此相を畫く、乃ち肯意なり。或は⊘此相を畫く、乃ち他の相見を言す。或は⊙此相を畫く。或は點破、或は劃破、或は擲却、或は提起、皆是れ時節因縁なり。纔に圓相あれば、便ち賓主、生殺、縱奪、機變、眼目、隱顯、權實あり。乃ち是れ體に入つて手を垂る。或は閑暇に、師資辨難、五換の機鋒、責ぶらくは當人の大用現前せんことを圖る者なり。一日梵僧あり來り參す。仰山、地上に於て、⊘此相を畫いて之に示す。僧進前して、添へて○此相を作し之に對へ、復脚を以て抹却す。山兩手を展ぶ。僧拂袖して便ち去る。仰山目を閉ぢて坐する次で、僧あり潜に身邊に來つて立つ。師目を閉じて、地上に於て、此⊗相を作して、其僧を顧視す。僧無語。

義 海

仰山坐する次で、僧あり來つて作禮す。山顧みず。其僧乃ち問ふ、師字を識るや否や。山曰はく、分に隨ふ。僧乃ち右旋一匝して曰はく、是れ甚麼の字ぞ。山地上に於て、十の字を畫して之に酬ゆ。僧又左旋一匝して云はく、是れ甚麼の字ぞ。山十の字を改めて、卍の字と作す。僧乃ち此○相を畫して、兩手を以て、拓して修羅の日月を掌するの勢の如くす。曰はく、是れ甚麼の字ぞ。山乃ち此⊗相を畫して之に對ふ。僧乃ち婁至徳の勢を作す。山曰はく、如是如是。此は是れ諸佛の護念する所、汝亦是の如し。吾も亦是の如し。

【婁至徳】
金剛なり。

【空に騰つて去る】
これより仰山を小
釋迦といふ。

【八種の三昧】
覺
海、義海、有因、
有果、即時、異、
時、別の八三昧な
り。

善く自ら護持せよ。其僧禮謝して、空に騰つて去る。時に一道者あり見る。五口を経て後
に遂に山に問ふ。山曰はく、「汝還つて見るや否や。」道者曰はく、「某甲門を出でて空に騰つ
て去るを見る。」山云はく、「此は是れ西天の羅漢、故に來つて吾道を探る。」道者曰はく、「
某此種種の三昧を覩ると雖も、其理を辨せず。」山曰はく、「吾義を以て、汝が爲に解釋
せん。此は是れ八種の三昧なり。是れ覺海變じて義海と爲る。體は則ち同じく名は異り。
然も此義、合に因あり果あり、即時異時總別、隱身三昧を離れず。」

五冠順之和尙、與三仰山和尙一立一玄問玄答一

○此相を、擧爾索蓋の相と謂ふ、亦半月待圓の相と名く。若し此相を將て之を問へば、更
に半月を將て之に對ふ。問ふ者、函を擧げて蓋を索め、答ふる者、蓋を以て函に覆ふ。故
に曰ふ、函蓋相稱うて以て圓月の相を現す。○此相を、抱玉求鑑の相と名く。若し此相を
將て之を問へば、即ち中に於て、人の字を書して之に對ふ。此相は、問ふ者、良鑑を覓む、
答ふる者、玉を識つて便ち手を下すなり。○此相は、鉤入索續の相、又此相を將て之に問
へば、但△字の側に於て、イ字を添へて答ふ。乃ち問者、鉤入すれば、答ふる者索續す。
乃ち續成寶器の相と云ふなり。○此を已成寶器の相と名く。若し此相を將て之を問へば、
但中に於て土の字を書して之に答ふ。○此相を玄印玄旨の相と名く。獨腕にして前の衆相
を超え、教意の所攝に著せず。若し是れ靈利底ならば、對面して他に分付するが如し。擬

するときは則ち差ふ。見ずや、三祖曰はく、「毫釐有差、天地懸隔。」若し正眼を具せずんば、豈能く此を辨ぜんや。子期が伯牙の琴を聴くに似たり。提婆の龍樹の相を曉るが如し。鶏の子を抱いて啐啄同時なるに喩ふ。遲鈍淺流は、卒に頓に曉り難し。盲の色を視て轉錯るが如し。

辨ニ第八識

【答】 或は徳に作る。【六識】 或は七識亦名傳送を作る。

此は是れ衆生、俱に六識あり。空の一識を添へて、名けて七識と爲す。七識不可得なるを、名けて第八識と爲す。亦八王子と名く。亦八解脱と名く。亦八丈夫と名く。總じて四八三十二相なり。此は是れ果相因智の報答なり。亦因相と名く。第七情、六識傳送、來るときは先鋒と爲り、去るときは殿後と爲る。以至、過去を追思し、現在を攀緣し、未來を憂慮し、三細、六塵、五意、六染、七情、六識、彼を分ち此を分ち、是を分ち非を分つ。八阿頼耶識は、名けて白淨本と曰ふ。瑕玷なく、佛なく、衆生なく、徧なく、我なし。

古ニ徳ニ頌

頼耶白淨本無レ愚、三細分時有ニ六塵、八萬四千從レ此造、大千沙界作ニ凡夫、夢心極枯元非レ有、病眼空花覺是無、反レ掌之間成二十善、依然赤水獲ニ玄珠。

仰山臨終付法偈

一二二三子、平目復仰視、兩口無二一舌、卽是吾宗旨。

龍潭智演爲二四頌一

一二二三子、

④牛字清風起。

⑤佛來勸不就。⑥人乃爭二綱紀。

平目復仰視、

兒孫還有異、

未辨二箇端倪、出門俱失利。

兩口無二一舌、

止止不須說、

西天僧到來、烏龜喚作二龜。

此是吾宗旨、

揚聲囉囉哩、

鏡智出三三生、吹到二大風一止。

三 燃燈

三燃燈、曹山の録中に見えたり。仰山の語に非ず、曹山曰はく、「燃燈、前に二種あり。一には未だ有ることを知らず、類血の乳に同じ。一には有ることを知る、猶意の未だ萌さざる時の如く、始て本物を得。此を燃燈前と名く。一種あり、有ることを知つて往來言語、聲色是非す。亦正照用に屬せず、亦得記に屬せず。類血の乳に同じ。是れ漏失邊の事なり。此を燃燈後と名く。直に是れ三際事盡き、表裡情忘じて、間斷なきことを得て、此れ始て正燃燈を得るなり、乃ち得記と云ふ。」

古 燃燈前

解行分明珠走盤、未能二透脱、幾多難、如三瓶注水無二遺漏、隔海風光冷

眼看がんしよこみる

正しやう 燃ねん 燈とう

不見みえニ明珠みしゆ不レ見レ盤ばん良りやう天てん靜じやう夜や黑く漫まん漫まん古こ今こん十じゆ世せ無な二に增ぞう減げん一いち拈ねん取しよ牛ぎゆ頭とう一いち尾び上じやう安あん。

燃ねん 燈とう 後ご

問もん處じよ分ぶん明めい答たふ處じよ親しん摩ま摩ま利り利り總そう逢ほう君くん一いつ聲せい黃わう鳥きう青せい山さん外がい占せん斷たん風ふう光かう一いち作しよ二に主しゆ人にん。

【香嚴閑 仰山寂】

に嗣しよく。

香かう嚴げん三さん照しやう語ご

擬しん心しん閑かん口くち隔かく二に山さん河が寂じやく無む言げん也や被ひ呵か舒しよ展てん無む窮きゆう又また無な盡じん卷まき來きた絶たつ迹せき已すで成な多た。

木もく 來らい 照しやう

不ふ動どう如に如に萬ばん事じ休きゆう澄じやう潭たん徹てつ底てい未ま二に會かい流りゆう簡かん中ちゆう正せい念ねん常じやう相しやう續じよく月つき皎せう天てん心しん雲うん霧む收しゆう。

常じやう 照しやう

四し威い儀い内ない不ふ二に會かい觀くわん今こん古こ初しよ無む二に間かん斷たん時じ地ち獄じやく天てん堂たう無む二に變へん異い春しゆん回かい楊やう柳りゆう綠りよく如に緯い。

瀉み 仰やう 門もん 庭てい

江かうを渡わたらんと欲ほつすれば、我われ便べんち船ふねを撐ささふ。山やまを隔へてて烟えんを見て便べんち是これ火かなるを知しり、墻かき

を隔てて角を見て便ち是れ牛なるを知る。瀉山、一日普請して茶を摘む次で、仰山に謂うて云はく、「經曰只子が轡を聞いて子が形を見ず。」仰山、茶樹を撼す。瀉山曰はく、「子只其用を得て、其體を得ず。」仰云はく、「和尚如何。」師良久す。仰曰はく、「和尚只其體を得て、其用を得ず。」瀉山曰はく、「汝に三十棒を放す。」乃至仰山水を過ごし、香巖茶を點じ、木枕を推し、坐具を展ぶ。銀を挿んで立ち、銀を擧げて行く。大約瀉仰の宗風、縁を擧して用を明め、機を忘れて體を得、此に過ぎず。瀉仰を見んと要すや麼、月落潭無影、雲生山有衣。

要訣 山堂

【淨瓶云云】此話は無門關の四十則に出づ。

【鶩子】 舍利弗。

江西の瀉仰、深く此宗を究む、只灰火發問するに因つて、便ち柴頭の發現するを見る、淨瓶踢倒して、瀉山を贏ち得たり。便ち地を井を出づるの時に得、大機を門を撼すの際に奪ふ。銀子を挿下す、妨げず人數分明なることを。靴子を推出す、正に經教上の事を用ひて、險崖の句を具し、陷虎の機あり、大禪佛に四藤條を與ふ。令行據まり、涅槃經總に是れ魔説、子が眼明なることを貴ぶ。機輪を暗合し、境致を混融す。圓相の中、大家の唱和を貴ぶ。夢を原せすること、鶩子が神通に勝れり。脇下に字を書して、頭角崢嶸、室中に人を驗みて、師子腰折れぬ。四句を離れ百非を絶す。一鏡に粉碎して、兩口あり一舌なし。九曲珠通ず。機に當つて宗猷を辨せんと要し、人の爲に頗る落艸多し。道千古に傳

【兩山】 瀉山、仰

へ、名兩山に振ふ。然も枝派流離すと雖も、誰か真規の儼爾たるを見る、此れ瀉仰の宗風なり。

古徳綱宗頌

賣金須遇買金人、酬價高低總不親、紅線兩條穿二海岳、澄湖萬頃塵二星辰、
隱顯盤中抛二玉枕、方圓席上拂二機塵、天關撥轉移二門戶、誰肯吞聲出二巨秦。

人天眼目卷之中 終

人天眼目卷之下

法眼宗

師諱は文益、餘杭の人なり。俗姓は魯氏。七歳にして落髮、弱齡にして慕具、頗め講肆に造び、其微旨を究む。律匠希覺師、因に師を覩て曰はく、「子は乃ち我門中の游夏なり。」と。後來、羅漢琛禪師に參じて、己事を發明して、初め撫州の崇壽に住す。江南の李主、師の道を重んじて、迎へ請じて昇州の報恩に住せしむ。遷つて建康の清涼に住す。大に雪峯玄沙の道を振ふ。李後主、大法眼禪師と諡す。

【游夏】 子游、子夏、文學の達者なりと。
【羅漢琛】 玄沙備に嗣ぐ。
【李主】 江南に據つて南唐と號す。李昇といふ。
【李後主】 李煜。

華嚴六相義

此六相義、一を擧ぐれば齊しく收る。一一の法の上に、此六相義あり。經中初地の菩薩の爲に説くなり。



法眼六相義

華嚴六相義、同中還有異、異若異於同、全非三項佛意、諸佛意總別、何曾有二同異、

【不_レ留_レ意】 如是
心をいふ。

男子身中入_レ定_レ時、女子身中不_レ留_レ意、不_レ留_レ意絶_レ二名字_一、萬象明明無_レ二理事_一。

論_二華嚴_一六相義

若し究竟して、斷常邊邪の見を免れんと欲せば、須らく華嚴の六相義門を明かにすべし。則ち能く法に任せて施爲して、自ら能所を忘じ、縁に隨つて動靜して、有無を礙へず、大總持を具して、究竟して過なし。此六相義は、是れ世間法を辨じて、自在無礙、正縁起して、無分別理なり。若し善く見る者は、總持門を知ることを得て、諸見に墮せず、一を廢して一を取るべからず、雙立雙亡す。總に同時に繁興すと雖も有ならず。縦ひ各別を具するも、冥寂にして無に非ず。有心を以て知るべからず。無心を以て會すべからず。法界の内を詳に、總別の文なし。果海の中に就て、成壞の旨を絶す。今因門の智照に依つて、古徳略喻を以て顯す。六相といふは、一には總、二には別、三には同、四には異、五には成、六には壞。總相といふは、譬へば一舍の如し、是れ總相、椽等は是れ別相、椽等の諸縁、和合して舍を作す、各相違せず、餘物の作に非ず、故に同相と名く。椽等の諸縁、遞に相互望して、一一同じからざるを異相と名く。椽等の諸縁、一多相成を成相と名く、椽等の諸縁、各自法に住して木作すこと無し。故に壞相と名く。則ち知る、眞如の一心を總相と爲す。能く世間出世間法を攝するが故に、諸法を攝するに約して、總の名を得。能く諸縁を生じて別の號を成す。法法齊しきを同相と爲す。相に隨つて等しからざるを異相と稱す。境界を建立するが故に成と稱す。自位を動ぜざるを壞と爲す。又付

【法云云】 一心
主起故。
【異門】 穢土、淨
土。
【壞と爲す】 一分
だけを云ふ。

【寂に墮】 斷問。

【大旨】 宗門の見解に約すれば、則ち六相の不可なるを明す。

はく、一に總相といふは、一に多徳を合するが故に。二に別相は、多徳一に非ざるが故に。三に同相は、多義相違せざるが故に。四に異相は、多義相似にあらざるが故に。五に成相は、此諸義に由つて、縁起成ずるが故に。六に壞相は、諸縁各自性に住して移動せざるが故に。此上の六相義は、是れ菩薩初地の中に、世間一切の法門を觀通して、能く法界の宗に入つて、斷常の見到に墮せず。若し一向に別ならば、行位を逐うて宗に乖かん。若し一向に同ならば、進修を失して寂に墮せん。所以に位位即佛、塔堦宛然、重重磨鍊、木位動ぜず、斯れ則ち同異具に濟して、理事差はず。因果虧くることなし、迷悟全く別なり。大旨を論ぜんと欲せば、六相は還つて夢裏に河を渡るに同じ。若し正宗に約せば、十地は猶し空中の鳥跡の如し、若し圓修惑を斷じ習氣を對治するに約せば、理行相資くることなきに非ず。一を缺けば不可なり。是を以て、文殊は理を以て行を印して、差別の道虧くることなく、普賢は行を以て理を會して、根本の門廢せず。

法眼頌 明本作二宗
要偈七首

勤求即物契神勝積功、理契古今同、同得妙何處、澗松西北風。

示機

わねにいちごんあり、天上人間、若也不會、緣水青山。

毘盧頂上
一眞收不_レ得、萬類莫_レ能_レ該、蚊子生_二頭角_一、泥_レ罽_上五臺_一。

迦葉門前

觀面露堂、全撥不_レ覆藏、利竿頭倒卓、紅日上_二扶桑_一。

三界唯心

三界唯心萬法澄、盤鏝鈿釧一同金、映_レ塔碧艸自_レ春色、隔_レ葉黃鸝空_レ好音。

萬法唯識

不_三會出世立_二功勳_一、萬國分明艸木春、野老不_レ知堯舜力、蓼蓼打_レ鼓祭_二江

神

總頌

不_レ移_二寸步_一越_二河沙_一、地獄天堂總_レ一家、祖佛位中消息斷、何_レ妨_レ盡_二賞_一洛陽

【韻】天台德韶、法眼益に嗣ぐ。

韶國師宗風頌

【通玄云六】佛祖
向上の一句、不是
人間とは、是れ凡
夫の境界にあらず

通玄峯頂、不_レ是人間、心外無法、滿目青山。

留國師四料揀

古德頌

聞_レ聞_レ放

密室閉_ニ金鎖、閑步下_ニ松門、謾將_ニ無孔笛、吹出鳳遊雲。

聞_レ不聞_レ收

古松談_ニ般若、幽鳥弄_ニ眞如、況有_ニ歸眞處、長安豈久居。

不聞_レ聞_レ明

陽鳥啼聲噓、桃花笑臉開、芒鞋青竹杖、終日自徘徊。

不聞_レ不聞_レ暗

夜月輝_ニ肝膽、松風貫_ニ欄腰、脫然聲色外、切忌犯_ニ當頭。

百丈端頌

聞_レ聞_レ

秋江清淺時、白鷺和_ニ煙島、良哉觀世音、全身入_ニ荒艸。

聞_レ不聞_レ

解_レ語非_レ干_レ舌、能_レ言豈_レ是_レ聲、不知_レ常顯露、隱道有_ニ虧盈。

不聞_レ聞_レ

波生元是水、空性逐_ニ方圓、除_ニ却方圓器、胡孫夜簸_レ錢。

不聞不聞

理事兩俱忘、誰人敢度量、渾崙無縫罅、徧界不三曾藏。

法眼門庭

法眼宗は、箭鋒相拄へ、句意機に合す。始は則ち行行如たり。終は則ち激發して、漸く人心を服す。情解を削除し、機を調へ。物に順じ、滯を斥け昏を磨す。種種の機縁、盡く詳に擧げず。其大槩を觀るに、法眼の宗風、病に對して藥を施し、身を相して裁縫し、其器量に隨つて、情解を掃除す。法眼を見んと要す麼。人情盡る處、迹を留め難し。家破れ從教四壁の空なることを。

要訣 山堂

清涼大法眼、化を石頭城に旺んにす。首地藏の指頭を明め、顛に玄沙の祖禰を見、萬象を撥ひ萬象を撥はず。言前に全身を獨露す。絲頭あり絲頭あらず。句裏暗に自己を傳ふ、心空法了じ、情盡き見除き塵勞に應じて、了了然たり。刹海を統べて皓皓地なり。觸體常に世界に干り、鼻孔家風を摩觸す。重重華藏交參し、一一網珠圓瑩たり。以至、風柯月渚、眞心を顯露し、煙島雲林、妙法を宣明す。對揚準あり、唯證して乃ち知る。古今に互つて現成し、凡聖に即して一致なり。聲海外に傳へ、道寰中に滿つ。歴然として驗目前に在り。

【行行如】 剛なる貌。

【風柯】 宗鏡錄に「風柯、極樂國土臨風柯、而正念成、絲竹可以傳心、日擊以之存道。」

【石城】右頭城は李主の殿の在る所に於て、清凉寺の所在地なり。

【崑然】詩大雅に克岐克崑。ものしる。

【零秋】零は餘の字の意。秋末なり。【窮問】問斷の謂

【佛慧泉】雲居舜に嗣ぐ。泉萬卷なり。

【法疑經】古來傳經なりと云ひ、或は然らずと云ふ。

宛爾として石城猶在らば、此れ法祖宗なり。

古徳綱宗

一 點 靈 臺 輝 古 今 一 崑 然 弘 偉 莫 沈 吟 森 羅 影 裡 容 交 露 聲 色 門 頭 涉 五 深 裊 夏 雲 彰 千 峯 碧 零 秋 風 動 萬 家 砧 綿 綿 法 爾 無 窮 問 引 出 餘 吹 更 爽 襟

宗門雜錄上

拈華

舒王蔣山の佛慧泉禪師に問うて曰はく、「禪家に評ゆる世尊拈華は、何の典より出づ。」泉曰はく、「大藏經に載せざる所なり。」王曰はく、「余頃ろ翰苑に在つて、偶ま大梵王問佛決疑經三卷を見る。因に之を闚るに、經中に載する所甚だ詳なり。曰はく、梵王靈山會上に至つて、金色の波羅華を以て、佛に獻じ身を捨てて牀座と爲して、佛を請じて群生の爲に說法せしむ。世尊座に登つて、華を拈じて衆に示す。人天百萬、悉く皆措くこと罔し。獨り金色伽陀のみあつて、破顔微笑す。世尊曰はく、「吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相あり、摩訶大迦葉に分付す」と。此經多く帝王の事を談ず。世に聞く者なし。佛慧泉、其

博究なることを嘆す。

三身 新義

三身とは、謂はく、法身毘盧遮那、報身盧舍那、化身釋迦牟尼。衆生の身中に在つて、即ち寂智用なり。寂は是れ法身、智は是れ報身、用は是れ化身。

【金光明】義淨三藏譯す。十卷あり。

金光明最勝王經に曰はく、「一切の如來に三種の身あり。具足して阿耨菩提を攝受す。化身とは、如來昔修行地の中に在して、諸の衆生の爲に、種種の法を修し、自在力を得、衆生の意に隨ひ、衆生界に隨つて、種種の身を現す。是を化身と名く。應身とは、謂はく諸の如來、諸の菩薩の爲に、眞諦を説いて、其をして生死涅槃是れ一味なることを解了せしむるが故に、身見の衆生の怖畏歡喜を除くが爲の故に、無邊の佛法の而も本と作すが爲の故に、如實相應、如實相應智、本願力の故に、三十二相八十種好項背の圓光を具足す。是を應身と名く。法身とは、煩惱等の障を除くが爲に、諸法を具足するが爲の故に、唯如如の法、如如の智あり。是を法身と名く。前の二種の身は、假名有。後の第三身は、是れ眞實有。前の二身の爲に而も根本と作る。何を以ての故に。法如如を離れ、無分別智を離れて、一切の諸佛、別法あることなし」復次に諸佛自他を利益す。自利益は、是れ法如如。他を利益するは、是れ如如智なり」

五分法身

【瓔珞經】 寶佛念講す。十四卷あり。

【大乘莊嚴論】 十卷、唐波羅密多羅譯し。

【智通】 六祖能の弟子。
【楞伽經】 三譯あり。禪門に古來用ふるは四卷、楞伽の求那跋陀譯なり。劉宋時代。

瓔珞經に曰はく、「五分法身は、識性別なるを以てなり。戒香は身を攝し、定香は意を攝し、慧香は亂を攝し、解脫は倒見を攝し、度知は無明を攝す。是れ五分香なり。其身を瓔珞す」

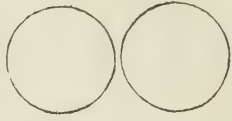
四 智 新續

大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。祕藏詮の註には曰はく、「佛、八識を轉じて四智を成ずといふは、八を大圓鏡智と爲す。七を平等性智と爲す。六を妙觀察智と爲す。前の五を成所作智と爲す。識は唯分別し、智は能く決斷す」大乗莊嚴論に曰はく、「八識を轉じて四智と成し、四智を束ねて三身を具す」古徳曰はく、「眼等の五識を、成所作智と爲す。意を妙觀察智と爲す、化身の攝なり。末那を平等性智と爲す、報身の攝なり。阿頼耶を大圓鏡智と爲す、法身の攝なり。」

智通禪師、楞伽經を讀むこと約千餘篇にして、而も三身四智を會せず。六祖を禮拜して其義を解せんことを求む。祖曰はく、「三身とは、清淨法身、汝が性なり。圓滿報身、汝が智なり。千百亿化身、汝が行なり。若し本性を離れて、別に三身を説かば、即ち有身無智と名く。若し三身自性あることなしと悟らば、即ち四智菩提と名く。吾偈を聽け、曰はく、「自性具三身、發明成四智、不離二見聞、超然登佛地、古今爲汝説、諦信永無迷、莫學馳求者、終日說菩提、通曰はく、「四智の義得て聞きつべしや。祖曰はく、「既に三身を會せば、便ち四智を明めん。何ぞ更に問ふや。若し三身を

離れて、別に四智を談せば、此を有智無身と名く。即ち此有智、還つて無智と成る。復偈を説いて曰はく、「大圓鏡智性清淨、平等性智心無病、妙觀衆智見非功、成所作智同圓鏡、五八六七果因轉、但用二名言無實性、若於三轉處不保留情、繁興永處那伽定。」

五識、眼耳鼻舌身、轉成所作智。



第六識、轉妙觀察智。

般若 大般若か
起信論 馬鳴の
造。

楞嚴經 十卷。
唐の般刺密帝譯す

毘婆沙論 二百
卷。唐玄奘譯す。

般若經に曰はく、「六根六塵、十二處と成る。六識を添へて和合して十八界と爲る」起信論に曰はく、「四種の法熏習の義を以ての故に。一には淨、謂はく眞如。二には染、謂はく無明。三には妄心、謂はく業識。四には妄塵、謂はく六塵」楞嚴經に曰はく、「六識業を造つて、招く所の惡報、六根従り出づ」華嚴に曰はく、「眼耳鼻舌身、心意諸の情根、此を以て常に流轉して、而も能く轉ずる者なし」起信論に又曰はく、「三界の虛偽は、唯心の所作、心を離れて即ち六塵の境界なし」毘婆沙論に、問うて曰はく、「心と意と識と何の差別か有る」答へて曰はく、「差別あることなし。心即ち是れ意、意即ち是れ識。皆同一義。火

の火と名け、亦烟と名け、亦熾と名くるが如し。般若に又曰はく、「若し如實に自性皆空なりと知らば、是を能く六根六塵六識を學する者と爲す一祖師云はく、「獨く現すれば俱に沙界を該ね、收攝すれば一微塵に在り。識る者は之を佛性と謂ふ。讚らざれば喚んで轉廻と作す。然も是の如くなりと雖も、踰過する者極めて多し。錯つて會する者少らず。」



第七末那識
轉三平等性智

【三細】一念忽起たるが故に、所縁の境に對せず。【六塵】六識。細識は七識。【二因】無明と境界。

楞伽に云はく、「末那とは、此には染汚意と曰ふ。恆に審に思算するが故に、亦傳送識と名く。佛、大慧に告げて謂はく、廣く説かば八あり、略して説かば二あり。内の現識、計して我と爲ば頼耶に屬す。外の分別事識、計して我と爲ば前の六識に屬す。眞は即ち識の實性、亦頼耶の淨分に屬するが故に、羸細の者あり。謂はく三細六塵なり。羸細の二識は皆無明住地に依つて起る。根本無明を以て、彼靜心を動じて、細識を起す。此細識に依つて、轉じて羸心を起す。無明を本と爲す。無明に依つて因と爲す。三細不相應の心を生ず。境界に依つて縁と爲して、六塵相應の心を生ず。故に曰ふ羸細の二識、各二因を具して、方に生住を得」現識とは、起信論に曰はく、「不相應の心なり。不思議熏に依るが故に生を得、不思議變に依るが故に住を得、此現識所現の境界、彼心海を動じて、諸の事識の浪を起す」分別事識とは、起信論に曰はく、「相應の心なり。境界に依るが故に生を得、心海

【此二識】 現識と分別事識。

【諸經要集】 一卷あり。五品に分つなり。生死流轉は皆識に依り起る。故に此書を引く。

【宗鏡】 一百卷あり。永明智覺の撰り。八王子云云、已上は因に約し、已下は果に約す。【果相】 王子解脱丈夫の名は。【解深密經】 五卷唐玄奘譯す。

【伽陀】 頌なり。

に依るが故に住を得るなり、此二識は、皆是れ無明眞如を重習し、染縁起と成ずるなり」論に曰はく、「當に知るべし、無明能く一切の染法を生ず。一切の染法は、皆是れ不覺の相なるが故に」諸經要集に曰はく、「識下白り上つて臍上に至つて滅する者は人中に生ず。上つて頭面に至つて滅する者は天に生ず。頭に至つて滅する者は永く輪廻を斷ず。上自り下腰に至つて滅する者は鬼趣なり。下つて足に至つて滅する者は地獄なり。論に曰はく、「若し妄心を離るるときは、則ち一切の境界の相ならして、唯一眞心のみなり」



第八阿頼耶識
轉二大圓鏡智

宗鏡に曰はく、「第八識は、異熟の性多きが故に、亦含藏識と名く、亦八王子と名く、亦八解脱と名く、亦八丈夫と名く。總じて四八三十二相あり。此は是れ果相。因智の報徳なり。七八の二識は相離れず」解深密經に曰はく、「此八識、能く前の六轉識を發起するが故に、第八識は、謂はく前世の中に、善不善の業を以て因と爲して、感を招いて、第八の異熟心を生ぜしむ、是れ果なり。此の阿頼耶は、即ち是れ眞心なり。自性を守らず、染淨の縁に隨つて、不合にして合して、能く一切眞俗の境界を含藏するが故に、含藏識と名く。明鏡の影像と合せずして、影像を合むが如し。亦如來藏識と名く」伽陀に曰はく、「諸法於三藏

【所依の識】 我執は能依、第八識は所依。

【分別】 善惡、人我等。

【編計】 所執なり

【其理】 其理事に約して論説す。
【其事】 善惡の事
【離心】 境あるの經文之なし。

識、識於法亦爾、更五爲因相、亦五爲果相。楞伽に曰はく、「若し二乘外道の諸見に着せず、方に能く如實に修行せば、他論の惡見を摧破し、及び我執等を捨て、能く妙慧を以て、所依の識を轉ずるは、即ち四智八識を轉ずるなり。如來自證地に入るとは、言は諸佛と同得同證するなり、又楞伽に曰はく、「佛、大慧に語けて曰く、然も彼諸識、是念を作さず、我等同時に展轉して因と爲ると。而して自心所現の境界に於て、分別執著して、俱時にして起り、差別の相なく、各自境を了す。註に曰はく、「彼諸識等、各自境を了すとは、此れ八識俱に能く自分の境を分別するが故に、唯是れ自心の妄現なることを知らざることを明す。謂はく色は是れ眼識の境、乃至賴耶の見分は、是れ第七識の境、根身種子器界は、是れ藏識の境。然も此八識、如來藏を離れて、別の自體なし、衆生知らざるを以ての故に、執して八識の名と爲す。諸佛之を證得するが故に、能く四智の用を成す。若し之を昧すときは、則ち八識執藏の號を起し、七識染汚の名を得、六識編計の情を起し、五識根塵の相に徇ふ。若し了知すれば、賴耶圓鏡の體を成じて、功德の門を持し、末那平等の源と爲つて、自他の性を一にす。第六觀察の妙を起し、正法の輪を轉ず。五識所作の功を興して、應化の迹を垂る。斯れ則ち一心動に匪ずして、識智自ら分れ、其體を轉ぜずして、但其名を轉じ、其理を分たずして、而も其事を分つ。但六識を伏して塵境を取らず、故に識滅と名く。是故に離心の境、文理俱に虛なり。即識の塵、詮量 據あり。狂心歇まず。歇めば即ち菩提、垢淨く心明かなれば、本來佛なり」

【阿陀那】第八識の源分なり。



第九 阿陀那識

亦純淨識と名く、公以論に曰はく、「説を阿陀那識、執持に寄せて、第九純淨識と爲す。五六七八等の識の如き、常に九識に依つて依止と爲す。凡愚了ぜず、妄に執して我と爲す。水の暴流すれども水体を離れず、諸の波浪等水を以て依と爲るが如し。故に五六七八の識、常に淨識を以て依と爲す。何ぞ九を謂うて淨識と爲す。二乗の人久しく生死業種に在つて、六七八の識、怖畏ありと爲すが故に、彼が信ど難きことを恐れて、方便して生死種の外に於て、別に淨識を立して、悲智をして漸漸に生ずることを得、識に達して智を成ぜしむ」深密經の頌に曰はく、「阿陀識甚深細、一切種子如暴流、我於凡愚不問演、恐彼分別執爲我。」

【予】 海岩自ら云
【此に藉る】 三身
四智八識等。

按ずるに、三身四智の諸説、經論を採據して、援據詳明なり。瀉仰の識を辨ずる處と、大いに相關係す。深禪正修の者を資けて、傍蹊を踏まずして、正路を行かしむべし。故に予取ることあり。往往に同流の士、必ず謂ん、吾單傳直指の宗、何ぞ此に藉ることを爲んと。殊に知らず、學道の者、心意識の爲に困苦せらるること甚しきことを、虚明自照は、木自他なけれども、境風搖揺として、倏然として走作す。通人達士猶未だ免れず。況んや其下なる者を乎。方便觀照の力なかるべけん乎。僅し其披剝の説に因つて、

其虛妄を破し、其策窟を掃たば、即ち吾が受用の處、指大圓鏡智なり。精舍驚取載で

石頭參同契 著語

【石頭】名は希遷
青原行思に嗣ぐ。
【參同契】五言四
十句にして、肇論
の萬物を會して已
と爲る者は其れ唯
だ聖人乎といふを
看て作れりとい
ふ。此篇凡聖自
他根境明暗、相交
參し、相共同し、
相合契することを
述ぶ。今一には
註せず。世同に此
歌註本多ければな
り。

然於ニ 眼色 火熱 四性 暗合ニ 色本 回而 門一 執事 靈源 人根 竺土 石頭參同契 誰是 能學 作嬰 生 無明 猗掌 展手 爾手 捨短 從長 者箇是 社杖子 負入 隨所 依水 自清 海安 河清 君報

依根 鼻香 水濕 如子 明明 聲元 不爾 回互 契理 枝派 道無 東西 依葉 舌鹹 地堅 如子 明二 聲元 不爾 回互 契理 枝派 道無 東西 依葉 舌鹹 地堅 如子 明二 聲元 不爾 回互 契理 枝派 道無 東西

本末須歸宗 唯我 尊卑用其語 不犯
 當明中一有暗 能知 勿以暗相遇 明還
 當暗中有有 暗必 勿以明相觀 非視
 明暗各相對 三見 比如前後步 無異
 萬物自有功 青爾 當言用及處 縱橫
 事存函蓋合 看細 理應箭鋒拄 十字
 承言須會宗 未兆 勿自立二規矩 難辨
 觸目不會道 又何 運足焉知路 惡也
 進步非近遠 高彌 迷隔山河固 瘳
 謹白參玄人 同歸 光陰莫二空度 誠哉
 寂音云はく、予嘗て深く考ふるに、此書凡そ四十餘句。而して明暗を以て論ずる者之を半
 にす。篇首便ち標して云はく、「靈源明皎潔、枝派暗流注」と。乃し知んぬ。明暗
 の意、此に根づくことを。又曰はく、「暗合上中言、明明二清濁句」と。調達して
 之を開發するなり。其宗を指し其趣を示すに至つて、則ち曰はく、「本末須歸宗、
 尊卑用其語」と。故に其下廣く明暗の句を序でて、突突聯聯として已まざる者は、色法
 の虚誑を決するに非ず。乃し是れ其語を明すのみ。洞山悟本、此旨を得、故に五位偏正の

説あり。臨濟の句中玄、雲門の隨波逐浪に至つて、異味なし。而るを晚輩其言を承けて、便ち明暗の中に、相藏露するの地あることを想ひ像る。亦諷らす乎。

五問

【自聰】南禪自聰といふ。達觀頴に嗣ぐ。

此れ蓋し當時義學の徒、相與に説を造つて、先聖を誣罔し、禪宗を非毀す。而るを自聰禪師、達觀頴和尚に問ふ。凡そ五問、邪謬を杜がんと欲す、故に之を辨詳す。

僧自聰、達觀頴和尚に問うて曰はく、「諸經論家多く言ふ、「西天迦葉自り師子尊者に至つて、祖師の相傳、此に至つて斷絶す」と。其實如何。」答へて曰はく、「呼此の如く説く者は生滅の心なり。殊に知らず法の爲に人を惜むことを。螢泉日に關ひ、雀滄海を填む。枉げて恥を勞するのみ。且二十四祖師子尊者、婆舍斯多を度し、兼ねて達磨達を出す。其緣備に唐の會稽の沙門靈徹、朱陵の沙門法炬が編する所の、寶林傳を序するに、并に前魏の天竺の三藏支那梁樓が、續法記に據るに、具に師子尊者、難に遇ふ以前、衣を傳へ法を付するの事を明す。大迦葉を首と爲して従り、直下の血脈、第二十五祖婆舍斯多、二十六祖不如密多、二十七祖般若多羅、菩提達磨に付す、即ち唐土の初祖なり。原るに支那梁樓三藏、震旦に乗り洛陽の白馬寺に抵るは、即ち前魏の常道卿公景元二年辛巳の歲なり。師子入滅して方に二年なり、是を以て懸に知んぬ、經論の諸師、後昆を誣罔することを。吁哉奈何。」

【常道卿公】魏主元帝、名は免、曹操の孫。

【宋】 劉宋、南朝。

問うて曰はく、「達磨大師、西天白り楞伽經を帯び來ると是なりや否や。」答へて曰はく、「非なり、好事の者の之を爲すのみ。且達磨單傳、心印不立文字、直指人心、見性成佛せしむ。豈四卷の經あらんや。」聰曰はく、「寶林傳亦是の如く説く。」穎曰はく、「編修の者詳討するに暇あらず。試に子が爲に之を詳にせん。夫れ楞伽經は三譯あり。而も初譯の四卷は、乃し宋の天竺の三藏求那跋陀の譯する所。次の十卷は、元魏の時、菩提流支譯す。流支と達磨と同時にして毒藥を達磨に下す者なり。後の七卷は、唐の天后の代に、于闐の三藏實叉難陀譯す。此を以て之を證するに、先後虛實知んぬべし。」仰山寂禪師、亦曾て此を辨す、其事甚だ明なり。

問うて曰はく、「傳法の偈翻譯なし。譬び付法藏傳の中此偈なし。以し諸家多く説く據なしと。願くば慈誨を垂れよ。」答へて曰はく、「噫、子孫支分し、是非鋒起して根究すること能はざるのみ。只達磨の如きんば未だ此土に入らざるに、已に唐言を會す。何を以てか之を知る。初め梁の武帝を見る時對問す、其事即ち知んぬべし。後に又二祖可大師十年侍す。以至立雪斷臂、祖業を志求すること、至つて勤誠なり。後に達磨告げて曰はく、「吾に一袈裟あり、汝に付して信と爲ん。世必ず疑ふ者あり。いはん、吾は西天の人、汝は此土の子、得法實に信じ難しと。汝當に吾衣を以て之を證すと云ふべし。」又曰はく、「釋迦聖師白り、般若多羅に至り、以て吾に及ぶ。皆衣を傳へて法を表し、法を傳へて偈を留む。吾今汝に付す。」偈に曰はく、「吾本來ニ於茲土、傳レ法救ニ迷情、一花開ニ五葉、結果自然成」と。

【開大師】 北齊の人、慧開。

因つて從上諸祖の偈を引いて、一一に之を授く。内には法印を傳へて、以て證心に契ひ、外には袈裟を付して、以て宗旨を定む。此を以て則ち知る、達磨、二祖に付すること決せり。此れ乃ち單傳口授にして、何ぞ翻譯するに暇あらん哉。」

問うて曰はく、「天台の智者、一心三觀の法門と、祖師の意と如何。」答へて曰はく、「子若し問はずんば吾言ひ難し。吾嘗て教中を觀るに、曰はく、「吾に正法眼藏あり、大迦葉に付囑す」と。且三乘五教の内に在らず。原るに佛祖の教、皆傳授あり。昔開大師、藏中に於て、龍樹所造の中論を得て、覽て第四卷に至る。諸法の性定、性あるときは、則ち因果等の事なしといふを破す。頌に曰ふ如き、「因緣所生法、我說即是空、亦名爲二假名、亦名二中道義。」次の頌に曰はく、「未嘗有一法、不從二因緣一生。是故一切法、無不三空。」此に由つて乃ち一心三觀を述して、空と曰ひ、假と曰ひ、中と曰ふ。若し教意に據らば、大凡の一偈に皆四句あつて、以て其意を成ずるのみ。智者、離して三觀と爲す、枝蔓に似たり。又未だ傳授を詳にせず。此に因つて便ち言ふ、「遠く龍樹に稟けて、樹を以て祖と爲す」と。近く思大に稟くること則ち知んぬべし。若し世を問てて承稟せば、吾恐らくは後世必ず聰利の人ありて、空しく佛經を看て、自ら釋迦より稟けん。豈其れ然らん乎。良に智者、大福德智慧辯才を具して、累りに帝師と爲るに由るが故に、一家の説を成ず。辭博く理微なり。而して後世の子孫、祖教を傳ふと稱して、乃し翻つて師子尊者、親しく法を付して、婆舍斯多に與へ以至此土の、六祖衣を傳へて法を付するを毀つて、以て邪解と

【籤】 驗なり。

爲す。嗚呼、吾若し備に論ぜば、即ち是非と成らん、子自ら之を詳にせよ。」

問うて曰はく、「達磨、此土に至つて自り、何に因つて、諸師の言教、西天の諸祖泊び六祖已上と同じからざる。牛頭の一宗、北秀、荷澤、南岳讓、青原思、言句漸く異に、見解差殊にして、各師門を黨して、互に毀り盛に至る。如何が諍を息むことを得去らん。」答へて曰はく、「怪い哉此問、且祖師此土に來ること、猶し一樹子の如し。地に就て種を下せば、因縁和合して芽を生ずるなり、種は即ち達磨并に芽は二祖なり。枝葉は即ち道副、總持、道育の徒なり。泊び二祖を種と爲し、三祖を芽と爲し、乃至六祖を種と爲し、南岳讓を芽と爲すなり、其れ牛頭、神秀、荷澤等は皆枝葉のみ。然も六祖の下枝葉繁茂して、子を生むこと亦多し。其種又風土の宜しき所を逐うて、之を採取して、葉を得るものは葉を貴び、枝を得るものは枝を貴ぶ。亦猶し樹の南に在つては橘と爲り、北に在つては枳と爲るがごとし。形味變ありと雖も、而も根本豈變ぜん乎。又日の東に在つては朝と爲り、西に在つては、暮と爲るに類す。日亦方を逐うて轉するときは、則ち輪影なり。其空は則ち轉せざることを必せり。復何ぞ怪ん哉。子但其内心を了ぜよ。其外法に隨ふこと莫れ。内心とは、其生死を脱す。外法とは、其愛惡を逐ふ。愛惡生ずるときは則ち佛祖を去ること甚だ遠し。子が爲に等閑に正宗及び横枝の言句を籤出す。各後に於て、其山序を述して、學者をして其嫡庶を明かならしむる者なり。」

覺夢堂重校ニ五家宗派一序

皇朝景德の間、吳の僧道原、傳燈三十卷を集む。曹溪自り下た列して兩派と爲す。一を南岳讓と曰ふ。讓、馬大師を出す、一を青原思と曰ふ。思、石頭遷を出す。兩派の下自り、又五宗を分つ。馬大師、八十四員の善知識を出す。内に百丈海あつて、黄檗運、大溈、二入出す。運の下に臨濟玄を出す。故に臨濟宗と號す。祐の下に大仰寂を出す。故に大仰宗と號す。八十四人の内、又天皇悟あり。悟、龍潭信を得たり。信、徳山鑿を得、鑿、雪峯存を得、存の下に、雲門宗、法眼宗を出す。石頭遷、藥山儼、天皇悟の一人を得。悟の下に、慧眞を得たり。眞、幽閑を得、閑、文賁を得、三世にして便ち絶す。唯藥山、雲巖晟を得、晟、洞山价を得、价、曹山寂を得、是を曹洞宗と爲す。今傳燈に、却つて雲門、法眼の兩宗を收めて、石頭下に歸するは誤れり。同時に道悟兩人あるに緣る。一を江陵城の西天王寺の道悟と曰ふは、渚宮の人なり、崔子玉が後胤なり。馬祖に嗣ぐ。元和十三年四月十三日に化す。正義大夫玄素、塔の銘を撰す。文幾んど千言、其略に曰はく、「馬祖祝して曰はく、他日舊處を離るること莫れ、故に渚宮に遷る」と。一を江陵城の東天皇寺の道悟、婺州東陽の人なり。姓は張氏、石頭に嗣ぐ。元和二年丁亥に化す。協律師符載が撰する所の碑あり。二碑に載する所の生緣出處甚だ詳なり。但道原が傳燈を採集するの日、一一親しく往いて討尋するに非ず。宛轉して人に託して、拊拾して得るに過ぎざるに緣る。其差誤すること知るべし、景德より今に至るまで、天下四海、傳燈を以て

【周金剛】 徳山景

【無盡】 張商英の居士號、兜率悅に參じて嗣ぐ。

【徑山】 國一禪師鶴林玄素に嗣法す牛頭法融下十一世にして、徑山の開祖。

【巖頭義】 徳山鑒に嗣ぐ。

據と爲す。列刹位に據つて宗を立する者と雖も、略究辨を加ふること能はず。惟り、丞相無盡居士、及び呂夏卿の二君子、會する毎に宗門の事を議す。嘗て曰はく、「石頭、樂山を得、山、曹洞の一宗を得。教理行果、言說宛轉す。且天王道悟の下に、箇の周金剛を出す。風を呵し雨を罵る。佛祖と雖も敢て、其鋒に嬰らず、恐くは天皇白り或は差誤あらん。」寂音尊者も亦嘗て之を疑うて曰はく、「道悟兩人あるに似たり。」と。無盡、後に達觀顯の處に於て、唐の符載が撰する所の、天皇道悟の塔の記を得、又丘玄素が作る所の、天王道悟の塔の記を討ね得て、賣んで以て徧く諸方に示して曰はく、「吾嘗て疑ふ。徳山、洞山、同じく石頭下に出づ、甚に因つてか垂手の處、死活同じからざると。今丘と符が二記を以て、之を證するに朗然として明白なり。方に吾法を擇び人を驗むるの謬らざることをして信ずるのみ。」と。寂音曰はく、「圭峯、斐相國に答ふる宗趣の狀に、「馬祖の嗣六人を列す。首を江陵の道悟と曰ふ一其下の註に曰はく、「兼ねて徑山に稟く」と。今安に雲門臨濟の二宗を以て、競ふ者一笑を發すべし、略梗槩を書して、以て明達の者に傳ふ。庶くは五家の正派は、是の如くならんことを知らん而已。」

宗門雜錄下

巖頭三句

【彌黎麼羅】 無分
曉の貌

師、上堂云はく、「大凡唱教は、無欲の中従り三句を流出す。祇是れ理論す、咬去咬住、欲去不_レ去、欲住不_レ住、或時は一向に去らず、或時は一向に住せざることを。並に方所を知らず。明眼の漢は菓白_レ没し、突然地なり。若し戰を論ぜば也箇箇に、須らく咬猪狗の手段なるべし。若し未だ透らず未だ明らめずんば、亦須らく七八分を得て、方に入作するに可なるべし。若し從來の眼目、彌黎麼羅ならば、且く亂に嚮袋を呈すること莫れ。錯、彌が腰を撻折せん、言ふこと莫れ、「道はず」と。

按ずるに巖頭の三句は、「咬去咬住是一」「欲去不_レ去、欲住不_レ住是一」「或時一向不去、或時一向不_レ住是一」舊本には、「咬去を以て一と爲し」「咬住を一と爲し」「去らんと欲して去らず住まらんと欲して住まらざるを一と爲す」更に或時は一向に去らず、或時は一向に住まらずの句を顧みずとは、誤れり。今既に之を正す、又略上堂を擧して據と爲す。

汾陽五門句

『如何なるか是れ入門の句。』汾陽曰はく、『遠客投_ニ知已_一、暫坐笑吟吟。』

石門聰曰はく、『六觀不_ニ相識_一、口中道_ニ遠來_一。』又曰はく、『瞎。』

『如何なるか是れ門裡の句。』汾陽曰はく、『四相排_ニ班立_一、凝情望_ニ聖容_一。』

石門聰曰はく、『密室不_レ通_レ風、獨自歸_ニ家坐_一。』又曰はく、『收。』

【濟濟】 威儀多き貌。

【華論】 羅什下の四哲の一人、華法師の述。

『如何なるか是れ當門の句。』汾陽曰はく、『坐ニ斷干差路、舒レ光 照ニ萬機。』

石門曰はく、『開門不ノ扇ノ戸、按レ劍 看ニ四方。』又曰はく、『斬。』

『如何なるか是れ出門の句。』汾陽曰はく、『舉レ目 望ニ江山、遍界無ニ相識。』

石門曰はく、『威儀不ノ整望ニ長安。』又曰はく、『貶。』

『如何なるか是れ門外の句。』汾陽曰はく、『樵子渡ニ荒郊、騎レ牛常扣角。』

石門曰はく、『威儀 濟濟 問ニ長安。』又曰はく、『賓中賓。』

肇論四不遷 古德著語

旋嵐偃嶽而常靜 與三者裡一

江河競注而不流 水洒不著

野馬飄鼓而不動 風吹不著

日月歷天而不周 光明無二 背面一

巖頭四藏鋒

達觀顯曰はく、『四藏鋒は、乃ち巖頭巖禪師の立つる所なり。謂はく、就事は事を全うするなり、就理は理を全うするなり。入就は理事俱に全うするなり。出就は理事俱に泯するなり。後の學者、前輩所立の意に根づかず、輒く就を易へて袖と爲して、晚生の衲子をし

て宗師の袖中に、物あつて出入して、之を見るべからず。故に詳密にせざることを得ず。

達観鏡

就事

就事藏鋒事 獨全、不於理上取中旨詮、錦鱗若不吞香餌、擺尾搖頭戲碧川。

就理

就理藏鋒理 最微、豈從理上立毫釐、新羅鶴子飛天外、青擗竹林間死雀兒。

入就藏鋒理事該、碧潭風起動雲雷、禹門三月桃花浪、戴角擎頭兔曝肥。

出就

出就藏鋒理事忘、長天赫日更無妨、雷公電姥分明說、霹靂聲中石火光。

古德頌

運水搬柴不二是塵、頭頭全現三法王身、扁舟蕩漾滄溟外、巨浪如山浦白銀。

就事

全身直下露堂堂、妙體由來不覆藏、觸處現成翻辨的、摩挲俱放白毫光。就全機電卷幾人知、貶上眉毛已是遲、顛面不知聞寶藏、躡踏門外草離離。

源瀧威光滿二世間、法王號令合當、然門前萬古長安道、一舉脚踏萬里天。出就

宗門三印

【玉泉達】開先宗
世に嗣ぐ。雪竇顯六

一印印空。石門聰曰はく、「吾柱ニ上齧。玉泉達曰はく、「萬象收ニ歸古鑑中。」
一印印水。石門曰はく、「説話對二譚人。玉泉曰はく、「秋蟾影落下江裏。」
一印印泥。石門曰はく、「頭上喫ノ棒、口裏嚼嚼。玉泉曰はく、「細觀文彩未生時。」

雲竇頌

印空印水。炳然字義還迷、黃頭大士不識、敢問誰得親提。
印泥印空。匣地寒濤競起、其中無限鱗龍、幾處爭求出。
印水印泥。衲子不辨二西東、撥二開向上一竅、千聖齊立下風。

雲峯悅頌

一印印空。明月清風、燦迦羅眼、齋後之鐘。
一印印水。徒張唇舌、未涉流沙、洪濤競起。
一印印泥。賢愚共知、換轉鼻孔、頂上金槌。

【黃葉初】開先宗
世に嗣ぐ。雪竇顯六

黃葉初頌

印空印水。高低物皆齊、若論炳然文彩、不妨南北東西。
印泥印空。雷電風雲四起、乘時直透龍門、切忌曝曬、尾

印水印泥印空、四方八面玲瓏、大海龍吟雲起、高山虎嘯生風。

三朝王子

僧問ふ、『王子、未だ九五に登らざる時如何。』

【六宮】前の一宮後の五宮等なり。

汾陽曰はく、『六宮歌ニ雪曲、八國聽ニ簫韶。』五祖演曰はく、『逢人多問路。』翠巖宗曰はく、『深宮雖不出、化外已傳芳。』

『正に九五に登る時如何。』

汾陽曰はく、『玉璽不彰文、萬邦咸稽首。』五祖曰はく、『天下太平。』翠巖曰はく、『兩

班依ニ玉殿、十道盡來朝。』

『九五に登る後如何。』

汾陽曰はく、『素服問ニ田翁、遍界無ニ相識。』五祖曰はく、『誰論ニ好聽。』翠巖曰はく、『漁

樵歌ニ滿路、野老唱ニ豐年。』

汾陽頌

三朝王子貴兼尊、今古傳聞孰可分、八國六宮朝化美、汾陽的印莫ニ紛紜。

南明愼獅子話

僧問ふ、『獅子未だ窟を出でざる時如何。』南明曰はく、『清風匝地。』

【十道】唐太宗、支那を十道に分つて治す。

報恩從曰はく、『鋒鈍難レ擊。』

『窟を出でて後如何。』南明曰はく、『群狐腦裂。』

報恩曰はく、『藏身無レ路。』

『出でんと欲して未だ出でざる時如何。』南明曰はく、『噎。』

報恩曰はく、『命如ニ懸絲。』

南明頷

兀坐如癡似不能、驀然翻轉便掀騰、百年妖怪皆潛伏、深隱雲山

千萬層。

一聲哮吼震乾坤、百怪群靈喪膽魄、澗水逆流山影轉、眼花空際亂紛紛。

欲出未出誰能知、踞地翻身也太奇、千手大悲難摸捺、從教千古衆人疑。

長蘆祖印福寶劍話

僧問ふ、寶劍未だ匣を出でざる時如何。祖印曰はく、『澁。』

雪竈顯曰はく、『神光射斗牛。』慈明曰はく、『響。』翠巖曰はく、『切忌道著。』

『匣を出でて後如何。』祖印曰はく、『利。』

雪竈曰はく、『千兵易得、一將難求。』慈明、嘘一聲。翠巖曰はく、『天魔膽落。』

【長蘆印】 雪竈顯に嗣ぐ。

【千兵云云】 ただ

明日は雨、今日は晴の心。

【嘘】 エヘント。本分からみればと

【噎】 驚く時、又悲哀の時に發する「ヤア」の俗語。又喟に類す。

智門祚蓮華話

僧問ふ、「蓮華未だ水を出でざる時如何。」智門の曰はく、「蓮華。」

慈明曰はく、「水深蓋不レ得。」浮山曰はく、「焦輒打著。」連底凍。」天柱曰はく、「根深連」

蒂。經ニ句。雨。」

「水を出でて後如何。」智門の曰はく、「荷葉。」

慈明曰はく、「不レ碍。」往來看。」浮山曰はく、「洋澗左蠶。」無レ風浪起。」天柱曰はく、「水仙」

頭上實希奇。」

「華開いて後如何。」慈明曰はく、「南北露香。」

「子を結んで後如何。」慈明曰はく、「餒魚餒龜。」

雪 寶 頌

蓮華荷葉報君知、出水何如未出時、江北江南問二王老、一狐疑了一狐疑。

風穴古鏡話

僧問ふ、「古鏡未だ磨せざる時如何。」風穴云はく、「天魔墮落。」

慈明曰はく、「新羅打鼓。」翠巖曰はく、「照二破天下人觸。」洞山聰曰はく、「此去漢陽不」

遠。」

「磨して後如何。」風穴云はく、「軒轅無レ道。」

【焦輒云云】 十方も三世もないと。

【照破云云】 熱時は扇子。

【軒轅云云】 一字をも不説。

慈明曰はく、「西天作舞。」卒嚴曰はく、「黑似漆。」洞山曰はく、「黃鶴樓前雙鶴洲。」

五祖演仙陀婆話

【仙陀婆】 伶俐俊發の人を仙陀の客といふ。七孔八竅で、自由自在に通ずる。

僧問ふ、「王、仙陀婆を索むる時如何。」五祖曰はく、「七孔八竅。」如何なるか是れ、王、仙陀婆を索む。「五祖曰はく、「鸞鶴未排齊ニ號令。」如何なるか是れ仙陀婆。「五祖曰はく、「眼闢耳熱、俯禮拜す。」五祖曰はく、「點。」

鏡清梵問ニ風穴一六刮 答附 別峯

【鏡清息】 雪峯存に嗣く。
【落葉云云】 念起して佛と思ふは煩惱なり。

如何なるか是れ毛に就て塵を刮る。「風穴曰はく、「落葉不煩ニ人掃去、自有下風搖竹影。」來上」
別峯曰はく、「裘毛卓堅。」
如何なるか是れ皮に就て毛を刮る。「風穴曰はく、「呼吸縱饒幽谷響、尋眞那得遇ニ當人。」

別峯曰はく、「落處不停誰解石。」

【那吒云云】 骨を折つて父に還し、肉を折つて母に還すと。

如何なるか是れ肉に就て皮を刮る。「風穴曰はく、「卸下直教ニ天帝肯、那吒太子不レ容君。」
別峯曰はく、「顏看ニ紅爛處、暢ニ殺子平生。」

『如何なるか是れ骨に就て肉を刮る。風穴曰はく、『醍醐既消身病愈、性海玄遠不假舟。』別峯曰はく、『破也墮也。』』

『如何なるか是れ髓に就て骨を刮る。風穴曰はく、『釋迦親遇二燃燈佛、授記不聞二說法音。』別法曰はく、『手不_レ及_レ處爭著_レ力。』』

『只髓の如きんば又如何が刮らん。風穴曰はく、『設使空花結_二空果、木馬那教_二大馬追。』別峯曰はく、『賊入_二空城。』』

五宗問答

僧問ふ『如何なるか是れ臨濟下の事。五祖演曰はく、『五逆聞_レ雷。』』

和山方曰はく、『照用齊行。正堂辨曰はく、『我終不_二向_レ備説。』護國元云はく、『殺入活人不_レ眨_レ眼。雪堂行云はく、『六合遭_二塗炭。』』

『雲門宗。五祖曰はく、『紅旗閃爍。』』

和山曰はく、『理事俱備。正堂曰はく、『木馬上_二金梯。』護國云はく、『頂門三眼耀_二乾坤。』』

雪堂云はく、『千波影裏草_二紅旗。』』

『瀉仰宗。五祖云はく、『斷碑横_二古路。』』

和山云はく、『暗機回合。正堂云はく、『日前無_二異艸。』護國云はく、『箭鋒相拄不_二相饒。』』

雪堂曰はく、『自折合取。』』

『和山』 和は禾の誤か。
『禾山方』 黃龍死心に嗣ぐ。
『正堂辨』 佛眼遠に嗣ぐ。
『雪堂行』 佛眼遠に嗣ぐ。
『護國元』 此庵と圓悟勤に嗣ぐ。

佛慈鑑 覺範洪に副ぐ。

曹洞宗。五祖云はく、馳書不到家。

和山云はく、偏正叶同。正堂云はく、鶴宿三梧枝。護國云はく、手執三夜明符、幾箇知二

天曉。雪堂云はく、當頭不犯。

法眼宗。五祖云はく、巡人犯夜。

和山云はく、何止唯心。正堂云はく、切忌違時失候。護國云はく、推

不二向前、約不退後。雪堂云はく、無角鐵牛眠。少室。

寶華佛慈鑑頌ニ五宗一

臨濟

銅頭鐵額百家冤、一喝雙分照用全、三尺吹毛定寰宇、臨行拋向驢邊。

雲門

三句都將一串穿、等閑掛向御樓前、幾多行客眼定動、東海鯉魚飛上天。

漚仰

一箇撒向千萬箇、簸箕解說無生話、艸堂睡起齊盧都、寂子要須原夢破。

曹洞

紫庭黃門帶春溫、寢殿何人侍至尊、長愛百司分職處、玉鞭敲破鏡出金門。

法眼

溪光野色渡樓臺、一笛遙聞奏落梅、風送三斷雲一歸嶺去、月和三流水一過。

橋來はしきま

圓悟五家宗要

臨濟は則ち全機大用、棒喝交馳、劍刃上に人を求め、電光中に手を垂る。雲門は則ち北斗に身を藏し、金風體露、三句辨取し、一鐵空に遶る。曹洞は則ち、君臣道に合ひ、偏正相資け、鳥道玄路、金針玉線、萬仰は則ち、師資唱和し、父子一家、明暗交馳して、語默露はさず。法眼は則ち、聞聲悟道、見色明心、句裡鋒を藏し、言中に響あり。

如上の五家、聲を改め調を換へて、妙門を展拓し、俗を易へ風を移して、千方百面、盡く無中に向つて唱へ出して、曲げて初機の爲にす。若し是れ俊流ならば、朕迹を留めず、露布を掀翻し、葛藤を截斷せん。然らば則ち千兵は得易く、一特は求め難し。艸に入つて人を尋ね、聊か一線を通せん、機前に路あり。向はんと擬せば則ち飛く。句下に私なし、動すれば策白を成す。靈鋒の寶劍、觀露堂堂、穀に滯り封に迷はば種草とするに堪へず。

楊無爲頌ニ五宗一 諸祖

臨濟

正法眼藏、瞎驢邊滅、黃檗老婆、大愚饒舌。

雲門

【如上】 已下五家の總語。
 【聲を改め云云】 五家の門風の異を【俗を易へ】 接待を論ずるときは。【朕迹】 五家法要の。【艸に入つて】 五家各爲一人。【句下に云云】 思惟に涉らず、直下に説き出す。【楊無爲】 天衣懷に參じて嗣ぐ。雲門宗の居士、名は傑、禮部と爲る。

慈雲之塔、太醫之師、瞻之仰之、雙峯巍巍、懶融不得西天鉢、直付黃梅路上兒。

五祖

栽松何老、傳衣何少、前身後身、一夢兩覺、白玉花開峯頂頭、明月千年冷相照。

六祖

石墜腰間春碓鳴、老盧便重便輕、黃梅衣鉢雖親得、猶較曹溪數十程。

北宗

鑑上時時拂舊痕、鳥啼花笑幾回春、白蓮峯頂無消息、鐵鉢輪他踏碓人。

栽松道者

日出而作、栽松爲樂、昔栽幾何、今滿巖岳、白頭人去小兒歸、笑倒林梢千歲鶴。

牛頭

紫氣氤氳透白雲、囚逢三宗匠指迷津、銜花百鳥空惆悵不見庵中舊主人。

永嘉

了知生死不相關、不到曹溪也是閑、剛被老盧延一宿、重教三言句落人間。

【婆裙子】 雪峯存

雲門

輾出木輓ニ迷ニ了眼、借ニ婆裙子一拜ニ婆年、一瓢惡水猶嫌レ少、缺ニ負蒲鞋舊價爲一

摩隣四日、混沌八竅、尺短寸長、一多二少、雲去雲來、日月交照、枯華了

也、不勞ニ微笑。

天衣

殘年七十、九坐ニ道場、棘曲松直、山高水長、雨笠煙蓑人不識、一聲

秋笛落ニ瀟湘。

大陽

狸奴白牯問ニ崑崙、金鎖無鬚密閉門、如意寶珠沈ニ海底、隣家收得付ニ兒孫。

投子

一隻履兩牛皮、金烏啼處木鷄飛、半夜賣油翁發レ笑、白頭生ニ得黑頭兒。

雲峰

眞不掩レ僞、曲不藏レ直、祖師冤魔、人天宿德、二千八百顆明珠、三生藏裡人誰識。

黃龍

佛手驢脚、生絲纏縛、雲中老鶴唳三聲、海底鯉魚生ニ兩角。

白雲

【九】 傳記には七
【轅曲云云】 この
二句は上堂の語。
【雨笠云云】 天衣
は素漁者、今は説
法度生に比す。

楊岐石牛、老生おいていさどくがしうナ一擲、或鷹あつらふやうやくにぶね清風、或呼あつらふやうやくにぶね三隴谷、轉まをせんしつをまじ方作せんをりつ劇、分せんをりつ三成せんをりつ六、
 白雲山下草綿綿、一度春來一度綠。

三 種 法 身 古 德

「如何なるか是れ法身の體。」山花開似錦、澗水湛如藍。
 「如何なるか是れ法身の用。」夜坐連雲石、春栽帶雨松。
 「如何なるか是れ法身。」柳色黃金嫩、梨花白雪香。

三 種 法 界

「佛未だ出世せざる時如何。」天下太平。
 「出世して後如何。」特地一場愁。
 「出と未出との時如何。」知恩者少、負恩者多。

五 眼 眼

「如何なるか是れ肉眼。」憎愛何曾足、貪瞋事轉多。
 「如何なるか是れ天眼。」恢恢常不濕、歷歷太分明。
 「如何なるか是れ法眼。」青山常不露、徧界不藏。

【憎愛】 答話なり
 下皆之に教ふ。此
 語は、向上の處に
 何事もなしとの意

「如何なるか是れ慧眼。」
 「金地遙招手、江陵暗點頭。」
 「如何なるか是れ佛眼。」
 「慈悲利一切、方便有ニ多門。」

寶 古德

「如何なるか是れ佛。」
 「何處不稱尊。」
 「如何なるか是れ法。」
 「車不ニ横推、理無ニ曲斷。」
 「如何なるか是れ僧。」
 「閑持ニ經卷、倚松立、笑問客從ニ何處一來。」

拄杖話

「如何なるか是れ欄に拄杖子有る。」
 「暮逢ニ敵手、難ノ載行。」
 「如何なるか是れ欄に拄杖子無き。」
 「琴遇ニ知音、始ノ好彈。」
 「如何なるか是れ拄杖子。」
 「扶過ニ斷橋水、伴歸ニ無月村。」

句 意 古德

句到つて意到らず。
 古澗寒泉涌、青松露寒。
 意到つて句到らず。
 石長無根樹、山藏不動雲。
 意句俱に到る。
 天共ニ白雲一曉、水和ニ明月一流。

【曉】 古本に遠。

意句俱に到らず。青天無三片雲、綠水風波起。

六祖問答

『如何なるか是れ達磨一隻の履。』『九年冷坐無二人議、五葉華開、徧界香。』又云はく、『蹈ニ破鐵圍山。』

『如何なるか是れ一祖一隻の臂。』『看看三尺雪、令一人毛骨寒。』又云はく、『提ニ携天。』

『如何なるか是れ三祖一身の罪。』『覓レ不可得。』又云はく、『本白無ニ瑕類、捏レ口強。』

『如何なるか是れ四祖一隻の虎。』『威雄震十方、聲光動寰宇。』又云はく、『眼光百步威。』

『如何なるか是れ五祖一株の松。』『不圖標ニ境致、且要壯家風。』

『如何なるか是れ六祖一張の確。』『蹈ニ著關楨子、方知有與無。』

十無問答

『如何なるか是れ無爲國。』『高臥羲皇上、行歌堯舜時。』

無星秤。斤兩甚分明。無根樹。不假二東皇力、常聞ニ俊鉢花。

【一隻の虎】 四祖と牛頭の法融との問話、言下に頭は大悟す。

【義皇】 陶淵明自ら曰ふ。

無底鉢。托來載。二月月。放下時。乾坤。

無絃琴。不是知音。莫三。與彈。

無底船。空載二月。明一。歸。

無生曲。一曲兩曲。無八人會。雨過夜塘。秋水深。

無孔笛。等閑吹。一曲。共賞。太平時。

無鬚鎖。掣開難。動手。合定。不。通風。

無底籃。能收。四大海。包。括。五須彌。

鼓山。十無頌。

無影樹

秀發春。光。輪。劫。外。根。苗。曾。不。染。塵。泥。森。森。翠。幹。雲。長。掛。密。密。雲。枝。鳥。莫。栖。
曉日不。明。花。芬。秋。風。難。擺。韻。長。凄。栽。培。昔。向。無。何。有。不。落。青。黃。鎖。二。四。
時。

無孔鏡

威音那。畔。曾。拍。得。袖。裡。密。藏。非。黑。白。三。關。擊。碎。浪。濤。平。萬。法。鏡。開。大。地。窄。
團團。觀。面。露。二。規。模。了。了。圓。成。無。二。比。格。高。提。三。祖。印。一。發。光。寒。直。得。昆。耶。口。
掛。鏡。

無孔笛

【無何有】 莊子の
逍遙遊篇にいふ。

一曲風前格調高、金篇玉管謾徒勞、木人秦得碧雲合、石女吹回煖氣多、
清涼適然超二世界、妙音忘聽了二秋毫、相逢者遇二知音者、吹二起儂家劫外歌、

無縫塔

團圓佛眼不能窺、底事巍巍聖莫知、香夢幾重藏不得、寒光一點照無時、
觸發識盡方還備、色相情忘始到伊、靚面堂堂難辨的、會郎潦倒號難提、

無底籃

不假工夫造作成、功成作略自縱橫、死蛇若遇須二盛取、茶園全提携便行、

劫外好將提二日月、禹門時把撫二鯢鯨、高懸二無景樹頭一著、莫與二盲人一打葛藤上

無鎖鎖

拈來切忌兩頭搖、覷面機關莫二放饒、撒二手那邊一家穩密、遲疑只箇路迢遙、
青霄雲外無二關鑰、瞞劫春回長二異黃、佛祖口門俱鎖斷、不_レ干二唇吻一始全超、

無星秤

斤兩不_レ留分二買賣、商量不_レ到莫_レ饑伊、定盤光彩星難辨、平等橫衡數
自知、

粵漢始堆_レ論_レ的當、盲人方解_レ整_レ高低、閑來收推_レ乾坤外、無限天龍

【推】 一本に掛。

【會郎】 雪峯存、
【難提】 卵塔と提あり。

暗躰眉あんたいまゆ

無底鉢むていひつ

廣嶺全提くわうりやうぜんてい 總謾傳そうまんでん 收まひ 羅萬法らばんぽう 未ま 渾崙こんろん 擊う 來き 應おう 供く 非ひ 干かん 手て 飽あ 去き 馳ち 求もと 不ず 點てん

唇くちびる

餓飯殘羹がはんざんけい 誰たれ 旨著しやく 騰たふ 今いま 耀やく 古こ 自みづか 超こ 倫りん 趙州ちゆう 老漢らうかん 何なん 施設せつせ 分ぶん 付つ 叢林そうじん 一いつ 知ち

幾いく 春はる

無底鉢むていひつ

不ふ 勞らう 三さん 斤しん 斧ふ 雕鏤てうらう 就しゆう 肯か 使し 二に 焦しやう 桐とう 假か 合が 成じやう 絕けつ 掛け 二に 纒せん 絲し 一いつ 新しん 二に 格調かくてう 一いつ 了りやう 無む 二に 聲響せいきやう 一いつ 奏そう

玄げん 音おん

有時あるとき 彈だん 向かう 二に 青霄しやうせう 外がい 幾度いくた 閑懸かんげん 二に 碧洞しやくどう 深しん 惆悵ちゆうたう 罕かん 三さん 逢ほう 二に 穿せん 耳容じにやう 一いつ 偃溪えんせき 流水りゆうすい

韻沈沈いんしんしん

無底船むていせん

閑かん 權けん 芳ほう 艸しゆう 一いつ 深しん 深しん 渡だ 祇ぎ 接けつ 二に 中ちゆう 途と 一いつ 趣しゆ 浪流らうりゆう 不ふ 犯はん 二に 精波しやうぱ 還えん 到たう 岸あん 歸き 乘じやう 二に 明月めいげつ 一いつ

罷ばい 垂し 一いつ 垂し 鉤こう

蘆花ろか 深處しんじよ 和わ 雲泊うんぱく 風浪ふうらう 高時かうじ 任にん 性浮しやうぶ 緬想べんきやう 華亭かうてい 煙雨えんう 客かく 幾いく 多た 聲響せいきやう 謾まん 悠ゆう

悠ゆう

【趙州云云】 喫粥して洗鉢し去れと

五家要括

臨濟

南嶽馬祖百丈遷、臨興南穴首山汾、慈明南會開二一、

曹洞

百丈派出大溈祐、香嚴仰山親得紹、南塔芭蕉清續傳、兒孫未見其後。

雲門

南原葉山雲洞祖、雲膺同安丕志附、梁山親得大陽玄、投子芙蓉淳獨步。

法眼

青石葉山接德山、雪峯去門香林遠、北塔雪竇付大衣、一本從茲門大顯。

神光

雪峯傍出玄沙備、地藏法眼益尊貴、韶國師傳壽興津、佛

新羅

法新羅而已耳、達磨西來九年默坐、獨り神光雪に立つて、斷臂自證す。巧説す

始

ること得ず。只心傳を得たり。上根既に契うて、便ち西に歸らんと欲す。猶中下の機を恰んで、強ひて二十字を留む。之を實

明

性の偽と稱す、翻覆して之を讀めば、四十韻を成す。各旨あり。蓋し老婆心切にして、狼藉少らず、庶幾ば、後代の

【葉山】一本、天龍に作る。

【壽】永明智覺。

【津】朝鮮に法眼派下の禪多く傳ふ。

【神光】二祖慧下

法新羅而已耳、達磨西來九年默坐、獨り神光雪に立つて、斷臂自證す。巧説すること得ず。只心傳を得たり。上根既に契うて、便ち西に歸らんと欲す。猶中下の機を恰んで、強ひて二十字を留む。之を實性之偽と稱す、翻覆して之を讀めば、四十韻を成す。各旨あり。蓋し老婆心切にして、狼藉少らず、庶幾ば、後代の

『缺齒云云』達磨
大師の法難に遇ひ
し故事。

子孫、指に因つて月を見ることを。儻し箇の漢あり、性字未だ形れざるの前に向つて、頷略は文彩自ら彰れて、他より得るに匪ず、翻つて缺齒の老胡を笑ふ。正に好し痛く拄杖を與ふるに。

靈隱慧照大師

可光述す。

重修人天眼目集後序

【影迹】ただこの一法の。
 【前言】今は五家諸祖の糟粕の謂ひか。
 【是に在】文字言句の上になり。
 【機語】垂示說法等。
 【傳抄】寫し取るの初刊。
 【初出の本】晦岩

【重んずる所】言句等の重病。
 【蕪】子の義振の義。
 【寶祐】南宋憲宗の年號、日本後深草天皇正嘉二年。
 【戊午】八年。
 【物初大觀】北朝す。育王に住す。

一法支れて五宗と爲る、宗各旨あり。夫旨の歸する所を透れば、則ち一法なり、五宗擧げて遮るることを得ず。今は乃ち然らず。五宗の影迹を捕躡し、前言の贅贖を掇拾す。宗旨果して是に在らんや。古人の句は死句なり、而して活人の具と爲すに足る。句は死活に非ず、不れば則ち人死し句死す。淳熙の間、越山に照晦岩といふ青あり、五宗の機語の要を真類して、人天眼目と曰ふ。箱子今に至るまで傳抄す。人其書あれば、徒に珍藏すること左券の如し。之を魚魯にし、之を舛差すれども理せず。而も互に増損糝雜あり。又獨り未だ初出の本果して如何といふことを知らざるなり。余其然ることを病み、應酬の冗を輟めて、蒐酌して之を是正す。稍其所要を得たり。後進をして、従上の宗門、爪牙の人の爲にする蓋し此の如くなることを知らしむ。既にして自ら輯うて曰はく、「言句の策窟は、今時の學者の大病なり。竊に以れば徒に調するに、其重んずる所を攻めずして、反つて以て之を益す、是れ其病蒂に墮るなり。然も既に病めり、此に即して之に藥して、用ふる所何如と願る。且宗旨果して是に在らざらんや。若し吾儕、此に由つて益し、夫人天を明めば古に譲らじ。豈是れ以て夫人天に眼目たるにあらざらんや。因つて其後に書す。時に寶祐歲戊午に次る、休夏後の五日、慈雲住山物初大觀序す。」

點檢。對相。校。覆。

【乾元】元明時代
この年號なし。

是書の由つて作る所は、備に晦岩、物初、兩翁の序跋に見ゆ。然りと雖も趙宋全盛の時、南詢の鴉子、傳寫して烏焉を馬と成すの誤なきに非ず。爰に了部禪人あり、意を鋭うして克く正す。始め傳燈より以下、五家の宗派尊宿の別録に至るまで、傍羅曲探點對校離せざるは莫し。遂に眞本と成る。謂ゆる孟氏の功、禹の下に在らざる者乎。淨智道人、顔を希ひ蘭を慕うて、工に命じて板に鏤め、以て其傳を壽うす。其心を用ふることも亦勤めたりと謂つべし。學者儻し扁して人天眼目と曰ふ所以を思はば、則ち功浪りに施さざる耳。

乾元癸卯正月 人日桂堂叟瓊林記す。

人天眼目卷之下

終

博
山
警
語

宗典部

第二十二卷

【博山和尚】 博山無異禪師、寶方に嗣ぐ。

【堂皇】 室に四壁なきを皇といふ。

【思】 恐、怖。

【嚴城】 防禦の城。

【六賊】 眼、耳、鼻、舌及び身、心と六つ。

【家寶】 自己本心。

【大覺の雄】 釋尊。

【伽陀】 偈と同じ。

【狂狷】 狷は小心。

【喫緊】 俗に着急。

【金丹九轉】 仙藥。

博山和尚參禪警語序

警は乃ち醒覺の義なり、或は云はく、驚なりと。譬へば賊あり、巨室を瞰ふ、主人燈を張りて、夜堂皇の上に坐して、警歎聲を作す。賊思れて便ずること能はず、稍雨として昏睡するときは、則ち間に乘じて入る、橐、之が爲に傾く。故に嚴城に柝を撃ち、刁斗に轆を鳴す、卒に變ありとも、虞ることなきことは、其機先に警備するを以てなり。人、生死の大患あり、迺ち萬劫不醒の長夢なり。況んや六賊の媒と爲つて、日に家寶を切む。大覺の雄、痛語警醒すること有らずんば、則ち身を醉夢に終へて、了に悟る日なけん。但睡時、主と做り得ざるのみにあらず、即ち白晝に眼を開いて、魔語すること尤も甚し。故に博山大師、悲願力に乘じ、來りて大醫王となつて一味の伽陀を用ひて、遍く狂狷の業病を療す。故に禪病の警語五章を示すことあり。直捷簡當にして參禪の骨髓の中の病を把つて、都て説いて透過す。其做工夫を開示するの語、最も喫緊爲り。眞に是れ禪門一種切要の新書なり。亦世を拯ふの金丹九轉なり。夫れ禪は假名にして體無し、何ぞ病あらん。蓋し參禪の人、多く執情謬解を起して、心意識に哄殺せらる、機境の上に向つて求めざれば、便ち學解の中に向つて討ぬ。或は古人の言句に膺を礙へられ、或は死水裏に向つて浸殺す、或は無事甲裏に坐在す。これ靈利の心、死し得ざるにあらず、便ちこれ癡著の心、

【向上】 悟道。

【法身】 不生不滅の實體也。

【三たび云ふ】 苦心辛勞して玉成するの意。
【背緊】 肝要。
【實履】 實地。

【曲盡狀】 うでのまがりたる椅子。

【法身の病】 妄想應知。
【肌肉】 にくにねばりつく。

轉ずるを得ず、故に命根斷じ難く、生波宛然たり、通身都て是れ我病なり。是れ禪に病あるに非ず、甚だしきときは則ち狂と成り魔に著す。佛も亦病ふべからず、此を業病と名く亦禪病には非ず。假饒種種の心を死し得ても、背て工夫を做さざれば、法身の理と相應して、曾て向上の關帳を踏著せず、飯糲裏に坐して、輕安自在なり。只箇の輕安正に是れ禪病なり。故に僧古德に問ふ、「如何なるか是れ清淨法身。」云云はく、「無量の大菩薩」と。此語栗轉蓬の如くにして、吞吐すること誠に難し。古人眞參實悟の中より、病過一番し來る、其垂手の處、自ら亂に鐵錐を下さず、箇の氣息を絶し、痛痒を識る底の漢にして、方に背て診視せんことを要す。是を以て病を識つて乃ち能く病を去り、已を調へて然して後人を調ふ。三たび眩を折つて、良醫と爲ると謂つべき歟。傳山大師、自來此道を參究して、極めて是れ融通せり、凡そ言句あれば、皆背緊に中る。故に高妙玄著の談を爲して、人をして知らざらしむるには非ず、乃ち平日觀證實履の境界、見到說到行到用到にして、其義理精明、辯才無礙なり、所以に快く禪病を説くこと秦宮の玉鏡を擲つて、群僚の肝膽を照見するが如く、一毫も隱諱することを得ず。古今、曲盡狀に踏して、善知識と稱し、禪を説く者、師の如きの妙、匱罕なり。然して禪病最も説き難く、説けども亦盡すこと能はず。何ぞや、病は即ち法身の病なり、法身無數、病寧ぞ極りあらん。善く法身の病を救ふ者は、病を以て妙劑と爲し、病を以て家常の茶飯と爲し、病を以て貼肉汗衫と爲す、善く之を葆むに在る而已。古人病假の中に於て、游戲して佛事を爲す、蓋し法身、

【自然】 病の早き
【洞山道】 從容錄
九十四則。

【寶所】 大悟の地
位。

【驚破】 悟の境に
入難す。

【萬曆辛亥】 明の
萬曆三十九年。

主なきことを看破すれば、病自ら霍然たり。故に洞山道はく、「老僧看る時病あることを見ず」と。特、妄想執着に由る故に、禪病競ひ生ず。昔佛、楞嚴の五蘊の魔事、及び外道の偏計を説きたまふ、即ち是れ今の人の禪病の中の事なり。然して著は即ち魔と成り、計は即ち外と名く、著せず計せざるをば、亦未だ病と爲す。所以に云はく、「勝心を作さざれば、善境界と名く、若し聖解を作せば、即ち群邪を受く」と。法華に云はく、「一りの導師あり、善く通塞險難の道路を知る、故に能く彼衆人を導いて、前んで寶所に至る」と。然らば則ち大師の此書は、正に末世の舟杭、初心の徑路なり。豈但今日に益あるのみならんや、亦將來に補あり。決して參禪して工夫を做し、大悟門を求めんと欲せば、肯て此書を細觀せよ、大いに相爲にするの作略あつて、能く疑情發不起の處に發起し、病根、點不破の處に點破せしめん。沙を披いて寶を露して、渠が自ら取ることを要する如く、霧を聞いて天を見て、人をして迷はざらしむるが如し。截露の中に出身の路あり、死句の裏に活人の句あり、圓珠の盤に走るが如くにして、一語に滯らず、其妙用此の如し。人人此用心を知らば、坐睡を以て道を見るべし。許多の紳鞋を費さずして、直に大安樂の田地に到りて、佛祖と鼻孔を同一にして、風を通せん。能く此を以て自ら警する者、衆を警し、復此を以て自ら愈す者、人を愈すことあらば、亦現在の賢王と名けん。祖師の命脈をして流通せしめ、國脈と慧脈とをして並び固からしめば、庶はくば大師垂示の方便願力に負かんと爾云ふ。是を序と爲す。

萬曆辛亥歲孟秋月

信州弟子劉崇慶和南題

【本寺は、博山の無畏禪師が禪の病弊を救治せんが爲に、鐵工夫の新造路を開示せしものなり。

【工夫】 工巧士夫の義。

【無常の殺鬼】 生死無常の大鬼。
【門を敲く瓦子】 手段方便。

【恁麼】 そんな、こんな。

博山和尚參禪警語 卷之上

首座 成正集

初心工夫を做すに示す警語

工夫を做すには、最初に箇の破生死の心を發すこと堅疑にして、世界身心、悉く是れ假縁にして、實の主宰無しと看做せんことを要す。若し本具底の大理を發明せざるときは、則ち生死の心、破せず。生死の心、既に破せずんば、無常の殺鬼、念念停らず、却つて如何が排遣せん。此一念を將て、箇の門を敲く瓦子と作す、烈火焔中に坐在して、出づることを求むるが如くに相似たらば、亂に一步を行することを得ず、一步を停止することを得ず、別に一念を生ずることを得ず、別人の救を望むことを得じ。恁麼の時に當つて、只須らく猛火を顧みず、身命を顧みず、人の救を望まず、別念を生ぜず、背て暫止せず、往前直奔して奔得出せば、是れ好手なるべし。

工夫を做すには、貴ぶらくは疑情を起すに在り。何をか疑情と謂ふや、生何れより來るを知らざれば、來處を疑はざることを得ず、死何くに去ると知らざれば、去處を疑はざることを得ざるが如きなり。生死の關竅破せざるときは、則ち疑情頓に發して、眉睫上に結在して、放すれども亦下らず、越へども亦去らず、忽爾疑團を撲破せば、生死の二字、是

【長劍】宋玉が大言賦に長劍倚天外。

【劍去つて久し】呂氏の故事。

【頑石】印度數論派の外道の事。

【衣線下の一段の大事】洞山僧に問ふ云云の古則。

【勁挺】かたくただし。

れ甚慶の閑家具ぞ。噫、古徳云はく、『大疑は大悟し、小疑は小悟す、疑はざれば悟らず。』と。工夫を做すには、個の死の字を把りて、額頭上に貼在して、血肉身心を將て死し去るが如くと一般にして、祇究明を要する底の這一念子、現前することあらしめよ。這一念子、天に倚る長劍の如し、其鋒に觸るるが若き者、了に得べからず、若し滯を洵も、鈍を磨するときは、則ち劍去つて久し。

工夫を做すには、最も靜境に耽着することを怕る。人をして枯寂に困じて覺えず知らざらしむ。動境をば人厭へども、靜境をば多く厭ふことを生ぜず。良に以れば、行人一向、喧鬧の場に處す、一たび靜境と相應すれば、飴を食ひ蜜を食ふが如し。人倦むと久しければ、睡を喜ぶが如く、安ぞ自ら知ることを得んや。

外道、身心をして斷滅し化して頑石と爲らしむるも、亦靜境に従つて入る。良に以れば、歳久く月深く、枯にして又枯に、寂にして又寂ならば、無知に墮して、木石と何ぞ異らん。吾人或は靜境に處せば、祇衣線下の一段の大事を、發明せんことを要して、靜境に在ることを知らずして、始めて得ん。大事の中に於ては、其靜相を求むるに、了に得べからず、斯を得たりと爲すなり。

工夫を做すには、中正勁挺にして、人情に近かざらんことを要す。苟くも情に循つて應對するときは、則ち工夫做不上ならん。但做不上なるのみにあらず、日久しく月深きときは、則ち流俗に隨ふの阿師たらんこと疑なし。

【世界を云云】 疑情發得起の章の第二節にもこの語あり。

工夫を做す人は、頭を擡げて天を見ず、頭を低れて地を見ず、山を看ても是れ山にあらず、水を見ても是れ水にあらず、行けども行くことを知らず、坐すれども坐することを知らず、千人萬人の中、一人あることを見ず、通身内外、只是れ一箇の疑團ならば、世界を擡渾すと謂つべし。疑團破せずんば、誓つて心を休せざれ、此れ工夫の緊要爲り。何をか世界を擡渾すと謂ふや、無量劫來本具の大理、沈沈寂寂として、未だ嘗て動着せず。要は當人精神を抖擻し、天旋り地轉するに在り。自ら波瀾り浪涌く一段の受用あり。

【千斤の擔子】 煩悩妄想。

工夫を做すには、死して活を得ざることを怕れざれ、只活して死を得ざることを怕れよ。果して疑情と廝結んで一處に在らば、動境は遺ることを待たずして、自ら遣り、安心は淨きことを待たずして、自ら淨からん。六根門頭自然に虚豁豁地ならば、點着せば即ち到り、呼着せば即ち應ぜん、何ぞ活せざることを愁へんや。

【半然】 散亂と同じ。

工夫做得上すること、千斤の擔子を挑ぐるが如くにして、放も亦下さざれ、要緊の失物を覓むるが如く相似て、若し覓不着ならば、誓つて心を休せざれ。其中但執を生じ、着を生じ、計を生ずべからず、執は病と成り、着は魔と成り、計は外と成る。果して心を一

【心を生じ】 此八字は法界觀にあり。

にし意を一にして、失物を覓むるが如く相似たることを得ば、則ち三種淨然として没交渉、心を生じ念を動ずれば、即ち法體に乖くと。

【猫の鼠を云云】 黄龍心和尙の語。

工夫を做して、話頭を擧起する時は、歴歴明明として、猫の鼠を捕ふるが如く相似たる

【撐撐】 ささへつ
く。

【八境】 八風を指
して言ふか。

ことを要す。古に黎奴を斬らずんば、誓つて休せじと謂ふ所なり。然らざるときは、則ち鬼窟裡に坐して、昏昏沈沈として、一生を過ぎ了らば、何の益する所あらんや。

猫の鼠を捕ふるには、两眼を睜開して、四脚撐撐たり。只鼠を奪へて、口に到りて始めて得んことを要す。縦ひ鶏犬傍に在ることあれども、亦顧みるに暇あらず。參禪の者も亦復是の如し、只是れ憤然として、此理を明めんことを要す。縦ひ八境、前に交錯すれども、亦顧みるに暇あらず。纔に別念あらば、但鼠のみに非ず、兼て猫兒を走却せん。

工夫を做すには、一日、一日の工夫を見んことを要す。若し因因循循たらば、百劫千生未だ了了的日子あらず。博山當時、一枝の香を挿んで、香を見了りて、便ち云はく、「工夫前の如くにして、損益あること無し、一日幾枝の香をや、一年若干計の香をや。」又云はく、「光景過ぎ易し、時人待たず、大事未だ明らめず、何れの日かこれせん。」と。此に由りて痛惜して、更に多く策勵を加ふ。

工夫を做すには、古人の公案上に在りて、卜度して妄に解釋を加ふべからず、縦ひ一傾略し得過すとも、自己と没交涉、殊に知らず、古人一語一言、大火聚の如くにして、之に近くことを得ず、之に觸るることを得ず、何ぞ況んや、其中に坐臥せんとす。更に其間に於て、大を分ち小を分ち、上を論じ下を論ぜば、喪身失命せざる者は、幾ど希なり。此事は教乗と合はず、故に久しく大乘の業を脩習する者も、不知不識なり。何ぞ況んや聲聞緣覺諸の小乗をや。三賢十聖、豈教に通ぜざらんや。此一事を説けば、三乘騰戰れ、

【法を説くに云云】
これもなにかせん
【無生忍】地獄の
因縁をまぬかるる
方便
【所知愚】極めて
微細にして著する
愚

【法華云云】 方便
日りにあり。

【顛預】 大きなつ
て

【驚倒】 まつすぐ

【猜三枚】 猜疑の
深甚。

【桃を摘みて云云】
烏巨儀曼禪師の故
事。

【地を鋤いて】 園
頂などの作務。

【作務】 禪家には
汲水運薪。

十地魂驚く。等覺の菩薩法を説くに、雲の如く雨の如くにして、不可思議の衆生を度して、無生法忍に入るすべからず、尙喚んで所知愚となし、道と全く乖くとす、又何ぞ況や其餘をぞ。蓋し此事は凡夫地より顛に佛體に同ず、人信じ難き所なり。信ずる者は器にして、信ぜざるものは器に非ず。諸の行人、斯宗乘に入らんと欲する者は、悉く信より入る。信の一字に淺あり深あり、邪あり正あり、辯ぜずんばあるべからず。淺といふは凡そ法門に入りては、誰か信ぜずと云はん。但法門を信じて、自心を信するに非ざるなり。深といふは諸の大乗の菩薩、尙信を具せず、華嚴の疏に云ふが如き、法を説くことを能くする者あり、法を聴く所の衆ありと見る、尙未だ信門に入らず。と。即心即佛と云ふが如き、誰か信ぜずと云はん。汝は是れ佛なりやと問ふに及ばば、則ち支梧排遣し、承當不下なり。法華に、思を盡し共に度量すれども、佛智を測ること能はずと云へり。何の故ぞや、盡思度量の心あれば、蓋し信、具せざる耳。

邪正といふは、自心即佛を正信と名け、心外に法を取るを邪信と名く。即佛なれども宛明を要し、自心なれども親履實踐して、不疑の地に到るを始めて正信と名け。顛預、驚倒、猜三枚の如く相似て、但心即佛と云うて、實に自心を識らざるを即ち邪信と名く。

古人は、桃を摘みて便ち定し去る、地を鋤いて即ち定し去る、作務の時にも亦定す。豈是れ坐すること久しうして邊捺し、一心をして起らざらしめて、然して後に定と爲んや。若し此の如くなるをば、即ち邪定と名く、禪者の正意に非ず。

【六祖云はく】六祖壇經の機縁の篇よりとる。
【那伽】秦には龍と譯す。
【兜率】Tusitaにて六欲天の第四重天。

【充塞彌互】ゆきわたる事。
【沾着】添益なり

【話頭】即今所參の古則公案。
【荆棘林】修行地の困難。
【境縁】幻身の境遇。

【心行處絶】心も身もなき。

【彌勒の下生】龍華三會の曉、五十六億七千萬歳の後

六祖云はく、「那伽常に定に在り、定ならざる時あること無し。」と。須らく本體を徹見すべし、方に此定と相應せん。釋迦老子、兜率を下り皇宮に降り、雪山に入りて明星を觀、幻樂を開するも、未だ此定を出でず。然らざるときは則ち動境に漂溺せられん、孰か名けて定と爲ん。

動境の中に起處を求むるに、不可得なり、靜境の中にも亦起處を求むるに、不可得なり。動靜既に起處無し、何を將てか境と爲んや。此意を會得せば、總に是れ一箇の定體、充塞彌互して餘蘊無けん。

工夫を做すには、世法に沾着することを得ざれ。佛法の中すら、尙一點も也得ず、何ぞ況んや世法をや。若し眞正の話頭現前せば、氷を履むも寒を見ず、火を踏むも熱を見ず、荆棘林中に横身直過して掛礙あることを見ずして、始めて世法の中に在つて、横行直撞すべし。然らざれば、盡く境縁に轉じ將ち去られん。工夫、成一片ならんことを得んと欲すとも、驢年にも也未だ夢にだも見ざること存らん。

工夫を做す人は、文を尋ね句を逐ひ、言を記し語を記すべからず。但に益無きのみにあらず、工夫の與に障礙を作して、眞實の工夫、返つて緣慮と成る。心行處絶を得んと欲するも、豈得べけんや。

工夫を做すには、最も比量することを怕る。心を將て溱泊すれば、道と轉遠く、做して彌勒の下生に到り去るとも、沒交渉なることを管取せん。若し是れ疑情頓に發するの漢

【銀山鐵壁】 孤峻

子ならば、虚空に逼塞して、虚空の名字あることを知らず、銀山鐵壁の中に坐するが如くにして、祇個の活路を得んことを要す。若し個の活路を得ずんば如何が安穩を得去らん。但恁麼に做し去つて、時節到來せば、自ら個の倒斷あらん。

近時、等の邪師あり、學者をして工夫上に在らざらしむ。又云はく、「古人、未だ嘗て工夫を做さず」と。此語最も毒なり。後生を迷悞す。地獄に入ること箭を射るが如くならん。

【大義禪師坐禪銘】 緇門警訓上に出づ

大義禪師の坐禪の銘に云はく、「一切に參することを須ひすと道ふことを信すること莫れ。古聖の孜孜たるを指南と爲よ。然も舊闌田地に闌くと雖も、一度贏ち來ることを得るや也未だしや。」と。若し參究を須へずして、便ち理を得と云はば、此れ是れ天生の彌勒、自然の釋迦なり、此輩を名けて、可憐憫の者と爲す。蓋し自己曾て參究せず、或は古人一問一答に、便ち領悟し去るを見て、遂に識情を將て解し將ち去つて、便ち人を誑妄す。或は一男の熱病を得れば、叫苦天に連る、生平解するの、用不着なり。或は臨命終の時に到りて、傍觀の湯鍋に入るが如くにして、手忙はしく脚亂る、之を悔ゆとも何ぞ及ばん。

【黄葉禪師】 緇門警訓下に出づ。

黄葉禪師云はく、「摩勞逸に脱す、事常に非ず、緊く繩頭を把つて、一場を做す。是一翻寒、骨に徹するにあらずんば、争でか得ん、梅花鼻を齧つて香しきことを」と。此語最も親切なり。若し此偈を將て時時に警策せば、工夫自然に做得上すること、百里の程途に一歩を行すれば、則ち一步を少くが如くならん。行かずして祇這裏に住せば、縱ひ郷里の事業を説き得て、了了明明なるも、終に家に到らずんば、當に甚麼邊の事をか得べき。

【終に家に云云】 實地に見性成佛せざればの意。

【古人の田地】古
聖古仙。

【皆是れ癡狂】誌
公十二時の歌の文

【善惡無記】法に
順ふを善、非善非惡
を無記といふ。

【無記】善惡二性
けその果を記別し
得れども非善非惡
は記別し得ざるが
故に。

【掉擧、昏沈】こ
れは隨煩惱二十の
中の一。種。

【話頭現前】公案
を會得して見性す
る意。

【逆順の境縁】有
常無常の世間。

【不打緊】背緊を
打せざること。

工夫を做すに、最も要緊なるは、是れ個の切の字なり。切の字最も力あり、切ならざる
ときは則ち懈怠生ず、懈怠生ずるときは則ち放逸縱意、至らざる所なし。若し用心真切な
らば、放逸懈怠何に由りてか生ずることを得ん。當に切の一字を知るべし。古人の田地に、
到らざることを愁へされ、生死の心、破せざることを愁へされ。此切の字を捨て、別に佛
法を求めば、皆是れ癡狂外邊に走るなり。豈做工夫を以て、日を同じうして語るべけんや。
切の一字、豈但過を離るのみならんや、當下に善惡無記の三性を超ゆ。一句の話頭、用
心甚だ切なれば則ち善を思はず、用心甚だ切なれば則ち惡を思はず、用心甚だ切なれば則
ち無記に落ちず。話頭切なれば掉擧無し、話頭切なれば昏沈無し、話頭現前すれば則ち無
記に落ちず。

切の一字、是れ最も親切の句なり。用心親切なるときは、則ち間隙無し、故に魔入るこ
と能はず。用心親切にして、有無等を計度することを生ぜざれば、則ち外道に落ちず。

工夫を做す人、行いて行くことを知らず、坐して坐することを知らざるを話頭現前と謂
ふ。疑情破せざれば、尙身心あることを知らず、何ぞ況んや行坐をや。

工夫を做すには、最も思惟して、詩を做り偈を做り、文賦等々を做ることを怕る。詩偈成
れば則ち詩偈と名け、文賦工なれば則ち文字偈と稱し、參禪とは沒交涉なり。凡そ逆順
の境縁、人念を動する處に遇着せば、便ち當に覺破して話頭を提起して、境縁に隨つて轉
ぜずして、始めて得べし。或人云はく、「不打緊」と、這三箇の字、最も是れ人を慢る、學

【深淵に云云】論
話の泰伯篇に出づ

【業識】生あるま
いの識心を業識と
いふ。

【廓落】からりと
晴れたるなり。

者、密かにせずんばあるべからず。

工夫を做す人、多く空に落つることを怖る。話頭現前せば、那んぞ空を得去らん、只此空に落つることを怖るの的、便ち空じ去らず。何ぞ況んや話頭現前せんをや。

工夫を做すに、疑情破せずんば、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如くせよ、毫釐も失念せば、則ち喪身失命せん。疑情破せざるときは、則ち大理明めざるが爲に、一口の氣來らずんば、又是れ一生、申陰に牽引せられて、未だ業識に隨ひ去つて、頭を改め面を撫へて、不覺不知なることを免れず。此に由れば、則ち疑上に更に個の疑を添へて、話頭を捉起し、明めずんば、決定明めんことを要し、破せずんば決定破せんことを要せよ。譬へば賊を捉ふるが如し、須らく是れ賊を見て初めて得べし。

工夫を做すには、心を將て悟を待つことを得ざれ。人の路を行くが如く、路上に住して、家に到ることを待たば、終に家に到らじ、只須らく行いて家に到るべし。若し心を將て悟を待たば、終に悟らじ、只須らく遍拶して悟らしむべし。若し大悟せん時は、蓮花の忽ち開くが如く、大夢の忽ち覺むるが如し。良に以れば、夢覺むることを待たざれども、睡熟する時は、自ら覺め、華開くことを待たざれども、時節到りぬれば、自ら開く。悟、悟るを待たざれども、因縁會合する時は、自ら悟る。余云はく、因縁會合の時、貴きことと話頭眞切遍拶して悟らしむるに在り、悟を待つに非ざるをや。又悟る時は雲を披いて天を見て、廓落として依する所無きが如し。天旋り地轉するも、又是れ一翻の境界なり。

【三千七百の祖師】
多くの祖師方。公案の数も三千七百則といふ大教をいふ。

【一時も云云】
五燈會元五。又從容錄三則に出づ。
【世界闊き】
五燈會元七に出づ。

【滂濤】
ひろびろたる形容。
【蕩蕩】
たひらかなる貌。

【綿密】
如法にして、ぬけめのない行持。

【單單】
一途の意。

工夫を做すには、緊を要し正を要し、綿密を要し、融豁を要す。何をか緊と謂ふや。人の命は呼吸に在り、大事未だ明めざるに、一口の氣來らずんば前路茫茫として、未だ何くに往くかを知らざれば、緊ならざることを得ず。古徳云はく、「麻繩水に着くが如し、一步は一步を緊にす。」と。何をか正と謂ふや。學人須らく擇法の眼を具すべし、三千七百の祖師、大いに様子あり、若し毫釐も差あれば、則ち邪徑に入る。經に云はく、「唯此一事實なり、餘の二は則ち眞に非ず。」と。何をか綿密と謂ふや。眉毛と虚空と厮結んで、針割入らず、水洒げども濕はず、毫釐の間隙あることを容さず、若し毫釐も間隙あれば、則ち魔境、隙に乘じて入る。古徳云はく、「一時も在らざれば、死人に如同す。」と。何をか融豁と謂ふや。「世界闊きこと一丈なれば、則ち古境も闊きこと一丈、古境闊きこと一丈なれば、則ち火爐も闊きこと一丈と、決して拘執して一處に住して、死蛇頭を捉定せざれ。亦繋かれて兩頭に墜在して、滂濤蕩蕩たらざれ。古徳云はく、「圓なること太虚に同じく、欠くることも無く、餘ることも無し。」と。眞に融豁の處に到らば、則ち内は身心あることを見ず、外は世界あることを見ずして、初めて箇の入頭を得ん。

緊にして正ならざるときは、則ち枉げて工を用ふ。正にして緊ならざるときは、則ち入ること能はず。既に入つては、綿密を須要して始めて相應を得、既に相應しては、融豁を須要して方に化境と爲す。

工夫を做すには、一絲毫の別念を得ず、行住坐臥單單に只本參の話題を提起し、疑情を

【慧命】 禪の命數を云ふ。

【世間法】 妄想執着。

【做不到】 不可能などいふ語。

【站在】 坐して動かせること。

【羅教云】 明招羅漢の偈中の句。

【倒躪】 技倆つきで、しかたなしの意。

【伶俐】 すぐれてよくきがつく意。

【銀山鐵壁】 言語の孤危險峻なる形容。

【器界】 空、風、火、水、地の五蘊等の諸習氣。

【鐵樞子】 てつのまるがせ。

發起し、憤然として簡の下落を討ねんことを要せよ。若し絲毫の別念あらば、古に糶母、心に入ると謂ふ所なり、豈但身命を傷るのみならん、此れ慧命を傷るなり、學者謹みずんばあるべからず。

余云はく、別念とは但世間法の中に非ず、究心を除くの外は、佛法の中の一切の好事をも、悉く別念と名く。又豈但佛法の中の事のみならんや、心體の上に於て之を取し之を捨し、之を執し之を化するも、悉く別念なり。

工夫を做人、多く做不到と云ふ。即ち此做行上、爾ち做し去るなり。人の路を識らざるが如き、便ち好し、路を尋ぬるに、路を尋着せずと云うて、便ち休すべからざるをや。路を尋着するの如きは、貴きこと行いて直に家に至りして、乃ち可なるに在る爾。路上に站在することを得ざれ、行かずんば終に家に到るの日子無けん。

工夫を做人、心を用ふべきこと無き處、萬仞懸崖の處、水窮り山盡くる處、羅紋結角の處に做到せば、老鼠牛角に入りて、自ら倒斷あるが如くならん。

工夫を做人に、最も怕るるは、一箇の伶俐の心なり。伶俐の心、之を業忌と爲す。些毫を犯着せば、眞業現前すと雖も救ふこと能はざるのみ。若し眞に是れ箇の參禪の漢ならば、眼盲の如く、耳聾の如くにして、心念纔に起る時は、銀山鐵壁に撞着するが如くに相似ん。此の如くなるときは、則ち工夫始めて相應を得ん耳。

工夫做し得て真切ならば、身心と器界とを將て、煉り得て鐵樞子の如くに相似ん。只渠

【爆得斷云云】利根の者は返りて利根の所障を破りてにはかに破するを得ずの意。
【成佛作祖底】佛となり、祖師となる。
【窠臼裏】煩惱の窠臼に在るの意。

【抱定】かかへきめる意。

【古に黒山云云】大義禪師の坐禪銘に出づ。

【摸著】さぐりあつる事。
【省力】見性といふに同じ。
【識神】意識精神の略。

が爆得斷じ卒得折するを待つて、更に撮得聚して始めて得んことを要す。

工夫を做すには、錯ることを怕れず、只非を知らざることを怕る。縦ひ然も行つて錯る處に在るとも、若し肯て一念非なることを知らば、便ち是れ成佛作祖底の基本にして、出生死底の要路、魔網を破る底の利器なり。釋迦大師、外道の法に於て一一證過したまへり、祇是れ窠臼裏に坐在せず、非を知つて便ち捨つといふ、四個の字を將て凡夫より只大聖の地位に到りたまへり。此意豈但出世の法のみならんや、世法の中に在りても、失念の處あるに、只個の非を知つて便ち捨つといふを消せば、便ち一個の淨白底の好人と做り得ん。若し錯處を抱定して、是と爲て肯て非を知らざれば、縦ひ是れ活佛現前すとも、他を救ふことを得じ。

工夫を做すには、喧を避け寂に向ひ、目を瞑ち眼を合せ、鬼窟裏に坐在して、活計を作すべからず。古に黒山下に坐し、死水に浸すと謂ふ所なり。甚麼邊の事を濟し得るや、只須らく境縁の上に在つて、做し得去つて、始めて是れ得力の處なるべし。一句の話頭、眉睫上に頓在して、行裏坐裏、着衣喫飯裏、迎賓待客裏、祇這一句の話頭の落處を明めんことを要せよ。一朝洗面の時に鼻孔に摸着せば、原來太だ近うして、便ち箇の省力を得ん。工夫を做すには、最も識神を認めて、佛事と爲すことを怕る。或は眉を揚げ目を瞬し、頭を搖し腦を轉ず。將に謂へり、多少の奇特ありと。若し識神を把つて事に當てば、外道の奴と做ることも也得じ。

【妙を體云云】三種の滲漏中の語。

【無門は云云】玄沙大師の語。
【退鼓】退軍の合圖に打つ。

【法華經】方便品に見ゆ。

【心意を云云】五燈會元六。
【玄宗】禪宗の極義。

工夫を做すには、正に心行處滅せんことを要す。切に心を將て淡泊し、問答機縁等を思惟せよ。洞山云はく、「妙を體すれば宗を失し、機、終始に昧し」と。便ち共に語るに堪はず、若し大理做する時は、一一の三昧、自心の中より流出す、思惟造作は何ぞ當に霄壤のみならん。

工夫は、做不上を怕れざれ、做不上なるを做上せんと要す、便ちこれ工夫なり。古徳云はく、「無門は解脫の門、無意は道人の意」と。貴きこと箇の入處を體悉するに在り。若し做不上なりというて便ち退鼓を打せば、縱ひ百劫千生にも、其れ爾を奈何せん。

疑情發得起して、放不下ならん、便ち是れ上路なり。生死の二字を將て、額頭に貼在して、猛虎の趕ひ來るが如くせよ。若し直に走りて、家に到らずんば、必ず喪身失命せん、獅脚を仕むべけんや。

工夫を做すには、祇一則の公案上に在つて用心せよ、一切の公案上に解會を作すべからず。縱ひ能く解得すとも、終にこれ解にして悟に非ざるをや。法華經に云はく、「是法は思量分別の能く到る所に非ず」と。圓覺に云はく、「思惟の心を以て、如來の圓覺の境界を測度せば、螢火を將て須彌山を照かんに、終に得ること能はざるが如し」と。洞山云はく、「

心意を將て玄宗を學ばんと擬すれば、大いに西に行いて、却りて東に向ふに似たり。」と。大凡公案を穿鑿する者、須らく皮下に血ありて、慚愧を識つて始めて得べし。

工夫を做すには、話頭を提起して、祇是疑情打不徹なることを知らば、必竟第一念無

【道は云云】 中庸
の文。

【頭燃を救ふが如し】 寶積經第五十二卷に出づ。

【一人萬人云云】 未だ所出を見ず、四十二章經に出づ。

【觀面】 目前の意

【船子和尙】 律德
威、梁山儂に嗣ぐ
【博燈】 博燈の第十卷にあり、博燈の傳には載せず。

うして、決して經書の上に向つて、證を引いて識情を牽動すべからず。識情一たび動くときは、則ち妄念紛馳す。言語道斷、心行處滅を得んと欲すとも、安ぞ得べけんや。

道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非ず。工夫は須臾も間斷すべからず、間斷すべきは工夫に非ず。眞正の參究の人は、火の眉毛上を焼くが如く、又頭燃を救ふが如し。

何ぞ他事の爲に念を動するに暇あらんや。古徳云はく、「一人萬人と敵するが如し、觀面點ぞ眨眼して看ることを容れん」と。此語、做工夫の最要、知らずんばあるべからず。

工夫を做すには、自己打未徹ならば、祇自己の事を辨すべく、人に教ふべからず。人未だ京城に到らずして、便ち他人の爲に京城の中の事を説くが如きは、但に人を瞞するのみ

に非ず、亦自らも瞞するのみ。

工夫を做すには、曉夕敢て自ら怠らざるべし。慈明大師の如き、夜將に睡らんと欲すれば、錐を引いて之を刺すことを用ふ。又云はく、「古人道の爲に食はず、寝ねず、余又何人ぞや」と。

古人、一つの石灰の圈を畫して、道理明めざれば、脚步圈内を出でず、今人、意を縱にし情を肆にし、遊蕩不羈にして、之を活潑と謂ふ、大いに笑ふべき耳。

工夫或は轉安を得、或は省發ありとも、便ち悟と爲すべからず。博山當時、船子和尙、沒踪跡の句を看る。一日因に博燈を問す。趙州、僧に囑して、「三千里外人に逢うて、如何

て得ん」と云ふを見て、覺えず布袋を打失して、千斤の擔子を放下するが如く、自ら大悟

【方木云云】 馬鹿な事なり。

【百尺の竿頭云云】 かくて十方世界是れ全身なるべし。

すと謂へり。寶方に見ゆるに違んで、方木圓孔に返するが如く、始めて慚愧を具す。若し悟後、大善知識に見えずんば、縦ひ安適を得るとも、終にこれ未了なるん。寶方、余を勉むるの偈に云はく、「空 拶 空 兮 功 莫 大。有 道 有 也 德 猶 微。誇 語 他 迦 葉 安 生 理。得 便 宜 處 失 便 宜。」と。此は是れ百尺の竿頭に歩を進むるの句なり、納僧の輩、密かにせずんばあるべからず。余嘗て學者に謂うて云はく、「我寶方の不肯の兩箇の字を得て、受用不盡なり。」と。

工夫を做すには、道理の會を作すことを得され、但硬硬に參じ去りて、始めて疑情を發得起せよ。若し道理の會を作さば、祇是れ乾爆爆底なり。豈但自己の事に打不徹なるのみならんや、疑情に連ねて、亦發不起ならん。人の器中に盛る底は、是れ何物と云ふが如き、實に是れ彼が所指底の物にあらず。彼非を以て是と爲て、便ち疑を發すること能はず。又但疑を起さざるのみにあらず、即ち彼物を以て此物と爲し、此物を以て彼物と爲す。此の如きの謬解、若し器を開いて親見一回せざるときは、則ち其身を終るまで辨すべからず。

工夫を做すには、無事の會を作すべからず、但憤然として此理を明めんことを要せよ。若し無事の會を作さば、一生祇是れ箇の無事の人にして、衣線下の一件の大事をば終に是れ了せず、人の失物を覓むるが如くに相似たり。若し覓着せば、始めて了せん。若し覓不着にして、便ち無事甲裏に置在して、覓意あること無くんば、縦ひ然く失物現前すと、亦當面に錯過せん。蓋し物を覓むるの意無き耳。

【親見一回】 大死一番。

【思惟卜度】 眞の疑情は、放下着の所に在り。

【舉起の處】 舉起は自分が云ひ出すなり。

【驢鞍橋】 會元の第十一卷に見ゆ【阿爺】 師匠、又はおやぢ。

工夫を做すには、擊石火電光の會を作すべからず。若し光影門頭に瞥有瞥無せば、甚の事を濟し得んや。親履實踐を得んと要せば、親見一回して始めて得ん。若し眞眞に意を得ば、青天白日の下に、親生の父母を見るが如く相似ん。世間の樂事、更に過ぐる者無けん。

工夫を做すには、意根下に向つて卜度することを得され。思惟卜度は、工夫をして成片を得ず、疑情を發得起すること能はざらしむ。思惟卜度の四箇の字、正信を障へ正行を障へ、兼ねて道眼を障ふ。學者彼に於て生冤家の如く相似たらば、乃ち可なる耳。

工夫を做すには、舉起の處に向つて承當することを得され。若し承當せば、正に瞞爾籠侗と謂ふ所なり、參究と便ち相應せず。只須らく疑情を發起して、承當無き處に打教徹し、亦承當無き者も、空中の樓閣の七通八達なるが如くなるべし。然らずんば賊を認めて子と爲し、奴を認めて郎と作さん。古徳云はく、「驢鞍橋を將て、喚んで阿爺の下領と作すこと莫れ。」と、斯謂なり。

工夫を做すには、人の説破を求むることを得され。若し説破せば、終に是れ別人底にして、自己と相干ること没し。人の路を問うて、長安に到るが如き、但路を指すべし、更に長安の事を問ふべからず。彼一一長安の事を説明すとも、終に是れ彼が見る底にして、路を問ふ者の親しく見るに非ざるをや。若し力め行はずして、便ち人の説破を求めば、亦復是の如し。

工夫を做すには、祇是れ公案を念せざれ。念じ來り念じ去るとも、甚慶の交渉かあらん。

【無】 趙州の無字の公案。

【柏樹子】 同上の定南柏樹子の公案。

【一何れの處に歸す】 萬法歸一の公案。

【滾】 大水のながるること。

【桶漚】 桶は漚ありてよく水を盛る。

【大事了畢】 悟道を了りしなり。

【忘忘】 無分別の義。

【澄澄湛湛】 すみきりたる水、水のふかくすみきるにたとふ。

【觀音絶點】 安心患痛無き意。

【了底】 をはりきる。

念じて彌勒の下生の時に到るとも亦没交涉、何ぞ阿彌陀佛を念せざる、更に利益あり。但

必ず念せざらしむるにはあらず。妨げず一一語頭を擧起すること。無の字を看るが如き

は、便ち無の上(うへ)に就きて疑情を起し、柏樹子(かしわ)を看るが如きは、便ち柏樹子(かしわ)に就いて疑情を

起し、一何れの處(ところ)に歸すといふを看るが如きは、便ち一何れの處(ところ)に歸すといふに就いて疑

情を起す。疑情發得起せば、盡十方世界、是れ一箇の疑團にして、父母底の身心あること

を知らず、通身是れ個の疑團にして、十方世界あることを知らず、内に非ず外に非ず、滾

じて一團と成らん。只彼桶漚(かづ)自ら曝(さら)つるが如くなるを待つて、再び善知識に見えば、口

を開くことを待たざるに、則ち大事了畢して始めて掌(てのひら)を撫(なで)て大笑せん。公案を念ぜんこ

とを回觀せば、大いに鸚鵡の語を學ぶに似ん、亦何ぞ預らんや。

工夫を做すには、須臾も正念を失すべからず。若し參究の一念を失し了らば、必ず異端

に流入して、忘忘として返ざらん。人の淨坐するが如き、只澄澄湛湛純清絶點を喜びて、

佛事と爲す、此を喚んで正念を失して、澄湛の中に墮在すと作す。或は一個の講を能くし

譚を能くし、動を能くし靜を能くするを認定して佛事と爲す、此を喚んで正念を失して識

神を認むと作す。或は安心を將て過捺し、妄心をして起らざらしむるを佛事と爲す、此を

喚んで正念を失して、妄心を將て妄心を捺ふると作す。石の艸を壓すが如く、又芭蕉の葉

を剝ぐが如し。一重を剝けば、又一重、終に了底の日子無し。或は身心は虚空の如しと觀

想して、念を起さずして墻壁の如くす、此を喚んで正念を失すと作す。玄沙云はく、「便ち

【落空亡】空にお
ちいるが、正法と
思惟する者。
【魂不散】成佛し
かぬる意。

【燥】急ぐこと。
【脊梁骨】坐禪に
は是を直立さす
る肝要となす。
【貼在】はりつく
ること。
【一件の事】悟道
の事。

心を凝し念を斂め、事を擲し空に歸せんと擬す、即ち是れ落空亡の外道、魂不散底の死人なり。纏じて之を言へば、皆正念を失するが故なり。

工夫を做すに、疑情發得起せば、更に撲得破せんことを要せよ。若し撲不破の時、當に正念を確實にし、大勇猛を發し、切中に更に個の切の字を加へて、始めて得べし。徑山云はく、「大丈夫の漢、決して此一段の大事因縁を究竟せんと欲せば、一等に面皮を打破し、性燥に脊梁骨を堅起して、人情に順ふこと莫れ。白らの平昔の所疑の處を把つて、額頭上に貼在して、常時一へに人の萬百貫の錢を欠いて、人に追ひ索めれるとも、物の償ふべき無くして怕を生じ、人に耻辱せらる。急無きに急を得、忙無きに忙を得、大無きに大を得る底に似たらば、一件の事、方に趣向の分あらん。

古徳の垂示を評する警語

趙州云はく、「三十年用心を雜へず、着衣喫飯是れ用心を雜ふるを除く。」

評「心を用ひざるには非ず、用心を雜へざる耳。之を一處に置けば、事として辨せずといふこと無し」と謂ふ所なり。

趙州云はく、「汝但理を究めよ、坐看すること三二十年にして、若し會せずんば、老僧が頭を截取し去れ。」

評「趙州、甚ぞ死急を著くや。然も是の如くなりと雖も、歲月長へに個の三二十年、

【破家蕩産を解す】
見性悟入なり。

【活計】 世帯。

【卸却】 ぬぎすて
るなり。

心を異にせざる者を討ぬるに、也得難し。」

趙州云はく、「老僧十八歳にして、便ち破家蕩産を解す。」又云はく、「我當時、十二時辰に使はる、如今、十二時を使ひ得たり。」

評「家産の上にて活計を作せば、十二時辰に使はる。家産を破得する者は、便ち十二時を使ひ得るなり。忽ち僧あり問ふ、「如何なるか是れ家産」博山答へて曰はく、「皮囊を卸却せば、即ち汝に向つて道はん」と。」

趙州云はく、「爾若し一生、叢林を離れず、不語なること五年十年すとも、入爾を喚んで啞漢と作すこと無けん。已後には佛も也爾を奈何ともせじ。」

評「不語は即ち是れ用心を雑へざるなり。若し衣線下に向つて理を究めずんば、則ち太だ遠きこと在り。」

【天台の詔國師】
德韶禪師は法眼文益に嗣ぐ。

【賺悞】 あやまり

【肚皮】 腹の皮にて、うはつら。

【閑言閑語】 閑人の寝言。

【國師】 詔國師。
【上座】 修行僧。

天台の詔國師云はく、「假饒答話揀辨、懸河の如くなるも、祇個の顛倒の知見を成し得ん。若し紙答話揀辨を貴ばば、甚麼の難きことか有らん。但恐る、人に益無うして、甜つて賺悞と成らんことを。」

評「今時の人、一肚皮を學び得て、尋常問ひ來り問ひ去つて、佛法を將て戲具と爲す。但益無きのみに非ず、多く罪過を成す。而今閑言閑語して、以て宗乘に當つ。古人の説話を看て、面皮厚きこと多少ぞ。」

國師云はく、「諸上座、從前學する所、揀辨、問答、記持、道理を説くこと極めて多し。」

【特地】 ことさらに。

【緣慮】 所緣靜慮

【微言云云】 華嚴
華海百門序の文。

【顛破】 みやぶる

【陰界裡】 死人の
境界。

【見聞脱云云】 羅
漢桂琛和尚の明道
の頌。

【水晶宮】 水晶を
以て柱檣をなす、
是れ水晶宮也との
故事。

【紹巖禪師】 法眼
の法嗣。

【諸仁者】 大衆を
いふ。

【道伴】 道友。
【商略】 互に研究
すること。

甚愆と爲て疑心息まざる、古人の方便を聞いて、特地に會せざることは、祇慮多く、實少きが爲なり。」

評「揮翰記持、皆緣慮に屬す。生死の根、斷ぜざれば、如何が古人の意を會得せん。所以に云はく、「微言心首に滯りて、返つて緣慮の場と爲る。實際目前に居つて、翻つて名相の境と爲す」と。」

國師云はく、「上座、脚踏下より一時に觀破して、是れ甚愆の道理ぞと看んには如かじ。多少の法門ありて、上座が與に疑を作さん。解を求めしむるも、始めて知る、従前所學底の事は、祇是れ生死の根源、陰界裡の活計なることを。所以に古人道はく、「見聞脱せざれば、水裡の月の如し」と。」

評「見聞緣慮、誰人が有らざらん、大いに轉變すること有つて、始めて得んことを要す。若し工夫と相應せずして、水晶宮裡より穿下し過し來らば、終に沒交涉。古徳云はく、「知解に入れば、油の麴に入るが如し」と。永く出期無けん、謹ますんばあるべからず。」

紹巖禪師云はく、「諸仁者、今日國主請を致すことは、祇諸仁者心を明めんことを圖るのみ、此外に別に道理無し。諸仁者還つて心を明むるや也未しや。是れ語言譚笑の時、凝然杜默の時、知識に參尋する時、道伴商略の時、山を觀水を翫ぶ時、耳口對を絶する時、是れ汝が心ならざること莫きや否や。上の解する所の如きは、盡く魔魅の所着と爲す、豈明心と曰はんや。」

【一類の人】或種の人。

【身心一如云云】南陽忠國師の語。

【瑞鹿禪師】天台の禪師の法嗣。
【問話】古則公案。
【揀話】同前。
【代語】古則を拈評して下語す。
【別語】代語に別しておける語。
【捻破】曲解するの意。
【乾慧】智恵無きこと。

評「語も不是、默も不是、見聞も不是、見聞を離るるも亦不是、作蜜生か會せん。即今禪者、亂統すること莫くんば好し。」

嚴云はく、「更に一類の人あり、身中の妄想を離るるの外に、別に十方世界に徧して、日月を含み太虚を包むを認めて、是を木來の眞心と謂ふ。斯も亦外道の所計にして、明心に非ず。」

評「此を喚んで偏答外道と作す、又安ぞ身心一如、身外無餘なることを得んや。今禪和子、會て人に遇はずして、自ら主宰と作るものは、多く斯見に落つ。」

「又諸仁者、會せんと要するや、心は是なる者無く、亦不是なる者無し。汝執認せんと擬せば、其れ得べけんや。」

評「前の二種は、是れ病なり、過、執認の二字の上に在り。此段は是れ藥なり。但是非執認無きときは、病即ち愈えん。」

瑞鹿禪師云はく、「大凡參學は未だ必ずしも問話を學ぶ、是れ參學にあらず、未だ必ずしも揀話を學ぶ、是れ參學にあらず、未だ必ずしも代語を學ぶ、是れ參學にあらず、未だ必ずしも別語を學ぶ、是れ參學にあらず、未だ必ずしも經論の中の奇特の言語を捻破することとを學ぶ、是れ參學にあらず、未だ必ずしも祖師の奇特の言語を捻破する、是れ參學にあらず。」

若し是の如き等の參學に於ては、偏が七通八達なるに任ずも、佛法の中に於ては、倘見處無けん。喚んで乾慧の徒と作す、豈聞かずや、聰明生死に敵せずと、乾慧豈苦輪を

【香業】 智閑と號し、唐の名僧。
【見處】 悟の上より見たる境界。

【造次】 わづかの間。
【究竟】 極意に達する。

【人の行く次云云】 五燈會元の九にこの語出づ。
【轉側】 傍に轉ずる也。
【與甚麼の時】 斯の如き時。

免れんや。」

評「今時の人は、頼ね皆是の如し、正に眞金を抛却して、瓦礫を拾ふと謂ふ所なり。昔て眞實に參究せずして、口頭三昧を恣にする。香業、一を問へば十を答へ、十を問へば百を答ふるが如き、豈是れ通達せざらんや。佛法の中に於ては、見處あること無し、父母未生前の一句子をば便ち奈何ともせず。今時學語の流、且く道へ、甚麼邊の事を濟し得るや。」
瑞鹿禪師云はく、「若し也參學せば、應に須らく眞實に參學して始めて得べし。行の時は行の時に參取し、立の時は立の時に參取し、坐の時は坐の時に參取し、眠の時は眠の時に參取し、語の時は語の時に參取し、默の時は默の時に參取し、一切作務の時は一切作務の時に參取せよ。既に是の如き等の時に向つて參ず、且く道へ、個の甚麼人に參ずるや、個の甚麼の語に參ずるや。這裏に到りて、須らく自個の明白の處ありて始めて得べし。若し是の如くならずんば、喚んで造次の流と作す、則ち究竟の旨無けん。」
評「一切に此參ずる底の語は、是れ甚麼の語ぞ、參ずる底の人は、是れ甚麼人ぞと究めんことを要す。若し此語を究めず、此參ずる底の人を識らざれば、是を空しく過ぐと謂ふ、參學には非ず。」
芭蕉云はく、「人の行く次、忽ち前面は萬丈の深坑、背後は野火來り逼り、兩畔は是れ荆棘林なるに遇ふが如くならんに、若し也向前すれば、則ち坑に墮在す、若し也還後すれば、即ち野火身を焼く、轉側すれば則ち荆棘林に礙へらる、與甚麼の時に當つて、作麼生

【擬議】不審して
ゆきつまる。

か免れ得ん。若し也免れ得ば、出身の路あらん。若し免れ得ざれば、墮身の死漢ならん。評、直に須らく危亡を顧みずして、始めて個の徹頭を得べし。稍擬議を生ずるときは、則ち喪身失命す。芭蕉の此語、最も工夫の緊要爲り。學者多く知解を求めて、玄奥の窠臼裏に墮在して、這裏に向つて意を留めず、是を空しく一生を過ぐと謂ふ。」

博山和尚參禪警語卷之上 終

博山和尚參禪警語 卷之下

【掠虚】うすばかめなどの意。
【擔】物を擔ふ棒。
【骨董】ここには人の言説を云ふ。
【恁麼】如此と云ふこと。

【肚子】腹の中。

【葛藤】論議公案などを含む。
【洛浦】元安禪師薬山に關ぐ。

【入處】悟の境に入る。
【鬼窟裏】死人の塚の穴。
【怙怙底】しづかなること。

雲門云はく、「一般の掠虚の漢あり、人の涎唾を食ひ、一堆一擔の骨董を記得して、到處に驢唇馬嘴を馳騁して、我十轉五轉を問ふことを解すと誇る。儼ひ備、朝より問うて夜に到り、劫を論じて恁麼なるも、還つて曾て夢にだも見んや。」

評「雲門當時正に十の者の一二人を罵る而已、今時は紛紛として皆是なり、何ぞ曾て衲衣下に向つて體究せん。設し或は片鱗の時もすれば、是れ昏沈ならざれば、便ち是れ散亂なり。蓋し一肚子の落索、吐不去、割不斷なるが爲なり。若し是れ個の伶俐的の漢ならば、纔に恁麼に擧すを聞いて、大慚愧を具して始めて得ん。」

雲門、衆に示して云はく、「諸兄弟、切に容易に時を過すこと莫れ、大いに須らく仔細にすべし。古人大いに葛藤相爲にする處あり、祇雪峰、盡大地是れ汝が自己と道ひ、夾山、百艸頭上に老僧を薦取し、閩市裏に天子を識取せよと道ひ、洛浦一塵、纔に起れば大地全く收る。一毛頭に獅子、身を全うす、と云ふが如き、總に是れ汝、把取して翻覆思量して看よ。日久しく歳深くば、自然に個の入處あらん。」

評「此三段の語、備を牽きて門に入り、備が背て入らんことを要す。然らずんば盡く鬼窟裏に在つて、活計を作す。備若し門に入得せば、自然に怙怙底にして、山河大地ある

【隱隱地】 分明な
らぬこと。

【玄沙】 師備とい
ひ、雪峰に嗣ぐ。
【大總持】 大人の
境界。

【荷挾】 助を得て
擔ひ挾むこと。

ことを見ず、自己あることを見ず。薦と不薦とは是れ兩頭の語なり。

雲門云はく、「光透脱せざれば、兩般の病あり、一切處明かならず、面前物ある是れなり。

一切法空を透得するも、隱隱地に個の物あるに似て相似たり、亦是れ光透脱せざるなり。

又法身にも亦兩般の病あり、法身に到ることを得れども、法慧忘せず、己身猶存するが爲

に、法身邊に坐在不、是れ一なり。直髓、法身を透得し去るも、放過せば即ち不可なり、

仔細に點檢し將ち來らば、甚塵の氣息かあらん、亦是れ病なり。」

評、「此病は全く境暈の上になつて、活計を作して、曾て坐斷せず、曾て透脱せず、曾

て身を轉じ氣を吐くことを得ざるなり。這裏若し別に異念を生ぜば、明も魔と成り、怪を

作すに、分在ることあらん。」

玄沙云はく、「夫れ學般若の菩薩は、須らく大根器を具し、大智慧あつて始めて得べし。

若し智慧あらば、即今便ち出脱し得去らん。」

評、「大根器の者は、一間千悟して、大總持を得るなり。個の出脱の字を説くも、早く是

れ方便の辭なり。何を以ての故に、從來曾て繫縛せざるが故なり。」

玄沙云はく、「若し是れ根機遲鈍ならば、直に須らく勤苦日夜して、疲を忘れ、眠ること
なく、食を失うて、考妣を喪するが如く、相似たるべし。愆愆に急切にして、一生を盡し
去り、更に人の荷挾を得て、骨に尅み實を究めば、構を得去り易きことを妨げず。且況ん
や如今誰か是れ學に堪任する底の人ぞ。」

【哆哆啾啾】 子供の産聲。

【毒毒】 三毒五欲に迷はざる妄想
【正知見】 眞正の佛知見。

【點眼】 點は點ずる也。

【昭昭靈靈】 ありありと見聞知覺す

評「盡大地の人都て堪任す、惟無知にして信根を具せざる者を除く。縦ひ是れ釋迦例、放光動地すとも、其れ爾を奈何せん。」

玄沙云はく、「仁者祇是れ言を記し語を記して、恰も陀羅尼を念するに似て相似たること莫れ。躡歩向前し來つて、口裏哆哆啾啾なるも、人に把住し語問着せらるれば、去處没し。便ち噴つて、和尚、我爲に答語せずと道ふ、恁麼の學事、太だ苦なり、知るや。」

評、「言語を記する者をば、之を雜毒、心に入つて正知見を礙ふと謂ふ。世間讀書の人、文字を記すること多きも、便ち融化すること能はず。何そ況んや出世の法を究むるに、肯て他人の涎唾を食はんや。」

玄沙云はく、「一般繩牀に坐する和尚ありて、善知識と稱す。問着すれば身を搖し手を動かし、眼を點じ舌を吐き、睜つて視る。」

評、「此等の流は、通身是れ魔なり、通身是れ病なり。臘月三十日に至らば、未だ闇を免れ去らざることならん。」

玄沙云はく、「更に一般のものあり、昭昭靈靈たる靈臺の智性、見を能くし聞を能くす、五蘊身田の裏に向つて主宰と作ると説く。恁麼に善知識と爲つて大いに人を賺す。知るや。我今汝に問はん、汝若し昭昭靈靈、是れ汝が眞實なりと認めば、甚麼と爲て瞌睡する時は、又昭昭靈靈と成らざるや。若し瞌睡する時不是ならば、甚麼と爲て昭昭の時あるや。汝還つて會すや。這個をば喚んで、賊を認めて子と爲すと作す。是は生死の根にして妄想の緣

【折合】 受合の義

【摺入】 摺は過る
ひろびろ
しせる事

【圓曠】

【三警】 過去現在

【造化】 天然自然

【鐵毫】 極めて少
くつと

【圓鏡】 馬鹿面。

【圓起】 のぞく。

氣なり。」

評「此は是れ精魂を弄する漢なり。瞋睡する時既に主と做り得ず、生死到來せば、作麼生か折合せん。一生胡亂に做し去る、豈但人を哄するのみならんや、皆自ら哄するのみ。」

玄沙云はく、「汝今他の五蘊の身田を主宰を出すことを得んと欲せば、但汝が秘密金剛の體を識取せよ。古人汝に向つて道ふ、「圓成正遍にして、沙界に遍周す」と。」

評「秘密金剛の體、即ち圓成正遍にして、沙界に遍周す、分明に汝に向つて道ふ、須らく是れ全身摺入して始めて得べし。」

玄沙云はく、「佛道梁曠にして、程途あること無し、無門は解脫の門、無意は道人の意、三際に在らず、故に昇沈すべからず、建立眞に垂く、造化に屬するに非ず。」

評「若し此意を會得せば、鐵毫の功行を費さずして、立地に成佛せん。遷つて箇の成の字を多了せよ。」

玄沙云はく、「動は則ち生死の本を起す。靜は則ち昏沈の郷に醉ふ。動靜變浪するも、即ち空亡に落つ、動靜變收するも、佛性を纏預す。」

評「行人多く動を厭うて靜を取る、靜久しうしては復動を思ふ。須らく眉毛を剔起して、動靜の策目を打破すべし、始めて是れ道人の用心なり。」

玄沙云はく、「必ず須らく塵に對し境に對して、枯木寒灰の如くにし、時に臨み用に應じて、其宜しきを失せざるべし。鏡諸像を照して、光輝を亂らず、鳥空中に飛んで、空色を

【云云】この下、
華法師の涅槃無名
論の語なり。

雜せず。』

評『枯木寒灰の如しとは、蓋し無心なり、其宜しきを失せずとは、蓋し物に應ずるなり、豈、灰心泥智の者と口を同じうして語らんや。其光輝を亂らず、空色を雜せずと、云云は自ら彼なり。我に於て何か爲ん。』

玄沙云はく、『所以に十方に影像無く、三界行蹤を絶す、往來の機に墮せず、中間の意に住せず、箇の中、纖毫道を盡さずんば、即ち魔王の眷屬と成る。句前句後、是れ學人の難處なり、所以に一句天に當る、八萬門永く生死を絶す。』

評『此語は貴きこと一句當天八萬門に在り、盡十方世界、纖毫の空缺の處無く、纖毫の影像無く、纖毫の行迹無し。謂つべし、光燦燦活潑潑と、佛祖衆生安着するに處没し。生死の二字、是れ阿誰か恁麼に道ふや。』

玄沙云はく、『直饒秋潭の月影、靜夜の鐘聲、扣擊に隨つて以て虧くること無く、波瀾に觸れて散ぜざるが如くなるも、猶是れ生死岸頭の事なり。』

評『坐禪の人、萬に一りも恁麼の田地に到らず、到り得るも尙是れ生死岸頭の事なり。須らく是れ自ら個の活路を尋ねて、始めて得べし。』

玄沙云はく、『道人の行處は火の氷を銷して、終に却つて氷と成らず、箭既に弦を離れて、返回の勢無きが如し。所以に牢籠すれども肯て住らず、呼喚すれども頭を回さず、古聖も安排せず、今に至つて處處無し。』

【細抹】こまかくくたく。
 【省力】悟人の力すこしも
 【些兒】すこしも
 【識心】意識、安心。

【毒毒】毒藥を以て人を害す。

【旋旋】めぐりめぐる。

【過捺】とどめおす事。

【冥冥】くらきこと。

【漠漠】譯なきこと。

【耳を塞ぎ云云】この故事は淮南子に出づ。

【傲】作と同じ。

【愛網】愛着の業。

【精明】一精明は六和合となる。

【湛不搖】恒常。

評「道人の心、合に是の如くなるべし、但此段を將て、細抹し將ち來らば、自然に省力あらん。清連すること些兒も得ず。若し識心を將て淡泊せば、正に「因地真ならざれば、果迂曲を招く」と謂ふ所なり。」

玄沙云はく、「今時の人、箇の中の道理を悟らず、妄に白ら事に涉り摩に涉り、處處染着し、頭頭繫絆す。縦ひ悟るとも、即ち塵境紛紜、名相不實なり。」

評「處處染着し、頭頭繫絆することは、只是れ究心切ならず、命根斷せず、背て死し去らざればなり。眞正の參學の人は、蠱毒の郷に過ぐるに、水も也一滴に沾着すべからざるが如くにして、始めて箇の徹頭を得ん。」

玄沙云はく、「便ち心を凝し念を斂め、事を擲し空に歸せんと擬して、目を閉ぢ臍を藏して、繩に念起ることあれば、旋旋に破除し、細想繩に生ずれば、即便過捺す。此の如くの見解は、即ち是れ落空亡の外道、魂不散底の死人、冥冥漠漠として無覺無知なり。耳を塞いで鈴を偷む、徒に自ら欺誑す。」

評「病は、疑情を起さず、公案を究めず、背て全身入理せず、只是れ識心を將て過捺する所に在り、縦ひ是れ澄澄湛湛たるも、畢竟命根斷せずんば、終に是れ做工夫の人にあらず。」

玄沙云はく、「仁者、祇長く生死の愛網を纏ふこと莫れ。善惡の業に拘はり將ち去られて、自由の分無し。饒ひ汝、身心を鍊り得て、虚空に同じうし去り、饒ひ汝精明湛不搖の處

【識陰】八識五陰の略也。

に到るも、識陰を出でず。古人喚んで急流の水の流急なれども、覺えず妄に恬靜と爲るが如しと作す。」

評「識心斷ぜずんば、身心を鍊り得て虚空の如くすとも、終に惡業に牽引し去らる。精明湛不搖の處、正に是れ識陰なり。云何が生死を免れ得ん。總じて之を言はば大理を究徹せざれば、悉く是れ虚妄なり。」

玄沙云はく、「恁麼の修行、盡く他の輪廻を出づることを得ず、依前として輪廻し去らる、所以に道ふ、「諸行無常」と、直に是れ三乗の功果の是の如く畏るべきも、若し道眼無ければ、亦究竟ならず。」

評「上の數段の法語を總收するに、皆究竟に非ず、三乗の行人、縱ひ六度萬行を行するも、皆生滅の法なり、實際の理地に於て、且喜すらくは沒交涉。」

徑山云はく、「今時一種の外道あり、自眼明かならずして、只管に人をして死猶獨地に休し去り歇し去らしむ。若し此の如く休歇せば、千佛の出世に到れども、也休歇することを得ずして、轉心頭をして迷悶せしめん耳。」

評「背て疑情を起さざるときは、則ち命根斷ぜず、命根既に斷ぜざれば、休することも亦去らず、歇することも亦得ず。即ち此休歇の二字、便ち是れ生死の根本なり。縱ひ百劫千生にも、終に了底の日子無けん。」

徑山云はく、「又一等の人、人をして縁に隨つて管帶し、情を忘れて黙照せしむ。照し來

【六度】六波羅蜜の譯名。
【且喜】やれ、うれしやなり。
【沒交涉】よつてもつかぬの意。
【徑山】ここには大慧を指す。

り照し去り、帶し來り帶し去つて、轉迷悶を加へて、了期あること無し。」

評「既に能帶の心と所照の境とありて、能所對立す、妄に非ずして何ぞや。若し妄心を以て參究と爲さば、便ち自心に於て自在を得ず。只須く兩頭を坐斷し、能所立せざるべきは則ち癡膺の物、桶底の脱するが如くならん。」

徑山云はく、「又一等の人、人に是事管すること莫れ、但只恁麼に歇し去れ、歇し得來らば、情念生ぜず、恁麼の時に到つて、是れ冥然無知なるにあらず、直に是れ惺惺歴歴なりと教ふ。這般底は更に是れ毒害、人の眼を瞎却す、是れ小事にあらず。」

評「只饒ひ惺惺歴歴に到るも、此は是れ寂に對するの法にして、參究に非ざるをや。若し參究して直に大事を發明せんと欲せば、既に是の如くならず、豈毒害に非ざる者ならんや。」

徑山云はく、「久參先達を問はず、若し眞個に靜ならんことを要せば、須らく是れ生死の心、破不着なるべく、工夫を做して、生死の心、破るときは則ち白ら靜ならん。」
評「疑情發起するときは、則ち生死の心、凝結して一處に在り、疑情破るときは則ち生死の心破る、此破るる處に於て其動相を求むるに、了に不可得なり。」

【徑山云はく云云】
此一段も大慧の書
に出づ。

疑情發不起に示す警語

工夫を做すに、疑情を發し起さず、便ち行を尋ね、墨を數へ、文字を檢討して、廣く知

【穿過】 穿ち過す也。

【堅指】 俱胝と童子の問答。
【擊拳】 童子の受答。

解を求めんと欲す、佛祖の言教を將て、一串に穿過して都て一箇の印子を作つて印定す。纔に一則の公案を舉起すれば、便ち道理の會を作し去る。本參の話頭の上に於ては、疑情を發起すること能はず、人の難問着するに逢ふときは則ち喜ばず、此は是れ生滅の心にして禪には非ず。或は聲に隨つて應答し、堅指、擊拳、筆を引いて疾く偈頌開示を書して、人をして參究せしむ。亦意味あれば、自ら大悟門を得と謂ふ。殊に知らず、疑情發不起なれば、皆是れ識心の然らしむることを。若し肯て一念、非なることを知らば、全身放下して善知識に見えて、箇の入路を求むれば則ち可なり。然らずんば生滅の心、勝つこと久しきときは、則ち魔着を成して殆んど救ふべからず。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、境縁上に於て、厭離を生じ、喜んで寂靜無人の處に到つて坐し去り、便ち得力を覺え、便ち意思あることを覺ゆ。纔に此の動處に遇着すれば、心即ち喜ばず、此は是れ生滅の心にして、禪には非ず。坐久しきときは則ち靜境と相應し、冥然として無知、對を絶し待を絶す。縱ひ禪定を得て凝心不動なるも、諸の小乗と何の異なる所あらん。稍境縁に遇ふときは則ち自在ならず、聲を聞き色を見るときは、則ち怕怖を生ず、怕怖に由るが故に、魔其便を得、魔力に由るが故に、諸の不善を行ふ。一生の修行、都て益する所無し、皆是れ最初に善く心を用ひず、善く疑情を起さず、肯て人に見えず、肯て人を信ぜずして、靜謐の處に於て、強ひて主宰と作ればなり。縱ひ善知識に遇ふとも、肯て一念非なることを知らずんば、千佛出世すとも、其れ爾を奈何せ

【胡蘆】ものわら

ん。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、情識妄想の心を將て遏捺し、妄心をして起らざらしめ、起ること無き處に到るときは、則ち澄澄湛湛、純清絶點なり。此れ識心の根源、終に破ること能はず、澄湛絶點の處に於て、都て個の工夫を作して理會す、纔に人の痛處を點着するに遇へば、水上に胡蘆を捺ふるが如く相似たり。此は是れ生滅の心にして、禪には非ず。蓋し最初肯て話頭に參じ、疑情を起さざるが爲なり。縦ひ身心を遏捺し得て起さざるも、石の艸を壓すが如し。若し識心を死し得て、斷滅と成し去るも、正に是れ落空亡の外道なり。若し斷滅し去らずんば、境縁に逢はん時、即ち識心を引起せん、澄湛絶點の處に於て、便ち理解を作して、自ら大悟門を得と謂ふ。縦にするときは則ち狂を成し、着するときは則ち魔と成る。世法の中に於て無知を誑妄して、便ち深掌を起し、人の信心を退け、菩提の道を障ふ。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、身心器界を將て、悉く皆空じ去る。空じて管帶無き處、依倚無き處に到つて、身心あることを見ず、世界あることを見ず、内に非ず外に非ず、總に是れ一空なれば、空便ち是れ禪と謂ひ、空じ得去る、便ち是れ佛と謂うて、行も是れ空、坐も是れ空、空じ來り空じ去つて、行住坐臥、虚空の中に在つて行くが如し。此は是れ生滅の心にして、禪には非ず。着せざるときは、則ち頑空と成つて、冥然無知なり。着するときは則ち魔と成つて、自ら謂ふ大いに悟門ありと。殊に知らず、參禪と

【綿絮團】わた、いと、だんご。

没交涉なることを。若し眞に是れ個の參禪の漢ならば、疑情を發起し、一句の語頭、天に倚る長劍の如くならば、其鋒に觸るる者、即ち喪身失命せん。若し是の如くならずして、只饑寒じ得て、一念不起の時も、只喚んで個の空無所知と作さん、究竟に非ざるをや。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、遂に揣心を以て揣摩し、古人の公案を把つて、胡亂に穿鑿し去つて、是を全提と謂ひ、是を半提と謂ひ、是を向上と謂ひ、是を向下と謂ひ、是を君とし、是を臣とし、是を兼帶の語とし、是を平實の語とし、自ら「人の及ばざる所を見解す」と謂ふ。縦ひ一一道理を説き得て、古人と一口に氣を吐くも、此は是れ生滅の心にして、禪には非ず。殊に知らず、古人の一語一言、綿絮團を嚼むが如くにして、人をして吞不下、吐不出ならしむ。豈肯て人の與に幾多の解路を生出し、人の識心を引きせんや。若し疑情發得起し、全身拶入し去らば、此解路識心は、爾が死し去ることを待たざるに、自然に怙怙地ならん。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、身心を將て純ら是れ假緣なりと看破す。其中に自ら一物ありて往來し、動を能くし靜を能くす。形無く相無し、六根門頭に於て光を放ち地を動ず。散ずるときは則ち沙界に遍周し、收むるときは則ち纖塵を立せず。這裏に向つて、一認に認定して肯て參究せず、便ち了事の人と謂へり。此は是れ生滅の心にして禪には非ず。殊に知らず、生死の心破れずして、此等を將て快意となす、正に是れ識神を弄することを。一朝眼光落地せば、便ち主と作り得ず、識神牽引に隨ひ去り、業に隨ひ報を受け去

【四相】 生、住、異、滅。
 【五衰】 一衣服垢穢、二頭上花萎、三腋下流汗、四身轉臭穢、五本座不樂。

【古人】 芙蓉の楷
 【鬼眼睛を弄し】 鬼の如き瞬にて睨みするなり。

らん。若し善業多きときは、則ち人間天上に生在す。四相五衰の通り將ち來るに到れば、便ち佛法に靈驗無しと。此謗法に由つて、地獄、餓鬼道の中に墮在す。出得頭し來らんと、知んぬ、是れ幾多の劫數ぞ。此を以て之を觀れば、參禪は全く人に見ゆることを要す。若し自ら主宰と作らば、總に用不着ならん。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、便ち箇の眼能く見、耳能く聞き、舌能く譯し、鼻能く嗅ぎ、手能く執着し、脚能く運奔す、是れ自己一靈の眞性なりと認定す。這裏に向つて度量して、是を悟門と謂ふ。人に逢へば則ち眼を瞪り、耳を側て、手を指さし脚を踢つて、以て佛法と爲す。此は是れ生滅の心にして禪には非ず。古人喚んで癩病を發するが如くに、相似たりと作す。又曲盃牀上に在つて、鬼眼睛を弄するに相似たりと云ふ。弄し來り弄し去つて、四大分散の時に到るときは、則ち弄し去らず。更に一等の惡見あり、此を以て奇特と爲して遷代相傳へ、人の供養を受けて、慚無く愧無く、人の法を問ふに逢ふときは、則ち大喝一聲し、大笑一場す。殊に知らず、從來未だ曾て參究せず、命根未だ斷ぜざることを、縦ひ善事を行するも、都て是れ魔業にして究竟に非ざるをや。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、便ち有爲の功行を做し、或は解脫を做し、或は苦行を行はんと欲す。冬爐せず、夏扇せず、人來つて衣を乞へば、便ち全身脱し去つて、凍死を甘心す、之を解脫と謂ふ。人來つて食を乞へば、便ち自己食はずして、餓死を甘心す、之を解脫と謂ふ。更に種種あり、具に説くべからず。總じて之を論ぜば、皆是れ勝心の使

【功課】 日課。

ふ所にして、無知を誑惑す。彼無知の者、是を活佛と謂ひ、是を菩薩と謂うて、其形命を盡して、承事供養す。殊に知らず、佛戒の中に、之を惡律儀の業と謂ふことを。是れ持戒と雖も、歩歩罪を結す。又一等あり、身を焼き、臂を燃し、佛を禮し、懺を求む、之を功課と謂ふ。世法の中に於ては、亦是れ好事なり、參究分の中には、當に甚麼の事を得べきや。古徳云はく、『一切に他の機境上に向つて、求むること莫れ。』と。謂はく、佛を禮するも是れ機境なり、懺を求むるも是れ機境なり、佛法の一切の好事、悉く機境なり。是れ備をして此一切の善事を行はざらしむるにはあらず、但心を一處に用ふれば、此一切の善事、悉く能く助發し、善根を滋培す。他口道眼忽ち開かば、燒香掃地も皆佛事なるのみ。工夫を做すに、疑情を發し起さず、便ち散誕し去らんと欲し、便ち活潑し去らんと欲す。人に逢ふときは、則ち自ら歌ひ、自ら舞ひ、自ら歡び自ら樂む。或は水邊林下に吟咏笑談し、或は市井街坊に横行直撞す、自ら是れ個の了事の人と謂へり。善知識の叢林を開き、規矩を立て、或は坐禪し、或は念佛し、或は一切の善事を行することを是れは、則ち掌を撫でて大いに笑ひ、輕慢の心、謗瀆の心を生ず。自ら行道することを是れは、則ち掌を障ふ。自ら誣經禮懺すること能はずして、人の諷經禮懺を障ふ。自ら參禪すること能はずして、人の叢林を開くことを障ふ。自ら說法すること能はずして、人の說法を障ふ。凡そ善知識出世することあれば、幾個の難問を設けて、人天衆前に向つて、多く一句を答へ、多く一句を問ひ、喝一聲し打一掌す。

【諷】 諷の誤か。

【魔綱を云云】 楞嚴經第八に出づ。

【無間獄】 八大地獄の別あり、無間獄はその第八位。

【是れ善因云云】 雲門廣錄中巻に出づ。

【跏趺】 結跏趺坐

【威儀】 僧侶の正しき風采。

【流俗】 俗漢の如きとの義。

善知識彼が鬼戲をな做すに、相似たるを見て、或は理會せざれば、他便ち人に向つて道ふ、
「某の善知識、這個の道理を會せず、苦なる哉苦なる哉。」
是は是れ生滅の心、勝つこと久しきときは、則ち魔道に攝入せられて、無窮の深孽を造る。魔福を受くること盡きぬれば、無間獄に墮す。是れ善因なりと雖も、而も惡果を招く、悲しいかな。

工夫をな做すに、疑情を發し起さず、衆人に向すれば、動止便ならず、太だ拘束、太だ煩紊なることを覺得して、便ち深山無人の處に向つて、住靜し去らんと欲す。或は一間の房屋裏に向つて、住靜し去る。初は則ち硬く主宰と作つて、目を閉ぢ心を凝し、跏趺合掌して、硬硬に做し去る。或は一年二年、一月兩月にも下落を見ず。又一等あり、坐得するこ

と三兩日、便ち坐不住、或は看書し、或は散誕し、或は偈を做り詩を做り、或は門を關して打唾す、外威儀を現じて、内流俗と成る。更に一等の惡少年あり、廉耻を識らず、因果を信ぜず、潜に食欲を行す。人に逢ふときは、則ち口を恣にし意を肆にして、無知を誑妄す、自ら我曾て善知識に見え來り、我上人の法を得と言うて、無知の者をして信受せしめて、彼と好を通ず。或は結んで道友と爲し、或は招いて徒弟と爲す。上行ひ下效うて、自ら非を知らず、肯て返省せず、肯て人に見えず、妄りに自ら尊大にして大妄語を成す、此輩を名けて、可憐憫の者と成す。今時大衆を厭うて私室を求む、寧ぞ心を寒さざる者ならんや。若し眞正の學道の人ならば、愼んで此念を萌すこと勿れ、正に好し、衆人の中に

向つて、參究して、彼此警覺するに、縦ひ道を悟らずとも、決して這般の田地に陷到せし。

學者警せずんばあるべからず。

疑情發得起に示す警語

【法身】 無相の眞身。

【懸崖に云云】 從容錄六十三則。

【磕着】 かつちり

【撥渾】 かきまはす。

工夫を做すに、疑情發得起して、法身の理と相應して、盡大地、光皎皎地にして、絲毫の障礙無きを見て、便ち個の事に承當すと欲つて、背て手を撒せずして、法身量邊に坐す。此に由つて命根斷ぜず、法身の中に於ては、見地あるに似たり、受用あるに似たるも、殊に知らず、是れ子想なることを、古人喚んで隔身の句と作す。既に命根斷ぜざれば、通身是れ病にして禪には非ず。這裏に到つて只須らく全身摺入して、箇の大事に承當して、亦承當の者あることを知らざるべし。古徳云はく、「懸崖に手を撒して、自ら承當す、絶後に再び甦へらば、君を救くこと得じ。」と。若し命根斷ぜざれば、全く是れ生滅の心なり。若し命根斷じ去るとも、身を轉じ氣を吐くことを知らざれば、喚んで墮身の死漢と作す、究竟に非ざるをや。這些子の道理、會し難からず、自ら是れ行者、背て人に見えざればなり。若し善知識に遇着し、痛處に磕着せば、當下に歸を知らん。其れ或は未だ然らざるときは、則ち伏尸萬里ならん。

工夫を做すに、疑情發得起して、法身の理と相應して世界を攪渾して、波翻り波湧く一段の受用を得て、行人此受用に就着して、推して向前せず、約して退後せず、此に由つて全身摺入することを得ず。貧人の座の黄金山に遇着するが如く相似たり、了了明明とし

【天童】 從容錄六十九則。
【飯麈】 めしざる

【逼塞寒地】 せまりふさがる。

【放下】 手を放し下におく。

て、是れ金なることを知り得れども、手に隨つて用ふることも能はず、古人喫んで、守實の漢と作す。通身是れ病にして、禪に非ず。這裡に到つて只須らく危亡を顧みずして、始めて法と相應することを得べし。天童の法界に普周して、渾て飯と成す、鼻孔曇垂、飽參を信ずと謂ふ所なり。若し鼻曇垂たることを得ずして、飯羅邊に坐して餓殺し、大海裏に渴殺するが如くならば、甚麼邊の事を濟し得んや。所以に道ふ、悟後只須らく人に見ゆべしと。古德悟後、善知識に見ゆるが如き、大いに様子あり。若し自ら個の事に承當して背て人に遇うて、釘を抽き楔を抜かざれば、皆喚んで自欺底の漢と作すのみ。

工夫を做すに、疑情發得起して法身の理と相應して、山を看ても是れ山にあらず、水を見て是れ水にあらず、盡大地逼塞寒地にして、纖毫の空缺の處無ければ、忽ち一個の度量の心を生ず。面前を障へたり、身心を障へるに似たり。提すれども亦不起、撲すれども亦不破、提起すれば有に似たり、放下すれば無に似たり。口を開き氣を吐くことを得ず、身を移し歩を擽ふることを得ず、正恁麼の時も亦這裏に到るも、通身是れ病にして禪には非ず。殊に知らず、古人用心純一にして、疑情發得起すれば、山を看ても是れ山にあらず、水を見ても是れ水にあらず、度量の心を生ぜず、別念を起さず、硬硬に逼拶し去る。忽朝に疑團を打破すれば、通身是れ眼にして、山を看れば舊に依つて山、水を見れば舊に依つて水、山河大地、甚麼の處に従つて得來るや、纖毫の悟迹を求むるに、了に不可得なり。恁麼の田地に到つても、只須らく人に見ゆべし。若し人に見えずんば、枯木巖前岐路の中

【岐路】 列子の説符篇。

【蹉跎】 くひちがふ。

【枯木椿】 椿はくひなり。

【點額】 落第なり

【没可把】 捕促するところのなきなり。
【挺異】 ぬきんでて大なること。
【太熬】 甚の字と同義。
【乾爆爆地】 無意味のこと。

に、更に岐路あり。此に到つて蹉跎せず、枯木椿に絆倒せられずんば、博山他と個の同參を結ばん。

工夫を做すに、疑情發得起して法身の理と相應して、便ち沈沈寂寂にし去り、休し去り歇し去り、一念萬年にし去る。疑情を將て法身の理中に鈍置し、受用するを得ず。一向に死し去つて、回互無く、管帶無く、氣息没うして、全く死水裏に浸殺せられて、自ら之を極則と謂ふ、通身是れ病にして禪には非ず。右霜の會下、此の如く工を用ふる者極めて多し。縦ひ坐脱立亡するも、受用を得ず。若し鉛錘を受け得て、痛痒を知り得、身を轉じ得、氣を吐き得ば、便ち是人ならん。若し痛痒を知らずんば、法身の句を會得し、只饒十方を坐斷すと雖も、甚の用處あらんや。天童の十方を坐斷するも、獨點額、密に一步を移さば、飛龍を看んと謂ふ所なり。古人大いに警語して爲人の處あり、大いに葛藤して相委悉することあり。自らは人肯て打徹せず。善知識の、人叢り馬踏むの中に、千自由百自在なることを學ばんと欲すとも難からざることを得んや。

工夫を做すに、疑情發得起して、法身の理と相應して、坐して湛不搖の處に到りて、淨裸赤漚漚沒可把なれば、便ち放身し去つて、位を轉じ機に就くことを識得せず。這裏に向つて強ひて主宰を立て、法身邊に滞在す、通身是れ病にして禪には非ず。洞山云はく、『峯巒挺異なれども、鶴、機を停めず、靈木迢然たれども、鳳、依倚すること無し。』と。當に知るべし、峯巒靈木の四個の字、太熬玄奥、是れ乾爆爆地にあらず。不停無依の四個の字、

【漆桶】凡夫の情識に喩ふ。

【隱隱地】微かにして、分明ならぬこと。

【澹定】締びつく也。

【渙然】とけちること。

【古人】長沙を指す。

【一隻眼】心眼を指す。

太煞活潑、是れ死穩狙地にあらざることを。若し究めて玄奥の處に到らば、則ち入理の深きことを知らず。若し活潑の處に到らざるときは、則ち旋機の妙を識らず。道人の用心は用て、用ふべきこと無き處に到りて、正に好し人に見えて、漆桶を打翻して箇の微處を得るに、豈愚を抱き株を守つて、一隅に滞在して、籠中の鶴、退毛の鳳と做ることを甘心すべけんや。

工夫を做すに、疑情發得起して法身の理と相應すれば、面前、隱隱地に箇の物あるに似て相似たり。此隱隱地を將て、疑ひ來り疑ひ去つて、箇の前境に格定して、便ち自ら法身の理に入得し、法界の性を見得すと謂へり。知らず此等目を控つて成ずる所なることを。通身是れ病にして禪には非ず。若し眞個入理の人は、世界闊きこと一丈なれば、古鏡闊きことも一丈、身を横へて宇宙に當つて、其根塵器界を求むるに、了に不可得なり。又何を將て身と爲し、何を將て境と爲し、何を將て物と爲し、何を將て隱隱地とか爲ん。雲門も亦此病を指出す、尙多文あり。若し此一種の病を明め得ば、則ち下の三種の病は、渙然として氷の如くに釋けん。博山嘗て學者に謂うて曰はく、「法身の中に病最も多し、只須らく大病一場して始めて病根を識すべし。假使盡大地の人、參禪すとも、未だ一個も法身の病を受けざる者あらず、惟盲聾瘖啞の者を除く、此限に在らず。」工夫を做すに、疑情發得起して、法身の理と相應すれば、古人「盡大地是れ沙門の一隻眼、盡大地、自己の一點の靈光、盡大地是れ自己の一點の靈光の裏に在り。」と道ふを見、

【教中に】 從容錄
八十四則。
【領略】 合點する
こと。

【漳江】 虛堂集五
十九則に出づ。
【大人】 悟道の達
人。

【種草】 禪家の佛
種の義。

【正恁麼】 まさに
かういふの意。
【依正報中】 正は
空、中は主。
【廊に入り手を垂
る】 修行の第一歩
【清光云云】 從容
錄二十六則。

又教中に「一塵の中に無邊の法界の眞理を含む。」と道ふを引いて、便ち這裏に向つて領略し去つて、肯て進益を求めず、生ずることを得ず、死することを得ず、此解路を將て之を悟門と謂ふは、通身是れ病にして、禪には非ず。殊に知らず、縦ひ理と相應するも、若し打不脱なれば、全く是れ理障にして、法身邊に墮在す。何ぞ沈んや解心に牽りせられて、入理の深きことを能くせざるをや。這個の彌猴子、捏するとも死せず、既に死し去らざれば、又安ぞ絶後に再び甦ることを得んや。當に知るべし、最初に疑情を發せば、便ち理と相應せんことを要せよ。既に理と相應せば、個の深入を得んことを要せよ。既に個の深入を得ば、須らく萬仞巖頭に向つて、劬斗を翻すべし。打し將ち下り來つて、手を擺つて、漳江を出でば、始めて是れ大人の用心ならん。然らずんば盡く掠虚の漢にして、當家の種草には非ず。

工夫を做すに、疑情發得起して、法身の理と相應すれば、行住坐臥、日色裏に在るが如く、燈影裏に在るが如くにして、淡淡地にして沒滋味なり。或は更に全身放下し、坐して水澄み珠瑩くの際、風清く月白きの時に到る。正恁麼の時に依正報中都是一片の境と成り去り、清清淨淨、伶伶俐俐たり。自ら之を究竟と謂うて、身を轉じ氣を吐くことを得ず。廊に入り手を垂ることを得ず。又肯て人の決擇を求めず。或は淨白界中に向つて、別に異念を生出して、之を悟門と謂ふ。通身是れ病にして禪には非ず。天童の「清光眼を照すも、家に迷ふに似たり、明白身を轉ずるも、獅、位に墮す。」と謂ふ所なり。良に以

【區處】 わけてお

【一莖艸を云云】

從容錄四十七則。

【漁父云云】 從容

錄第六十八則。

れば、清光眼を照せば、豈水澄珠瑩、風清月白に非ざらんや。明白身を轉ずれば、更に一步を進め得たるなり。只一迷に似たり位に墮す。この四箇の字を消して、一印に印定す。行人此に到つて、又作麼生か區處せん。只須らく大いに轉變すること有るべし。一莖艸を拈じて丈六の金身と作して、用ふることも未だ分外と爲す。然らずんば是れ楮に釘つて糟を搗し、漁父巢に棲む、喚んで没血氣の漢と作す。千個萬個を打死すとも、甚麼の罪過あらんや。

工夫を做すに疑情發得起して、法身の理と相應すれば、法身邊に於て奇特の想を生じ、光を見、華を見、種種の異相を見て、便ち聖解を作す。此殊異の事を將て人を徇惑して、自ら大悟門を得と謂ふ。殊に知らず、通身是れ病にして禪に非ざること。當に知るべし、此等の殊異の境像は、或は是れ自己妄心、凝結して成じ、或は是れ魔境隙に乗じて入り、或は是れ帝釋天人變化して試に現することを、妄心凝結とは、淨土を脩する人、觀相して念を移さざれば、忽ち佛の像、菩薩の像等を見るが如きは、十六觀經の中に説くが如し。悉く淨土の理と合すれども、參禪の要門には非ず。隙に乗じて入るとは、楞嚴經の中の五蘊空する時に、行人心に所着あれば、魔即ち意に隨つて現するが如し。變化して試に現すとは、菩薩修行の時に、帝釋身を化して無頭の鬼、無五臟の鬼を現す、菩薩怖畏の心無ければ、復美女の身を現す。菩薩愛染の心無ければ、復帝釋の身を現じて禮拜して云はく、『太山をば崩すべく、海水をば竭すべきも、彼上人は、其心を動し難し。』といふ

【野人云云】壽州の道樹禪師乃ち壽州の三峯山に留れる時の事迹。

【安在】おくといふの意。

【護心】業識の色心。
【轉身】凡身を轉じて成佛す。
【保養】悟後の修養。

【如意】大慈悲の方便。

が如し。故に云はく、「野人の伎倆は盡くることあり、老僧が不見不聞は窮り無し。」と。若し眞の參學の人は、縦ひ白刃前に交加すとも、念を動ずるに暇無けん。何ぞ況んや、靜定の中の不實の境相をや。既に理と相應するときは則ち心外に境無し。能觀の心、所現の境、又甚寥の處に安在せん。

工夫を做すに、疑情發得起して、法身の理と相應すれば、身心輕安にして、動轉施爲、相留礙せざることを覺得す。此は是れ正偏道交し、四大調適にして譬爾として是の如し、究竟に非ざるをや。彼無知の者、便ち疑情を放下して、肯て參究せず、自ら大悟門を得と謂ふ。殊に知らず、命根斷ぜざれば、縦ひ能く理に入るも、全く是れ識心、識心を以て卜度し、通身是れ病にして禪に非ざることを。入理深からず、轉身太だ早きが爲に、深知ありと雖も實用を得ず。縦ひ活句を得とも、正に好し水邊林下に向つて、保養含蓄するに、切に躑躅して便ち人の爲にせんと欲し、妄に自ら尊大なるべからず。當に知るべし、最初に疑情發得起して、一團に結在する時に、只渠が自己遊聞するを待つて、始めて受用を得ることを。然らずして稍理致あれば、便ち疑情を放下せば、這裏定んで是れ死不去、定んで是れ打不徹、一生虚しく過して參禪の名ありて參禪の實無けん。只饒、饒に入り手を垂るるとも、妨げず、更に大善知識に見ゆることを。彼善知識は是れ大醫王、能く重病を療す。是れ大施主能く如意を施す、切に自足の想を生じ、人に見ゆることを欲せざるべからず。當に知るべし、肯て人に見えざることは、已見を執するが爲にして、禪中の大病、

此に過ぐる者無きことを。

禪人公案に參するに示す警語

董巖の達空禪者に示す

虚空に通達して、白浪を翻するも、好し家私を把つて都て破蕩するに、眼ありて見えず、
耳ありて聽するも、赤肉團中、痛痒を加へん。從教に白醜口邊に生ずることを。佛法塵
勞一へに坦平正念にして針鋒も割不入、面皮鐵を踏て人情を没す、禪に非ずんば輕く動歩
せしむること莫れ。舉止安座として、回互することを要す。謾に知見を將て、妄に疎觀せ
んより疑團を撈碎して、須らく妙悟すべし。疑團を破せざれば、誓つて休せざれ、放出す
酒山の水牯牛、一朝鼻に穿つて歸れ、適地天を遮る這一頭。

峯頂の智達禪者無字の公案に參するに示す

狗子佛性無、當下に親疎を絶す。千尋の浪に入つて、惟赤尾の魚を求むるが如し、角あ
るも鯉に關るに非ず、鬚無きも是れ渠にあらず、有無俱に勦絶して、直に驪龍の珠を探ら
ん。又四面の火の如し、前方一線餘る、退歩すれば即ち燒殺す、横逸すれば亦軀を喪す、
烈餘停止するに非ず、生を求めて徐なることを待つこと莫れ。九重の淵に入るが如く、萬
仞の處に憑るが如く、用意切なること此の如くならば、靈樞を發することを管取せん。更
に前程の路あるも、水到れば自ら渠と成らん。

- 【禪者】 晩年の信
- 【家私】 自己事分
- 【破蕩】 さぶりと
- 【赤肉團】 五尺の
- 【白醜】 白きかび
- 【鼻勞】 頓悟、妄
- 【坦平】 正直。
- 【割不入】 議論の
- 【疎觀】 無きこと。
- 【回互】 進退。
- 【疎觀】 所參の話
- 【酒山の公案】 酒山
- 【水牯牛】 酒山
- 【鼻】 鼻は電術百丈に關ぐ
- 【適地】 まつしぐ
- 【適地】 はるかに
- 【と云きこと】 と云きこと。
- 【萬仞】 是非をな
- 【絶】 くる。
- 【絶】 のこらず
- 【たえる】 たえる。

【繞龍】純黑色の
球を奪ふ龍。
【靈樞】極意のこ
と。
【乾屎橛】糞を杖
ぶ木片。
【渾身】身體一ぱ
い。

【祇婁に行け】ま
さに行けの意。
【靠倒】ころりと
倒れる。
【重生】親の生み
つけたるその儘を
いふ。

智白禪者乾屎橛の公案に參するに示す
如何なるか是れ佛。乾屎橛、大千世界一團の鐵、渾身鐵團の中に坐在す。出ることを得
ざる時、誰に向つて説かかんや。白、禮拜す。復云はく、禮拜すること莫れ、只健、出得す
る時も、三十棒を領收せん。

智那禪者一句の話頭甚の處に在つて起るといふに參するに示す

一句の話頭、甚の處より起るや、滄海只乾いて底に到らしむ。一句の話頭、甚の處に去
るや。春風觸着す珊瑚の樹、去ることを究めず、只起ることを究めて石陥り崖崩るとも、
兩耳を聳せよ。十二時中、歩移さず、双鋒に在つて住止を求むるが如くせよ。只須らく劬
斗を打し將ち來るべし。靜陸平原方に歩武、男兒志を立つること若し斯の如くならば、
誰か道はん、龍を搏にし、併に虎を搏つと。泰山の路、若何と問ふことあらば、遙に前村
を指して、驀直に去らしめん。

心陽居士沒踪跡の公案に參するに示す

沒踪跡、身を藏すこと莫れ。春梁を堅起して祇婁に行け。鐵壁銀山俱に靠倒す、幾回か
歡喜し幾回か嘖る。身を藏す處、沒踪跡、虚空に向つて、鳥跡を尋ぬることを休めよ。娘
生の鐵面皮を放下して、蕩蕩黄金の汁を傾け出す。返復して看よ、多からしめされ、甚の
衆生と佛魔とを管せんや、只一口に都て吞盡せしめ、滴水も翻つて幾丈の波と成る、行
も也參じ、坐も也究めよ。指頭を踢破せば、俱に漏逗、倒に鐵馬に騎つて須彌に上る、

【監院】叢林の取締をする役。

一生人の後に随ふことを得ず。

照監院萬法歸一の公案を看るに示す

萬法一に歸す、一何れの處に歸するや。眉毛を豎起すれば、大火聚の如し。生は與に同生し、死は與に同死す、行は與に同行し、住は與に同住す。頓に疑情を起して、怕怖を生ずること莫れ。大敵に臨むが如く、他を顧みるに暇あらず。逆順の境に逢うて、須らく善く回互すべし。歸處知らず、背て他務に隨はんや。鐵圍山を撞破し、寶藏庫に蹲踞せば、瞬目と揚眉と全機露布に彰る、青州の布衫、重きこと七斤、門前舊に依りて桃干樹。

【青州の布衫】青州の公案。

普周禪者念佛の公案に參するに示す

【展似】のべしめすこと。

一句の阿彌陀、珠の濁水に投ずるが如く、珠を投ずれば、水自ら清む、佛を念すれば、妄即ち止む。水自ら清くして、鬚鬢鑑みつべくして、纖塵を絶す。依稀として識得す、娘生の面、展似す眉毛作塵生、妄即ち止む。萬里澄潭底を見ず、碧玻璃の上、珊瑚の枝、雪のごとくに白い、氷のごとくに枯る。紙這は是れ念即ち空、三更初夜日通紅、寶池金地蓮花園、萬派全く歸す指顧の中。指顧の中、此念を空す、念空空念一片と成る、十萬の程途、當下に知る。根塵陰界摩尼の殿。摩尼の鏡、光皎皎、佛法塵緣都て照了す。位を轉じ機を旋す、事若何。噫、生とも也道はず、死とも也道はず。

觀如禪者父母未生の公案を看るに示す

父母未生前、誰か是れ本來の面、鐵心肝を放下し、吹毛の劍を提起す。世法及び塵緣、

【摩尼】如意と譯す。

【鐵】 蜂の一種。

【單提】 唯一つを指し、一のこと。

【都來】 すべて。

【滯滯】 水の滯留せる形。

【參】 禪客を招く語なり。

【鐵櫬】 離れ難きに譬ふ。

【昏沈】 ぐちになりて。

【日旋三昧】 法華の妙音品に出づ。

蜂の猛衝に入るが如く、無量の妙法門、參禪最も靈驗あり。句語頭を單提して、語の方便に墮せざれ。萬別と千差と都來一念に融せよ。萬仞の巖前、湛水滯滯、一帶の晴空、閑雲片片、此に到るときは、則ち心月孤圓、敢て日はん、靈明顯現すと。光萬境を呑んで境光に非ず。却りて笑ふ澄江淨うして練の如くなることを、練の如くなるに非ず、祇一練更に火に入りて重ねて煮煉すべし。穴細の金針、鼻を露す時、蘇州の布、也揚州の絹、參。

宗妙禪者千日の期を以て又案に參するに示す

善く道に造る者は、千日の功、趣向、栗棘蓬を呑むが如くにす。淨白界中、纔に一念あれば、須彌山隔てて其中に在り、一句の語頭鐵櫬の如し。佛法塵勞都て屏絶す。昏沈散亂剛と成し去つて、只須らく切上に重ねて切を加ふべし。千日頃刻の間に如同して、意路心思往還を絶す。兩足を放開して、超然として上れば、烈火層氷總に是れ開、全身無生國に摺入して、妙に有無の軌則を出づ。虚空に逼塞して、人を顧みず。始めて知る、大地漆の黒きが如くなることを。翻身の拄杖、活すること龍の如し、海を透り山を穿つて古風を振ふ。此は是れ日旋三昧の力、法界毫端用窺らす。更に向上末後の句あり。玄妙機微都て不是、如來の行處に向つて行ぜず、男兒自ら天に冲するの志あり。

六雪關主公案に參する行人話頭真切ならば、楞嚴の五蘊魔外に

落ちざるやと問ふに答ふ

楞嚴の五十種の魔事を細觀するに、一個の着の字を出でず。色陰明白にして、諸念を銷

【劫濁】 俗世。

【虛明】 わだかまりなき心。

【精氣】 肉體に執着する習氣。

【受陰】 六陰の内の一。

【想陰】 同上。

【偶合】 丁度相合ふこと。

【沙を蒸して云云】 佛要第六巻に出づ。

【行陰】 六陰の内の一。

落す、乃至是人、則ち能く劫濁を超越す、其所由を觀するに、堅固妄想以て其本とすといふが如き、即ち此堅固妄想、便ち融化すること能はず。妄想の中に於て、精研して希奇の事を見て聖解を作す、豈着に非ざらんや。聖解を作さざれば、善境界と名くといふが如き、作さざるは即ち着せざる耳。又五蘊の中、總て妄想の二字を以て之を結す。最初の一行、便ち破ること能はざれば、即ち此妄想、便ち是れ魔の根蒂なり。其根本除かずして、其枝葉を挫いで、其をして生ぜざらしめば、可ならんか。甚しきときは乃ち其虚明を利とすれば、彼精氣を食ふ、悉く妄想牽合す。魔外より來るに非ず、苟も慎護に涉らば、正に「雪上に霜を加へ、火上に油を益す」と謂ふ所なる耳。受陰の中の虚明妄想の如き、虚明も亦妄想なり。蓋し最初に未だ求心不有の地に到らず、妄に非ずして何ぞや。想陰の中の融通妄想の如き、最初の章に心に圓明を愛すと云ふ。即ち前の妄根、境と融通して便ち愛着を生ず、十種悉く心愛等と云ふ。蓋し天魔圓境の中より來りて、愛心と偶合して、無邊の魔業を作す、安ぞ救ふべけんや。良に以んみれば、行人最先に此一念を坐斷して無心ならば、即ち愛無けん。愛無きときは則ち着の一字何ぞあらんや。只第九の章に、心に入滅を愛し、深空を貪求す等と云ふが如き、悉く是れ魔業、亦最初の妄心に破せざればなり。正に「沙を蒸して飯と作す、沙は飯の本に非ず」と謂ふ所なるや。行陰の中の幽隱妄想の如き、蓋し行陰は乃ち遺流して止らざるを性と爲す、故に生滅の根元、此より披露すと云ふ。想陰盡くるが爲に、行陰の中の根元、悉く是れ生滅念停らざることを徹

【有因無因】 因縁の有無の略。

【正偏知】 阿耨多羅三藐三菩提の正覺の因。

【倏然】 たちまちと驚す。

【墜烈】 そこなふこと。

【馳逸】 はしりにぐるること。

【互用】 主となり伴となる。

【精妙】 ごくい。

【思大】 梁時代の名僧、南嶽思大。

【外種】 外道の輩。

【便ち好し云云】 從容錄五十三則に見ゆ。

【脩證】 修行、證得。

【進用】 盛に用ゐること。

見して、行人生滅に隨つて遷流せず、故に凝明の正心を得。爾時、天魔、其便を得ず、

但圓元の中に於て、計度を起す、故に其始末、有因無因等を窮む。既に計度あれば、正偏

知を亡す。計の一字、幽隱の中より來る。文に云はく、「彼幽清を觀るとは、源底を徹見す

ること能はざるなり、識隱の中の顛倒妄想の如き、謂はく、同分の生機、倏然として墜烈

す。六根虚靜にして復馳逸すること無し。」と。虚靜を不馳逸と爲す、不馳逸を行陰盡くと

する耳。行陰既に盡くれば、見聞鄰を通じて互用清淨なり。故に云ふ諸行の空を窮めて、

尙識の元に依る。乃至精妙未だ圓ならざるに、便ち勝解を生ず、此十種悉く識心を以て

勝解を生ず、既に勝解を作せば、圓通に違違して、諸の種類の生ず。禪門の中、善く用

心する者は俱に相渉らず。思大云はく、「十方の諸佛、我に一口に吞盡せらる、何れの處に

か更に衆生の度すべきあらん。」と。此は是れ佛祖位中、渠を留むれども住らず、邪魔外種

其れ爾を奈何せん。其蝕を受けざることを得んと欲せば、但全身入理せよ。遺ることを待

たす、護ることを待たずとも、妄想念盡くるときは、則ち魔業自ら盡きん。古徳云はく、

『便ち好し、根に和して一斧を下さば、節外又枝を生ぜしむることを免れん。』と。

脩證を執せず脩證を廢せずといふの間に答ふ

吾宗門下には、利鈍賢愚を論ずること毋し、但信を以て入る。既に猛利の心を發起して、
鐵壁銀山に坐在して祇逆出を求むるが如くならば、諸の妄想の心悉く入ること能はじ、
觀照功行安きこと將寄らんや。果して一念進用することを得ば、雲を披いて天を見るが

【鬼家活計】 死人の用所。

【齒錄】 齒に挂くるに足らざるを云ふ。

【南嶽】 懷讓禪師六祖に參ずるの問答中に見ゆ。

【南泉】 南泉普願禪師は、斬猫して衆徒を呵斥す。

【牙齒關云云】 牙齒を咬定し、口の關所をしまる。

如く、故物を獲るが如くならん。觀照功行亦何ぞ施す所あらん、祇參究の念、甚だ切なることを貴ぶ。其參究亦功行に涉る、但功行を以て名を立てず。圓覺に云ふが如き「惟頓覺の人と并に法不隨順とを除く。」と。若し觀照を以て事と爲るときは、則ち能觀能照の心あり、必ず所觀所照の境あり、能所對立す、妄に非ずして何ぞや。所以に禪宗に云はく、「大方に獨踏すれば、心外に境無し。」と。十方世界泊び父母の身心を將て、融して一箇と成し、兩頭を坐斷せば、始めて個の入門を得ん。向上の一路は更に須らく自ら看るべし、然らずんば盡く是れ鬼家の活計、安ぞ脩證を以て日を同じうして語るべけんや。果して顛倒として此地に到らざるをば、即ち自欺と名け、此輩を名けて、可憐愍の者となす、寧ぞ齒錄するに堪へんや。南嶽云はく、「脩證は即ち無きにあらず、汚染すること即ち得ず。」と。即ち此不汚染の脩、圓脩と謂ふべし。還つて箇の脩の字を着得せんや。即ち此不汚染の證、圓證と謂つべし、還つて箇の證の字を着得せんや。此の如くなるときは則ち終日脩して脩無く、掃地焚香悉く無量の佛事なり、又安ぞ廢すべけん、但脩證に着せざる耳。九地すら尚無功用行なり、況んや十地をや。乃至等覺、說法雨の如く、雲の如くなるも、猶南泉に道と全く乖くと呵斥せらる。況んや十地觀照をや、宗門と而も其優劣を較べば可ならんや。

參禪を示す偈十首

參禪は須らく鐵漢なるべし。期と限とを論すること毋れ、牙齒關を咬定して、只大事を

【剔起】のぞきき

【行誼】行狀禮義

【雲門の普】僧問

【破落】無頼漢、

【萬葉】もろもろ

【倭保】看顧。

【條あれば云云】

【心空云云】魔居士の偈。大悟徹底して了るを云ふ。

【魔宮震】魔どももおそれる。

【大散關】大散關は寶雞縣の南五十

【咄哉】やれやれ

辨せしめよ。猛火油鑪を熱して、虚空都を糞爛す。忽朝撲轉過せば、千斤の擔を放下せん。參禪は久しきを論ずること莫れ、塵縁と偶せざれ。兩葦の眉を剔起せば、虚空も顛倒して走らん。須彌碾つて末と成り、當下に本有を追ふ。生鐵金汁流れば、始めて従前の咎を免れん。

參禪は莽鹵なること莫れ、行誼古を稽へんことを要す。一條弦直の心、岐路に遭うて苦まず。黃龍の關を撈碎し、雲門の普を拈却す。這箇破落の僧、從來戸を出でず。參禪は主宰を没せよ、祇心を改めざらんことを要す。萬葉及び摩娑旋空、誰か倭保せん。堅硬にして天を撃ぐべし、勇決にして海を打むに堪へたり。然も未だ徹頭せずと雖も、前程を管取すること在らん。

參禪は須らく審細なるべし、工程を把つて計ること莫れ。條あれば便ち條を返づ、條無ければ即ち例を返づ。佛と祖とを親しうせず、甚の經と偈とを管せん。都來一口に吞まば、心空始めて及第せん。

參禪は正信を發せよ、信正しければ、魔宮震ふ。片雪紅爐に入り、赤身白刃に遊ふ。只活路を尋ねて上れ、死水をして浸さしむること莫れ。大散關忽ち開けば、倒に毘盧の印に跨らん。參禪は把玩することを休めよ、倏忽として時光換る。至理及び玄奧、秦の時の鏡鏤鑽、咄哉丈夫心、手を着けて還つて自ら判ぜよ。百年能く幾何ぞ、行くに臨んで亂るることを

待つこと莫れ。

參禪は巧拙無し、一念超越することを貴ぶ。指上の影を識得して、直に天遊の月を探れ、胸を劈開して心を見る。舌を刮り去れば血あり、分明に君に舉似す、會せずんば誰に向つて説かんと。

【舉似】 問を設けて説き示す。

【會】 さとる。

【素倒】 よたよたの鈍。

參禪は須らく趣ふこと早かるべし、年紀の老ゆるを待つこと莫れ。耳聾し眼朦朧、朝在つて夕保ち難し。生平最樂の事、此に到りて都て潦倒。佛法本多なし、祇今時に了せんことを要す。

【華鯨】 單に鯨といふを形容して。

【至憐】 至道至大の體。

【斯門】 吾禪門。

參禪は妄を治むること莫れ、妄を治すれば仍障と成る。譬へば華鯨を得んと欲せば、甚の波濤の濼ふことを管せん。至體纖塵を絶す、妄心是れ何の狀ぞ。謹んで參禪の者に白す、斯門眞に尙ぶべし。

博山和尚參禪警語卷之下 終

天台菩薩戒疏

宗典部
第二十二卷

【梵網經の菩薩戒の部を註釋したるものにして天台大師の説を録したる灌頂の菩薩戒經義疏二卷を唐の明曠の刪補せるものなり】

【一】以下序説。

【佛性常住】一切衆生の有する覺悟の性に變易無きを云ふ。

【四悉】世界、爲人、對治、第一義の四悉檀(Siddhant)の略にして、佛が遍く衆生に施す四稱の利益。

【木叉】波羅提木叉(Pattimokkha)の略稱にして別解脱と譯す。戒律の一

【蓮華藏界】華嚴の十佛攝化の境界のこと。盧舍那佛の嚴淨せし所に於て一切の國一切の物悉く大蓮華に含藏せらるるが故に蓮華藏といふ。

【別圖】天台四教

天台菩薩戒疏 上

天台沙門明曠 刪補す
草書は法を減す傳ふる者眞を須ひよ

(一) 佛性常住教の起ることは、緣によりて緣宜同じからず。故に義に廣略有り。或は衆釋を引き以て異を顯し、或は今古を破して圓に非ざることを驗む。或は綺飾を以て文才を引き、或は膚質を存して深致を成じ、教旨を彰し、四悉、時に適ふ爲に非ずといふことと莫し。今、欲する所に隨つて、直に筆して文を銷す。取捨憑ること有りて、先見に違はず。則ち天台を以て宗骨と爲し、天宮の具緣を用て、闕けたるを補ひ銷釋す。貴きこと文を扶くるに在りて、則ち諸家を參へ取り、但自ら遺失を慮る。豈敢へて他人に呈露せんや。忽ち視聽の縁に漏れば、幸に源意を知れ。菩薩戒とは善を運ぶの初章、惡を却くるの前陣なり。聲聞の小行は尙自ら木叉を珍敬す。大士の兼懷は寧ろ戒品を精持せざらんや。故に蓮華藏界は、日月を懸けて以て照臨し、菩提樹王は甘露を問きて、乏きを濟ふことを得たり。千華千百億は盧舍那を本身と爲し、十重四十八轉は、釋迦文を末化と爲す。不可説の法は、心地を毛端に啓き、不思議の光は、身華を色頂に擧ぐ。是に於て別圖の大士と同じく修する所、八萬の威儀聖賢は、之を以て致を齊しくす。況んや乃ち恆沙の戒品は、三聚を圓にして統收し、六位を具して該攝す。既に因陀羅網の如し。同じうして同じ

中の別教同教なり共に中道を極理とす。

【六位】 十信、十住、十行、十廻向

【三聚】 正定聚、邪定聚、不定聚をいふ。

【因陀羅網】 帝釋天(Indra)の寶網にして其網の線と珠玉が交絡するを

取て物の重重無盡に交絡渉入するに譬ふ。

【薩婆若】 原語サルバジニヤ(Sarva Jñāna)の音譯にして一切智と意譯す。

【三種】 修道上の三種のきはり、即ち見思惑、塵沙惑無明惑なり。

【題して云云】 經題を譯す。

【八音】 如來の八種の音聲、即ち極好音、柔軟音、和女音、尊慧音、不遠音、不誤音、深

【羅什】 姚秦の弘

からざることを、薩婆若海に似たり。異にして異ならざることを、摩尼の寶を雨らすに等し。

普く黎元を洽すこと環珞を以て身を嚴るに譬へ、巧に妙覺を成す。是に於て五位の菩薩は、

此に頼りて因圓せずといふこと莫し。三世の如來は斯に由りて果滿せざることを莫し。既に

道場の直路と爲したり。只是れ正覺の良規なり。大なるかな、盛なる哉、得て言ひ難き者

なり。題して「梵網經盧舍那佛說菩薩心地十重四十八輕戒品第十」と云ふ。梵は則ち人により

て當體染を離るるを名と爲し、網は喻に就いて彰し功能に號を立つ。意は諸佛機に對して

教を設くることを明すに、藥病多端なること、大梵王の因陀羅網の如し。故に梵網と云ふ。

經は謂はく、經教なり。常住佛性を詮量分別す。故に名けて經と爲す。盧舍那等は、寶

梁經には、翻稱して淨滿と爲し、三惑頓に盡す。故に名けて淨と爲す。萬德俱に圓なり。

故に稱して滿と爲す。淨滿の智は自覺覺他す。故に名けて佛と爲し、八音宣吐す。之を名

けて説と爲す。菩薩等とは、謂はく、此戒法は妙覺の前因位の大士に軌範たり。故に菩薩

と標す。菩薩の律儀は、遍く三業を防ぎ、心意を主と爲し、一を擧げて諸を攝す。譬へば

大地の萬物を含攝するが如し。故に心地と言ふ。十重等とは法を簡びて人を異にす。禁法

多しと雖も、輕重の兩類を出でず。故に十重四十八輕戒品と云ふ。第十とは羅什法師所述

の法相を案するに、梵網經の律藏品より出でたり。梵網の大本は、一百五十二卷六十一品

にして、唯第九の品竟りて、菩薩心地の輕重の律儀の階位差別を明すこと、一品兩卷な

り。是れ彼一なるが故に第十と云ひ、總じて之を「梵網經盧舍那佛說菩薩心地十重四十八

始三年に龜茲國より來支せる譯經三藏にして梵にクマ

ラジーブ(Kumārāśīva)此に童壽と云ふ。

【二】本文叙述の大綱を明すに七門を分つ。

【初に又二あり云】戒の名を説く

【三】七門分別の中、第一に名體を明す。

【毘尼】毘尼はビナヤ(Vinaya)の音譯調伏と譯す。

三藏中の律のこと

【四弘】四弘誓願のこと。

【十善性戒】大乘の在家戒にして不殺生乃至不邪見。【十重】殺盜乃至誘三寶の十の禁戒四十八の輕戒に對して重といふ。

輕戒品第十一」と言ふ。

將に此文を釋せんに七門分別す。初に名體を明し、二に宗用を明し、三に教攝を明し、

四に受法を明し、五に傳譯を明し、六に略して料簡し、七に文に隨つて解釋す。初に又二

あり、初に名を釋し、次に體を出す。

【三】初に名を釋せば戒の一字なり。梵には尸羅と言ひ、亦是毘尼波羅提木叉等と云ふ。此に

は清涼と云ふ。三惑の過を滅して、解脫を保持するなり。今戒と言ふは、能く三業を防

ぎ、三惑の非を止む故に名を得るなり。大いに之を言はば、四弘三聚を出でず。道を成じて

法を知るは、即ち攝善法なり。誓つて煩惱を斷ずるは、即ち攝律儀なり。願じて衆生を度

するは、即ち攝衆生なり。況んや一一の誓に三聚具足す。況んや一一の戒に、此三心を備

ふ。不殺を持するが如き、惡を止めて生ぜず、遍體染を離るるは、即ち攝律儀、法身の因

なり。制して善等を行じ、法を知り眞を證して、感報自存なるは、即ち攝善法、報身の

因なり。惡を止め善を行じ、慈悲を本と爲して四悉物を利するは、即ち攝衆生、應身の因

なり。此三聚戒は「大智度論」に依るに、義十種に通ず。一に不戒、謂はく、十善性戒乃至

十重を持す。若し毀缺する者は、受用に堪ふる無し。二に不破、三に不穿、即ち四十八輕

なり。若し毀犯する者は、器破裂し、及び穿漏するが如きなり。四に不雜念、即ち欲念起

らざるなり。五に隨道、六に無著、謂はく眞諦の理を見て、三界の内の見思の惑を離るる

なり。七に智所讚、八に自在なり。此は菩薩利他に約して、智人に讚ずる所と爲る。九に

【首楞嚴禪】梵にシユ・ランガマサマーデイ(Sunimāmasamādhi)といふ。佛所得の三昧の名なり。

【一心三觀】吾人介爾の一心は即空即假即中なりと觀ず。

【第一義諦】眞如のこと眞諦に同じ

【次】體を出さば【戒】戒の體に就いて叙す。

【三羯磨】受戒の時羯磨師より羯磨の文を唱へて教ふるを受者之に答へて教の通り三遍唱ふるをいふ。

隨定、十に具足、中道の首楞嚴禪を證するに約す。滅定を起さず威儀を現し、十界の身を示して、形に隨つて物を化すなり。此十種は三業を禁防すれば、通じて戒と名くるを得、身心を軌運して、涅槃の岸に至るを、又は惣じて乘と名く。故に人天等の五乘の差別有り。今之所持は事に約し理に達し、一刹那の心に十戒具足せり。所持の前の四は因縁を境と爲し、理持の後の六は、境の佛性中道常住を了し、體は唯一心なり。具に凡聖依正の因果を含めり。具せりと雖も空にして、法界に非ずといふこと無し。之を名けて觀と爲す。即ち一心三觀なり。空は即ち空觀にして、性の眞諦を觀じ、道共無著の兩戒を持す。具は即ち假觀にして、性の俗諦を觀じ、智讀自在の兩戒を持す。法界佛性は、即ち是れ中觀にして、性の中道第一義諦を觀じ、隨定具足の兩戒を持す。故に「中論」に云はく、「因縁所生の法は、我即ち是れ空なりと説く。亦是名けて假名と爲し、亦是れ中道の義なり」と。境智俱に心の能所冥一なり。一にして一ならざれば、四六宛然たり。即ち名宇觀行の位の初に約して、俱に十戒を持するを、名けて菩薩と爲す。次に體を出ださば、初に圓心を發して、師に従つて受を請す。身口に誠を勉するを、名けて作戒と爲し、色心を體と爲す。三羯磨の竟に法を納め懷に居く。作休謝往して未來に訖るを、無作の戒と名く。唯實相の心は之を以て體と爲す。故に「瓔珞經」に云はく、「一切の凡聖の戒は、盡く心を以て體と爲し、心無盡なるが故に、戒も亦無盡なり」と。諸大乘經には、第二聚無く、聲聞の律儀の非色非心を以て、戒體と爲るに同じからず。

【四】七門分別の中、第二に宗用を明す。

【圓果】圓滿の行因を以て證得せる圓滿の果徳即ち涅槃なり。

【五】七門分別の中、第三に教攝を明す。

【三藏教】天台所立四教の第一。一切の小乘教を指す。

【通教】四教の第二。萬法當體即空無生無滅の理を説いて二乘及び鈍根の菩薩をして但空の證をして不但空即ち中道の證を得しめん爲に施設せる三乘教なり。

【別教】四教の第三。萬法は事の方便より見れば差別あれども理の方面より見れば平等無差別なる故須らく吾人の迷見を脱して平等の理を解るべしと教ふる教法に名く。

(四) 二に宗用を明さば、先に宗、次に用なり。言ふ所の宗とは要なり。趣なり。始より末に至り體に依りて護持す。趣は圓果を期するを、名けて宗と爲すなり。次に用を明さば、身に聖法を佩びて美德外に彰れ、威儀行成じ清嚴軌範、肅然として畏れつべし。三惑を制御し、物をして歸信せしむ。故に名けて用と爲す。

三に教攝を明すとば、釋尊の二化、身を示して法を説くこと、始有り終有りて四種差別す。謂はく、三藏教、通教、別教、圓教なり。三藏は其に『俱舍』『婆沙』の如し。聲聞の階位は、七賢七聖等の殊あり。緣覺は則ち值佛、不值佛等の差別有り。菩薩は則ち三祇百劫に、相好の因を修し、並に一の毗尼毘曇修多羅の三藏の學に同じうす。乃至菩提樹下に、一念相應して三十四心、界内の見思を斷じ、正習俱に盡す。之を名けて佛と爲す。偈の布薩に同じく、別に菩薩の律儀無し。故に『法華經』に云はく、「小乘三藏の學者に親近せざれ」と。而して三藏の名を得ば、即ち劣應身は鹿苑に丈六金容と成ることを示す。乃至方

等の會の中の小機の所の老比丘像は、是れ其佛なり。二に通教とは方等般若に、三乘の人の共行十地を明すが如し。一、乾慧地。外に二、性地。凡三、八人地。四、見地。觀を出でずして三藏の初果が、薄地。三人同じく欲界六品の思惑を斷ず三藏の二果と齊し。六、離欲地。三藏の三果と齊し。七、已辨地。三界の見思を斷じ盡す。八、支佛地。福徳深刻にして能く、三藏の羅漢と齊し。九、菩薩地。空より假に出てて小習氣及び界を學ぶ。十、佛地。一念相應の習氣永く盡す。

此等の十地は、前に住行向の名無く、後に等覺妙覺の位無し。三人の因果は、大いに同

【圓教】四教の第一。眞實なる教。諸法實相の旨を教ふる法華經等をいふ。

【七賢七聖】小乗の見道前後の修行位にして前を賢位後を聖位とす。

【毘曇】梵にアビダルマ (Abhidharma) 此に對法と譯す。論のこと。

【修多羅】梵音スートラ (Sutra) 經のこと。

【五十二位】菩薩修行の階位。十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺の稱。

【地前】五十二位の中の初地以前の位。

【登地】初地即ち歡喜地の位に登りたる菩薩をいふ。

じきを名けて通教と爲し、勝應身を示すに、魏魏堂堂として星の中の月の如し。即ち通佛相なり。菩薩は亦聲聞の律儀に同じ。三に別教とは「瓔珞」「仁王」等の經に、五十二位を明すが如く、地前をば凡に屬し賢と名け、登地をば聖に屬す。或は云はく、七地に無功用に入り、十信は數進み、數退くるを、名けて外凡と爲す。十住に空に入りて、見思を斷じ、及び界外の上品の塵沙を斷ず。十行に出假して、中品の塵沙を斷じ、遍く四教十界の業病を知る。十廻向の位に下品の塵沙を斷じ、向の後に中を修して、外界の無明を伏す。一分終に落ちて即ち初地に入り、八相成道す。因果迢して、劫數量り回し。觀行歷別して、前に別、後に別なり。故に名けて別と爲す。報身を成ずることを示すは、即ち其相なり。四に圓教とは、圓に三障は即ち是れ三徳なりと信ず。報障は即ち法身、煩惱は即ち般若、結業は即ち解脱なり。信に依りて行を起す。三觀圓に修して、利那も問あること無きを、初に隨喜品と名く。第二に受持讀誦、第三に解説書寫、第四に兼行六度、第五に具行六度なり。委くは法華の如し。此五品の弟子は、圓に無明を伏す。即ち外凡の位なり。十信の位に見思先づ落つ。故に『仁王經』に云はく、「十善の菩薩は大心を發して、長く三界の苦輪海を別る。即ち内凡の位なり」と。別教の十住及び藏通の佛と齊し。十信の後心に、界外の一品の無明を破して、初住の位に入り、圓に八相を成ず。「華嚴」に辨ずる所の如く、別の初地と功用一齊なり。始終惣じて四十二品の界外の無明を破して、方に妙覺を成じて、別にして別ならず、妙理無二なり。故に名けて圓と爲す。上根は一生前住に入

【五時】天台にて佛在世五十年間の說法を年時の上より五種に別せしもの。華嚴時、阿含時、方等時、般若時、法華涅槃時の解。

【半】小乗教（藏教）のこと。

【滿】大乘教（通、別、圓の三教）のこと。

【權】實大乘の眞實教に入らしむる爲の方便の教。此權教に對して實大乘教を實教といふ。

【醍醐】五味の第一。熟酥の上に浮べる油の如きもの。牛乳を精製して作りたるものにして眞實教に屬す。

【七】七門分別の中、第四に受法を明す。

【第一は云云】七門分別中の第四。受法を十二門に分別す。初に開悟に就いて。

【九乘】無量乗の

るの義有り。此四教は五時に約するに、多有り少有り。「華嚴」は圓教に別を兼ぬ、鹿苑は但一の三藏なり。方等は半に對して滿を明す。四教具足せり。諸部の般若は、半を帶して滿を明す。通別圓の三なり。今此戒經は華嚴會を結す。即ち別圓教の輕重は、頓に菩薩の律儀を制す。「法華」は正しく佛意を明し、權を卷きて實に歸す。唯一の圓乘なり。入法俱に開せば依正無二なり。故に我常在此娑婆世界、汝等所行是菩薩道と云ふ。五佛咸く一切衆生をして、佛の知見を開示し悟入せしむ。「涅槃」には四教を明すと雖も、權機を息むが爲に、律を扶けて常を顯す。一一に皆佛性を聞かずといふこと莫し。故に、二經同味なり。故に並に醍醐に譬ふ。今佛意に従へて、圓教をもて消釋す。

四に受法を明すとは、謹んで瓔珞地持高昌等の文に依りて、總じて一十二門を作りて分別す。

第一は開悟、第二は三歸、第三は請師、第四は懺悔、第五は發心、第六は示相問遮、第七は授戒、第八は證明、第九は現相、第十は持犯を陳べ、第十一は廣願を明し、第十二は持戒を教ふ。第一開悟といへば、夫れ戒徳は量り難く、功は萬像より高し。九乗の爲の軌筏、三寶を運ぶの舟航なり。是故に經に云はく、「一切衆生は戒に因りて有り」と。故に「薩遮經」に云はく、「若し戒を持せざる者は、尙野干の身を得ず。況んや功德の身をや」と。又「華嚴」に云はく、「戒は是れ無上菩提の本なり。應當に具足して、禁戒を持すべし」と。「涅槃經」に云はく、「若し是經を尊ずとも、戒を持せざれば、魔の眷屬と名け、我弟子に非

事。

【三達】阿羅漢果の聖者の有する三種の智通。宿住智、死生智、漏盡智なり。

【五眼】肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼の稱。

【十力】盡非盡智力乃至漏盡智力等の如來の十力。

【無畏】佛菩薩の徳の一。智慧あるが故に大衆の中にも畏るる所無きをいふ。

【四德】善知識より正法を聞きて得る四徳の徳。慧徳、實徳、捨徳、救滅徳なり。

【四生】胎生、卵生、濕生、化生の稱。

【第二に云々】愛法中の三歸に就い

す。我亦是經を受持することを聽かず」と。又『月燈三昧經』に云はく、「色族及び多聞

有りと雖も、若し戒智無ければ猶禽獸のごとし。卑下少聞見に處すと雖も、能く淨戒を持

するを、勝土と名く。且戒に多途有り、五八十具なり。尅して功報を論ずること、受者の心

に隨ふ。今の菩薩戒は、圓の佛果を報い、相好無邊なり。三達五眼十力無畏一切の功德あり。

既に大心を發す。即ち上品の心に、菩薩戒を受くるなり。菩薩戒といへば、則ち五十

一位の圓の菩薩乘の律儀なり。所以に經に云はく、邊方中國は、若し人非人法師の語を解

すれば、盡く皆受くることを得、須らく人人正しく信じて、志を藏心に發すべし。諸

佛は究竟じて、圓の四徳を證し、常寂光に居し、法身地に於て、無縁の慈を起して、等

しく群生を念ずること、猶し赤子の如し。我等愚冥にして、日に用ふれども知ること莫く

して、三界に輪環じ、四生に沈溺す。唯圓の妙覺のみ、無明を究め盡す。故に圓の心を發

して、圓の行を希ひ、因を知り果を感じ、常情を驚覺す。故に開悟と名け、已に開悟し

竟んぬ。

第二に三寶に歸依し、略して三種の三寶を明して、所歸依と爲す。一には住持、二には

別相、三には一體なり。一に住持の三寶とは、人能く道を弘むれば、萬代の所に流傳す。

道は人に藉りて弘まれば、三寶斯に常住す。初ち剃髮染衣を僧寶と爲し、黃卷赤軸を法

寶と爲し、泥木素像を佛寶と爲す。二に別相の三寶を明さば、十方三世の法報應化を佛寶

と爲し、所説の法門を法寶と爲し、妙覺を除いて外の菩薩と、二乘を僧寶と爲す。三に一

と爲し、所説の法門を法寶と爲し、妙覺を除いて外の菩薩と、二乘を僧寶と爲す。三に一

て。
【黄卷赤軸】 佛敎の經典。

【雨足尊】 佛の尊號、佛は福智の二足を圓滿するが故に。

【離欲尊】 法は貪着を離るるが故に衆中尊、僧は衆生中の尊なる者の故に。

【第三に云云】 受法中の請師に就いて。

【十歳】 十年。僧の得度以後の年数を數ふるにいふ。
【端正等覺】 應は應供の略にして、梵にアルハット (arhat) と云ふ。人天の供養に應ずべきが故に斯く名く正等覺は諸佛無上

體の三寶とは、實相の圓理と名けて一體となす。一に即して三なり。祕藏に非ずといふこと無し。世の珍奇の如し。故に通じて寶と名く。何となれば心體の覺知を佛と名け、性體の離念を法と名け、心體の無諍を僧と名く。凡聖は始終此三具足せり。佛は已に修し已に證して、物に應じて形を現す。別相住持の功は、一體に由る。我等は理是なり。氷の水に在るが如し。若し氷を融せんと欲せば、善く方便を須ひ、佛果に趣かんと擬せば、修に非ずば成ぜず。今始めて覺知して、正しく此三に向つて、歸依處と爲し教へて言ふべし。弟子某甲等願くは、今身より未來際を盡すまで、佛の兩足尊に歸依し、法の離欲尊に歸依し、僧の衆中尊に歸依す。三。弟子某甲等願くは、今身より未來際を盡すまで、佛に歸依し竟り、法に歸依し竟り、僧に歸依し竟んぬ。三。今より已往佛を稱して師と爲し、更に餘の邪魔外道に歸依せず。唯願くは三寶慈悲をもつて、攝受したまへ。哀愍の故に。三寶を受くること竟んぬ。

第三に請師、凡そ師と爲る者は、應に五徳を具すべし。一に堅く淨戒を持し、二に年十歳に滿ち、三に善く律藏を解き、四に師師相授し、五に定慧は支を窮む。師は應に教へて言ふべし。弟子某甲等は、今大徳によりて、菩薩戒を受んことを求む。唯願くは大徳我に於て、勞苦を憚らず、慈悲の故に反。次に和上を請ふ。弟子某甲等は、釋迦如來應正等覺を請ひ奉つて、和上と爲す。我和上に依るが故に、菩薩戒を受くることを得ん。慈悲の故に。禮すること一拜。文殊師利を羯磨阿闍梨と爲し、彌勒菩薩を教授師と爲し、一切如來應正等覺

の正智の悔。

【文殊師利】梵音

(Manjusri)妙吉祥

と譯す。菩薩の名

【羯磨阿闍梨】梵

音カルマアーチャ

ーレヤ (Karmacharya)

授戒三師の一、授戒の時羯磨

文を讀む人。

【第四に云云】愛法中の懺悔に就いて。

【大悲の弘誓】弘く一切衆生を濟度して佛果を付しめんとの大慈悲心のちかひ。

を尊證と爲し、一切菩薩摩訶薩を同學の尊侶と爲す。前と同じ。次に應に教へて戒を乞はしむべし。云はく、大徳今は正しく是れ時なり。願くは我が與に菩薩戒を授けたまへ。次に戒師應に起つて爲に諸佛に白すべし。唱へて言はく、仰いで十方一切の諸佛、及び大地の諸の菩薩僧に稽首す。此諸の菩薩は我に求む。某甲、諸佛菩薩僧によつて、菩薩戒を乞ひ受けんと欲す。此諸の菩薩は、已に是れ眞實にして、能く深信を生じ、菩提の願を成す。諸佛憐愍の故に、菩薩戒を施與したまへ。聖を請じて師と爲し、證明と爲すこと竟んぬ。十方の諸佛は神通天眼をもて、我を見聞すること、目前に對ふるが如く、之に向つて懺悔すべし。

第四に懺悔とは、夫れ戒は是れ白淨の法なり。身器清淨にして、乃ち受くるに堪ふべし。故に先づ懺悔を教へて、身心を洗滌すること、故衣を洗つて方に染色を受くるが如し。然るに如來は滅を示し、二千年に向とす。正法沈淪し、邪風廣く扇ぐ。衆生等薄福にして、生じて此時に遇へり。縦ひ聽聞すること有りとも、能く信受すること莫し。良に惑障深重にして、見執堅強なるに由りてなり。若し往を改めずんば、從來の罪は滅するに由無し。若し罪滅せざれば、戒發せず。故に解脱は期し難し。然るに懺悔の法に、其三品有り。上品の懺とは、身を擧げ地に投じ、大山の崩るるが如く、毛孔より血を流す。中品の懺とは、自ら所犯を露し、悲泣して涙を流す。下品の懺とは、師に隨つて口言をもて、前の罪咎を陳ぶ。今十方の諸佛諸大菩薩を請うて、證明と作す。諸佛菩薩は、大悲の弘

【逆順の十心】順
 の十心とは一、無
 明の昏闇二、外
 惡友を加ふ三、善
 業を隨喜せず四、三
 惡心に罪を造る五、
 惡心偏布す六、惡
 心相續す七、過夫
 を覆ふ八、惡道を
 畏れず九、無慚無
 愧十、因果を撥無
 怖す。逆の十心とは
 一、深く因果を信
 ず二、重き慚愧を
 生ず三、大怖畏を
 生ず四、發露懺悔
 す五、相續心を斷
 ず六、菩提心を發
 ず七、斷惡修善八
 正法を守護す九、
 十方佛を念ず十、
 罪の性空を觀ず。
 衆生順の十心に順
 ふ時は煩惱に順ひ
 逆の十心に依る時
 は罪を轉じ流轉に
 逆ひて生死を離る

誓をもつて、衆生をして佛の如くして異無からしめんと欲す。然も須らく行者三業清淨にして、方に得戒すべし。大王を請するには、先づ須らく舍宅を莊嚴すべきが如し。亦濁水に日輪の現れざるが如し。三世の諸佛皆此戒に因りて、菩提を得たまへり。故に須らく先づ逆順の十心を運んで、懺悔の本と爲すべし。師は應に教へて言ふべし。弟子某甲等は、法界衆生と仰いで、十方盡虚空界の一切の三寶、釋迦牟尼當來の彌勒、十二分教眞如藏海諸大菩薩、緣覺聲聞を稽首す。弟子披心の懺悔を證明したまへ。無始より來今日に至るまで、身口意を縱にして、内に人我を計し、外に惡友に加はり、具に十惡五逆四重を造り、正法を毀謗し一闍提の罪あり。父母を殺害し、阿羅漢を殺し、和合僧を破し、佛在世の別行五法に約す。佛身より血を出し、和合僧を壞し、經像を焚燒せり。身の四威儀は含讓を損傷し、三寶物及び餘趣の財を盜み、顛倒邪淫して梵行を汚染し、三寶を誑惑し、一切を欺詐し、血肉を食瞰して、慈愍の心無し。或は五辛を食ひて、三寶を薰穢し、酒を飲んで狂亂し、善法を破壞し、僧の髻物を侵し、出家在家の持戒破戒を打罵呵責す。或は袈裟を奪ひ、逼つて還俗せしめ、策役驅使して、或は命根を斷ぜり。他の一毫の善を隨喜せず。唯三業に逼つて、廣く衆罪を造る。事善からずと雖も惡心遍布し、晝夜相續して、間斷有ること無し。過失を覆諱して、人の知らんことを欲せず。魯扈底突して惡道を怖れず、無慚無愧にして、因果を檢ふ無く、一闍提を作る。故に今日に於て十方の佛に對して、深く因果を信じ、重く慚愧を生じ、重く怖畏を生ず。發露懺悔して相續心を斷ち、菩提心を發

【二死】分斷の死と變易の死

【三徳の當に置く】思徳歸徳智徳の圓滿せる佛と成さん

【第五に云六】愛法中の發心に就いて

【那羅延】梵音ナローヤナ(ンニヒ)天の力士にしてその力量は大衆の七十倍なりと

【鐵圍】梵にチャクラブーラ(ニヒヤ)

と譯す。九山の中

の第九。持邊山を環れる山にして持邊山より三十六萬二千二百八十八由旬の處に在り。

【云云】四弘誓願に就いて釋す。

して惡を斷じ善を修し、三業を勤業して昔の重過を翻じて、凡聖の一毫の善を隨喜す。十方の佛の大神惠有るを念じ、一切の法は本性空寂なることを知る。能く我等一切衆生を拔きて、二死の海より三徳の岸に置かん。唯願くは三寶慈悲をもつて證明したまへ。此

懺悔既に竟ぬ。身器清淨にして、法食を盛るに堪ふ。

第五に發心なり。發心と言はば、菩提心を發すなり。菩提は梵音なり。此には翻じて道と爲し、道心語は通ぜり。今圓佛に依りて圓の道心を發す。圓の道心とは、我心佛心及び衆生心の三無差別なり。理は別無しと雖も、事證天に殊なり。故に佛の慈悲を學し、佛の

弘誓を發す。惡を滅し善を生ずること、功唯菩提なり。師子の筋紘の過く一切に聞くが如く、衆善を生じ、那羅延の箭の鐵圍を貫徹するが如く、遍く衆惡を滅す。故に『密藏經』に云はく、重重の十惡を滅せんとして、權の道心を發す。畢竟じて餘無し。況んや圓の心を發すは、諸發の最なり。無發にじて發し、法界に遍して發すを圓發と名く。一には衆生

無邊誓願度は、十界の衆生を度するが故なり。二には煩惱無邊誓願斷は、十界の三惑を斷するが故に。三には法門無盡誓願知は、惑に即して智を成ずるが故に。四には佛道無上誓願成は、生に即して滅を成ずるが故なり。此四心は諸佛の種にして、三寶の位を紹ぐ。

一切の諸佛等しく三身を證するは、此に因らずといふこと無し。一發の後訖り涅槃に至るまで、誓つて退轉無し。又四心有り。菩薩は須らく發すべし。一に衆生を觀ること佛の如し。二に國王の如く、三に父母の如く、四に大衆の如し。汝等能く此心を發すや不や。能答

既に發心す。

【次に云云】 受法中の示相問遮に就いて。

【七遮】 遮とは聖道を遮障する義。出佛身血、殺父、殺母、殺和尚、殺阿闍梨、破羯磨僧、殺阿羅漢の帶。

【汝佛身より云云】 七遮を明す。

【破羯磨轉法輪僧】 佛滅後別の邪羯磨なしとし、正羯磨及初轉法の四諱の理を破すの類なり

【第七に云云】 受法中の授戒に就いて。

次に遮相を問ふ。相は即ち三聚、遮は謂はく七遮なり。三聚と言ふは「瓔珞經」に云はく、攝善法戒は謂はく、十波羅蜜なり。即ち止惡なり。攝善法戒は謂はく、八萬四千の法門にして、即ち行善なり。饒益有情戒は、謂はく、慈悲喜捨なり。有情を利樂す。已に戒相を知んぬ、復道心を發し、罪垢を懺除して、戒を受くることを得るに堪へたり。若し七遮有れば、受の限に在らず懺も亦滅せず。我今汝に問ふ、當に實に隨つて答ふべし。汝佛身より血を出さざるや不や無。二に父を殺さざるや不や、三に母を殺さざるや不や。四に和上を殺さざるや不や。五に阿闍梨を殺さざるや不や。六に羯磨轉法輪僧を破せざるや不や。七に聖人を殺さざるや不や。謂はく、四果を證する等也。若し七遮無きは、受戒を得るに堪へたり。深重の心を起して、專注して諦に聽け。異縁を生ずること莫れ。今、正しく是れ得戒の時なり、必ず須らく尅心に師を傾仰すべし。完き器の物を承くるが如く、餘の思想すること莫れ。已に遮相を問ふ。

第七に授戒なり。汝等諦に聽け。汝今我所に於て一切の菩薩の淨戒を受けんことを求む。一切の菩薩學處を受けんことを求む。謂ゆる攝善法戒、攝善法戒、饒益有情戒なり。此等の淨戒、此諸の學處をば、過去の一切の菩薩は、已に受けて解し、已に行じて成ず。未來の一切の菩薩は、當に受け當に解し、當に行じ當に成ずべし。現在の一切の菩薩は、今受け今學し、今解し今行じて、當來に作佛すべし。汝等今身より、未來際を盡すまで、

【第八に云云】愛法中の證明相に就いて。

【第九云云】愛法中の現相に就いて

其中間に於て、犯すこと得ずして能く持するや不や問ひ、三たび説き、三たび三たび説き、三たび問ひ、三たび答へよ。第一遍竟る時、十方世界の妙善の戒法は、汝等の身心に注せんと。第二遍の時に此妙戒の法は、虚空に測染し、雲のごとく頂上に集るを説く。次に第三遍 第二遍竟りて更に一遍を説く。即ち仁等身心に入りて、清淨にして満足しぬ。餘の思慮勿れ。然るに此戒法は形色有ること無く、仁等が身心に流注されども、覺らず知らず。向形色有らば猶し天崩れ地裂くるの聲の如し 二遍を説く。三に羯磨は竟りて、已に戒法を具すは即ち是れ菩薩なりと。大經に云はく、發心と畢竟と二は別たす。是の如き二心は、前心難しと云。已に得戒し竟んぬ。

第八に證明相なり。弟子衆等仰いで、十方盡虚空、遍法界の一切の諸佛諸大菩薩に稽首す。此娑婆世界、南瞻部洲、人主地大唐國、某洲某寺僧伽藍の佛像の前にて、衆多の佛子有りて、今我所に於て菩薩戒を受け竟んぬ。我已に證明と作す。唯願くは諸佛、諸大菩薩、慈悲をもて、亦爲に證明と作したまへ。三。已に證明し竟んぬ。

第九に現相なり。若し上品の心をもて、戒を受得する時、十方の佛前に種種の相、涼風異香、異聲光明有らん。彼の菩薩は彼の佛に問ひたてまつる、何の因縁の故に此相有りやと。彼佛答へて言はく、此相現するは、某の方某の處を去りて、衆多の菩薩有りて、某箇の所に於て三たび説きて、菩薩戒を受け竟んぬ。今證明を請ひ此相現すること有り。彼の菩薩は咸く歡喜を生じて各各皆言はく、是の如き等の極惠の處は、煩惱を具足せり。惡業の衆生は、能く此の如き極勝の心を發して、菩薩戒を受くること、甚だ希有なり。

【梵行】五行の一
清淨なる行ひのこ
と。

【第十に云云】受
法中の持犯に就い
て。

【波羅夷】梵音パ
ラチカカ一、三
三、三、無餘、不共
住と譯す。邪淫、
偷盜、殺生、妄語
の四罪をいひ、此
罪を犯せば道を失
して僧中に共住す
ることを得ず。永
く佛法の外に棄て
られ捨身後遂に阿
鼻地獄に墮すと
いふ極惡罪なり。
【第十一に云云】
受法中の發願願に
就いて。

と爲し、深く憐愍を生ず。汝等が起す所の堅固梵行の心に於て、宜く應に志心をもつて護持すべし。身命を惜まず、毀犯せしむること勿れ。

第十に廣く持犯を陳ぶること、下に消釋するが如し。且く十重を示さん。若し諸の菩薩、已に戒師の所に於て、三たび説きて菩薩戒を受くること竟んぬ。若は自ら人を殺し、若は人を教へて人を殺さば、眞の菩薩に非ず、假名の菩薩なり。無懼無愧にして、波羅夷を犯せば、報は地獄不如意處に墮す。汝等今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯することを得ざれ。能く持するや不や能。錢を盜むこと五に滿ちて、姪し、大妄語し、酒を酤し人に與へ、菩薩聲聞四衆名徳の過を説き、自ら己が功を讃じて、他の高勝を毀す。乞者を罵辱して、法を慳み財を慳み、上中の境を瞋つて懺悔を受けず、衆に對して大乘の三寶を謗毀す。若は自ら謗り、若は人を教へて謗る同じ。已に持犯を明す。

第十一に廣願を發さしむ。上には發心四弘の總願、受律儀戒を明し、名けて起行と爲す。今更に總別に重ねて發願し、因を廻して果に向へ、已に廻して他に與へ、菩薩の徳を成す。弟子某甲等願くは、已の受戒の所生の功徳を以て、法界の衆生に廻施して、未だ苦を離れざる者には、願くは苦を離れしめん。未だ樂を得ざる者には、願くは樂を得しめん。未だ菩提心を發さざる者には、願くは菩提心を發さしめ、未だ惡を斷せず善を修せざる者には、願くは惡を斷ち善を修せしめ、未だ成佛せざる者には、願くは早く成佛せしめん。又是の如き懺悔受戒所生の功徳を以て、願くは一切衆生と共に、此身を捨て已らん。極樂

【無生忍】不生不滅の眞如法性を忍知して決定安住する位に七八九地の菩薩をいひ、又十地をも擲し得べし

世界彌陀佛の前に生じ、無生忍を悟り大神通を得て、十方に遊歴して諸佛に奉事し、恆に無上大乗の正法を聞き、諸佛の行願圓滿具足せん。又此受戒懺悔所生の功德を以て、願くは一切衆生と共に、今身より已往永く三惡の身を離れ、永く下賤の身を離れ、永く不自在の身を離れて、常に佛法の中に於て、清淨に出家し、梵行を精修して一切衆生の爲に、大善知識と作らん。又願くは、一切衆生我名を聞かば、菩提心を發さん。我形を見ば、惡を斷ち善を修せん。我教を聞かば大智慧を得、我心を知らば、早く成佛することを得ん。發願し已りて三寶を禮すべし。已に發願し竟んぬ。

【第十二に云云】受法中の發持戒に就いて

第十二に教へて戒を持し、戒本を誦せしめ、戒解せざる所有らば、一一銷通し、佛を念じ經を誦し、思惟し修集せよ。具に下の文に戒に隨つて消釋するが如し。

【七】七門分別の中、第五に傳譯の時代を明す

五に傳譯の時代を明さば、即ち大秦の弘始三年、西國の三藏、鳩摩羅什といふひと有り、此には章壽と云ふ。漢境に來達して大乘を光顯し、聖教を匡維す。逍遙園に於て、或は云堂寺に、經論を傳譯すること三百餘卷五十餘部、梵納の一本第十の心地は、最後に誦し出して、兩卷に文を成す。上卷には菩薩の階位を明し、下卷には菩薩の律儀を明す。纔に

【西國】西域地方印度をいふ。此では龜茲國 Kuechia のこと

翻譯すること訖んぬ。時に沙門惠融道祥等の八百餘人、誦して從つて戒を受く。融等筆授して戒く同じく誦持す。仍つて下卷の偈頌の後に於て、獨り一軸と爲す。自云はく、

【三藏】經律論に精通せる人の呼稱又は經律論の翻譯者を稱して三藏といふ

此等の戒相は、一梵網經一律藏品の内より出でたり。虛舍那佛は、妙海王及び王の千子の爲

【虛舍那佛】梵音ワイローチヤナ

に、菩薩戒を授くる法なり。

【八】七門分別の中、第六に料簡を明す。
 【常壽】比丘比丘尼の具足戒を類別する稱目なり。
 【四教】藏教通教別教圓教の稱。
 【五行】菩薩の五行、天行、聖行、梵行、天行、嬰兒行病行の稱。
 【白四羯磨】羯磨は業又は辦事と翻じ、受戒の作業の成辦するをいふ白は表白にして戒壇に登りて大衆を禮し自ら受戒することを告ぐるをいふ。
 【被擯】利根の菩薩が佛の暗示を被り、前より學べる智解を發して、別教又は圓教に通入すること。

天台菩薩戒疏 上

第六に料簡とは、問ふ、「無作の戒體は唯實相心なり。體を緣じて護持す。因果の宗趣は亦唯實相なり。如何が差別せん。」答ふ、「體は是れ宗が家の宗なり。即せず離せず。譬へば屋の空と梁柱等との如し。空をば體に譬へ、梁柱等をば宗に譬ふ。不即不離なること之を思つて見るべし。應に知るべし體は是れ能持能領の心相、宗は是れ所持所領の戒法なり。」問ふ、「涅槃の篇聚は、並に是れ別教の菩薩の律儀なり。云何が此菩薩戒をば、別圓の菩薩同じく稟くと言はん。」答ふ、「別教の菩薩は行布にして修す。四教の法門は行學せずといふこと無し。故に『涅槃』の次第の五行は、別教の人に軌範す。初心に世を厭うて出家し、白四羯磨の先に、藏通の律儀を稟けて、三業を禁防す。故に先に篇聚を明して、乃至十戒五支を、戒聖行と名く。豈漸に十重四十八輕を具するに非ず。故に知んぬ此二義は、別圓の菩薩の毘尼の藏に通ず。」問ふ、「若し爾らば教の利根は、別圓に入るの義有り。亦應に此律儀の分有るべきや。」答ふ、「且く當教鈍根に約せば、未だ佛性の戒を稟けず、同じく三藏の律儀に依る。利根は被擯して、別圓に入る。還つて能接に従へて、別圓の人と名く。或は接入の義有り。故に四教の外に別に位名を立つ。」問ふ、「聲聞は身口を制し、菩薩は唯心を制す。云何が三藏の三乘は、同じく五篇七聚を稟けむ。」答ふ、「大小律儀俱に三業を制すれども、自行化他の異なるが故に、大小乘の名を得。小戒若し心を制せずば、方便の蘭吉何によりてか立せん。菩薩は利那も罪を造れば、殊無間に墮すと云ふと雖も、但利那と云ひ無間の因と爲す。十重四十八輕は、皆身口の具緣によりて結せざる莫し。況んや三

【五篇】比丘の二百五十戒のうち不定の二戒を除く他を五に別別せるもの。波羅夷(四戒)僧殘(十三戒)墮(百廿戒)提舍尼(四戒)突吉羅(百七戒)なり。

【七聚】二百五十戒以外の戒を攝めんが爲に之を説く五篇の外に偷蘭遮を加へ、突吉羅を關して惡作惡説として總じて七となす。

【無間】八熱地獄の第八。梵名アビーチ(Avīci)無數とも譯す。關浮提の下二百由旬にある極苦の處。

【三業】證果を得る爲にすべき三の修學、戒學定學慧學。
【般若】梵音ブラジュニヤ(Pratyakhyani)智慧と譯す。
【波羅蜜】智波羅蜜のこと。
【三業】正定聚邪定聚不定聚をいふ。

藏の菩薩は、是れ彼小が中の大なり。此に對して料簡するに、殊に相應せず。問ふ、前の十戒の如きは乘戒互に通ず。如何が別を取らん。答ふ、制教に明す所は、禁惡の邊によりて、戒の名を得、化教に明す所は、禪を修し慧を學するに従つて、乘の稱を立つ。此れ則ち別なり。若し其通をいはば、三學相須ちて目足の如く、並に能く所趣の處に運載す。通じて乘と名くることを得。並に斷惡の能有りて、十ながら總じて戒と名く。

今菩薩戒は、三義互に通ず。制して惡を止むるに従へば、之を名けて戒と爲す。制して行を起すに従へば、常住の慈悲は則ち是れ乘なり。故に一一の戒に乘戒具足せり。戒は即ち法身、乘は即ち般若なり。乘戒不二にして慈悲應化す。即ち是れ解脫なり。解脫の德は假觀を因と爲し、應身を果と爲す。般若の德は空觀を因と爲し、報身を果と爲す。法身の德は中觀を因と爲し、法身を果と爲す。故に知んぬ戒戒に三聚互に融し、三觀三身相即せり。三聚三身既に優劣無し。四十八輕十重は等しく心性に持し、寧ろ淺深有らんや。假に乘戒の兩名を分つ。一一に實相に非ずといふこと無し。方に是れ圓融の菩薩戒なり。故に序の中に云はく、「一切の色心は、是れ情、是れ心にして、皆佛性戒の中に入る」と。言は驗べつべし。別たずして別てば、輕重宛然なり。止惡を正と爲すをもて文廣し。起觀は是れ傍なるをもつて語略せり。多に従つて正に従ふ。律儀は、三業を防禁する義にして、邊を菩薩戒と名く。

第七は事に隨ひ文に依りて銷釋す。梵網の大本には彼文に銷釋す。梵網の大本には彼

【九】七門分別の中、第七に隨文解釋を明す。
 【例】我今盧舍那方に蓮華臺に坐す。の偈を指す。
 【一〇】以下經文に就いて序を明す。

【述佛】本述本門の佛に對する述門の佛。述門とは釋尊が本時或道の後今世迄幾變も出世入滅して衆生を教化し給ひ、問の事を、本地を云はずして單に中間限りに説き給ひしに十四品の説法はなり。本門とは釋尊が無始久遠の昔に於ける最初の成道のことより今世迄

一品は但是れ正説なり。今乃ち義は開して、以て三段と爲す。偈の初より長行の清淨者に訖るまでを序と爲す。次に佛告より下、現在諸菩薩今誦に訖るまでを正説と爲す。此より下、卷を盡すまで即ち第三の觀説流通なり。

初の序に就いて一と爲す。初の偈頌は舍那の發起を明し、次の長行は釋迦の勸發を明す。初の文に又四戒三勸あり。四戒とは一に舍那、二に釋迦、三に菩薩、四に衆生なり。三勸とは、一に受を勸め、二に持を勸め、三に誦を勸む。此四戒は之を得るに由有り。根本傳授は記を得て成佛す。所以に受を勸め、受け已りて須らく持すべく、持し已りて須らく誦すべく、佛種をして斷ぜざらしむ。

初の十一行半の偈を三と爲す。初の三行三句は、舍那戒を説き、釋迦に傳授することを明す。次に是時より下の三行三句は、釋迦の述佛、諸の菩薩に授け、菩薩は諸の衆生に授けることを明す。三に諦聽より下、偈の盡くるまでは、勸信受持を明す。此三序は悉く是れ釋迦の所説なり。雜へて經家の辭有り。初に二と爲す。初の二行半は本述を明し、次の一行一句は人法を明す。初に又三あり。初の半行は舍那の本身を明し、次の一行半は釋迦の迹化を明す。三に半行は總じて本述を結す。初の文をいへば、上の句は舍那の本心を明し、下の句は舍那の本土を明す。此は即ち依正の兩報なり。

初に我今等と云ふは、常樂我淨の四徳の我なり。經に云はく、無我の法の中に眞我有り。謂はく、報身如來、智斷俱に圓にして、四徳究竟するを名けて淨滿と爲す。一を擧げて三

度度出生入滅せる
標を説き今日出世
の佛は久遠の古佛
なることを知らし
め給ひしものにし
て法華經後十四品
の說法是也

【常樂我淨】涅槃
【不變(常)にして
二苦(常)にして
自在を得(我)て三
惑盡く盡きたる
(淨)を用いふ。

【自受用報】内心
の智慧明にして常
に眞理を照し自ら
其樂を受用せる報
身

【他受用報】他を
して法樂を受用せ
しむる利他の報身
【勝劣の兩處】七
寶の菩提樹下に
天衣を座として成
道したる勝應身と
菩提樹下に生草を
座として成道した
る劣應身をいひ、前
者は佛教の佛後者
は藏教の佛なり

【帝網】の嚴上に
(Amdra) の嚴上に

を撰す。故に我今等と云ふ。【攝論】に明すらく、報身に二有り。一に自受用報なり、謂
く、法界に稱ひ實に成じて、依正無礙なり。唯、佛獨居す。妙覺の同類は、自ら能く相見
る。二に他受用報なり。地上の菩薩の爲に、實報土に於て現身說法し、彼をして之を見せ
しむ。此自他の報身は、行布の教の歷別の機に逗す。勝劣の兩應は、藏通の機に逗す。報
應の二身は法身を以て本と爲す。法身と言ふは、毘盧遮那にして、此には遍一切處と云ふ。
機應は、咸く圓なり。猶し虚空の時處を擇ぶこと無きが如し。一に三相即せり。一を擧げ
て三を具し、言は擧箭せず。機に隨つて別して顯すが故に、報身を標し及び主伴を明す。
下の句は依報を明す。方坐等と云ふは、方は正なり。正法に安住して、蓮華臺に處在せ
るが故に坐と云ふなり。蓮華と言ふは、如來所感の蓮華世界なり。世界の下、蓮華を臺と爲
れば、蓮華臺と名く。故に「華嚴經」に云はく、華は十世界に攀たり。所表に二有り。一
には舍那の穢に處して、染せざることを表す。二には因能く果を感ずることを表す。蓮華
に四類あり。人中の蓮華は十葉已上、天上の蓮華は百葉已上、菩薩の蓮華は千葉已上、妙
覺の蓮華は、量法界に等し。一一に互に融せり。謂ふべし、依正の二報は圓滿すと。又云
はく、華藏とは、體能く十方法界を句合せり。十方法界を一塵の中に現す。猶し帝網の重
重無盡なるが如し。不横不堅は思議の表に出過するが故に、華藏と名く。
次に周匝の下は、釋迦の迹化を明す。千百亿國の釋迦に望むれば、則ち千の釋迦を本と
爲し、千百亿を迹と爲し、兩重の本迹を成す。若し法華に望むれば、並に迹中の本迹なり。

ある結珠の繩。網
孔互に相應して主
律を爲し何れを中
心とも定め難く同
時に成就して遞に
相圍繞せりといふ

中に於て又三あり。初には迹中の本を明し、二は迹中の迹を明し、三は本と迹と皆佛道を成ずることを明す。初に千葉上と言ふは、亦言ふ、千葉に千の釋迦を現す。一華は一佛の三千大千世界なり。故に千佛の淨土有り。此れ即ち二任に分身を明すなり。初任の分身は百佛の世界、二任は十倍す。華嚴には二任已去に多く別の義を明す。故に二任に於て圓成の相を辨ず。後後の位は、身土量り巨し。

次に迹中の迹を明す。初句は一華一佛の百億國に主たることを擧ぐ。國とは是れ一四天下の名なり。所以に一三千大千世界なり。小千に一千の四天下有り、中千に千千を具す。千千は即ち十億あり。大千は千倍なり。即ち萬億の四天下等有り。經に百億と云ふは、即ち小數の萬萬億なり。億は百百有り、大數の百百を百と爲す。故に百億と云ふ。萬億の國に於て、萬億の南洲に各一の釋迦あり。故に一國一釋迦と云ふ。第三の文は萬億の南洲の菩提樹の下に、一の釋迦と一華の一釋迦と、同時に成佛す。千佛の世界に總じて、一千箇の萬億の釋迦と、千釋迦と有り、光を放つて互に照す。華臺を舍那と名け、華葉を釋迦と名く。釋迦を伴と爲し、舍那を主と爲す。主伴相關して法王の職を受く。同時に成佛するが故に、各坐等と云ふ。

如是より下は、第三に結す。初句は迹の身を結し、次の句は本身を結す。千の釋迦及び千箇の百億の釋迦、並に舍那を以て、本と爲すことを明す故に如是等と云ふ。千百億の下第二に、人法を明す。中に於て又二あり。初は人を明し、次は法に約す。初の文に三句

【能化】能く人を教へて其道に安住せしむる人、即ち教化者。
【所化】教化せらるる者。

【淨樂の四徳】常樂我淨の四徳をいふ。

あり。初は人を明し、次は法に約す。初の文に三句あり。初は能化の主を明し、次は所化の機を明す。第三に能化所化俱に、本佛に詣づることを明す。故に至我所と云ふ。我所とは即ち舍那なり。聽我より下の第二は法に約して二と爲す。初の句は聽けと兼む。此戒は是れ十方三世の諸佛の法なり。只誦と稱せんことを得て、説と云はざるなり。甘露門とは第二に戒の機能を歎す。甘露は是れ諸天不死の樂なり。此戒に因つて、涅槃の四徳の理に至ることを得るに譬ふ。甘露が家の門を、甘露門と名く。門は能通を以て義と爲す。教は能く理に通ずるが故なり。

是時より下は、第二釋迦の迹佛にして、菩薩に傳授し、菩薩は諸の衆生に授く。中に於て又三あり。初に經家は釋迦傳授の縁を叙することを明し、次に釋迦は諸の菩薩に傳授することを明す。三に菩薩は諸の衆生に授くことを勸む。初の文に三あり。初に戒相重輕の數を出し、次に戒如より下は、戒の功用を歎す。三に微塵より下は、菩薩を勸めて受持せしむ。初の文の前の三句は、千百億各本意に還ることを叙す。次に兩句は本の戒を誦することを叙す。謂はく、此戒法は諸佛の師とする所なり。故に本師戒と云ふなり。

次に戒用を歎すの中に、律儀戒は能圓に三惑の惡を止む。日月の暗を破するに譬ふ。善法戒は、能圓に三觀の善を修す。日月の照明に譬ふ。饑益有情戒は、止觀兼具して能く法身を嚴る。瓔珞珠の如し。是故に經に老少中年服常好故と云ふ。第三に菩薩を勸めて、受持するに二と爲す。初に兩句は總じて機能を擧げ、次の兩句は正勸なり。餘の二は文の

如し。

諦聽より下は勸信受持して三と爲す。初に所誦の法を明し、次に大衆の下は、勸信受持し、三に大衆より下は結勸す。初に戒藏と言ふは、此戒は多く三聚萬善を含む、故に名けて藏と爲す。別別に解脱す。果に従つて稱を立つを、波羅提木又と云ふ。木又解脱は此彼の音の異なり。次に人を勸め信受せしむるに又三あり。初に信を勧め、次に一切より下は受を勧む。攝は即ち受なり。三に衆生は位を擧げて、結勸の意を釋す。即入佛位と言ふは、一切衆生に皆佛性有り、性に依りて發心して三聚戒を受け、佛の戒法を棄くるを佛位に入ると名く。故に「大經」に云はく、「大乘を學する者は、是れ肉眼なりと雖も、名けて佛眼と爲す。初の二句は方便の位に同じきことを明し、次の二句は證眞の位に同じきことを明す。佛位の名通ぜり。眞有り似有り、始終を字觀行相似と名く。一念に中を證して法身の本を得。初は阿、後は茶、分つて大覺を證するを、眞の佛子と名く。故に身子記を得、圓の初住に入るを、乃ち眞子と云ふ。佛口より生じ法より化生するが故に、位大覺に同じうし已れば眞に是れ諸佛の子なりと云ふ。

爾時より下の第二釋迦の序を二と爲す。初に經家の叙、次に釋迦の自說なり。初に又三あり、佛戒を結ばんと欲することを叙す。次に光を放つて瑞を表するを叙す。三に大衆聞かんことを願ふ。

【三聚戒】大乘の菩薩戒。聚は集の義にして一切の大乘の戒を攝する清淨の戒なるが故に名く。攝律儀攝善法攝衆生の三戒の稱。

【阿】又悉曇五十字門の一。一切言語の根本また衆字の母なり。此語を頭闡く時は此語を頭とせる種種の言語を想起するより古來之に種種の義ありといふ。本不生初不生、無常等の義ありとするものはなり。

【茶】ドバ(ズ)悉曇五十字門の一。

一切法執持不可得の義なりといひ滅穢境界の聲なりといふ。

【摩竭國】梵音マリダ(Magadha)中印度に在り。

【賢劫千佛】成住壞空の四劫即ち一大劫(八十小劫)毎に劫名を異にす。而して此現在賢劫の住劫(二十小劫)間に千の佛出世して衆生を救ふといふ。

【無縁の慈悲】五陰寄寂にして本所陰無しと觀じてつ思す所の慈悲にして初地已上又は八地已上の慈悲なり

本佛の舍那より旨を受けて廻る時なり。故に爾時と云ふ。釋迦は姓なり。此には能仁と云ふ。牟尼とは名なり。此には寂默と云ふ。身口意滿するが故に名を得たり。初坐より下の第二は處を標す。即ち菩提樹なり。亦是道樹と云ふ。樹下にて道を成す。道と菩提とは彼此の音の異なり。摩竭國に在りて、此樹下に於て、金剛座有り。賢劫の千佛皆此座に坐して、菩提を得。今釋迦の主伴、迹に新證を示す、故に初坐等と云ふ。成無上覺とは、第三に得道を明す。謂はく、華嚴の會に初成を示現して、大根性の爲に、菩薩戒を結す。故に華嚴に云はく、菩提場に於て、始めて正覺を成す。名號品に云はく、舍那を迹に釋迦牟尼と名く。若し小機の所見鹿苑に初めて成じて、後に乃ち事に因りて、驚聚を制す。釋迦の名同じけれども、初成見別なり。今彼に異なることを辨す、故に下の文に初結菩薩波羅提木又と云ふ。初結より下の第四に、所結の法を出す。中に於て四と爲す。初に名を標し、次に孝順より下は、能成の勝因を明す。三に孝順至道より下は、能成の勝果を明す。四に孝名の下は、異名を結す。初文に初結と言ふは、十地論一に云はく、佛成道の後第二の七日なり」と。次の文に孝順等と言ふは、孝は謂はく、志心に敬養するなり。順は謂はく、尊の命に隨從するなり。誰によりてか孝順する。略して三の境を擧ぐ。一には父母生育の恩、二には師僧訓道の恩、三には三寶救護の恩なり。父母と言ふは、過現の曾生に我を養育せり。六道に輪廻するは並に是れ父母なり。是義の爲の故に、無縁の慈悲を起して、誠を竭して敬養し、道心を發し、拔苦與樂せしむ。二に師僧の恩とは、和上闍梨を並に師僧と

【三に事ふ】父
母師長君主に事ふ

【機縁】衆生の機
に佛の教化を受く
べき因縁あること
【五味】乳味酪味
生酥味熟酥味醍醐
味の稱。此順次の
如く佛一代の説教
たる五時教に配當
し以て其内容を比
較するに譬ふ。
【八教】頓漸祕密
不定の化儀の四教
と藏通別圓の化法
の四教とを合して
八教といふ。

名け、和上をば力生と名く。道力に由りて成ずるが故に、闍梨をば正行と名く。我行を
糺正するが故に。故に書に云はく、「父母に非ずんば以て生ずること無けん、師長に非ずん
ば以て成ずること無けん、君王に非ずんば以て榮ゆること無けん。民生れて三に在りて、之
に事ふること一の如くす。今闍梨和上三學をもて訓誨す。三身は此に由りて生ず。始末を
近導するに、三徳は是に由りて成ず。自行化他は聖旨を光顯す。佛日を住持し、名稱は
普く聞ゆ。位に入りて極を證すること、功は師友に歸す。此の如く榮益は法界に遍じて、
體は虚空に等し。豈世の榮の一界一國に同じきのみならんや。故に知んぬ、師僧の能く生
じ、能く成じ、能く榮えて三事具足せるを。理を縁じて戒を持し、三聚を心と爲し、法の
供養を以て上と爲し、最と爲すに非ざるに自れば、餘は焉ぞ能く一句の澤を報ぜん。三
に三寶とは、三世の如來自ら常樂を證して、形を十界に垂れて、機縁に俯遂す。夙夜に惟
念して、惑を破し記を授く。五味の法を宣べて、極濟無邊なり。八教の網を張り、種熟脫
を爲す。永劫に流通すること、菩薩僧に由る。或は實、或は權にして、本迹測り難く、大
と爲り小と爲りて法王を匡輔す。像末の邊に方に遺風に遇ふことを感ず。一たび耳を經れ
ば、千劫朽ちず。況んや思惟し修習すれば、解脱の良因なり。豈三寶の力に非ずや。故に
須らく佛の慈悲を學び、菩薩の行を行するを、三寶に孝順すと名くべし。
問ふ、一僧寶と前の師僧と何の別かある。答ふ、師僧は名寛くして體狭く、我所承に局る。
僧寶は名體俱に寛し。三世に該通す云云。第三に能く勝果を成ずる中に、孝順至道等とは、

【像末】像は三時の第二、末は第三の佛滅後五百年の正法時過ぎて後一千八百餘年正法時に似て修業する者非ざるが故に證する者なし故に像法といふ。正像二年過ぎて漸次年間衰微に歸する時なるが故に末法といふ。

【四天王天】天にありて佛法を護る四王、東、提頭賴吒天王、持國、南、毘留勒叉(增長)、西、毘留博叉(廣目)、北、毘沙門(多聞)の稱。

謂はく、極道の法に順するなり。第四に異名を會す。謂はく、此孝を行じ、即ち教に順じて違ふこと無きを、名けて持戒と爲す。故に孝名爲戒と言ふ。戒は能く三業を制御して、諸惡を止滅するが故に、亦名けて制止と云ふ。

佛即より下の第二は、光を放つて瑞を表す。將に此戒を説くべし。金光を放つて以て表兆と爲す。常情を驚覺して、衆をして集めしむるが故なり。

是時より下は第三に、衆集願聞を叙するに三と爲す。初には總標、次に諸菩薩より下は列名、三に合掌より下は總じて願聞を結す。初は文の如し。次に名を列ぬる中、初に菩薩とは道心の衆生なり。次に色天、三に六欲天、四に人王なり。初に十八梵と言ふは、色界の四禪に、總じて十八天あり。初禪に三天あり。一に梵衆。謂ふ。二に梵輔。謂ふ。三に梵王。謂ふ。姓主となり。二禪に三天あり。一に少光。謂ふ。二に無量光。謂ふ。三に極光。謂ふ。通きがなり。第三禪に三天あり。一に少淨。謂ふ。二に無量淨。謂ふ。三に遍淨。謂ふ。四に無想。生ずるが故に外道天と名く。次に五淨居天なり。欲の煩惱を離るるを淨と名け、淨身の所正を居と曰ふ。一には無繁故に無繁と名く。二に無熱故に煩惱なり。三に善現果徳顯れ易し。四に善見見るが故に五に色究竟にして亦大自在と名く。五淨の極。

此淨居を過ぎて天有り、大自在と名く。初地の菩薩は彼を化す。六欲天とは一に四天王天。二に忉利天と云ふ。三に夜摩天と云ふ。四に兜率陀天と云ふ。五に化樂天、六に他化

二に切利天と云ふ。三に夜摩天と云ふ。四に兜率陀天と云ふ。五に化樂天、六に他化

二に切利天と云ふ。三に夜摩天と云ふ。四に兜率陀天と云ふ。五に化樂天、六に他化

二に切利天と云ふ。三に夜摩天と云ふ。四に兜率陀天と云ふ。五に化樂天、六に他化

二に切利天と云ふ。三に夜摩天と云ふ。四に兜率陀天と云ふ。五に化樂天、六に他化

【乘戒俱急】戒を
 持ちて人天に生れ
 且つ聞法して悟る
 もの。
 【乘急戒緩】戒を
 持たずして聞法を
 樂ぶもの。佛の説
 法を聞く龍鬼等な
 り。
 【戒急乘緩】戒を
 持ちて人天に生じ
 りても聞法を樂はざ
 るもの。
 【乘戒俱緩】戒を
 持たずして惡趣に
 墮し聞法するを得
 ざるもの。
 【博地】通教十地
 の第五位。藏教の
 一來果に當る。
 【外凡】七方便位
 中の三賢位の稱。
 即ち五停心位別相
 念住位總相念住位

自在天なり。十六大國王とは、一には央伽、二には摩竭、三には迦尸、四には尼薩羅、五には跋祇、六には末羅、七には支提、八には跋沙、九には樓居、十には槃闍、十一には阿濕波、十二には婆蹉、十三には蘇羅婆、十四には乾陀羅、十五には劍浮沙、十六には阿梨提なり。西土の諸國甚だ多し。略して十六大國の王を列ぬるなり。問ふ、諸經の集衆は、或は來不行り。此義云何。答ふ、法を聞くことは乘急に由る。人天は持戒の資なり。乘戒俱急は、人天の身を以て、佛に値ひ法を聞く。乘急戒緩は、餘越の身と爲り、佛に値ひ法を聞く。戒急乘緩は、人天に生ずと雖も、佛を見ず法を聞かず。乘戒俱緩は、報餘越に生じて、又法を聞かず。乘に大小有り信法不同なり。戒に三品有り、受報優劣あり。故に諸經に同聞衆を明すこと、多少差別ならしむ云云。公掌より下の第四は總じて時衆の願聞を結す。見るべし。

佛告より下の第二に釋迦の自説に又三あり。初に自誦を明し、二に放光を釋し、三に受を勸めて學ぶ。此三に各二あり。初の文に二とは、初には自誦を學ぶ。汝等より下の第二に化を勸む。一切發心と言ふは、通じて博地を學ぶ。初めて圓心を發して、此戒を稟受せば、即ち須らく誦持すべし。外凡の初め、名字の位の中なり。故に一切發心と言ふ。外凡の五品の弟子、及び十信の位を越却して、超えて十住已上の諸位を取る。故に乃至と云ふ。十住に初て妙理を聞く、故に發趣と云ふ。次に十行に入りて、善根を増修するを、名けて長養と爲す。十廻向の位に、堅く善根を修するを、名けて金剛と爲す。金剛の後心に、

【圓乘】圓滿なる教法。佛乘に同じ

【妙理】不可思議の理。眞如の理の事。
【三德】思德、解德、智德の稱。又は法身、德、般若、德、解、脫、德の稱。

【十發趣】四十位の中の初の十位。大乘の行人十住に至りて始めて妙理を開き佛地に發趣すれば發趣と名く。捨戒忍進定慧願護喜頂の十心なり。

所依勝勝たり。故に十地と名く。文には眞位に従つて、十信と云はず。今略して名を列ね、圓乘の諸位の始末を知らしむ。

十信と言ふは、十心の中に信を以て本と爲すが故に。十信と言ふは一は信、二は念、三は進、四は慧、五は定、六は不退、七は廻向、八は護法、九は戒、十は願なり。始め名字より外凡の五品まで、十を具せずといふこと無し。三惑全く在らば、未だ十の名を得ず。此十心一一に皆十あり。故に「瓔珞經」に云はく、「一信に十有り、十信に百有り。百法を本と爲す」と。故に一一の位に皆十ありと言ふなり。乃至妙覺は名異れども義は同じ。十法皆大なり、轉じて十大と名く。即ち是れ位にして、位に十法を用ひて、一圓教の菩薩の大乗を成ず。此れ即ち「法華」の大車の義なり。一には其車高廣なりとは、妙理の三徳佛性を觀じて、不思議の境と爲るに譬ふ。即ち信心に入る。二に張設輕蓋とは、無縁の慈悲、苦を抜き樂を與ふるに譬ふ。即ち念心に入る。三に安置丹枕とは、惡を止め善を行じて、心を定慧に安するに譬ふ。即ち進心に入る。四に具疾如風とは、明達の慧圓に三惑を破するに譬ふ。即ち慧心に入る。五に車外の軌とは、持犯通塞を識るに譬ふ。即ち定心に入る。六に有大白牛とは、道品調適して正語正見に譬ふ。不退心に入る。七に又多僕従とは、誓を起し對治助聞に譬ふ。廻向心に入る。八に遊於四方とは、次位の十發趣等を知るに譬へ、護法心に入る。九に自在無礙とは、外凡の違順名利を安忍するに譬へ、即ち戒心に入る。十に直至道場とは、十信の法愛を離れて、發趣に至らしむるに譬へ、即ち願心に入

【三因】藏通別の三教に説ける證(果)をひらくべき修行(因)をいふ。
 【破法通】一心三觀の智慧を以て偏く諸の情執を破滅すること。

【妙境】觀法の智慧を以て見る時は其對象たる萬法の一皆實相の理をそなへて明現するをいふ。
 【普通通】通とは實理を疏通せしむる菩提心六度の方法は實理を閉塞せしむる生死煩惱の法、之を護りて通を残し塞を破すること。
 【楞嚴定】慧にシユーランがマサマデーイ (Mushin) (masumadhi) とい

入る。一信に十信有り。一法に十法有り。一信既に爾なり。餘の九は准じて知れ。

次に十住の位を明す中に、十發趣心は梵網に依りて名を列ぬ。一に捨は謂はく、三因開發して平等の理を證す。即ち是れ第一の觀不思議境なり。二に大慈悲心を起して、三聚戒を持するなり。三に忍は即ち第三の巧安止觀にして自利利他す。四に進は即ち第四の破法遍なり。五に定は即ち第五の知通塞なり。六に慧は即ち第六の道品調適なり。七に願は即ち第七の對治助開にして、皆願力に由る。八に護法は即ち第八の識次位にして、法をして濫れざらしむ。九に喜は即ち第九の安忍違順す。法界の喜に由るが故に。十に頂は即ち第十に中道の法愛を離れて、九心の頂に居す。

十行の位の中、十の長養とは、慈悲喜捨、施好語利益同及び定慧なり。善く妙境を觀じて、無縁の慈に入る。無作の弘誓を發して、大悲心に入る。善巧に安心して、法界の喜に稱ふを、名けて喜心と爲す。性を緣じ法を破し、三惑俱遍するを、名けて捨心と爲す。苦集等の事に於て、道滅等の理に達するを、識通塞と名く。即ち施心に入る。無作の道品は善能調停にして、正語業命なるを、好語心と名け、偏を以て圓を助くるを、利心と名く。八に次位を知ること不同にして同なり。圓理に二無きを名けて同心と爲す。違順を安忍するを、稱して楞嚴定と稱し、法愛に著かざるを、中道慧と名く。

十廻向位の十金剛とは、一は信、二は念、三は廻向、四は達、五は圓直、六は不退、七は大乗、八は無相、九は慧、十は不壞なり。圓の智をもて境を觀るを、名けて信心と爲す。

ふ。佛所得の三昧の名なり。

【摩訶衍】 梵にマハートーナ(Mahāyāna)大人の所乘にして大苦を滅し大利益を與ふる教道。

【境智】 觀法の智慧と其對象の境。

【法愛】 眞理に似たるものを實の眞理の如く思ひて執著すること。

堅固の慈悲を名けて念心と爲す。法界の故に廻向と名く。圓に三惑を體するを名けて達心と爲し、塞に於て通を得るを、圓直心と名け、道品前に趣くを不退心と名く。正助合行して、皆摩訶衍となるを、大乘心と名け、理を緣じて位を辨するを、無想心と名く。堅固安忍するを名けて慧心と爲し、法愛著無きを、不壞心と名く。

十地と言ふは、一は體性平等地にして、境智不二なり。二は體性善慧地にして、理を緣じて發心す。三は體性光明地にして、巧に止觀を用ふるを光明と名くるなり。四は體性爾焰地にして、圓に法を破し、遍きこと焰の焦炷の如し。五は體性慧照地にして、善く通塞を知るなり。六は體性華光地にして、因中の道品を名けて華光と爲す。七は體性滿足地にして、正助闋くこと無きなり。八は體性佛孔地にして、決定して分別し、次位濫ること無し。九は體性華嚴地にして、違順を安忍して、身心端美なること華の莊嚴の如きなり。十は體性入佛境界地にして、眞の法愛を離れて、心更に一轉して等妙覺に入るを佛境界と名く。故に佛の十法にして、大の名を得。一は觀不思議境を、名けて理大と爲す。

二は發慈悲心を、誓願大と名く。三は巧安定慧を莊嚴大と名く。四は破法趣を智斷大と名く。五は識通塞を遍知大と名く。六は道品調適を、名けて道大と爲す。七は對治助開を名けて用大と爲し、八は識次位を權實大と名け、九は能定忍を利益大と名く。十は無法愛を無住大と名く。故に知んぬ、圓乘の十法は始終に自他具足せり。車を御して達到するを、輪名けて車と爲すがとし。是故に諸位の菩薩は皆誦すべし。

【機應】機は佛の
 教法に感發する衆
 生の心機。應は其
 の心機に順應する佛
 の濟度。

問ふ、「上に十法を釋するを、名に對すること不同なるは何ぞや。」答ふ、「一法に十法を具し、法は互に融じ義に隨つて轉釋す。定執すること得ること無し。」問ふ、「華嚴經」に云はく、初住の菩薩は法身の本を得て、身を百界に分ち、像を佛に供し生を利す。諸位の功德具足せざること無し。後後の位は何の所以ぞや。」答ふ、「具足と言ふは分具足なり。燈の暗を照すが如く、暗多く燈多し。初の燈は明なりと雖も、寧ろ後後に及ばんや。」

是故より下は第二に光明を釋す。二をいへば、初に直に標す。次に有縁の下は、因縁の相を列ぬ。初に戒光と言ふは、戒は能く惑を破す。故に聲光を表と爲す。次の文に又二あり。初に體の徳を敷じ、次に宗の趣を擧ぐ。初に有縁等と言ふは、縁因は即ち聖應なり。機應相關して戒光を致し、理を緣じて誦す。實理無作なるが故に青等に非す。故に「妙經」に云はく、「法は常に無性にして佛種は緣起に従ふを知る。是故に一乘と説く」と。戒體無盡なるが故に光光と云ふ。此戒體は凡聖一如なり。故に大家を勸めて受持誦學せしむ。

問ふ、「上に戒體を釋するに、實相心と云ふ。今非心と言ふ。如何が同じきことを得ん。」答ふ、「實相の心は頑礙に同ぜざるが故に非色と云ひ、受等の妄情分別に同じからざるが故に非心と云ふ。六道の有に同じからず、二乘の無に同じからず。故に非有非無と云ふ。理は始終に互る故に、非因非果と云ふ。迷に従つて異を辨す。是故に非と云ひ、悟に従つて木同じく、心等俱に是なり。不即不離の妙は其中に在り、妙心の實相は雙て、一切を非するを以て戒體と爲す。雙て一切を照すを、宗と名け用と名く云ふ。」

【極果】 究竟の證果の義即ち佛果なり。

【趣】 趣き住する所をいふ。

【經緯】 治めとのふること。
【協理】 かなへおさめること。
【二衆】 佛弟子中の比丘比丘尼の稱
【五種】 比丘、比丘尼、式叉摩耶、沙彌、沙彌尼のこと。

次に諸佛子より下、宗の趣を擧ぐる中に、諸佛子等と言ふは、諸佛は極果を擧げ、菩薩は眞因に約す。即ち初住已上、等覺已還なり。大衆とは總じて内外凡を該め、略して此三を擧ぐ。修と願とは、自分の定惠にして、成立するは、戒の本爲るに由りてなり。本は初後に互る、即ち宗の趣なり。是故より下の第三勸學に二つをいはば、初には受持誦學を勸む。佛子の下の第二に勸意を釋出す。初に受持等と言ふは、受は謂はく、受戒三業に領納するを受と名け、受に順じて防護するを持と名け、宣唱するを讀と名け、文に背いて通利するを誦と名け、義理を修集するを學と名く。次の文に先づ聽けと誠む。

若受等とは受等の衆を列ね、一を擧げて諸を攝す。故に但受と云ふ。具足せば應に若受持讀誦善學佛戒者等と云ふべし。國王とは小を邦と曰ひ、大なるを國と曰ふ。三陽は並に列ねて乾道に倣つて以て三と成す。一氣の中に聖人の一を得ることを表す。故に易に云はく、「君王は一を得て、以て天下を治す」一は能、三は所なり。謂ゆる、三才は即ち天地人なり。一を以て三を貫くを國王と云ふ。王の所生なり。故に王子と云ふ。百官とは、總じて諸官の全數を擧ぐ、是故に百と云ひ、百姓と云ふが如し。即ち百人のみに非ず。宰相とは、王を輔け道を論じて、國事を經緯し、陰陽を協理するは宰主の相なり。故に宰相と名く。比丘とは此には勤事男と云ひ、比丘尼は此には、勤事女と云ふ。小より大に入り、二衆は通じて須る。無色には身無ければ、但欲と色とを列ね、前後の類に非ざるを、並に庶民と名く。民とは人なり。生等の五種なり。皇家に門を掌るを、名けて黃門と爲す。欲

【街賣】 てらひ賣ること。

【金剛密跡】 梵にツジラバーニ(Trishula)金剛手と譯す。如來の一切の秘密事を知り五百の夜叉神を役して賢劫の千佛の法を護るといふ神。
【一】 以下釋文に就いて正説を明す

【三】 以下十重戒を明す。初に殺戒の文を釋す。
【慈悲】 いづくしみあはれみの心。衆生に樂を與ふるを慈と云ひ衆生の苦を抜くを悲といふ。

界の男女は、通じて貪婬有り。此れ最も多く乃至街賣するを擧げて、姪男女と云ふ。古に罪を犯すに因りて、身は人に屬して以て賤役を爲すを、名けて奴婢と爲す。八部とは一に天、二に龍、三に夜叉、四に乾闥婆、五に阿修羅、六に迦樓羅、七に緊那羅、八に摩睺羅伽なり。摩睺羅伽は頭上に角有り、餘分は人に同じうして人に非ず。鬼道の中に變通勝れたるを神と曰ふ。中下の類を鬼と名け、善神の類の金剛密跡を、金剛神と名く。是れ人權の菩薩の示爲なりと雖も、亦須らく實を引きて、三聚淨戒を受くべし。諸天龍等の現身を人と爲し、菩薩戒を受くるを、變化人と名く。利根の畜生の人の語を解する者も亦戒を受くることを得。雜類猶多く、略して列ぬること上の如し。故に乃至と云ふ。戒を伏斷の因と爲すが故に、第一清淨者と云ふ。序文竟

【二】 佛告より下の第二は正説を二と爲す。初に十重を明し、次に四十八輕を明す。初に三と爲す。初に數を擧げて持を勸め、次に別釋、三に結勸なり。初の文に又四あり。初に數を擧げ、次に若受の下は誡めて文を誦せよと勸む。初には誦せずして損有ることを明し、慈悲弘誓を闕くを、非菩薩と云ふ。身口は文を離れて識心疎野なり。佛性を思修するに、覺悟情乖にして、但六道を緣じて懷と爲すが故に非佛種子と云ふ。我亦如是等とは、果を擧げ囚を勸むるなり。三に一切より下は、例を擧げて學を勸む。三四已略より下は、結説して持を勸む。第二に別釋あり、十重を十と爲す。
【三】 初に殺人戒なり、菩薩の萬行は、慈悲を本と爲す。衆生を視ること猶し父母の如し。六

【識記す】 意識の
意すること。

【顛狂】 くつがへ
りくるふこと。

【輕】 重戒に對す
る輕戒のこと。

【聖教】 佛祖の言
教及びその教典。

【薩埵】 梵音サツ
トワ(Sattva)情有
深と譯す。生命あ
るものの稱。菩薩
のこと。

【權文】 方便に説
きたる教文。

道に輪轉して互に相知らず。故に下の文に云はく、而も殺して而も食する者は、即ち我父
母を殺すなり。慈を傷ふこと甚し。是故に先づ制す。言ふ所の殺とは、彼命を斷するな
り。識初めて託するより、老死に迄るまで、彼連持相續の命を斷するを、並に名けて殺と
爲す。通縁に二有り。一は菩薩の律儀を棄く、二に自性に住して顛狂等に非ず。此は諸戒
に通ず、故に通縁と名く。下は復出でず、別縁に四を具す。一に是れ人、二に人の想、三
に有殺心、四に命斷すれば便ち犯す。緣闕すれば經を結す。一一の戒の中に通じて三意を
具す。初に制して惡を止め、次に制して善を行じ、三に過を擧げて犯を結す。初の文に又
三あり。初に人を標して殺事を列ね、次に囚の下は殺業を成ずることを列ね。三に乃至よ
り下は輕を擧げて重に況す。初に若佛子と言ふは、通指の辭なり。謂はく、發は菩提心
を發して、菩薩戒を受け、佛法より生ずるを通じて佛子と名く。若自殺より下は、殺の事
を列ね、五句不同なり。初に自殺に二有り。一に自身を殺し、二に他身を殺す。自身を殺
すに三義有り。一は惡心をもて自殺す。二は身を厭うて自殺す。並に聖教に違し、俱に輕
垢を結す。故に經に云はく、身は無常なりと説き、身を厭離すと説かざるなり。三に生の
爲に道を爲し、身を亡して物を濟ふ。薩埵王子等の如し。是故に下の文は、身命等を捨て
しめ、則ち福を得て犯無し。二に自ら他を殺し、縁を具して夷を犯す。次に他を教へて殺
すとは、他を教へて人を殺すとき、彼人未だ死せざるに能く教へ、前に死するに亦重罪を
犯す。何を以ての故に。戒無盡なるが故に、小乘の權文に順じて説きて命終すれば、戒を

【越却】こえしりぞけること。

【況す】 反照すること。

【無縁の慈悲】五陰空寂にして本所有なしと觀じつつ起す所の慈悲。
【波羅夷】パーラチカ（Pāṭiḥāḍī）極惡と譯す。極惡罪にして之を犯せば阿鼻地獄に墮す。二に盜戒の文を釋す。

失ひて方便の蘭を結するには同じからず。三に方便讚歎殺とは、他の正しく殺すを見て、其徳を歎するなり。一に能殺の人を讚め、二に所殺の法を讀む。律中に用ひて此惡活爲等と云ふが如きを、方便讚歎殺と名く。四に見作隨喜とは、已殺に約して之を隨喜するなり。若は見、若は聞きて皆隨喜するが故に。五に乃至咒殺とは、殺相猶多し。刀杖坑穿藥毒等の類なり。咒殺は希なるが故に、多種を越却して乃至と云ふ。人を咒咀して其をして命を斷ぜしむるが如き等なり。次に殺業を成ずることを列ぬる中、四句不同なり。自ら殺心有るを因と爲し、刀杖等を縁と爲し、造趣の方便を法と爲し、殺を以て誘と爲すを業と名く。三に輕を擧げ重に況す。故に乃至有命者と云ふ。故に知んぬ、人を除きての外は、並に輕垢を犯す。下の文に別條無しと雖も、義推するに應に爾るべし。春夏に火を放つことを制するが如き、生草木を護るのみに非ず。及び物の命を損傷することを護す。但輕を結す。次に是菩薩より下は、制して善を行ぜしむ。常住慈悲心と言ふは、無縁の慈悲にして、理と相稱ひ體は法界實相に同じ。故に名けて常住と爲す。三に面反より下は、過を擧げて犯を結す。波羅夷と言ふは、此には他勝處と云ひ、理を緣じ戒を持して、當に墮果を感すべし。名けて佛事と爲す。即ち自勝處なり。禁を毀ちて獄に墮すを、名けて魔事と爲す、即ち他勝處なり。

第二に不與取戒なり。非理に侵奪して、命を失ひ道を損すること、茲に囚らずといふこと莫し。此一條は實徳の人の未だ免れざるが故に次に制するなり。別して四縁を具す。一

【有主】 持ち主。

【境】 認識の對象
又は所觀の事理の
總稱。

【壽】 矢のこと。

【阿耨多羅三藐三菩提】 佛
が衆生の苦を見て
其儘に苦となし
てあはれみ給ふこ
と。

【三】 三に姪戒の
文に就いて釋す。
【大論】 大智度論
の略稱。龍樹造、
釋什壽なり。

に有主の五錢已上の物を盗む。若し己が物を盗むは重を成さざるなり。二に有主の懸、三に盜心有り、四に擧げて木處を離するに便ち犯す。縁を闕けば輕を犯す。文に就いて亦三あり。初に禁制して懸を止めしむ。次に前菩薩より下は、制して善を行ぜしむ。三に而反の下は、過を擧げ犯を結す。初の文を三と爲す。初に名を標し盜事を列ぬ。次に盜業を成ずるを列ぬ。三に乃至より下は、輕を擧げて重に況す。初の文に自盜と言ふは、自ら人の五錢已上の物を盗むなり。教人盜とは設ひ身を潤さざれども、境を損する過深し。並に重を結するなり。方便盜とは或は寄附に因り、或は市易に因りて、短を以て長に換へ、鹿を以て細に易ふるなり。但盜心有りて五錢已上を損すれば、並に重を結するなり。呪術をもつて物を竊るを、名けて呪盜と爲す。次の文に盜因とは、自心を肉と爲し、外助を縁と爲し、功を施して迷戀するを盜法と爲す。常に盜の事を思うて誘と爲すを、盜業と名く。第三に輕を擧げ重に況す。鬼神の主と爲りて、壽を擲げず。從つて劫賊の物を乞ひ、此心未だ離せず。一針一草五錢已下は、並に輕垢を犯す。故に擧げて況と爲す。次に制して善を行ぜしむる中に、佛性等とは、佛性の理を緣じて、佛の教法に順ず。同體の慈悲は之を以て木と爲し、助成し隨喜して一切の人に、五度の彌智慧の業を生ぜしむるが故に。應生等と云ふ。三に過を擧げ犯を結す、文の如し。

【第三】 三に姪戒の文に就いて釋す。
【大論】 大智度論の略稱。龍樹造、釋什壽なり。
【私情逸蕩し因果輪廻す。愛河に漂溺し五道に流轉すること、此に由らずといふこと】

【逸蕩】 常度をこえほしいままに洒色にふける。

【五道】 地獄餓鬼畜生人天の稱。

【漏】 煩惱の異名。漏泄と熱字して吾人の身口の垢を破り善根の苗稼を損ずるが故に名く。

【本時】 久遠に於ける佛最初成道の時。

と莫し。故に次に重を制し、別して四縁を具す。一に是れ有情の男女、二に姪心有り、三に方便を興へ、四に境と合するに便ち犯す。縁を闕くれば輕を犯す。文に就いて亦三あり。初に名を標して制して惡を止めしむ。次に制して善を行せしむ。三に而反より下は過を擧げ犯を結す。初に又三あり。初に所犯の事を明し、次に成業を明し、三に乃至の下は、人女等を擧げて況と爲す。初に自姪と言ふは、一は自ら自らを姪し、軟眷する者の如き、亦重を犯するなり。二に自ら他を姪し、縁を具して重を犯す。人に教へて姪すれば樂、身に及ばず。但輕垢を得るに、聲聞と同じ。一切女人等とは、狂迷を除くなり。次の文に因縁等と言ふは、染心思惟を因と爲し、邪想嚴飾を縁と爲し、姿則の軌儀を法と爲し、念念に趣きて前の事を成ずるを業と爲す。第三非人女等をもて況する中に、鬼神女と言ふは、了に自心の中に彼身を現せよと請じて、非梵行を行す。及び男二女二を名けて非道と爲し、並に重罪を得。自餘の故に漏等は、皆輕垢を結す。次に而菩薩より下は、制して善を行せしむ。淨法と言ふは佛性の觀を起して、三惑を離することを體す。自ら行じ他を化す、故に淨法與人と云ふ。三に過を擧げ犯を結する中、六親と言ふは、六人の親なり。一に父の親、謂はく、祖父母及び姑叔等、二に母の親、即ち姨嫗等、三に己の親、即ち父母兄弟、及び本時の妻子等、四に妻の親、即ち妻姉妹等、五に男女の親、謂はく、新婦等、六に兄弟の親、謂はる、嫂等なり。此に二義有り。一に心は彼一境を染め、即ち他の一切の人染心を生ず。六親等を擇ばざるが故に反起と云ふ。起は即ち生なり。二に自ら一切に於て、非梵行を起

【二五】四に妄語戒の文に就いて釋す

【四果】小乗の見道以後の證果の四階位。須陀洹果阿羅漢果の稱。【八人見地】通教十地の第三位。三界の見惑は本來空足したる位即ち見道十五心の位なり【六根清淨】圓教の十信の位をいふ此位の菩薩は六根清淨なることを得ればなり。【念處】親念とその對境をいふ。

し、畜生六親等の境を擇ばず。他の爲に惡を起すの因なり。故に反起一切等と云ふ。此は即ち穢法を人に與へて、他をして穢を起さしむ。上の淨法に乖いて人に與へ、他をして惡を斷ぜしむるが故に、反更と云ひ、而して過を結するなり。

第四は大妄語戒なり。未だ得ざるを得たりと謂ひ、聖を誣ひ凡を誑かし、時の俗を惑動して、擧げて名利を招く故に重罪を得。別して五縁を具す。一は是れ衆生、二は有情の想に對し、三は欺誑心を起し、四は人法を説過し、五は前人領解するに便ち犯す。縁を闕き輕を結す。文に就いて三と爲す。初に名を標し、制して惡を止めしむ。次に制して善を行ぜしむ。三に過を擧げ犯を結す。初の文に亦三あり。初に犯事を明し、次に成業を明し、三に輕を擧げて重に況す。初に自妄語と言ふは、若し四果八人見地已上、乃至六根清淨初住已上の次位を得と言ふは重を得。若し五停念處、煖頂忍、世第一乾慧地、諸の方便位を得と説くは、既に是れ凡法なり。但輕垢を犯す。二に教人とは、人を教へ聖の法を得と説き、名利他に屬す。但輕垢を犯す。若し他を教へて已聖と爲すと説くは重を犯す。方便妄語とは假に異事に託して、他をして聖人の解を生ぜしむ。我今日初地の定に入らず等と云ふが如し。故に方と云ふ。次の文の中の内に誑心を起すを因と爲し、外に名利を希ふを縁と爲し、巧に方便を設くるを法と爲し、常に此事を懷くを業と爲す。三に乃至より下は、輕を擧げ重に況す。即ち小妄語なり。誰か不淨觀を得て衆中に於て起ると云ふが如きを身妄語と名く。暗きに問ふに聲とせざるを身妄語と名く。明きに問ふに對すること無きを、

【乾慧地】 通教十地の第一位。これ外凡の位にして、藏教の五停心、惣別念處の三賢の位に當る此位は四念處の觀を修し智深ければ共未だ眞空の理を證得せざる故に斯く名く。

【不淨觀】 衆生の清淨ならざることるを九想に煩ちて觀ずること。

【二六】 五に酤酒戒の文に就いて釋す。

【具度】 道具のこと。

心妄語と名く。聖を得と説かざれば、並に輕垢を結す。次に制して善を行ぜしむる中、正語正見と云ふは、中道の心を以て、事の如く想の如く、知と言と見とを以て自行し他を勸む。故に常生及び亦生等と云ふ。三に過を擧げ犯を結し、正に非ざるを邪と名く。大小の妄語に通ず。今大妄大邪に從ふが故に犯を結するなり。

【二六】 第五に酤酒戒なり。酤は是れ貨賣の名、酒は是れ昏醉の藥なり。酒に三十六の失有り。放逸の門なるが故に重を制するなり。別して四縁を具す。一に是れ眞酒、二に眞酒の想、三に作酤の意、四に前の人に授與するに便ち犯す。縁を闕けば輕を犯す。文に就いて亦三あり。初に名を標し、制して惡を止めしむ。次に制して善を行ぜしめ、三に過を擧げて犯を結す、初の文に亦三あり。初に犯事を明し、二に成業を明し、三に輕を擧げ重に況す。初に自酤は知んぬべし。教人とは、人を教へて己が爲に酤せば重を犯す。人を教へて自ら酤せしむれば輕を犯す。次に成業の中に自ら米麵等を營むを因と爲し、外の具度等を縁と爲し、調停の方便を法と名け、常に酤するを事と爲すを業と名く。三に一切より下は、輕を擧げて重に況す。穀藥草木和合して、成る所は眞の麴米に非ず。但酒に似て酤は輕垢を得、尙酤することを得ず。況んや眞酒をや。次に而菩薩より、は、制して善を行ぜしむ。明達慧とは實相般若なり。三に而反より下は、過を擧げ犯を結すること知んぬべし。

【二七】 第六に説四衆名徳犯過戒なり。菩薩の運懷は三寶を弘護し、惡を掩ひ善を揚ぐ。何ぞ過を説きて信心を摩躓すべけんや。利他の行に乖くが故に制して重を犯す。別して七縁を具

【四衆】佛の四種の弟子。比丘比丘尼優婆塞優婆夷の稱。

【占蔔華】梵音チヤンパカ(Campa)黄花と譯す。花の名。樹形高大。二翅鳥來れば其上に止るといふ。

【七衆】佛弟子を細俗の差別に依りて七種に分ちたるもの。比丘比丘尼沙彌沙彌尼式又摩訶優婆塞優婆夷の稱。

【苦集】四諦の中の前の二。苦は生死の苦にして結果集は其原因たる業煩惱をいふ。

【滅道】四諦の中後の二。滅は滅果にして迷ひの因果を滅したるを云ひ道は滅果に至る因

す。一は菩薩聲聞の四衆の中に、上の名徳の重罪を説く。二に彼想を作り、三に惡心を以て過意を作説し、四に外人に對し、五に外人の想を作し、六に言章了了なり。七に前人領解するに便ち犯す。縁を闕き輕を犯す。文に就いて亦三あり。初に名を標し、制して惡を止めしむ。次に而菩薩より下は、制して善を行せしむ。三に而菩薩より下は、過を擧げて犯を結す。初に又二あり。初に犯事を明し、二に成業を明す、初の文は自ら説き他を教へ、並に重罪を結す。損境同きが故に二十輪經に云はく、「占蔔華は萎すと雖も、猶諸餘の華に勝れたり。破戒の諸比丘は、猶外道に勝れたり」と。故に一瓔珞經に云はく、「犯有る者をは菩薩と名け、犯無き者をは外道と名く」と。所以に縱は犯すと雖も、猶輕んずべからず。次の文は内心を因と爲し、彼罪の境を説くを緣と爲し、轉則を施設するを法と爲し、務めて人を説くに在るを業と爲す。次に制して善を行せしむる中、外道と言ふは、七衆を除きて外に並に外道と名く、外道は即ち惡人なり。二乘の惡人とは苦集の諦を厭ひ、道滅を修して獨り生死を出づるを聲聞乘と名く。十二因緣の若は逆若は順を觀じ、意に苦を出づることを求めて、利他の心劣なるを、緣覺乘と名く。此心即ち惡なるを、名けて惡人と爲す。大乘を信ぜずして、法律に非ずと言ふ。必ず當に苦に墮すべし。故に悲心をもて大を説きて信を生ぜしむ。悲は能く苦を抜くが故なり。三に結す、文の如し。

第七に自讚毀他戒なり。自ら己が功を讚めて、他の盛徳を抑ふるに、物を損することとせし。故に重罪を制す。別して五緣を具す。一は是れ受戒有徳の境にして、上の初の

道にして戒定慧等の修業をいふ。

【十四縁】三界の迷の因果を十二に分ちて衆生輪回の様を示したものの無明、行、識、名色、六處、觸、受愛、取、有、老死これなり。

【二八】七に自讚毀他戒の文を釋す。

【九】八、憍惜加毀戒の文を釋す。

【攝生】菩薩が大悲の心を以て衆生を濟度するをいふ。

【鄙情】いやしくけちであること。

【毀辱】そしりはづかしむ。

【藏護封緘】おさめまもりふうじること。

【佛の三身】法身報身應(化)身をいふ。

縁に同じ。二に彼想を作り、三に讚毀變べて具す。四に惡心をもて人に對して讚毀す。五に前人領解するに便ち犯す。縁を闕き輕を犯す。文に就いて亦三あり。初に名を標して、制して惡を止めしむ。二に制して善を行ぜしむ。三に過を擧げ犯を結す。初に又二あり。初に犯事を明し、自作教他俱に重罪を得。次に成業を明す。内心の貪慢を因と爲し、他を利するを嫉むを縁と名く、巧に方便を設くるを法と爲し、此を以て務と爲すを業と名く。而菩薩より下は制して善を行ぜしむ。三に若自より下は、犯を結す。並に文の如し。

第八に、故憍加毀成なり。菩薩の攝生の施を萬行の首と爲す。豈更に鄙情して、加ふるに復毀辱せんや。故に重罪を制す。別して六縁を具す。一に是れ上中の境、二に自ら財法有り、三に二の想有り、四に廣く惡心を加へ、毀辱打罵す。五に前人領解す。六に他を空く反らしむるに便ち犯す。縁を闕き輕を犯じ、文に就いて三と爲す。初には名を標し、制して惡を止めしむ。二に制して善を行ぜしめ、三に過を擧げ犯を結す。初に又二あり。初に犯事を明し、自慳教他は並に上縁を具すれば、方に重罪を結す。次に成業を明す中に、慳心を因と爲し、財法を縁と爲す。藏護封緘するを法と爲し、務めて鄙情に在るを業と爲す。次に而菩薩より下は、制して善を行ぜしむ。財法に乏しきを俱に貧と爲す。我行未だ深からず。何ぞ能く傾捨せん。心の所與に隨つて、善言をもて慰謝すれば、即ち犯ぜざるなり。三に而菩薩より下は、過を擧げ犯を結す。句偈と言ふは、句は能詮の少分を擧げ、偈は教の中の義の全きに據る。如來妙色身、乃至是故我歸依の如き、佛の三身を數ずると

縁に同じ。二に彼想を作り、三に讚毀變べて具す。四に惡心をもて人に對して讚毀す。五に前人領解するに便ち犯す。縁を闕き輕を犯す。文に就いて亦三あり。初に名を標して、制して惡を止めしむ。二に制して善を行ぜしむ。三に過を擧げ犯を結す。初に又二あり。初に犯事を明し、自作教他俱に重罪を得。次に成業を明す。内心の貪慢を因と爲し、他を利するを嫉むを縁と名く、巧に方便を設くるを法と爲し、此を以て務と爲すを業と名く。而菩薩より下は制して善を行ぜしむ。三に若自より下は、犯を結す。並に文の如し。

【三〇】九に嗔心不
懺悔戒の文を釋す

【軌儀】 軌則儀式

【三一】十、謗三寶
戒の文を釋す。

と具足せり。一微摩法とは、一の善言を擧げて以て況と爲すなり。

第九に嗔心不受懺悔戒なり。夫れ菩薩と爲れば忍辱を懷と爲し、而も反つて嗔毒を内心に蘊積して、慈を傷つけ道を損す。功德を劫むるの賊、嗔恚に過ぎたるは無し。今生に微恨當に大怨と爲るべし。故に重罪を制す。別して六縁を具す。一に所對の上中の境有り、二に所對の想を生じ、三に嗔心息まず、四に前人懺謝す。五に不受の想を示す。六に前人領解するに便ち犯す。縁を闕き輕を犯す。文に就いて亦三あり。初に名を標し、制して惡を止めしむ。次に制して善を行ぜしむ。三に過を擧げて犯を結す。初に亦二あり。初に犯事を明し、自嗔教化は縁を具して俱に重んず。次に成業を明す中に、内心を因と爲し、前境を縁と爲し、軌儀を纏結するを法と爲し、嗔を以て務と爲すを業と名く。次に而菩薩より下は制して善を行ぜしむること文の如し。三に而反より下は過を擧げ犯を結す。乃至於非衆生とは謂はく、無情を嗔るなり。人の嗔心をもて生活を撲打し、乃至、木石をもて脚手を打著せば、彼に於て嗔を起すが如し。並に衆生に非ず。此は輕垢を擧げて況と爲す。以惡口等とは正しく過を結するなり。

第十に助謗三寶戒なり。勝徳の珍とすべき、之を名けて寶と爲す。非理に摩躪するが故に謗と爲す。別して六縁を具す。一は衆に對して助謗す。二は是れ大乘の一體、及び別相の三寶なり。三に上の二想を起す。四に謗心有り。五に言説了了たり。六に前人領解するに便ち犯す。縁を闕き輕を犯じ、文に就いて亦三あり。初に名を標し惡を止めしむ。次に

【圓理】眞理。まどかなる理。

【三】十重戒を結する文を釋す。

【粟散國】粟粒を散らしたる如き多くの小なき國。
【轉輪王】チャクラヴァルテイラーヂヤ (Chakravartī) 須彌四州を統領する王。輪寶を轉じて一切を感服する故に是名あり。

善を行ぜしめ、三に況口より下は、過を擧げ犯を結す。初文に亦二あり。初に犯事を明し、自謗教人俱に重罪を結す。次に成業を明し、内心を因とし、邪見等を緣と爲し、巧に虚假を設くるを法と爲し、此心を法務と爲るを業と名く。次に而菩薩より下は、制して善を行ぜしむ。中に外道と言ふは、心を圓理の外、乃至外外の三宗に遊ばしむるを、並に外道と名く。一言をもて佛を謗れば、常に痛念すべし。故に鉞をもて刺すに喩ふ。鉞は兵器なり。長きこと二丈、用て兵車を建つ。三に犯を結す、文の如し。

善學より下の第三結勸に又三あり。初に所持の法を擧げ、二に誡勸、三に指廣なり。三の文に各二あり。初の文の二とは總じて人を擧げ、善學と言ふは歡美の備なり。次に是菩薩より下は法を擧げ、因の中に果を説く。故に木叉と云ふ。木叉とは解脫なり。次に應當より下の勸の二とは、初に學持を勸め、次に若有より下は失を擧げ持を顯す。初に微塵と言ふは、俗の中に臣は國に於て、塵露の功無しと云ふが如し。涅槃經一は浮囊を護るが如くして、微塵ばかりも犯ぜず。此は極小を擧げ、之を以て況と爲す。次に失を擧ぐる内に又二あり。初に現に十利を失ふことを明す。次に當報三途を明す。初の文は本の弘誓の不悔不失の法に違ひて、菩提心息す。故に不得現前發菩提心と言ふ。粟散國の王、及び轉輪王は戒を因と爲すに由る。因失すれば果亡ぶ、故に亦失等と云ふ。比丘及び尼等は、既に戒を失ひ、報は三惡に入る。豈人の爲に次位を證することを得んや。故に亦失比丘比丘尼等と云ふ。十發趣等とは次位を失ふことを列ぬ。前の四は是れ因なり。佛性常住の妙

【三惡】地獄餓鬼畜生をいふ。

【劫】カルバ(Ka-pa)長時と譯す。非常に長き時間のこと。時間を量る單位。【成住壞空】世界の成立と常住と壞滅と空虛とにして之を四劫といふ。

果とは、妙覺の果なり。佛性常住は始終に亙り、今は極位に對す。謂はく、佛性常住が家の果なるが故に妙果と云ふ。亦「仁王」の等覺を明さざるが如し。次に三惡に墮すること、明す中、毀禁不同なるが故に、報は三惡に入り、法を聞くこと奢促なり。父母慈育の恩深く、三寶は救護の極なり。恃むべく怙むべし。既に名を聞かざれば、恃怙地無きが故に偏に擧ぐるなり。劫とは時なり。成住壞空各二十の増減あり。一箇の増減を一小劫と爲し、二十の増減を一劫と爲し、八十の増減を一大劫と爲す云々。以是等は結勸にして、三等より下は、廣を指す。二とは初に學を勸め、次に廣本を指す。此經の廣本に八萬威儀品有るなり。

天台菩薩戒疏 中

天台沙門明曠 刪補す

【一】 四十八輕戒の文を釋するに就いての序文。
【過累】 あやまちやわづらひ。

【二】 不敬師長戒の文を釋す。
【謙卑】 へりくだること。

【有情】 梵語サツトワ(子(まじ)の)の譯。情識を有するもの。一切の生類の總稱衆生に同じ。
【輕慢】 かるんじあなどる。

【蒼生】 人民。

(一) 次に四十八輕を明し、十重に簡異す。故に輕の名を得。過累無きに非ざるが故に名けて垢と爲す。中に於て三と爲す。初には前に結し後に生ず。次には別釋、三には總結なり。初は文の如し。次に釋するに五と爲す。初の三十を三と爲し、次に二九を二と爲す。初の十に又二あり。初に釋、次に結勸して廣を指す。初に釋して十と爲す。

(二) 初に不敬師長戒なり。菩薩は、理應に謙卑して、一切の有情を敬養すべし。況んや師長に於て輕慢せんや。行に違すること甚し。故に制すること首に居せり。別して四緣を具す。一に是れ師長、二に是を知る。三に故に輕慢を起す。四に身心に敬せずして便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に名を標して受を勸む。次に既得より下は、行を示して持せしむ。三に而菩薩より下は止と作と犯を結す。初の文に國王といへば、即ち人中の衆散王なり。轉輪といへば、即ち鐵銅等の聖王なり。鐵輪王は一天下、銅輪王は二天下、銀輪王は三天下、金輪王は四天下なり。文武百官の此等の貴位、若し戒を受けざれば、鬼神護らず。何を以てか蒼生を統御せん。故に應に先づつくべし等と勸む。諸佛歡喜と言ふは、諸佛の律儀に順するは、義咸く歡喜に當る。次の文に上座等と言ふは、僧中の上首なり。善く大

【正見】無漏の智慧のこと。四諦の理を見ること明かにして外道有無の邪見を破す。
【止作】惡を止め善を作す。

【三】不飲酒戒の文を釋す。

【蝮蟻】みみずのこと。

【四】食肉戒の文を釋す。

衆を御すは、亦師の義に當る。和上阿闍梨は、略して前に釋するが如し。同學の上座を、大同學と名く。同一の正見なるを、名けて同見と爲す。同一の行者を當に名けて同行と爲す。而菩薩より下は止作して犯を結す。橋心等と言ふは、自ら高きを橋と爲し、他を輕んずるを慢と曰ふ。二を癡と名く。孝順を止むるに由る。故に橋慢なり。以自等とは重を擧げて輕を況す。應に身を賣り以て近成の澤を酬ゆべし。況んや輕慢を生ぜんや。故に犯を結するなり。七寶とは一に金、二に銀、三に瑠璃、四に頗梨、五に赤珠、六に車渠、七に瑪瑙なり。百物とは通じて所有を擧ぐるなり。若不爾とは、若は孝順し、恭敬し、供養せざる等のみ。

【三】第二に不飲酒戒なり。酒は是れ憎狂の藥なり。重過此に由りて生ず。故に罪を制するなり。別して四縁を具す。一に是れ眞酒、二に眞酒の想、三に重病の縁無く、四に口に入るに便ち犯す。律の中には悞りて飲むに通ぜず。此文乃ち制するが故に。文に就いて又二と爲す。初には名を標し過を擧げて、制して惡を止めしむ。次に若故より下は、制に遺すれば犯を結す。初に酒器と言ふは、酒を盛る空器なり。空器は尙犯す。況んや酒を勸むるをや。獄より出でて報は雜類乃至蝮蟻に生ず。故に無手と云ふ。人等を教へて飲ましむること、尙乃ち不應なり。何に況んや自飲をや。故に並に犯を結す。結犯知んぬべし。
【四】第三に食肉戒なり。菩薩は理身を忘れて物を濟ふ。何ぞ反つて衆生の身分を食すべけんや。故に罪を判するなり。別して三縁を具す。一は是れ有情の肉、二は肉の想を起す。三

【五】食五辛戒の
文を釋す。

【六】不教悔罪戒
の文を釋す。
【黎元】もろもろ
のため。

は口に入るれば便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に名を標し過を彰して、制して惡を止めしむ。次に若故食より下は、制に遣すれば犯を結す。

第四に食五辛戒なり。菩薩の所居身口は香潔なり。反つて薰穢を食する賢聖は之を遠かる。是故に犯を制す。別して四縁を具す。一に是れ五辛、二に五辛の想、三に重病の縁無く、四に食すれば便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に人を標し名を列ね、制して惡を止めしむ。次に若故より下は、制に違すれば犯を結す。初の文に一大蒜は俗に胡と云ふ。二に

革葱（六六）即ち韭菜（六七）等なり。三に薤（六八）等なり。四に蘭葱（六九）等なり。五に興渠（七〇）等。次に犯を結す。文の如し。

第五に不教懺悔戒なり。菩薩は物を愍み應に過を擧げて人に示し、其をして往を改めしめ、務めて清潔を存し、用て正道を先んずべし。下は黎元を救ひ、上は聖法を維ち、以て佛恩を報じ、益を爲すこと甚し。故に制して愼ましむ。別して五縁を具す。一に是れ犯戒の境、二に彼所犯を知り、三に別違縁無し。謂はく、惡律（七一）多き等なり。四に覆藏の心を作す。五は共に法事に同するに便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に名を標し事を列ねて作を制す。次に而菩薩より下は、止作して犯を結す。五戒とは一は不殺、二は不盜、三は不邪淫、四は

不妄語、五は不飲酒なり。肉を食せば身終るまで五を制するを、名けて五戒と爲す。八戒とは、一は不殺、二は不盜、三は不姪、四と五は上に同じく、六は高く廣く大なる床に坐臥せず。七は花香瓔珞を着し、及び油を身に塗らず。八は自ら藥を作し及び故に往きて觀聽せざるなり。過中の食は本と爲るなり。此八戒は愛に隨つて長短なり。若は全若は分にして並に

天台菩薩戒疏 中

【二百五十】比丘持戒律をいふ。四波羅夷、三十僧伽婆塞、九十單墮、四提舍尼、百衆學、七滅諍これなり。
 【三歸】佛法僧の三寶に歸順信賴すること。

【五悔】罪を滅する五つのもの。懺悔、勸請、隨喜、迴向、發願の稱。

【七】不供給請法戒の文を釋す。【書做】かぶること。【解行】開解と立行との稱。

皆得るなり。捉錢寶及び過中の食を加ふれば、即ち十戒なり。毀禁とは二百五十等を犯す。七道は下に釋するが如し。八難とは一に地獄、二に餓鬼、三に畜生、四に北州、五に長壽天、六に世智辨聰、七に諸根不具、八に佛前佛後なり。此八は是れ果なり。果は因に由りて起す。所犯の因を見て、懺悔せしむべし。其因とは何ぞ。謂はく、毀戒は墮獄の因、慳貪、餓鬼の因、無慚は畜生の因なり。人間の長壽を求めんが爲に、三歸五戒を持すれば、即ち北州の囚なり。天の樂を求めんが爲に、八戒等を持すれば、即ち長壽天の囚なり。解脫の爲にせずして、世俗を集學し三業を防護するは、即ち世智辨聰の囚なり。有情の身分を擧損し、正法を毀謗するは諸根不具の囚なり。大小の觀法を思惟し修習せざるは、佛前佛後に生ずる囚なり。佛に佛の慈悲を學して、示して往を改めしむべし。萬行の宗趣三徳を依と爲す。若は白若は他に、心を五悔に標す。懺悔は其首に居せり。一を擧げて諸を攝す、故に應歎懺悔と云ふ。次の文に同住とは同處するなり。貪利等同を、僧利養に同すと名く、布薩とは、此には淨住と云ふ。餘の文は見るべし。

第六に不供給請法戒なり。諸佛の師とする所は謂ゆる法なり。人を尊び法を重んじ、道を進めて心を卑むべし。而して反つて踞傲して人法を輕慢す。道を夫ふの本は、茲に因らざることを莫し。故に犯を制するなり。別して四縁を具す。一は大乗の解行の人を見、二は是を知り、三は故に慢心を起す。四は供養して法を請せず便ち犯す。文に就いて二一と爲す。初には名を標し事を叙べて作を勸む。次に作を止め犯を結す。初の文に邑とは村なり。故

【管仲】春秋の齊の賢相。字は夷吾桓公を共にて天下に霸たらしむ。
 【非時漿】定められたる時以外に食すこと。佛制には僧侶の食時を午時と定め午後の食事を非時食といふ。
 【波倫】難陀波倫の略。菩薩の名。常啼と譯す。
 【無錫】異無錫の略。比丘の名。
 【善見】福城の長者の子。文殊師利の所に詣り發心し具より南行して五十里知識に參じて法界に證入す。
 【八】懈怠不徳法戒の文を釋す。
 【越逸】すぐれこと。
 【戒定慧】戒は身口意所作の惡業を防止し、定は慧の散亂を靜め、慧は眞理を見る。
 【三學】戒學定學慧學をいふ。
 【九】背大向小戒

に管仲は齊に相として、三十家を一品と爲す。三時とは小食中食及び非時漿等なり。日食三兩金等とは、重を擧げて輕を咒す。宋代の知法は替つて佛處に補す。波倫は髓を無錫に啓き、善財は戒を法界に忘る。況んや金等を捨て、意は法を重ね情を深からしめ擧げて況と爲すのみ。三時とは一日の中、初中後に分つ。若により下は止作して犯を結す。文の如し。

第七に懈怠不肯聽法戒なり。初心の菩薩は事に觸れて墻に面す。理は須らく四方に師を尋ねて道を學ぶべし。而して反つて住處に講行るに聰らず。日夜に迷を抱きて身心越逸す。空く信施を納れて當の報は他に非ず。故に犯を制するなり。別して四縁を具す。一に自ら法を解せず。二は大乗を講ずる處有り。三に自ら有りと知る。四は故に聽受せざるに便ち犯す。文に就いて二と爲す。初には入法を標し、處を列ねて聽受を勸む。即ち作を制して持を成す。次に若により下は、作を止めて犯を結す。前後は例して知れ。初の文に有講法と云ふは、通じて戒定慧の法を標す。毘尼より下は別して列ぬ。毘尼は即す律なり。多くは戒學を詮す。經は定慧を詮す。即ち大の三學なり。次の文知んぬべし。

第八に背正向邪戒なり。菩薩大士は佛性を心と爲す。大乘に背き邪小を習學する罪は、七道に逾えたり。外道を儔と爲るが故に犯を制するなり。別して四縁を具す。一は是れ大乘の戒定慧の法なり。二は彼想を作す。三に言は垂き心は背く。四は圓を捨て偏を學するに便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に心口は正に背くことを標す。次に而受持より下は、過

【小】 大乘よりせば小乗は邪教なるが故に漸くいふ。

【四德】 正法を聞きて大智を生ずる慧徳、其智慧を以て眞諦の空理を見る實徳、眞空を見ても煩惱を捨離する捨徳、煩惱を斷じて波滅を得る寂滅徳。

【一】 不看病戒の文を釋す。

【津濟】 渡し場。

【福田】 佛又は俗に供養すれば福德を生ずること田地の物を生ずるが如くなる故に斯くいふ。

【二】 畜殺衆生具戒の文を釋す。

を擧げて犯を結す。初の文に常住經律等と言ふは、俱に是れ大乘なり。實相の理を詮するを、常住と言ふなり。次に惡見と言ふは、二乗は空邊の惡、外道は有邊の惡にして、兼に名けて惡と爲す。故に『涅槃經』に迦葉自叙す。未だ圓常の四徳を聞かざるの前をば、邪見の人と名く。邪は豈惡に非ずや。而受持の三字は、下の諸句に冠せしめたり。受持一切禁戒とは、正律儀に非ず。鷄狗等の戒なり。解脫爲ざるを並に邪見と名く。邪見は多含なり。故に一切等と云ふ。

第九に不看病苦戒なり。菩薩の人は大悲を體と爲す。病を見て救はざるは、彼此慈を傷け菩提を退失すること、良に此に由る。別して四縁を具す。一は是れ病苦、二は病苦の想、三は自ら病等の縁無く、四は憍心をもて捨て去るに便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に名を標し事を叙して作を制す。次に而菩薩より下は、作を止め犯を結す。初に八福田と言ふは、三寶を三と爲し、父母を五と爲し、六は病人、七は曠路に井を穿ち、八は津濟に橋を造るなり。聖人の四果及び和上等は、並に僧寶の攝なり。故に大乘經の中に菩薩二乗を並に僧と名くるなり。此は所濟の尤要なるに従つて、福田の濃淡に従はず。亦『法華』の如く佛を罵る罪は輕く、人を毀つ罪は重し。有待の身は讚毀の縁に對して、心轉じ易きが故なり。次の文見るべし。

第十に畜諸殺具戒なり。生を害するの器を名けて殺具と爲す。藏舉收攝するが故に名けて畜と爲す。菩薩は常に應に諸の所有を捨つべし。反つて殺具を畜へて、衆生を損せん

【宿縁】前世に結びし因縁。

【六根】眼根耳根鼻根舌根身根意根の稱。

【三】國使戒の文を釋す。

【諍訟】うつたへ

【邪命】よこしまな方法を以て活命すること。

と擬す。日夜に罪を増すを惡の無作と名く。是故に制するなり。別して四縁を具す。一は是れ殺具。二は是を知る。三は聞の縁無し。律中に畜ふることを聞。四に故に畜へて日を経るに便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に名を標し、事を列ねて止を制す。次に重を擧げて輕に況す。三に制に違するに犯を結す。初に刀杖等と言ふは、本に生を害せんが爲に作る者是なり。但し是殺の器は皆畜ふることを得ず。故に一切と云ふ。次に而菩薩より下は、重を擧げて輕を況す。律に云はく、「怨を以て怨を除くは、怨終に除かれず。唯怨を解くと有るに、怨乃ち息むのみ」と。怨若し未だ害せざれば、誠心をもて敬養せよ。若し已に害せられなば、自ら宿縁を達せよ。怨相報する酬は之れ反にして、故に父母を殺するに制して報を加へず。若故より下は制に違して犯を結す。如是より下は結勸して廣を指す。六品と言ふは、梵網の大本に六六品有り、恐らくは是品の名なり。彼品の中に六根等の六法を明すを以ての故に、六六品と名く。彼に猶廣く釋せり。是故に之を指す。第二には二十を二と爲す。初に釋、次に結勸して廣を指す。初の文は自の十なり。

【二】初に通國使命戒なり。第十一傳信往還を通國使命と名く。命は即ち使なり。上人の命を衝むが故に名けて使と爲す。菩薩は理應に縁を靜にして業に進み、善く諍訟を和し慈救を懷と爲すべし。今は乃ち四方に通知して、使命し交戰す。既に邪命と成さば、殊に道儀に乖けり。是故に制するなり。別して四縁を具す。一に二國の二軍、二に利養等の爲なり。三に言を彼此に傳ふ。四に二國交戰するに便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に人を標し

【三】販賣戒の文を釋す。

て過を列ぬ。興師とは、謂はく、將師なり。次に而菩薩より下は、況を擧げ犯を結す。國賊と言ふは合會して相殺す。義は之れ賊の如し。

第十二に傷慈販賣戒なり。菩薩は身を賣し理は須らく法の如くして慈救に違はざるべし。今人畜を販賣し、棺材を市易するは、世の讒嫌を招く。深く道望に乖くが故に犯を制するなり。別して四縁を具す。一に是れ非法の物、二に是を知る、三に興易、四に事成じて便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に名を標し、過を顯す。次に過を擧げて犯を結す。初に良人奴婢と言ふは、二類不同なり。他人を劫し來るに傳傳して興販す。若劫とは盜戒の所收なり。六畜とは牛馬猪羊鶏犬なり。且く家養の者に據りて言ふことを爲す。次に若故より下は犯を結す、文の如し。

【四】謗毀戒の文を釋す。
【加誣】加へあざむくこと。罪無きに強ひて罪に落すこと。
【塵蹟】けがすこと。

第十三に無根重罪謗他戒なり。見聞疑を関くを名けて無根と爲す。重罪をもて加誣するは、之を稱して謗と爲す。菩薩の運懷は互に相讚美して、法門をして光顯し、勝徳を外に彰さしむ。今反つて加誣して賢善を塵蹟し、外に讒譏を招く。境を惱し輕に非ざるが故に犯を制するなり。別して八縁を具す。一に前人は所犯の事無し。二に無犯を知り、三に見聞疑無く、四に見聞疑無しと知る。五に惡心を起す。六に心に重罪を加誣す。七に所對の境有り、八に言章了了なる、便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に名を標し過を顯す。次に教へて對治を起さしむ。三に過を擧げて犯を結す。初に惡心と言ふは、賢を妬み能を嫉み、利益を爲すことを非するを、並に名けて惡と爲す。良人等とは外相に惡無きを良と曰ひ、

【七證】擇法、精進、喜、除、捨、定、念の稱。
【末代】佛滅より遠く年月を距てたる時代。末法濁世。

【二五】放火烧戒の文を釋す。

【無主物】持主なき物。

内心に調柔なるを善と爲す。大乘の戒定智慧の法をもて、自ら軌し他を軌す。受持讀誦解説書寫するを、並に法師と名く。曾て訓誨を蒙る三尊七證は、上經に依止す。並に師僧の攝なり。末代の佛法をば、國王大臣官長貴勢の人に付囑せり。外護の恩は常に須らく頂荷すべし。願行和資して暮に及び、忘るること無し。寧ろ謗説すべけんや。次に於父母より下は、教へて對治を起し、尊に孝順し下に慈悲す。既に佛戒を師僧等に稟く。類せば六親の若し。故に父母等と云ふ。謂はく、和上は父母に同じく、闍梨は伯叔兄弟等の如し。三に而反より下は過を擧げ犯を結す。墮不如意處とは、地獄の別名なり。他を説謗して意を減損せしめ、不如意と名く、此れ即ち因なり。當の報は三途にあり。自意不如なるは即ち是れ果なり。

第十四に放火烧戒なり。火の性焚蕩して物を損すること輕きに非ざるなり。既に非時に寧ろ故に放つべけんや。所以に犯を制す。別して五緣を具す。一に是れ山林、二に知是、三に惡心を起す罪、四に閑の時に非ず。五に故に放つて便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に名を標して過を列ぬ。次に不得より下は、正しく制して惡を止む。三に若故燒より下は、制を違へて犯を結す。初に又二あり。初に無主物を列ぬ。初に惡心と言ふは、報酬嫌財敗獵等なり。生命を護らんが爲なり。有情無情は此時に、興盛す。故に時を制するなり。次に若燒より下は有主物を列ぬ。損財の邊に約し、時節を論ぜず。二三は文の如し。

【二六】 僻教戒の文を釋す。弘願を濟度せんとの誓願。

【大乘】 或は大法に作る。

【十地】 五十二位のうち、四十一位より喜、樂、勝、發光、饑惠、離勝、現前遠行、不動、善慧法雲の十地なり。【七】 爲利倒説戒の文を釋す。

第十五に化法違宗戒なり。人に軌範を授くるを名けて化法と爲す、本の所學に乖くが故に違宗といふ。大士の弘願は須らく大乘を授けて、群生を源に反らしむべし。三寶をして贊ること無く、今反つて邪小を教へて、前人を陷溺す。情過輕んぜず。是故に聖制す。故に淨名は云はく、大悲心を以て大乘を讚め、佛恩を報ぜんことを念すべし。三寶を斷ぜず、然して後に法を説けと。別して四縁を具す。一は前縁に對し、二は惡心を起し、三は邪小の法を教へ、四は前人領受すれば便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に名を標し、事を敘して、大乘を教へると制す。次に而菩薩より下は、過を擧げ犯を結す。初に自と言ふは從なり。始に佛弟子より終一切に至るなり。使發菩提心とは、初心に通ずるなり。次に三位を列ね十地等を略せり。並に應に知らしむべし。故に一一等と云ふ。次の文は見つべし。第十六に規利倒説戒なり。法に因りて財を求むるを、名けて規利と爲す。前後次がざるを名けて倒説と爲す。己を虛しうして物を濟ふは、菩薩の本懷なり。教に順じて宣揚すれば聖旨に違ふること無し。今乃ち反つて財利を規し、倒に眞乘を説く。胸衿より出でたるを、妄に佛教と稱す。既に罪業を招きて、自ら陷り他を陷すが故に犯を制するなり。別して四縁を具す。一は求法の人有り。二は自ら大法を解き、三は利養を爲し、四は正法を倒に便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に名を標し擧ぶことを制す。次に見後より下は化を用ひて方を教ふ。三に而菩薩より下は、過を擧げ犯を結す。初に好心と言ふは、理を緣じて心を發し、自他兼濟するを名けて好心と爲す。先に菩薩律儀を集學することを制するが

【圓乘】圓滿なる
教法。佛乘に同じ。

【八】持勢を求戒
の文を釋す。
【託附】たのみま
かす。

故に、大乘等と云ふ。次に敷演して物を訓ぜしむ。故に廣開解義味と云ふ。所詮の旨を義と爲し、義理神に適へるを味と名く。次に化を用ふる法を教ふる中、先づ爲に苦行を説かしむ。意は其をして法を重んじ、生を輕んぜしむるに在り。即ち身命を捨てて、身臂指を燒けと謂ふには非ず。若し即ち身を捨てば、法は誰の爲にか説かん。次に然後より下は、教へて其が爲に法の儀式を説かしむ。次第と言ふは、圓乘の階位行解宛然たり。暗者の言のみにして、修證無きと同じからず。既に眞俗に迷ひ三學は儀を失ふ。犯を非犯と説き、非犯を犯と説く。空を以て有と爲し、有を現じて空と言ふ。物に順じて理に乖く意は、苟しくも求むるに在り。即ち次第に非ず。次に非ざるを倒と名く。故に犯を結するなり。誘寶と言ふは、三寶空と説きて背輪經屏す。皆此に因る誘草之に過ぎんや。

第十七に持勢求財戒なり。官威に託附するを、名けて持勢と爲す。乞ひ求めて物を取るを名けて求財と曰ふ。菩薩は理應に群有を給濟し、身命を惜まず纖毫を惜むこと無かるべし。今反つて勝人に依附し、強て財物を乞ひ、前の境に逼惱して所宜を顧みず。是故に聖制す。別して六縁を具す。一は自ら名利の爲にす。二は玉等に親近す。三に勢を恃み、四に逼惱して財を求む。五に前人は強ひて與ふ。六に領受するに便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に名を標し過を列ぬ。次に都無より下は、過を擧げて犯を結す。初に自爲等と言ふは、名利を求めて己を擁するなり。惡求とは邪命をもて自活するを、並に名けて惡求と爲す。厭足無きが故に多求と曰ふ。次に文に無慈心と言ふは、境に於て惱を生ずるを、無慈

【九】無解作師戒の文を釋す。

【十二部經】佛說法の體裁に十二様あるをいふ。授記說、重頌說、無問白說、孤起說、譬喻說、因緣說、譬說、本事說、本生說、方廣說、未曾有說、論議說これなり。
【修多羅】梵音スートラ(Sutra)
【伽陀】梵音ガーター(Gāthā)
【伊帝目多伽】イテプリタル(Ivīpita)
【闍陀伽】ジャーダカ(Jataka)

心と名け、佛教の少欲知足に從はざるを、無孝順と名く。
第十八に無知爲師戒なり。索より所解非ざるを名けて無知と曰ひ、妄に物の軌と稱するが故に師と云ふ。菩薩は理應に名を藏し徳を隠して、庶の事を仁に推るべし。今反つて學せず、知ること無くして、詐りて師範と爲し、自ら累ひ人を累はす故に聖制なり。別して四縁を具す。一に性は暗鈍に非ず。二は故に習學せず。三に愚を隠して詐つて智といふ。四は自ら他の師と爲るに便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に名を標し學せよと制す。次に而菩薩より下は、其過非を示す。三に一一より下は過を擧げて犯を結す。初の文は通じて三學を制す。故に十二部經と云ふ。次に日夜より下は別して戒を誦せよと制す。十二部經とは新には十二分教と名く。謂はく、大小の教に各其分有り、聞權顯實すれば、一回の十二分に非ざる無し。一に修多羅、此には法本と云ふ。即ち長行の直説なり。二に伽陀、此には不重頌と云ふ。即ち孤起の偈なり。深達罪福相等の如き是なり。三に本事、梵に伊帝目多伽と云ひ、即ち他の因縁の事を説くなり。四に本生とは、梵には闍陀伽と云ひ、即ち佛自ら因時の生の事を説きたまふ。五に未曾有とは梵には阿浮陀達磨と云ふ。即ち佛神變を現したまふ。衆生驚駭するをもて此名を得。六に因縁とは梵には尼陀那と云ふ。事に因りて戒を制し、問に因りて説を爲す。七に譬喩とは、梵には阿婆陀那と云ふ。八に祇夜、此には重頌と云ひ、長行を頌す。九に優婆提舍は此には、論議と云ひ、問答の往復なり。十に方廣とは梵には毘佛略と云ふ。即ち廣平の理なり。十一に無問自説とは梵

【阿浮陀達磨】 ア
 トラタタルマ (Ad
 bhutadharma) 【
 尼陀那】 ニダー
 ナ (Nidana) 【
 阿波陀那】 アブ
 ダーナ (Avadana) 【
 祇夜】 ゲーヤー
 (Gaya) 【
 優婆提舍】 ウパ
 デーシヤ (Upadesa) 【
 毘佛略】 ヴイブ
 ルヤ (Vipulaya) 【
 優陀那】 ウダー
 ナ (Udana) 【
 和伽羅那】 ビヤ
 ーカラナ (Vyakarana) 【
 二】 兩舌戒の文
 を釋す。 【
 斷問】 兩舌のこ
 と。二枚舌を使ひ
 て雙方の人の仲を
 さき不和ならしむ
 る故に斷問といふ
 【二】 不行放求戒
 の文を釋す。 【
 四大】 一切の色
 法を構成する四種
 の成分。地、水、火、
 風、大の稱。

には優陀那と云ふ。十二に授記とは梵に、和伽羅那と云ふ。故に知んぬ此戒は『華嚴經』を結し、通じて十二を具す。之を思うて知るべし。佛性の性とは理を解すれば即ち佛性なり。佛性は即ち我性の故に云ふなり。戒の本源なり、故に偏に擧ぐるのみ。次の文に偈と言ふは、前に略して釋するが如し。因縁とは十重等に各因縁有るが如し。三に過を擧げ犯を結すは文の如し。

離間賢善戒は第十九なり。稟性柔和なるを名けて賢善と爲す。彼此を乖隔す、故に問と云ふ。善く諍説訟を和する菩薩の所宜なり。今反つて離間して欺誘し、正修を妨廢す、故に聖制なり。別して四縁を具す。一は是れ賢善、二に兩舌離間の心を起す。三に言を傳へて往來す。四に前人領解して便ち犯す。比丘と言ふは乞士と破煩惱と、怖魔となり。始終の名比丘なり。

第二十に不行救生戒なり。別して四縁を具す。一に殺生を見、二に慈心無く、三に死亡衰厄有り。四に如法の法師有るに、講解せよと請ぜざるに便ち犯す。文に就いて一と爲す。初に名を標し事を叙す。次に若より下は作を止め犯を結す。初に又二あり。初に非親を慈救することを明す。次に若父母より下は、六親を慈濟するを明す。初に一切地水等と言ふは、謂はく、衆生の身は皆四大を稟けたり。過現は殊と雖も所稟別無し。故に彼今の四大を殺すは、即ち是れ我過去の故身を殺すなり。餘の二は文の如し。次に如是より下は結勸して廣を指すこと文の如し。第三に三十を二と爲す。初に別釋、次に結勸して廣を指

【三】 順打報仇戒の文を釋す。

【累劫】 永い間。何劫もの間。

【大心】 大道心のこと。
【淨名】 維摩經のこと。

【三】 嗔慢不誨法戒の文を釋す。
【雪山等】 釋尊過去世に雪山童子た

し初の文に自ら十あり。

第二十一に無慈報酬戒なり。行與樂に乖くを名けて無慈と曰ふ。故に心、怨に復するを、

名けて報酬と稱するなり。菩薩は理應に怨親平等にして、常に忍辱を懷きて、慈悲を捨す

ること無かるべし。今乃ち復酬して以て嗔恚を暢べ、苦海に沈淪して累劫に怨酬す。何ぞ

出家入道の士と名く。故に聖制なり。別して四縁を具す。一は是れ怨境、二に嗔心を起し、

三に方便を興し、四に酬竟るに便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に名を標し過を擧げて

制止す。次に尙より下は輕を擧げ重に況す。三に而出家より下は、過を擧げ犯を結す。

初に殺生報生と言ふは、命を殺し長生して永く乖き、佛教の旨に乖く。怒息するに由

無きが故に不順孝道と云ふ。次の文に尙不等と言ふは、出家に制す、畜ふることを得ざれ。

在家には聞す、畜へて非理に打罵して、業を起すことを得ざれ。況故等とは、正しく復酬

に況す。既に一切の男女は是れ我父母及び我故身なり。今乃ち殺を以て相酬ゆ、義は迹に

當る。故に通じて七と云ふ。重の外に一の輕垢を加ふるなり。三に結犯の中に有本には、

出家の字無し。天宮の云はく、梵網の大本に據るに有に合すべし。凡そ大心を發し、菩薩

戒を稟くるをば、並に出家菩薩と名く。故に淨名に云はく、「夫れ出家とは無爲の法の爲

にす」等と云云。

第二十二に輕慢法師戒なり。訓誨に軌有るを名けて法師と爲す。故に虔恭せざるを名け

て輕慢と爲す。菩薩は理生を輕んじ法を重んずべし。雪山は鬼に從つて請ひ、天帝は畜を

りし時雪山に入りて羅刹に七佛通説偈を説かんとを請ひしをいふ。
【天帝】帝釋天なり。

【三四】喬慢辭說戒の文を釋す。

拜して師と爲す。慢は高山の雨水の停らざるが如く、卑は、江海の萬流歸集するが如し。今、其所知を棄てて、其種姓を觀るは、大法の利を失ふ。故に聖制なり。別して四縁を具す。一は新學するも知る事無し。二に他卑にして徳有り。三に自恃して慢を生ず。四に往きて諍受せざるに便ち犯す。前に現に講ずるに聽かざることを明す。此には別に諍受せざることを制す。文に就いて三と爲す。初に名を標し過を擧ぐ。次に其法師より下は、所慢の境を出づ。三に而新學より下は、過を擧げ犯を結す。初に有智等と言ふは、世法を解知して、文は再び覽ること無し。故に聰明と云ふ。曾より職任有りて高貴と云ふ。當世の聖族を名けて、大姓と爲す。經史に了達するを、之を大解と稱す。世の財食を招くを名けて大福と爲す。饒財より下は大福の義と釋す。以此より下は總じて慢の意を結す。以れば猶用のごときなり。此聰明乃至大福を用て、僞慢を生ず。次の文見るべし。三に犯を結する中に、第一義諦と言ふは、圓誠の理は教行の本と爲る、故に、偏に之を擧げ、教行依ること無きは好師に非ざるなり。

(二四) 輕人僻說戒なり。菩薩は理應に謙虛して物を攝し、劬勞を憚らざるべし。第二十三に輕人僻說戒なり。菩薩は理應に謙虛して物を攝し、劬勞を憚らざるべし。今に乃ち勝人に依倚して、勢を恃んで物を輕んぜしむ。故に犯を制するなり。別して四縁を具す。一に自は大乗と稱す。二に新學請問す。三は勢を恃んで輕慢す。四は好く爲に答へざるに便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に求法の人を明す。次に若法師より下は、自恃の相を明す。三に而新學より下は非を擧げ犯を結す。初の文の中に初に時節を明すが故に

【三聚】攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒の稱。
【四弘】四弘誓願のこと。

【羯磨】梵音カルヤ(Karma)業、事所作、作法等と譯す。
【了義】不習學佛戒の文を釋す。
【了義】眞實の理義。

【法身】無色無形の理佛、眞如法性の理佛のこと。
【七科】菩薩の階位五十二を七種に大括したる十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺の稱。

佛滅度後と云ふ。圓の三聚四弘の心を發す。是を以て好と言ふ。於諸等と言ふは其勝境を示す。故に經に云はく、像を敬ふこと眞佛の如くすれば、福を得ること亦復然なり。佛像の前に於て自制して要期し、戒品を領納するを、名けて自誓と爲す。好相とは下に之を明すが如し。便得受戒とは好相を得ること竟りて、即ち自ら三歸を受け、自ら懺悔を宣べ、自ら十戒を受け、自ら羯磨を標す。但口より出して師の與に異と爲す。若現前等と言ふは、師の身に從つて戒有るを明すが故に、好相を須たす。餘の二は文の如し。

第二十四に捨眞集僞戒なり。菩薩は理應に了義に依りて、凡小の瓦礫を棄て、如意の寶珠を取るべし。今反じて眞に背きて僞を集め、道を障ふる無し。故に犯を制するなり。別して三縁を具す。一に大乘有り、二に修學せず。三に邪小を集め便ち犯す。文に就いて三と爲す。初には總じて名を標し、不集の法を列出す。次に而捨より下は、譬を擧げて、正を捨てて邪を學することを顯す。三に是斷より下は、非を擧げ犯を結す。初に正見等と言ふは、正見は能知の智、正性は即ち所緣の境なり。正法身とは境智不二にして、物に應じて形を現すこと、正法に非ずといふこと無し。故に經に云はく、吾今、此身は即ち法身なり。大乘の所詮は、宗此に極まる。因より果に至るまで、三身を出づること無し。故に不學を擧げて勸めて修習せしむ。次の文は無作の道品、七科の法門を七寶に譬ふ。此より外は、圓實の道に非ざるを、並に邪見と名く。權を體らざるに由る。是故に犯を結す。權は即ち實と達するは、佛の化儀に順ぜり。四悉は時に適つて正助合行し、邪正理一なる

【化儀】佛が衆生を化益するに通く用ふる説教の形式方法。

【四悉】佛が通く衆生に施す四種の利益、世界悉檀、爲人悉檀、對治悉檀、第一義悉檀の稱。
【二六】不善和衆戒の文を釋す。

【用】はたらき。

は則ち犯の限に非ず。經に云はく、「方便を以て是菩薩の解を生ず」と。三に犯を結する中に、斷佛性と言ふは、理性は體偏圓に通ず。心の隔異に由りて此を捨て彼を學す。行の三因の性は而も現行せざるが故に斷と爲し、性徳天然にして常住不變なり。何の斷か之有らん。今修得に従つて非を結するに犯を成す。

第二十五に不善和衆戒なり。法侶を制御して、行藏、名所を得るを名けて和衆と爲す。統領は戒に乖くを不善と云ひ、既に衆の主と爲る。須らく軌儀に合して資財を守護し、善く諍訟を和すべし。今反つて非法を訓誘して、各僧徒に乖く。是故に聖制す。別して三縁を具す。一に身は衆生と爲る。二には慈護の心無し。三に衆をして不和ならしむ。及び三寶物を損するに便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に標して衆主を列す。次に應生より下は制して法に依らしむ。而反より下は制に違して犯を結す。初に時節を出す。即ち如來滅後遺法の住持は要す衆主に藉る。故に偏に之を擧ぐ。一には傳教の人、謂はく、說法の主なり。二には住持の人、謂はく、行法の主なり。三に綱維處衆、謂はく、僧房の主なり。四に内外を引導し塔寺を修治す。謂はく、教化の主なり。五に禪要を傳授する、謂はく、坐禪の主なり。六に衆を領して遊方す。謂はく、行來の主なり。次の文に二の意あり。一に制して衆を和せしめ、二に制して財物を守らしむ。三に結犯の中に、法に衆を訓る無きに由りて、乃ち自他をして不用にして用ならしむ。名けて無度と爲す。自ら盜心無ければ、但輕垢を結す。若し其れ己を潤し、及び三寶混和して亦聲門の互用にして重を得

【三七】獨受利養戒の文を釋す。

【知事】寺中にて衆事を檢校することを寫る。

るに同じ。

第二十六に待賓非武或なり。凡そ是釋侶は方外の賓なり。衣鉢自ら己に隨ふ。法界を主と爲すの法は、接待方に有り。其疲勞を解して、闕乏を資給せんことを得ることを庶ふ。

今乃ち知事は僧の法に越えて、衆の利均からずば、同師の義永く垂き、十方の僧は次徒に設けん。財を損し法を失ふ。是故に聖制して四縁を具す。一は先づて僧房等に住し、二

に出家菩薩僧有り、三は是を知る。四は供給せずして獨り利養を受くるに便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に同類の人處を擧げ、次に先住より下は、制して供給し次に依りて差へ

て請せしむ。三に而先住より下は、非を擧げ過を結す。初の文に五處あり。一には僧坊の中は即ち出家菩薩の所住の處なり。二に舍宅城邑は則ち在家の菩薩の所住の處なり。亦是

俗家に僧の居處有り。三に國王宅とは即ち王の家申なり。四に乃至とは、謂はく、常の居處に非ず、一夏同じく住す。住處既に多し。遍く説くべからず、故に乃至と云ふ。五に大會の中

に謂はく、會を設くる處なり。後來の菩薩を見ては、皆須らく接待すべし。次の文の中に初に迎送供給せよと制す。初に物有りて事事給與することを明す。次に物無くば肉を割

き身を賣ることを明す。謂はく、傭力資給等なり。身を賣ること在家出家の二衆に通す。男女を賣ること、多くは在家に局る。若有等とは制して利養を同じうす。故に有利養分等

と言ふ。三に結犯の中、教に違するは不仁なり。故に畜生に喩ふ。聖果を求むるの徒に非ざれば、非沙門と云ふ。沙門桑門は西國の出家の通號なり。四姓の出家を同じく釋種と稱

【沙門、桑門】梵語シユラマナ(シユマナ)の音譯。勤息、止息と義譯す。【四姓】婆羅門(Brahmin)刹帝利(Kshatriya)毘舍(Vaisya)首陀羅(Sūtra)の四階級をいふ。

【三八】 受別請戒の文を釋す。

【四道果】 四果に同じ。

【七賢】 見道以前の凡位の修道者。五停心位、別想念位、總想念處位、煖位、頂位、忍位、世第一法位をいふ。

【三九】 別請僧戒の文を釋す。

【曲私】 ねぢけてよこしまなこと。

す。既に法式に乖き、釋門に收まらざるが故に、非釋種姓と云ふ。

第二十七に別受他請戒なり。佛性は平等にして僧は和同に貴し。財利は偏無く水乳の合するが如し。今別して請を受けて、施を均しからざらしめ、自ら侵奪の徳を獲るなり。施

主は平等の福を失ふ。彼此俱に損す。是故に聖制す。故に『應供行經』に云はく、「別請を受くるは、定んで四果を失ひ、七劫も佛を見ず。五百の大鬼は其前に遮り、五百の大鬼は

其後に隨ふ。僧寶と爲す中に、佛化の僧、四道果の僧、菩薩の僧、七賢の僧、凡夫の僧有

り。四方の施主をして、是の如きの福を得しめんと欲し、別請を受くることを得ざれと制

するなり。別して四縁を具す。一に身は衆に在り。二に施主は別して請す。三に受け。四に物

を取るに便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に不應の意を明し、次に自己用より下は、過

を擧げて犯を結す。初に屬十方と言ふは現前の僧なり。八福田と言ふは、聖人即四果等並

に及び師僧寶の攝なり。僧は是れ八が中の一なりと雖も、義は多種の人を含む。佛は亦示

して僧中に在すが故に諸佛僧と云ふ。即ち父母十方の病僧は、通じて物の分有り。法及び

橋と並に三の福田を出でざること、十方の僧物は義彼を該ねず。但五に通ず。故に及八福

田中乃至父母病人物と云ふ。次に犯を結すとは、十方に人多し。又盜心無きは輕垢を犯す

るのみ。

第二十八に別請僧戒なり。凡そ勝福を求めば、須らく僧次の良田に託して、情に曲私無

く施に平等なること有るべし。今乃ち別して請じ己を知り、餘人を簡棄す。唯法供の通心

【曲磨】ねぢけてよこしまなこと。

【二衆】比丘、比丘尼のこと。

【檀越】梵音ダーナパテイ(Danapati)施主と譯す。布施を行ふ人のこと。

【羅漢】アルハン(Arhan)應供と譯す。

【七佛】毘婆尸佛尸棄佛、毘舍浮佛拘留孫佛、俱那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦牟尼佛をいふ。

【應化】佛菩薩が衆生濟度の爲、機に應じて形をかへて化體を現ずること。

を闕くのみならず。蓋し是れ俗中の曲磨なり。彼此我過を招き、是を以て之を制す。別して六縁を具す。一は自ら是れ施主なり。二は衆會を設け、三は僧衆有り。四は故に別して請す。五は親を行ひ、六は物を取りて便ち犯す。若し僧次の外及び他の力に逼られて、要す別に請せしむれば犯無し。文に就いて三と爲す。初に僧を請するの人を列ね、應に示導を求むべし。次に知事より下は正しく請法を明す。三に若別より下は制に違ひ犯を結す。初の文に其三類を擧ぐ。犯は二衆に局る。一切の檀越は戒を受けず、人は教に順すれば福を得、違すれば則ち罪無し。次の文に即得十方賢聖僧と言ふは、心普ければ理通じ、一切を攝す。而世人等と言ふは、故に「優婆塞戒經」に云はく、「鹿子母別して五百の羅漢を請す。鹿子は阿難をして食を送りて佛に與へしむ。佛、阿難に問ひたまはく、「鹿子僧次に一人を請するや不や。」と。阿難言はく、「癡人は五百の羅漢を請すと雖も、僧次の一人に如かず。」と。第三に結犯の中に、是外道法と言ふは、佛法の外を外道の法と名け、外の外に非ざるなり。律には聲聞受くることを聞き、別請を約す。故に知んぬ、七佛、並に菩薩に聞くに約して別請の法無し。七佛とは皆此土に在り、應化示迹百劫の内なり。長壽の諸天は威く會て見る所にして、多く引きて證と爲す。信者をして所憑有らしめんと欲する故に。謂はく、過去九十劫の初に一佛あり、毘婆尸と名け、亦是羅衛と名く。中間の諸劫に佛無し。第三十一劫に至りて二佛出づること有り。一に尸棄と名け亦式と名く、二に毘舍浮と名け、亦墮葉と名く。此第九十一の賢劫に、千佛應に出づべし。四佛は已に過ぎた

【三〇】 邪命自活戒
の文を釋す。
【卜相】 うらなひ

【唐捐】 むなしく
すてること。

【祿命】 人の運命

り。一は拘留孫、二は拘那含牟尼、三は迦葉、四は釋迦なり。

第二十九に邪命自活戒なり。邪法をもて活命するが故に邪命と云ふ。四種有り、一に方

邪、謂はく、國の使命を通ず。二に維邪、謂はく、醫方卜相なり。三に仰邪、仰いで星宿

を觀す。四に下邪、種種根栽五穀等の類を謂ふ。菩薩は理應に慈心をもて物を感むべし。

諸の所作有るは福唐捐せず。如何が利の爲に邪求して、兼ねて惡術を行じ不淨に活命

し、慈無くして生を損ぜん。信心を下し上は聖旨に乖く所以に犯を制す。別して三縁を具

す。一は利養の爲にして、二は惡の技術を習ふ。三は所爲の事訖るに便ち犯す。文に就い

て三と爲す。初に邪命の心を標し、二に反賣より下は邪命の事を列ね、三に都無より下は

非を擧げ犯を結す。初は文の如し。次の文の初に邪命の方法を列ね、店肆に坐居して、人

を眩惑するを、販賣男女と名く。亦男の色を賣りて、女に與ふ有り。自手作食とは惡觸非

法なり。自磨自舂とは生を壞し兼ねて惡觸するなり。此れ並に下邪なり。類に隨つて之を

淨むれば則ち自手に通ず、譏議を避くるが故なり。占相等とは色を占ひ聲を相し、祿命の

因を判釋す。正を捨て邪に歸して、官を求め職を護る。或は自ら染習して、道儀を損壞し、

或は人の爲に夢を解きて凶と説き、吉と導ふ。其をして邪倒せしめ、神を求め鬼に禱る。

或は胎内に是は男是は女と占ふ。呪は謂はく、呪咀なり。左道をもて利の爲にし、物を損

し命を破す。術は即ち邪術、符書厭禱して、勝縁を禁斷し、或は道俗を動す。並に是れ維

邪及び仰邪の攝なり。術は星像に通ずるが故なり。功巧と言ふは、書畫彫尅、泥素竹木な

【齊戒】身口意の三業をつつしむこと。

【帝釋】梵にシヤクラデーベーンドラ (Sakra devendra) 能天主と譯す。須彌山の頂上切利天の天主にして善見城に居り四天王及び他の三十二天を領して佛法歸依の人を護り阿修羅の軍を征する天王。

【修羅】梵音アスラ (Asura) 非天と譯す。衆相山中又は海底に居りて常に三十三天と戦ふ所の鬼畜の類なり。

【三】不行救贖戒の文を釋す。

の中に説かく、此六日に使者太子及び四天王白ら下りて觀察す。若し齊戒を持して父母に孝順すれば、上りて帝釋に白す。諸天心に悦んで天衆を増益し、修羅を滅損す。鬼神遠く去りて住處安穩なり。若し爾らざれば、諸天悦ばずして諸天を滅損し、修羅盛なりと言ふ。『天地本起經』に説かく、劫初に異の梵子有りて、外道の行を修す。此六日に於て肉を割き血を出して、もつて火中に著す。十二歳を過ぎて天王の爲に、責められて惡子を生ぜん願す。時に當りて火の中に、八の鬼出づること有り、身黒く眼赤く大光明有り。一切の鬼神は皆此によりて生ず。故に劫初の聖人は、此六日に齊を持し戒を受くることを制す。『善生經』に云はく、「是れ外道の祠祀の日なり」と。年三長齊月とは、正月は是れ衆生現生の初なり。五月は是れ興盛の中、九月は是れ欲藏の始なり。又世に傳へて云はく、天帝月を分つて四天下を判す。正月は南天、二月は西天、三月は北天、四月は東天、五月は南天、乃至九月は還りて南天に至ると。未だ正教を見ずと雖も、深く其理有り。三に犯を結するのと文の如し。次に如是より下は結勸して廣を指す。制戒品と言ふは、大本の中に此品有り。次に二二九を明して二と爲し、初の九に又二あり。初には正しく釋し、次に結勸して廣を指す。

第三十一に不行救贖戒なり。菩薩の發心は慈救を本と爲す。況んや尊の危きを見て、輕心にして棄捨せんや。内に孝心を闢き、外には慈愍に垂く。故に犯を制するなり。別して四縁を具す。一に三寶等の危に在るを見る。二に知見の想を生ず。三に慈愍の心無し。四に

【救贖】 すくひあがなふ。

【三】 損害衆生戒の文を釋す。

【三四】 邪業覺觀戒の文を釋す。

救贖せざるに便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に名を標し時に約して危難の事を列ぬ。父母と言ふは諸佛菩薩は、能く法身を生ず。故に彼形像は即ち父母の形像なり。而菩薩より下は作を制し持を成す。三に若く下は、制に違うて犯を結す。並に文の如し。

第三十二に畜造非滅戒なり。菩薩の畜造は須らく軌儀に合ひて、内には仁慈有り、外には侵害無かるべし。今反つて非法の物を畜造し、販賣して人に與へ、自他過を増すが故に犯を制するなり。別して四緣を具す。一は是れ非法の物、二は勢を恃む。三に惡心、四は故に畜へ販賣するに便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に名を標し不應の事を列ぬ。次に若故より下は制に違つて犯を結す。初に六有り。一は殺具を販賣す。二に輕秤小斗を畜ふ。三は勢に因りて財を取る。四に害心をもて人畜を繫縛す。五に成功を破壊す。六に猫狗を長養す。此六物は並に能く損害するが故に畜用を制す。財物手に入るるは、前の盜戒に屬す。今は不應に従ふが故に輕垢を結す。犯を結すること文の如し。

三十三に觀聽惡作戒なり。菩薩は理應に靜處にして思ひ微に聖典を執持すべし。今反つて非法を觀聽し、身に惡作を行ずるは、法に垂き譏を招く。故に犯を制するなり。別つて三緣を具す。一に所對の事有り。二に惡心をもて視聽す。三に見聞するに便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に能犯の心を標し、二に觀一切より下は、過を擧げて防禁す。三に若故より下は、制に違ひ犯を結す。初に惡心と云ふは、和解の爲にせず、慶快して明無きを惡心と名くるなり。次の文に多意あり。初に闕者を觀ず。闕は謂はく、闕打にして、俱に身

【樗蒲】

ばくち。

口に通ず。軍陳兵將は即ち王者の軍にして劫賊等なり。鬪は即ち賊等の軍なり。若し自、若は教へ、若は試み、若は戯れ、並に觀することを得ざるが故に等と云ふなり。亦不得より下は、音楽を聽くことを止む。若し他の供養の爲にするを、世に順じて觀聽して染無ければ犯ぜず。不得より下は雜戲を止むるなり。樗蒲の四の數あり、圍碁は知るべし。波羅塞戲とは西國の兵戲なり。二人は各二十の玉象を使ひ、此方に亦板に畫きて道と爲す有り。牙を以て子と爲し、諍ひて要路を得るを即ち勝と爲す。彈碁とは指を以て碁子を彈きて、遠きを得て勝と爲す。六博とは只雙六なり。拍毬とは趨毬にして毬を打つなり。亦拍毬と云ふは、其義一なり。擲石とは時に擲石と云ひ、時に擲抛と云ふ。投壺とは錢杖等を投じ、彼孔の中に入る者を籌と爲す。牽道とは時に圍直と云ふ。二人相對して各十二の子あり。三に直れば則ち敗す、故に牽道と名く。八道行成とは八道交絡して、行くこと當に城の如きなり。爪鏡等とは止邪術なり。西國の術師は藥を以て爪の中に塗りて吉凶現すなり。芝草等とは此等の三の事にして、呪を以て之を呪して、吉凶を知る故なり。觸體とは西國の外道、人の頭の骨を打ちて、死生の因縁等を決知す。此方に亦觸體の神に事へ、世の休否を説くこと有り。卜筮とは疑を決するなり。並に是れ邪術にして、人の心を誑惑し、世世に染習して、自他を益すること無きが故に犯を制す。盜賊使命とは、賊の爲に使はれて、盜事を助成して助縁の邊に従ふ故に輕垢を結す。若し盜事を成ずれば、理は軍に在りて收む。三に制に違ひて犯を結す、文の如し。

【五】繫念小乘戒の文を釋す。三藏經十部經によつて倍達すること。

【四儀】行住坐臥の四事、常に心を調へ規矩に合して戒を失はざること。【六時】一日を六時に分つ。晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜の稱。【羅刹】ラクシャス(Rakshas) 食人鬼と譯す。惡鬼の通名。

【草繫比丘】草に繫がれたる比丘のこと。昔多くの比丘野を過ぎしに賊の爲に衣服を奪はれ身を生ける草に

三十四に繫念小乘戒なり。菩薩の心は四弘願無し。是非汚雜するは、大道期し難し。故に犯を制するなり。別して三緣を具す。一に勤めて大を護らず。二に小宗を緣念し、三に大を捨てて小を忻ふ一念に便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に名を標し制を立つ。次に若起より下は、制を違へて犯を結す。初に護持等と言ふは、護は即ち守護にして、持は謂はく、念持なり。持に二種有り。惡を止むるに由るが故に、戒體缺くこと無きを名けて止持と爲す。教に順つて修し、戒をして光潔ならしむるを、名けて作持と爲す。二持を戒と名くは、皆護に由りて成するが故に、三業俱に違ふを禁戒を護持すと名く。故に四儀に約して身心を制し、六時に讀誦して以て口を禁ず。法雨外に資けて、心理性を緣じ堅固にして動じ難し。故に金剛に喩ふ。大小を等しく持すること、浮囊の如きなり。涅槃經に云はく、譬へば人有りて浮囊を帶持して、大海を度らんと欲するが如し。爾時海中に一羅刹有りて、來りて浮囊を乞ふ。初は則ち全く乞ひ、乃至微塵悉く皆與へず。此を大小等しく持するの相に譬ふ。分段變易の二死は深廣なること、譬へば大海の如し。三徳の果を證するは、猶し彼岸の如し。戒の浮囊缺く無きは、彼岸に期すること有り。損すること針孔の如くすれば、愛見の水漸く身心に入りて、小に因りて大を致す。六道に輪廻し慧命を喪失するを、海に没して死すと名く。草繫の比丘の如きは、上の義を顯成す。輕遮を護するが爲に、命を殉せども毀たざるが故に。『莊嚴論』の中に、賊、王物を盗んで、遇つて比丘に見えて其事を露さん恐れて、自ら商議して云はく、『我聞く比丘は生草をも壞せず。』と。向路の傍

繋がれしが比丘等
草の生命を絶つを
恐れて炎熱に逢ひ
ても動かざりしを
遊獵の玉見て之を
助け深く感じて佛
門に入りしといふ

【圓道】圓滿なる
道。佛道のこと。
【三六】不發願戒の
文を釋す。

【十住】五十二位
の中第十一位より
第十位迄。
【十廻回】廿一位
より四十位迄。
【十地】四十一位
より五十位迄。
【十願】敬禮諸佛
の願、稱讚如來の
願、廣修供養の願
懺悔業障の願、隨
喜功徳の願、請佛
法輪の願、請佛住
世の願、常隨佛學
の願、恒順衆生の
願、普皆廻向の願
の稱。

に牽いて草を以て之を縛る。王出でて遊獵し備を説き、問うて云はく、「我此比丘を觀るに、肥壯にして多力なり。何の因縁を以ての故に、草に繋がれて轉側せざる。」比丘答へて言はく、「我此草を觀るに、時に此草甚だ微く脆し。我若し轉側せん時、如來の制に違ふことを恐る。王は乃ち解き放ちて願を發して法を護る。念念不去心とは捨なり。心心相續して刹那も捨てず。一體三寶を緣じ、四弘誓願を發すが故に常生等と云ふ。次に結犯の中に外道と言ふは、二乘は即ち外道なり。圓道の外なるが故に外道と名く。

（三六）に不發十願戒なり。菩薩は願を發して、心をして退せしめず、行に日歸有らしむ。故に願を發さざるをば犯を制するなり。別して二縁を具す。一に不發願、二に發して廢忘するは便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に名を標し總じて大數を擧ぐ、故に一切と云ふ。次に孝順より下は、別して十願を列ぬ。三に若一切より下は、制を違へて犯を結す。文の如し。次に別して列ぬる中に、父母師僧に孝順するを二と爲す。三に好師友を得んと願す。四に常に我に大乘を教へよと願す。五に常に我に十住を教へよと願す。六に常に我に十廻向を教へよと願す。八に常に我に十地を教へよと願す。九に我を開解せしめて、法の如く修行せしめんと願す。十に佛戒を堅持せんと願す。堅持佛戒は初後に通ず。故に知んぬ、十願は因果具足せり。妙覺は是れ所期の極にして、修證究竟せり。故に略して列ねず。既に自行の因果を備へて、自利利他は即ち化他の能所を具す。開解修行は一向の法が具せざらん。一期の化法は成く其中に攝す。是故に誠勸して刹那も捨てざるが故に念念不去と云ふ。犯を結す、文の如し。

天台菩薩戒疏 下

天台沙門明曠刪補

【一】不發誓戒の
文を釋す。
【陋】いやしきこと
【楚毒】くるしみ
いたみ。

三十六に對境無誓戒なり。前の十願は勸めて通發せしむ。今境に對して行を起す。身心を要制して能作難事を擧げ、顯持して毀禁の陋を識らしむ。故に別別に境に於て、楚毒の言を對治して、遂に此事を得て非を知る。持心相續人の情は、怠ること多く誓無ければ犯を結す。別して三縁を具す。一は對治起過信施等の境なり。二は別誓を興さず、三は發すと雖も速く忘れ便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に名を標し前を結して後を生ず。次に作是より下は、別誓を列出す。三に而菩薩より下は、制を違へて犯を結す。初に前を結す。持佛禁戒とは後を生ず。次の文に自ら一十三の文有り。初に色境に對して、猛火刀山の誓を立て、身業を制す。次に五は信心供養の境に對して、誓つて身口の業を制す。次の一は信心禮敬珍寶の境に對し、鐵鎚身を破して誓をもて、重ねて身業を制す。次の五は五塵に對して、制して意業を言ふ。後の一は身口を總じて、咸く佛道を成ずることを願す。文の如し。次の五は四事に對すとは、衣服を一と爲し、飲食湯藥を二と爲し、房舍を三と爲し、臥具を四と爲す。一は臥具を施するに對して、熱鐵地に臥す誓あり。四は湯藥を施すに對して、百銖をもて身を刺す誓あり。五は房舍を施すに對して、熱鐵の錢に投ぐる誓あり。

【覺意三昧】非行非座三昧のこと。心の向ふ所に隨ひ皆覺識明了なるが故に名く。
 【八度】布施、持戒、忍辱、精進、靜慮、智慧の六波羅蜜のこと。
 【二邊】有邊無邊のこと。

【二】冒難遊行戒の文を釋す。
 【頭陀】梵音ドフータ(Dhuta)修治と譯す。煩惱の塵垢を拂ひ去りて佛道を求むること。

次の一は文の如し。次の五は五塵に對する中に、色を見る心に對して、刀鋒をもて口を挑む誓あり。二は聲を聞く心に對し、千錐をもて耳に割く誓あり。三は香を嗅ぐ心に對して、千刃をもて鼻を割る誓あり。四は味を嘗む心に對して、千刀をもて舌を斷つ誓あり。五は細滑に觸する心に對して、利斧をもて身を斬る誓あり。故に覺意三昧の内に、六根に約し六塵に對し、外に六作に約す。謂はく、行住坐臥、語默作として、此等の心に於て、即ち法界に達して六度具足す。法界に著無きは即ち布施なり。空有を傷けざるは、即ち持戒なり。二邊を忍んで中道を辱ぢざるは、即ち忍辱なり。有無を雜へざるを精と名け、念念の中に趣むを進と名く。即ち精進なり。法界の體寂なれば即ち禪定なり。寂にして常に照なるは即ち智慧なり。六度互に融すれば、即ち三十六あり。一念に具足するを名けて持心と曰ふ。即ち是れ今の文の不破戒の義なり。次に一切は皆佛道を成ずることを願するは、即ち四弘の一なり。一に三を須て資とせば、即ち四を攝す。何となれば煩惱を斷ぜずば、焉ぞ能く他を度せん。經に云はく、「若し自ら縛する有りて、能く彼縛を解かば、是處有ること無からん。法門を學せざれば、藥病に暗く、成佛を願せざれば、生を度すること盡きす。餘の三は互に具す。此に准じて之を作れ。此は是れ大士の本懷、對治の最なり。故に列ねて後に居して前に冠す。

三十七に故入難處戒なり。身は道の本爲り、藉りて以て進修す。既に難緣有る故に、入るに道を妨げ世の譏謗を招く。是を以て犯を制す。此に五行有り、一に二時の頭陀、二に

【安居】ワルシヤ
グサナ(ハルサナ)ニ
三(三)雨安居の略。
僧侶が四月十五日
より七月十五日に
至る九十日の間禁
足して家に籠り禱
に業を修すること

【布薩】ポーシヤ
ダ(Possalia)淨住
と譯す。諸の煩不
善の法及び諸の惡
惱を斷じて究竟清
淨の梵行を修する
をいふ。毎月十五
日間之を行ひて犯
戒を懺悔するなり

【夏居】安居に同
じ。

【抖擻】煩惱を去
り佛道を求むること。

【但三衣】比丘但
僧伽梨、鬱多羅、
安陀會の三衣をい
ふ。

【糞掃衣】鼠囓、
火燒、産婦用など
の切地にて綴りた
る汚衣。

【博食】にぎりめ
し。

【隨著】梵音ア

【隨著】梵音ア

【隨著】梵音ア

遊方の縁、三に坐禪、四に安居、五に布薩なり。一に別して四縁を具して犯を破す。一に是れ禪處、二に雜有りと知る。三に修行の爲にす。四は故に入るに便ち犯す。文に就いて四と爲す。初に遊止の所處を問す。二に若行より下は難處を列出す。三に一切より下は入るべからずと制す。四に若見は制に違ひて犯を結す。初の文に又二あり。初に略して三の行の時節道具を擧げ、説戒の遊方を列ねず。次に而菩薩より下は別して五の行を釋す。夏居には坐禪を攝するなり。初に二時頭陀と言ふは、二時は寒からず熱からず、頭陀遊方は妨損有ること無し。冬は寒く夏は熱し、但坐禪すべし。頭陀は西音にして此に抖擻と云ふ。十二種の過を抖擻して、三徳を成ぜしむ。四分律中に具に十二を列ぬ。衣の二は解脫の徳を成ずることを表す。成惡を遮るが故に。食の四は賢若の徳を成ずるを表す。慧命を資とするが故に。住處の六は法身の徳を成ずるを表す。是れ所依なるが故に。衣の二とは一には但三衣、二には糞掃衣なり。食の四とは常乞食、不作餘食、法一坐食、一搏食なり。處の六とは一に蘭若此に寂靜と云ふ。二は塚間、三は樹下坐、四は露地坐、五は隨坐、六は常坐なり。並に佛性の性を終す。三觀は圓に修し等しく三惑を破す。空觀は見思を破し、即ち般若の徳は報身を成ず。假觀は塵沙を破し、即ち解脫の徳は應身を成ず。中觀は無用を破し、即ち法身の徳は法身を成ず。三と雖も一にして、一に即して三なり。十二の頭陀の理は異徹無く、結夏安居と言ふは、要す此に住せんと期するなり。多くは出家の菩薩を制し、在家の菩薩は必ず他緣無くば、安居せんに亦善し。應に云ふべし、菩薩大士一心に念すと

ラヒヤ (Aurary) 村を去ること三百歩若くは六百歩、靜にして比丘の修行に適する場所をいふ。
【假名菩薩】 住前信相菩薩と同じ。

【維那】 梵語羯磨陀那 (Vimhana) の略にして授事と譯す。僧衆の雜事を司り又之を指授する役。
【籌】 數を數へるに用ふるかずさし

女には大姉 我假名菩薩某甲、今僧伽藍乃至某甲の宅に依りて、前三月夏安居す。四月の十日より已後には、應に後の三月夏安居と云ふべし。房舍破壞修治の故に在らば此句を除く。對首の人報じて言はく、誰に依りて持律する者ぞ。答へて言はく、甲和上此濫に法界安居を用ひる者を見る。既に眞教に乖き人法俱に非なり。法界を以て所安と爲せば、何ぞ須らく結を用ふべけんや。今の文に安ぜしむるは、乃ち徒設を成じ聖法を壞亂す。魔に非ずば何の謂ぞや。火燧とは火を出す物なり。古くは燧人に因りて火を出すが故に、火を出すの物を名けて、火燧と爲すなり。故に論に云はく、「燧を攢り火を改む」と。次に別釋の中に十八種物と言ふは、三衣を一と爲す。經律を各一と爲し、佛菩薩像を各一と爲す。餘の名は見るべし。經律とは「法華」の意を得れば、權を開して實を顯し、妙理を殊にすること無し。今能開に従へば即ち大乘經律なり。布薩と言ふは、此には淨住と云ひ、多少に限らざるが故に下一人に至る。聲聞の衆法の四に同るには同じからず。若し對首心念せば、亦此文に同じ。聞鐘入堂等の説偈は並に聲聞に同じく、歡喜を乞ふこと無し。維那籌を浴する時に、羅漢を改めて菩薩と爲す。浴籌し竟りて敲つて諸佛子等に白す、掌を合せて志心して聽け。此南閩浮提大唐國、某州某縣某寺の僧伽藍所に、我本師釋迦牟尼佛遺法の弟子、出家在家の菩薩二衆等、自ら惟れば生死の長劫なることは、乃ち無上の慈尊に遇はざるに由るなり。今生に若し出離の心を發さずんば、恐くは還つて流浪せんことを。故に是日に於て同じく三寶を崇め、大乘を渴仰して共に、菩薩戒藏を宣傳す。此功德を以

【八部】天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽の稱。

【摩訶薩】マハーサットワ(Mahast)大有情と譯す菩薩行を行じ一切衆生を濟度する人

【四恩】父母恩、國王恩、衆生恩、三寶恩の稱。【合識】心識を合有する者。衆生。

て、天龍八部を資益せん。唯願くは威光自在ならん。皇帝堯化窮り無く、太子諸王福延萬葉ならん。師僧父母常に安樂を保ち、見聞隨喜宿障雲のごとく消え、惡道三途の災殃自ら殄びん。此功德を廻して誓つて娑婆を出でて、阿彌陀佛國に上品上生せん。打一

諸の佛子等諦に聽け、此菩薩戒藏は三世の諸佛同じく説き、三世の菩薩は同じく學す。衆の中に未だ菩提心を發さず、未だ諸佛の大乗戒を受けざる者有らば出でよ。三説打一

諸佛子等諦に聽け、衆の中に未だ菩提心を發さず、未だ諸佛大乗戒を受けざる者は已に出づ。汝等今身より佛身に至り、其中間に於て、能く邪を捨て正に歸し、菩提心を發して惡を斷じ善を修め、菩薩戒を持し菩薩行を行するや不や。答能打一

諸佛子等諦に聽け、衆中に誰か小ならん。小なる者は收護せん。三説打一

諸佛子等諦に聽け、外に清淨の大菩薩摩訶薩有りて入らん。三説打一

諸佛子等諦に聽け、衆中に小なる者は已に收護しつ。外に清淨の大菩薩摩訶薩有り、已に入らん。内外寂靜にして諸の難事無く、壽を行すべきに堪へたり。廣く爲に布薩す。我假名菩薩比丘某甲、衆の爲に壽を行じ、布薩事を作す。衆當に一心に布薩を作すことを念すべし。唯願くは上中下座各次第に法の如く壽を受く。三説行壽し竟ん以諸佛子等諦

聽せよ、次に在家の菩薩の壽を行す。一説打一

諸佛子等諦に聽け、此一住處一布薩出家の菩薩若干人、在家の菩薩若干人は、各佛法の中に於て清淨に出家和合して布薩す。上は佛教に順じ、中は四恩を報じ、下は合識

【梵音戒師】清淨なる音聲の戒師。

【稽首】首を地につけて禮拜すること。

【和南】梵音アンダナ(Andana)禮拜敬禮と譯す。

【三衣】僧の著るべき僧伽梨、鬱多羅僧、安陀會の三種の衣服。

の爲にす。各阿彌陀佛を念じ、一切普く誦せよ。次に請ず上座說戒は同じく聲聞法請なり

敬つて大衆に白す。衆は比丘某甲を請じ、衆の爲に戒を誦せしめよ。某甲比丘をして、

梵音戒師は高座に昇る。誦戒の人は儀を具して禮三拜し已りて互に跪して云ふ。我假名菩薩比丘某甲香して偈を説け。

戒を誦し畢りて各自慶の偈を説きて云はく、諸佛出世第一の快なり。法を開き奉行するは歡喜の快なり。大衆の和合寂滅の快、衆生の苦を離るる安樂の快なり。戒師禮謝して

云はく、我假名の菩薩比丘某甲稽首和南して、敬つて大衆に謝す。衆衆ひて戒を誦するに、

多く如法ならざれば大衆を惱亂す。願くは衆慈を知り施するに歡喜を以てせよ。言は各各九條等と披く去聲と

若し菩薩戒を受くれば、亦異に三衣を辨じて、加ねて法を受持せよ。重ねて著することを制するには非ず。三衣の條品受法は聲聞に同じ。但菩薩一心念我假名菩薩比丘某甲と云ふを異

と爲す云云。一一如法と言ふは、總じて五の行を結す、故に一一如法と云ふ。謂はく、住處に細蟲無く、梵命等の難無きなり。次に難處を列出する中に、總じて十二有り。初に惡

國界とは二國交戰するなり。二に國王とは三寶を信ぜざるなり。三に土地高下とは危險に出入するなり。四に草木深遠とは蟲獸の所依たるなり。五に師子、六に虎、七に狼、八に

水、九に火、十に風、十一に劫賊、十二に毒蛇なり。三に不應入を制する中に一切と言ふは、略して列ぬること上の如し。廣くせば盡くべからず。凡そ能く損害するを、並に名けて

難と爲す故に一切と云ふ。乃至と言ふは遊方布薩坐禪を言はず。初に頭陀を擧げて越えて

【三】 乖尊卑次第
戒の文を釋す。

夏坐を取るが故に、乃至と云ふ。結犯は文の如し。

三十八に衆坐乖法戒なり。入道の清衆は時に邪徒に異りて、俗年を以て尊卑と爲さず。但し戒法を用て前後と爲し、釋文の儀軌を崇めて世流の慢幢を摧く。受戒を以て眞性と爲す、故に先づ受けたるを長と爲す。別して三縁を具す。一に身は衆中に在り、二に受くる時節を知る。三に坐して次で依らざるに便ち犯す。文に就いて四と爲す。初に名を標して總じて列ぬ。次に莫如より下は、外人を擧げて識と爲す。三に我佛法中より下は、重ねて所制の法を示す。四に而菩薩より下は、制に違へて犯を結す。初に次第等と言ふは、若し小に先んじ大を後にせるは一切を俱に開す。若し大を先んじ小を後にせば、大に在りては則ち大、小に在りては則ち小なり。又此方は大小分つこと無く、亦宜く時處に順すべし。比丘等とは此等同じからず。若し其れ出家は則ち内の二衆に自ら先後を分つ。故に王子の出家は庶人と同類なりと云ふ。若し其れ在家は外の二衆に於て次第と爲す。王家の男女は在家に亦然なり。不分は眞に即して俗なり。男女戒に依りて雜坐せよと謂ふには非ず。餘の三は文の如し。

【四】 不修福慧戒
の文を釋す。

三十九に不勸修福講解利生戒なり。大乘の威力は思議すべきこと難し。唯冥途を資益するのみに非ず、固に能く現の危難を救ふ。爲に講解せざるには幽顯聞くこと無く、利を失ふ處深し。是故に聖制す。別して五縁を具す。一に大法を講講す。二に諸の難縁無し。三に安危の境に遇ふ。四に慈救の心無く、五に爲に講解せざるに便ち犯す。文に就いて三

【福業】 欲界の善業のこと。可愛の果を感生して有情を利益するが故に福業と名く。

【二十八天】 欲色無色三界の天の總稱。六欲天、色界十八天、無色界四天の稱。

と爲す。初に自他を勸めて福業を修せよと制す。次に而菩薩より下は、生を利し智業を修せよと制す。三に而新學より下は、制に違ひて犯を結す。初文に先づ四事を列ぬ。一に僧房を建立し、二に山林園田、三に佛塔を立作す。塔は謂はく、聖身の骨を藏むるの處なり。供するは福多し。不殿堂の形貌を安ずる處に同じ。故に『阿含經』に明すに、梵尼尸比丘毘婆尸佛は、時に歡喜の心を以て火を執りて塔を照せり。後に釋迦に値ひて身體に光明あり、二十八天の身光及びざりき。又『十二因緣經』に云はく、「八人に應に塔を起すべし。謂はく、佛と菩薩と支佛と四果と輪王となり。佛塔は八層已下は漸滅す。乃至初果は一層なり。後分に云はく、輪王は級無く、四果は四級、支佛は五級、佛は十三級なり。亦支提と云ふは、即ち舍利無き者なり。今は最勝にして佛舍利を藏むるによりたる故に佛塔と云ふ。四に安居坐禪の處所を立つ。一切等とは、總じて立處を結示するなり。凡そ是一切の行道すべき處には、皆應に上の如く僧房等の四を立て、以て道縁と爲すべし。是故に之を制す。次に制講して生を利する中に又二あり。初に名を標し總じて所見の有情を勸め、皆須らく利樂すべし。故に應爲一切等と云ふ。經は定慧の二學を詮し、律は即ち戒學なり。菩薩の律儀は既に、是通途に生を利す。故に三學を擧げて三身三德を説かしむ。戒學は即ち法身、定學は即ち解脫にして慧學は即ち般若なり。若し疾病より下は、別して所講の境を列ぬ。中に於て三と爲す。初に報障に對して講を勸むる所稱通せり。通じて皆故有り亦總じて經律を擧ぐ。謂はく、報身の疾病王國の干戈、寇賊競ひ興り、生緣喪死師長の七化せ

【八難】 佛を見ず
 正法を聞くを得ざ
 るを難といふ。之
 に八あり。在地獄
 の難、在畜生の難
 在餓鬼の難、在長
 壽天の難、在北鬱
 單越州の難、盲聾
 瘡癩の難、世智辯
 聰の難、生佛前佛
 後の難之なり。

る、忌晨七七に若し自若は他、皆應に大乘を講説すべし。報忿は即ち法身の徳と觀ぜしむるに、則ち法身を用ひ對治を爲す。次に齊會より下は利衰の境に於て、即ち煩惱障に對して講を勸む。凡そ是齊會求福の處に、行人遠く歸し親賓相遇うて治生經求し、及び水火に遭ひ惡風黑色に、船舫に吹かれて的獲有ること無し。或は江河大海に在りて、羅刹の鬼に値ひ、煩惱に逼切するに唯佛性の戒を專にして、義理を開解し、煩惱は即ち般若徳と觀ぜしむ。故に此を經律と云ふなり。即ち報身を用ひて爲に對治す。乃至より下は第三に業障に對へて講を勸む。煩惱は既に多く誑盡すべからず、略して三五を列ぬ。續いて業障を擧ぐ故に乃至と云ふ。一切等とは總じて擧ぐるなり。三業の因は殺盜等別なるが故に一切と云ふ。三報とは一切の業に、並に三報有り。此身に業を造りて即ち此身に報ゆるを、名けて現報と爲し、此身業を造りて次生に報を受くるを、名けて生報と爲す。此世に業を造り二三生の後に方に其報を受くるを、名けて後報と爲す。身に八難在るを八難業と名け、七逆を犯するを七逆業と名く。或は牢獄に在りて他の爲に手足を拘繫するが故に枷械等と云ふ。三業壽は並に多し。若し單若は變にして、或は一人に約し、或は七人に約す。若し疾病とは即ち殺業なり。此等の不同は並に是れ業報にして、逃ぎ避くる處無し。亦局りて戒を講じて、結業は即ち解脱の徳なりと觀ぜしむ。故に大乘の三藏は並に三身を詮し、對治は別に從ふ。故に文に列ぬる所は別有り通有り。若し能く教に順じて有情を利樂すれば、聖の冥加を感じて、衆難を解脱す。設ひ未だ聖を感ぜず、但肉身を害す。自他終に臨んで

【梵壇、梵境】法藏は之を梵語とし默摺と譯す。衆僧之と言語を交へざるなり。

【五】揀擇受戒の文を釋す。

【七遮】七逆罪のこと。

【簡擇】えらぶこと。

【五逆】殺父母、破和合僧、出佛身血、殺阿羅漢、破羯磨僧の稱。

聞薰し種を成す。當當に佛に値ふこと、茲に因らざる莫し。故に菩薩を制し、常に大乘經律の三徳の義を講說せしむ。而新覺より下は犯を結す、行の解は未だ具せざるを並に新と名く。次に如是より下は第二に結勸す。廣を指す中に梵壇梵境は、聲相近く此には默摺と云ふ。悪口は僧を惱すが故に此罰を加ふ。彼品の中に廣く斯を明す。是故に之を指す。自下の大段第五に斯義を明す。是故に中に又二あり。初は正しく釋し次に結勸す。

【五】第四十に爲師簡擇戒なり。菩薩の利生は縁有るに便ち應ず。何ぞ千里に求請するに、反つて嗔惡の心を起すべけんや。弘誓は乖くこと有るが故に犯を制するなり。別して五縁を具す。一には自戒法を解き、二には前人受けんと求め、三は彼に七遮無く、四に反つて惡心を起す。五に即ち爲に受けしめざるに便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に名を標し制を立て、簡擇すべからざるの人を列出す。二に應教より下は、業報の衣服を簡擇すべきことを制す。三に但解より下は、是を擧げ非を顯し、違制して犯を結す。初に文の如く、次の文に又三あり。衣の色を簡示す。青は謂はく、空青石青等あり。黃は即ち黃褐、赤は謂はく乾陀の色にして、黒は謂はく、屋塵黑色等、紫は土の色なり。此等の五色は五に相參へ、染むるを不正色と名く。凡そ是著する所は、皆染壞せしむるが故に一切と云ふ。次に若欲より下は、業障を簡ばしむ。七逆と言ふは五逆の上に於て、加ねて和上及び阿闍梨を殺す。佛身より血を出すとは、今末代此事無しと雖も、若し塔を毀ちて寺を壞し、經像を焚燒するは亦是れ其類なり。破羯磨轉法輪僧とは、佛滅度の後、別の邪羯磨の正羯磨を破し、

【初轉】初轉法輪
【四諦】迷悟兩界
の因果を説明せる
苦諦集諦滅諦道諦
をいふ。

【維摩詰】梵音ビ
マラキールテイ
【Vinakirti】淨
名と譯す。印度毘
舍離國の長者。佛
在世の人。

【不輕菩薩】法華
經當不輕品に出づ
此菩薩は比丘比丘
尼優婆塞優婆夷を
見れば直に禮拜讚
嘆して我汝等を
敬して敢て輕んぜ
ず汝等當に菩薩道
を行じて皆佛とな
らんといふ。人人
此言を却つて罵言
となし杖瓦等を以
て打擲すれば此菩
薩走り逃れて父前
言を繰返す。人々
よりて此名を與へ
たりといふ。

【六】爲利作師戒
の文を釋す。

【莊嚴劫】過去の
劫の名。現在の賢
劫の前にありし劫

劫の名。現在の賢
劫の前にありし劫

及び初轉四諦の理を破すること無しと雖も、遮礙を爲すは亦此流類のみ。聖人とは四果の僧なり。三に出家より下は正法を示す。大小の律儀は並に斯制に同じ。若し「淨名經」の中に、時に二比丘維摩詰の足を禮せば、乃ち是れ法を聞いて敬を致すなり。法華經の中に不輕菩薩は、四衆を禮拜す。蓋し是れ性の平等を觀じて、法身を表示するなり。犯を忘れて物を利するは、佛の所制に非ず。此中には乃ち是れ菩薩恆の式にして、妄に他の文を引きて、佛は俗を禮することを制すと云ふことを得ず。三に是を擧げ非を顯し、制に違ふに犯を結すること文の如し。

第四十一に爲利作師戒なり。自行若し立せば方に人を化すべし。今乃ち所知無くして詐つて能く解せりと云ふ。志名利を希つて他を益するが爲にせず、自ら墜ちて他を陷す。是故に犯を制す。別して四縁を具す。一に内に實に知る無く、二に外に他境を求め、三に名利を貪る爲に、四に菩薩戒を授くるに便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に名を標し其正解を示す。次に若下より下は、無知の相を出で、三に而菩薩より下は、制に違ひて犯を結す。初に犯す。初に七遮と言ふは、七逆戒を障す。故に名けて遮と爲す。犯十戒等と言ふは、懺悔の法を教ふ。十戒は即ち十重なり。三世千佛と言ふは、謂はく、過未及び現在の千佛を禮す。過去莊嚴劫の中には、始に華光如來より、終り毘婆尸佛に至る。未來星宿劫の中には、初に日光如來より終り須彌相佛に至る。現在賢劫の中には、始に俱留孫佛より終り樓至如來に至る。種種異相と言ふは、或は空中に聲して毘尼藏と言ふを聞く。或は印

【星宿劫】 未來の劫の名。現在賢劫の後にある劫。

【遮戒】 出家又は持戒者に限りて遮止し、在家又は未受戒者は之を犯すも罪とならざる戒體をいふ。飲酒戒の如き之なり。
【性戒】 在家出家すべて之を犯せば罪となる戒律。殺生戒、偷盜戒、邪淫戒、妄語戒等之増上。力を與へて障とならざること。

臂を得て滅罪の字を作す等なり。便得滅罪とは遮性俱に滅す。若し小乗の作法懺悔に依らば、性罪滅せず。姪盜殺忘等の如き性は、本是れ惡なるを名けて性罪と爲す。飲酒等の如き佛制して持せしめたまふ制に違ふが故に犯するを名けて遮罪と爲す。凡そ是性罪は受と不受とは、犯すれば即ち罪を獲、持すれば即ち福を得。若し其遮戒は受けずして犯すれば罪無し。故に受戒の人は性戒の上に於て、各一遮を加へ性罪を犯することを遮す。故に遮戒の上に唯一の遮を護る。持すれば則ち徳虚空に遍く、犯すれば則ち遮性雙べて結す。懺すれば乃ち制に違ひ本に復して清淨なり。財を負ひ命を負ひて果地に仍ち酬つ。故に知る小乗は性罪滅せず。問ふ、「遮戒は受けずして持せば、福を受くるや不や。」答ふ、「隨つて一境に對して持せば一の福を得。受くるに於て増上の心を起し、羯磨の言の下に法界に遍くして發るには同じからず。故に經に云はく、「寧ろ一時に一切の戒を發すべし。羯磨に由一時に一切の戒を犯すべからず。羯磨無一」と。又「瓔珞」に云はく、「犯有る者を菩薩と名け、犯無き者は外道と名く。大果によりて相を觀じて往を改むれば、雙べて遣る故に懺滅せしむ」と。若無好相乃至亦不得滅と言ふは、會て受けて後に菩提心を退け、及び増上の十惡を造り十重を犯するを明す。此二の失戒の人は、並に中下の心に十重を犯す。不失戒の人の懺すれば、相を見ざるは罪亦滅せざるを、名けて無益と爲す。既に七遮に非ず、並に重ねて受くることを許す。故に而得増受と云ふ。天宮と云ふは梵網の下卷を検し、亦不得滅と云ふ。戒の字は悞れるのみ。是故に菩薩は重重に受くることを得て捨法無し。失戒と

【四題】地獄、餓鬼、畜生、修羅をいふ。

言ふは『善戒經』に云はく、「二の内縁有りて菩薩戒を失ふこと、上に列ぬるが如し。此二縁を除きては、乃至他世に四趣に流轉すれども、戒體恆に在り」と云云。對首等と言ふは、菩薩僧の惡を滅すべき者に對して、請じて懺主と爲して云はく「菩薩志を專にせよ、我某甲今菩薩を請じて、輕垢を犯せる懺悔の主と爲す。願くは菩薩我爲に懺悔を作したまへ、慈悲の故に」と。説次に正しく懺悔す。合掌す菩薩志を專にせよ、我某甲故に大乘の法等を聽かざるが爲に、輕垢罪を犯せり。今菩薩に向つて發露懺悔す。懺悔すれば則ち安樂なり。懺悔せざれば安樂ならず。憶念に發露して、知りて而も敢て覆藏せず。願くは長老、我清淨の戒身具足、清淨の布薩を憶せよ。三説して懺主に云ふ 自ら汝が心を責めて應に厭離を生ずべし。答へて云はく、今此は唐三藏

【三學】證果を得るにつきて修すべき戒定慧の三つの學、

一一好解と言ふは、前七遮十重四十八輕に於て、分別し解釋す。故に一一等と云ふは、若くは下は次に無知の相を示す。教相に暗く、大乘の經律の三學並に味し。故に不解大乘等と云ひ、圓の理に暗きが故に不解第一義諦と云ふ。不解の二字は通じて下に冠せしめたり。大乘の次位に暗きが故に不解習種性等と云ふ。習種性と言ふは、習は以て性を成す。即ち是れ發趣十位の位なり。二に長養性とは、藥病を分別し化導を長養す。梵網の下卷に性種性有り。前の習性に因りて以て此性を成するを、性種性と云ふ。並に十行の位なり。三に不可壞性及び道種性は、即ち十廻向の位なり。此位深く極まるが故に、金剛は壞すべからざるに喩ふ。能く中道種性を見る。四に正法性は亦是聖種性と名く。

【發心住】菩薩十住の第一位なり。菩薩が衆生を濟度せんが爲に世間に出見し受胎、降生、處宮、出家、成佛降魔、說法、早業の八相を示し成道の相を現すること【圓融】まどかに融通して互にさゆることなきをいふ【十禪支】十八禪支中を除きて、初禪の覺觀喜樂一心、二禪の内淨、三禪の捨念安慧、四禪の不苦不樂を合して十禪支といふ。

【心王】心識のこゝと。外境を認識する時別々に外境の別相を認取する動ある心所と共に起り外境の總相を認取する心所をなすに心王といふ。

即ち十地の中に聖道現前す。故に名けて正と爲す。此は行布歷別の名目に約す。若し圓教の位は具に『華嚴』の如し。初に發心住に八相成道し、法身の本を得。名は別に同じと雖も、義は並に圓融せり。四十二位は皆界外の理を障し、微細の無明を破す。具に『法華玄』等に解釋するが如し云云。其中多少等と言ふは、觀法の行相に暗きなり。若は別若は圓にして智斷同じからず、傳へて多少と爲す。十住の空觀を入と爲し、十行の假觀を出と爲す。故に出入と云ふ。十禪支とは根本四禪なり。三乘は通じて修し偏圓隔たること無し。故に須らく善く解すべし。『婆娑』に、問うて云はく、『禪支は十八なり。實體幾か有る。』答へて云はく、『但十なり。餘は名同じきが故に。』初禪に五支あり。一に覺、二に觀、三に喜、四に樂、五に一心なり。龜心を覺と名け、細心分別を觀と名け、心を悅ぶを喜と名け、身を悅ぶを樂と名く。能く心王を專一ならしむるを一心と名く。初の二は是れ對治、喜樂は是れ利益なり。一に心支とは二の所依爲り。二に禪に四支あり。一には内淨、二には喜、三には樂、四には一心なり。前の覺觀の根淨無きを内淨と名く。是れ對治支なり。餘の三は名同じく初禪に准倒せよ。三禪に五支あり。一に捨、二に念、三に慧、四に樂、五に一心なり。喜を離れて悔いざるを捨と名け、三禪を愛念するを念と名け、解知の心を慧と名く。此二は對治なり。餘の二は名同じく前に例して知るべし。四禪に四支あり。一に不苦不樂、二に捨、三に念、四に一心なり。捨心相應し内心中容にして、三禪に異なるを不苦不樂と名く。此一は利益なり。餘の三は名同じ、前に例して見るべし。今略して實體を標す、

【七】爲惡人說戒の文を釋す。

【寶簡】わかちえらぶこと。

【出家二業】比丘比丘尼をいふ。

【四分】心識が正しく其認識作用を起す時心識中能緣所緣の四種の差別を生ずるをいふ。自分、自證分、見分、自證分の稱

故に十支と云ふ。謂はく、初禪の五支、二禪の一支、三禪に三支、四禪に一支なり。觀法既に多きが故に一切行法と云ふ。此は行相を結するなり。一一等とは總じて教理位行を釋せざるを結するなり。三に制に違ひて犯を結す。

第四十二に爲惡人說菩薩律儀戒なり。戒律をば秘藏と名け妄に人に授けず。將に悉くは邪外の徒、文を見て旨に味く通塞に暗し、隨りて謗説を生じ自他を益すること無けん。是故に犯を制す。別して四緣を具す。一に邪惡の人に對し、二は是を知り、三は利養の爲にし、四に隨つて一戒を説き使ふ犯す。文に就いて三と爲す。初には名を標して制を立つ。次に是惡人より下は、受戒を肯んせざるの過を明す。三に而菩薩より下は、制に違ひて犯を結す。初に未受等と言ふは、問ふ「既に未だ菩薩戒を受けざる者には、並に説くことを得ざれ、若は俗に其類は蓋し多し。今時に誦説するに成く觀簡無く斯を犯する者を衆と言ふ。此義如何。」答ふ、「佛意多含なり。今應に義に従ふべし。」「地持」に既に云はく、「戒を受けん」と欲する者には、先に爲に相を説きて、預め能持と不能持とを觀察せしめ、即ち是は通じて信心にして、未だ受けざる者の爲に説くなり。」又出家の二業は、初に四分の律儀を棄く。若は人若は教、咸く皆勸めて上品の心を發す。無上菩提の爲に、三聚淨戒を求む。三聚淨戒は何の法をか攝せざらん。小乘には既に三聚の義無し。咸く已に圓の菩提心を發せば、法は乃ち人に隨ふ。五篇は大小に通ず。涅槃の菩薩の聖行に廣く十戒五支を列ぬ。故に知んぬ、此土の僧尼の四分の律儀は、並に是れ菩薩の戒なり。「法華」に開顯

【五箇】二百五十戒の中不定の二戒を除き其他を五に部別せるもの。波羅夷(四)、偷殘(十三)、墮(廿)、提舍尼(四)、突吉羅(百七)なり。

【内法】理内の法理によりて顯さるる法相。

【八】無漸受施戒の文を釋す。

【謗方等】大乘經を謗するること。

すれば人法咸く圓なり。殊途同く歸す。何の小か之れ有らん。但謗說無くば誦說俱に開す。若し爾らば須らく互に受くべからず。答互に受くれば乃ち其條品を増し、心の體は義重ねて發すること無し。形俱の無作は世の現行の彼彼の業體に約す。道共の戒は横豎一なり。法界に遍して發るを横と爲し、他世に他亡びざるを豎と名く。千佛大戒と言ふは、總じて賢劫の數を擧ぐるなり。邪見とは、外道惡人の外は、平常に信せざるを名けて邪と爲す。除國王とは、王は設ひ邪見なれども、亦乃ち之を聞す。恐くは謬說し、法に於て、損害せんことを疑ふなり。次に背て戒を受けざるの過を明す。通じて邪外等を擧げて惡人と名く。不信不受、無慚無愧なること畜生の如きなり。心有りと雖も識無きは、義無心に同じ。故に木石に譬ふ。内法に分無きが故に外道と名く。圓の正見無ければ、名けて邪人と爲す。三に制に違ひ犯を結す。七佛と言ふは一切の諸佛同じく此戒を稟く。近きによりて略して擧ぐ、故に七佛と言ふ。

第四十三に故毀禁法戒なり。菩薩の律儀は乘戒兩ら具せり。二死の舟楫は彼岸の津梁なり。今反つて自犯し加復之を毀す。或は惡く空を説く、持無く犯無しと云ひ、或は諸佛方便して怖して入ると云ふ。冥扶け戒神潛に衛ることを信せず、此れ良田の穉種戒海の死屍なり。謗方等に收むる愆は、七逆に逾えたり。所犯に隨つて外に別に斯戒を制す。別して四緣を具す。一に信心をもて戒を受く。二に所對の境有り。三に故に毀心を起す。四に隨つて一戒を毀つに便ち犯す。文に就いて二と爲す。初に名を標し、呵責す。

【九】 不供養經典
戒の文を看す。

次に若輩より下は、制に違ひて犯を結す。初に又三あり。世の利を消せざることを明す、次に五千より下は、鬼國の呵責を明す。三に一切世人より下は、世を擧げて譴罵すること
を明す。初の文に二の失あり。一は現の信施を失ひ、二に王の水土を盗み、過去の國土の
所捨種承は、持戒の者に與へんが爲なり。無戒は稅を輸し、盜の名を得ず。今戒稅俱に盜
行盜飲たり。故に諸の鬼神呼びて大賊と爲す。次に鬼國の呵責とは、戒全して物を利
すれば、鬼國り鬼敬ふ。今既に毀犯して神去り鬼欺く。故に五千有りて、前に違ひて賊な
りと罵る。其行來を惡み、後を掃つて蹤を滅し、其所止を殄す。三に世を擧げて嫌罵す。
次に制に違ふるに犯を結す。並に文の如し。

第四十四に不敬經律戒なり。解して孤然ならざれば、教に依りて得。法身の父母諸佛の
師とする所、經卷の所在には之三寶具る。身に微の解有りて、彼私恭を責む。解は教に
從つて生ず。教に於て輕忽すれば、自他敬を失ひ、功福沈淪す。故に罪を制するなり。別罪
なり。別して四緣を具す。一に佛の經律有り、二に寫傳持せず、三に尊重を生ぜず、四に
卑微に安處するに便ち犯す。文に就いて四と爲す。初に名を標して勸持す。次に剝皮より
下は、書寫の法を示す。三に常により下は、盛持供養を勸む。四に若し制に違はずして犯
を結す。初は文の如し。剝皮等は先に難行を擧げて心を誠む。大論一に云ふが如し。藥法
梵志十二年に於て、罽浮提に過して聖法を知ること求むれども、得ること能はず。時に
世に佛無く、佛法亦盡く。婆羅門有りて言はく、我何偽を有てり。若し實に樂はば當に以

【婆羅門】梵音ブ
ラフマナ(Brahma
)淨行と譯す。
印度四姓の最高位
にして僧侶の階級
なり。

【一〇】不化衆生成
の文を釋す。
【道意】菩提心の
こと。

て汝に與へん。答へて言はく、「實に樂ふ。婆羅門の言はく、「若し實に樂はば、當に皮を以て紙と爲し、骨を以て筆と爲し、髓を以て水と爲し、血を以て墨と爲すべし。」即ち其言の如くにして、佛偈を書き得たり。偈に云はく、「法の如く應に修行すべし。非法をば行に應ぜず。今世及び後世、法を行すれば安穩なり。」と。木皮より不は次に易行を擧げて、以て寫を勸む。三に勸盛持の中に、七寶と言ふは、或は七が中の一、或は七を具して、經函等と爲す。無價香華とは、唯貴くして珍と爲したれば、乃ち無價と言ふ。故に「法華」に云はく、「此香は六鉢價直婆娑世界等」と。四に犯を結すること文の如し。

第四十五に不化衆生成なり。菩薩の弘願は誓つて無邊を度し、見聞する所に隨つて、道意を勸發す。故に經に云へり、菩提を説かざるを、名けて殺音と爲す。道の互に損減し、慈に因らざる莫し、故に犯を制するなり。別して三緣を具す。一に所化の境に對し、二に慈悲を起さず、三に捨てて勸導せずして便ち犯す。文に就いて三と爲す。初には能化の心を擧し、遍く衆苦を抜く。故に大悲と云ふ。次に入りより下は境に對して誓を立つ。三に是菩薩より下は、制に違ひて犯を結す。初は文の如し。次の文に又三あり。初に人を見て歸戒を受けしむることを示す。次に若見より下は、雜類を見て道心を發せしむることを示す。三に而菩薩より下は、總じて凡是の有情には、成く道意を發さんことを勸めしめんことを示す。初に三歸と言ふは、佛法僧寶は世の良田爲り。若し之に歸せずんば、脫を得るに由無し。故に「法句經」に佛在世の如き、時に天帝釋は命將に終りて應に曠の報を受くべしと知り

【殞命】 死に懲。

【二】 說法不制法戒の文を釋す。

【三】 非法制限戒の文を釋す。
【五乘】 佛乘、菩薩乘、緣覺乘、聲聞乘、人天乘の稱
【若生】 人民、衆生のこと。

て、佛に歸依す。禮拜の頃に其命便ち終りて、彼羅刹に託して、母の羅刹をもつて斷つ、
坏器を踏破す。陶師に打たれて胎より落ちて、即ち還つて天帝の身に入りぬ。未だ冥顯を造
らざるに、天帝便ち活きぬ。殞命の而歸依を起し、尙斯報を贖したり。況んや復長時を
や。故に先に勸示して三歸を授け、次に十戒を授けしむ。三歸は是れ十戒の體なる事故な
り。餘の三は文の如し。

第四十六に說法垂式戒なり。法を説きて人を利するは、意弘益に在り。尊卑軌有りて彼
此虔誠す。今乃ち離爾に宣揚して、威儀緒を失ふ。自他輕忽して法水停り難し。故に犯を
制するなり。別して三緣を具す。一に對聽者、二に非床座、三に隨つて説き犯を結す。文に
就いて三と爲す。初に能説の心を標し、其には『法華』の如し。大慈悲を室と爲し、柔和
忍辱を衣と爲し、諸法の空を座と爲す。一を擧げて三を攝す、故に大慈悲と云ふ。若入よ
り下は説の儀式を示す。師希孝順父母とは、他を勸めて説教の人を尊重せしめんことを示
す。敬順師教とは他を勸めて、師の所説の教を恭敬せしめんことを示す。西國の外道
は多く火神に事へ、專注禮敬念念に相續す。故に此事を擧げて、人法を敬ふに比す。三に
其說法より下は、制を違へて犯を結す。

第四十七に立制滅法戒なり。有力の人は佛の付屬を受く。既に能く戒を稟け、應に三寶
を護るべし。庶くは佛法長く存して、五乘の軌導爲ることを得んことを。今乃ち勢を恃ん
で制を非法に立てば、佛付屬に造ひ、垂きて本心を受け、日隠く舟沈み蒼生の眼滅せしむ

【三】破法戒の文を釋す。

【枷禁】くびかせをつつけ、とぢこめ

ることを致す。是故に犯を制す。別して四縁を具す。一に信心をもて戒を受け、二に自ら高威を恃む。三に非法の制を立て、四に佛法を損滅するに便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に有戒の人を標す。四部と言ふは比丘等の四皆力有りて、能く法を滅する者なり。次に自恃より下は、非法の制を出で、如法比丘の四を制して、帳籍に拘繫し剃髮出家を闕す。既に出家する者は、習學を得ず、決して福を修することを疑ふ。但俗務を營理することを爲す、故に不聽出家乃至非法非律と云ふ。三に而菩薩より下は、制に違ひて犯を結す。

第四十八に自破内法戒なり。菩薩の理は、應に正法に依りて、諸有所作動の聖懷に合ふべし。今乃ち勝人に附傍して、苟しく名利を求め、妄りに佛法を説きて、應に制すべきことを聽すと云ふは、所損尤も甚しきが故に罪を得るなり。別して二縁を具す。一に自ら名利の爲にし、二に王等の前に於て、妄りに佛法の戒を説くに便ち犯す。文に就いて三と爲す。初に能破の入法を明す。次に若受より下は、是を擧げて非を況す。三に若故より下は、制に違ひて犯を結す。初に横與等と言ふは、王等前に於て妄りに佛戒を説き、曲げて王の心に順じて、佛聽許したまへりと云ひ、僧尼を枷禁し打縛するが故に、横與作繫縛事等と云ふ。如師子等とは、『師子蓮華面經』に云ふが如し。佛、阿難に告げたまはく、譬へは師子命終の後に、若は空、若は水、若は陸の所有の衆生は、彼師子の肉を食はず。唯師子の身より自ら諸蟲を生じて、自ら師子の肉を食するが如し。阿難は我の佛法をば、餘の能く壞するに非ず。是れ我が法の中の諸の惡比丘の破壞する所なり。外道天魔は佛法を破すと雖も、

【四】流通文を釋

【初に又四あり等】
一經の流通。

人多く信ぜず。是故に非と云ふ。内衆の毀破するをば、人多く信を生ず。譬へば自天の如し。次に是を擧げて非を況す、中に如念一子と言ふは、母の子を念ふが如し。命を以て之に従ふこと、父母に事ふるが如し。譏謗無くして父母は能く生身を生ず。佛或は舌に法身を生ず。惡誘心を傷ましめ、痛むることこれ何ぞ及ばん。是故に三百の鐘に刺し、及び地獄に入りて百劫苦を受くることを擧ぐ。而して毀の一言を聞くに比す。而泥淨は自ら教他を作し、他は因りて法を破す。他を以て自に望むるに、自は因、他は縁なるが故に因縁と云ひ、佛の教法に逆ふを無孝順と云ふ。犯を結すること文の如し。次に如是より下の第二は、諸勸す、文の如し。諸佛子より下の第三は、總じて結して三と爲す。初に數を標し、汝等より下の第二は勸持、過去より下の第三は勸學なり。

【初に又四あり等】
初に又四あり。初には誦を勸め、次に正しく流通し、三に利益を明し、四に各三あり。初に勸誦の三とは、初に名數を標し、三世より下の第二に、三世諸佛皆誦することを擧ぐ。我今より下の第三に、釋迦の自誦を擧ぐ。此二文を擧げて勸の由と爲す。汝等の次の正流通の三文とは、初に流通の人を勸め、應受持より下の次文、流通の相を明す。流通より下の第三に、時に約し機に對して、流通の事を明す。得見より下の第三利益の中の三の文とは、初に現に値ふことを明す。次に世世より下は、離苦を明し、三に當生より下は、得樂を明す。我今より下は第四大衆奉持の三の文とは、初に自を擧げ他を勸む。次に如無

【爾時より下等】
一品の流通。

相より下は廣を指す。無相と言ふは、應に是れ天王を名けて相と爲すべし。天に従りて品に目くるなり。此等の諸文は前の九戒に連ぬ。是故に此に至りて方に廣を指すのみ。三に三千より下は、大衆の受持なり。三千學者と言ふは、謂はく、三千界の所學の者なり。有本に士と言ふ。天宮の云はく、人悞りて之を改む。梵網を檢する者の字は正と爲す。略して一化を擧ぐ。故に三千と云ふ。時坐聽といはば、此南洲を擧ぐ。亦有戒本には此一段無し。文は周く足らず。前に勸奉し、後に受持するが故なり。

爾時より下の第二に、一品を流通するに四あり。初には心地を説くことを結す。二に總じて十處を結す。三に所明所説の法を明し、四に大衆奉持す。四の文に各二あり。初の文の二とは、初には此土に釋迦の説を明し竟んぬ。次に千百億の釋迦を擧げて例と爲す。從摩醯の下の第二に、總じて十處を結す。二とは初に此釋迦の所説の十處、次には千百億より下は、千百億の所説十處を明し、略して三種を擧げ、通じて十を收むるなり、十處と言ふは、初に金剛座に坐して、十世界海を説く。二に帝釋宮に至りて十住を説き、三に焰天に至りて十行を説き、四に兜率に至りて十向を説く。五に化樂に至つて十定を説き、六に他化に至りて十地を説き、七に初禪に至りて十金剛を説き、八に二禪に至りて十忍を説き、九に三禪に至りて十願を説き、十に四禪の中に、我が本源蓮華藏世界心地法門品を説く。一切より下の第三に、所説の法を明す。二は初には別して五藏を列ね、次に如知より下は總じて結す。初に一切佛心藏と言ふは、戒法は即心なり。心と衆生と三に差別無きを

【五藏】經藏、律藏、論藏、甚藏、祕藏の稱。

【大論】 大智度論の略釋。

【依正】 山河大地衣服飲食等有情の依となる果報を依法と云ひ、衆生の肉體精神の如き自己の業因に依りて與へられたる正しき果報を正報といふ。

名けて佛心と爲す。佛心は遍く攝すること、具には法華の實相の心に、百千尸如を具するが如し。故に心藏と名く。心は喻へば地の能く萬物を持するが如し。故に地藏と云ふ。此心は即ち戒なり。戒は定慧を具へ三徳を含藏するを、名けて戒藏と爲す。因菩提四弘十願に依り、輕重の戒に於て、一一に修行し願願互に融し、戒戒相攝す。一切の行願は之に歸せざる無し。故に『大論』に云はく、能く少施小戒を以て、聲聞辟支佛上に出過するが故に、無量行願藏と名くるなり。因果等は謂はく、因中の佛性常住の藏なり、果上の佛性常住の藏なり。言ふ所の因とは、戒法に因りて十發越乃至等覺に入り、之を名けて因と爲す。妙覺を果と爲す。若し因、若し果にして、佛性常住にして行願は滅すること無く、因果佛性常住藏と名くるなり。何となれば理を緣じて戒を持せば、佛性心と爲りて依正一如なり。色香は中道なり。中道法界は變ぜざるを常と名け、毘盧遮那は一切處に遍す。豈藏に非ずや。法の性、僧の性は一體にして殊ること無く、並に藏と言ふべし。何となれば心を覺するを佛と名け、衆を離るるを法と名け、諍無きを僧と名く。故に『淨名』に云はく、「佛は即ち是れ法、法は即ち是れ衆なり」と。故に『涅槃』に云はく、「佛性と云ふは猶し虚空の如く、内に非ず外に非ず」若し内外とは云何が「初處に、其義有り」と名くることを得ん。若し是れ妄に引くを得ず『大論』の佛法の二性は、分張して有無あり。候りて涅槃の權に迦葉に對して、塙壁瓦礫を除くを將て、之を以て難しと爲すこと、具さに『金錘論』の中に委く述ぶるが如し。次に總結の中に如如と言ふは、總じて上文を結して

【性徳】 萬有の一が各其本性の上に善惡迷悟等の一切の性能を具へ有すること。
 【修得】 後天的に修行學問等によりて得ること。
 【理性】 萬有の體性法性の理。眞如。
 【了因】 眞如の理を照了し證悟する智慧。
 【正因】 一切衆生の具有する眞如の理、これ正しく佛となるべき本性なり。
 【縁因】 智慧を縁助して益明かならしむる六度等の修行。

咸く一理に歸せしむ。理に差異無きが故に如如と曰ふ。如如とは上の法を結す。一切といはば能説の人を結す。即ち釋迦及び千百億釋迦なり。

問ふ、一上に諸藏を列ぬるに五藏有り。何の差別かある。答ふ、前の三は性徳の三因に屬す。後の二は修得の三因に屬す。理性の覺智を佛心藏と名く。即ち是れ了因なり。木の中の火の能照用の性の如し。理性の正因は法身の體なり。遍くして動かざること、猶ほ大地の如く、本の中の火の天然熱性の如し。理性の戒藏は斷惡の邊に従ひ、即ち解脫の徳なり。縁因に對すること、木中火の食を熟するの性の如し。無量等とは、願は即ち了因にして、願は智に由りて發すが故に。行は即ち縁因萬行の縁をもて、斷惡自在なるが故に。佛性常住とは、常は即ち是れ正因法體遍きが故に。應に知るべし、修を以て性を了し、性を以て修を發す。修性不二にして、木の火を出すが如く、内外殊ること無し。修に對して未だ修せず分たず。而して分つに、各三性を分つ。分つて分たれず、咸く初後に通ず。應に六位に約して、方に濫疑を免るべし。一切有性は理の三因を具せり。三を解して味からざるは、名字の三因なり。三を觀すること無間にして、五品の位に入るは、觀行の三因なり。淨六根を獲て、圓の十信に入るは相似の三因なり。界の外惑を破して、圓の初住乃至等覺の四十一位に入るは、分證の三因なり。妙覺の無上なるは、究竟の三因なり。理は如なるが故に通じ、事は異なるが故に六なり。初心の理は是を疑ふこと無く、究竟は妙覺を濫ること無し。千百億より下の第四に、大衆奉行の二とは、初には千百億の世界の穢縁受行

を明あきらす。次に若ごと廣くわうより下しもは廣くわうを指さす。

天台菩薩戒疏 終

昭和五年十月一日印刷
昭和五年十月十日發行

昭和國譯大藏經宗典部
第廿二卷

不許複製

編纂者

國譯大藏經編輯部

代表者 三井品史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社 東方書院

代表者 坂戸彌一郎

印刷者

東京市神田區表神保町十番地
同 興舍

代表者 井波康三郎

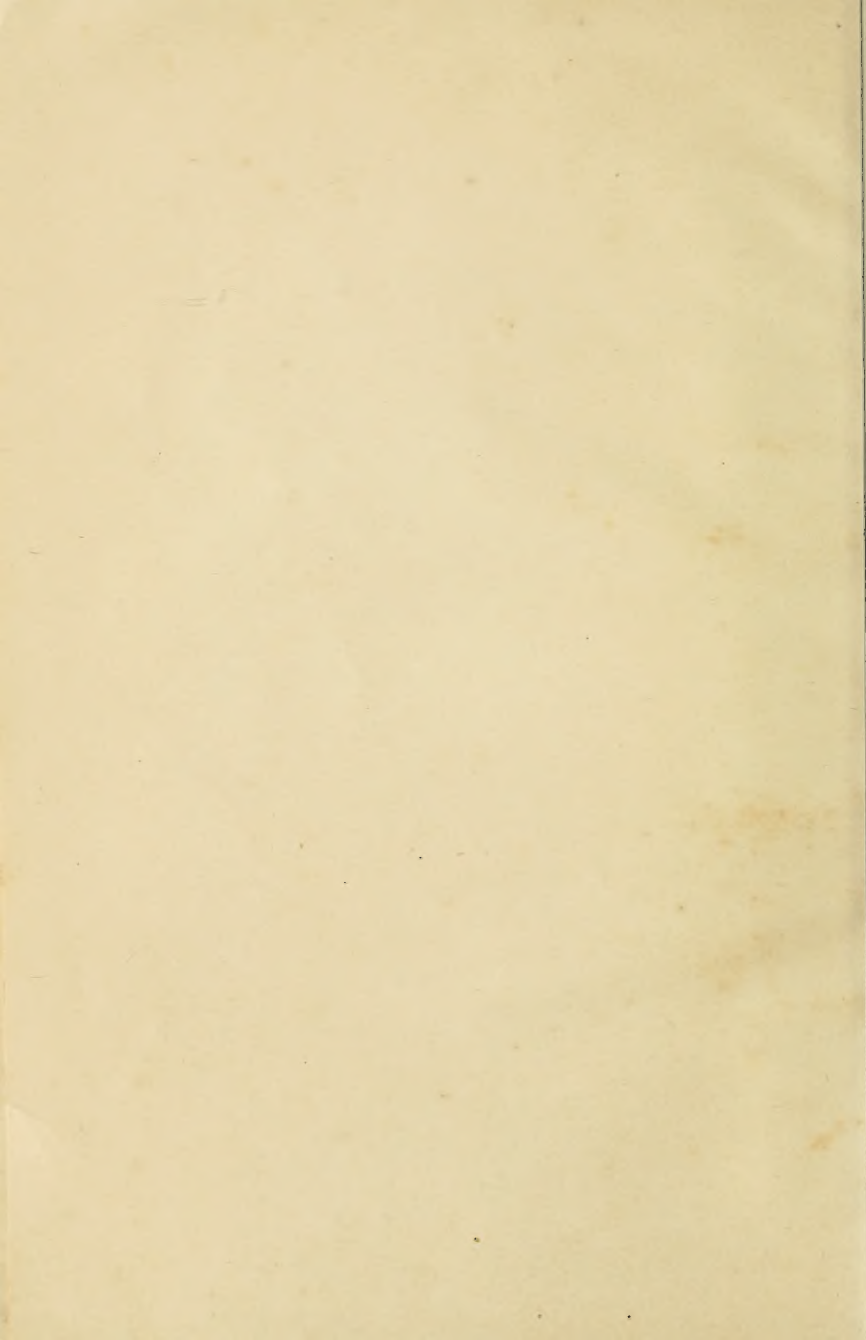
發行所

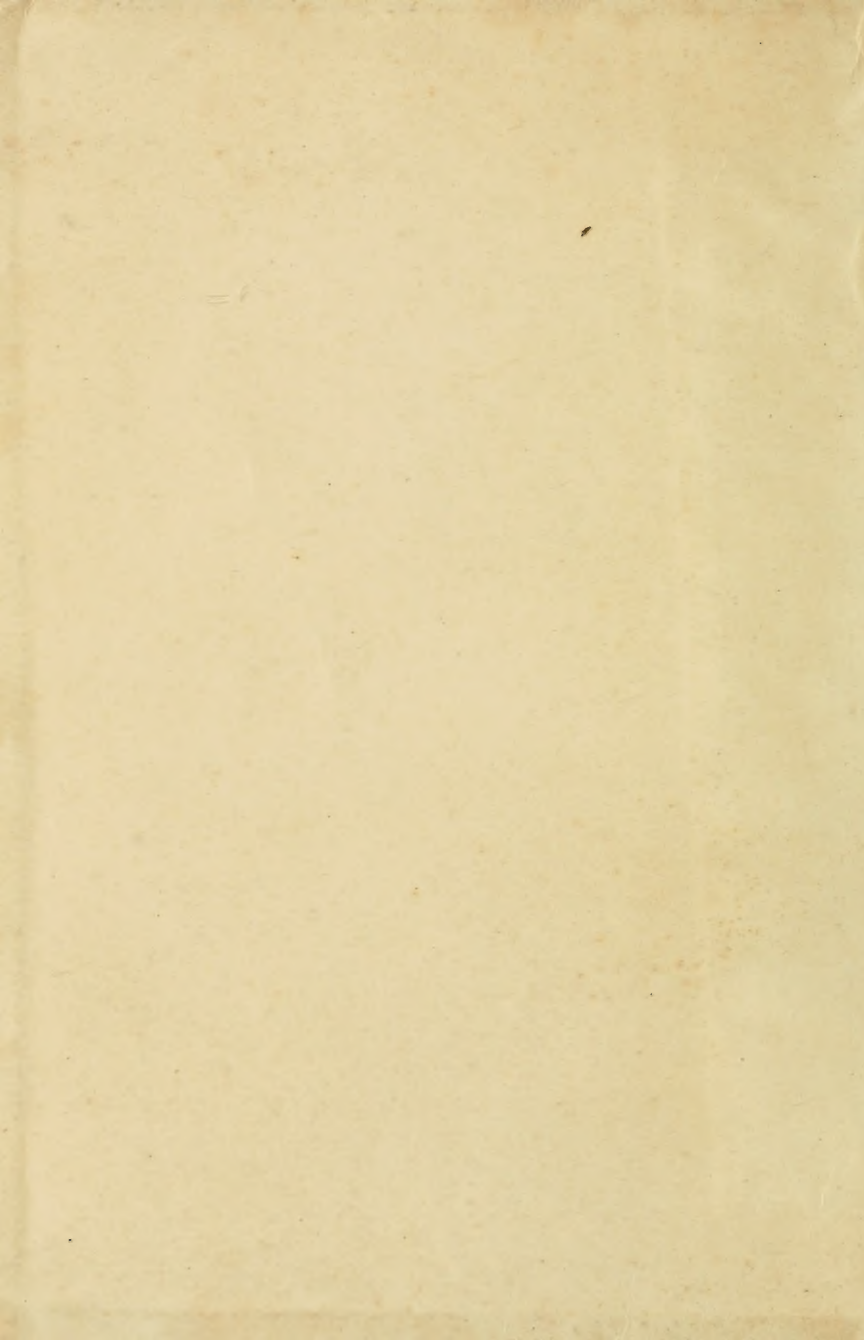
東京市下谷區
上野櫻木町五〇

株式會社

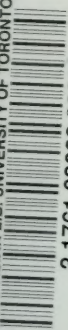
東方書院

電話 下谷四二五九
振替東京六八一





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3399